



ボーダーオー バー

ゆみさき

異なる色の、夜空の下で

また一つ、肉体に宿った熱を吐き出すかのようにため息をつく、夜の闇の中で白く染まり、消えていった。昼は夏のような暑さに包まれていたこの平原も、今は打って変わって、冬のように寒い。

外套を少しだけはおろし、ひるまずに前を見る。少女のすぐ目の前に、黒い巨大な影がうごめいていた。

いくつもの岩石を繋ぎ合わせた、生ける岩人形——ゴーレムと呼ばれる「魔物」は、すでに全身、至る所が砕け、ボロボロだ。

もう少し——また一つ、大きく深呼吸する。小さな体の中で、緊張と暑さが渦巻いたままだ。目の前の相手の姿から、決着が近い、ということを感じ取る。

右手首につけた「腕輪」を撫でる。自身の「武器」がそこにあることを確かめ、気持ちを落ち着かせた。大きな青い目で巨人を見つめ、ゆっくりと構える。

頭の中に浮かぶ無数のイメージを、何度も反芻し、相手の出方を伺った。最後の最後まで、油断は禁物だ。例え弱っていたとしても、この怪物なら人間一人をバラバラすることくらい、造作もないことなのだ。

ボロボロの岩人形は腕を振り上げ、こちらに襲い掛かってくる。

向かってくる岩の拳よりも、それが生み出す突風よりも、まず真っ先に怪物が放つ「圧」のようなものが、心に襲いかかった。恐怖と焦りがこみ上げ、汗となって全身を濡らす。

怯えている暇などない。すぐさま意識を集中し、「腕輪」の力を発動させた。

金色の「腕輪」は光を放ち、目の前の空間に同じ色に輝く「光の盾」を浮かび上がらせる。それは向かってくる一撃から、すっぽりと少女の体を覆い隠してしまう。巨人の拳がぶつかり、「ゴウン」という鈍い音を立てて、弾き飛ばされた。

ぐらつくゴーレムを見て、さらにイメージを続ける。今度は「腕輪」が緑の光を放ち、空間に別の形を作り上げた。

浮かび上がったのは、光る「斧」だ。分厚く巨大なそれは、振り抜いた腕に合わせ、ひとりで動き、ゴーレムの脇腹へと襲いかかる。再び空気が揺れ、岩が砕ける音が響き渡った。

欠けた体で、大きく上体を傾かせる怪物。それでもなお、進撃は止まらない。倒れこむように一步を踏み出し、巨大な腕を振り下ろしてくる。

しかし、ここまで緩慢な動きならば、受け止めるまでもない。地面を蹴り、即座に右へと跳んだ。夜風の中に、光沢のある金の髪がなびく。一瞬遅れて、怪物の腕が何もない空間を通過した。

ゴォ、という突風に汗が洗われる。直撃すれば肉が潰れ、骨が砕ける、圧倒的な一撃。最後の最後まで、油断などできない。

回避を成功させつつ、意識を集中する。拳を握り、大きく掲げた。

青い光は夜の闇の中に、まるで蛍のように浮かび上がる。ゴーレムが振り返った時には、空中には輝く、巨大な「槍」が浮かんでいた。

これで終わり——意を決し、振り上げていた腕を突き出す。それに合わせて槍は宙を飛び、まっすぐ怪物の胴体を貫いた。

揺らぐ、岩造りの巨人。槍はひとりで勢いを増し、螺旋回転しながらメキメキと岩に食い込んでいく。怪物が受け止めようとしても、その圧倒的推進力になすすべがない。

ついに、光の大槍は怪物の体を通り、大穴を開け、宙で粉々に散った。

槍が消え去るのに続けて、ゴーレムの体がガラガラと音を立てて崩れ落ちる。先程まで確かな意思を持ち、動いていた巨大な四肢は、無機質なただの岩へと変わってしまう。

闇夜の中、静寂が戻ってきた。だが、攻防で昂った体の熱は、やすやすとは消えてくれない。何度も大きく呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる。

転がった岩々が微動だにしないのを確認し、ようやく構えを解いた。一気に緊張の糸がほどけ、特大のため息を漏らす。

崩れ去った巨人の残骸の中に、かすかな輝きを確認し、歩み寄る。岩をどけると、拳大の青く光る宝

石が落ちているのを確認した。慎重に拾い上げると、角度によってキラキラと光が踊る。先程までゴレムという「魔法生物」の体を作り上げていた「核」だ。

お目当の品を手に入れ、やっと少女は笑った。それを丁寧に懐にしまい、ようやく天を仰ぐ。

頭上には漆黒の海の中に、色が異なる星々が無数に浮かんでいた。その中でもひととき大きな満月は今宵、瑠璃色の光を放っている。

「あちら」では見えない極上の星空に、思わずため息が漏れた。

踵を返し、外套をひるがえして歩き出す。その小さな体の中心では未だ、戦いの興奮が「感動」という名の熱となって、燃え続けていた。

「神隠し」の少年

目を覚ますと、天井で回っている四枚の大きなファンが見えた。緩やかに、一定の速度で動くそれを、しばし目で追う。

体がだるい。首を動かし、寝転がったまま壁の時計を見詰めた。もう10分ほどで正午である。

「やあ、おはよう。気分はどうだい」

声をかけられ、ようやく上体を起こした。診療台の上に横たわる「彼」に、白衣の男はカルテを片手に微笑んでいる。見慣れた顔に「ああ」と声が漏れた。

彼は――諸星 夢斗は、頭を押さえたまま、ため息をつく。全身がじっとりと濡れているのが分かった。

「あまり、良くはないです…」

「そうか。例の『夢』はどうだい」

白衣の男は椅子に座り、ペンを片手に問いかけてくる。艶のある黒髪と、少しつりあがった目は威圧感もあるが、冷静に物事を分析しようとしているのが分かった。

夢斗がこの「カウンセラー」に診てもらうようになってから、もう三ヶ月ほど経つ。相変わらず、彼の胸元につけられた名札には「羽多野 充」という名が刻まれ、キラリと輝いていた。

羽多野の問いかけに、夢斗はまたもや頭を抱えたまま答える。

「ええ、相変わらずです…しかも、いつもより生々しい感じでした」

「生々しい、か。それは、よりリアルということかい」

「はい。今までより一層、鬼気迫る感覚というか」

うまく説明できないが、夢斗は渡された水を一杯飲み干し、落ち着いて説明を続けた。

「内容自体は、いつもと一緒でした。俺は何かから逃げていて、周囲にも同じように逃げている『皆』がいました。だけど、顔とかはまるで分からなくて…その先も、いつもと一緒です。森みたいな場所を駆け回って、最後はこけて…振り返ると『なにか』がこちらに飛びかかってきて――それで、終わりです」

それは夢斗が今まで、度々、苦しめられてきた「悪夢」である。

いつからだろう――少なくとも覚えているのは「あの事件」の後からだ。夜な夜な、意識の中に刷り込まれるかのように、ふっとあの光景が繰り広げられるようになったのは。

夢斗の言葉を、カウンセラー・羽多野は時折うなづき、聞いていた。彼は何かをメモした後、顎を撫でながら呟く。

「追いかけられる…何か精神の裏に潜む『焦り』の象徴か。無意識が訴えかける『罪の意識』の表れか」

物騒な一言に、夢斗も後ろ頭をかきながら、顔を上げる。黒と白の髪が入り混じった坊主頭は、じっとりと汗で濡れていた。

「『罪』って何ですか。それ」

「憶測さ。まだそうと決まったわけではないが、もしかすれば君の『空白の記憶』に、関係があるのかもね」

思わず夢斗は「空白の記憶」と繰り返してしまった。

「夢というのは、いわば脳みそが持つ無数の『記憶』によって作られる演劇のようなものさ。人や物を自在に組み合わせ、引き出し、無理矢理、整合性を持たせようとする。君が夢の中で追いかけていた『なにか』は、どんな姿をしていた？」

言われて必死に思い出してみる。しかし、肝心な部分は霞がかかったように、思い出せない。

「何かとてつもなく…恐ろしい姿をしていた、ということだけ、覚えてます」

「ふむ。どんな姿かは分からない。だが、恐ろしかった、と」

「はい…自分でも、変だとは分かっていますが…怖かった、ということしか分からないんです」

奇妙な話である。「恐怖」だけが先に立ち、「何が」という部分がすっぽりと抜け落ちているなど。

羽多野はまた「ふむ」と頷き、ペンを走らせた。小気味よくペン先が紙をする音が響く。

「ただ、その...ここ最近、妙に生々しさだけが、増しているような気がします。以前はもっとぼんやりしていたのに、日に日に、夢の中の『像』がはっきりとしていて...」

その言葉を聞き、羽多野はペンをくるりと回し、置いた。

「なるほど。それはあながち、良い兆しかもしれないよ、夢斗君。君の中の『記憶』が蘇る前兆なのかもしれない」

それを聞いても「そうですか」と、味気ない言葉を返すことしかできない。どれだけカウンセリングを続けても、まるで「あの日」の記憶は、戻ってくれる気配がない。

「この診療所に来ていた、女の子のことを知っているかい。君と診断日が一緒になったこともある」

唐突に問いかけられ、思わず顔を上げた。羽多野の整った横顔を見つつも、思い出す。

「女の子...そういえば一度だけ、待合室で一緒になりました。あの、苺の髪留めをつけた子ですか」

「そう。まあ、他の患者のことを言うのは、どうかと思うが。あの子も、君と似たような症状だった」

言われつつ、かつての記憶を思い出していた。この診療所に通うようになって、一度だけ待合室で一緒になった少女だ。まだ幼稚園に通うくらいの年齢である。真っ赤な苺の髪留めが記憶に残っていた。

「彼女は数ヶ月前から『別の世界に遊びに行けるようになった』と、両親に言い出したそうだ」

「別の世界、ですか」

「ああ。話を紐解いていくと、荒唐無稽極まれる内容だったよ。なんでも、空を蛇が飛んでいたり、木でできた走る恐竜がいたり——それらを、少女自体は『リアル』の出来事だと、信じて止まない」

思いがけない話題に、汗を拭きながら聞き入る。

「本人曰く『突然、そういう世界に行けるようになった』らしい。だが、僕は彼女も、精神が見せる一種の『記憶の檻』に囚われている、と考えた」

また難しい言葉である。繰り返しそうになったが、どうにも馬鹿っぽいと思い、黙る。

「何か心に強いショックを受け、無意識のうちに、自身の精神を守る本能が働いたのだと思っている。規格外の事態を体感した心は、ともすれば負荷に耐え切れず、崩壊してしまうことすらある。それを守るため、目の前の現実から逃避する『世界』を無理矢理作り上げてしまう。二重人格というやつも、これに近い」

ところどころ、夢斗も聞いたことはある。だが小難しい内容に、羽多野の口から結論が語られるのを待った。

「彼女と同じで、君も過去の『事件』のショックから心を守るため、記憶を奥底に押し込んだんだと思っている。だが精神状態によって、この蓋をしたはずの『檻』の鍵が開きかける時があるのさ。それが、君が見ている悪夢の正体ではないか、と睨んでいる。だが、長く時を経て風化した『記憶』は、原型を少しずつ失ってしまっているのだろう。だから、ありもしない世界、ありもしない怪物が姿を表すのかもしれないね」

理解しきることはできないが、とりあえず「はあ」と声を上げるしかなかった。

「長々と語ってしまったが、兆しは見えている、ということさ。今度はもう少し、踏み込んだ暗示か催眠療法を試してみるかもしれない」

カルテを書き上げ、羽多野は診断結果を告げた。内容はいつも通り、結局は「経過を見る」といことに落ち着いたらしい。

ふう、とため息をつき、彼は告げる。

「何がきっかけになるかは分からない。焦る必要はないから、色々刺激を受けてみると良いかもしれないよ」

アドバイスを受けながらも学生服を着なおし、夢斗は一応、頭を下げた。

「どうも、ありがとうございました」

「お大事に。今日は本当に、悪かったね。急遽、こんな時間にずれ込んだじゃって」

夢斗は「いえ」とだけ告げ、鞆を持って足早に診療所を後にしようとした。

去りゆく背中に、羽多野は最後に言葉を投げかける。

「これから学校かい。せっかくだし、体を休める意味でも、安静にしといても良いだろうに」

一瞬、立ち止まったが、夢斗はかすかに振り返り、あくまで冷めた態度で返す。

「いえ。家にいても、やることもないんで」

その言葉を最後に、足早に夢斗は出て行ってしまった。

診療所に残された羽多野は、少しあっけにとられつつもカルテに目を落とし、ため息をつく。

厄介だな—様々な患者をカウンセリングしてきたからこそ、どうしてもそう思ってしまう。彼は目を押さえ、疲れを押し込むように、椅子にもたれた。

正午を告げる時計の鐘が、鳴り響く。その甲高い音色を、羽多野は目を閉じたまま、しばし聞き入っていた。

昼過ぎから登校したということもあり、1日はあっという間に終わった。

ホームルームを終え、足早に席を立つ生徒達。ある者は友人と帰路につき、ある者はこれから始まる部活へと意気込んでいる。

だがそんな中、夢斗は黙って鞆を担ぎ上げ、足早に教室を後にした。友人と語らうこともない。ただ、つつかと廊下を進み、下駄箱へと向かう。

階段を下り、下駄箱に差し掛かった夢斗に、一人の女教師が声をかける。

「あの、諸星 夢斗君、だよな？」

スニーカーを地面に置き、夢斗は相変わらずの仏頂面で見つめる。いや、睨みつけるという方が妥当か。

目の前に立つのは、背の小さい、気の弱そうな教師である。彼女は資料の束を持ったまま、夢斗を見上げている。精一杯、笑顔を作ろうとしているのだろうが、どこかぎこちない。

身長175センチの夢斗に対し、女教師は随分と小柄で、まるで巨人と小人だ。

「そうですけど。なんっすか」

「えっと...私、今日から教育実習で、君のクラスを受け持ちました。三木って言います。よろしくね」

はつらつとした笑顔で告げる、女教師・三木。夢斗はぼんやりと思い出し、妙に納得した。そういえば、ホームルームは彼女が行っていた。なぜか、と疑問は抱いていたが、夢斗にとっては「なんでもいい」の一言で片付けられてしまっていたのだ。

「ああ、そう。どうも。で、何の用っすか」

「呼び止めて、ごめんなさい。挨拶をしようと思ってね。ほら、遅くなっちゃったから—」

その一言に、夢斗は「ああ」とだけ告げ、そそくさとスニーカーを履いてしまう。

三木は次の言葉を戸惑っていたようだが、夢斗はそのまま躊躇することなく、校舎の外へと出て行ってしまった。

「そうっすか。じゃあ、さよなら」

背後で三木が慌てて「さよなら。また明日」と告げていたのは聞こえた。だが、彼女の好意などどこ吹く風で、夢斗は姿を消してしまう。

少し呆然としてしまう教師・三木。そんな彼女に、白いシャツを着た背の高い教師が声をかけた。

「まったく無愛想なもんだなあ、あいつは。気にせんといてください、三木先生。ああいうやつもいる」

声をかけたのは、筋肉質な男性である。陸上部の顧問をしている体育教師・伊達だ。

「伊達先生...」

「最初はちょっと取っ付きにくいですが『ああいうもん』って思っとれば、良いんですわ。なにせ、あのクラスの中でも、なかなかの『ワケあり』ですんで」

「ワケあり...って、どういうことですか？」

純朴な眼差しで、問いかける三木。体育教師・伊達は腕を組み、少しニヤニヤしながら答える。

「いえね。あいつ—諸星 夢斗ですが、3ヶ月前に転校してきたばかりでしてね」

「転校生だったんですね。それで—」

「ああ、いやいや。それだけじゃあないんですわ。あいつの場合、もっと複雑でしてなあ」

この一言に、さらに三木は首をかしげる。

「前にいた学校で、とある『事件』に巻き込まれてな。ほら、ニュースになったの覚えてませんか

？ 『帝凜高校 神隠し』事件」

「神隠し、ですって？」

この反応は、伊達からしても想定内だったのかもしれない。にんまりと笑い、続ける。

「1クラス、総勢32名が、教師も含めて忽然と消える――林間学校の帰りでしたかな。バスごと、消息を絶ったんですわ。その一週間後、山の中で倒れているのを見つけられたのが、あいつってことです」

思いがけない内容に三木は目を見開き、思わず抱えた資料を強く抱きしめてしまう。

「それ、本当ですか？」

「ええ、大々的にニュースにもなりましたよ。まあ『神隠し』が起こったのが半年前。発見されてからしばらく、諸星は療養しとったらしいんですが、どうもその当時の記憶が一切ないらしいんですなあ。奇妙な話ですが」

三木は再び、夢斗が姿を消した校舎の外へと目を走らせた。生憎だが、そこにもう夢斗の姿はない。行き交う学生達の姿が見えるだけである。

「あいつの髪の毛、こう一部分だけ白髪になってたでしょう。あれも事件以来らしいんですわ。なにやら、よほど強烈なショックを受けたんでしょう。今でも、カウンセリングを続けてるって話です。まあ、なんで、本人も随分と他人に対し警戒心が強いというか、心を閉ざしてしまってますな。コミュニケーションがどうも取りづらい生徒なんですわ」

思いもよらぬ事実、新米教師・三木はただ立ち尽くしてしまう。ぶっきらぼうな生徒ではあると思ったが、そこまでの過去を背負っているなど、思いもよらなかった。

だが、伊達はあくまで、張り付いたような笑みのまま、言う。

「ま、あまり、一挙動一投足に気をもむ必要ありません。ただでさえ難しい年頃だ。時が解決するのを待つのも手ですわ」

「そ、そうですか...」

三木にとって、伊達の楽観的「すぎる」態度は、どこか不信感を抱いてしまった。これから全力で教育の立場に身を置こうとする三木にとって、どうしても、その言動が無責任に思えてしまう。

「ところでお聞きしたところ、先生はどうやら大学時代まで、陸上をやられていたらしいですな。どうですか、これから部活の方に見学にでも来ませんか。うちも副顧問を探しているところでして、お手伝いいただければ、と」

突然の誘いに、伊達の顔を見上げる。だがなんだか、その笑顔の裏に言い知れぬ感情が見え隠れし、慌てて返した。

「い、いえ、今日は資料作りがありますので。すいません...」

「そうですか、それは残念。では、また是非、機会があれば！」

伊達は最後に渾身の笑顔を作り、体育館の方へと向かっていった。嵐が過ぎ去ったかのように、大きなため息をつく三木。

その視線は、再び夢斗を見送った、校庭の方へと向けられる。

夕方、茜色が染め上げた校庭と行き交う生徒達を見つめ、三木は心に残ったざわめきを噛みしめていた。

校庭から聞こえるのは、陸上部のはつらつとした声だ。どうやら短距離走の練習らしい。威勢の良い声と共に、歓声にも似た、悲鳴のような音が混じる。おおよそ、追っかけの女子生徒でもいるのだろう。

陸上か――ふっと考え、夢斗は歩いていく。

元々、転校前は夢斗も部活動に勤しむことはあった。あの頃――「帝凜高等学校」の生徒だった頃は、あくまでどこにでもいる、いたって普通の青春を謳歌する少年だったはずだ。

それが今では、そんな熱が心のどこにも残っていない。スポーツに汗を流すことも、読書で文学に触れることも、なにも心を動かされなくなった。

あの日——林間学校をなんだかんだ言いながらも、気がつけばクラスの面々と楽しんでいたのを覚えている。帰りの日、出発直前になり、忘れ物を取りに帰ったせいで一人だけ出遅れてしまい、クラス全員からいじられたことすら、明確に覚えている。

だが、なぜだ。

なぜ、その「後」を何も知らないんだ。

考えても考えても、けっして答えが出ない。その次の記憶は救急隊に担ぎ上げられ、医療ヘリに乗せられる時の、無機質な光景でしかない。思い出すだけで不安になり、焦りが生まれる。

記憶がない——言ってしまうえば「覚えてない」というような、一見他愛のない現象が、なぜこんなに不安なのか。だが理由は、どこか夢斗自身、理解もしていた。

あの日、あまりにもたくさんものを失ったから、か。

歩みを進め、学校の裏門が見えてくる。こちらを利用する生徒はあまりいない。だが、夢斗の家へはこちらを経由した方が早かった。

校門をくぐり、道路に出る。見飽きた町並みを進むと、はるか遠くにはうっすらだが、都心部にそびえ立つビルの影が見えてきた。

大都市・東京から少し離れた「田舎混じりの都会」である町・泉道。来た道を振り返ると、そのほぼ中央部に位置する泉道高等学校の校舎が、夕暮れに染まろうとしていた。愛すべき「母校」のはずが、転校してきたばかりの夢斗にとっては、至極どうでもいい建物として映る。

いや、学校だけではない。この街そのものが、夢斗にとってはひどく無機質に映る。いつもの通学路をいつも通り、ポケットに手を入れてガラガラと歩く。同様に帰路につく生徒達も見えるが、彼らの意気揚々とした表情は、とても真似できそうにない。

しばし歩き、商店街のアーケードに足を踏み入れる。この通りを抜ければ、家はすぐそこだ。ファーストフード店、鮮魚店、小さなCDショップに、総菜屋——どれもこれも、活気付いてこそいるが、あくまで見慣れた風景だ。

「普通」の学生なら、解放された自由な時間で、何をしようかと心を踊らせるのだろうか。夢斗はもはや、そんな他愛のない感情すら、分からなくなっていた。

ふっと脳裏に、通り詰めている心療内科の、カウンセラーの言葉が思い浮かぶ。

『何がきっかけになるかは分からない。焦る必要はないから、色々刺激を受けてみると良いかもしれないよ』

刺激、ねえ——ふっと立ち止まると、目の前にはちょうど本屋がある。読書など興味こそないが、おもむろに足を踏み入れてみた。

少し強めの空調が肌を刺すが、構わず店内をうろついてみる。そこそこ客は入っているようで、間を縫いながら、各ジャンルが並ぶ棚を流し見た。

とはいえ、スポーツや経済なんてものにあまり興味もなければ、資格本やら小説にも関心を持ってない。なら漫画は、と言われても、昔ほど興味をそそられるものもない。

随分と枯れ果てたもんだな——自分自身を揶揄し、結局、週刊誌のコーナーで足を止めた。おもむろに手に取ったゲーム情報誌を眺めてみたが、そこに記載されているキャラクターや新作タイトルにも、心は動いてくれない。

思えば昔は、欠かさず見ていた雑誌もあったし、発売日にしっかりと集めていた漫画もあった。だが、あの事件以来、そういった物への関心そのものが薄れてしまったのだ。

カウンセラーの言う「刺激」は、そうそう都合良く手には入らないらしい。諦め、夢斗はおとなしく店から出て行く。

自動ドアが開き、冷房と外気の境目に立った、その時である。

同様に店から出ようと駆け出した少女と、ぶつかってしまった。

「ぐっは!？」

「きゃあ!!」

夢斗と女子生徒の悲鳴が重なる。予想外の衝撃になすすべなく、二人は弾かれ、尻餅をついてしまった。鞆が地面に落ち、中身が散乱する。

真っ先に謝ったのは、ぶつかってきた女子生徒だった。

「ソーリー...あ、いや、ごめんなさい！ 大丈夫ですか？」

どうにも妙な一言に、夢斗も前を見る。腹部に残る重い痛みを抑えながら、思わず息を飲んでしまった。

目の前にいたのは、長い光沢のある金髪と、青い瞳を持つ少女だった。その日本人離れした風貌に、言葉が出ない。

そんな夢斗に、少女は不安げに問いかけてくる。眼鏡の奥の碧眼が、少し潤んでいた。

「ごめんなさい、急いでて...あの、どこか、怪我とかしてませんか？」

一拍遅れて、ようやく夢斗は返事をする。腹部に鈍痛はあるが、それでも大したことではない。

「あ...いや、別に。そっちこそ、大丈夫？」

「は、はい！ 全然平気です！ ノープロブレ...な、なんでもないです！」

なんだか慌ただしい少女だ。日本語は非常に流暢だが、ところどころに思わず、英語が飛び出しそうになる。

妙なテンションに目を丸くしながら、夢斗は「そう」とだけ呟き、周囲に散乱した教科書を集めだした。慌てて、少女も同様に荷物を集める。

周囲の目が気になるのか、少女は妙に慌てて、荒々しく教科書やらノートをかき集めた。

「本当に、すいませんでした！ 以後気を付けます。すいません！」

何度も頭を下げられ、夢斗も調子が狂ってしまう。変に彼女の声が大きいことから、より一層、周囲の目を引きつけてしまっている。

「あ、いや...本当にいいんで」

「そうですか...すいません、失礼します...」

頭を何度も下げながら、ようやく、金髪・碧眼の少女は駆けていった。彼女の小さな姿は、夢斗が来た方向へと消えていく。

予想外の事態になおも目を丸くし、しばし商店街の先を見つめてしまう。まるで小規模の嵐が去ったかのようなのだ。

妙な生徒もいるものである。

意外に思いつつも、夢斗はやはり無表情で歩き出す。

予想外の出会以外は、その日の帰路は穏やかなものであった。商店街を抜け、つつがなく家にたどり着く。住宅街の中にあるマンションの4階、その端の一室へと帰宅した。

「お～、おっかえり、夢斗。カウンセリング、どうだった？」

声をかけてきたのは、自室の机で作業をしている母だ。相変わらず、机の上にはGペンやら消しゴムやらインクの瓶やらが並んでいる。黒髪のショートヘアは相変わらずボサボサで、前髪に至っては、輪ゴムで上に無理矢理縛り上げている。

夢斗は台所で冷蔵庫から麦茶を取り出しつつ、気だるそうに答えた。

「別に。何も進展なしだよ」

「あっそ～、そりゃあ残念だねえ」

母はがっかりしつつも、どこかあっけらかんとした声色で、再び机に向かい直した。そんな彼女に、夢斗は麦茶を一杯つぎ、渡す。

「おっ、気が効くじゃん、少年。サンキュー、さすが私の息子」

「もう少年なんて歳じゃねえよ。母さん、結局寝てねえのかよ」

「だ～いじょぶ、だいじょぶ！ いつものことよ、こんなの」

痛快に笑う母の頬には激闘の証として、黒インクの跡が残っていた。見慣れた母の姿に夢斗はため息をつき、今度は自分の一杯をコップにつぐ。

夢斗の母は、知る人ぞ知る女性漫画家だ。と言っても、少年誌で週間を飾れるような知名度はない。月刊誌で細々と連載している、アクション漫画家である。

この小さなマンションに、会社員の父、漫画家の母、そして夢斗の三人で越してきて、もう3ヶ月。新たな土地に慣れたのは、夢斗だけでなく、両親も同様なのだろう。もっとも、こちらに越してきて、真っ先に適応したのは、この快活な母に他ならない。

徹夜明けの母は、いつもハイテンションに語りかけてくる。だが、あいにく夢斗からしたら、あくま

で不動心で接するしかない。

「カウンセラーさん、いつもの人だった？ あのイケメンカウンセラー」

おそらく、専属のカウンセラーである羽多野のことを言っているのだろう。確かに、彼の見た目はかなりもてそうではあるが、これまた夢斗からしたらどうでも良いことであった。

ふうん、と鼻からため息を漏らし、麦茶を飲み干す。

「ああ、そうだけど。息子の容体よか、そっちが気になるのかよ」

「そんなことないわよ〜。だから真っ先にちゃんと確認したじゃないの」

調子よく笑う母親。漫画家ということで体を壊さないか心配だが、この意地悪な笑みが浮かんでいるうちは、大丈夫そうだ。

「まあ、次に期待ってところかしらね。あんた、部活とか入らないの。ほら、イケメン先生も言ってたじゃないの。何か刺激があったほうが良いて。昔、あんなに走ってたじゃない」

「気分にならねえよ、んなの」

氣遣う母に、あくまでぶっきらぼうな一言で打って返す。母の二撃目を待たず、夢斗は自室へと入っていってしまう。

相変わらずの態度に一瞬、目を丸くしつつも、母はため息を漏らし伸びをした。

うまくいかないねえ——息子の容体に少し辟易しつつも、その瞳には、目の前に並ぶ線画のみの原稿が映っていた。

父が帰り、晩飯と風呂を終え、そそくさと夢斗は自室にこもっていた。

グレーのシャツとジャージズボンという寝巻き姿で、ベッドに仰向けになっている。ドアの向こうからは、台所で談笑している父と母の声が聞こえてきた。

机の上をおもむろに見ると、そこにはかつて、部活動の陸上で獲得したトロフィーがいくつか飾られている。

転校する前まではそれなりに部活動に取り組み、走るということに楽しみも見いだしていた。自宅に帰ってから、ランニングすることも趣味だったはずである。

仄暗い部屋に並べられた「過去」を見つめ、ため息がまた漏れる。もう随分と長い間、ランニングシューズは下駄箱の中で、ほこりをかぶっていた。

体を起こし、おもむろに窓を開けてみる。マンションから見える景色はすでに夜に染まり、道路を行き交う車のライトが、星とは違うキラキラした光を残す。

見上げた夜空には三日月が浮かんではいるが、その輝きは、かつての街で見ていたものとは微妙に違う。都会が近いせいか、人工の光に遮られ、星々の輝きは霞んでしまっているようだ。

ぼやけた世界の不透明さが、なんだか自分自身を表しているかのようで、少しだけ嫌になる。

夜風の涼しさを感じつつも、その冷たい風の中にいつものため息が混じった。

とっとと寝るか——踵を返し、ベッドに倒れこもうとして、ふと足を止める。

視界の端で、見慣れない何かが光ったのを確認したからだ。

目をこらすと、机のそばに置いてある鞆の中、開けっ放しにしたその奥で、何かが光っている。おもむろに歩み寄り中を弄ると、見覚えのない大きな石が入っていた。

「何だ、こりゃあ」

思わず、そんな一言が口が出る。

掴み取ったのは、月光を受けて光を放つ石だ。青色だが、角度を変えると別の色の光が、中心で燃えているかのようである。

とはいえ夢斗の持ち物ではない。得体の知れない石を持ったまま、再びベッドに仰向けになる。しばし、持ち上げたその石の光を見つめていた。

いったいどこで紛れ込んだのか。

不可解には思いつつも、しかし不思議な輝きを宿すその石に、気がつけば夢斗の意識は囚われていた。なんだか妙な気分である。何なのかも分からないこの石に、やけに心が動く。

思い返してみると、カウンセラーは言っていた。記憶を取り戻すためには、心を揺さぶる「刺激」が必要である、と。

そして同時にまた、ふっと目を閉じ、失った「過去」を思う。

嫌々ながらも、それなりに楽しんだ林間学校。

いつものクラスメイトに教師。

見慣れない野山のそばで過ごす数日。

最後の日に乗り込んだバス——その色や形、車内の雰囲気まで、覚えている。

なのにそこから先は相も変わらず、ぷつぷつと途切れていた。

一体自分に何があったのだろうか。髪が一部白髪になってしまうような、強烈な体験。それは一体、どんなものだったというのだろうか。

日々の生活で、ほとんど「欲」なんてものは消え去ってしまった。だが、たった一つ、夢斗の中に残された感情があるとすれば、それは過去への渴望だろう。

知りたいのだ、何があったかを。

それがどんなことであろうが、何を見ることになるだろうが、とにかく知りたい。

ただの記憶だけではない。きっとあの時、夢斗は何か、もっと大きなものを失ったのだ。

射し込む鈍い月光、煌く謎の石。

遠くから響く車の音と、吹き込む夜風。

仄暗い部屋の中で、夢斗は最後にゆっくりと目を開けた。

失った「過去」が欲しい———無意識にそう願っていた夢斗は、目の前の光景に、一瞬だけ息が止まった。

「えっ——」

思わず、そんな短い言葉が漏れる。

すぐ目の前には、自身が掲げていた石があった。だが、その向こう側に広がっていた光景に、言葉を失う。

見慣れたはずの天井や照明、壁や机は、どこにもない。

視界が真っ白に染まり、今までの仄暗さなど、消え去っていた。慌てて周囲を見渡すが、窓もドアも、部屋そのものが消え去っている。

何もなし——ただただ、果てしなく続く「白」の中に、夢斗は仰向けに浮いていた。

一瞬、悪い夢かとも思った。だが、驚き目を見開いた自身の意識は、妙にはっきりしている。謎の石を握りしめたまま、うまく身動きが取れず、もがいていた。

そんな夢斗の目の前で、世界が変化を始める。

突如として白い景色の表面に、銀色で描かれた幾何学模様が飛び交い出した。

周り、伸び、様々に形を変え、視界を埋め尽くしていく。困惑する夢斗に構わず、さらに変化は続いた。

今度はいくつもの光景が、転写した映像となって浮かび上がる。

バスで笑いあう多勢の生徒。夕闇の中、流れていく車窓の光景。視界を覆う霧。

それはどこか見覚えのある、かつての林間学校の記憶だ。

息を飲む夢斗の前で、さらに映像は続く。

宇宙。浮かぶ部屋。マリオネット。積み上げられた書類。

黒い籠の中で鼓動する赤。羽根ペン、名簿。

青い空、緑の森。

後半の映像は打って変わって、夢斗にとってひどく見覚えのある光景であった。

間違いない。それはいつも夜な夜な見る、あの「夢」の光景と同じだ。「神隠し」にあい、それ以降頻繁に襲い来る、悪夢の景色と同じなのである。

なぜ、こんな時に———そこまで考えた瞬間、ついに意識が「白」に染まる。自身の体も、手に持っていた石の感触も。

何から何までが夢斗を置き去りにし、消えていってしまう。

その謎の現象に、抗うことはできない。

ただ、たった一つ、夢斗は確かに感じていた。

今まで、何をしても揺れ動かなかった自身の心が、なぜかこの時、酷く激しく、震えていたことを。

異界の姿。異国の少女

目に飛び込んできた強烈な光に、思わず顔を背けた。突然の事態に全身をこわばらせる。

そんな肉体に、何やらカサカサとした柔らかい感触がまとわりつく。不可解な事態に、夢斗は恐る恐る体を起こした。先程まで失っていたはずの地面の感触が、確かに伝わってきたからである。

再び、息を飲んでしまう。白一色の不可解な景色は、もう消え去っていた。しかし、目の前に広がっていたのは、見覚えのある部屋ではなかったのである。

一面の草原だ。地面を覆う緑の絨毯は、風を受けてそよそよと揺れている。空に月など浮かんでおらず、代わりに真上に昇った太陽がこれでもかと白い光を放ち、じりじりと大地を焼いていた。

そんな高原のど真ん中に夢斗は座り、辺りを見渡している。

異常事態である、ということが今更になって理解でき始めていた。全身をじっとりと汗が覆い、伝う。

「なんだよ、おい」

誰に向けたかも分からない、そんな一言が口から漏れた。

立ち上がり、自身の足で踏みしめる。伝わってくる草の感触、風が運ぶ高原の匂い、照りつける太陽の暑さ、そのどれもがひどくリアルで、生々しい。

さっきまで、確かに部屋のベッドに横たわっていた。着ている服もそのままの寝間着だ。なのになぜ、一瞬でこんな場所に移動してしまったのか。

夢に決まっている――そう無理矢理、夢斗は納得した。連日見ていた悪夢の、新たなパターンかもしれない。だとしたら、ただただ、勘弁してほしいところだ。

稀に自身が夢の中にいると理解できる「明晰夢」というものが存在すると、どこかで聞いてことがある。体を包むこのリアルな感覚こそが、その明晰夢というものなのだろうか。

ため息をつき、多少なりとも冷静になると、自身の手にあの奇妙な石が握られているのが分かった。こんな物まで再現されるとは、手の込んだ悪夢である。うんざりしつつも、それをジャージのポケットにしまう。

だが、落ち着こうとしていた夢斗の耳に、妙な音が飛び込んでくる。風に乗って伝わるそれは、どこか遥か遠くに聞こえた。

何か、鈍い音である。ドォン、という重い波長は時折、嫌に鼓膜を揺らした。

誰かがいるのだろうか――そんなふわっとした気持ちで、夢斗はとにもかくにも、草原をゆっくり歩き出す。

なんだか妙なもので、「夢だ」と決めつけた途端、どこか気持ちが楽にもなった。どれだけ生々しい感触でも、いつも見ている悪夢だというのなら、さほど警戒する必要もない。

音は、目の前の小高い丘の向こう側から聞こえてくるようだ。一步、また一步と近付くたび、謎の音はより明瞭に耳に届く。

それだけではない。なにやら、人の声まで混じりだした。それに、金属がぶつかり合うような、甲高い音もいくつも聞こえる。

一体、この向こう側で、何が起こっているというのか。夢斗はようやく高い位置に到達し、前を見る。

だが、広がっていた光景に絶句してしまった。

草原はその丘でぷつぷつと途切れていた。いや、正確に言えば、そこはちょうど崖になっており、見下ろせば荒々しく削られた岩肌が見える。凄まじい高さで、夢斗の住んでいるマンションの一室と、同じくらいだろうか。思わず足がすくみ、腰を落としてしまった。

しかし、そんな絶景に言葉を失ったわけではない。夢斗の目はその先、崖の遥か下に広がっている光景に、釘付けになっていた。

無数の人が、荒野にいる。しかし、人々の姿は二種類に分かれていた。

まず、目に付いたのは毛皮と布製の衣服を身に纏った、軽装の人々である。身軽そうな格好の彼らは、その手に木や石で作られた道具を持っている。

そして、もう一方は頭から爪先まで、銀色の「鎧」を見に纏った人々である。彼らもまた、金属製の道具を手にしていて。

いや、正確に言うと、彼らの持つそれは「道具」ではなく、もっと適した呼び方があった。彼らはそれを手に互いに向き合い、ぶつけ合っている。

剣に槍、斧に鎌に弓——それは、現代社会では、まず目には見えない、相手を傷つけるための道具。

すなわち「武器」である。

一瞬、夢斗は混乱してしまい、ただ呆然とその光景を見下ろすしかなかった。しかし、冷静に見て、目の前で何が起きているかを、ようやく理解する。

戦っているのか——人々は雄叫びをあげ、互いの陣営に切り込んでいく。弓矢や投石が飛び交う中を進み、出会った相手に武器を渾身の力で振り下ろし、叩きつけている。

当初、夢斗の脳裏には「映画か何かの撮影か？」という、なんとも間抜けな思いが浮かんでいた。しかし、じっとその光景を見つめ、それが「作られた戦い」ではない、ということを知る。

武器で切りつけられた人間は、真っ赤な血を吹き上げて倒れた。矢が突き刺さったものは激痛に悲鳴を上げ、その場にうずくまる。盾が砕かれ、槍が男の身体を貫き、嫌な角度に曲げた。

音と怒号、伝わってくる異常な熱気。

それらが、目の前で起こる「事実」を夢斗に教える。

本物だ。本物の戦争だ——夢斗は伏せ、地面にしがみつくような形で、その光景を見つめていた。落ち着きかけた呼吸が、再び荒くなる。汗が湧き出るのは、太陽の熱によるものではない。ただただ、不安が心の中に湧き上がる。

夢斗を混乱させたのは、大勢の人間達の衝突だけではない。大地ではなくそのさらに上——空中に飛び交うそれにも息を飲んでしまう。

羽のついたトカゲのような生物と、大柄の鷲のような生き物が、互いにぶつかり合っている。よく見ればその巨大な生物の背中には、やはり異なった装備を身にまとった人々が乗り、空中ですら相手を打ちのめそうと、激しい攻防が繰り広げられていた。

大地と空を埋め尽くす暴力の波に、めまいがしてしまう。

近づいたことで、より一層、戦う男達の声が明白に聞こえた。雄叫びの中に、野太い男の声が混じる。鎧を纏った軍団——剣と盾の旗を掲げる勢力の後方で、指揮官と思われる一人が吠えた。

「一気にケリをつけろお！ 魔法兵、一斉に放てえい！！」

その一言に合わせ、後方に並んでいた紅蓮の外套を身につけた面々が、前に出る。

聞き慣れない単語に、夢斗は眉をひそめた。

なんだ、今「魔法」と言ったのか？ ——だが、夢斗の疑問などお構い無しに、戦いは先に進む。

並んだ紅蓮の一味が意識を集中すると、彼らの周囲に、真っ赤に輝く「炎」が現れた。ゴォゴォと勢いを増し、それは空中で巨大な火の玉を形成していく。

息を飲んだのは夢斗だけではない。もう一方の勢力の男達も進軍を止め、一斉に回避行動をとる。

そんな彼らに対し「魔法兵」の一味は、躊躇することなく手を振り抜いた。火球はひとりで飛び、まるで隕石のように戦場へと降り注ぐ。地面に炸裂するたび、凄まじい音と共に爆発が起き、岩と泥、そして人間の体が吹き飛んだ。

この音だったのか、さっき聞こえてきた妙な波長は。

一つのささやかな答えが出たが、それでも目の前の光景に唾然とするしかない。襲い来る火の玉に、男達は撤退を始めた。

なんだこれは——もう何度、そんな言葉を頭の中に思い浮かべただろう。

唾を飲み込むも、一向に喉は潤ってくれない。必死に掴んだ手元の草は汗が染み込み、ぐしゃぐしゃに折れ曲がっている。もっとも、手に汗握っている理由は興奮からなどではなく、ただただ、湧き上がる途方も無い混乱によるものだ。

断崖絶壁の下では、無数の人々が殺し合いを繰り広げている。空中を飛び交う「鷲」と「トカゲ」もいくつも撃墜され、炎に包まれながら地面に落ちていた。

武器を手を持ち、鎧を纏い、ついには「炎」を湧き上がらせ、操って見せた男達。

こんな光景、漫画やアニメやゲームの世界でしか、見たことがない。

だが、やはり遠くから伝わってくる熱波は本物である。あの炎が映像でも、CG技術の「偽物」でも無いということは、自身の肌が訴えている。

だとしたら、随分と手の込んだ「悪夢」の世界だ。

今まで見ていたものよりもはっきりしていて、それでいて生々しい感触を覚える。漠然と流れていた光景とは違い、自身の意識がはっきりしている分、タチが悪い。

早く覚めてくれ——心の中で悪態をついていた、その時であった。

飛来する火球に逃げ惑う男達の中、小柄な一人が逆方向に飛び出し、あろうことか火球に向かっていく。思わず、夢斗の目はその一人に釘付けになった。

おかしい格好をしている。頭まですっぽりと、大きな「耳」がついたフードを被っていた。性別は分からない。謎の人物は駆け出し、逃げる人々と火球の間に立つ。

まっすぐ向かって来る火の玉に手をかざす。手首にはめられた金色の「腕輪」が輝いたかと思うと、淡い光が空間に広がり始めた。

浮世離れした光景に、言葉を失う夢斗。しかし、真の「非現実」はこの後に起こった。

謎の人物の目の前に光が集まり、空中に巨大な「盾」を作り上げる。火球は「盾」に炸裂し爆炎を上げるが、対比する人々には届かず、止められてしまった。

フードの人物が腕を動かすと、空中の盾も合わせて動き、他の火球も全て防いでしまう。凄まじい熱波の中、繰り広げられる「攻防」に夢斗は目が離せない。

素直に、見入ってしまった。

もちろん恐怖を感じる。焦りや戸惑い、混乱は相変わらず脳内を駆け巡っている。

だがそれ以上に、肉体を支配している感覚があることも、確かだ。

なぜだろう、目の前で繰り広げられる光景に、ここまで夢中になってしまうのは。また一つ、ゴクリと唾を飲み込み、乾く喉を潤していた。

なおも続く火球の猛攻を、謎の人物は一人、不思議な「盾」を操り続ける。行き場を失った火球は軌道を変えられ、地面に炸裂し、次から次へと炎を巻き上げた。

そんな中、一発が夢斗が見下ろしている崖に命中し、岩肌を吹き飛ばす。揺れと共に亀裂が走り、嫌な揺れが伝わってきた。

まさか———そう思った時には、崩壊はすでに始まっていた。慌てて立ち上がろうとする夢斗に構わず、絶壁は崩れ落ちていき、その流れに巻き込まれてしまう。

喉元から、ようやく声が漏れた。

「う———わあああああああああ！？」

視界が回る。

上へ下へ、左へ右へ。

何度も体を打ち、霞む視界の中で、それでも天地上下を必死に把握した。

最後に砂埃をあげ、土の大地の上に放り出されてしまう。地面でもがきながら、全身に伝わる激痛に耐えた。脂汗が滲み出し、歯を食いしばる。

大きく息を吸い込み、燃えるような感覚の中、自身の体がそれでも無事であることを確かめた。とはいえ、手足にはいくつもの切り傷やすり傷が見える。血まで滲み出していた。

振り返ると、先程まで立っていた崖が見事に崩れ落ち、瓦礫の山に変わっているのが確認できる。それほどまでに、あの火球の威力は高かったのだろう。まさに爆撃のそれだ。

なんとか体を起こし、周囲を見渡す。しかし、土煙で景色が覆い隠され、いまいち状況を把握できない。

必死に呼吸を整えながら、それでも目をこすり様子をうかがう。

気がつけば泥まみれ、傷まみれだ。裸足のまま今度は泥を踏みしめ、立ち上がる。

蒸せ返るような臭いが鼻をついた。それは、泥や焼けこげる炭の匂いだけではない。もっとひどい、身を震わせるような悪臭である。

その正体が夢斗にはすぐ、分かってしまった。突風が土煙を払いのけ、目の前に広がる光景をあらわにしたからだ。

それは、地獄絵図だった。

崖から転げ落ちた夢斗は、戦場のすぐ側までたどり着いてしまっていた。砕けた武器や鎧、えぐられた地面、焼けた土。

それらの隙間に、無数に転がっている、人、人、人——腕や足がちぎれた者、刃が深々と突き立てられた者、炎に焼かれ炭になってしまった者。ありとあらゆる「死体」。そして、そこから流れ落ちる赤い液体。

その「血」の臭いが、夢斗の肉体を内側から侵蝕し、えぐる。熱波によって煮立ち、風に乗って香る命。

肩が、足が、全身が震えた。

今まで見てきた「悪夢」など、比ではないくらいの圧倒的な嫌悪感。本能に直接訴えかける、生理的不快感。

再び呼吸が荒くなるも、息をすればするほど、周囲の「死」の臭いが体に侵入し、吐き気すらもよおしてくる。

早く覚めろ、頼む、早く覚めてくれ——展開されている「夢」に訴えかける。どれだけ衰弱しててもいい。とにかく早く、朝が来てくれ、と。

だが、その願いは唐突な一言で遮られてしまう。

「動くな、おとなしく降伏しろ！」

いつの間にか、間近に迫っていた鎧の男達が一斉に武器を向け、吠えた。鋭い槍の切っ先が5本こちらを向き、威嚇している。

緊張から、震えが止まってしまう。中腰のまま視界をひたすら走らせ、自身を取り囲む鎧の男達を見渡す。

「抵抗するな、一步でも動けば迷わず切る！」

男達の顔立ちは、どこか日本人のそれとは違う。角ばった顔と高い鷲鼻、深い緑の目が異国人のそれを彷彿とさせた。

だが、奇妙なことに彼らは明瞭な日本語で言い放つ。奇妙な光景に、何が何だか分からない。

また少し、槍の切っ先がこちらに近寄る。夢斗は大きく呼吸をしながら、手を上げてる。

「ま、待てよ...待ってくれ、俺は、違う！」

だがその訴えに、鎧の男達は怪訝そうな表情を浮かべた。

「言い訳するな、蛮族が！ 今更、命乞いか」

「ばんぞく？ 待てよ、待ってくれ！ 俺は関係ない、本当だ！」

うろたえ、それでも必死に身の潔白を訴える。わめく夢斗を見て、今度は後ろの一人が声を上げる。

「隊長、こいつは『獣人』ではありません」

「何？ 奴らに、人間の協力者がいたのか」

意味するところは分からないが、どうやら目の前の隊長の機嫌は、より一層悪くなったようだ。眉間に刻まれたしわが、それを物語る。

「『飛竜部隊』が撤退した獣人どもを追っています。ただし、森に逃げ込まれ、これ以上の追撃は困難です」

「まったく、ちょろちょろとこざかしい連中だ。見た目通り、まさに野獣よ。よし、ひとまず、こいつをひっ捕らえろ！ 連れ帰り、奴らについて吐かせるんだ！」

彼の命令に、周囲の面々は「はっ！」と答え、またじりじりと寄ってくる。どうやら、事態はまずい状況に進んでいるらしい。

「な、なあ、違うって！ 俺はただ見ていただけ——」

そんな夢斗の弁解は、鋭い痛みで遮られてしまう。背後の一人が槍を脇腹に叩き込んだのだ。

がっ、と声が漏れる。激痛に崩れ落ち、這いつくばってしまった。当たったのは刃ではなかったようで、切れてはいないが重い痛みが残る。

ジリジリと、鎧の男達が近寄ってくるのが見えた。その手には荒縄が握られている。あれで、夢斗を捕縛するつもりなのだろう。

早く覚めろ——ついさっきまで、夢斗は必死に心の中でそう願っていた。

迷い込んでしまった「悪夢」に、一刻も早く終わってくれることを、切に願っていた。

しかし、それは叶わない。

なぜなら、目の前で起こっている出来事の本質が徐々に、信じられはしないが、それでも分かってくるからだ。

太陽の暑さ、風の爽やかさ、草や岩、泥の感触。

そして何より、体に刻まれた確かな痛み。

それらが夢斗の脳内に、ある信じれない事実を刻み込んでいた。

夢なんかじゃあない———という理由かは分からない。なぜこんなことが起こるのか、どうしてこんな場所に連れてこられたのか、全て分からない。

それでもただ、ただ、肌で感じ、理解したことがある。

これは、現実。

目の前に広がっている全てが、夢なんかじゃあない。

その不可解かつ、明白な事実には戦慄する。痛みだけではなく、心を締め付けるような不安と恐怖が、あの嫌な汗を全身に伝わっていた。

逃げなければと必死に抗うが、先程の一撃でうまく呼吸ができない。もがき、苦しむ夢斗にまた一歩、兵士達は近寄ってくる。

「他にも残党が隠れていないか、探し出せ。城に連れて帰って、直ちに尋問にかけろ。洗いざらい、吐かせるんだ！」

部隊長の男性は自身の剣を鞘にしまい、周囲の部下に言い放つ。その言葉が夢斗の鼓膜を嫌に震わし、そして恐怖を倍増させた。

尋問——それがいったい何を意味するのかは、夢斗には分からない。しかし、様々な想像が湧き上がり、脳内を埋め尽くす。先程まで人間に向けて刃を向け、平然と「殺し」に手を染めていた連中だ。そんな奴らの手にかかれば、何をされるのか。

想像し、歯噛みする。目の端には、涙まで溢れ出てきていた。

夢だと言ってくれ———すぐ目の前に、縄を持つ男が迫る。ついに迫ってくる恐怖に耐え切れず、目を閉じてしまった。

暗闇の中、甲高い音が響き渡り、全身に緊張が走る。

何が起こったのか。恐る恐る、目を開けた。

すぐ目の前の兵士は、夢斗ではなく明後日の方向を見つめている。周囲を見渡すと、何やら他の兵士達も、同様にうろたえているようだ。

真っ先に口を開いたのは、あの隊長である。

「な、何だ。何の音だ？」

相変わらず、戦場には不規則な風が吹き荒れ、土煙の波を立てている。どうやら、彼らも怪音の出所を探しているらしい。

呼吸を整え、冷静になりながら、ようやく体を少し持ち上げれた。

そんな夢斗に合わせるかのように、土煙の向こうから、大きな影が飛来する。隊長、兵士、そして夢斗は同時に息を飲んでいった。

それは鎧を身にまとった、別の兵士である。持っていた剣は砕けており、腹部の鎧も大きくへこんでいた。すでに気を失っているようで、別の一人にぶつかり、まとめて地面に倒れた。

一同に戦慄が走る。兵士達は一斉に構え直し、なおも隊長が吠える。

「何だ、何が起こった！？ 警戒を怠るな、まだ敵が——」

彼が剣を抜き直した、次の瞬間だった。

土煙を突き破り、再び大きな影が飛来する。しかし、今度は兵士ではない。大地を蹴って跳び、隊長目掛けて飛来するその姿を、夢斗ははっきりと目に焼き付けた。

あいつだ———大きな耳のついたフードを深々と被った、謎の人物。鎧の軍隊が放つ火の玉を、最後まで光る「盾」で防ぎ続けていた、相手勢力の人間である。

間近で見ると随分小柄だ。夢斗よりもおよそ、頭二つ分ほど小さい。跳び上がったその姿は風を受け、外套がたなびいている。ブーツの上に見える膝は、透き通った白い肌をしていた。

隊長の男は、おそらく「敵襲！」とでも叫びたかったのだろう。だが、彼が一言を発する前に「襲撃者」が動く。腕を振り抜くと、空中に赤い光が集結した。

あの「盾」か——その予測は、見事に裏切られてしまう。宙に浮かび上がった「それ」を見て、息を飲んだ。

姿を現したのは、巨大な「槌」である。取手の先に長方形を取り付けた「ハンマー」だ。

やはりそれは襲撃者の腕の動きに合わせて、ひとりで動く。ぐるりと回転した後、まっすぐ、隊長の頭に叩き込まれた。ガァン、という轟音と共に、真下に叩き潰される男。一撃で気を失い、戦闘不能になってしまう。

襲撃者が着地し、一斉に声が上がった。夢斗のすぐ前には倒れた隊長の顔が見える。兜は綺麗にへこみ、男は泡を吹いていた。

続けて、一人、二人と襲撃者に襲いかかる兵士達。だが、光の「槌」が剣や盾をことごとく弾き飛ばし、触れた瞬間、砕き割った。凄まじい破壊力になすすべがない。それこそ、一人、二人と体に一撃を叩き込まれ、悶絶していく。

襲撃者の動きは身軽だ。突き出された槍をかわし、振り下ろされた剣に飛び退く。その跳躍は重さを感じず、優雅である。

駄目押し、とばかりに腕を振り抜く襲撃者。「槌」はそれに合わせて、左右に立つ兵士に、それぞれ鈍い一撃を見舞った。重い音と、兵士達の「ぐえ」という唸り声が重なる。

その二人が倒れたことで、周囲を取り囲んでいた兵士達は、皆、地に伏せてしまった。

安全を察したのか、襲撃者は腕を下ろす。合わせて、宙に浮かんでいた武器も光となって散った。

突然の事態に夢斗は地に伏せたまま、ただただ顔を上げ、啞然としている他ない。ぽかんと口を開けている彼に、襲撃者は向き直る。

圧倒的な強さに見惚れていたが、視線が交わったことで一気に緊張が走った。慌てて身を翻し、夢斗は尻餅をついた。

ゆっくりと、こちらに歩み寄ってくるフードの人物。すぐ目の前で立ち止まり、しばし沈黙していた。

と、ここで夢斗は嫌な予感がしてしまう。元々、この地で二つの勢力が争っていたのだ。無論、夢斗はそのどちらにも属さない、完全なる第三者になる。

しかし先程の兵士達と同様、お互いの勢力はその事実を知らない。実際、先程まで夢斗は「敵対勢力の一人」と間違われていたのだ。

違う、と言っても、それを証明する術を持たない。となれば、今度は「鎧の軍団」の人間だと思われるのでは。

そう思った瞬間、緊張し、拳に力が入った。あの光り輝く「槌」が自身に振り下ろされる絵を、想像してしまっただけである。

やはり、逃げないと——そう思い、駆け出す覚悟を心に決めた、その時であった。

「大丈夫ですか？」

その一言に「えっ」と声を上げてしまった。目の前の襲撃者がようやくフードを取り、その顔があらわになる。

風を受け、たなびく長髪は目も覚めるような金色だった。透き通った白い肌が、激しく動いたせいで少し紅潮しているのが分かる。こちらを見つめる大きな眼の中心には、吸い込まれそうな青色の瞳があった。

兵士達を叩き伏せた謎の人物は、夢斗よりずっと幼さを帯びた少女だったのである。

その意外な事実、夢斗は緊張の糸が緩んでしまう。そして、さらにあることに気づき、言葉を失う。

どこかで、見たことがある顔だ。

鮮やかな金髪・碧眼。幼さの残る顔立ち。

つい最近、夢斗はどこかでこの少女に会ったことがある。

その事実を裏付けるように、少女は聞き覚えのある口調で言った。

「あ〜っと、驚かせちゃいましたか？ ソーリー...あ、いや、ごめんなさい」

夢斗の背中を、電流のような衝撃が走る。尻餅をついたまま、力なく口から言葉が漏れた。

「君は、あの時の――」

はっきりと思い出せる。

夕暮れ時、気まぐれで立ち寄った商店街の本屋。

何気なく時間を潰したその店で、ぶつかって転んでしまった、同じ学校の女子生徒。

あの時の金髪・碧眼の姿が、すぐ目の前に立っている。

夢斗の反応に少し戸惑いつつも、彼女は笑い、手を差し伸べてきた。

目の前の白い手を、すぐには取ることができない。だが、恐る恐る手を伸ばし、掴む。

暖かい――伝わってきた感触に驚き、再び彼女の顔を見つめる。

太陽の光が長い黄金の上を滑り、キラキラと輝いていた。

「はい、これ、どうぞ」

少女は水筒の水を差し出してきた。少しだけ戸惑いはしたが、今はとにかく喉が渴いている。ありがたく受け取り、飲み込んだ。爽やかな冷たさが喉から胃へと流れ込み、体に潤いを取り戻してくれる。

「あ、ありがとう。助かった」

「ユア、ウェルカム。あ、どういたしまして！」

にっこりと笑う少女。彼女は受け取った水筒を大事にしまう。

二人は荒野を離れ、少し先の森の中にいた。大樹がいくつも生い茂り、太陽の光を遮ってくれる。倒木の上に腰掛け、とにもかくにも落ち着こうとした。

飲み込んだ水の感触、そして周囲に生える見たこともない植物の感触から、やはりここが「現実」だと再認識してしまう。しかし、戸惑いが消えたというわけではない。

森に踏み込んでからというもの、そこらかしこに見たこともない生物の姿が見える。緑色の体毛を持つ猿の群れ、とことこと歩く一つ目の猪の親子、遠目に見てもぞっとするようなサイズの黒と白の縞ヘビ。

現実世界にいる動物に似てはいても、決定的にどこかが違う存在が、この森には生息している。先程からけたたましい鳴き声が、遠くから幾度となく響いている。

注意深く周囲を探る夢斗に、少女はあっけらかんとした声で言う。

「間に合ってよかったです。あのまま捕まったら、一体何されてたか、分かりませんからねえ」

その一言にぎょっとし、振り向く。だがそれでも、少女はあくまで笑っている。

「そ、それってどういう...」

「ルガリア国は鬼軍曹が多いことで有名ですからねえ。きっと拷問されて、ポロポロにされちゃいますよ」

また一つ、息を飲む。あながち、あの戦場で予感していたことが、間違いではなかったらしい。

だが、新たな単語を読み取り、再び問いかける。

「ルガリア国...それって、あの鎧の連中のことか？」

「え、そうですけど...」

不思議そうに首をかしげる少女。続けて、少女も何かに気付き、夢斗を怪訝な表情で見つめた。

「あれ、そういえばあなた、見ない顔ですね。まさか、ルガリアの兵士さんですか？」

「ち、違うよ、違う！ 俺は、あんなのとは関係ないよ」

必死に首を振る。少女は顎に手を当て、少しだけ近寄ってきた。

「でも、レジスタンスの人とも違いますねえ」

「レ、レジスタンス？」

新たな単語の登場に、分かりやすく狼狽する。その様を見てより一層、少女は怪しげな表情でこちらを見た。

「どちら側の人でもないんですか、あなた？ じゃあ、一体なんであんな場所に？」

ずいっと寄ってくる少女にたじろいでしまう。

すると今度は少女の方が、とあることに気付いた。

「あれ...あなた、どこかでお会いしましたか？」

「ッ！　そ、そう！　昼間、一度会ってるじゃないか。ほら、あの本屋で！」

その回答に「本屋あ？」と声を上げる少女。さらに夢斗は追撃する。なんとしても、ここで「敵ではない」と分かってもらわなければ、あの不思議な「ハンマー」が飛び出しそうで気が気ではない。

「如月商店街の本屋だよ。今日の晩、そこの入り口でぶつかって、二人ともこけたー」

少女は「ん〜？」とうなり、じっと考えていた。

しかし、ようやく思い出したようで、分かりやすく目を見開く。

「如月商店街の本屋...確かに、今日発売の『週刊・爆ゲーマー』を買いに行きましたけど.....あっー」

どうやら、彼女が本屋で買い求めていたのは、ゲーム情報誌らしい。意外な趣味を持つようだが、そんなことは今はさほど重要ではない。

再びこちらを見つめる少女。夢斗はぎこちない笑みを浮かべ、頷く。

今度は、少女の方が驚きの声をあげた。

「えー！　な、なんで.....なんであなたが、ここに？」

予想以上の驚きように、夢斗は困惑してしまう。

なんで、と言われても、それはこちらが聞きたいくらいだ。

「分からない...あ、あのさ、なんなんだよ、ここは。現実ーだよな、これ」

漠然とした疑問をとにかく投げかけた。いまさら、ここが夢の世界だとは到底思えない。限りなくリアルな感触だけでなく、ついにはぶつかっただけとは言え、知っている人間が目の前に登場し、こうして話しているのだ。

右も左も分からない夢斗にとっては、この少女だけが唯一の希望だ。武器を持つ兵隊ではない。たった一人の「日常」の人物なのである。

しかし、先程までの快活さが一変、少女は何やら困惑している様子だ。

「そんな、なんで...ど、どうやって『こちら側』に来たんですか、あなた？」

「え、『こちら側』？」

逆に問いかけ返され、どうしていか分からなくなる。だが自身を落ち着かせ、とにかくたどたどしくでも、彼女に経緯を伝えた。

「はっきりとは、分かんないよ。家に帰って、ベッドで横になってたら、目の前が真っ白になったんだ。それでー」

この一言に、少女の目の色が変わる。

「そんな.....じゃあ、あなたも私と同じー『オーバー』なんですか!？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。なんだよ今度は、『オーバー』？　なんだ、それ」

食い入るような視線に、またもたじろいでしまう。今度は、少女の方が気付いたのか「あっ」と声をあげ、身を引く。

「そうか、初めてなら、知らないですよ。ソーリー...じゃなくて、ごめんなさい」

やはり妙な少女だ。時折、ふっと気が抜けた時になぜだか英語が混じる。もっとも、その金髪・碧眼という見た目から、違和感はあまりないのだが。

「なあ、一体なんなんだよ、これ。どうやったら帰れるんだ？」

なぜこんなところにいるのか。そして、どうやったら元のベッドに戻れるのか。とにかく、こんなわけの分からない場所は、一刻も早く立ち去りたかった。

しばし、少女は悩んでいるようだった。時折、チラチラと横目で夢斗を確認している。その不可解な姿に眉をひそめつつも、じっと返答を待った。

「ここは、あなたがいた世界とは、異なった世界なんです。『クレイドル』っていう名前の、別世界です」

飛び出した一言は、待ち構えていたにも関わらず、まるで受け止めきれぬものではなかった。思わず、声を荒げてしまう。

「クレイドル...異なった世界.....え、なに？」

「異世界なんです、ここは。私たちの世界の裏側で、存在する全く別の世界。あなたはここに来てしまったんです」

返す言葉が、見つからない。

夢斗はしばし、黙ったまま、彼女を見つめていることしかできなかつた。森の木々のざわめきや、遠くから聞こえる鳥の音が、まるで耳に入っていない。

「異世界って.....本気で、言ってーるん...だよなあ...」

苦笑いする夢斗に、真剣な眼差しで頷く少女。

「信じられないのは分かります。でも、現実なんですよ」

少女は腰掛けたまま、ゆっくりと語りだす。

「いつからこの世界があるか、私にも分かりません。だけど、今は白天暦の1342年、4月。私達の世界と同じように、この世界も裏で着実に時間を刻み、存在し続けているみたいです」

常識人に、大真面目にこんなことを言えば、きっとあきれられるか、大笑いされるかのどちらかだろう。事実、夢斗も一瞬、そのあまりにも夢物語じみた単語の羅列に、笑いそうになった。

だが、目の前にいる少女の眼差しは真剣だ。

彼女が嘘などついていない、と分かる。理論理屈ではなく、少女の無垢な瞳がそう告げているような気がしたのだ。

しかし、だからと言って「そうなんだ」と納得しきることは、今の夢斗には到底不可能だ。

そんな荒唐無稽な話、やはりゲームだの映画だの漫画だのでは、お目にかかれない。

「そ...そう.....そ、それで、君は何で、その『異世界』——あ～...ここにいるんだ？」

自分自身の言葉が、これほどふわつく感覚も珍しいかもしれない。そのひねり出した言葉に確証がないからなのだろうか。

だが、気になる点であるのも事実だ。そもそも、別の世界があったとして、なぜ夢斗、そしてこの少女は、その異世界・クレイドルとやらにいるのか。

一瞬、少女はどこか答えづらそうに口ごもった。随分とこの金髪の少女は分かりやすい。感情がそのまま、隠すことなく態度に出ている。

急かしたい気持ちをぐっところえ、夢斗は待った。

「私は、その...私自身も良く分かりませんが、世界を行き来できる『力』があるんです」

「『力』だって？」

こくりと頷く少女。彼女は静かに続けた。

「私がこっちに初めて来たのは、3ヶ月前くらいになります。夜、眠れずに外を見ていて、満月を見上げてました。そうしたら、ふっと意識が遠のいて.....辺りが真っ白になったと思ったら、気がつけばここにいたんです」

その体験は、どこか夢斗が感じたそれと共通点があった。

「最初は戸惑いました。見たこともない生き物、土地、植物。それに会ったこともない文化で暮らす人々。それに『魔法』の存在——」

「ちょ、ちょっと待って。今、『魔法』って言ったか？」

「はい。さっき、あなたを助けるときも、使いましたよね。相手の兵士達も使っていましたし」

思わず愕然とする。これまた「冗談だろ」と言いたいが、目の前の少女の目は、相変わらず真剣で、そして澄んでいる。

だが夢斗自身、その超常現象とも取れる光景を、確かに覚えている。

ひとりでに収縮し、飛来する火球の群れ。そして、それを受け止める光の盾。兵士達を薙ぎ倒し、夢斗を救った光の槌。

今時、それをCGによる演出だ、と割り切ることもできるかもしれない。最新の技術を持ってすれば、それも可能なのかもしれない。

だが、その無理矢理な理由付けは、自分自身で否定してしまう。

いったい誰が、なぜそんなことをする必要があるのか。

「初めてこちらに来た時は、怖くて怖くて——とにかく、早く元の世界に帰りたくてしょうがなかった

です。数時間、歩いて歩いて、疲れ切って森で眠りについて...気がついたら、今度は元通りの家にいたんです」

この一言に、食いつく夢斗。

「そ、それは戻れたってことか？」

「はい。最初は自分でも、わけが分かりませんでした。あれはやっぱり、悪い夢なのかも、って思いもしました。でも、違ったんです」

違った？ と繰り返す夢斗に、力強く頷く少女。

「後日、同じように、またこちらに来ることができたんです。今度は、自分の意思で」

思わずぎょっとしてしまふ。少女の大きな青い瞳の中に、自身の間抜けな顔が映っているのが見える

。「自分の意思...ど、どうやって？ じゃあ、それを使えば、帰れるんじゃないあ...」

「特別なことは何もありません。ただ、行きたい世界のことを『想う』んです。そうすれば、向こう側へ移動できるんです。ただ...一度移動してしまうと、数時間経たないと、次の移動は行えなくなつて...」

最後の事実を、彼女は実に言いづらそうに告げた。実際それを聞き、夢斗は眉をひそめてしまふ。

「すぐにはできないって...そ、それって、次はいつ...」

「そうですねえ...私も、1時間前くらいにこっちに来ましたから、あと2時間くらいかなあ、と」

あと2時間で帰れる—それは少なくとも、夢斗にとっては希望だったのだろう。

しかし掴みかけた光は、少女の申し訳なさそうな一言で、少しだけ曇ってしまった。

「ただ...私の力で、あなたも一緒に向こうに連れて帰れるかは、分かりません。今までそんなことやったことないし...あなたがどうして、こっちに来てしまったのかも、分からないままですから」

肩の力が、がっくりと抜けてしまふ。

そんな夢斗の表情に、より一層、少女も申し訳なさそうに狼狽していた。

おかしな力である。別々に存在する二つの世界、そこを行き来することができる、特別な力。何故、彼女がそんなものを持っているのか。何故、何度も行き来をしているのか。何故、自分にもそんな力が発動してしまったのか。

聞きたいことは山ほどある。だがそれでも、夢斗にとって最重要なのは、たった一つだ。

どうすれば、向こうに帰れるのか。

森のザワザワという音が、まるで自身の不安な心を表しているかのようで、酷く不快だった。

「あの...ソーリー、じゃなくて、ゴメンなさい.....あの...気を落とさないで」

少女の一言に、ハツとして顔を上げる。すぐ目の前の彼女は、不安げな眼差しでこちらを見ていた。

「その...、だ、大丈夫ですよ。ノープログラムです！ きっとなんとかなりますよ。だって、あなたもこっちに来れたんですから、きっと戻れますよ。私だってそうでしたから！」

その言葉には確証など何もない。どうやって戻るのか。何をすれば帰れるのか。今の夢斗にも、少女にも、全く分からない。

だが、そんな事実はおかまいなしに、彼女は言葉を告げる。

「こっちの世界には、魔法や異世界に詳しい人も、いっぱいいます！ だから、きっと何とかなりますよ！ 大丈夫ですよ！」

根拠などなにもない。だがそれでも、目の前の小さな少女は、精一杯、夢斗を励まそうと、無理矢理でも笑顔を作ろうとしてくれている。

それだけはしっかりと、伝わってきた。だからこそ、夢斗は力ない表情で、それでも彼女に返す。

「ああ...そうか.....ごめん。ありがとう」

謝罪と感謝を同時に受け止め、少女は少しだけ驚いた様子だった。夢斗は一度、深呼吸をし、頭を落ち着かせる。

飲み込まれるな、冷静になれ—吸い込んだ空気、そしてそこに香る森を、いまさら偽物だなどとは思わない。これは現実。まぎれもない、自分が放り込まれた「もう一つの世界」なのだ。

心を静めると、目の前の少女に対し、なんだか申し訳なさが湧き出てきた。

思えば、まだ先程の礼を言っていない。

「その...悪かった。二つの世界とか、魔法とか、頭ん中、いっぱいいっぱいさ。さっきも助けてくれ

たんだよな？ ありがとう」

「えーあ、いえ！ そ、そんな、とんでもないです！」

なぜか少女は驚いたように、少し慌てながら返した。

夢斗は額の汗をぬぐう。改めて見れば、ひどい姿をしていた。全身泥だらけで、シャツは擦ったの所々が破れている。素足で走り回ったせいで所々、血まで出ていた。

少しでも前に進むべく、夢斗は一つ一つ疑問を潰していくよう、頭を切り替えることに努めた。

「あんな風に、人と人が本気で争うのを、初めて見た...あれじゃあまるで、戦争だよ」

倒木に腰掛け直し、体の泥を拭いながら言う。夢斗の一言に、少女も続いた。

「ええ、こっちはどこも、あんな状態です。特に、この地域は『レジスタンス』と『ルガリア王国』の争いが絶えませんから」

「さっきのやつらのことだな？ 君もーあ〜っと...ごめん、そういえば名前、聞いてなかったな」

唐突な問いかけに、少し目を丸くする少女。彼女はどこか恥ずかしげに、自身の名を告げた。

「リサです。日向 リサって言います」

「諸星 夢斗だ。リサ...外国の人？ それにしちゃ、日本語がうまいけど...」

「ああ、いえ。生まれも育ちも、日本です。母が異国の出身で、日本で私を産みました」

夢斗は「ああ」と少し納得した。どうりでこの見た目で、流暢な日本語を喋るわけだ。そして、時折英語が混じってしまうのは、その生まれがゆえなのかもしれない。

金髪・碧眼のハーフの少女・リサに改めて問いかけた。

「そっか。それで、リサさんはー」

「リサでいいですよ」

すかさず訂正され、言葉を飲む。なぜかリサはニコニコ笑いながら、こっちを見ている。

「あ、ああ、そう。なら、話は戻るけど、リサはなんであんな場所に。君もあいつらと同じで、戦争をしていたのか？」

「とんでもないですーって言っても、そうですねえ...結果的には、そういうことになるかもですが...」

なんだかりサは言い辛そうに口ごもる。

理由が分からない夢斗は、ただ彼女の答えを待った。

「私は、そういう意味では『レジスタンス』側ですかね。ただ、レジスタンスにも、色々ありまして...」

何から説明すれば、という感じだ。おそらく、この世界についてまだ何一つ知らない夢斗に、何を真っ先に伝えるべきなのか。それを頭の中で整理しているのだろう。

「私がこっちの世界に来て、初めて出会ったのが、レジスタンスの人達でした。だから、こっちに来る時は、彼らと一緒に行動するようにしています。ただ、レジスタンスも中で色々な『派閥』があって...ちょっと説明は難しいですけど」

「リサはそのレジスタンスから、こっちのことを学んだのか？」

「はい、そうです。世界の成り立ちや、国の情勢。生き物や植物のことから、魔法のことまで。この腕輪も、その人達に作ってもらったんです」

嬉しそうに語る彼女は、左手にはめた金色の腕輪を見せた。木漏れ日を受けて輝くそれは、シンプルな造形だが、よく見ると白い石を一つだけ、埋め込んでいる。

「なんだい、その腕輪は？」

「私が魔法を使うための、便利な道具です。これのおかげで、才能のない私でも色んなことができるんですよ」

その一言で夢斗は思い出し、声を上げた。

「魔法...そうか。そういや、あの時、リサは...」

思い返せば、戦場で彼女も幾度となく「魔法」なる力を使っていたはずだ。飛び交う火の玉を「盾」で防ぎ、取り囲む兵士を「槌」で撃退して見せた。その時も、彼女の腕にはあの金色に輝く腕輪がはめられていたはずだ。

これに対し、嬉しそうに頷くリサ。

「イグザクトリー！（その通り） 私も最初は信じませんでした。でも、こんな普通の私が、これを使えば簡単に魔法が使えるんです。凄い道具なんですよ、これ！」

彼女の跳ね上がったテンションに、少しだけたじろぐ。どうやらこの少女は、気持ちが激しく動くと、英語が出てしまうようだ。

「最初はそれこそ、怖かったんですが、行き来できると分かると、こっちのことがなんだか気になっちゃって...それで、今では学校から帰ったら、必ずこっちに来て、色んなところを探索する日々です」

「へえ、すごいな。こんな危険なところなのに、自分からすすんで...」

「もちろん、怖いことはいっぱいありますけどねえ。でも、昔から夢見てたんですよ。『魔法』と『剣』のある、不思議な世界が。それが本当にあったなんて、心が躍ったんです」

純粹に笑う彼女の顔からは、それこそ「好奇心」の光が溢れ出ているようで、眩しい。夢斗は口を少し開き、きょとんとして彼女を見ていた。

いまいち、今の夢斗には分からない感覚でもある。確かに、夢斗だって漫画を読んだり、ゲームをしたり、映画を見たりはする。そこに広がる荒唐無稽な世界に心を躍らせ、「もし本当にこんな世界があったら」と考えたことがないわけでもない。

だが、いざ本物の「非現実」が姿を現した時、彼女ほどそれを肯定的に捉えられないというのが、本心だった。それはきっと、夢斗がまだこちらの世界について、あの「戦場」しか見ていないから、というのもあるのかもしれない。

とにもかくにも今の夢斗にとっては、この世界から早く、元の世界へ戻ることが最優先事項だった。

ここでリサは何かに気づき、再び夢斗を見る。

「そうだ。もしかしたら夢斗さんのことも、彼らなら何か分かるかもしれません！」

「彼らって？」

「レジスタンスの人達ですよ。彼らなら、夢斗さんがどうやって戻ることができるのか、知っているかも」

それは、先程の話にあった、こちらの世界で出会った人々のことだ。

彼女の思惑を察し、心の中で納得する。

「ああ、そうか。そんなに、そのレジスタンスってのは、賢い連中なのか」

「はい。色んな人が揃ってるので、歴史に詳しい人もいれば、学問に詳しい人もいます。それに、私達みたいな人間のことをよく知っている人も」

その最後の一言で少し疑問に思い、問いかけ直した。

「それってつまり...俺達の住んでいた世界のことで、知ってる奴がいるっていうのか？」

「う〜ん、厳密に言えば、私達の世界のことではないですかね。私達みたいに『別の世界から来た人』を良く知ってるというか」

何気なく言うリサに、夢斗はまたしても食いついてしまう。

「ちょっと待って。俺らみたいな人種は、他にもいるっていうのか？」

てっきり、夢斗達のように、別の世界から迷い込んだ人間は希少な存在だと思っていた。だが、どうも彼女の言葉からは、それがあながち、珍しい存在でもないということが読み取れる。

リサはその問いかけに、すぐには答えなかった。再び、何やら言いづらそうに口籠り、目が泳いでいる。

やがてゆっくりと、静かに彼女は語りだす。

「私もあくまで聞いただけですが...こっちの世界では、私達みたいな存在は、時折現れていたようです。特に、私みたいに明確に『世界を行き来できる存在』の事を、こちらでは『オーバー』って呼ぶんだとか」

オーバー——放たれた単語を、夢斗は繰り返すことしかできない。

「珍しい存在で、過去にもそういう人が何人かいたみたいです。歴史の中に時折現れては、こちらの人と接触していたんだとか。ただ、その正体は解明されてないようですね。あくまで不思議な存在、ということしか...」

どうやら夢斗達のような存在は、この世界では相当特殊な存在のようである。特にリサに至っては、

自身の力で「世界を移動できる」というのだから、もっともだろう。

「それって、例えばだけど...俺もリサと、同じって可能性もあるのかい？ その『オーバー』って呼ばれる存在、って可能性は...」

「分からないです。もしかしたら、そうなのかも。でも、そもそも『オーバー』ってものは、さっきも言ったように、まるで説明されてない存在ですから...」

言われてみて、夢斗も少しため息をついた。確かに、それをリサに問いかけるのも酷なことだろう。何せ、数ヶ月先行しているとはいえ、リサだってまだこの世界に慣れている最中なのだ。

相変わらず、分からないことだらけ、ということか。

大きなため息をつき、ポケットに手を入れ、座り直す。

と、自身の右手に何やら妙な感触を覚え、思わず取り出した。それは、ポケットにしまいこんだ、あの石である。

思い返せば、これを眺めていたことが、この世界に来るきっかけだったような気もする。相変わらず、石はかすかな木漏れ日を受け、キラキラと輝いていた。

「どうしたもんかな、そりゃあ。でもリサの言う通りかもな。とにかく、そのレジスタンスってのに、会ってみるのもー」

そこまで言いかけた時、夢斗は顔を上げ、動きを止めた。

リサが何やら、こちらを見て目を丸くしている。いや、正確には夢斗が持つ石を見つめ、言葉を失っていた。

「ん？ リサ、どうしたんだ」

固まったリサに問いかけるも、すぐに返事はない。だが、一拍遅れ、リサが大きな声で叫ぶ。

「ああ——————！！」

響き渡る甲高い声に、夢斗は身をすくませてしまう。遠くで、森の小動物や鳥達が騒ぎ出すのが分かった。

「な、何.....？」

「それ、え、ホワイ？ なんで、なんであなたがそれを！」

ずずいと歩み寄られ、たじろいでしまう。小さな体だというのに、リサの勢いは今や夢斗を圧倒していた。

「な、なんでって...いや、なんでか、鞆に入ってたんだよ、これ」

「鞆？ 入ってたって.....あっ!？」

戸惑うリサに、夢斗は問いかける。

「なんだ、これに見覚えがあるのかい？」

「オフコー—ス（もちろん）！ それ、私が先週、初めて倒したゴーレムの『心核』です！」

ぐいぐいと食いついてくるリサに、また一步、たじろいだ。

石を掴んだまま、その意図するところが分からず、目を丸くするしかない。

「ずっと、ずう—と、探してたんです！ あなたが持ってたんですね！」

「こ、これ、君のなのか？ なんで俺の鞆なんか...」

「きっと、あの時です！ 本屋でぶつかった時に、夢斗さんの鞆に入っちゃったんですよ」

思わず夢斗も「ああ」と頷く。

どうやらこの石は、もともと彼女が鞆の中に入れていたものらしい。あの時、本屋でぶつかり、荷物が散乱した最中に、偶然にも夢斗の鞆の中に潜り込んだということか。

奇妙な偶然にため息をついてしまう。

そんな中、リサを見ると、こちらを見て何やらそわそわしている。何かを言いたそうに、手を掲げ、言葉に迷っているようだ。

夢斗は今回ばかりは、彼女の意図をいち早く察することができた。

「ごめん、返すよ。悪かった」

「い、いえいえ、全然。ありがとうございます！」

だが、手元に帰ってきた石を見て、随分とリサは嬉しそうである。よほど大事なものだったようだ。「良かったあ。失くしちゃって、探し回ってたところなんですよ」

「へえ。そんなに大事な石なのかい。その...あ〜っと...ゴーレム？ の、心核？ だっけか」

どうやらこれまた、ただの石というわけではなかったようだ。

力強く頷くりサ。

「こっちの世界で、私一人で戦って、初めて『ゴーレム』——ああ、石でできた巨人みたいな生き物なんですけど——それを倒して、手に入れたものなんです」

「倒した...君一人で、戦ったのかい？」

またもや、嬉しそうに笑い、頷く。

「イエス！ 勝てたことが嬉しくって、ずっとお守り代わりに持ってたんです」

何だか、またもや夢斗は啞然としてしまう。

この少女は夢斗よりも早くこちらにたどり着き、そして順応しているということは、もはや分かっていた事実だ。

だが、まさかその小さな体で「魔法」があるとはいえ、あえて戦いに身を置くなど、夢斗ならば到底考えない行動である。

「そんな特別な物だったとはなあ。そいつを眺めてて、気がついたらこっちに来たんだよ。俺にとっては、お守りってほど、良いもんじゃあないけどなあ」

その一言でハッとするリサ。めまぐるしく変わる彼女の表情に、夢斗もまた反応してしまう。

今度は、一体どんな感情を引き当ててしまったというのか。

「え...これを眺めてたら、ですか？」

「あ、ああ。そうだよ。ベッドでそいつを眺めてたら、気がついたら草原に寝てた。何か不思議な力があるのか？」

リサも言われ、手のひらの上の石を見つめる。頭上の木々が揺れるたび、木漏れ日が角度を変え、まるで万華鏡のように光の色を変化させる。

「そうなんですか...ゴーレムっていうのは、土地に滞留する『魔力』が結晶を作って生まれる、特殊な生き物だって聞きました。もしかしたら、この石が夢斗さんがこちらに来た、きっかけを作ったのかも」

推測するリサに、夢斗は「ふうん」と声を上げる。

関心がないわけではなかった。むしろ、この事実には大いに興味を持っている。なぜなら、それが本当ならば、この石こそ夢斗が帰るための「きっかけ」になりえるかもしれないからだ。

不思議そうに石を見つめるリサ、そして夢斗。だが、あの時のように特別な現象が起こるわけでもなく、石はただキラキラと輝いているだけだ。思わず、ため息をついてしまう。

リサはやがて我に帰り、その石を大事に腰のポーチにしまった。そして、力強い眼差しで夢斗を見る。

「とにかく一度、レジスタンスの方々がいる、アジトに行きましょう。そこなら安全だし、何より夢斗さんの事についても、分かるかもしれないです」

彼女は言うなり、元気良く立ち上がった。金髪が日の光を受け、キラリと揺れる。驚き、未だ立ち上がれずにいる夢斗に、リサは笑う。

「きっと...いや、絶対、帰る方法が見つかりますよ！ 大丈夫です、なんとかなります！」

それはきっと、先程のように夢斗のことを気遣い、励ましてくれていたのだろう。精一杯の笑顔を作り、少しでも夢斗の不安を取り除こうと、努めてくれているのだ。

相変わらず、確証などない。根拠も何もないその笑顔は、空元気だとすぐに分かってしまう。

それでも夢斗はしばし、自身を見つめるその少女の姿に目を奪われていた。

薄暗い森に差し込む、かすかな日差しを受け、浮かび上がるリサの姿。

光と影の中で笑う彼女の姿に、なんだかひどく心が落ち着く。

その理由が夢斗にはいまいち分からない。だが、差し出された彼女の手、自然と自身の手が伸びた。

右も左も分からない、異国どころか「異世界」の地で、今はただ、この少女のことを信じてみようと思った。

森の中を駆け抜ける風が「ざあ」という音を広げる。

その柔らかい波音を切り裂くような、鋭い風切り音に、思わず動きを止めた。

夢斗、そしてリサまでもが立ち止まり、目を見開く。

「————痛っ！」

リサの手を取ろうと差し出した右手に、真っ赤な線が引かれる。そこからじわりと溢れた雫が、ポタリと音を立てて木の葉の上に落ちた。

手の甲に広がる激痛に、思わず身を屈める。見れば、何かによって皮膚がぱっくりと切り裂かれていた。

「ッ！？ 夢斗さん！」

リサの声に続いてまた一つ、風切り音が鼓膜を揺らす。そして、ザンツと音を立てて、すぐ目の前の地面に、一本の矢が突き刺さった。思わず動きを止める二人。

落ち着く間もなく、周囲から気配が近付いてくる。不穏な空気に、身体中から汗が吹き出た。身を固まらせたまま、二人は顔を上げ、周囲を伺う。

気が付いた時には、二人は取り囲まれていた。

周囲をぐるりと、毛皮を身にまとった集団が立ち並んでいる。皆、槍や弓を構え、切っ先を中心の二人に向けていた。

それは先程、戦場で戦っていたもう一つの勢力である。金属ではなく、骨や木材、皮を使った装備を身につけた、集団だ。

突然の危機的状況に、全身が緊張する。しかし、その面々の顔を間近で見て、息を飲んでしまった。

一見すると、それは「人」だ。だが、その顔付きや肉体的特徴には、大きな違いがある。

犬や猫、狼や狐——どの人物も全身に体毛が生え、それぞれの動物が持つ特徴的な耳や鼻、尻尾を持っている。顔付きも人のそれではなく、各々の動物の姿を形取っていた。

獣と人の融合した姿。それが牙をあらわにし、明らかな敵意を剥き出しにこちらを睨みつけている。

周囲から伝わる殺気に、思わず夢斗はリサに問いかける。

「お、おい、なんだこいつら！？」

見ればリサも額に汗を浮かべ、立ち尽くしている。

彼女の返答よりも何よりも、目の前に立っていた狼の顔が吠える。

「金色の髪、青い目——貴様、最近、ニンバムの元に出入りしている女だな」

男は槍の切っ先をリサに向けている。返答を待たず、さらに問いかけてきた。

「そちらの男はなんだ。貴様らの仲間か？」

わけの分からない夢斗を差し置き、リサは彼に返す。

「ま、待ってください！ 確かに、私はニンバムさんにお世話になっています。でも、彼は違います、無関係です！」

「無関係、ねえ。で、貴様らこんな場所で何をしている。我々のアジトでも探っていたか？」

その一言に合わせ、男達の殺気が圧を増したかのように感じた。ジリジリと距離を詰めてくる彼らに、あくまでリサは大声で告げる。

「ち、違います！ 私達は、たまたまここに逃げてきただけで、そんなこと——」

「なるほど。まあ、どちらにせよ女、貴様は『融和派』の一人だ。ちょうどうちのリーダーも貴様に話があると言っていた。おとなしく来てもらおう」

その一言に、息を飲むリサ。あいにく、横でうずくまっている夢斗は事態が飲み込めていない。

「お、おい、なんだよその『融和派』ってのは。それにリーダーって...」

だが、これにはリサではなく、槍を構える男が威嚇する。

「おい貴様！ 妙な動きをするんじゃない、じっとしている！」

びくりと反応する夢斗。今度は、全員の視線が夢斗に注がれている。

身に迫る恐怖からか、思わずその一言が飛び出てしまった。

「お、おい、さっきのあの魔法？ って言うので、何とかならないのかよ！ リサ！」

まずい、と思ったのだろう。リサもこちらを見つめ、声をあげそうになった。

もう一言、夢斗が混乱から声を上げようとした、その時である。

乾いた風切り音と共に膝に激痛が走る。放たれた矢が夢斗の足をかすめ、地面に刺さった。

瞬間、視界が歪む。手足が痺れ、平衡感覚が失われていく。

なんだって――顔を上げ振り返ると、自身に向けて矢を放ったであろう「獣人」の姿が見えた。

背の小さい、少年である。バンダナを巻き、矢を構えた彼は黒い毛を纏った犬の姿をしていた。大きな黄色い瞳が、こちらを見つめている。

あがこうにも、全身の力が抜けた。リサが叫ぶのが分かったが、その声すら遥か遠くから響いているようだ。

力なく倒れ、横たわる夢斗。

頬に伝わってきた生暖かい泥の感触すら、やがて消え去ってしまう。

霞む景色のその中で、こちらを不安げに見下ろすリサの顔が写っていた。

感触が消え、音が消え、光が失われる。

その中で最後の最後まで、自身を呼ぶ彼女の姿が残っていた。

再会

差し込んでくる茜色の光からすると、もう夕暮れ時なのだろうか。であれば、どこかから漂ってくる香ばしい匂いは、夕飯の支度でもしているのかもしれない。

夢斗はふっとそんなことを考える。

朦朧とした意識が、少しずつはっきりしてくる。寝起きのような感覚のまま、まどろみつつ、考えた

。寝る前に食べたのは、確かカルボナーラだったな――母がいつも作る、チーズを山のように入れた、即席飯だ。おしゃれでも繊細でもないが、そこには家庭の力強い温かさがある。

今、向こうは何時頃なのだろう。いなくなってしまった自分に、誰かが気付いて、騒ぎになっていたりするだろうか。案外、なんら変わらない日常が送られていたりするのだろうか。

意識がはっきりし、夢想から解き放たれる。頭を振り、しっかりと辺りを見渡した。

そこは、狭い檻の中だ。木で骨組みが組まれた、堅牢な檻である。硬い床にはせめても、と藁が敷き詰められ、微かに香っていた。

どこだここは――謎が解ける前に、すぐ横に座りうなだれている少女の姿が見えた。はつらつとした笑顔はない。疲れたように、自身の膝を抱きかかえ、伏せている。

「無事だったんだな」

夢斗の声に、少女は顔を跳ね上げた。金髪の上で茜色が滑るが、髪はどこかボサボサで整っていない

。リサは少し潤んだ目で、声を上げた。

「夢斗さん！ 大丈夫ですか！？」

「あ、ああ、なんとか」

大きな声に、檻の外の門番二人もこちらを睨みつけた。やはりそれは、獣の頭部と人間の肉体を持つ、獣人である。

まだまだ、この「悪夢」からは逃れられないのか――少しため息をつきつつ、己の手を見た。いつの間にか包帯が巻かれている。矢の傷の応急処置のようだ。

「どこなんだ、ここ。あれから、何が？」

相変わらず、疑問しか投げかけられない自分が、少し嫌になってしまう。しかし、今はとにかく空白の時間に何があったのかを、知るのが先決だ。

「ここは、レジスタンスのアジトみたいです。あの後、私も捕まっちゃって、二人してこの檻の中に...」

何だか聞き覚えのある単語に、ハツとして記憶を辿る。他ならぬ、リサ自身の口から聞いた言葉だ。

「レジスタンスって...それって確か、君が言ってた...」

そう、確かにリサが言ったのだ。こちらの世界に来る時は、いつも「レジスタンス」と行動をしている、と。なんでも賢人の集まりで、世界の仕組みについても、彼らから学んだ、と。

だが、それが本当だとすると、その賢人達が檻の外にいる獣人のことなのだろうか。森で襲われた、あの殺気だった姿を見ても、なんだか信じることができない。

少し考え、言い辛そうにリサは口を開く。

「はい...でも、この人達は、私がいつも行動している人達とは違う『派閥』で...私のことも、敵だと思ってるみたいです」

「派閥...そういや森で話した時も、ちょっと言ってたな。なんだい、その派閥ってのは」

こくりと頷き、会話を続けるリサ。

「レジスタンスは、獣人だけで形成されたグループなんです。ルガリア国の圧政に耐えきれない方々が奮起したことが始まりで、度々、彼らと激突している集団です」

「ルガリアっていうと、あの鎧を着ていた連中か。ってことは、俺が見たあれは、その激突ってことか」

「はい、その通りです。ただ、ややこしいのが、レジスタンスの中にも幾つかの派閥があって...簡単に

言うとは徹底抗戦を決め込んだ『武力派』と、話し合いによる解決を求める『融和派』に分かれてるんです」

じっくりとリサの言葉を聞いていると、なんだか少し分かってきたような気がする。

どういう経緯かは分からないが、ルガリアという国に虐げられた獣人達が奮起し、暴動を起こした。それはやがて一つの「組織」を作り上げ、大きな戦いへと発展する。

しかし統率された大国と違い、レジスタンスというのは言わば暴徒集団に他ならない。恐らくだが、血気盛んな面々が各々の敵意を胸に集まった結果だろう。

ゆえに思想を同じくする同志のはずが、気付けば組織内部ですらすれ違いが生まれた、ということなのかもしれない。

夢斗は外で聞き耳をたてる獣人二人を見ながら、声のトーンを少し落とす。

「そりゃあ、なんともお粗末なことだな。だけど、そういうことか。わかってきたよ。君がつるんでたのは――融和派ってことか」

夢斗の理解の良さに、少しリサは驚いたようだ。

「は、はい、そうです！ だから、私も彼ら『武闘派』にとっては、目の敵なんでしょうね...」

それで揃って連行された、ということなのだろう。

「こいつら、俺達をどうするつもりなんだ。鍋で煮込んでしまうのかな」

「そ、そんなの美味しくないですよ、絶対！」

皮肉のつもりの一言も、リサに思いの外まともに返されてしまった。彼女は不安げな眼差しで、しきりに周囲をうかがっている。

「なあ、君のあの不思議な力で、どうにかできないのか？ ハンマーを出したりしたんだから、こんな檻くらいなんとかならないのかよ」

「残念ですが、そのために使う腕輪も、取られちゃいました...」

その一言に夢斗も思い出し「ああ、そうか」と呟く。

リサはあの金色の腕輪の力で、魔法を使っていたのだ。それを獣人達が、みすみす奪わないわけはない。

完全に無力化された二人に、なすすべはなかった。

「どうなっちゃうんだろう、俺達。リサには悪いけど、こんなところ早く帰りたいよ。おとなしく明日を迎えて、いつも通り学校に行きたいところさ」

ため息をつく夢斗を、リサは不安げに見つめた。

学校に行ったから、何か楽しいことがあるわけでもない。毎日が無気力で、とにかく虚ろな日々が、だらだらと流れるだけだ。

ただそれでも、こんなひどい目には合わなくて済む。夢斗はリサほど、この状況を楽しめるような精神を持ち合わせてはいない。動物の姿を掛け合わせた獣人も、鎧と剣で武装した大軍も、そこに飛び交う魔法も、どれもこれも、ただただ「危険な存在」としかその瞳には映っていない。

厄介事はおめんだ――そんな、乾いた感想しか、今の夢斗は持ち合わせていなかった。

気まずい空気が流れる中、足音が檻へと近付いてくる。思わず身をすくめ、顔を上げる二人。

背の小さい少年が一人、やってくる。黒い毛を全身に纏った、犬の頭部を持つ獣人である。彼は何やら、ぼそぼそと牢番の二人に告げた。内容までは聞き取れなかったが、牢番達は檻から離れる。

不可解に思いつつも、檻越しに立つ少年を見つめた。大きな眼に黄色い瞳。犬の耳と尻尾を持つ彼は、じっとこちらを見ている。

その姿に夢斗は覚えがあった。すぐに思い出し、声をあげそうになってしまう。

あの時――ここに運ばれてくる直前、記憶の最後に映り込んだ少年である。夢斗が倒れるきっかけを作った張本人だ。彼の放った矢を受け、意識を失ったのである。

そんな苦い思い出のせいで、少しムツとした表情のまま彼を睨みつけてしまった。対する獣人の少年は、つぶらな目でじっとこちらを見つめている。

相対する二人を、横で不安げにリサも見ている。奇妙なことに獣人は何も言わず、ただ立ち尽くしている。

思わず夢斗は後ずさりしつつも、声を上げてしまった。

「なんだよ。俺に何か用か」

だが、すぐに返事はこない。ジッと、ただ静かに少年はこちらを見ている。

大きな黄色い瞳を見つめても、まるで意図は汲み取れない。

夢斗の姿が珍しいのか。それとも、やはり取って食ってしまおうかと考えているのか。

いずれにせよ、脳裏にはあまり良い想像は浮かんでくれない。

ため息をつく夢斗。固唾を呑んで見守るリサ。

そんな二人の前で、少年はようやく、口を開いた。

「———夢斗君？」

音もなく、熱もなく。

ただそれでも確かに夢斗の背筋を、電流のような鋭い感覚が駆け抜けた。

目を見開き、ゆっくりと顔を持ち上げる。隣で見ているリサも、言葉を失っているようだった。

目の前には変わらない少年の姿がある。微かに笑っているような、しかしどこか悲しそうななんとも言えない表情で、彼はこちらを見ていた。

聞き間違いか——そんな疑惑がさらなる一言で、打ち砕かれる。

「夢斗君...だよな？」

少年の口から発せられた言葉は、夢斗も聞き慣れた綺麗な日本語だった。

それは戦場の男達、そして二人を捕らえた獣人達と全く同じ。姿形は異形だが、それでもはっきりと理解できる言語で、問いかけてきている。

なぜ、彼らの言葉を自身が理解できるのか。それは分からない。

だが、そんなことがどうでも良くなるほど、さらに強い疑問が湧いてくる。

「なんだ、お前.....なんで、俺を知ってる」

眉をしかめ、睨みつける。その頬には一筋の汗が伝っていた。

知り合いなど「こちら側」にいるわけがない。

こちらの世界に来てから、まだ数時間しか経っていないのだ。奇跡的に「オーバー」と呼ばれる力を持つ少女・リサと出会っただけで、異国の騎士団や、戦争を起こす獣人に、知り合いなど一人もいない。

なのに目の前の彼は、はっきりと自身の名を呼んだ。彼は夢斗の反応を見て、思わず檻をつかみ、身を乗り出す。

「やっぱり...やっぱりそうなんだ！ 本物の夢斗君だ！」

目にキラキラと輝きが宿るのが分かる。弾んだ声と晴れた顔が、なんとも嬉しそうだ。しかし、あいにくだが夢斗達にとっては、彼の感情が良く分からない。眉をしかめながら言い捨てる。

「おい、なんだよ。なんでお前、俺の名前を...」

「夢斗君、僕だよ、僕！ 覚えてないの!？」

またも奇妙な言葉を投げかける少年に、思わず「なに?」と返してしまう。

「覚えてって...知るわけないだろう、お前みたいな」

「そんな...そんなはずは——！」

急激に勢いを失う少年。

やがて彼は「あっ」と何かに気づき、檻から手を離す。自身の掌、腕、胴体や足。身体中を見渡し、そして悲しそうに肩を落とす。

「そっか.....そう...だよな。分かるわけないか」

なにやら自分の態度が彼を傷付けてしまったようだが、夢斗としては別段、悪びれる気もない。

「ごめん...そう、分からないよ。これじゃあ」

少年の声が、どこか震えているのが分かる。それはどこか、夢斗とリサにではなく、自分自身に対して、論しているかのようだ。

しばらくの沈黙の後、思いを振り切るように目をこすり、彼は湧きあがろうとしていた雫を払いのけて前を見る。

「でも...でも、僕は知ってるよ。君を」

「ああ、そう。だけど何度も言うように、俺はお前のことを——」

「あの日、林間学校からの帰り...夢斗君が最後だったんだ。バスに乗るのは」

夢斗は彼の口から出た一言に言葉を止め、そして切り替える。

静かだ。今までどこからか聞こえてきていたはずの生活音が、まるで遠退いてしまっている。

「————なんだと？」

「君のクラスが、最初に出るはずだったんだ。だけど、夢斗君が忘れ物して、それを取りに行っている間に、他のバスから先に出発して.....結局、君のバスは最後に山を後にした」

ビリビリとした感触が、再び背筋を這い上がってくる。思わず一步を踏み出し、夢斗はついに吠えた。

それは忘れていない。

いや、「そこまで」は覚えているのだ。しっかりと。

「なんで...そんなこと知ってる。お前、なんで俺の.....あの日のことを知ってる？」

その質問に彼は答えない。代わりに、自身を落ち着かせながら言葉を続ける。

「皆、最初こそ騒いでたけど、バスが山道を走るにつれ、疲れて眠っちゃったんだ。それで気がついたら.....ねえ、覚えてないの？ あの日のこと」

獣人の少年が放った言葉にあえて返すならば、半分はイエス。そして半分はノーだ。

ハッターかとも思った。どうにかして夢斗の名前を調べ上げ、適当なことを言って懐柔しようとしているのでは、とも疑った。

だが、聞けば聞くほど、夢斗には分かる。彼の言葉は真実であり、そして————他ならぬ、夢斗の「過去」についての事実である、と。

なぜ、それを彼が知っている。

なぜ、こんな「異世界」で、そんな話が飛び出す。

混乱のせいで、身体中に汗が噴き出していた。夢斗は身を乗り出し、拳を握りしめる。

間違いない、それは————夢斗が失った「過去」の直前。

かつてのクラスメイト達が行方不明になった、あの林間学校のことを言っているのだ。

この少年は過去に起こった「神隠し事件」のことを言っている。

「あの時からだ...皆、いなくなっちゃったんだよ。だから今日までずっと、必死に探し続けた。でも、見つけられなかったんだ.....だから、僕自身、忘れかけてた。『こっち』に染まりすぎたせいで、記憶が消えかけてたんだ」

必死に、精一杯、訴える少年。

いつしか夢斗はゆっくりと、少年に歩み寄っていた。

一瞬、ほんの一瞬だが、何かが目の前の少年に「重なる」。

「森で君を見た時、あれって思ったんだ。良かった...君は『変わらず』にいたんだね...本当に、良かった」

また涙を浮かべる少年。グスグスと音を立て、泣き始めてしまう。

困惑しつつも夢斗は必死に、その姿を見つめていた。

そんな夢斗の脳の中で、何かが弾けた——フラッシュバック、とでも言うのだろう。意図しない記憶が無数に溢れ出し、まるで洪水のように脳裏に浮かんでいく。

昔——まだ、今の高校に転校する前のことだ。友人らの中に一人、読書が好きな少年がいた。まさに「本の虫」という言葉が似合う男子で、どんな時でも本を読んでいたのを覚えている。

一度、図書室で夢斗らが漫画を読んでいる横で、大編小説を読み終えた彼が泣いてしまったことがあった。

友人らは笑いの種にしたが、物語の中の出来事にすら大きく心を動かされ、ボロボロと泣く姿が今でも印象に残っている。

彼は泣きながら、いつもの独特のイントネーションであの「口癖」を呟いていた。

目の前の獣人はボロボロと涙を流し、それをぬぐいながら必死に告げる。体を震わせ、足元に雫が落ちても、言葉を絞り出して。

「生きてたんだ.....良かったね。良かったねえ、夢斗君」

夢斗の心の奥底で一つ、大きな扉が開く。

今まで封印されていた「鍵」が砕け散り、当たり前のように覚えているはずの過去が、ようやく鮮明に、戻ってきた。

目の前の光景と思い出が重なる――夢斗は呆然とし、汗一つかかず、呟いていた。

「――――光――か」

目を見開き、振り向きリサ。そして同様に大きく目を開け、言葉を失う獣人の少年。

一瞬の静寂の後、今度は夢斗が檻に捕まり、声を荒げた。

「光――……光――なのか、お前！」

その音を聞きつけ、守衛の二人が歩み寄ってくる。槍を突き出そうとしたが、少年が声を張り上げ、制した。

彼はゆっくり振り返り、また涙を浮かべ、問いかける。

「思い…出したの？ 夢斗君」

信じることはできない。だが、信じないといけない。

自身の記憶がそう訴えかけている。どういうことかは分からずとも、理論理屈を放り投げてでも、それが「真実」だとささやいている。

目の前に立つ獣人の少年を知っている。

名前は小泉 光――「神隠し組」にいた、本が好きな、感動屋の少年だ。

「お前…どうしたんだよ……なんで、そんな姿に！」

「分かるんだね？ そう、そうだよ。僕だ、コーイチだよ！」

汗が止まらない。だが、どんなに鼓動が加速しても、もはや心がぶれることはない。

姿形が違ってても、その眼差しと声はけっして忘れることはない。

ここで、横で見ていたリサがようやく口を開いた。

「どういう、ことですか？ 二人は、知り合いなんですか？」

呼吸を整え、夢斗も振り向く。

「ああ…すまない、俺も、どういうことかはさっぱり分からない。だけど、俺はこいつを知ってる。小泉 光――……俺のかつての、クラスメイトだ」

「かつての…それって一体？」

あいにくリサはまだ、夢斗の素性すら良く分かっていない。彼女には申し訳ないが、夢斗は興奮し、汗を浮かべ再び光――を見る。

クレイドル、そしてオーバー――繋がりかけていた線に、新たな線が絡みつき、もてあそぶ。夢斗は拳を握りしめたまま、全身がぐっしょりと濡れているのを感じていた。

迷い込んだ二人と、獣人の「同級生」。奇妙な三人はしばしその場に立ち尽くし、加速する自身の鼓動を感じていた。

超える者「オーバー」

獣人達の住居は、どうやら岩場を縦にくり抜いた巨大な「穴」の中に形成されているらしい。元々あったものなのか切り開いたのかは定かではないが、蟻の巣のように縦穴の側面に枝分かれした部分を、住居スペースとして利用している。

檻から出され、二人が連れて行かれた場所は大きな食堂であった。中央に木製のテーブルがどかりと置かれ、無数の椅子が並べられている。壁際に石窯や調理場が見え、ここで食事をとるらしい。

椅子に座らされた二人の前に、獣人の少年――かつてのクラスメイト・光一が、大きめのカップを二つ、持ってくる。中には何やら紫の液体が揺れていた。

「はい、どうぞ。熱いから気をつけてね」

「お、おう。ありがと」

嬉しそうにカップを差し出す彼に、礼を言う。だが、この部屋には彼だけでなく、他の獣人達もたむろっていた。皆、先程から夢斗とリサを見つめ、何やらヒソヒソと話している。気にはなったが、とにかく二人は目の前のカップに視線を落とす。

毒々しい色だが匂いは非常に甘い。躊躇する二人に隣に座った光一が勧める。

「森で取れる『魔女苺』のココアだよ。大丈夫、毒はちゃんと抜いたから。美味しいよ」

ニコニコしながら語る彼には悪いが、とても毒がないようには見えない。だが、かつての友人の言葉を信じ、一口だけ飲み込む。

まさに口の中で甘さが弾けたかのようだ。これがその「魔女苺」とやらの甘味なのだろうか。とにかく、一瞬で虫歯になりそうなほど甘い。

「うっお、あつま...」

まずくはないが、ある意味強烈すぎて夢斗は受け付けない。だが、ちびちび舐めていると、不思議と体に活力は戻ってきたような気がした。

その姿を見て、嬉しそうに光一が笑う。

「あははは、そっか。夢斗君、辛党だったもんね。思い出すなあ、みんなでカレー屋行くと、どれだけ辛いのが食べれるかって、馬鹿やってたよね」

思い出語りをする光一は、実に嬉しそうだ。姿形こそ獣人だが、その笑顔と笑い声はまるで変わらない。

夢斗もまた、記憶を鮮やかに蘇らせていた。

「ああ。そういや、そんなこともしてたな。お前ら、いつも俺のカレーにこっそり辛子足しやがって」

「気付かない夢斗君が迂闊なんだよ」

純朴な感動屋に見えて、意外とこの少年は意地の悪いところもある。

なぜだろう、彼に会ってからそれこそ、当たり前のように過去の出来事を思い出せるのに、今までは霞がかかったかのように、記憶を引き出すことは困難だった。

不可解に思いつつも反対側を振り向き、言葉を失う。

そこには、甘すぎるココアをグビグビと飲み干し「プハーッ」と息を吐き出すリサがいた。彼女は豪快にカップを置き、口を拭いている。

ぎょっとし、夢斗は声を上げてしまった。

「ま、まじか...一気かよ、これ」

リサは嬉しそうに笑い、頷く。

「スウィート！ すっごいですね、これ。物凄く美味しいです！」

これも魔女苺の力なのか、はたまた彼女が劇的な甘党なのか。とにかく、この一杯でリサの活力も一気に戻ってきたらしい。

それを見て、また嬉しそうに光一は笑う。

「そっかあ、良かったねえ。お口にあったみたいで、何よりだよ。いっつも狩りで疲れた時は、これに限るんだ」

また一口、ドロリとした液体をなめつつ、夢斗は横目に光一の姿を見た。

改めて、間近で見ても不思議な光景だ。犬と人を掛け合わせたようなこの少年の上に、それでも確かに、かつてのクラスメイトの笑顔が重なる。姿形は全く異なっている、これが友人である小泉 光一だと、根拠も何もなくても、理解できる。

一体どういうことなんだ――不思議な眼差しを浮かべる夢斗に、彼は言う。

「でも、本当に驚いたよ。こんなところで夢斗君に会えるなんてね。それに、向こうの世界から来たばかりだって言うしさ」

夢斗がどういうわけか、異界・クレイドルに来てしまったこと。そこで王国・ルガリアとレジスタンスの戦争に巻き込まれたこと。リサに命を救われたこと。

それら全てを、檻の中で怒涛の勢いで話し、伝えただけだ。

結果、光一は牢番の二人を言いくるめ、夢斗達を解放し、ここに連れてきたのだ。

「でも、本当に覚えてないんだね。あの日のこと」

「ああ。今まで、カウンセリングもしてみたけど、何も思い出せない。お前が言ったように、バスに乗っていたことまでは覚えてるんだ。だけど、その先は...」

この一言に、リサも言葉を返す。

「夢斗さんにそんな過去があったなんて...大変だったんですね、今まで」

「まあ、ね。ただ、大変だったかどうか、覚えてないんじゃないよ、世話ねえよ」

心配してくれるリサに、苦笑してしまう。実際、失った記憶が「どういうものだったのか」が分からないのだから、仕方がない。

これに対し、光一は「う～ん」となる。

「僕もあの時のことは、うろ覚えなんだ。皆でバスに乗って、そのあとすぐ僕も寝ちゃったんだ。で、目が覚めた時には、周囲から悲鳴が聞こえてさ」

「悲鳴だって？」

こくりと力強く頷き、光一はさらに続ける。

「何が起こったのか、まるで分からなかったんだ。だけど、ドオンって音でバスが揺れてそのままひっくり返ったんだよ。事故にあったのかと思って、気が付けば外に放り出されてた」

身振り手振りを交え、必死に説明する光一。彼もまた、かつての「神隠し」の内容を思い返しているのだろう。

夢斗だけでなく、リサまでも自然と聞き入る。

「頭がクラクラして、なんとか体を起こしたんだ。周りは木や植物に囲まれてて、薄暗くって――そうこうしていると、そこら中から悲鳴が聞こえてきてさ。『逃げろ』って声も聞こえて、わけも分からないままとにかく皆の影を追って、森の中に入ったんだよ」

「なんだそりゃあ...バスが事故にあったってことか。でも、一体皆は何から逃げてたんだ...」

「う～ん、それが僕にもよくは分からなかったんだよ。あの時は、事故のショックで頭がクラクラしてて、断片的にしか覚えてないんだ」

光一の症状は、どこことなく夢斗のそれに似ていた。もっとも、夢斗の場合は断片的どころではなく、はっきりと事故にあった直後の記憶が消え去っている。

「僕が覚えているのは、森を走っていて、何かの気配が後ろから近付いてくるのを感じたんだ。物凄い速さで、足音と唸り声をあげながらね。慌てて逃げようと思って茂みを超えたら、崖になっててさ。真下の川に落ちて、意識を失ったんだ」

この言葉にリサが口を開いた。

「足音と唸り声...何だか怖いですね。何かの動物でしょうか？」

「今となっては、分かんないなあ。でも、その後なんだ。目覚めた時には、僕はレジスタンスの皆に取り囲まれてた」

唐突な登場人物に、夢斗は少し息を飲む。

「何だって...おい、それって...」

「うん。僕も『こっち』に来ちゃったんだよ。それ以降は元の世界に戻るために、レジスタンスの一員として今日まで動いてきたんだ。ただ...気がついた時には、こうなっちゃってたんだけどね...」

言いながら、光一は自身の体を見渡す。

少しだけ声を荒げ、夢斗は問いかける。

「じゃあ、お前が気がついた時には『ひとりでに体が変化してた』ってことなのか？ な、何でもまた、そんなことに」

「僕もはっきりとは分かんない。ただ、レジスタンスの人達曰く、この世界に漂う『魔力』が、僕の体に作用した結果じゃないか、って」

たまたま、リサも問いかけた。夢斗よりも「魔法」、そして「世界」に馴染んでいる彼女ならではの問いかけだ。

「魔力が肉体を変化させる――そ、そんなことがあり得るんですか？ でも、私はもう何度もこちらに来てるけど、別段変化はないし...」

自身の掌を見つめるリサ。夢斗と違い、彼女はもう何度もこの異界・クレイドルに赴いているはずだ。ならば、そろそろ何か身体に変化が現れるということなのだろうか。

光一はしばしリサの姿を見つめ、何かを考えているようだった。だが、やがて冷静に告げる。

「ごめん、それもまだ分からないんだ。だけど、もしかしたらそれは、君が『オーバー』であることが、理由なのかもしれない」

ハッと、顔を上げるリサ。再び登場したその単語に、夢斗も顔をしかめる。

「お前らも知ってるのか。その『オーバー』っていうのを」

「うん。なにせ、こっちの世界では有名だよ。『世界の境界を越える者』として、何度も、歴史の中に登場するらしい。もっとも文献にしか登場しないから、人によっては作り話だって決めつけてる人もいるし、もっと飛躍して『神の使い』だ、って言う人までいる」

「そりゃあ、随分話がでかいな。神様の使って...」

思わずリサを見ると、彼女は手で大きく「バツ印」を作って首を振った。

「ノーノー！ わ、私、神様は信じてますけど、会ったこともないし、使いだなんて...」

「だ、大丈夫。分かってるから」

思わずなだめる夢斗に、光一は少しだけは笑う。だが、再び冷静な眼差しを取り戻し、続けた。

「とにかく、こっちの世界の人達も『オーバー』って言うのは、特別な力を持つ、ってことくらいしか知らないんだよ。だからこそ、本物が現れたってことに、レジスタンスの皆も気が気じゃないんだ」

言われて、一度食堂の中を見渡す。確かに、遠くでひそひそと話している獣人達は、先程からこちらをチラチラと見ている。しかもその視線はよく見ると、夢斗よりもリサに注がれているようだ。

居心地の悪さを感じる夢斗。妙にかしこまり、唾を飲み込むリサ。

そんな二人に光一も深呼吸した後に、どこか重々しいトーンで告げる。

「もっとも、探してたって意味では、僕も一緒さ」

その言葉の真意を問いかける前に、勢いよく食堂の扉が開く。振り向くと、鎧を着込んだ大柄な獣人が3名、部屋にずかずかと入ってきた。

先頭の一人、赤毛の狼が大声で言う。

「コーイチ、勝手に牢から捕虜を連れ出すとは、どういうことだ？」

彼らは座っている三人の元に歩み寄り、高らかに見下ろす。その威圧感に思わず夢斗とリサはたじろいでしまった。

光一はすぐに席を立ち、目の前の巨軀を見上げ、言い返す。

「ごめんよ。二人が衰弱しているから、せめて何か口にした方がいいと思って」

「ふんっ、どこの馬の骨とも分からん輩に貴重な物資を渡すなど、愚行だな。木苺一つ、麦一粒とて惜しいわ」

随分な言われようである。夢斗は不快感をあらわにしつつも、その物々しい雰囲気にも飲まれてしまっていた。リサも座ったまま目を見開き、警戒している。

これに対し、光一はやはり毅然と切って返す。

「そうだね、確かに...ごめんなさい。軽率だったよ。だけど、これから彼らには色々話してもらわないといけなからさ。なにせ『オーバー』として、聞きたいことは山程あるでしょう？」

その「オーバー」という単語が出た瞬間、食堂が少しざわついたのを感じた。目の前に立つ三人にも、明らかに動揺の色が見える。

どうやら光一が言った通り、こちらの世界にとって「オーバー」は特異な存在なのだろう。「確かに、な。ちょうど、その『オーバー』に用があったのだ。加えてその娘は『融和派』の手の者らしいじゃないか。リーダーがたっぷりと聞きたいことがあるそうだ。おとなしくついてきてもらおう」名指しされ、リサはびくりと背筋を伸ばした。

目の前の三人は皆、手に槍を携えている。対してこちらは丸腰。リサが魔法を使うための腕輪すら、奪われたままである。

抵抗することはできない。たとえ武器を持っていなかったとしても、屈強な男たちには、それこそ腕っ節のみで叩き伏せられてしまいそうだ。

そんな状況を打破したのは、背後から聞こえた小さな声である。

「大丈夫、なんとかするよ。今はおとなしく、したがって」

光一が夢斗とリサに囁く。振り返ると、彼は力強い眼差しで頷いた。

何が何だか分からず、今度は互いの顔を見合わず夢斗とリサ。不安の色は隠せない。だがそれでも、今の二人には選択肢は残されてはいなかった。

おとなしく獣人達に連行される夢斗、リサ。食堂を出て足早に通路を進む。途中、レジスタンスと思われる獣人達と何人もすれ違ったが、その度に奇異の目で見られた。必死に視線をそらし、とにかく目の前を歩く男の背中だけを見つめた。

すぐ後ろに、光一がついてきてくれている。彼も真剣な表情で前を見たまま、黙々と歩いていた。

階段を上り、やがて重厚な扉の前にたどり着く。獣人の男性は荒々しくノックし、中にいる人物に告げる。

「リーダー。森で捕らえた2名を連行しました」

それに対し、中からは男のものと思われる声が返ってきた。獣人は扉を開き、夢斗達を睨みつける。

「二人共、入れ。それにコーイチもだ」

この一言に思わず光一が「僕も？」と問いかけた。だが、獣人は仏頂面で乱暴に首を縦に振る。

言われるがまま光一が前が出る。だが、夢斗達はどうしても一歩を躊躇してしまう。先程の言葉が正しいならば、この部屋にはレジスタンスのリーダーがいるはずだ。

獣と人が混じる武装軍団の長――一体、どんな怪物が現れるのか。それを思うと、どうしても身がすくんでしまう。

部屋に入る直前、コーイチが振り返り少しだけ笑う。

「大丈夫、緊張しないで。彼らだって、そこまで乱暴者じゃないよ。ましてや、リーダーは良い人だから」

そうは言っても、どうしても夢斗は信用できない。だが、こうして部屋の前でだんまりを決め込んでいても始まらない。今はとにかく、この流れに従うのが賢明なようだ。

部屋の中に三人が入ると、すぐさま扉が閉められた。大きな音に身がすくんだが、それ以上に、飛び込んできた部屋の内装に動きを止める。

なんとも洒落た空間だ。岩をくり抜いた洞穴だというのに赤い絨毯がひかれ、落ち着いた色の木材を使用した家具が並ぶ。真正面の壁には色あせた地図のようなものが飾られ、その前に一つ、大きなテーブルが置かれていた。

そのテーブルに、レジスタンスの「長」がいた。

「やあ、コーイチ。ご苦労。二人を連れてきてくれたんだね」

聞こえてきた声に、夢斗とリサは思わず驚いてしまう。それは透き通った若い男の声だ。

椅子に座るのはやはり獣人だが、比較的その姿は人間に近い。深紅の短い髪は光沢があり、サラサラしているのが分かる。大きな耳は猫のそれで、ピンと上を向いていた。

右目は青、左目は緑。どちらも瞳は猫と同様、縦に鋭い。その顔立ちは随分と若々しく見えた。

口元にはなぜか、金属製のマスクのようなものはめていた。彼は目元を歪ませ、にっこりと笑いかけてくる。

対して、光一も笑って返した。

「いえいえ、とんでもない。連れてきたのは、外の三人だしね。僕は何も。魔女苺使ったの、怒られちゃった」

「それは災難だったね。まあ、ここには揃いも揃って甘党が多いからね。バレたのが運の尽きさ」
その一言で痛快に笑う「リーダー」。そして光一。だがあいにく、あっけにとられたまま、夢斗とリサは身動きが取れない。思ったよりもずっと和やかな雰囲気、むしろ飲まれてしまっていた。
男に手招きされ、二人は光一と共に近くに歩み寄る。「リーダー」はテーブルに手を置いたまま、軽く頭を下げた。

「初めまして『異界』の人。会えて光栄だよ。僕はグレン。このレジスタンスのリーダーを務めている」

思わず二人も頭を下げ、名乗った。リーダー・グレンは少しだけ笑う。

「ユメトに、リサか。素敵な名前だね。うちのメンバーが、荒々しいことをしてしまい、申し訳ない」
「あ、いえ、そんな...」

予想外の丁寧な口調に、夢斗も思わず冷静に返してしまった。挙動不審な二人を見て、グレンは首をかしげる。

「どうかしたかい、二人共？」

これには、おどおどしつつもリサが答える。

「あ、いえ...ま、前々から『武力派』については色々聞いていたので...てっきり、もっとリーダーの人は、おっかない人なのかと」

これを聞き、また声を上げて痛快に笑うグレン。彼は優しい眼差しのまま、二人に返した。

「それはそれは、僕も随分と怖がられていたんだね。まあ、確かにここ最近、物騒な作戦も多かったし、そう思われても仕方ないかもだけど。あ、聞き取りづらかったら、申し訳ない。ちょっと訳あってマスクが外せないんだ、すまないね」

あまつさえ気を使われ、今度はリサが「いえ、大丈夫です」と改まってしまった。なんだか、ライオンや虎でも出てくると思い込んでいたせいか、随分と拍子抜けである。

部屋の空気が和らいだところで、グレンは「さて」と前置きを告げ、本題に入った。

「コーイチから、話は聞いているよ。『融和派』であり『オーバー』であるリサ。そして、君は彼の知り合い、ということでもいいのかな？ ユメト」

問いかけられ一瞬たじろぎはしたが、夢斗は首を縦に振った。なんだかグレンも満足そうである。

「そうか、うん、なるほどね。コーイチの思った通り、ということか。何よりだ」

「何より...それはどういう...」

「いやあ、コーイチの悲願が叶いそうってことさ」

思わず夢斗はすぐ横に立つ光一の顔を見る。なんだか彼は、どこか哀愁の漂う表情を浮かべていた。「彼にはここに来てから、僕達の協力をしてもらっている。狩りの手伝いや道具の調達。彼は博識だから、様々な場面で役に立ってくれている」

グレンにとっての光一の評価は随分と高らしい。しかし、そんなわかりやすい賞賛を受けても、光一の表情は晴れない。

「彼と初めて出会った時は、驚いたよ。見慣れない姿で、我々とは違う言語を話していたから意思の疎通も取れなかったしね。今でこそ我々と同じ格好はしているが、彼もまた君らと同じ世界から来た存在だと、今なら良く分かるよ」

光一と初めて出会った際の思い出語りをするグレン。その内容は、光一本人の口から聞いていた事実と、そこまで差異はない。

しかしただ一点、夢斗は彼の言葉に疑問を抱いてしまった。

違う言語を話していた、とはどういうことなのだろうか。夢斗やリサは、こちらの世界に来てから、今まで通りの言葉を話している。そして、この世界の人々もどういうわけか、理解できる言語を喋っているはずだ。もちろん、それは光一も同じはずなのだが。

そこまで考えはしたが、グレンの言葉に耳を傾ける。

「コーイチは君のような存在を探し続けていたんだよ。我々と共に行動しながら、各地で情報を集めてね」

「俺を探していた、だって？」

再び光一を見ると、ようやく視線がぶつかった。大きな眼が、どこか潤んでいるようにも見える。

じっと見つめる夢斗に、かつてのクラスメイトが答える。

「ずっと探してたんだ。あの時、散り散りになった皆を。だけどここの数ヶ月、誰とも出会えなかった」
その一言で、彼の心中を察する。思わず声が漏れそうになった。

小泉 光一というただの学生が、なぜこんな場所で弓を取っていたのか。彼の口から語られたそれこそが、答えだったのだろう。

この数ヶ月間、探していたのだ。夢斗が失われていた「記憶」を求めていたように、彼もまた失った「友人」を。

あてなどなかったのだろう。ここがどんな世界で、どんな歴史をたどり、どんな人々が生きているのか。その何一つが分からない場所で、どこにいるかも定かではない「友」を探す。

数ヶ月とはいえ、それはいったい、どれほど途方もない日々だったのだろう。それを思うと、夢斗は言葉が出ない。

記憶を置き去りにし、たった一人向こうの世界に取り残された時、夢斗には自身が一人になってしまったという虚無感だけがあった。

だがそれはきっと、光一もまた同じだったのだろう。

今まで、明るく笑うかつての彼の姿に隠れて、そんな影の部分が見えていなかっただけだ。

「僕のこの体がだんだん変化して、こっちに染まって行って...そんな中で、僕の中の記憶も、同じように薄くなっていったんだ。けどあの時、夢斗君を森で見つけた途端、記憶が溢れてきて。自分でも不思議で、わけがわからなかったよ」

まるでその現象は、先程の夢斗のそれに似ていた。

今となっては確かに思い出せる、光一との思い出。だがそれが、今まではひどく霞がかり、記憶の海に沈んだままだったのだ。

その不可思議な現象について、グレンが口を開く。

「我々も最初は信じられなかったが、あながち『ない話』ではないと思っている。別の世界——そして、そこからやってきた、別世界の人々。おそらくだが、生きている世界が異なることで、別の世界に移動した後、その弊害のようなものが体に出るのかもしれないね」

その口ぶりからすると、やはり「異世界」という概念は、彼らにもまだ解明しきれていないらしい。あくまで今まで語ったことも、限りなく可能性の高い「憶測」でしかないのかもしれない。

それでも夢斗にとっては、随分と状況が見えてきだしていた。それを察したのかグレンはまた優しく笑い、マスク越しに言う。

「だから良かった。まだ一人だが、それでも君という、かつての仲間に出会えたんだから、コーイチにとって少なからず『希望』が見えたようだ」

突然、予想外の言葉を投げかけられ、戸惑ってしまう夢斗。なんと返すべきか分からず、視線が泳いでしまう。

希望だって、この俺が？ ——ただ、ただ、巻き込まれ、たどり着いた世界だった。そして、ただ偶然にリサに出会い、ここまでやってきただけ。それだけのことだったはずだ。

そんな自分でも、知らず知らずのうちに光一にとっての「希望」たりえた。再び少年を見つめると、彼はいつも通りの笑顔を浮かべていた。

「本当に良かったねえ、夢斗君。また会えて」

なんだか、その笑顔が心を締め付ける。

追い求めていたはずの「過去」がいざ目の前に現れたとしても、不思議と夢斗は素直になることができずにいる。

ぎこちなくも、ただ「ああ」と頷くことしかできなかった。

ここでグレンは「さて」と話題を切り替える。自然と、三人の視線は彼に向けられた。

「実は、君達をここに呼んだのは、挨拶をするためだけではないんだ。もう一人、紹介したい奴がいてね」

「もう一人？ それって...」

「なあに、緊張しなくていいさ。僕の古くからの、腐れ縁でね」

不思議そうに首をかしげる光一。どうやら、これは彼にとっても予想外の展開らしい。

不可解に思う三人のちょうど背後で、その「もう一人」の声が響く。

「腐れ縁、とは随分な言われようですね」

驚き、慌てて振り返った。

見れば、いつの間にか三人の背後に一人の男が立っている。例に漏れず獣の頭部を持つ獣人で、垂れた大きな耳は「兎」のそれだ。どこかおっとりとした表情を浮かべる彼は、ゆったりとしたローブに身を包み、杖を携えている。

いつの間に一部屋の扉が開く音は聞こえなかった。ましてや、人の気配も感じなかったのである。まるで、いきなりそこに現れたかのようだ。

たじろぐ三人に構わず、グレンは彼に言い放つ。

「遠いところ、わざわざご苦労。さすが昔からの仲だ。それに時間にも遅れてない。几帳面は変わらないなあ」

どこか嬉しそうに語るグレン。兎耳の男も、ため息をつきつつ笑っていた。

と、ここで驚き、リサが声をあげる。

「ニンバム...さん？」

「リサさん、こんばんは。まさか、こんなところで会うなんて。世界は狭いものですね」

どうやらリサ、そしてこの獣人の男・ニンバムは互いを知っているようだ。夢斗は恐る恐る問いかける。

「な、なあ、知り合いか？」

「イエス！ 私がいつもお世話になっている『レジスタンス』の方ですよ。なんで、あなたがここに？」

どうやら、ここへ来る前に話に出ていた人物が今、目の前にいるらしい。

そういえば、リサが世話になっているレジスタンスは「武力派」ではなく「融和派」と呼ばれる集団だったはずだ。とすれば、このニンバムこそ、その集団の一員なのだろう。

だがそこまで理解し、夢斗は首をかしげる。

そもそも二派は互いに意見がすれ違い、同組織から分離したのではなかったのか。いわば、互いに犬猿の仲であるはず。

なのに、その「武力派」の長であるグレンと、「融和派」のニンバムが知り合いで、当たり前のように出会っているとは、なんだか奇妙な図式だ。

これには、ニンバムが優しい表情のまま答える。

「他にもない、この『腐れ縁の友』からの呼び出しでしてね。なにやら、すごい客人が来たとのことで、お邪魔させてもらったのです」

その視線はやはり夢斗に向けられる。思わず身をすくませたが、ニンバムは優しく言う。

「初めまして、ニンバムと申します。以後、お見知りおきを」

グレン同様の丁寧な挨拶に、慌てて頭を下げる。彼は続けて光一にも頭を下げた。

「あなたが一足先にこちらに来た方ですね。初めまして」

「は、初めまして！」

礼儀正しく大きな声で返す光一。なんだかニンバムも嬉しそうである。

「向こう側の人々は皆、礼儀正しいのですね。こちらの荒くれ者達とは大違いですよ」

この一言に、光一が声を上げる。

「向こう側...あ、あなたは、僕達のいた世界のこと、ご存知なんですか？」

「ええ。とはいえ、私も実際に赴いたことはないのですがね。伝承を調べ、かじった程度です」

彼の返答に、リサが興奮気味に続く。

「ニンバムさんは、すごい物知りなんですよ！ 私に魔法の腕輪を作ってくれたし『オーバー』のことも教えてくれたんです」

リサの放った単語にその場の誰もが反応した。真っ先に声をあげたのは「武力派」の長である、グレンだ。

「コーイチの友人であるユメトの出現、もちろんそれは我々にとっても喜ばしいことだ。だがそれと同時に、リサー—あなたにも、お会いしたかったんですよ」

驚き、振り返るリサ。青色の目がパチパチとしきりにまばたきしている。

「わ、私ですか？」

「そうさ。なにせ君は、向こうの世界から来ただけじゃあない。世界を渡り歩く旅人『オーバー』だというじゃないか。だから、こうして専門家を呼んだんだ」

どうやら、グレン達が用があるのは夢斗だけではないらしい。

ニンバムがため息を漏らす。

「やれやれ、私は便利な知識箱じゃありませんよ、グレン」

「よく言うよ。昔から本さえあれば、何時間でも部屋にこもっていた賢者様だというのに」

冗談のように互いを笑いあう二人。やはり、どうもこの二人が「敵対勢力」というイメージが湧かない。古くからの悪友、といった感じだろうか。

混乱する三人に、優しく、ゆっくりとした口調でニンバムが説明する。

「惑わせてしまって、申し訳ありません。ただ『異界』からの訪問者が二人。しかもそのうち、一人が『オーバー』であるということは、私にとっても興味深かった、というのが本音です。そのため、少しばかりお話を聞かせていただきたく、馳せ参じました」

改めて頭を下げるニンバム。三人も再び、会釈をする。

これに対し、グレンが「ほらみる」と声を上げた。

「やっぱり、君だって興味津々なんじゃないか。分かりやすいなあ」

「グレン、茶化すのは後にしてくださいよ。話が進みませんから」

悪友を制し、言葉を続けるニンバム。

「ユメトさん、リサさん、そしてコーイチさん。お手数ですが、あなた方がこちらに来ることになった『経緯』を、改めてお聞かせ願えませんか」

突然の申し出に一瞬、三人は困惑してしまう。互いの顔を見合わせ、黙り込んでしまった。

未だに、このニンバム——いや、グレンという男の真意もいまいち分からない。ただ、根拠はないが二人から危険な空気は感じない、というのも事実だ。

警戒していても事態は一変しない。そう判断したのか、三人はたどたどしく、少しずつではあるが事態を説明しだした。

ニンバムは三人の言葉をじっくり、丁寧に聞いていた。喋る人間の目を必ず見つめ、頷きながら。質問一つせずに、ただ黙って。

彼が再び口を開いたのは、光一が「以上です」と付け足した、後であった。

「なるほどなるほど。実に興味深い。それぞれ全く別の経緯で、しかしそれぞれがこのクレイドルにやってこられた、と」

かつての事件の中でクレイドルに迷い込んでしまった光一。「オーバー」という特殊な才能がゆえに、世界をまたいでしまったりリサ。

そして、自身でもわけがわからないまま、こちらの世界へとやってきた、夢斗。

一同を見渡し、さらにニンバムは続けた。

「この世界・クレイドルには、過去から度々、異界からの来訪者達が登場します。我々のような『学者』からすれば『別世界』という存在は、おとぎ話でもなんでもなく、一つの可能性として、長年注目していたのです」

ニンバムはなおも顎を撫でながら、続ける。

「もっとも、多くの学者、魔法使い達は確証のない伝説だ、と一蹴するのですがね。ただ、私はそうは思えず個人的に研究を続け、そしてつい最近、リサさんと出会ったのです」

彼の視線がリサと交わる。夢斗達も彼女を見つめた。

金髪・碧眼の少女は、戸惑いつつもこくりと頷く。

彼女の反応に、ニンバムは笑った。

「もちろん、いきなり全てを信じることはできませんでしたが、彼女の格好や様々な『特性』を見るに、彼女が別世界から来た可能性を見出したのです」

このニンバムの説明に、椅子に座ったままのグレンが口を開いた。

「『オーバー』が現れた、という事実を彼の口から聞いて以来、機会があればお会いしてみたいと思っ

ていたんだよ。だから、こうして話ができ、光栄の至りだ」

丁寧な口調のグレンに、思わずリサも頭を下げた。

しかし、三人はやはり混乱してしまう。「武力派」と「融和派」という二つの対立組織にありながら、その主要人物同士がこうも互いに密接な情報共有をするものなのだろうか。

グレン、ニンバムという二人の関係性がいまいち見えてこない。

そしてこの疑問に対し、リサが臆さず前が出る。

「お二人は、敵対している関係じゃないんですか？ 『武力派』と『融和派』で行動してるんでは…」

これに答えたのは、グレンである。

「元々、我々『武力派』は血気盛んな奴らが残った結果だからね。もちろん、僕も今の王国のやり方には納得できないし、憤りも感じている。だけど、手段は違えど腐れ縁ってのはなかなか切れないものだよ」

ニンバムも頷き、続いた。

「我々はあくまで、王国に対峙する『手段』が異なるだけですからね。もっとも、組織の根本の思想が異なる以上、共に事に当たれば摩擦が生じるので、こうして別々に行動しているのです」

王国という巨大な勢力に対しての思いは同じ。されど、そこに訴えかける手段が違う、というだけのことなのだろうか。

さしずめそれは「戦友」という、特殊な間柄だからこそ、ということなのかもしれない。

グレンは椅子に座り直し、少し落ち着いて告げる。

「そういう意味では君らに手荒な真似をしてしまい、悪かった。ああいう連中が集まってしまってるので、僕も統率するのは一苦労なんだよ」

頭を下げるグレンに、どう言って良いか分からない。リサはただ「はあ」と声を漏らすだけだ。

戸惑う一同の中で、ニンバムは顎を撫でながら推測を続けていた。

「しかし、実に奇妙な話だ。リサさんの『オーバー』としての力はともかく、コーイチさん、そしてユメトさんがこちらに来た『理由』が分からない」

おっとりした眼差しが、どこか真剣な色を帯びているよう見える。恐らく、今ここにある手がかりを、必死に繋げようとしているのだろう。

「ユメトさんとコーイチさんが、かつての同朋であるということも奇妙な偶然ですね。お二人とも、何かこちらに来た心当たりは？」

唐突に問いかけられ、言葉を失う二人。しかし夢斗は素直な気持ちを伝える。

「いや、あいにく何も……強いて言えば、リサの持っていた『石』を見ていたら、ここに」

この一言に皆が反応する。特にリサは「そういえば」と思い出したようだ。

「石、ですか？ それは一体、どんなものでしょう」

「え〜っと、確かなんたらを倒した時の核？ だったか…」

「ゴーレムの心核です！ 私が失くしたのを、たまたま夢斗さんが拾ったんですよ」

すかさず、リサは夢斗の曖昧な記憶を補完してくれた。思わず「ああ、そう、それ」と付け加える。

ニンバム、そしてグレンが何かに気づき、声を上げる。

「それは興味深い。今、どこに？」

「我々が荷物を預かってしまっているんだ。すまない、至急持ってこさせよう」

グレンの一声で、外に待機していた扉番が大急ぎで荷物を持ってきた。少し煤けた麻袋に、リサが歓喜の声を上げる。どうやら、彼女が携帯していたものらしい。

中を探ると、すぐにあの「石」が出てきた。彼女が戦ったという岩人形・ゴーレムの体から取り上げた、心核と呼ばれる物体である。

その価値は今の夢斗には分からない。かすかな照明の光を受け、石は青色に輝いている。

ニンバムは思わず顔を近付けた。

「これは立派な心核ですね。本体のゴーレムも、さぞ大きなものではなかったのでしょうか」

「はい！ すごかったです。ニンバムさんの作ってくれた『召喚器』がなければ、やられちゃったよ」

リサは麻袋の中から、あの金色の腕輪を取り出しはめ直す。どうやら、この特殊な腕輪を作ったのも

ニンバムらしい。

ニンバムはしばらく石を眺めていたが、やがて夢斗や光一を見つめ、告げた。

「ゴーレムというのは、魔力によって生まれる『魔導生物』です。生殖というルートを持たず、土地や環境によって生まれる種類も違う。そんな生物の心臓とも言えるこの石は、言わば魔力の結晶そのものなのです」

続いて、ニンバムの視線は夢斗に向けられた。

「あなたはこれを眺めていて、そしてこちらに来られた、と？」

「あ、ああ。そうだよ。でも、別に特別なことをしたつもりはない。ただ、ベッドで横になって、見ていただけだ」

大きく、しっかりと頷きながらも、ニンバムは話を聞いてくれる。

ここで、隣にいた光一が声を上げる。

「ってことはさ、もしかしてこの石があれば、向こうとこっちを行き来できる、とか？」

だが、少年の素直な一言には、ニンバムは重々しく返した。

「一見、そのようにも思えます。ただ――もしかすればこれは――」

彼はリサに石を返し、顎に手を当てて、ただただ悩んでいた。

どれくらいだろうか。彼の思考を遮らぬよう、一同は固唾を飲んで見守った。ニンバムは驚異的な集中力で、時折微かに独り言を漏らしながら考察している。

時間にしておおよそ5分ほどが経ち、彼はようやく、その眼差しを持ち上げた。

「グレン、お三方をここから解放していただけますか？ 彼らに、見ていただきたいものがあるのです」

唐突な申し出に、三人まで驚いてしまう。グレンは少し目を見開き、ニンバムを見つめていた。

「その様子だと、何か思いついたのかい？ もっとも、もう外は随分と暗い。あまり遠出はオススメしないがね」

「その点は問題ありませんよ。錆びついたとはいえ、これでもあなたよりは魔法が使えるつもりですからね」

悪友ゆえの皮肉を投げあう。グレンは「そうかい」と笑い、首を縦に振った。

どうやら二人の間で話がついたらしい。ただ、いまいち理由が分かっていない三人は、互いの顔を見渡してしまう。

ニンバムは戸惑う三人を部屋の外へと案内した。黙って部屋から出ると、扉番をしていた二人の屈強な男に睨まれたが、ニンバムが「ご苦労様です」と笑い、制してくれた。

廊下を歩いていくニンバムに、ただついていく。グレンが言ったように、気がつけば外は随分暗くなっている。アジトの中には所々に松明が灯り、仄暗い闇を照らしていた。

緊張したままの夢斗、リサ、光一に、ニンバムは歩きながら言う。

「急いでしまってすいません。ただ、グレンが言うように、夜が深まれば深まるほど、外は動きづらい。できれば、早めに皆さんをお連れしたかったもので」

唐突に彼は立ち止まる。周囲に獣人の気配はない。しんと静まり返った通路には、やたら互いの声が響く。

真っ先に口を開いたのは光一だ。

「そ、外だって？ ねえ、これからアジトを出るつもりなの？」

「はい。誠に勝手なのですが、お三方には森の中にある『あるもの』を見ていただきたいのです」

たまらず夢斗も問いかけた。

「あるもの...一体、なんなんだよ、それは」

ニンバムはすぐには答えてくれなかった。だが夢斗の目を静かに、じっと見つめ、口を開く。

「数ヶ月前、この近辺の森で大規模な『魔力の揺らぎ』が発生したのを観測しました。普段、天変地異や戦争のような大きなぶつかり合いがなければ、起こりえないほどの、巨大なものです」

また新たな概念が登場し、少したじろいでしまう。だが、今はおとなしく話を聞くのが賢明と、黙って言葉を受け止める。

「当初はルガリア王国が攻めてきた、もしくはなにか巨大な魔法の実験を行っているのではと、不安に

なり調査に出かけたのです。ですが、そこにあったのは戦いや破壊魔法の痕跡ではなく、もっと別のものでした」

妙に含んだ口調に眉をしかめる夢斗。代わりにリサが問いかける。

「別のもの...なんですか、それは」

「私もこの地に長くいますが、見たことのない代物です。ですが、私の憶測が正しいなら――むしろ『あれ』は、あなた方こそよく知っているのでは、と思うのです」

そこまで説明し、彼は杖を持ち直して掲げる。すると先端が白い光を放ち、通路の闇を退けた。

その不思議な力に夢斗は息を飲んでしまう。だが、こちらの世界に順応しつつあったためか、それがあの戦場で見たカー「魔法」であると、すぐに察する。

「私の近くへ。皆様をお連れしますので」

言われるがまま、三人はニンバムの近くに寄る。彼は不安げな眼差しを順番に見渡し、安心させるよう微笑んで見せた。

ニンバムが杖を地面に打ち付ける。瞬間、白い光がバツと空間に弾け、それが周囲を飛び交い始める。高速で動く蛍のような光が、次第に景色を掻き消し白に染め上げていく。

それはどこか、夢斗がこちらに来る際に見た、謎の風景に近かったのかもしれない。

風が一陣、駆け抜ける。

次の瞬間、なにやら青臭い香りが鼻をついた。

「えっ――――」

思わず、夢斗は声を上げてしまう。

先程までの景色が一変、気が付いた時には薄暗い森の中に立っていた。足元には雑草が生い茂り、大きな樹木が周囲に立ち並ぶ。

冷たい風が森全体をざわざわと揺らし、かき乱していた。昼間とは一変、随分と寒く感じてしまう。頭上の木々の隙間には、一面の星空が広がっていた。

一瞬で岩造りのアジトから森のど真ん中に移動してしまい、混乱してしまう。互いを見つめ、そして周囲を警戒した。

だがそれをなだめたのは、やはり杖を携えたニンバムである。

「落ち着いて。アジトから少し離れた森の中です。ユメトさんが迷い込んだ戦場からは、かなり遠いので、安全だと思いますよ」

不思議なことに、彼ののんびりとした声を聞いていると、心が静まる。興奮冷めやらぬリサが問いかけた。

「な、なんですか、今の！ どうやったんですか？」

「ははは、なあに、簡単な転移魔法ですよ。本当は、目的地にきちんと送り届けたかったのですが、座標がずれてしまったようです。まだまだ、私も未熟ですね」

苦笑するニンバム。だが、リサのテンションが一気に跳ね上がる。

「グレート！ つ、つまりワープしたってことですか！ すっごーい！」

我を忘れ、目をキラキラさせる彼女に、夢斗と光一はたじろいでしまう。きょとんとした二人の顔を見て、少しだけリサは我に返った。

「あれ、どうしたんですか二人共。なんでそんな『素』なんですか？」

「いや...そ、そんなにすごいのか、今の」

一言に今度は矛先が夢斗を向く。

「ワープですよ、ワープ！ 一瞬で行きたいところに行けるんですよ！ ジェット機も真っ青です！」

小さな体で必死にこちらを見上げ、リサは訴えかけてくる。体の大きさに見合わない、凄まじい圧力だ。恐らく、心の底から感動しているのだろう。

確かに言っている事は分かるのだが、この状況下ではまだ、そこまで興奮することもできない。たじろぎつつも「分かってるよ」と返した。

そんな中、光一は冷静に周囲を伺いつつ、ニンバムに問いかけた。

「一体なんで、こんな所に？ 僕達も森はよく来るけど、何を見せたいっていうのさ」

「ええ、こちらです。さあ」

ニンバムは再び一同を導き出す。草木をかき分けて歩いてく彼に、首をかしげつつも三人はついていく。

ガサガサという歩みの音しか聞こえない。ニンバムが「魔法」の力で杖に光を灯してくれているが、それでも周囲には色濃い闇が広がっている。一步踏み出せば、飲み込まれてしまいそうだ。

ニンバムが前を向いたまま、告げる。

「コーイチさん達、武力派の面々が見つけれなかったのも、無理はありません。勝手なことをして申し訳なかったのですが『あれ』は私が結界を張って、隠しておいたのです」

「隠しただって？　なんでまた、そんなことを。グレン達に見つかるはずのものなの？」

「それほど、危険なものということではありません。ただ、その正体をじっくりと研究したかったので、あまり乱暴にされても困ったものですから」

どうやらそれは、武力派には扱いきれない代物らしい。知識人である、ニンバムにこそ価値が分かるものなのだろうか。

「結界は既に解除しています。もうじき、見えてきますよ」

その言葉を信じ、歩き続ける一同。

彼が言う通り、すぐに茂みを抜け、少し開けた広場のような空間にたどり着いた。なにやら文様の描かれた石が、広場の端に並べられている。これが彼の言う「結界」というものなのかもしれない。

ニンバムはいち早く茂みから出て「こちらへ」と案内してくれる。恐る恐る、三人も広場へと分け入った。木々がないおかげで、頭上の星々が随分綺麗に見える。不思議なことに、大きな月の色は赤色をしていた。

一同の視線は、ニンバムの向こうに見える、大きな黒い塊に向けられていた。闇夜のせいで、まだ詳細は分からない。何か巨大な、四角い塊が中央に鎮座している。

これこそが、彼の言っていた「見せたいもの」なのだろうか。

思わず歩み寄りながら、夢斗は問いかけた。

「ここなのか、その...俺らに見てもらいたいもの、ってのがあるのは」

「はい、その通りです。ささ、もっとこちらへ」

ニンバムはゆっくりと、大きな謎の塊に近付いていく。闇を背負ったそれは、なんとも不気味だ。しかし、まるで動く気配がないことから、生き物ではないらしい。

一步、また一步と緊張したまま近付くが、まだまだ姿は確認できない。

戸惑う夢斗達に対し、ニンバムはその影を見上げながら告げる。

「調査を色々行ったのですが、正体は分からずじまいでした。ただ、特殊な構造からして、これが『こちら』のものではない、と私は睨みました」

思わず、リサが声を上げてしまう。

「こちらのものではない？　それって、つまり別の世界のものってことですか？」

「ええ。あくまで、推測ですがね。ただ、少なくともこんなものを作る技術は、我々は持ち合わせていません。『王国』の鍛冶師や彫金師を集めたところで、とても作れそうにないほど、精密で複雑な構造をしています」

それはつまり、夢斗達のように別の世界からやってきた物体がここにある、ということなのだろう。

光一が一步步み寄り、声を上げた。

「でも、それと僕らとなんの関係が———あっ」

最後尾にいた夢斗は、彼の反応に眉をしかめる。しかし一瞬遅れてリサもまた、同様に前を向き、目を見開いていた。

二人には、その「何か」の正体が分かっらしい。

後ろにいる夢斗はまだ目が慣れず、その状況が把握できないままだ。

「おい、どうしたんだよ、光一」

問いかけに、少年は答えない。ただ、彼の表情が一気に青ざめていくのが分かる。リサも同様だ。二人して、明らかに狼狽している。

リサ達の反応を見てニンバムは悟り、そして問いかけた。

「やはり、ご存知なのですね。これについて」

すぐに返事は来ない。だがうろたえながらも、微かに震える声で光一が言う。

「なんだよ、これ……なんで、これがここに…」

遅れて、今度はリサが言う。彼女もまた視線が定まらない。

「これって……一体どうして」

ニンバムは二人の反応から、ある程度確信したらしく「ふむ」と頷く。彼の予想はどうやら的中したようだ。

唯一、事態が飲み込めない夢斗。とにかくもっと詳しくその姿を拝むため、一步を踏み出した。

ニンバムの杖が放つ光に、その大きな姿があらわになる。

長方形をした「それ」はすでに所々が壊れ、無残な姿になっていた。金属製の胴体は錆びてしまい、くすんだ銀色に輝いている。窓ガラスは全て砕け、近くに散乱していた。

何かが横からぶつかったのか、胴体は大きくへこんでいる。随分放置されたようで、木の葉や石ころが座席の上にくっつき落ちていた。

巨体を運んでいた車輪も朽ち果て、見る影もない。今のこの姿では、一步たりと前進することは叶わないだろう。

夢斗もまた、二人と同様に息を飲んでしまう。

今までこの世界・クレイドルに来て、とにかくありとあらゆる「非日常」が姿を現した。

剣と盾、鎧で武装した兵隊。獣と人の姿を持ち、森で狩りをする集団。炎、武器を生むだけでなく、一瞬にして別の場所に移動してしまう「魔法」の存在。

空を覆う星空ですら、似ているようでどこか違う新たな世界。

戸惑い、振り回され、それでもそこで出会ったりリサや、かつてのクラスメイト・光一の存在で、夢斗にとってクレイドルという世界は、随分と輪郭がはっきりとしてきていたのだ。

だからこそ、夢斗は不意打ちを喰ったように動くことができない。

ただ、黒い塊を見つめたまま、啞然とするしかなかった。

見かねたニンバムが、今度は夢斗に問いかける。

「ユメトさんも、ご存知なのですね。これが、一体なんなのか」

素直に首を縦に振ることはできない。これがなんでここにあるのか。まるで見当がつかない。

それでも、この物体がなんなのか——それは、夢斗にはハッキリと分かる。

そして同時に、夢斗の脳裏に一気に何かが弾けた。あまりの痛みにも声を上げ、うずくまる。まるで電流が走ったかのように、目の前がチカチカと揺れた。

「夢斗君!？」

思わず横にいた光一が駆け寄った。うずくまる夢斗に、リサも声をかける。

「ど、どうしたんですか、夢斗さん!」

彼女の声がひどく遠くから聞こえる。汗が噴き出し、熱が身体中へと伝わっていくのが分かった。

歯を食いしばり、飛びそうになる意識を繋ぎ止める。脳裏に次から次へと、謎のヴィジョンが浮かび上がった。

周囲に群がる草木。戸惑うクラスメイト達と同様に、周囲を見渡す。

どこからともなく聞こえてきた「咆哮」に、そこらじゅうから上がる悲鳴。

四方から襲いかかってくる、脅威。

散り散りに走り出し、森へと逃げ込む。

手足が痺れ、痛んでも、けっして立ち止まらない。

薄暗い森の中でつまずき、ようやく振り返る。

自身目掛けて跳んでくる「怪物」。

なんのことはない。それは、いつもカウンセリングの際に呼び起こされる、あの「夢」の内容と一緒だ。

だが——

「そんな……そういう…ことなのか」

そうだ。今ならしっかりと、思い出せる。

ゼエゼエと息を整えながら、前を見る夢斗。黒く大きな物体の前でこちらを振り返り、ニンバムが真

剣な眼差しで問いかけた。

「思い出したのですね、何か。あなたが知っていた、過去について」

戸惑いながら、こくりと頷く夢斗。そして体を持ち上げ、改めて目の前に転がる鉄の巨体を見上げた

。ボロボロに朽ち果てた「バス」がそこにはある。タイヤが外れ、車体が砕け、へこんだ、満身創痍の姿で鎮座していた。

現実世界で幾度も見慣れたはずのその姿。だが夢斗にとって、この目の前にある車体だけは、特別なのだ。

それは他ならぬ、光一も一緒だった。

「これに……乗ってたんだ。あの日、クラスの皆と」

思わず「えっ」と声を上げるリサ。

だが、光一は目の前の残骸を見つめたまま、夢斗の言葉を聞いている。

「あの日…林間学校の帰り、俺達はこれで学校に向かっていて。そうだ、これは——俺達の乗っていたバスだ」

信じられない、と自分自身で思う。だがそれでもなお、湧き上がったかつての記憶がそう告げるのだ

。今ならばはっきりと言える。胴体の形や色。ランプの形状や窓の大きさ。すべて克明に覚えている。

これは、夢斗と光一——かつて「神隠し」の際に乗っていたバスだ。

たまらず光一が声を上げた。

「なんだよ、これ…どうということなの？ これってつまり…僕達がこっちに來たのって…」

彼の不安な眼差しを察し、ニンバムが静かに答える。

「皆さんの話をお聞きし、私なりに考えてみたのです。異界からクレイドルへとやってきた、歳の近い三名の人間。なかでもユメトさん、あなたが最も不可解な経歴をお持ちでした。かつての記憶を失い、意図せずこちらの世界へとやってきた。これが一体、何を示すのか」

ゆっくり、着実に、彼は事実を告げていく。

「あなたと出会った、ご友人であるコーイチさん。そして、『オーバー』としての力を持つリサさん。この邂逅には、なにか繋がりや意味があるのではないかと。そう私は思い、ここにお連れしたのです」

たまらずリサが声を上げる。そうでもしなければ、混乱に押しつぶされてしまいそうだった。

「い、意味って何ですか？ 一体、私達にどんな繋がりか…」

「落ち着いて。大丈夫です、これからお話しします」

ニンバムは随分と話術にも長けているようで、彼の言葉に身を任すと、自然と安堵してしまう。

「ユメトさんのお話を聞き、私にとって不可解な点は二つありました。一つは、まずどうやって、この世界へやってきたのか。そしてもう一つは、失った過去に何があったのか」

分かりきったことかもしれないが、それでも一同を混乱から救うため、ニンバムは一つ一つ整理しながら話す。

「ユメトさんがこちらにやって来るきっかけは、きっとリサさんから偶然にも受け渡された、ゴーレムの心核でしょう」

思わず、リサは腰の袋からあの石を取り出す。石は星の光、そしてニンバムの放つ魔法を受け、小さな夜空のように輝きを放っている。

「多分に憶測は含まれますが、この石はこちら——すなわちクレイドルにて生まれた、魔法力の結晶です。リサさんが『オーバー』の力を使い、向こうの世界へと運んだこの石が、ユメトさんをこちらに誘った。いや、正確には誘う『きっかけ』を作った、ということかと思えます」

今度は光一が問いかける。

「きっかけだって？ じゃ、じゃあこの石には、世界を行き来する力があるってことなの？」

「いえ、実はそうではないんです。どういうことかという、ここから先はコーイチさんに深く関係があります」

思わず「僕う？」と声を上げる光一。頷きつつ、ニンバムは続ける。

「コーイチさんがこちらにやってきた時期。ユメトさんが記憶を失った時期。それは、確か3ヶ月前

ほど、ということでしたよね？」

唐突な問いかけに戸惑いつつも、光一は首を縦に振る。夢斗はニンバムの顔を見つめ、口を開いていることしかできない。

「この物体——バスと呼ぶのですかね——これが見つかったのも、3ヶ月前なんですよ」

思わず「あっ」と声を上げる光一。言わずとも、一同が思い浮かべた事実は一致していた。

3ヶ月前——夢斗達の林間学校の記憶は失われ、光一は気が付けばこちらの世界に来ていた。そして時を同じくして、ニンバムはこちらの世界でバスを見つけたというのだ。

信じれない。そう、言いたかったのだろう。それでもなお光一は冷静になり、深呼吸をした後、自身に浮かんだ憶測を言葉にした。

限りなく真実に近い、その思いを。

「僕らは———この世界に来てたの？ 僕だけじゃなくて...クラスメイトの皆が、バスごと」

静かに、大きく一度だけニンバムは頷いた。

「おそらくは、ですが」

だがそれで、全てが繋がる気がする。

次元を隔てた別々の世界が、夢斗、光一、リサという三人の過去で繋がってしまう。

泳ぐ言葉をなんとか掴み、光一は問いかける。

「でも.....でもさ...じゃあなんで夢斗君だけ、元の世界に...一体何があって...」

「そこなんですよ。ですが、これも、もう答えは出てます」

息を飲む一同。固唾を飲んで、ニンバムの言葉を待つ。

ゆっくりと、どこか真剣な眼差しを向けながら、彼はまず光一に問いかけた。

「コーイチさん。あなたはこちらの世界に来て、レジスタンスの方々と出会った時を、覚えていますか？」

「ああ、うん。覚えてるよ」

「その時、あなたは彼らの『言葉』が理解できましたか？」

唐突な疑問に首をかしげる光一。今更、なんでそんなことを聞くのか。

「えっと...いや、そんなことなかったよ。だって皆、こっちの言葉みたいなので話してたんだもん。

何言ってるか分かんなくて、最初は大変だったよ。僕が喋れるようになったのは、この姿になってからかな。なんでかこうなったら、自然と言ってることが分かるようになったんだ」

質問の真意は分からない。だが、光一どうやら最初からレジスタンスの面々、すなわち獣人らと意思疎通はできなかったようだ。

それが一体、なんだというのか。

そんな疑問を浮かべた一同に、さらにニンバムは続ける。

「なるほど。では、リサさん。あなたはどうでしょう。こちらに来た時——もっと言うなら、我々と出会った時、どうでしたか？」

今度はリサが驚き、戸惑う。彼女は光一と同様に、ありのままを告げた。

「え——ええっと...私は...確か、そんなことはなかったと思います。皆さん、日本語喋られていたんで」

この一言に、光一が「えっ？」と声を上げた。

「え、なんだよそれ。日本語？ そんな馬鹿な、獣人言語じゃなくて？」

「そうですよ。おかしいな、って思ったんです。でも、皆きれいな日本語を喋っているし...まあ、途中から気にはしなくなりましたが」

なにやらリサ、光一がクレイドルに来てからの経緯は、微妙に異なっているらしい。

そして二人の視線は、同時にニンバムを向く。彼は頷き、続けて夢斗を見た。

「ユメトさん。あなたは、どうでしょう。こちらに来た時、我々の言葉は、分かりましたか？」

ただ静かにバスの残骸を見つめたまま、この世界に来た当時のことを思い出す。

ベッドの代わりに、一面に広がる青々とした草原。遠くから聞こえる喧騒を聞き、たどり着いたのは戦場だった。

獣人と騎士がぶつかり合い、互いに殺し合う場。

そこに紛れ込んだ夢斗に、最初に声をかけたのはルガリアと呼ばれる王国の兵士であった。

会話というよりも怒号。しかし、その内容は――

「俺もリサと同じだ。あの男達の言葉も、それにあんた達の言葉も……どれも、俺が普段聞いていた言葉と同じだ」

光一がまた目を見開く。ニンバムはその一言で、確証を得たらしい。彼は大きく頷き、告げた。

「私はあなたがたに、ずっと獣人達にのみ伝わる言語で話しています。お会いした時から、今まで」

ようやく夢斗とリサも驚き、目を見開く。

「コーイチさんがこれを理解できるのはまだしも、お二人はこの言語を知らないはずだ。だが、一つだけ『例外』は存在する」

「例外？」

リサの問いかけに、ニンバムは彼女を見つめながら告げた。

「かつての伝承にあるのです。世界の境界を越える者は、あらゆる障害すら越える、と。かつてこの地に降り立った『彼ら』は皆、自然と数多の言語を使いこなし、どんな者とも調和した、と。時には種族の壁すら越え、ある時は数多の文明をまとめた、と」

それがいったい何を示すのか。もはや今の三人には、言わずとも理解できた。

だからこそ、その「越える存在」である、リサが言う。

「それは…私が『オーバー』だから、ってことですか？ で、でも…じゃあ！」

リサ、光一、ニンバムの視線が一点に集まる。

それを受け止めた張本人は驚愕し、己の手を見ていた。

彼は――夢斗は震えを押し殺し、つぶやく。

「俺も……なのか。俺もリサと同じ……『オーバー』ってことなのか？」

分かりかけていたとはいえ、リサ、光一は息を飲む。

この場で唯一、それらに精通している賢者は、しばらく沈黙していた。優しい瞳の中にどこか真剣な色と、悲しみのようなものが混ざっているように見える。

困惑し戸惑う夢斗に、ニンバムは告げた。

「先程もお伝えしたように、あのゴーレムの心核はただのきっかけにすぎない。おそらくですが、クレイドルの魔力を含んだあの石が、あなたの中に眠っていた力を呼び起こしたのでしょう。ユメトさん、あなたは――あなた自身の力で、この世界に来たんです」

不安は疑惑となり、やがて確信へと成長する。

俺が――自分自身で口走っておきながら、その現実を素直に受け止めることができない。

何も昔から、特別なことなどなかった。少しだけ背が高く、ぶっきらぼう。それくらいしか、夢斗という人間の個性はなかったはずである。だからこそ何不自由なく、他人と何ら変わらない人生を歩んできたつもりだ。

そんな自分の中に、世界と世界を行き来する力が眠っていたなど、到底信じることはできない。

ふらつく気持ちを後押しするかのように、ニンバムは告げる。

「3ヶ月前、あなただけが向こうへ戻れた理由…恐らくそれは、期せずして発動した『オーバー』の力によるものでしょう。あなたは迫り来る危機から逃れるべく、その力で世界そのものを飛び越えた。記憶を失ったのは、きっとそのショックによるものでしょう」

また一つ、夢斗の中で何かが繋がる。

顔を上げ、ニンバムに問いかけた。

「じゃあ、俺が見ていたのは……俺が毎晩見っていた、あの夢は」

夢などではなかったのである。

現実離れしたあの光景の全てが。自身に襲いかかる、正体不明の殺気が。

全て現実――異なった世界で引き起こされた、出来事だったのだ。

なんだか震えが止まらない。望んでいたはずの「過去」なのに、それをいざ目の前にすると、どうしようもなく怖くなってしまふ。ただの穴埋めのはずだった。なのに、現れてしまった奇々怪々なる事実が、心を伝わり、体を震わせる。

落ち着けようと努めても、まるで体は言うことを聞かない。ドクドクと、胸の奥で心臓が高鳴る。身

体中に走る血液の感触が、妙にざわついていた。

混乱、不安、恐怖、後悔。

もはや、どの感情とも言えない不確かな「黒」が、夢斗の体を支配しようとしていた。

だが、ふっとその手に温もりが宿る。

顔を上げると、すぐそばにリサがいた。金髪・碧眼の少女は、不安げな眼差しでこちらを見ている。彼女の手が、そっと重ねられていた。

「大丈夫ですよ、夢斗さん」

ハッとして、間近に迫る少女を見た。彼女は困ったように、それでもなんとか笑顔を作り、言葉を投げかけてくる。

「その...戸惑うのは、分かります。で、でも、全然たいしたことないですよ！ 『オーバー』なんて」

この一言に、光一、ニンバムも驚く。彼女はお構いなしに言葉を続ける。

「世界を越える力は確かに凄いけど、だからって怖いことなんて何にもないですよ！ 慣れてくれば、使いこなせるようになるし...それに、言葉が分かるのなんて、すごいでしょ」

たどたどしくも、彼女は必死に言葉を探す。

その姿を見ていると、不思議と夢斗は心を打たれた。

励ましてくれているのだ、彼女なりに。「オーバー」という超常的な力を持った者の不安を、なんとか消し去ろうとしてくれているのだろう。

そこまで彼女がやる義理はないはずなのに。無理矢理に笑顔を作りながら、夢斗の恐怖と戦ってくれている。

「それに、それに、『オーバー』だったから、こうやってお友達とも会えたんです。だからきっと、夢斗さんの力には意味があるんですよ！ 夢斗さんを良い方向に導く、意味が」

その一言で、思わず光一を見てしまう。

彼女の言う通りだ。たとえ得体の知れない力だったとしても、結果として夢斗は1日足らずで、多くのものを取り戻した。失った過去、その真実、そしていなくなった友人。

姿形は変わっていても、再びかつてのクラスメイトと出会うことができたのだ。

震えが、ようやく止まる。

夢斗は体を持ち上げ、しっかりと両の足で立ち、再びリサを見た。

自身を見上げる少女の目は少し潤んでいる。もっと何か言わねば、と考えているのだろう。そうだとしたら、とんだお人好しだ。

だがそのお人好しが、事実、一人の人間を救った。

戦場に迷い込んだあの時も。

そして、今も。

「ごめん.....ありがとう」

リサは目を開き「えっ」と呟く。

夢斗は深呼吸し、再びバスを見つめた。

「リサの言う通りかもな。ごめん、わけ分かんなくて、ちょっとクラッときた。でも、もう大丈夫」

唐突に自身を取り戻した夢斗を見て、今度はリサが言葉を失っている。光一、ニンバムも、強い眼差しで前を向く夢斗を見ていた。

「色々、分かんないことだらけだよ。俺のこの力も、この世界も。そもそも、なんで3ヶ月前に、あんなことが起こったのかも」

言葉に出すことで不安を形にし、吐き出す。そうすることで、少しでも自分の中で整理がつくような気がした。

「なんでこの世界に来たのか...カラクリは分かっても、やっぱり理由は分からない。けど、テンパってても、仕方ないよな」

強さを取り戻した夢斗を見て、ようやくリサも落ち着いたらしい。かすかに、笑顔が戻ってくる。

最後にふっと、夢斗は心に浮かんだある言葉を呟いた。

「あれこれ考えても、ぐっちゃぐちゃになるだけだものな。人間、歩くときは、前向かなきゃなんないんだ」

思わず、隣にいたりサが「え？」と首をかしげる。だが、夢斗はあえて言及はせず「なんでもない」と苦笑いして返した。

二人のやりとりを見ていた光一が、大きなため息をつく。

「そっかあ、夢斗君まで『オーバー』だったなんてなあ。でも、確かにそれなら、今までのことも分かる気がするよ」

今度は光一の顔を見つめ、夢斗は言う。

「光一。『神隠し』にあったクラスメイトは、他に見つけたのか？」

「いやあ、全然。それこそ、夢斗君が初めてだよ。この周辺を探してはみたんだけど、誰にも会っていない」

記憶が薄れつつも、光一はレジスタンスの傍ら、クラスメイトを探していたと言っていた。この世界にいるかも分からない友人らを、追い求めていたはずだ。

ふっと、夢斗は自身が抱いた疑惑を口走る。

「まだ、どこかにいるのかな...あいつらは」

「夢斗君...」

光一は夢斗の心中を悟ったようだ。続けてニンバムを見つめて、夢斗は問いかける。

「なあ、この辺りで、俺みたいに『向こう』から来た奴はいないのか」

「いえ、残念ながら、私もお会いしたのはリサさんだけです。皆様のご友人と思われる方々は、出会っておりません」

返ってきた言葉に、一瞬落胆してしまう一同。

だがニンバムはもう一言、顎を撫でながら告げた。

「ただ、この森は様々な地方に隣接しています。もしかしたら、森から別々の土地に逃げていった方々もいるのかもしれない」

「っ！？ それって、つまり——！」

「可能性は、あるやもしれませんね。なにせ、クレイドルも広いですから」

どくん、と鼓動が跳ね上がるのが分かった。血が流れる勢いを増し、カァッと体が熱くなる。

クラスメイト達がこの世界のどこかにいる。今こうしている間にも、この異世界・クレイドルのどこかに、いるかもしれないのだ。

拳を握りしめ、前を見る夢斗。ふっと、一言だけ呟く。

「そうか...そう...なんだな」

失ったはずの、唐突に姿を現した「過去」。

考えても考えても、理由は分からない。自分がなぜ「オーバー」と呼ばれる存在になったのかも。もっとういうなら、なぜそんな世界があるのかも。

事実を知った時、許容量を遥かに超える非現実には押しつぶされそうにもなった。これが夢なんかではなく、受け入れなくてはいけない現実だということに、ひどく怯えたのである。

だが今は違う。ほんの少しでも見えてきた「真実」に、微かな「道」が見える。

失った「全て」はここにある——この異界・クレイドルに、夢斗の置いてきた「過去」がある。

それが、それこそが今見えている、確かな真実なのだ。

また少し拳を握りしめ、歯噛みする。

脳裏にはまだぼやけてはいるが、あの林間学校の帰りのバスの風景が浮かんでいた。馬鹿を言い合い、笑いあう生徒達。変なやつばかりだった、と思う。だがそれでも、彼らは仲違いせず、共に山で合宿を終えた。

友というものに依存する気はない。だがそれでも夢斗はその時、確かに感じていたのだ。

彼らといた時間が、楽しかった、と。

「—————えっ」

声をあげていたのは光一だった。その一言に夢斗は我に帰り、そして同時に気付く。

夢斗の全身が、微かに光りだしていた。闇夜の中に白い光がぼうと浮かび、辺りを照らし出す。

驚くりサ。しかしそれに反応するかのように、リサの体も同様に光を放つ。何が何だか分からないまま、互いの体を見つめる二人。

「な、なんだよこれ！ 一体、何が――」

混乱する二人に冷静に、いつも通りの波長で賢者が言う。

「私も、初めて見ます。なるほど、これが――」

ニンバムの顔を全員が見つめた。そして、彼の口からその言葉が飛び出した瞬間、光は強さを増した

。

「『オーバー』の力」

視界が真っ白に染まっていく。夢斗とリサの体は宙に浮き上がり、足元の固い感触が消えた。

もがくも、まるで制御ができない。見えない力によって、無理矢理に「世界」から引き剥がされてしまう。

力に戸惑う二人を、ニンバム、そして光一は見上げていた。小さな獣人は不安げな眼差しで、友の名を叫ぶ。

「夢斗君！！」

その一言に答えたかった。だが、夢斗は虚空でもがきながらも、必死に声を上げることしかできない

。

「待ってくれ...やっとな、やっとな会えたんだ！ 待ってくれ！」

自身の体に広がる感覚で、何が起ころうとしているが分かる。だからこそ必死に訴えた。誰にでもない、自分自身の中で鳴動する、この「力」に。

すでに二人の体は空中高くに浮き上がっていた。光一、ニンバムの姿が小さくなっていく。

リサも自身の力の暴走に、戸惑いは隠せない。ふわふわと浮き上がる体を、なんとか制御しようと必死だ。

暗かったはずの視界が、白に染まっていく。

あの時と同じだ。ベッドの上からこの世界へ来た、あの時と。

夢斗は地面を見下ろし、遥か彼方に見えるクラスメイトに向かって、力一杯叫んだ。

「必ず――必ず戻ってくるから！ 絶対に！」

最後の最後、光一が何かを叫んだのが分かった。だが「力」はけっして待ってはくれない。音が消え、触覚が消え、視界が白に埋め尽くされる。

身体中の感覚がどこかへはじき出され、ついには「世界」そのものが消えてなくなった。

歯噛みした固い感覚すら失いながらも、それでも夢斗は握りしめた拳は振りほどかなかった。

自身の存在がゼロになるその間際、目の端に確かに熱い感触がこみ上げ、宙に散る。

喉の奥の奥から、自分自身にすら聞こえない咆哮が、どこかも分からない境界の世界へと響いていた

。

昼過ぎの購買は、まさに戦場と言っても過言ではない。曜日ごとに変わる特別メニューはどれも好評で、店先に並ぶなり、生徒達が我先にと買いに来る。10分が経過した頃には、建物から出ることにすら容易ではなくなるほどだ。

ひしめき合う生徒の群れの中を、金色の髪の毛がひょこひょこことかき分け、動く。ぶつからないように必死に右へ左へと歩き、彼女は少しずつだが脱出を試みている。

「ソーリー、ちょっとすいません。通ります、すいません」

両手に購買の袋を抱えているせいで、身動きが取りづらいのだろう。こけそうになりながらも、なんとか人の群れを脱出し、渡り廊下へと歩み出た。段差を飛び降り綺麗に着地する。

ミッション、コンプリート——心の中で勝ち鬨を上げ、満足げに笑みを浮かべた。両手に携えた「戦利品」をしっかりと抱きしめる。

「ずいぶん買ったんだな、お昼」

思いがけない一声に、慌てて振り返る。そこには、背の高い男子生徒がこちらを見下ろしていた。白と黒が入り混じった坊主頭は相変わらずである。

対する金髪の少女・リサは、笑顔を浮かべた。

「夢斗さん、どうも！」

頭を下げるリサ。思わず、夢斗も軽く会釈する。

「あれから、大丈夫でしたか？ 体、どこか調子悪くなってませんか？」

「ああ、うん。それは別に。いつも通りだよ」

夢斗が話しかける前に、リサはあれやこれやと体を見渡しながら問いかけてきた。しかし、変わりない学生服姿の夢斗に、安心したようである。

「そっか～、良かったですねえ」

体は小さいのに、この少女は思いの外声が大きい。元気なことは良いことなのだが、いかんせん、周囲の目を引いてしまっている。夢斗の風貌も相まって、行き交う生徒は皆、こちらを見つめてはひそひそと何やら話をしているようだ。

実にやりづらい——夢斗は後ろ頭をかき、とにかく提案を投げかけた。

「あのさ、昼、一緒にいいかな。昨日のこと、ちょっと話したい」

一瞬、リサは驚いたようだった。だが、すぐに首を縦に振り、笑う。

「オフコース！ 大丈夫ですよ～、行きましょう！」

できればもう少し穏便に事を進めたかったのだが、リサに対して、それは望めそうにもない。とにかく夢斗は彼女を連れて、購買を後にした。

二人がやってきたのは校舎の屋上である。ベンチが幾つか設置されており、休憩や昼食に利用できるスペースだ。金網の向こうには街が広がっており、車の音や人々の生活音が聞こえてくる。

都合のいいことに今日は生徒の姿はない。足早にベンチの一つに腰掛けた。

夢斗も昼飯用に買ってきたおにぎりを手に取り、封を切る。リサはというと、大事に購買の袋

を隣に置き、これまた丁寧にパンを一つ、取り出した。クルミ入りのパンを、迷うことなく口に運ぶ。

「リサの方も、大丈夫ーだったみたいだな、その様子だと」

「はい、全然。ノープロブレムでしたよ」

答えながらも、ガツガツとパンにかじりついていくリサ。夢斗はたじろぎつつも、苦笑いを浮かべる。

「そ、そっか。でもまあ、リサは俺よりも先にあの世界に行ってるわけだからな。慣れてて、当然か」

「そうですねえ。でも、昨日みたいなのは初めてでしたよ。ちょっと、驚いちゃいました」

「昨日みたいな...あれか」

昨晚の出来事に思いを馳せながらも、一口、おにぎりをかじる。口の中に広がる米と海苔の味は、思考に遮られてうまく伝わってこない。

昨夜――光が二人を包んだ後、気が付いた時には「元の世界」に戻ってきていた。

目の前には満天の星空。体を起こすと、そこは街の外れにある神社の境内であった。

誰もいない神社の中で、夢斗、リサは互いの無事を確認し、再び混乱するしかなかったのである。

リサ曰く、初めての事なのだから。本来「オーバー」の力を発動するのは意図的なもので、ちょっとした「コツ」があるらしい。いつも彼女は、そうやって力が満ちた際に、任意で世界の境界を超えるのだという。

昨晚のようにひとりでに力が発動し、無理矢理元の世界へと戻すなど、珍しいことなんだとか。

「本当、驚きましたよ。私、あれからとても寝れなくて、ちょっと寝不足です」

パンをかじりながらも苦笑いするリサ。

「寝れなかったって、どこか体調でも悪いのかい」

「いえ。なんだかワクワクしちゃって」

思わず夢斗は「ええ？」と声を上げてしまった。見れば、彼女はパンを一つ平らげ、今度は袋の中から2つ目を取り出す。きつね色に揚がったカレーパンで、購買の今日の目玉商品だ。

「だって、私と同じ『オーバー』の力を持った方と出会うなんて、今までで初めてですよ。その上、向こうの世界に知り合いがいる方なんて、凄い偶然です」

喋るのと食べるので、リサはさっきから必死だ。とはいえ、夢斗はあくまで「そうか」という冷めた反応しかできない。

「もちろん、夢斗さんの過去にも驚きましたけどねえ」

「ああ、『神隠し』について、か？」

「はい。そんな事件があったなんて、つゆ知らず」

金色に輝く髪、そして透きとおった青い瞳。その風貌でありながら、時折、実に日本人じみた言い回しをする。夢斗はおにぎりを一つ、ようやく食べ終えた。

「俺自身、あれから考えてみても、まだ信じられないよ。3年前、俺らはあの『クレイドル』

に行って、クラスメイトは向こうに取り残されてた、なんてな。そりゃあ、警察がいくら探したところで、見つけれるわけねえよ」

パンをかじりながらも、リサは困ったような表情を浮かべた。

「う～ん、どういうことなんでしょうねえ。夢斗さんがこちらに帰ってこれたのは『オーバー』の力があったからだとしても、なんでクラスの皆さんまで、向こうの世界に行っちゃったんでしょう。それも、バスごと」

「さあな、考えれば考えるだけ、わけ分かんねえよ。そもそも、この目で見たにも関わらず、未だに『獣人』だの『魔法』だのがある世界にいただなんて、信じられないってのが本音さ」

苦笑しながらもう一つのおにぎりを開ける。ちょうどカレーパンを食べ終えたのか、リサも次の一つを取り出していた。

「とはいえ...夢じゃないんだよな、あれは」

いつも通りの光景があって、いつも通りのサイクルで世界は回っている。登校する学生も、通勤する会社員も、朝から商売に精を出す商店街の人々も。つまらない授業や、馬鹿を言い合うクラスメイト。真面目に勉強する者もいれば、寝てしまう者もいる。

一夜が明け、恐る恐る踏み出した外の世界は、今までと何ら変わらない夢斗にとっての「日常」だった。

この一言にリサが答える。

「私も最初は慣れれなかったですねえ。なにせ、あっちとこっちは、微妙に時間の流れも違うみたいなんです。こっちが朝の時にあちは夜だったり。かと思えば、太陽が同じ位置にあったり。最初はそれこそ、夢と間違えちゃいそうでしたよ」

日常生活を送るごく普通の高校生にとって、突然目の前に現れた「ファンタジー」に即0適応できるかと言われれば、それは難しい。

漫画やアニメ、ゲームだので知っているとはいえ、あれはあくまで「作り物」と認知した上で触れているのだ。誰が、似たような世界がもう一つ存在するなど、大真面目に考えるだろうか。

共感してくれるリサに、なんだか少し緊張がほぐれる。だからこそ、何気ない気持ちで問いかけてみた。

「リサは、あの世界ではずっと『レジスタンス』として活動してたのか？」

「ノー！ 私は、王国との戦いには、関わってないですよ。たまたま、最初にお会いしたのが、ニンバムさんだったので『融和派』のところにお邪魔させてもらってるだけです」

「ああ、そうなのか。いや、随分やり合うのが慣れてるみたいだし、なんだっけか...岩の巨人？とも戦ってた、って言ってたからさ。てっきり、ああいうのが好きなのかと」

リサはパンを必死に咀嚼しながら、驚いたようにこちらを見た。大きな目と青い輝きに、思わず夢斗もたじろいでしまう。

やがて頬張っていたものを飲み込み、彼女は困ったような表情で告げた。

「まあ、そうですねえ...物騒なことは好きじゃあないし、人が傷付くのも、もちろん嫌いです。でもあの世界は、この日本みたいに『話し合い』でどうにかなる、って世界でもないの...」

「ああ、確かにな。正直、びびったよ。本気で刃物振り回して、火の玉ぶつけて、喧嘩してるんだからな。あんな大勢の大人がよ」

言いながらも、夢斗はふっと思う。

いや、喧嘩なんてもんじゃないか。あれは———殺し合いだった。

おにぎりを食べ終え、音を立てて手を払う。なんだかそう思うと少し身震いした。

あの場において「法律」だの「常識」なんてものは、自身を守ってくれる盾にはなってくれない。

「どこもあんな感じなのか、あの世界って？」

「それは分かんないですねえ。私もまだ、あの森の近辺でしか行動できてないので。遠出するには、どうしても勇気がないんです」

「へえ。あんな魔法が使えても、やっぱり怖いのか」

「当たり前ですよ。噂によると、砂漠にはすごく大きなアリジゴクがいたり、海には船を飲み込む大ダコがいるらしいですよ。命がいくつあっても足りないです。ニンバムさんなんて、山で竜を見たって言ってました。ドラゴンですよ、ドラゴン！」

どうやら、危険なのは人間だけではないらしい。そこに生息する野生動物も、そもそもこちらとはスケールが違う。

メロンパンを食べ終え、彼女はちょっと困ったように笑った。

「ですけど、やっぱりあの世界が私にとっては気になって。だから危険って分かっているけど、何度も向こうに行ってみたくなくなっちゃうんですね。帰ってから数時間だけ。向こうで冒険して、すぐ戻ってくるんです」

危険はあれど、同じくらいそこには規格外の「未知」が眠っている。このリサという少女の好奇心は、あの世界にがっしりと掴まってしまったらしい。

それにしても、たった一人で何度も足を踏み入れるとは、夢斗からすれば随分と肝が据わっている。

「勇気があるんだな、リサは」

なんの気なしに出た一言だった。それは夢斗が、まだ心の中でどこかで、ある「決断」に迷いを抱いているからかもしれない。

この一言に、驚いたように声を上げるリサ。

「そ、そんなことないですよ、買いかぶりすぎです！」

「そうかな。だけど向こうで見た時は、随分と頼もしかったよ。助けてもらったお礼、言えてなかったな。ありがとう」

軽く頭を下げる。リサはどうして良いか分からず戸惑っていたが、やがて少しだけ嬉しそうにはにかむ。

だがその表情は、夢斗の次の一言で真剣な色を帯びた。

「なあ、お願いがあるんだ。もう一度、あっちに連れて行ってくれないか？」

思わず手を止めるリサ。目をまん丸にし、こちらを見ていた。

「え……」

「向こうに行く予定がないなら、行き方だけでも教えてくれないかな。俺だけで、行ってくるから」

唐突な申し出に、驚くりサ。パンを落としそうになり、慌てて掴み直す。

「もう一度、行くんですか？ その...『クレイドル』に」

彼女の問いかけに、少し考え、頷く。自然と全身に力が入っているのが分かった。

「まだ、3ヶ月前の――『神隠し』のことが、全部分かったわけじゃない。それに、向こうの世界には光一みたいに取り残されたやつがいるかもしれないんだ。それを、もう一度確かめに行きたい」

リサを真っ直ぐ見据え、はっきりと言い放つ。その強い眼差しを、彼女は受け止めきれないようだ。

「で、でも...」

リサは何かを言いづらそうに、両手でパンをぎゅっと握っている。

おおよそ、彼女が言いたいことは分かっていた。向こうの世界は危険すぎる。大自然の中に見たこともない生物が闊歩し、人々は互いに武器を持って争い合う。そんな世界にいわば「異邦者」である夢斗らが迷い込めば、どんな恐ろしいことが降りかかるか分かったものではない。

何度もその世界に足を踏み入れているとはいえ、そんな場所に易々と他の誰かを誘うのは、彼女としても気がひけるのだろう。

だが躊躇している彼女に、夢斗は更に詰め寄る。

「頼む。力の使い方を教えてくれるだけでもいいんだ。危険だっていうのは分かってるつもりだ。でも...だからって、あんな形で光一と別れっぱなしだなんてのは、嫌なんだ」

やっと出会えた「過去」に思いを馳せる。姿形が変わっていても、その実、何も「変わっていない」彼の姿を思う。

しばらく、リサはこちらを見つめ、何かを考えているようだった。無数の葛藤が、そこにはあったのだろう。けっして視線をそらさず、真剣な眼差しは揺らがない。

やがて彼女はゆっくりと、首を縦に振った。

「わ、分かりました。じゃあ今日、私と一緒に行きましょう。安全な場所はいくつか知っているんで、大丈夫だと思いますよ」

少女の決断にとりあえず胸をなでおろす夢斗。再び頭を下げ、礼を述べる。

「じゃあ放課後、一度家に帰ってから、また集合しましょう！ 場所は、駅の南にある空き地で」

随分と妙な場所を指定され、少し疑問には思った。だが別段、文句を言う理由もない。素直に、首を縦に振った。

「分かった。何か準備していくものは？」

「う～ん。万が一に備えてのお薬とか、食料とかですかね...でも、向こうにいるのは数時間ですから、そんな大装備じゃなくても大丈夫ですよ」

「そっか、了解」

決意を固め、夢斗は少しだけ拳を握る。自分で決めたこととは言え、心に湧きあがろうとして

いた恐怖や戸惑いを気合いで拭う。

行かなければいけないのだ。まだ、いくつもの答えが、霧の中にあるままなのだから。

リサはしばらく夢斗を見ていたが、やがて笑顔を取り戻す。

「じゃあ今日はまっすぐ、急いで帰らないとですね。あ、でも赤信号無視とかダメですよ？

ドウ、ノット、ラッシュ（焦らないで）」

言いつつ、彼女は残っていたメロンパンを一気に口に放り込んだ。甘さに酔いしれているのだろう。随分と幸せそうな顔をしている。

なんだか慌ただしい少女だ。彼女の横顔を見ていると、苦笑いしてしまう。

「ていうか、随分食べるんだな...そんな小さな体してるのに」

話に夢中で気が付かなかったが、彼女はここにきてパン三つを平らげてしまっている。大柄な夢斗ならまだしも、可愛らしい見た目からは意外であった。

メロンパンを飲み込み、ため息をついた後、彼女は購買の袋に手を突っ込む。

まさか——とたじろぐ夢斗に彼女はにっこりと笑った。

「朝、食べてなかったんで、お腹減っちゃいました。すいません、これで最後なんで！」

彼女の手には大きなチョコパンが握られていた。

夢斗は苦笑し、驚くしかない。そんな彼の横で、リサは口に運んだパンの甘さに幸せそうに笑っていた。

いつも通り、授業の内容をただ淡々と聞き、特にこれといった起伏もないまま帰路に着いた。不思議なもので、昨晚、あれだけの異常事態が発生したにもかかわらず、戻ってきた日常はなんの色も変えず同じように動いている。いつもの建物、いつもの店、いつもの生活音に、かすかな暑さ。

行き交う人々を見てもやはり別段、変わった様子はない。雑談しながら帰る学生。買い物ついでに家の愚痴を言う主婦。トラブルなのか焦りつつ電話をするサラリーマン。

皆、「あちら側」があるなんて知らない——そう思うと、なんだか妙なため息が漏れてしまう。怪物がいて、剣があって、魔法がある世界の存在を誰も知らないのだ。

妙な気分になりながらも足早に帰宅し、荷物を置いて着替える。夢斗はタンスの中から、ジャージの上下を引っ張り出し、久々に袖を通した。かつて、陸上部に所属していた時に愛用していたものだ。もう数ヶ月ぶりである。

部屋を出ると、台所で休憩している母と目が合った。彼女は驚いたように声を上げる。

「ありゃ、あんたどうしたのよ、珍しい。ランニングでも行くの？」

「ああ、まあ、そんなところかな」

そんな最低限のやりとりだけを済ませ、玄関に向かう。母も夢斗の性格を思い、それ以上、余計な詮索はしなかった。だが、いつも帰ってきては部屋にこもって寝ているだけの息子が、活動的になった姿を見て嬉しくなったのだろう。笑顔を浮かべたまま、コーヒーを口に運んだ。

家を出て、とにかく目的地へ向かって歩き出す。

リサが告げた場所は、夢斗も良く知っている場所だ。駅の南側に、あまり人の立ち寄らない空き地がある。なぜそんな場所に、とは思ったが、あれこれ考えるよりも行けば分かると思ったのだ。

目的地に到着した頃には、夕日は少しだけ高度を落としていた。かすかに暗くなった空き地にはまだ誰もいない。

おもむろに踏み入り、辺りを見渡す。すると、夢斗の到着を待っていたかのようなタイミングで、背後から声かけられた。

「お～、時間ぴったりですね、夢斗さん！」

振り返るとそこにはリサがいた。夕焼けを受けると、彼女の金髪に茜色が混じり、どこか幻想的である。一瞬、目を奪われてしまったが、彼女も制服姿ではなくTシャツに膝くらいまである半ズボン、スニーカーという動きやすそうな姿だ。お世辞にも、おしゃれとは言い難い。

小さな体に少し大きめのリュックを担いで、彼女は笑った。

「随分な荷物だな。食べ物とかが入ってるのか？」

「はい！ いざという時のためにお薬とかも。あっちでなにかあったら大変ですからねえ」

リサは周囲を見渡す。空き地に他の人間がいないか、確認しているようだった。

「よかった、ちょうど誰もいませんね。じゃあ、こっちです、こっち」

言われるがまま、リサについていく。彼女は、空き地の隅に投棄された、ドラム缶の陰に身を隠した。

「こっちです、こっち。誰にも見られないように、気をつけて」

なぜかコソコソするリサを疑問に思いつつ、とりあえずは従い、身を隠す。

「な、なあ、何をする気なんだよ」

「ここから、向こうに行きます。誰かに見られちゃうと、変に思われるかもしれないでしょう？」

人がいきなり消えちゃったら、びっくりですよ」

思わず「ああ」と声を上げる。言ってみれば、これから二人は異界・クレイドルに向けて「瞬間移動」をしようというのだから、こっちの世界の人々が見たら、人間がいきなり消えたように見えるのだろう。

だが、ここで疑問が浮かぶ。リサは何やらリュックから取り出そうとしていたが、構わず問いかけた。

「でも、だったら家の中とか、部屋とかから移動すればいいんじゃないのか？」

「う～ん、そうもういかないんですよね。まあ、出来ないことはないんですけど…」

首をかしげる夢斗に、リサは教えた。

「私も何回か試しましたが、どうやらこの力を使って移動した時、こっちとあっち、それぞれの世界の『位置』は、対応しているみたいなんですよね」

急に難しい言葉が並び、理解に苦しんでしまう。夢斗が困っている姿をいち早く察し、リサは続けた。

「ニンバムさんが言ってたんですが、多分二つの世界は全く異なった場所にあるっていうよりも

、互いに『重なって存在している』っていうイメージみたいなんですよ。こう、私達の世界地図の上に、同じサイズのクレイドルの地図が、乗っかってる感じです」

両の掌を合わせ、身振り手振りで説明するリサ。なんとなく、言わんとしていることが理解できそうなのだが、思わず夢斗は頭を抱えてしまう。

「世界が重なっている...なんだか難しいな」

「あくまで仮説ですけどねえ。でも、それぞれの世界に位置関係があるのは、確かだと思います。この空き地から移動した時は、絶対、ある場所にたどり着くんです。もう何度も試しましたが、一度も例外はありませんでしたよ」

てっきり「オーバー」という力を使えば、異界・クレイドルの好きな場所に行ける、と思い込んでいたのだが、そういうものでもないらしい。移動する「元の場所」に対して、決まった「移動先」がある、と言いたいのだろうか。

「ってことは、俺の部屋から移動すれば、またあの戦場の近くに行っちゃうってことか」

「イエス！ 飲み込みが早いですねえ、夢斗さん」

にっこりと笑うリサに少し戸惑う。相変わらずこの少女は感情の起伏を隠す気がなく、全身で表している。

そうこうしていると、リサはリュックから大きなフード付きの外套と、金色の腕輪を取り出した。てきぱきと身につける彼女を見て、すぐに気づいた。

「あ、それって向こうでつけてた...」

それはクレイドルで出会った際、リサが身にまとっていた物である。すぐに彼女の姿が、昨日見たそれと同じになった。

どうやらこれが、リサが向こうの世界へ旅立つ際の「装備」ということなのだろう。

「このローブは、ニンバムさんがくれたんです。焔兎って生き物の毛皮で作られてて、丈夫で軽いんですよ」

赤と白が入り混じるローブをなびかせ、彼女は得意げな顔を見せた。再び異界に挑むということで、徐々にだが調子が上がってきているようである。

「よし、これで準備OKです。じゃ、行きましょう！」

「お、おう。あのさ...今回は、俺にやらせてくれないか？」

唐突な申し出に目を丸くするリサ。夢斗は自身の思惑を告げた。

「俺自身が『オーバー』だっていうのは、もう疑わないよ。だからこそ、自分の中にある力について、ちゃんと知っておきたいんだ。これを使いこなせれば、好きに向こうとこっちを行き来できるんだろう？ なら、光一に会いに行くのにだって、必要になるからさ」

オーバーという力の概要は分かっているけど、その力の扱い方は知らない。昨晚だって、いわばリサの持っていたゴーレムの心核があったからこそ、発動できたようなものだ。偶然と言ってしまうでもいい。

もし今後、あちらの世界に行くことになった場合、いつまでもリサを頼りきれなければいけないのも不自由な気がした。そう考えての、申し出だったのだ。

少しの間、リサは悩んでいたが、どうやらすぐに納得してくれたらしい。大きく頷き、少し笑

いつつも真剣な眼差しを向けてくる。

「なるほどー、夢斗さんは向上心もあるんですね。すごいです」

「あ、いや、そういうんじゃないくてさ...」

「了解しました。じゃあ、やり方を教えるんで、今回は夢斗さんがやってみてください！」

なんだかリサは勝手に盛り上がってしまっているが、その流れを無理に止める気もない。独自のペースに任せることにした。

リュックを担ぎ直し、リサは続けた。

「え〜っとですね。まずは、目を閉じるんです」

言われたように目を閉じる。少し姿勢を正し、肩幅に足を開いた。

「それで、次は向こうのことを思い浮かべるんです。向こうの世界の風景や、生き物、出会った人のことなんかを」

「なるほど、な。よし」

言われるがまま、暗闇の中で必死に記憶を呼び起こした。

一面に広がる草原。煤けた戦場。鎧を着た王国兵。獣の頭部を持つレジスタンス。飛び交う魔法。

続いて「武力派」の長・グレン、そして「融和派」の長・ニンバム。彼らの元にいた、かつての友人・光一。

それらの顔を浮かべながらも、次の指示を待っていた。

「で、次はどうすればいいんだ？」

「それだけですよ」

「え？」

思わず、閉じていた目を開いてしまった。リサもきょとんとした顔をして、こちらを見つめている。大きく開いた目の中の青い瞳に、なんとも情けない自分の姿が映り込んでいる。

「え.....いや、あの...これだけ？」

「はい、これだけです」

「なんかこう、呪文とかないのか。もっと手順とか」

今度は真横に首を振るリサ。

「なんにもないですよ。目を閉じて、向こうの世界のことを思い浮かべて、それで終わりです」

「お、終わりだって？ まじか、こんなんでもいいのか」

てっきり大げさな呪文やら、発動のポーズやらが必要なのかと思い込んでいたため、かなり拍子抜けしてしまう。リサは夢斗が戸惑っている理由を、いまいち分かっていない。

とはいえ、そういうものだというならば、仕方がない。再び目を閉じ、意識を集中して、思い出す。

暗闇の中に描かれる、数多の「異世界」。

ぶつかり合う兵士と獣人。崩れる崖、飛び交う火の玉。

その中には、腕輪の力で戦うリサも登場する。

二人を取り囲む獣人の群れの中には、矢を携えた光一もいた。

あれやこれやと昨日のことは思い浮かぶが、先程から何かが起こる気配が、一向にない。焦りからか、全身に妙な力がこもっていくのが分かる。

いつしか握りしめた拳の中に、じんわりと汗が広がっていった。

1分、2分、3分――着実に時は過ぎていくが、何一つ体に異変など起こらない。何度か気合を入れて目を開いたりしてみたが、目の前には変わらない光景が広がっているのみだ。意識が過敏になりすぎて、車やカラスの声にまで反応してしまう。

焦っている夢斗に、リサが問いかけた。

「大丈夫ですか、夢斗さん？」

「お―――っかしいな...や、やってるつもりなんだけど...」

後ろ頭をかきながら、夢斗は苦笑する。これを見て、リサも「う～ん」と悩みだした。

「なにか違うんですかねえ。私の時には、それですんなり行くんですが...」

どうやらリサのやっていることと、手順自体はさほど違わないようだ。もっとも、目を閉じて考えるだけだから、間違いようもない。

引き続き何度か試すも、やはり結果は変わらない。虚しい時が流れるだけで、目の前にあの異世界は現れてくれない。

「や、やっぱ俺には、才能がないってことなのかな」

「でも、ニンバムさんが言ってたように、夢斗さんだって向こうの人達の言葉が理解できたんですよ？ じゃあ、『オーバー』ってことだとは思うんですけど...」

世界だけでなく、言葉の「境界」すら超える。それが「オーバー」と呼ばれる者達の力の一端だと、賢人・ニンバムは言っていた。

だが、そもそも彼が博識だったとしても「オーバー」について全てを知り尽くしているわけではない。あくまで、こうではないかという推測の域を出ない。

やはり、根本的に何かが違うのではないか。徐々に、そんな疑心暗鬼に陥りだしていた。

「はっきり覚えてるんだよ。兵士や獣人達が戦うのも、森の中の光景も。何から何までちゃんと、今回だけは覚えてるんだ。だけど、それじゃあダメなのかな」

もとよりこんな人智を超えた力を、理解できるわけもない。夢斗はどこか心の中で行き詰まった感覚を覚えていた。

しかし、これにリサが答える。

「そうですねえ。私も、同じように色々なことを考えます。向こうで見た景色、出会った人や、見たこともない生き物。不思議なことができる魔法。こっちとは違う星空――そういう、楽しいことを考えるようにしてますね」

思わずリサを見つめて、繰り返してしまう。

「楽しいこと、か」

「はい！ 私、昔から物語の世界が大好きで、絵本や漫画、アニメにゲーム。色々な『世界』を見てきました。心のどこかで、こんな世界に行ってみたいなあ、って思ってたんです。だからあの世界は――クレイドルでの体験は、怖いけど、どこかで感動もしてたりするんです」

語るリサの目は、どこか輝いているように見えた。陰鬱な感情はどこにもない。その姿からは、これから旅立とうとするあの異世界・クレイドルに対する、素直な「憧れ」のようなものが感じ取れた。

彼女にとってあの世界は「夢が叶う場所」なのかもしれない。

子供の頃からどこかにあるかもしれない、魔法の世界を夢見る――それは別段、おかしなことでもなく、誰もが一度は抱く願望なのかもしれない。だが大人に近づくにつれ、現実を知り、それが夢であると感じる。

そんな夢見ていた世界がこことは違うどこかに実在し、そしてそこに行くことのできる「切符」を授かった。

なるほど――なんだか少しだけ、納得した。

今までの騒動の中で時折リサが見せる、まるで何かにときめいているかのような、あの表情の理由を。

「だから、何度もあえて向こうの世界に行ってたんだな。リサにとっては、あそこはテーマパークみたいなものなのか」

「もちろん、危険はいっぱいあります。だから、あまり度が過ぎないように、気をつけてるんですけどね」

困ったようにリサは笑って見せた。その純粋な反応を見ていると、なんだか今まで抱いていた焦りのようなものが消えていく。

もう一度、夢斗はゆっくりと目を閉じ、闇の中で考える。

夢斗にとってあのクレイドルという世界は、未知の領域だ。景色も、生き物も、人々も――世界の「理」そのものがまるで違う、異界。まだまだ分からないことしかない、と言っても過言ではない。

リサのような気持ちを抱いたことが、なかったわけではない。人並みに漫画だって読むし、映画も見る。そこに描かれるファンタジーの世界を、羨ましく思ったこともないわけではない。

ただ、まだ異界・クレイドルを素直な好奇心で求めれるほど、余裕はないのだ。

なら、なぜあの世界に行くのか――そんなことは、実はもう分かっているのである。

再び思い描いたのはクレイドルの光景ではない。代わりに、かつての「クラスメイト」達の姿が浮かぶ。

林間学校を終え、山の中を走るバスの中で談笑していた。横には光一がいて、その周りには別の友人らも。皆と話しているのは、他愛ない林間学校での思い出話だ。最初は面倒で、辛くて、できるだけ早く終わらないか、と思っていた。だが、気がつけばあれやこれやと、話題が尽きることはない。馬鹿を言い合い、ただ無意味でも良いから笑う。

なんだろう、今ではそんな光景がひどく鮮明に思い出せる。昨日の夜まで、夢斗の中からはじき出された記憶の断片が、今はしっかりと脳裏に浮かぶのだ。

異世界だから、行くのではない。

今の夢斗にとっては、もっと重要なことがある。

あの場所に彼らがいるかもしれない。だから行くんだ。

変化に気付き声をあげたのは、リサだ。

「ゆ...夢斗さん！」

リサだけが夢斗の体に――いや、彼だけでなく自身の肉体に起こった変化に、気付いていた。

夢斗の体を包むように、光が湧き上がる。そしてそれに呼応するかのよう、リサの体の中からも光が溢れ、周囲の空間に漂いだした。薄暗かった空間でゆらゆらと影が踊り、その強さを増していく。

あの時と同じだ。一同がニンバムに連れられ、バスの残骸を見つけたあの時と。

瞬間、夢斗は目を開いた。意識などせず、余計なことなど考えず、ただ一つの思いだけを抱いて。

あいつらに会いに行く。

視界が白に染まり、空き地の光景が弾き出された。音が、感触が、ドンドン消え、まるでそこに差し代わるように、新たな感覚が戻ってくる。

一瞬の浮遊感の後、光が弾ける。身体中の細胞が奮い立つような感覚が二人を襲った。

息を飲む夢斗。だが、その口から吸い込んだのは、今までいた空き地の空気ではない。

爽やかな森の青々しい香りが、体の中に入ってくる。全身を包む夏の熱気が一気に消え、涼しさが肌を撫でた。

思わず「えっ」と声を上げる夢斗。

二人は気がつけば、青々とした森の中に立っていた。

夢斗が事態を飲み込む前に、声をあげたのはリサだ。

「や.....やったー！！ ハラショー！！」

けたたましい音を立て、拍手をするリサ。びくりと驚く夢斗に、彼女はずいと近寄ってくる。金髪・碧眼の少女は、満面の笑みを浮かべていた。

「え、ええ？」

「やりましたね、夢斗さん！ 成功、成功ですよ！」

「成功...ってことは、ここはもう？」

「はい！ クレイドルに私達、またやってきたんですよ！」

どうやらそのようである。うっそうと生い茂る木々は太陽を隠しているが、頭上からこちらを照らしているのは夕焼けではなく、昼過ぎのような白さを帯びた光だ。どこからかチチチチッ、と聞いたこともない鳥の声が聞こえる。

「や、やれたのか、俺」

「はい！ パーフェクトでっす！」

何度も頷くりサ。彼女はなぜか両手で握手を求めてくる。戸惑いながらもニコニコ笑う彼女の手を取ると、あらん限りの力で上下に振られた。

「おわわわわ！？」

「良かったですねえ、夢斗さん。やればできる人なんですね！」

勢いが良すぎる賞賛にたじろいでしまう。だが、お構い無しにリサは振り向いた。

彼女の視線の先を追う。すると側に立つ木の幹に、何やら傷のようなものが刻まれているのを

発見した。「R.H」と、イニシャルのようである。しかも、その下に筆記体のようなものも見えた。

「場所も、ここで間違いないですよ。良かった、無事やってこれましたねえ」

「それは一体？」

「私が見つけた目印ですよ。私のイニシャル——日向 リサと、あと下には英語で『空き地』って刻んでます」

なるほど。どうやら、こちらに来るにあたって、間違った場所ではないかを判定するため、彼女なりの「座標」を目印で表しているらしい。ここは空き地から移動した先、ということなのだ。

辺りを見渡し、もう一つあるものに気付く。そんな夢斗の視線にリサも気付き、また笑った。

「おっ、さすが。もう気付きましたね」

リサは言うやいなや、足早にそちらに駆けていってしまう。森に取り残されそうになり、慌てて続いた。

少し先に、大きな木が生えている。周囲に生えているものとは比べ物にならないほどの、巨大な幹を持つ大木だ。どれくらいの期間をかけ、ここまで成長したのだろうか。見上げると、まるで一つの塔のようである。

よくよく見ると、木の根元に近い箇所には大きな穴が空いている。リサはそこに向かって、警戒せず近付いていった。

「お、おい。なんだい、ここは？」

「『融和派』の方々のアジトですよ。ほら、早く」

思わず「融和派だって」と繰り返してしまう。王国と戦う獣人達の中でも、賢人・ニンバムのように温和で、争いではなく話し合いでことを解決しようとする一派のことだ。

リサの言葉が事実だというならば、この大樹こそが彼らの根城ということなのだろう。しかし、どう見ても人が住むような代物には見えない。

リサに続いて、穴から大樹の中へと入っていく。

一歩踏み込んで、足を止めてしまった。

「な、なんだ、これ」

思わず声が出てしまう。リサは少し振り返り、どこか得意げに笑った。

外から見ていたのとはまるで違い、木の内部は「家」のそれだ。樹木の幹を極力加工しないよう、空洞部分には棚や敷物、椅子や照明が見える。風通りが良く、空気もどこか清々しく感じた。

「すごいでしょ！ ニンバムさん達が作ったらしいんです、これ」

まるで自分のことのように説明するリサ。そんな彼女の声を聞きつけ、奥から見覚えのある兎の獣人が姿を現した。

「おやおや、リサさん。それにユメトさんまで。こんにちは」

階段の上から現れた賢人・ニンバムに、二人は頭を下げる。彼は杖を頼りにゆっくりと降りてきて、笑った。

「再びお会いできて、光栄ですよ。やはり二人は正真正銘の『オーバー』だったのですね」

嬉しそうに笑う彼を見ていると、どこか心が落ち着く。そんなニンバムに、リサは興奮気味に説明した。

「今回は夢斗さんの力でこっちに来ました。凄いんですよ、もう力を使いこなせてるんですから」

夢斗はなんだか恥ずかしくなってしまう。「ほお」と興味深そうに目を開くニンバムに首を振った。

「い、いや、そんな使いこなすだなんて。リサにコツを教えてもらっただけさ。だけど、あんたの言う通りだった。俺もどうやら、その『オーバー』って力があるってことで、間違いないらしい」

「なるほど、なるほど。やはり、予測通りのようですね。となれば数年前、ユメトさん達がこちらの世界に来て、そしてその力でユメトさんのみが助かった。その説は、かなり硬いと見えます」

改めて自身の掌を見つめる。もはや疑うまでもないだろう。リサがそうであるように、夢斗もまた世界を超える力を持っている。

周囲を見渡ししながら、問いかけた。

「それにしてもすごいな。こんなところに生活してるのか」

「大したことはありませんよ。元々、手頃な大樹があったため、拝借できたのは運が良かったのです。我々『融和派』は数も少ないので、作戦拠点として使わせていただいているのです」

思わず「へえ」と漏らし、隣の部屋を覗き込む。ソファーやテーブル。食器の並んだ棚。狭いながらも、木の中に一通りの生活スペースが揃っているようだ。

「じゃあ、ここにはその『融和派』のメンバーもいるってことなのかい」

「ええ。ですが、ちょっと今は立て込んでましてね。ご挨拶できなくて申し訳ない。なにせ、急な出来事でしたので」

少し、首をかしげる夢斗とリサ。リサがその疑問をまっすぐぶつける。

「急な出来事？」

「はい。ちょうど、お二人が来られる少し前です。森に王国の兵団が進行しているのが、感知されました」

思わず「えっ」と声を上げるリサ。だが、夢斗にはまだその言葉の意味が理解できない。王国といえば確か先日、レジスタンスと荒野で刃を交えていた、あの鎧の集団のことだろう。

ルガリアという国の兵隊達だったはずだ。

リサは一転、不安げな眼差しでニンバムを見ていた。

「それって、どういうことですか...もしかして」

「あまり考えたくはないですが、その可能性は高いかと。我々が張り巡らせた『結界』の感知した人数は、おおよそ20。しかも戦場獣の姿も確認されてます」

次々と出る謎の単語に、リサはいちいち反応している。夢斗はこのままではダメだ、と思い立ち声を上げた。なにせ、黙ったままでは会話に置いていかれてしまう。

「なあ、どういうことだよ。王国ってのがこの森に入ってきたのが、一体なんだっていうんだよ」

これにはニンバムではなく、リサが答えた。今までののはつらつとした姿が、すっかり勢いを失っている。

「王国・ルガリアは、レジスタンスの人達と敵対している組織、っていうのは、もう説明しましたっけ？」

「ああ。俺が初めて来た時、どんぱちやってた連中だろう」

「イグザクトリー（その通り）。ルガリアはこの近辺では一番の大国で、製鉄技術だけでなく魔法技術、それらを利用した戦争の手法に長けた強国なんです」

随分と難しい話になりそうだ。夢斗は少しだけ、彼女の言葉に身構えてしまう。

「元々、王国とその周辺に住んでいる獣人達は、お互いの領土を守りあって生きてきました。絶対に互いの領域を侵害しないように、暗黙の了解を守りながら」

時折、リサはニンバムを横目で見ている。彼は穏やかな眼差しで、彼女の説明を聞いていた。

「でも、ここ最近『ある事件』をきっかけに、その関係は崩壊。果ては王国が獣人達を、森から排除しようと強行手段を取り出したんですよ」

「随分と急な話だな、それは。一体なんなんだ、その『事件』って」

ここでリサは言葉を失う。目が泳ぎ、実に分かりやすく狼狽していた。

見かねたニンバムがそこから先を引き継ぐ。

「我々、そして王国の面々も、通称『心喰い』事件と呼んでいます」

「こころ...ぐい...」

「ええ。数ヶ月前、森の中でルガリアの兵隊が殺されているのが発見されました。争った末にという様子でしたが、問題はその遺体に残っていた、ある傷跡でした」

随分と含んだ言い方をするニンバム。少しだけ間を置き、夢斗の目をまっすぐ見て告げる。

「犠牲者は二人。いずれも屈強な男性でした。彼らの胸部にはえぐったような跡があり、二人とも『心臓』を失っていたのです」

ぎょっとしてしまう夢斗。嫌な汗が、じわりと皮膚の下から這い出てくる。

「その傷跡は荒々しく、まるで獣の牙で食いちぎられたかのような凄惨な状態でした。そしてその日を境に、ルガリア兵の怪死体が、次から次へと発見されることとなったのです。全員、同様に心臓を『食いちぎられた』かのような姿で」

思いがけない物騒な話に、戦慄してしまう。

「そ、そんなことが...それって、その...犯人は？」

「未だに見つかっていません。もちろん、その傷跡から森の獣がやったとも取れます。ですが、王国はこれを『獣人の異常者』がやったと決めつけたのです」

なんとなくだが、点と点が線に繋がった。

「なるほど、なあ...それが現状ってことか。レジスタンスと王国がぶつかっている、この状況...」

「ご明察です。害をなす獣として我々を排除しようとする王国。そして汚名を着せられ怒りに震

える我々。これこそ、昨今の戦争の起源たるものです」

状況はかなり理解できた。森の中で見つかった怪死体。被害者である兵士に残された痕跡。犯人の行方は未だ分からず、存在の異なる二者は対立まで歩んでしまった。

少しだけ身震いしてしまう。それはもちろん、その怪事件の内容にということもある。だがそれ以上に、レジスタンスと王国———あれだけの数の人間達が、いわば「名誉を汚された」という理由だけで、あんな血なまぐさい戦いを繰り広げるのか。

そう思うと、夢斗はやはり寒気を覚える。今いるこの場所が、なんだか酷く恐ろしく思えた。

そして、続けて先程のニンバムの言葉の意味も、理解してしまう。

「そ、その王国の奴等が、この森に来てるっていうのか」

「ええ。今までこれほどの大軍が直接、送り込まれることはありませんでした。森に踏み込めば、レジスタンスと大規模な戦闘になるのは避けられませんからね。王国も今まで躊躇していたはずですが。だがどうやらこのタイミングで、攻めに転じてきたようですね」

武装した数十名の兵士。彼らがわざわざ、そんな大勢で「話し合い」に来たとも思い難い。ならばその狙いは——ここで、リサがたまらず声を上げる。

「じゃ、じゃあ皆さんも戦うんですか？ ニンバムさん達も、戦うための準備をしてるんですか？」

先程、ニンバムは「急用のため、忙しい」と言っていた。つまりそれは攻め入ってきた王国に対して、大急ぎで戦う用意をしている、という意味に聞こえる。

夢斗も緊張した面持ちでニンバムを見た。彼らは戦わない派閥——だからこそその「融和派」ではなかったのか。

だが、不安げな二人にニンバムは、ようやく笑顔を取り戻して告げる。

「いえいえ。もちろん、我々も戦いは望んでいませんよ。迎え撃つという物騒なことはしたくないのです。ただ、このままでは彼らは『武力派』のアジトに辿り着いてしまう。事が起こって仮にも獣人という同じ人種が傷付くのは、できるだけ防ぎたいのです」

どうやら王国の軍隊が向かっているのは、昨日夢斗達も足を踏み入れていた「武力派」達のアジトのようだ。思想は違えど、彼らは同じ獣人。レジスタンスとして向かう場所が同じである以上、同胞の犠牲は抑えたいということなのだろう。

「なので、実はこの場所には私しか残っていないのですよ。腕っ節の強い者は、お二人が来られる少し前に『武力派』のアジトに救援に向かいました。できれば、穏便に事が済めばいいのですがね...」

そこでニンバムの表情が曇る。言葉にすればするほど、その可能性が低いということが分かってしまうのだろう。

どうやら一夜明けて、こちらの世界でも随分と物騒な事態になっているらしい。再びクレイドルに来れたことを喜び合っていた二人が、今やしんみりと黙ることしかできない。

だが夢斗はあることに気づき、声を上げた。

「ちょっと、待ってくれ...そのアジトって、昨日、俺達が連れて行かれた場所だよな？ それつまり、あそこには光一もいるってことか？」

リサも「えっ」と声を上げた。ニンバムは真剣な眼差しで、ゆっくりうなづく。

「コーイチさんも、今は『武力派』の協力者。どんな理由にせよ、王国とは対立する関係です。もし戦いが始まったとなれば、彼も前線に加わるかと」

全身の肌がビリリ、と痛んだ。目を見開き、声を荒げてしまう。

「それって...光一も、戦うってことか？ あ、あんな連中と、光一が!？」

戦場に迷い込んだ夢斗だから分かる。王国の兵士が持っていた武器は、偽物ではない。鍛え込まれ、重厚な輝きを持つ、しっかりとした一品だ。人を「斬る」力を持ち、故に人を「殺す」力を持つ。

その凶刃のぶつかり合いに、光一も巻き込まれる。会いに来たはずの友人がもうすぐ、その「殺し合い」の場に立つかもしれないのだ。

もはやニンバムが答えずとも、結果は分かっていた。だからこそ、吠えるように夢斗は言い放つ。

「ダメだ、そんなの！ あいつは——光一はああ見えても、ただの高校生なんだ。俺の、昔の同級生なんだよ！ あいつが、殺し合いだなんて、そんなの——」

「分かっています、ユメトさん。お気持ちは分かりますが落ち着いて。だからこそ、我々も被害を最小限に抑えるため、救援に向かったのです」

優しく事実を告げることで夢斗をなだめるニンバム。夢斗は息を荒げながらも、湧き上がる言葉と焦燥を飲み込んだ。

分かっているのだ。だがそれでも、ただただ体の奥底から不安と恐怖が湧き上がってくる。唇を噛み、どうしようもない気持ちに悶える夢斗。

その姿を見ていたりサが、何かを決意したように瞳に強さを取り戻す。彼女はニンバムを見つめなおし、問いかけた。

「ニンバムさん。『武力派』のアジトは、ここからどちらの方角なんですか？」

ニンバムだけでなく、夢斗もリサを見た。青色の瞳に燭台の炎が映り込み、まるで眼差しそのものが燃えているようだ。

その力強い姿に一瞬、夢斗は息を飲む。

「アジト、ですか。ここから南ですが、なぜ？」

「私も行きます。皆さんのお手伝いさせてください」

この一言にはニンバムも驚いたようで、夢斗は息を飲んでしまう。「ふむ」と息を漏らし、賢人は顎を撫でた。

「リサさんも戦線に？ 先程お伝えしたように、今やアジトは随分と——」

「危険だなんて分かっています。大丈夫です、私はルガリアと『武力派』の戦場にも行きました。あの時みたいに、皆を助けてみせます」

夢斗も思い出す。リサはかつて、レジスタンスとルガリア国がぶつかり合う戦場の真っ只中にいたのだ。結果として、夢斗は彼女に間一髪、救われることとなったのである。

小さな体から、今までにないほどの気迫が溢れ出ているのが分かった。確かに、彼女には戦う術がある。ニンバムから貰った「魔法の腕輪」で、力を使わずとも相手を退けることもできるの

だろう。

だが、だからと言ってあえて狂気が渦巻く場に、足を踏み入れるなど――夢斗は彼女の真意を、未だに汲み取れずにいる。

しばらくニンバムは何やら考えていた。リサの顔と天井を交互に見て、思いを巡らせているようである。隣の部屋に飾られている時計の針の音が、妙に大きい。着実に刻まれる時の中で、二人は賢人の回答を待った。

「本気を出したルガリアの兵隊は怖い――これは、我々獣人の中でも有名です。リサさん、あなたも今となっては、彼らからしたらレジスタンスの一員。手加減など、されないかもしれません」

怖がらせているように聞こえるが、それは紛れもない事実だろう。ニンバムという男は賢い。だからこそ、伝えなくてはいけない「事実」を、伝えるべき者に的確に与えている。

リサが拳を握り締めているのが分かった。彼女はまるで震えを押し殺すように、少し大きな声で答える。

「分かってます。一步間違えれば、殺されちゃうかもってことも。だけど、それは私だけじゃなくて、皆さんも一緒です。『融和派』の人達も、『武力派』の人達も―――光一さんも」

きっと彼女は、それを言うべきか迷ったのだろう。夢斗という「友人」の前で、かつての友が死ぬ可能性がある、などと。

分かりきっている事実だ。だがそれでも、それでもなお、意を貫くために彼女はその手痛い事実を前に出したのだ。

また一つ、ニンバムは「ふむ」とため息をつく。彼の真剣な眼差しに、それでもどこかいつも通りの優しさが戻ってきたような気がした。

「あなたは、やはり勇敢な人ですね。それは『オーバー』だからでしょうか？」

「関係ないですよ、きっと。私は痛いのは嫌です。でも、そんなのは我慢すればいいんです。だから大切な人が痛がる方が、もっと嫌なだけです」

息を飲む夢斗。

彼女の凜とした姿に、どこか心が震える。

それはニンバムも同じだったのだろう。「やれやれ」と困ったような顔で、告げた。

「なるほど、なるほど。それは確かに、私も嫌ですね。分かりました、では準備ができたらできるだけアジトの近くまで、転移魔法でお送りしましょう。さすがに向こうの状況が分からない以上、アジトに直接というのは怖い。あとは歩いていきましょう」

その一言に驚くりサ。

「え...それって、ニンバムさんも一緒に――」

「まだ世界のことを分からないお方には、今の森はいささか危険だ。知り合いが傷付くのが嫌なのは、リサさんだけではありませんので」

温和な賢人はどこか嬉しそうに笑った。彼の優しさに、リサは「ありがとうございます」と頭を下げる。

決意を固めた小さき「オーバー」と、兎の賢人。

二人が出撃の意思を固める姿を見て、夢斗は少しうつむく。

どうすべきなのか――拳を握りしめ考えた。今この時、この場所で、自身はどんな選択をすべきなのか。

これから向かおうとしている場所には、確実な「危険」が待っている。昨日、戦場で体感したような荒ぶる暴力。敵と定めた相手に容赦なく向けられる、狂気の群れがそこにはある。

そして今度は自分も、その対象になるかもしれない。

怖い。それがシンプルで、限りなく素直な感情だった。

怪我をしたことは何度もある。今までの人生で血を流したことだって、少なからず体験してきた。

だがそれは日常生活で、あるいは運動を行う上で生じる些細な事故がゆえだ。

今度は違う。これからはかしたら、今まで味わったことのない、もっと強烈でおぞましい痛みが襲いかかってくるかもしれないのだ。

そしてそれが、結果としてその先――「死ぬ」という最悪に繋がるかもしれない。

きっとここにいれば安全なのだろう。リサとニンバム、戦う術を持つ二人に任せれば、きっとうまくやってくれる。そう信じて、待っているのが賢明な判断なのだろう。

一瞬、その道を選ぼうと思った。だが、そんな夢斗の心に、リサが放った言葉が刺さって抜けない。

何もしなければ、もしかしたらまた失うことになるかもしれない。

やっと出会えた「過去」を。

「俺も……行くよ」

驚いて目を開くりサ、そしてニンバム。夢斗はうつむいたまま、目を閉じて言う。

「俺も…一緒に行く」

ようやく前を向くことができた。視線が泳ぎ、どちらの顔を見ていいのか分からない。歯を食いしばり、体の内側で暴れる感情に耐える。

二人共、どう答えて良いか分からない、といった様子だ。

必死に言葉を紡ぎ出し、まずはリサが言う。

「で、でも…危険すぎますよ。ニンバムさんも言ってたように、王国の人達は手加減なんてしてくれないです。もしかしたら…問答無用で、斬られちゃうかもしれないんですよ？」

これはアニメやゲームの世界ではない。姿形こそ荒唐無稽だが、それでもしっかりとここにある現実の世界なのだ。剣で斬られたら、槍で貫かれたら、魔法で粉々にされたら――リセットボタンなど存在しない。一度死んだら、もうそこから先はない。

すかさずニンバムも頷く。

「お気持ちはお察しします。ご友人の身が気になるのは、至極当然の感情です。ただユメトさんはこちらの世界に来て、まだ間もない。クレイドルについて、そして戦うことについてもあまりにも未熟だ。ましてやこの先、足を踏み入れれば何が起こるか、私にすら分かりません」

相も変わらず賢人の一言は重く、そして正しい。夢斗に人を救い出すほどの実力が無い、ということ率直に、的確に告げた。

不安げに見つめるリサ。彼女もまた、もどかしいのだろう。夢斗の味方をしようにも、先に待

つ困難を分かっているからこそ言葉が出ない。

一言を返すのが怖い。その選択をしてしまうのが、酷く恐ろしい。

しかしそれでもなお、心の奥底に「あの日」が蘇る。

そして、それを失った時のあの空洞の心を覚えている。

汗がぐっしょりと濡らす拳を握り、前を見た。

「俺が行ったところで、何が出来るかなんて分からない。この世界について何も知らない。剣も振れないし、魔法だって使えない。そんな俺が行ったところで、お荷物になるだけだ、って。そんなことは、理解してるつもりだ」

真情を吐露する夢斗を、二人は黙って見つめている。

「だけど、このまま待っているだけなんて嫌なんだ。あの時みたいに、また『失う』かもしれない。何もできないまま、何も知らないまま、何かが終わるなんてもうたくさんだ」

なんのためにここにきたのか。そう、夢斗は自問する。

幻想の世界を楽しむためか。そこにいる人外の存在に出会い、人知を超えた力を見るためか。どれも違う。

現実から逃げるために、ここにきたのではない。

いなくなった「現実」を追ってきたのだ。

「お願いだ、俺も行かせてくれよ！ 邪魔になりそうだったら、すぐに身を引く。だから——」
深々と頭を下げた。目をあらん限りの力でつぶり、湧き上がってきた感情と戦いながら。

リサは何も言えず、不安げな眼差しで夢斗を見ていた。ニンバムもすぐには答えず、言葉を受け止めている。

その静寂を破ったのは、賢人・ニンバムのため息だった。

「私にはまだ良く分かりません。ですが、あなたにとってコーイチさんは——『クラスメイト』という存在は、よほど大切なものなのですね」

彼はいつしか、あの優しい眼差しを取り戻していた。今度はリサに向けて言う。

「リサさん。物置へ、ユメトさんを。なにせ今のままの格好じゃあ、あまりにも心もとない。せめて使えそうな防具を見つけてあげてください」

驚き、顔を上げる夢斗。リサもニンバムを見た。

「えっ、じゃあ——」

「まあ、まだ確実に両者が激突するというわけでもありません。とはいえ、事は急いだ方が良いでしょう。ユメトさんの準備が出来次第、出発できればと思います」

一拍遅れて、パッとリサの顔が明るくなった。夢斗も思わず頭を下げ、礼を言う。

「ありがとう...ございます」

「礼は、全てが終わった後にとっておいてください。まずはとにかく、動くことが肝要ですよ」

にっこりと笑うニンバム。彼の視線を受け止めると、自然と心が落ち着く。

善は急げ——早速、リサが夢斗を案内する。

「じゃあ、早速行きましょう、夢斗さん！ 大急ぎで支度ですよ」

「お...おう」

リサに続いて、どんどんアジトの中を進んでいく。大樹の中を利用した隠れ家は、ところどころ目を奪われるような仕掛けが見受けられたが、そんなものに一喜一憂している暇もない。

誰にも出会うことなく、4階にある一室にたどり着いた。

中に入るとまずは、独特のほこりっぽさが歓迎してくれる。周囲から伝わる木の香りに混じり、どこか古びた布や金属の匂いが混じる。

部屋には乱雑に道具が置かれており、木箱やシーツが整頓すらされずに並んでいた。

「うわあ、なんだこりゃ」

「『融和派』の方々の使う、道具が置いてある部屋です。ニンバムさんの研究道具なんかも、置かれてるみたいですねえ」

リサは言いながらずかずかと入っていき、木箱をかたっぱしから開けて確認する。荒々しく蓋が置かれる音が、ガラガラと狭い部屋にこだました。夢斗も遅れて部屋に入り、蜘蛛の巣を避けながら続く。

大きな剣や盾、何本もまとめられた折れた槍。積み上げられた分厚い書物。水晶玉や牙が吊るされた首飾りの束。

実に怪しい品々が転がる。

その中でもリサは使えそうな道具を見つけ出し、木箱を引きずり出した。小さな体を目一杯使い、木箱を持ってくる。

「ふう、これなんかどうでしょう。夢斗さんの体に合うものがあればいいんですけど」

中を見ると、確かにそこには様々な材質の籠手やブーツ、兜や鎧が入っている。手入れはされていないし、ところどころへこんだり欠けたりもしていて、どうやら中古品らしい。

「これを、俺が着るのかい？」

「そうですよお。もし襲われた時、少しでも体を守るためです！」

言われて納得してしまう。動きやすい格好で、とジャージ姿でこちらに来たわけだが、こんな薄い布で外からの力を防げるわけもない。万が一に備えてということらしい。

「これなんかどうでしょうねえ。サイズが合いますかね」

リサは取り出した金属の兜を渡してくる。中世の騎士が身につけるような銀色の兜だ。言われるがままに、とりあえず夢斗はそれをかぶってみる。

大きさは問題ない。だが、あまりの重さに首が曲がりそうになってしまう。

「うおおお!？」

「あー重すぎましたか？」

「あ...うん。こ、これはちょっと...」

確かに頑強な素材ではできているのだろうが、これでは満足に歩くことすらできない。

「重さかあ。ふむふむ、ならこっちはー」

リサは駄目だと判断した防具を足下に置き、次から次へと取り出したものを試していく。その度に防具を着けたり外したりするため、夢斗は慌ただしく息を荒げながら対応した。

怒涛の試着が進むたび、少しずつ夢斗の姿は武装されていく。頭には金属製の額当て、腕には革製のグローブ。迷彩柄の防刃ジャケットとズボンを身にまとった。その姿を見て思わずリサが

声を漏らす。

「オ～ウ、まるでゲリラの兵隊さんみたいですね、マシンガンとか欲しいです！」

なぜだか彼女はテンションが高い。だが、いまいち着慣れない感覚に、夢斗は何度も自身の体を見渡す。

「ほ、本当にこんなんでいいのか」

「大丈夫ですよ～。全っ然、変じゃあないですよ！」

リサには受け入れられたが、現実世界でこんな格好をすることはない。どうもいまいち、コスプレをしているような感覚になってしまう。

リサはさらに木箱の奥をガサゴソとあさっていた。

「あとはブーツか何かあればいいですねえ。足元が寂しいですよ」

あとは脚部に何か身につければ、一応、全身武装が完成する。夢斗も一緒に木箱を覗き込んだ。

リサが武具をかき分けると、奥にキラリと光る何かを発見した。

「おお、何でしょうね、これ」

取り出すと、それは金属製の脚甲であった。金属製のブーツのようでもあるが、ところどころに青いラインのような装飾が施されている。

とりあえず渡されたそれに足を通してみた。だが、見るからに内側の革がたるんでしまっていて、使い物にもなりそうにない。

「あ～、ちょっと厳しいな、これは」

「う～ん、カッコイイと思うんですけど、ダメですか？」

「ま、まあ、確かに見た目はちょっとかっこいいけどな。でも素材がたるんじやあって、使い物にならないよ。それにちょっと重いから、たとえ履けても――」

言いながら、とりあえず無理を承知でつま先を奥に滑り込ませた。

瞬間、ピリッと微弱な痺れが足全体に走った。違和感に思わず眉をしかめる。まるでそんな夢斗に応えるかのように、ブーツに変化が起こった。

弛んでいたはずの革が一気に引き締まり、ぎゅっと足全体を包み込んだ。驚いているとひとりで金属部分が駆動し、カチリと留め具がはまる。

突然の事態に驚いていると、謎のブーツは足にぴったりとフィットしてしまった。

「な、なんだなんだ!？」

慌ててふらつくが、伝わってきた感触にまた驚いてしまう。恐る恐るリサも問いかけた。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ……なんだこれ、すごいぞ」

「え？ す、すごいって何が」

片方だけ履いたブーツを踏んだり、捻ったりして感触を確かめた。明らかに、もう一方のスニーカーを履いた足とは感覚が違う。

「どんな形でもぴったりくっついて、しかも圧迫感もないよ。それに思ったより重さもない」

驚くリサ。夢斗はもう一方の足にもブーツを取り付ける。同じように足が触れた瞬間、革が足

に吸着し、留め具がはまった。まるでブーツが足を「呑み込んだ」かのようだ。

両足で跳んだり歩いたりしてみる。まるで違和感なく、それでいてどこか足が軽くなった気すらした。

「おお、いいぜ、これ。下手なスニーカーより、全然走りやすい」

「へえ、凄いですねえ。なんでしょう、魔法の道具か何かでしょうかね」

思えばリサの持つ腕輪も、ニンバムが魔法を込めた特殊な道具だった。だとすれば、この脚甲もまた魔法を仕込まれたブーツだったのかもしれない。

なにはともあれ、これで夢斗の武装は完了した。不思議な道具に心躍らせるのは後だ。とにかく二人はニンバムの元へと戻る。

「おや、ユメトさん、随分と勇ましい格好に。背がお高いので、まるで歴戦の勇者といった貫禄ですな」

褒めてくれるニンバムに、夢斗は後ろ頭をかきながら苦笑いしてしまう。

「そこまで頼り甲斐があるなら、いいんだけどねえ。迷惑かけます」

「いえいえ。どんな勇者であろうとも、生まれ落ちてすぐは無知なもの。万物皆、同じです。さあ、早速行きましょうか。私のお近くへ」

言われるがままニンバムの近くへと歩み寄る二人。昨晚のことから、やることは分かっていた。

杖を握り、最後にニンバムは二人に告げる。

「まずは、『融和派』の仲間と合流しましょう。しかる後、向こうの状況を見極めながら、次の手を考えます。お二人とも判断はお任せしますが、くれぐれも離れないように」

緊張した面持ちで夢斗とリサはうなづく。ここから一気に、ニンバムの力で転移するのだ。すぐ目の前に戦場が広がっている可能性すらある。

「何が起きてても落ち着いて。最悪、自身の身を守ることを考えてください」

そう告げたニンバムの目は、いつになく真剣な色を帯びていたように思う。彼は意識を集中し、杖に力を集め始めた。先端が光を放ち、やがて杖全体が輝き出す。

光に照らされたリサの姿が見えた。大きな青い瞳の中で白色の光が踊る。その表情は力強さと不安が同居しているような、複雑な色をしていた。

そんなりサと夢斗の視線が交わる。少しどきりとしたが、彼女は大きく、強く頷いた。

「頑張りましょう、夢斗さん！ 必ず、皆さんを助け出しましょう」

小さく、ともすれば頼りなさそうなその体の奥で、確かに何か、強い思いが燃え上がっているのを感じた。

夢斗は少し遅れて「ああ」と、うなづく。

転移魔法が発動する直前、リサはしっかりとこちらに笑顔を浮かべていた。

肌が真っ先に気温の変化をとらえた。一步遅れて、視界が周囲の変化を察知する。相変わらず不思議な感覚だ。気がついた時には、先程とは異なった、別の場所に移動していた。

木の香りではなく、草花や湿った泥の匂いが一気に鼻孔をくすぐる。どうやら森のど真ん中に出たらしい。

慌てず周囲を見ると、リサ、そしてニンバムが立っている。

同じようにキョロキョロと周囲を見渡すリサ。対して、落ち着いた眼差しでニンバムは告げる。

「良かった、狙い通りです。彼らのアジトから少し離れた場所ですよ。ここからは、できるだけ静かに行動を」

囁くような声に無言のうなずきで答えた。にっこりと笑った後、ニンバムは先頭を切って歩き出す。

できるだけ音を立てないようにとはいえ、どうしても葉っぱや枝を踏んでしまうと、騒がしくなってしまう。なるべく慎重に、警戒しながら進んだ。

日が差し込む森の風景は、実に幻想的だ。しかし今の一同には、それを楽しんでいる余裕などない。いつ、どこから敵が飛び出すか、分かったものではないからだ。

時間にして10分ほど歩き続けた。突如、森の奥から甲高い金属の音が聞こえ、足を止める。

驚く二人にニンバムは手で合図を送り、制する。ぴたりと動きを止め、息を殺した。

また一つ、二つと金属同士がぶつかる音が聞こえる。雄叫びのような声も、どこか混じっているように思えた。

「まずいですねえ、これは。どうやら一足、遅かったようです」

ニンバムの一言に夢斗は反応してしまう。

「お、遅かったって...それじゃあ！」

「急ぎましょう。すでに両者は、ぶつかり合っているようです」

ニンバムが言うや否や再び歩き出す。先程までとは違い、ガサガサと音を立てながら足早に進んだ。

自然とついて行く二人も早足になる。なんなら、今すぐ全力で駆け出したかったくらいだ。

進めば進むほど、喧騒は大きさを増していく。茂みを抜け、ついに三人はアジトである大きな縦穴の上に辿り着いた。

森の中に出現した大穴からは、黙々と煙が立ち上っていた。穴の淵から中の様子を伺う。思わず三人は絶句してしまった。

まず目に飛び込んできたのは、倒れている獣人の姿だ。既に事切れているのか、ピクリとも動かない。血に濡れ、力無く横たわる彼らの姿に、一気に全身の血液が加速するのが分かった。

続けて飛び込んできたのは、金属鎧を身にまとった兵士達の姿だ。大国・ルガリアの軍隊である。アジトである縦穴のところどころに、彼らの姿が見てとれる。

身をかがめたまま、リサが言う。

「そんな……こんなこと…」

湧き上がる恐怖に必死に耐えているのだろう。激しい戦いの跡が所々に刻まれている。砕けた武器が散らばり、アジトの壁には傷跡が残っていた。

汗が滲み出る。それは、穴の奥から伝わる熱気のせいだけではない。自身の体内で、恐怖がまた強く燃え上がったせいだ。

そんな中、あくまで冷静に分析したニンバムが言う。

「まだ、アジトの奥では戦いが続いているようですね。生き残った面々もいると思われます。我々の仲間も、きっとそこに」

ニンバムの決断は早かった。彼はロープを引きずりながらも、崖の淵から縦穴の奥へと降りていく。

一瞬、夢斗とリサは身動きが取れなかった。しかしまずはリサ、そして最後に夢斗も続いた。

滑り落ちないように慎重に降りていく。手や足を引っ掛ける場所を探しつつ、一步一步、確実に下へと向かった。

すでにニンバムは通路に降り立ち、周囲を警戒している。

「兵達もアジトの奥へと進んだようです。大丈夫、ここにはすでにいないですよ」

その一言を聞いて少し安心したのか、壁を降りながらリサは言う。

「よ、良かったです。でも急がないと、こうしている間にも皆さんが――」

一步、リサが足を踏み出した瞬間であった。足をかける場所を間違えてしまい、体勢ががくんと崩れる。衝撃で手を離してしまい、小さな体が空中に投げ出された。

「あ――」

その声はリサ、そして同じように壁を降りていた夢斗の喉元から、同時に湧き上がった。一拍遅れて、ニンバムの顔も驚きの色に染まる。

悲鳴と共に落下を始めるリサ。縦穴の高さは、底まで十数メートルはありそうだ。このまま真っ逆さまに落ちれば、とても助からない。

なんとかしないと――そう思った瞬間、反射的に夢斗は手を伸ばしていた。すんでのところで、リサの手を掴み取ることに成功する。

危機一髪、かと思いきや、掴んだ衝撃で今度は夢斗も手を滑らせてしまう。二人の体が宙に投げ出され、一気に落ちていく。

「きゃああああああ！」

リサの悲鳴が響き渡った。手を繋いだまま落ちていく夢斗、リサ。高速で落ちていく中で、夢斗は声一つあげることができない。

すぐ下には堅い地面が待っている。加速したまま、二人はぐんぐんと到達点に近付いていった。

高速で流れる景色。その中で同じように落ちていく、リサの姿だけがはっきり見える。金髪がバサバサとなびき、目を閉じて来るであろう痛みを耐えようとしていた。

どれくらい痛いのだろう。落ちたら、どうなってしまおうのだろう。

そんな不安よりも、何よりも。

やはり夢斗は反射的に、本能で動く。

どうすべきかなんて分からない。どうやればこの状況から抜け出せれるかなど、思いつくわけもない。

だからこそ夢斗は繋いだ手を引き寄せる。リサの体を抱き、自身の体を下にすべり込ませた。自分自身、なぜそんな行動をとったかなんて分からない。恐らくそれは思考を、本能が超えた瞬間だったのだろう。

ただ一つ、確かに考えていたことがある。

目の前のこの少女は、自分のわがままに付き合ってくれた。自分の思いを成し遂げるため、ここまでわざわざ協力してくれた。

だからこそ何か一つでも、役に立ちたかった。彼女の助けになればいい——そう思ったのだ。

自身はどうなっても構わない。だから何か一つ、彼女の痛みを取り除けられれば。

リサを抱きかかえる形で夢斗は着地する。足からまっすぐ、地面へと落下した。

足と大地が接する寸前、無数の思いが弾け、脳内を埋め尽くす。

痛みが、来る——歯を食いしばり、目をつむって、しかしそれでもリサの体だけは離さず、来るであろう絶望に備えた。

ずんっ、という音と共にアジト全体が揺れる。

しかし続けて響いたのは、夢斗の骨が砕ける音なんかではない。

ぷしゅう、という空気が抜けるような音だった。

「————えっ？」

その妙な感触に思わず目を開いた。見れば落下は止まっている。夢斗はリサを両腕で抱きかかえたまま、しっかりと両の足で立っていた。

足元を見つめ驚く。自身の履いている鋼の脚甲。その真横に取り付けられた「穴」から、風が噴出されている。見れば、ブーツを形取る黒い革が膨らみ、まるでクッションのように夢斗の足を守っていた。先程の音はブーツに蓄えられた「空気」が、穴から外に押し出される音だったのだ。

訳も分からないまま見つめていると、ブーツは元どおりの大きさへと戻った。思わず足の裏や側面を見つめるが、特に変わったところはない。

「な、なんだ。どうなってんだ、これ」

夢斗の言葉に、リサも恐る恐る目を開けた。

「あ……あれえ？ 夢斗さん、なんで…」

「大丈夫か、リサ！？」

慌ててリサを地面に下ろす。彼女はぺたりと座り込んだが、すぐに両足で立ち上がった。

「はい、大丈夫です。で、でもなんででしょう。一体何が起こったんでしょうか？」

戸惑うリサ。それは夢斗も同様である。

「分からない…足から真っ直ぐ落ちたら、どういうわけか平気だった。このブーツのおかげか？」

リサも夢斗の足を見る。だが、とても信じられない。崖の入り口からここまでは、ビルで言え

ば4階分くらいの高さはある。人間が足から着地したとしても、とても衝撃に耐えきれものではない。

「なんでしょう、やっぱりそれ、魔法の力を持った道具なんじゃないか？」

リサも興味深そうに、夢斗の足を見つめていた。

なにはともあれ、無事で助かったことに、一安心する二人。

だが去来した安堵は、すぐに消え去ることになってしまう。

「おい、まだ生き残りがいるぞ！ どこに隠れていたんだ、貴様ら！」

慌てて顔を上げると、そこには鎧を着た兵士が二人、立っている。その手には槍が握られており、ギラギラとした眼差しをこちらに向けていた。

「やっべ、見つかった！」

「おとなしくしろ、蛮族共お！」

こちらの言い分すら聞かず、兵士は槍を構えたまま一気に近付いてくる。身構えはしたが、夢斗は行動できない。立ち止まるべきか、逃げるべきか——そうこうしているうちに、結果何もできず距離を詰められてしまう。

「汚らしい蕃族共が、黙って刃の錆にな——」

男が槍を振り上げた瞬間「どごん」という鈍い音が響いた。見ていた夢斗、そしてもう一人の兵士が「あっ」と声を上げた。

槍が到達するよりも早く、リサが腕を振り抜いていた。彼女の持つ「魔法の腕輪」が光り輝く武器を作り上げ、宙に浮かべている。ほのかに輝く「ハンマー」が、兵士の横腹に叩き込まれていた。

「おとなしくしてきたいなら、こんな所、来ないです！」

兵士の一人を吹き飛ばし、それでもリサは止まらない。足を止めてしまった残りの兵士に手を振りかざす。兵士は槍でハンマーを受け止めようとするが、まっすぐへし折られ、そのまま顔面に一撃が炸裂。鈍い音と共に、男の体は倒れ動かなくなった。

腰に手を当て、ふんっと息を吐くりサ。作り上げた魔法のハンマーが光の粒となって消えた。

一瞬で二人の男を戦闘不能にしたリサに絶句してしまう。夢斗は固まったまま、力ない声を漏らした。

「す……すごいんだな、リサは…」

「このくらい、なんてことないですよ！ それにしても、見るなり襲いかかってくるなんて、やっぱり血気盛んな人達ですね」

その返しに引きつった笑いしか浮かべられない。やはりリサと夢斗では、この異界・クレイドルという世界での立ち振る舞いが、まるで違う。経験値の差ということなのだろう。

身動きが取れずにいると、無数の足音が近付いてきた。先程の音を聞きつけ、また新たな兵隊が姿を表す。

「貴様ら、何者だっ！」

今度は数が多い。パッと見ただけでも、6~7人はいる。一瞬、リサも身構えはしたが、数で圧倒されすぐに動くことができなかった。

「オ～ウ、こ、これは厳しいですよ...」

たとえリサの魔法の力を使っても、完全武装したこの人数を相手にするのは、骨が折れる。じりじりと迫ってくる兵士達に、思わずたじろいでしまった。

夢斗はドクンドクンと加速する鼓動を感じつつ、それでも必死に考えていた。リサと違い、武器を何も持っていない。そもそも、持っていたとしても、この人数と戦う術など持ち合わせてもいない。

そんな中で、できることを必死に考えた。そしてある一つの結論を思いつき、リサに叫ぶ。

「リサ、こっちだ！」

背後にどこかへ続く通路を見つけた。縦穴を掘り進んで作られたものだから、どこに繋がっているのかは分からない。だが、ここでおとなしくやられるよりはマシだ。

夢斗の意思をすぐに汲み取り、リサは走る。彼女が気付いたのを確認し、夢斗も振り返りあらん限りの力で走った。

カッコ悪くてもいい。とにかく逃げる――今は戦うことが目的なのではない。獣人達を救うことが先決なのだ。

鎧を着込んでいる兵士達よりも圧倒的に早く、二人は通路にたどり着く。背後から聞こえる金属質な足音に焦りつつも、そのまま通路の中へと駆けていった。薄暗い通路では、壁に掛けられた松明の光だけが頼りだ。

走りながらも隣で駆けるリサに言う。

「ごめん、とりあえずやばいと思って...どこに続いているかなんて、知らないんだけど...」

「ノープロブレム！ ナイスな判断でした。あの人数じゃあ、どっちみち私でも対処できなかったですよ」

思いがけず褒められてしまい、複雑な気持ちになる。兵士達は随分引き離れたようで、足音が遠くなっていく。

「だけど、どんどんニンバムさんから離れちゃってるのは、まずいですねえ。一旦どこかに隠れて、やり過ぎさないと...」

「そうだな。どこか、部屋でもあれば隠れるんだけど――」

互いに前を向き、そして急ブレーキをかけてしまう。足が地面を擦る音が通路にこだました。

通路の前方から別の兵士達が駆けてきている。人数にして4人。どうやら、向こう側からも回り込まれたらしい。

「な...まじかよ、やべえ！」

「ど、どどどどうしよう、後ろからも来てるし...挟み討ちですよ、これえ！」

背後の足音もどんどん近付いてくる。前方の兵士達は二人を発見し、刃を持ち上げ、構えた。

「いたぞ、あそこだ！」

「逃げ場はないぞ、貴様らあ！」

血気盛んな声がグワングワンと反響し、嫌に鼓膜を揺らす。

二人は完全に袋の鼠となってしまった。

「やるしかないかあ...夢斗さん、私が目の前をなんとかします。隙を見つけたら、逃げてくだ

さい」

腰を落とし構えるリサ。腕輪が光り、宙に青い槍が浮かんだ。

それを見て兵士が声を上げる。

「あの女を優先して抑えろ、魔導兵器を持っている！」

男達の視線は一気にリサに集まった。どうやら、夢斗は戦力外と判断されたようだ。悔しいことにそれは事実である。今の夢斗は、彼らに対抗する術を持っていない。

腰を落とし構えるも、夢斗はキョロキョロと周囲を警戒することしかできなかった。

男達が近づいてくる。前方の兵士の持つ剣が松明の光を反射し、ギラギラと光った。鋭利な輝きは、武器が持つ凶悪な威力を物語る。

向かってくる兵士達を睨みつける夢斗。

こんなところで止まっていられない。

こんな連中に阻まれている場合じゃない。

鼓動が加速し、血の速度を上げる。

集中すればするほど、周囲の音が遠さを増していった。

邪魔するなよ——心の中で吠え、一步を踏み出す。怒りや苛立ちを叩きつけるかのように、前方の兵士を睨みつけた。

次の瞬間だった。

大地が揺れ、景色が流れる。強大な力に夢斗の体は振り回され、一瞬、重力を失ったように感じた。

「ッ!？」

全身に走った激痛。肩のあたりに残る、固く重い感触。

まるで何が起こったか分からない。視界がグラグラと揺れ、混乱してしまう。

しかし混乱していたのは夢斗だけではない。その一部始終を見ていたリサ。そして兵士達も同様であった。

一步、踏み込んだ瞬間、夢斗の体が弾き出されるように「跳んだ」のである。まっすぐ前に向かって発射された夢斗は、体ごと兵士の群れに突っ込み、薙ぎ倒す。炸裂した兵士の鎧がへこみ、その衝撃の大きさを物語っていた。前方を遮っていた4人のうち、3人が巻き込まれ再起不能となる。残された一人も、何が何だか分からず絶句していた。

だが、肝心の夢斗も事態が飲み込めない。体を起こすと、気がつけば周囲で兵士達が倒れていた。

「え……あ、あれ？ 何が…」

混乱していると、すぐ横に立つ兵士と目が合ってしまう。我を取り戻したのか持っていた剣を握り、雄叫びをあげた。

やばい、と夢斗が思った時には、横から飛んできた「槍」が兵士の剣を弾き飛ばした。驚き、振り返る兵士。その顔面にまたあの「ハンマー」が叩き込まれ、吹き飛ばす。

兵士を退け、駆けてきたリサが声を上げる。

「夢斗さん、立って！」

彼女の声に跳ね上がるように立ち、駆け出す夢斗。活路を見だし、二人は再び兵士達から逃げる。

走りながらも、リサは先程の現象を問いかけてきた。

「なんですか、さっきの！ 一体、何したんですか？」

「いや、俺も分かんねえよ。何が起こったんだ、さっき？」

まだ肩が痛むが、まるで覚えていない。気が付いた時には兵士が倒れていて、その中に自分がいたのだ。

「夢斗さん、一步前に出たと思ったら、すごい速さで飛んで行ったんですよ！ 兵士達に体ごとぶつかって、吹き飛ばしたんです。まるでボーリングみたいでした！」

思わず夢斗も「ええ？」と声を上げてしまう。

「なんだ、そりゃあ？ 俺は何も……焦って、気持ちだけは負けないように、って前に出ようとしただけなんだけど…」

不可思議な現象に二人とも首をかしげる。

しかし、どんな理由にせよひとまず活路が見いだせたのだ。理由を考えるよりも、今は前に進んだ。

通路を駆け抜けると、そこは大きな広間に繋がっていた。自然に出来上がった洞窟なのか、人工的に掘り抜いたものなのか。天井には照明が飾られ、生活スペースが広がっている。まさに隠れ家といった様相だ。

だがここで、またしても二人の前に無数の足音が近付いてくる。隠れる前に、広場には数名の兵士達が流れ込んできた。

「クッソ、またかよ！ 何人いるんだ」

悪態をつきつつもとにかく構えだけを作り、威嚇する。左右を取り囲むように、兵士達は武器を構え近付いてきた。

前に立つ一人が、二人に向かって吠える。

「貴様ら、獣人ではないな？ だが、兵団の人間とも違う。何者だ！」

これに対し、リサが真っ向から切り返した。

「私達はレジスタンスの方々に用があっただけです！ あなた達と争うのが目的で、きたんじゃないですよ！」

結果的にすでに兵士達と交戦してしまっているのだが、元はといえばレジスタンスの面々を救うことこそ、目的だったはずだ。夢斗もひとまず、必死にうなずいてみせる。

だがそれを大人しく聞いてくれるほど、兵士達も聞き分けが良いわけではない。

「レジスタンスの奴らと関係があるのか？ ならば、捨て置けんな！」

また一步、じりじりと距離を詰める兵士達。

身構え、夢斗とリサも周囲を見渡す。背後の通路から近付いてくる足音がここに到達したら、万事休すだ。

交戦するしかない。覚悟を決めたりサは構えを作る。一步、また一步と近付いてくる兵士に、素早く照準を合わせていた。

夢斗も身構えるが、先程、何をどうやって兵士達を退けたのかは未だに分からない。同じ方法でなんとかできればいいのだが、原理が分からない以上、対抗のしようがない。

緊張した表情の二人に、兵士の一人が吠える。

「一斉にかかり、とりおさえろ！！」

その一言にぎよっとする。夢斗達の動揺が合図になったかのように、兵士達は同時に雄叫びを放ち、駆け出してきた。その圧力たるや、数名であっても対象を威嚇するには十分すぎるほどだ。

右か、左か、リサは気圧されてしまい、狙いを定めれずにいる。夢斗も同様に、逃げるべきか、戦うべきか決心がつかない。動揺が二人の自由を奪い、兵士達の狙い通りその場に張り付けにしてしまう。

あと一步の距離まで兵士達が迫る。彼らは同時に武器を振り下ろし、一斉に二人を襲った。

だが、向かってくる刃の群れはすんでのところで止まる。ガキーン、という硬質な音が部屋中に響き、夢斗、リサ、そして兵士達を驚愕させた。

いつの間にか二人を守るように、透き通った水晶にも似た「壁」が出現していた。美しい障壁は兵士達の武器を受け止め、弾き飛ばす。男達は声を上げ、尻もちをついてしまった。

「チィ、防御魔法か、小賢しい！」

兵士の一人が立ち上がり、悪態をつきながらも睨みつける。だが、壁の力で保護されている二人にも、状況が理解できずにいた。なにせ、この力は二人が発動したものではないからだ。

その「壁」に何度も兵士は刃を突き立てたが、やはり甲高い音に弾かれ意味をなさない。渾身の力を込めて放った一撃のせいで、刃が砕けてしまった。

たじろぐ兵士達。しかし突如としてその光の壁が、スウッと消えてしまう。

再び目を丸くして、驚く一同。兵士の顔に愉悦の色が浮かぶ。

「よし、突破したぞ！ かかれー」

兵士達が再び突進を仕掛けようとした、次の瞬間であった。

先頭の一人に向かって真横から何者かが飛びかかり、蹴りを叩き込む。鈍い音と共に鎧姿が一瞬、くの字に曲がった。

兵士は「ぐほぁ」と声を上げ、地面に倒れる。一撃は見事に急所をとらえ、男を再起不能にしてしまった。

夢斗とリサ、そして兵士達の間立つその人物に、全員の視線が集まる。

目元をすべて覆い隠す兜、肩から先が露出した軽装の鎧。両腕、両足には包帯が巻かれており、鎧の色は全て紅色で統一されていた。頭部にはさらさらした金髪と、丸く大きな耳が確認できる。

血気盛んな兵士はそれでもひるまず、その謎の獣人に襲いかかった。

「おとなしくしろ、この獣があ！」

まっすぐ突き出された槍は、迷うことなく獣人の頭部を狙う。だが謎の獣人は腰を落とし、上体だけを反らすことで見事にかわして見せた。

思わず、鮮やかな動きに目を奪われてしまう。しかも獣人は絶妙な体捌きで、回避しながらも

、兵士との距離を詰める。

槍が引き戻される前に、獣人が打って出た。だらりと下ろした両手にはそれぞれ、拳を覆うようなナックルが握られている。しなやかな動きで、獣人はその一つを男の頭部に炸裂させた。

鋼の拳が兜に叩き込まれ、火花と轟音を響かせる。凄まじい一撃で、兵士は地面に倒れこんでしまった。

残りの一人が剣を構える。だが、あまりにも反応も行動速度も遅すぎた。既に獣人は跳躍し、身を翻して鮮やかな蹴りを放っていた。空中でコマのように回り、綺麗な軌道を描いた蹴りは兵士の首筋に炸裂。これまた一撃で昏倒させる。

一瞬で、部屋に群がっていた兵士達が打倒された。獣人はナックルを腰のホルスターに納め、ゆっくりと夢斗達を見る。

何者なんだ――二人は素性の知れない乱入者を警戒してしまう。獣人である以上、ルガリア王国の敵――すなわちレジスタンスの面々ではあるのだが、とはいえ味方である保証は何もない。「武闘派」の荒くれ集団の一人かもしれないのだ。

だが、黙ったままというわけにもいかない。夢斗はひとまず、警戒はしつつも礼を述べた。「た、助けてくれたのか？ あの...すまない、ありがとう」

どんな反応が返ってくるのかを、興味深く待つ二人。

しかし獣人が口を開く前に、背後から足音が近付いてくる。

「いたぞ、あそこだ！ 急げ！！」

振り返ると、夢斗達が逃げてきた通路を兵士達が走ってきていた。先程まいたはずの男達が、追いついたらしい。

再び走る緊張。だが聞き覚えのある声が、二人の心を解きほぐす。

「ああ、本当は建物を荒らしたくなかったんですがねえ。グレン、すいません」

次の瞬間、飛来した赤い光が通路の入り口に炸裂した。ドゴンッ、という音と共に爆炎が上がり、石造りの壁がガラガラと音を立てて崩れる。一瞬にして通路は封鎖され、兵士達は足止めをくらってしまった。

目を丸くし驚く夢斗とリサ。瓦礫の向こうからは、混乱した男達の声が聞こえる。

再び部屋の中へと視線を戻す。先程、二人を救ってくれたあの細身の獣人の横に、いつの間にか見覚えのある兎耳の男が立っていた。

リサが思わず、彼を呼ぶ。

「ニンバムさん！」

「いやいや、失礼しました。ようやく追いつきましたよ。申し訳ない」

足を滑らせはぐれてしまったのは二人の方なのに、ニンバムは礼儀正しく頭を下げた。二人は思わず彼に駆け寄る。

「しかし間に合って良かった。間一髪、お守りすることができたようですね」

「さっきのあの爆発は、あなたが？ それに、あの光の壁も？」

「ええ、はい。できれば建物は傷付けたくなかったのですがね。グレンが後で口うるさそうで」

苦笑するニンバムに、思わず肩の力が抜けてしまう。しかし、とっさの事とはいえ、彼の「

魔力」をまじまじと見せつけられた。

「それに、ここへ来る途中に『彼女』と合流できたのは幸いでした。私なんかよりも、随分足が速いので助かりましたよ」

「合流できたって...」

夢斗達は横に立つ、謎の獣人を見つめる。兜で素顔が分からなかったが、どうやら女らしい。よく見ると胸の膨らみが見て取れる。兜から覗く黄色い瞳はどこか鋭く、じっとこちらを睨みつけているようだった。その独特の威圧感にたじろいでしまう。

「リサさんも、彼女には初めてお会いしますよね。我々『融和派』屈指の実力者のマウマウです」

ニンバムに紹介され、獣人の女戦士・マウマウは黙って頭を下げた。随分可愛い響きの名前だが、それでも眼光の鋭さは全く衰えない。恐る恐る二人も頭を下げ、礼を述べた。

「さて、再会を喜びたいところですが、のんびりもしてられません。おそらく皆はこの奥です。行きましょう」

ニンバムの言う通り、雑談をするために集まったのではない。こうしている間にも、またどこからか兵士がやってくる可能性もある。

夢斗達が頷くのを確認し、女戦士・マウマウが先陣を切って駆けていく。三人はその背中を目印に、再び走り出した。

縦穴の奥に位置する大広間。本来ならば戦士達が作戦を練ったり、鍛錬をしたりするその広間の中央に獣人達は集められていた。皆、後ろ手に体を縛られ、身動きを取れずにいる。武器も取り上げられ、抗戦の跡もあり、ぼろぼろだ。

その集団を取り囲むのはルガリアの兵士隊だ。刃を獣人達に向け、妙な行動を起こさないよう牽制している。

兵士の一人が、駆けてきて敬礼する。彼は部隊長である「彼女」に、状況を報告した。

「この階層の探索も終了しました。長と思われる男の姿はありません。すでに逃亡したと思われるます」

報告を受けた女性は、その一言に少しだけ表情を曇らす。首を傾けると、深緑の長い髪がざらりと揺れた。髪の間から、種族独特の長くとがった耳が覗く。

銀の鎧をまとった彼女は、他の兵士達とは異なった雰囲気身をまとっていた。すらっと伸びた長い手足。白い肌は透き通っていて傷一つない。長い睫毛を蓄えた眼の中で、金色の瞳が兵士を見つめている。

「そうか、分かった。ご苦労だったな。これ以上の搜索も無駄になる。ただちに搜索班をこちらによこせ」

女性の命令に、兵士は「はっ！」と歯切れの良い返事をし、駆けていった。

軽いため息を漏らし、獣人達を見つめる女性。獣人達の敵意を乗せた眼差しが、全て彼女に注がれる。

「お前達の頭は随分と意気地がないのだな。仲間を置いてそそくさと逃げおおせるとは。一団の

長たる器ではない」

これに対し、狼の頭を持つ獣人が吠える。

「知った風な口を聞くな、女！ 貴様らのような、王に飼われる従順な犬が偉そうに語るんじゃない！」

これを受け、近くにいた兵士が槍の尻で獣人を叩く。鈍い音と共に、彼の痛みを押し殺す声が響いた。

罵声を受けても、女性の表情はなんら揺らがない。

「犬、か。貴様ら学のない者には、そう見えるかもな？ だが、我々は王の絶対なる『法』に従い、正義を執行しているまでだ。貴様らのような害悪を育み、広げる者を律するためにな」

まるで動じない彼女の姿に獣人達は齒嚙みする。悔しげに睨みつける彼らに、なおも女性は言った。

「無駄だとは思いますが、あえて問おう。貴様らの中に、ここ最近、我らルガリアの同胞の心の臓を食らった『心喰い』はいるか？ もし良心がわずかでも残っているならば、名乗り出ろ」

王国がここまで攻め入ったその根幹。すべての戦いの「根」とも言える事件の名を、彼女は口にした。

レジスタンスの面々もその存在は耳にしていた。しかし案の定、名乗り出るものはいない。そもそも獣人達からすれば「心臓を食らうけだもの」のレッテルを貼られたのだから、彼らとて「心喰い」という謎の存在を、見つけ出したいくらいなのである。

しばらくの沈黙の後、女性は「ふんっ」とつまらなそうな表情を浮かべた。

「まあ、答えるわけもない、か。いいだろう。それについて、貴様らには我らの王国に同行してもらおう。逆らった者は、即刻、その場で首を落とす」

率直に、そして実に冷徹な言葉を告げる女性。一瞬、獣人達がざわつく。

そんな中、再び女性の元に兵士が報告に走ってきた。

「ルーメル様、まもなく撤退の準備、整います。ただ、すでにナグルファ隊長が向かわれているのですが、いかがいたしましょう」

彼の一言に一瞬、女騎士・ルーメルは目を見開いた。しかし、すぐに微笑を取り戻す。

「そうだったな。分かった、撤退は隊長が来られて、報告を済ませてからにする。それまで各自、生き残りの捜索と撤収準備を続けろ。警戒は怠るな」

ルーメルの一言に、やはり兵士は「はっ！」とキレのいい返事で答え、即座に行動に移った。

獣人達は自分達の身にこれから起こることを予感し、苦々しい表情を浮かべている。その囚われた者達の中心に、隠れるようにうずくまり、同様に不安げな眼差しを浮かべる犬型獣人の少年がいた。

どうかしないと――拘束されたまま、それでも必死に彼は考える。どこかになにか打開策がないか。この状況を打破する、策がないか。

それこそ、いざとなれば「あれ」を使うしかないのか――不安と緊張が、光一の小さな体の奥で、心を締め付けるようだった。

獣人達と兵士達。そのやり取りを広場の二階通路に身を潜め、夢斗達は見ていた。

荷物の陰に隠れ、小声でニンバムが言う。

「なるほど、ルーメルですか。ということはあれが」

「ニンバムさん、あの人を知ってるんですか？」

リサの問いかけに、こくりと頷くニンバム。

「ええ。我々の間では有名です。ここ最近、ルガリア王国の『殲滅歩兵部隊』の副隊長として、メキメキと頭角を現しだした、エルフ族の女性剣士です。その戦う姿から『深緑の閃光』と呼ばれているとか」

随分と仰々しい通り名に、夢斗は苦笑してしまう。だが実物を目の当たりにしていると、どうにも心から馬鹿にできない。

「そりゃあ、さぞ、すごい剣士なんだろうな、あの姉ちゃん」

遠くに見えるルーメルの立ち姿を見ているだけで、なにか言い知れない不安が湧き上がってくる。一度も、戦ったところを見たこともない。だがなぜか、彼女の持つ実力の高さが分かってしまう。

この場にいる兵士の中で、あの女は別格だ、と。

ニンバムは広場を見渡し、「ふむ」とバツが悪そうに息を漏らす。

「この兵士の数、そして歩兵部隊副隊長のお出まし。実に分が悪いですね。真っ向からぶつかったら、勝ち目があるかどうか」

夢斗はニンバムの向こう側でじっと広場を見つめている、獣人の女戦士・マウマウを見つめ、口を開いた。

「その、マウマウさんがいても、厳しいのかい」

瞬間、彼女の兜の目がぎょろりと動き、こちらを睨む。思わず、後ずさりしそうになった。

「同時に倒せるのは3体まで。それ以上きたら、どうにもならない」

静かに、鋭く、明確に告げるマウマウ。夢斗は一言「そ、そうですか」とたじろぎ、身を引いてしまう。

戦闘能力は決して低くないが、それでも多勢に無勢。この状況に切り込んでいくには、あまりにも人員が足りない。

夢斗はどうしても焦ってしまう。なぜならその目にしっかりと、「彼」の姿を捉えてしまったからだ。獣人達のほぼ中心に、同じように拘束され、座っている光一の姿を。

どうにかしなければいけない――だが、そう思えば思うほど、思考はがんじがらめになり、身動きが取れなくなってしまう。

ああでもない、こうでもないと自問自答を続けていると、ニンバムが口を開いた。

「やはりこういう正統派な力には『変り手』で挑むのが定石でしょうかねえ。ただ、少し危険は伴いますが」

三人が一斉に彼の顔を見る。柔らかい表情の中に、真剣な色が混じっていた。

「しかもこの策だと、我々だけではない。ユメトさんとリサさんにも、動いてもらう必要があります」

思わず緊張してしまう二人。

リサはいち早く、彼に問いかけた。

「な、何をすればいいんですか？ 私達は」

「まあ、そう焦らないで。といっても、先程もお伝えしたように、彼ら全員を相手にするつもりなどありません。これから行うのは、ちょっとした『攪乱』です、レジスタンスをひとまずここから救うだけの、ね」

ニンバムは続けて、手早く作戦を説明した。夢斗、リサ、そしてマウマウも真剣に、黙ってそれを聞く。

説明し終えるのに1分もかからなかった。内容自体は実にシンプル。だが彼が言うように、一人一人に役割が存在する。全てがかみ合って、初めて成し遂げれる策だ。

聞き終えた夢斗は「なるほど」と告げた後に、不安げに口を開いた。

「その...こんなこと言うのもなんだけど、大丈夫かな。結構、単純な作戦に見えるんだけど...」

「ええ、実際単純かつ稚拙な策ではあります。ただ、あくまでこれは『誘導』が目的。そこから先は実際、私にもどうすべきか、その場にならないと分からないのです」

苦笑するニンバム。いかに彼とて、この状況を完全に打破する一手は、持ち合わせていないらしい。

「それに、あまり迷っている時間ありません。先程の兵士の言葉が真実なら、現在こちらに、別部隊も向かっている。それが到着すれば、ここから逃げ切るのはより一層、困難になります」

その一言がより一層、一同の緊張を強くしてしまう。しかし事実でもあるのだ。足踏みしてられる猶予など無い。

拳を握りしめ、ばくばくと高鳴る鼓動を感じる。夢斗は再度、獣人の集団——そこにいる光一の姿を見つめた。

微かな震えを感じつつ、それでも夢斗はニンバムを見つめ直す。

「分かった.....やろうぜ。手遅れになる前に」

彼の意思を受け止め、うなづくニンバム。リサも夢斗の横顔を見て、不安を抱きつつも笑う。

「必ず、皆を助けましょうね！」

「ああ、もちろん。なら、まずは早速、その『準備』だな」

夢斗の視線を追うように、全員が同じ方向を見つめた。二階の通路の奥。そこには巡回を続ける兵士の姿がある。

作戦に必要な「ターゲット」を認識し、全員の意識が固まる。身を潜めながらも、4人は獣人達を救うため、行動に出た。

駆け抜ける勇気

どれくらいの時が流れただろうか。

アジトである縦穴の中には、兵士達の鎧の音がそこかしこから響いている。獣人達が作り上げた反撃の砦も、今や王国の武力が完全に制圧してしまっていた。

エルフの女剣士・ルーメルは髪をかきあげ、呟く。

「しかし埃っぽくてかなわん。いかにも、獣の穴倉という感じだな」

明らかかな中傷。だが、獣人達は何も言い返さない。周囲を取り囲む武力の前になす術がないのだ。

「嘆かわしいことだ。王国の神聖な森に住まわせてもらっているだけでも、恐れ多いというのに。その王国に仇なすなど。まさに蛮族の所業」

その言葉には王国と獣人という存在の、圧倒的な力関係が見て取れた。彼女らからすれば獣人というものに人権は存在せず、あくまで王国が「生かしてやっている」存在、ということなのだろう。

歯噛みする獣人達。だがルーメルにとって、彼らが口答え出来ないことも知っていた。

愉悦にまみれた笑みを浮かべる女剣士。彼女の言葉に、周囲の兵士達も下卑た笑みを浮かべる。

だが一人の少年の言葉が、彼女に刺さる。

「お前らに頼んで、住まわせてもらってるわけじゃない。皆は、昔からこの森にいたんだ」
全員が獣人の群れの中心を見つめる。

そこには中腰でしっかりと前を向き、震える眼でルーメルを睨みつける光一がいた。

彼の一言を受けて兵士の一人が槍を構えた。しかし、ルーメルはそれを手で制する。

「ほお、少年。随分と勇ましいな」

「森が自分達のものだなんて、傲慢だ！ 獣人達だって、それを当たり前だとなんて思っていない。皆、森に感謝して、敬いながら生きている。乱暴者はどっちだよ！」

震えが止まらない。

もしかしたら次の瞬間、彼女が剣を抜くかもしれない。そんな恐怖が、次から次へと湧いてくる。

だが我慢できなかった。たとえ、どんな武力を振りかざされても、周りにいる彼らが虐げられることが許せなかったのだ。

こちらの世界に来て、荒くれ者の集まりではあっても彼らは親切に、ぶっきらぼうに自分を受け入れてくれた。

そんな存在が一方向的に踏みにじられる。それが光一にとって、ただただ「どす黒く」見えたのである。

それだけの覚悟を叩きつけられても、ルーメルはやはり揺らがない。「ふっ」と一笑に付してしまう。

「意外と獣も信心深いのだな。覚えておくよ、少年」

せっかくの怒気を払いのけられ、どうしようもない悔しさを抱いたまま、光一は座り直す。歯を食いしばり、湧き上がる焦燥に耐えた。

不安、憤り、焦り。

様々な感情が渦巻く、その奥の奥。

そこでふっと、光一は「彼ら」のことを考える。

昨日、異界・クレイドルで出会った、かつての旧友。そしてその仲間。

彼らはどうしているだろうか。今頃向こうは何時なのだろう。

自分の家族は今、何を思っているのだろうか。まだ自分のことを、覚えていてくれるのだろうか。

今までこんな感情は湧き上がってこなかった。こちらの世界に染まっていくたびに記憶が薄らぎ、そんなことを考える暇すらなかった。

今ならはっきりと心に浮かぶ。

「彼」の登場で全てが動き出した。

ぶっきらぼうで、無愛想で、それでもただただ、良心を持つ「彼」のおかげで。

目をぎゅっと閉じ、歯を食い縛る。

心の奥底で光一はただ、ただ、叫んだ。

こんなところで死にたくない――暗闇の中で必死に思い描いた、シンプルな願い。

その願いが通じたのか。はたまた、ただの偶然なのか。

まさにその時、遠くから大きな音が鳴り響いた。

目を見開き、顔を上げる光一。獣人達、そして兵士達も皆、驚いたように振り向く。

真っ先にルーメルが吠えた。

「なんだ、何があった！」

これに対し、広間に一人の兵士が足早に駆けてくる。彼はフラフラしながらそれでも敬礼し、叫んだ。

「た、大変です！ 獣人達が大量して押し寄せています。魔法使いも大勢！」

兵士達がどよめく。報告した一人に対し、ルーメルは毅然と言い放つ。

「なるほど、増援ということか。数はどれくらいだ？」

「ざっと確認しただけでも、20。こちらに真っ直ぐ向かっています！ とても抑え切れません！

小隊長がやられ、指示系統も混乱しています！ このままでは！！」

より一層、ざわめきが起こる。兵士達は不安の声を。そして獣人達は喜びの声を上げた。

光一も予想外の事態に、目を見開いて周囲を見渡す。

ルーメルの顔から愉悦が消える。だが冷静に、静かな眼差しで彼女は告げた。

「そうか。よし、最低限の見張りをつけ、私と共に来い！ 蛮族共を迎撃するぞ！」

自ら先陣を切り、駆け出すルーメル。報告に来たボロボロの兵士、そして部屋にいた数名が続いて、部屋から駆けて行った。

広間には拘束された獣人達と、数名の兵士達だけが残される。

獣人達は皆口々に「リーダーが来てくれたんだ」「ざまあねえぜ、あの女」などと、荒々しい

声を上げている。

この盛り上がりを一人の兵士が遮ろうとした。

「うるさいぞ、貴様ら！ 黙れ、静かにしー」

槍の穂先を向け、威嚇をした、その瞬間。

彼の言葉を「ずどん」という音が遮ってしまう。全員が兵士の姿を見て、絶句した。

一同が視線を向けた時には、兵士の体は真横に吹き飛んでいた。鎧の脇腹がベコリとへこみ、衝撃の位置と大きさを実感させる。

彼の背後には、マントを身につけた金髪の少女が腕を振り抜いて立っていた。

「うるさいのはあなた達でしょう、さっきからガミガミガミガミと、ビー、クワイエット！！」

金髪・碧眼の少女・リサが吠える。その小さな救世主の登場に、獣人達から歓声が上がった。

残った兵士が素早く彼女を取り囲む。前に二人、後ろに一人。いずれも槍を構え、威嚇していた。

「何者だ、貴様ッ！ 蛮族の仲間か！」

構え、左右を交互に見るリサ。

そんなリサに背後の一人が吠えた。

「逆賊め、反逆者には死、あるのー」

だが、振り返りながらもリサが腕を走らせ、彼の言葉を遮る。空中に出現した「ハンマー」が、まっすぐ男の顔面にめり込み、打倒した。

また一つ、歓声上がる。

「うるっさい人からやっつけますからね！ 今、決めましたからね！」

再び前を向きなおし、構える。一瞬、兵士二人は戸惑ったが、やはり訓練された軍人だ。槍を構え直し、吠えた。

「粹がるな、チビが。調子に乗り追って！」

「ち、チビって言いました！？ 人が気にしてることを、ズケズケとお！」

飛びかかってくる兵士。その槍を、リサも「槍」を生み出してぶつけた。ガァン、という甲高い音がいくつも響き、衝撃が風となって伝わる。必死にリサは腕を動かし、魔法の「槍」で迎撃した。

だが、どうやっても兵士の方が力は強い。無理矢理、魔法の槍が弾き飛ばされ、それに連動するように体勢を崩してしまう。「きゃあ！」と悲鳴をあげ、よろめくりサ。この隙を逃さず、雄叫びをあげながら兵士は突っ込んできた。

やばいーリサだけでなく、誰もがそう思ったその時、予想外の「乱入者」が兵士の突進を止めた。

獣人の一人、豚の頭をした男性が強烈な蹴りを叩き込み、吹き飛ばす。兵士が壁に叩きつけられ、力なく地面に落ちた。

予想外の事態に目を見開くりサ、そして兵士。見れば、それは先程まで拘束されていたはずのレジスタンスである。

「き、貴様、どうやって…」

うろたえる兵士の体が、宙に浮かぶ。

背後からまた別の獣人が男に襲いかかったのだ。足首を持ち上げ、一気に振り回す。鉄の鎧を着ているはずの男の体が、軽々と空中を縦横無尽に舞った。

猪の頭部を持つ巨漢の獣人。彼は雄叫びと共に、兵士をまっすぐ地面に叩きつける。

ずしん、と大地が揺れた。リサの小さな体が思わず跳ね、こけそうになってしまう。

豪快すぎる一撃に開いた口がふさがらない。無論、叩きつけられた兵士は、昏倒していた。顎が砕けたのか、だらしなく口を開いている。

「オ〜ウ、も、モーレツ、ですね」

リサの気の抜けた一言に続いて、獣人達は勝どきの声を上げた。豚と猪の獣人は互いの腕をぶつけ合い、ガッツポーズを作って見せた。

彼らは振り返り、獣人の群れの中を見て言う。

「ありがとうよ、若えの！ おかげで、すっきりしたぜ」

全員の視線が集まる。そこには、獣人達の群れにまぎれた夢斗がいた。

夢斗は獣人の縄をまた一つ解きながら、とりあえず困ったように笑う。

彼の顔を見て、光一が声を上げた。

「ゆ、夢斗君！？」

「よお、光一。1日ぶり」

言いながら、手際よく縄を切っていく夢斗。すぐさま光一も解放した。

「わりい、遅くなった。大丈夫か？」

「あ、うん...大丈夫、だけど...どういうこと、なんで夢斗君が？」

「あ〜、説明すれば長くなるけどなあ。とりあえず『融和派』の人らと合流して、助けに来たってところだ」

最後の一人の縄を切り、体を持ち上げた。獣人達は礼を言いながらも、奪われた各々の武器を取り戻し喜びの声を上げる。

リサも二人に駆け寄ってきた。

「うまくいきましたね、夢斗さん！ ナイス、アシストですよ！」

「いやあ、俺はなにも。リサこそ、危険な役を任せちゃったな」

リサは笑いながら、ぶんぶんと首を横に振る。

「ノープログラムでっすよ！ 夢斗さんが手早く動いてくれたんで、助かりましたよお」

嬉しそうに言う彼女に、なんだか夢斗も恥ずかしくなり、後ろ頭を搔いてしまう。

だが、やはり間に立つ光一は、状況が理解できてない。

「ど、どういうことなの、これ。グレン達も応援に来てくれたの？」

「ああ、いや。すまない、あれは嘘だ」

思わず光一が「嘘お！？」と叫ぶ。

混乱する少年にリサが補足した。

「そういう作戦だったんですよ。兵士のふりをしたマウマウさん...ああ『融和派』の方なんですけど。彼女が嘘の情報を流して、兵士達をこの部屋から連れ出してくれたんです。私達は手薄

になったところで、皆さんを助ける、ってことですよ」

夢斗も頷き、続ける。

「今頃、二人が適当に暴れながら、逃げ回ってくれてるはずさ。最初の爆発音もニンバムさんが魔法でやってくれた」

「そ、そういうことだったのか。でもあの兵士の鎧は、どこで」

「ああ。あれなら、その辺を巡回している奴のを拝借したのさ」

兵士のふりをし、あたかも大軍が攻めてきたかのように誘導し、獣人達を解放。

内容自体はシンプルだが、どうにかうまくいったようで、一安心である。

思わず光一はため息を漏らした。

「なんだあ、もお！ 焦ったよ、本当」

がっくりとうなだれる光一。しかし、彼は再び顔を上げ、力なく笑う。

「でも...良かった、二人共無事で。ありがとう」

少なからず彼の中に抱いていた不安が、取り除かれたのだろう。疲れきった笑顔を浮かべる彼に、二人も自然と笑顔になる。

「いいよ、んなの。それにまだ終わってねえ。とにかく、今は全員にここから避難してもらわないとな」

光一も獣人達を見る。

実際、まだ終わってはいない。こうしている間にも、王国の別働隊がこちらに向かっているはずだ。もしそれが到着すれば、いよいよまずい。

今は喜び合っている暇はない。とにかく、まずは逃げなければいけない。

獣人達に事態を説明する三人。最初は渋っていた彼らだが、夢斗らの必死の説得にあの豚の獣人が納得してくれた。

「しかたねえな。本当ならもっと暴れたいところだが、命の恩人の頼みを断るわけにもいかねえか。おし、ついてきな。外に続く隠し通路がある」

思いがけず「命の恩人」などと称えられ、妙な気分になってしまう。しかし一喜一憂する暇などない。今はとにかく、迅速に行動しなければいけないのだ。

獣人達の群れについて、最後尾を走る夢斗ら三人。撤退とはいえ、武器を持ち真っ直ぐ退路に向かうその光景は壮観だ。荒々しい戦士達が目的のため全力で駆けていく。伝わってくる地響きに、思わず身震いしてしまう。

しかし遠くから伝わった爆音に、足を止めてしまった。

「あれは...ニンバムの？」

伝わってきた爆発の音は、夢斗とリサにとって聞き覚えがあった。ここに来るまでにニンバムが通路をふさぐために使った、あの魔法の音である。

三人がいるのはちょうど通路の分かれ目。獣人達は右に向かうが、轟音は断続的に左側から聞こえてくる。

この奥できっとニンバム、そしてマウマウが戦っているのだろう。

「おい、なにしてる！」

豚の獣人が振り返って怒鳴る。夢斗達は、互いの顔を見合わせてしまった。

このまま逃げるのがきっと得策なのだろう。夢斗らの目的はレジスタンスをこの場から撤退させることだ。兵士達を退けることではない。

だが、三人は走り出せなかった。この先でいったい何が起きているのだろうか。ニンバムとマウマウは、果たしてどうなっているのだろうか。

汗が、じっとりと全身を濡らす。最初に決断の一言を放ったのは、リサだった。

「皆さん、行ってください。私はニンバムさんを援護しに行きます」

夢斗、光一が少女の顔を見つめる。青色の瞳が微かに震えている。

思わず、夢斗は声を上げた。

「援護って...戦うつもりかよ!？」

「だってあんな人数を、ニンバムさん達は二人きりで相手してるんですよ！ やっぱり、放っておけないですよ！」

自分達の事は気にせず、とにかく逃げろ——それが、ニンバムが告げた言葉だった。

彼らなら大丈夫。そう、夢斗は言いたかった。

しかし遠くから聞こえてくる音、揺れを感じると、その言葉が出ない。その励ましに、まるで根拠も説得力もないからだ。

「お二人は、皆さんと一緒に。早く！」

返答を待たずに駆け出そうとするリサ。

猶予はない。だからこそ、反射的にその言葉が出た。

「待てよ！ 行くなら、俺も——！」

急停止し、こけそうになるリサ。彼女だけでなく、光一も驚いて夢斗の顔を見上げた。

歯を食いしばり、震えを押し殺す。

「頼む...足手まといかもしれない...でも」

説得するだけの言葉も持ち合わせていない。事実、自分が何もできないという事は、嫌というほど分かっている。

だからこそ、夢斗は己の唯一持ち合わせているもの——「感情」という、不確かだが強い物を頼りに、言葉を紡ぎ出す。

その一言にリサ達は何も返せなかった。

頼りない言葉ではある。

だがそれでも、夢斗から伝わる言い知れない気迫に、身動きができない。

強く、けっして折れない「意思そのもの」と対峙しているかのようだ。

やがて、リサがまっさきに頷く。

「分かりました、行きましょう！ 危なくなったら——」

「分かってる！ やばいと思ったら、ちゃんと自分を守るから」

リサの配慮も理解したつもりだ。だからこそ、吐き出した言葉を自身に言い聞かせるように、力強くうなづく。

その言葉に応えたのは、リサだけではない。すぐ隣で、ふう、と光一もため息をついた。

「言いだしたら聞かないよねえ、夢斗君は。自己主張しないように見えて、結構わがままなんだよね、なんだかんだで」

急にいつもの調子を出す光一。その意地悪な笑みに、驚いてしまう。

「僕も行くよ。一緒に」

「一緒になって、お前——」

「夢斗君らより、このアジトの事は知ってる。大丈夫、戦うのが目的じゃない。逃げるんなら道案内は必要でしょ？」

夢斗らの心中を見透かしたかのように、また光一は笑う。

なんだか調子が狂う。固めた意思が一気に解きほぐされ、無駄な緊張が消える。

助けに来たはずなのに、結果として光一に心を救われてしまった

三人の揺らいでいた心が、それでも少しだけ同じ方向を向く。

立ち止まったままの三人に、痺れを切らした獣人が声を上げた。

「おいお前ら、急げよ。何してる！」

振り向き、真っ先に応えたのは夢斗だった。

「すまない、あんたらは先に脱出してくれ。俺らは残ってる人をつれて、続く！」

はっきりとした返事に、巨漢の獣人も一瞬たじろぐ。青年の身体から発せられる強い思いを、受け止めたのだろう。

少しだけ躊躇していたが、やがて愛用の斧を担ぎなおし、ため息をつく。

「そうか...気をつけな、やつら足はのろまだが、あの女だけは別格だ。変な気起こさず、とっと逃げな」

その言葉を最後に、豚の獣人はどすどすと体を揺らし、脱出路へと走っていった。

乱暴な見た目に反し、根の部分は随分と優しいらしい。

思いがけず、体から無駄な力が抜けた。三人はリラックスし、脱出路とは別方向へと駆けだす。

向かう先からまた一つ、嫌な地響きが伝わってきた。

行く先々でルガリアの兵士達が倒れている。皆、気を失っているようで、ピクリとも動かない。死んではないと思いたいが、今は雑念に捕らわれず、とにかく走る。

徐々に、着実に近付いてくる戦いの音。また一つ、倒れた兵士を飛び越え、駆け抜けた。

三人は大部屋に駆け込んだのと同時に、目の前に広がる光景に絶句してしまう。

部屋中に倒れる兵士。何人かボロボロになり、膝をついて耐えている者もいる。彼らと対峙するように、賢人・ニンバムもまた膝をつき、ゼエゼエと肩で息をしていた。

その両者が向かい合う中央でまた一つ、金属がぶつかる音と火花が散る。刃をぶつけ合っているのは「融和派」の実力者である獣人・マウマウ。そして王国の部隊にて副隊長を務める、女剣士・ルーメルだった。

凄まじいぶつかり合いである。マウマウは軽装とはいえ、身につけている鎧の重さを物ともせず、高速で飛びかかる。両手にそれぞれ握った鋼鉄のナックルで、ありとあらゆる角度から襲い掛かる。その様はまさに猛獣。「牙」で襲いかかる肉食獣のそれだ。

だが、その怒濤の攻撃を剣士・ルーメルも軽やかにかわしている。彼女が扱うのは、他の兵士のそれよりも大きな長剣だ。まっすぐの刀身は銀色に輝き、表面には何やら文字が刻まれている。

縦横無尽に、重さを感じさせずに高速で飛び交う剣。それがマウマウの放つ連撃をことごとく防ぎ、受け止め、流す。

鋼と鋼の炸裂音が、次から次へと大気を揺らす。どれだけ猛攻を仕掛けても、どれ一つ意味をなさない。

夢斗が素人目に見ても分かる。明らかにマウマウの方が消耗が激しい。対するルーメルは汗ひとつつかかず、刃を構え直していた。

ここで、乱入してきた夢斗らにニンバムが気づき、声を上げた。

「皆さん、どうして...」

彼の一言をきっかけに、ルガリアの兵士達もこちらを睨みつけた。とはいえ、彼らは皆満身創痕。襲いかかる余力は残っていないようである。

となれば、あとはあの女剣士のみ、ということだろう。

リサが吠え、躊躇することなく前に出た。

「レジスタンスの皆さんは、もう大丈夫です！　あとはお二人だけですよ！」

三人が助けに来た、ということに驚いたのだろう。ニンバムはやがてまた、困ったように笑った。

だが、ひときわ大きな金属音が一同の視線を奪う。

マウマウが弾き飛ばされ、なんとか踏みとどまり構え直していた。肩に一撃をもらったらしい。鮮血が溢れ、地面に落ちる。

一同の見ている前で、ルーメルは剣をひゅんひゅんと回転させて見せた。

「他の獣人達とは一線を画す实力を持っているようだが、あいにく底は知れているな。蛮族はどこまで行こうと、蛮族。それで騎士の刃は砕けん」

随分な余裕である。だが悔しいことに事実、彼女はまるで消耗している気配がない。

その剣の切っ先がマウマウではなく、ゆっくりと夢斗らに向けられた。

「見たところ、獣人ではないようだが...しかし、彼らに加担したことは事実だ。同行してもらうぞ、貴様ら」

凄まじい圧が、夢斗ら三人を叩く。見えない気迫の壁に思わず後ずさってしまいそうだ。

それを察したのか、ニンバムが吠える。

「皆さん、逃げてください！　あなた達には、危険すぎる！」

賢人の言葉に間違いはないのだろう。このルーメルという女性の実力は嘘偽りのない、本物なのだ。

だが、もはや止められない。

身動きできずにいる夢斗に構わず、小さな金髪の「オーバー」が答える。

「逃げるんなら、ニンバムさん達も一緒にです！」

瞬間、誰の制止も聞かずにリサが走り出す。既に腕を振り上げ、あの腕輪の力を解放していた

。

夢斗が声を上げる間もなく、リサは空中に巨大な光の「斧」を作り出す。その光景に思わず兵士達がどよめく。

たった一人、ルーメルだけは向かってくる敵意を受け止め、それでいて冷静に構えていた。

「ほう、魔法で武器を作り上げるか。これはこれは」

余裕を崩さないルーメルに、ついにリサが雄叫びをあげた。

「おっらあああああああ！！」

初めて聞く少女の怒号に戦慄する。瞬間、巨大な斧は真っ直ぐ地面に振り下ろされ、大地を割った。

相変わらず凄まじい力である。岩が砕け散り、炸裂部は大きくえぐれている。人間が真っ向からぶつかれば、立ってなどいられないだろう。

しかし、その一撃を後方に飛び退き、ルーメルがかわす。散弾のように飛び散る瓦礫を長剣によって砕き、防ぎきる。

大きく体を動かし、空中の斧を操作するリサ。右へ、左へと、巨大な刃が振り抜かれるたびに空気がかき回され、突風が生まれる。

尋常ならざる破壊力を持つ一撃も、ルーメルはいとも簡単にかわす。身を翻し、時には剣をぶつけて軌道を反らし。巨大な武器を目の前にしても、その冷静さはまるで揺らがない。

また一つ、振り下ろされた斧が大地をえぐる。だが、これもルーメルは一瞬早く飛び退き、かわして見せた。

剣を持ち上げる女剣士。しかし同時に気づき、目を見開く。

「ほお」

そんな何気ない一言を呟き、刃を真一文字に振り抜いた。

ルーメルに飛来した数本の矢が、一撃の元に叩き落とされる。リサ、ニンバム、マウマウ、そして夢斗が驚き、息を飲む。

夢斗の横で、光一が弓を引き絞った構えのままルーメルを睨みつけていた。リサを狙わず的確に、彼はルーメルだけに矢を放って見せたのである。

「夢斗くん、あっちの二人の手助けをお願い！」

光一はそう言い放ち、矢を放ちながら右へと走る。角度を変え、ルーメルを狙うつもりのようなうだ。

近接距離で攻防を続けるリサ、遠距離から狙い撃つ光一。その二人の猛攻をしのぎきる剣士・ルーメル。

三者の激突が繰り広げられる中、夢斗は光一に言われた通り、ニンバム達に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「ああ、ユメトさん...まさか、あなたまで来てくださるとは。面目ない」

こんな事態にまで謙遜するニンバムに、思わず「そんな」という言葉が漏れる。

「すまない...危険だって分かってたけど、それでもー」

「いえいえ、いいのです。もはや、ユメトさん達の決意を無碍になどしませんよ。ありがとうございます」

ざいます。あなた方は、勇敢なのですね」

傷を抑えながらも笑うニンバムを見て、なんだかやりきれない気持ちになる。助けられているのは、自分達のはずなのに――その笑顔が、かえって心苦しい。

「それに、むしろこうして皆さんと合流できたのは、好都合かもしれません」

「え、それって、どういう...」

「活路がほんの少しですが見えた、ということです。ただ、もうしばし時間をいただければ、ですがね...年甲斐もなく、魔力を使いすぎました」

どうやらニンバムには、この場から退くための確かな道が見えているようだ。だが、そのためにはあと少し、耐える必要があるらしい。

彼の思惑は謎だが、とにかく彼らに応急処置を施す。なにかあった時に、とりサからアジトで渡されていた数枚の薬草を手渡す。

マウマウの傷の手当てが終わった時、リサの悲鳴が響き渡った。

「きゃあ！」

顔を上げると、リサが後ろに倒れ尻もちをついていた。右手の甲には鮮やかな切り傷が刻まれ、血が溢れている。空中の斧が、力なく光の粒となって消えた。

遠方から援護していた光一が、焦る。

「こっの！！」

矢が連続で5発放たれるも、その全てをルーメルは軽々と落としてみせる。刃が動くたびに空気までが刻まれているかのような、錯覚に陥った。

歯噛みする光一に、女剣士は冷やかな視線で告げる。

「良い腕をしているが、まっすぐ飛ぶだけの矢など、蠅を落とすよりもたやすいぞ」

嘲笑に、背後で見守る兵士達まで歓声をあげた。

光一がこちらの世界で培ってきた弓の腕前は本物だ。狙った箇所到的確に矢弾を送り込む、確固たる技術がある。狩りを行っていく日常の中で練磨されていったのだろう。

しかしそれを持ってしても、まるでルーメルという剣士の気持ちは揺らがない。それほどまでに、他の兵士達とは格が違っている。

後ずさるリサ。焦りから汗を浮かべる夢斗。

だがそんな中でも、光一はまだ退く気はない。

「そう...じゃあ、さあ...」

光一はおもむろに、腰にくくりつけていた小さな瓶を取り出す。中には「水」が入っており、彼はそれを手にふりかけ、濡らした。ポタポタと雫が落ちる中、その奇妙な行動に誰もが目を奪われてしまう。

浮かぶ疑問は次の瞬間、驚愕へと変わってしまった。

光一の体がかすかに青く光る。手にまとわり付いていた水がひとりで渦を巻き、弓の中央に収縮し始めた。少しずつ、水が空中である「形」を作り上げていく。

宙に浮かんだ「それ」を掴み、しっかりと弓に添え、構えた。光一の瞳が青く光っている。

「曲がる矢なら、どうさ！！」

水を固めることで作り上げた「矢」を放つ光一。水の一矢は風切り音と共にまっすぐ、雫を散らしながらルーメルに迫る。

予想外の一撃も、ルーメルはしっかりと見据えていた。矢の軌道を予測し、刃を少し持ち上げ迎撃の構えに移る。

打ち落とされる――誰もがそう予感するのと同時に、空中を飛ぶ「水の矢」が変化した。

矢に突如、まるで「トビウオ」のような羽が生え、空中でぐわんと軌道を曲げる。ルーメルの正面から右へと回りこみ、矢はこめかみを狙った。

「ほう…」

先程よりも少し真剣みを帯びた顔で、ルーメルは身をひるがえす。上体を反らすことで、間髪、矢の直撃を避けた。行き場を失った水の矢は壁まで飛び、乾いた音を立てて弾ける。炸裂した箇所の岩に、深々と穴が刻まれているのが見えた。

光一はさらに畳み掛ける、2発、3発と連続で水の矢をルーメルにけしかけた。羽を生やし、自由な軌道で襲いかかる矢の群れ。まるでそれは小さな魚が群れをなし、空中を泳いでいるかのようだ。

しぶきがそこら中を濡らす。ルーメルは先程よりも大きく体を動かし、刃をダイナミックに操作することで、攻撃を防ぎ続けた。

幻想的な光景である。宙を飛び交う「水」に囲まれ、その中心で刃を走らせる女剣士。刃に反射した光は、宙に浮かんだ水泡に乱反射し、キラキラと輝く。

ゼエゼエと肩で息をし、腰の瓶から水を補充する光一。しかし、指先の感触に目を見開いてしまう。

放ち続けた「水」はついに底を尽きてしまった。

思わず「くっそ！」と声を上げる光一。

対してルーメルは、ひゅんひゅんと刃を振り抜き、水を払いのけ、立つ。

「曲がろうが曲がらまいが、大した問題ではなかったな」

室内のランプの輝きを受けて凜と立つその姿が、敵ながら「美しい」とすら思えてしまう。まるで揺らぐが、動じず、折れずにこちらを見る姿に、戦慄と恐怖、そして不覚にも憧憬すら抱いてしまった。

格が違いすぎる――絶望する夢斗達、沸き立つルガリア兵達。

そんな中、ルーメルは刃を下ろしゆっくりと、目の前で尻餅をついたままのリサに近づく。

「中途半端な力は、己が身を滅ぼす。覚えておくんだな」

ずちゃり、と水たまりを踏みつける脚甲の音に、リサの背筋を冷たいものが駆け抜けた。自身に向けられた極上の「殺気」に身動きが取れない。

ニンバムが「いけない！」と静かに声を上げる。マウマウも傷を押して、駆け出そうと構えた。

だが、遠すぎる。ニンバムが魔法を唱えるより、マウマウが飛びかかるより、光一が矢を放つより――ルーメルが剣を振り抜く方が、早い。

誰しもがとっさに動こうとした。しかし非情にも、加速した意識の中で確実に、即座に刃は振

り上げられる。

リサは、ただ目の前の剣士を見ていることしかできない。恐怖に足がすくみ、逃げることすらできなかった。間近でぶつけられた濃厚な殺気が、彼女の細胞そのものを縛っている。

蛇に睨まれたカエル——その無惨な光景を、夢斗もはっきりと見つめる。

あの鉄の延板が振り下ろされた瞬間、リサはどうなるのだろう。鋭く重い刃は彼女の皮膚を、肉を切り裂き、骨を断つ。そうなった時、リサは生きているのだろうか。

こちらの世界に来た瞬間、夢斗は「戦場」を見た。切断され、潰され、既に事切れた無数の肉体がそこにはあった。もはや、生き物ではない、ただの肉塊へと変貌した姿が、今でも思い出される。

リサが、死ぬ——まだ出会ったからそこまで、互いのことは知らない。別段仲が良い親友というわけでもないし、血の繋がった兄弟というわけでもない。

だけど、それでも夢斗の脳内には、瞬時にリサと出会ってからの記憶が一気に蘇っていた。ハーフがゆえに、金髪・碧眼を持った、快活な少女。やんちゃに見えて、しっかりと他人の気持ちを考え行動する女性。

そんな彼女が、あの無慈悲な一撃で死んでしまう。

理論理屈、法や世界の理。それら全てを無視し、夢斗の中にたった一つの、なんてことはない単純な感情が爆発する。

ダメだ——瞬間、景色が一気に流れたのが分かった。体に急激な圧がかかり、突風が肌を後ろへと引っ張る。

本能的に、反射的に駆け出す夢斗。

その場の誰が行動を起こすよりも早く、一步、前に飛び出していた。

「な——」

声をあげたのはルーメルだ。だが同様にニンバム、マウマウ、光一が驚愕する。

夢斗は一步で急加速し、残像を焼き付けるほどの速度で駆け抜ける。ルーメルの長剣は空を切り、気が付いた時にはリサの姿はどこにもなかった。

ルガリア兵達から驚きの声上がる。だがそれに続けて、金属が地面を擦る甲高い音が鼓膜を震わせた。

全員の視線が一点に集まる。リサを抱きかかえた夢斗が低い体勢で停止していた。ルーメルから離れた位置で、彼もようやく顔を上げる。

「あ、あれ...？」

夢斗自身、何が起こったか分からない。だが気がつけば、自身の両腕でリサの体を抱きかかえ、ルーメルの元から救い出していた。

すぐ間近にあるリサの顔も、目をまん丸に見開いて驚いている。慌てて彼女を離し、下ろした。

「だ、大丈夫か、リサ？」

「は、はい...夢斗さん、今、何を...」

問いかけても、あいにく夢斗自身どうということなのか、分かってはいない。

ただ体を包んだ圧倒的な速度に、覚えはある。

あの時と一緒に。リサと通路を逃げている時、立ちふさがった兵士を薙ぎ倒したあの時と。

顔を上げると、こちらを見て驚愕する面々の顔が見える。あの賢人・ニンバムですら、信じられないといった様子で口を開いた。

「そんな、まさか...あれは...」

続けて、女剣士・ルーメルも剣を構え直す。

「貴様、その『脚甲』はなんだ？ その小娘の腕輪と同じ、魔導具の類か？」

言われて始めて、皆の視線が夢斗の顔ではなく、その足に集中していることを察した。恐る恐る足元を見下ろす。

夢斗の履いていた金属を張り合わせたブーツ。「融和派」のアジトにて、倉庫から見つけ出した一品。

その姿が変形している。いつの間にか側面から金属製の「翼」のような機構が飛び出し、ところどころに青く光るラインが走っていた。思わぬ変化に夢斗自身、少したじろいしてしまう。

ルーメルは眉をひそめ、その謎の脚甲を睨みつける。初めて、彼女の顔に戸惑いの色が浮かんだ。

「この感じ、魔力ではないな.....小僧、貴様——何者だ？」

汗を浮かべルーメルを睨む夢斗。「なんだ」と言われても、こっちが聞きたいくらいだ。

足元のブーツから、何か鳴動する感覚が肉体に伝わってくる。まるでブーツそのものが肉と同化したように、自身の呼吸が流れ込み、鋼に力を送り込んでいるような不思議な感触だ。

夢斗は全身に汗をつたわせつつも、歯噛みし、目の前のルーメルを睨みつけた。気持ちで負けるな、と自身を奮いたたせ。

「ただの高校生だよ。ちょっとだけ、わけありのな」

一瞬、目を見開くルーメル。だが彼女と夢斗の間に、ルガリアの兵士達が割って入る。どうやらルーメルが時間を稼いでいる間に、回復してしまっただけ。武器はボロボロだが、それでも三人の男が立ちはだかった。

驚く夢斗。しかしお構いなしに一人が雄叫びをあげ、槍を突いてくる。キラリと輝く穂先が、まっすぐ夢斗の喉元を狙った。

誰もが声を上げようとした一瞬で、またも夢斗はとっさに動いていた。

的確な防御行動や回避行動など、取れるわけもない。咄嗟に夢斗がとった行動は真横に跳ぶという、ただそれだけだった。

しかし踏み込んだ瞬間、足の先が爆ぜる。

強烈な踏み込みが空気を押し出し、夢斗の体を高速で左に弾き出した。

凄まじい速さで兵士の左に回り込む。その超高速移動に男達はついていけず、一瞬、彼が消えてしまったような錯覚に陥る。遠目に見ているリサやルーメル達のみが、常識外れの速度に絶句していた。

「うわっとお!？」

夢斗自身、制御できない自身の速度に声を上げてしまった。キィッ、と甲高い音を立てて転び

そうになる体を急停止させる。

夢斗の位置を確認した兵士が、またもや雄叫びをあげて突進してきた。大きな斧を真横に薙ぎ払ってくる。

向かってくる脅威に、再び夢斗も動く。軽く後ろに跳んだつもりが、気が付いた時には一同の頭上――部屋の照明近くまで飛翔していた。

なんだ、これは――足元では、消えた夢斗を探す兵士が見える。やはり、その異常な跳躍力についていけるのは、遠目に見ている面々だけだ。

着地するとブーツから空気が排出され、プシュー、という音を響かせる。あれだけの高さから落下したにも関わらず、不思議な力がクッションとなり、足への負担を軽減してくれる。

再び体を持ち上げ、ルガリアの兵士達と自分の足を交互に睨みつけてしまう。

そんな中、兵士の一人が狙いをリサに合わせるのが見えた。剣を構えじりじりと近寄る男。リサもそれを察し、咄嗟に構えを作り直す。彼女の手の甲からは未だに、血が溢れ出ている。

傷ついた獲物を狙う、それ自体はなんら間違っていない「狩り」の鉄則なのだろう。狡猾でもなんでもなく、命を奪い合うものだからこそ取れる、冷静な選択肢。それだけこのルガリアの兵隊達が、状況判断をしっかりと行っている、という証だ。

だがその行為が、また一つ夢斗の「本能」を燃やす。

駆け出す夢斗。真正面ではなく、行く先はリサを狙う男だ。高速で飛び出し、体ごと真横から男にぶつかる。肉と肉が高速で衝突する鈍い音が響き、兵士の体が大きく仰け反って吹き飛んだ。

ただの体当たり――だがその破壊力は絶大で、男は一撃で昏倒してしまっていた。

ついに、弓を握りしめた光一が声を上げてしまう。

「す、すっげ...なんだあれ」

かくいう夢斗は、ぶつかった肩の痛みに歯噛みしつつ兵士とリサの間に立つ。残った二人の兵士は、どこか怯えたような表情でこちらを見ていた。

不安も、恐怖も、混乱も、確かに夢斗の中にある。

だがそれ以上に、熱された体の奥底で一つの感情が燃え盛り、支配する。

死にたくない。そして、死なせたくない――夢斗は凶暴な眼差しのまま、吼えた。

「邪魔すんなよ、おい.....俺らは、帰りたいだけなんだ」

静かなる闘志に、兵士達は雄叫びで答える。彼らとて恐怖による撤退など、認められないし、認めもしない。

その戦士の声こそ「第2ラウンド」の合図となってしまう。

一步踏み込みこんだ瞬間、「ごがっ」という鈍い音と共に夢斗が突っ込む。肩から炸裂し、男の一人を吹き飛ばした。

残った一人が怯まず槍を薙ぎ払う。しかし高速で飛び退くことで、夢斗は槍の射程圏外へと退避してしまった。

だが、逃げる気などない。再び一步踏み込み、大地を蹴って「跳ぶ」。今度はあらん限りの力で、兵士の胴体を蹴り飛ばした。

荒々しく叩き込まれた足が、凄まじい推進力をそのまま破壊力とし、鎧を砕き割る。兵士は激痛に悲鳴すら上げれず、壁まで飛ばされ、叩きつけられた。

圧倒的な速度、そして無茶苦茶な破壊力。その二つの爆発力で、夢斗はついに三人の兵士を昏倒させてしまった。

ゼエゼエと息をし、うなだれる夢斗。汗が全身から流れ落ち、次から次へと地面を濡らす。足元のブーツの光が彼の呼吸に合わせて明滅していた。

体内の熱をありったけ混ぜた息を、大きく吐き出す。荒ぶる意識の中、その凶暴な瞳が睨むのは剣を下ろした女剣士だ。

思わず、賢人・ニンバムが叫ぶ。

「夢斗さん、駄目だ！ 危険すぎる！」

しかし、彼の一言は興奮状態の夢斗には届かない。まるで耳の横に心臓があるかのように、自身の鼓動が脳内を支配する。

なんとかしなければ――そんな純粋な一心が夢斗の冷静さを消し去り、思考の柔軟さを奪ってしまっていた。

対峙するルーメルは刃を少しだけ持ち上げ、まっすぐこちらを見ている。

「猛々しいな。その野蛮さ...お前もやはり、蛮族なのだな。コウコウセイ」

なんと罵られようが、既にどうでもよかった。だが、そんな他愛のない嘲笑が、開戦の合図になるのはたやすかったのである。

踏み込み、まっすぐ突進する夢斗。ルーメルは剣を持ち上げ、来るであろう超高速に備える。しかし夢斗とて馬鹿ではない。ルーメルのすぐ手前で急停止し、もう一步、真横に回り込む。常人ならば、残像を目で追うのがやっとというほどの速度だ。だが、やはりこのルーメルという女剣士は一味違った。しっかりと、夢斗のフェイントに目線を合わせている。

あらん限りの力で、とにかく夢斗は真横から蹴り込んだ。ルーメルは剣の先を蹴りにぶつけ、その軌道を反らす。彼女の顔面のすぐ横を、突風のように蹴りは通過した。金属同士が擦れ合い、つんざくような音と火花を散らす。

夢斗はそのまま真っ直ぐ、彼女の横を通り過ぎる。すぐに踵を返し、再度飛びかかった。

当たるまで蹴る、というシンプルな攻撃。シンプルゆえの激しさ。そして徹底的な猛攻。

剣士の周りを超高速で動き回り、ありとあらゆる角度から襲いかかる無数の蹴り。一発でも当たれば鎧など押しつぶし、肉と骨が砕き割られるだろう。

それでもルーメルは全てを捌いてみせる。身を捻って、刃で反らして、ありとあらゆる攻撃を避け続ける。

感情と気合のみで動き続けた結果、夢斗の体力が底をつくまではそう時間はかからなかった。呼吸が乱れ、焦点が定まらない。限界を超えた動きに、もはや肉体が付いてきていない。

一旦距離を――そう判断し、ルーメルの射程から逃げるべく、後ろへと跳んだ。

呼吸の乱れ、思考の揺らぎ、それらの結果である咄嗟の後退を、女剣士は見逃さない。

瞬間、今度はルーメルが地面を蹴って飛ぶ。タイミングは完璧だった。夢斗が跳んだ方向へ、ほぼ同時に踏み込む。目の前に迫る女剣士の姿に夢斗だけでなく、見ていた面々が絶句した。

やばい——そんな一言を思い浮かべた瞬間、すでに刃が真一文字に走っていた。腹部に伝わったのは熱さ、そして凄まじい衝撃だ。夢斗の体は制御を失い、斬撃を叩き込まれて背後に倒れてしまう。

切断する、というレベルを超えている。もはや当たったものを吹き飛ばすほどの勢い、破壊力を持つ「剛剣」だ。

リサが真っ先に叫んだ。

「夢斗さんっ！！」

彼女に続いて、光一やニンバムもその名を呼ぶ。だが、それに答えることはできない。倒れたまま腹部に走る激痛に歯噛みする。

ルーメルは剣を下ろし、倒れる夢斗に言った。

「なるほど、服の下に『帷子』か何かを着込んでいたか。用意周到だな。賢い選択だ」

剣に伝わってきた斬撃の感触で、ルーメルは仕込みを見抜いてしまう。

アジトで武装した際、リサから渡された「鎖帷子」をジャージの下に着込んでいた。鎖をつなぎ合わせたベストのようなものである。ルーメルの斬撃を防ぎ、腹部を守ってくれていた。

だが、それにしてもその全てを防ぎきるには、あまりにも心もとなかった。剣は鎖の一部を切り裂き、腹部の肉に到達している。

傷口が熱い。燃えるような感覚は痛みを通り越し、全身に訴えかけてくる。どくどくと流れ出る血が抑える手を濡らしていた。

ゆっくりと夢斗に近づくルーメル。誰もが飛びかかる覚悟を決めた。リサが、マウマウが、光一が、最後の持てる力を振り絞り、この女剣士に戦いを挑む覚悟を。

だが、まるで勝てるイメージが浮かばない。あまりにもこの剣士は強すぎる。たとえ全員で掛かったとしても——そんな嫌な感覚が、呪縛のように肉体を強張らせてしまうのだ。

ルーメルは己の頬に軽く触れた。かすかだが切り傷から血が滲み出ている。夢斗の蹴りがかすった際についた傷だ。

まだまだ私も未熟だな——なんて事のない冷たい感情を抱きつつ、ルーメルは剣を持ち上げる。

苦しみながらも前を向く夢斗。氷のような眼差しの女剣士と、目線がぶつかった。

「どこから迷い込んだのかは知らないが、残念だ。これが、戦場というものだからな」

ルーメルの言葉が夢斗の心を刺す。その一言を合図に全員が意を決し、動こうとした。

そんな一同を、たった一つの声が制す。

「惜しかったなあ、ユメト君！ でもその意気やよし、だ！」

皆、動きを止めて目を見開く。

誰よりも早く、その気配に気付いたのはルーメルだった。

突如、通路から部屋へと、拳大の丸いなにかが投げ込まれる。それは地面で割れるや否や、真っ黒な煙を巻き上げて視界を染めた。

予想外の事態に誰しもが驚いてしまう。だが煙を吸い込んだ瞬間、喉の奥に激しい不快感を覚えた。

とにかく酸っぱい——咳き込み、ついには涙まで出てきてしまう。何が何だか分からず、パニッ

クを起こす一同。

この奇怪な煙の中、ゴーグルとマスク姿の男達が即座に行動していた。彼らは身動きできずにいる夢斗、リサ、光一を担ぎ上げ、迅速にニンバム、マウマウの近くへと集める。

ルーメルもその気配は感じていた。しかし顔を覆い、下手に動くことができない。呼吸を最低限に抑え、謎の煙幕を吸い込まないように努める。

ニンバム、マウマウだけはその正体に気付いていた。だからこそ口に手を当てて耐えながら、すぐ横に立つマスクの一人を見上げる。

「お待たせ、ニンバム。準備はオーケイだ、頼む！」

聞き覚えのある声に「やれやれ」とため息をつき、そしてニンバムは意識を集中した。握りしめた杖が光り、魔法の力が集まる。

ルーメルは一步踏み込もうとしたが、すでにこれも手を打たれていた。足元に伝わるニチャリ、という感触に驚く。見れば粘着性の液体がいつの間にか、彼女の周囲に流し込まれていた。

困惑する女剣士に、マスクの一人は言う。

「残念！ 汚い、って思うかもしれないけど、これも『戦場』だからね」

陽気に告げる男。覆面の下から飛び出した、赤い猫耳がピコピコと動く。

ニンバムは残る全ての力を使い、魔法が発動した。部屋の景色が白い閃光に染まる。

彼の力を振り絞った転移魔法が、一瞬にしてその場にいた面々を別のどこかへと転送させてしまう。見事な手際であった。謎の男達は瞬く間にその場を攪乱し、一気に撤退へと導いてしまったのである。

煙幕が晴れ、部屋にはルーメルと倒れたルガリア兵だけが残される。アジトの中には静寂が戻り、鳴動しない空気の中でルーメルは、誰もいなくなった宙を見つめていた。

ふんっ、と息を吐くルーメル。彼女は剣を鞘に収め、少し天を仰ぎ見る。

してやられた、というわけか――再び、無意識に頬の傷をなぞった。仕留めきれなかった謎の「コウコウセイ」がつけた傷が、チクリと痛む。

けして揺らぐ、曲がらず、折れず――女剣士は部屋のかすかな照明を受け、それでも凜と、たたずんでいた。

心を喰らう者

また一つ遠くから、くおおん、という聞き慣れない鳴き声が響いた。音は狭い谷の壁に乱反射し、聞こえてくる方向を狂わせてしまう。

ぽっかりと開け放たれた窓から吹き込む風は、随分と冷たい。瓦礫につまずかないように注意して進むと、屋上へと出た。

そこにたった一人、たたずんで谷の光景を眺めている少女に声をかける。

「これまた、すげえところだな。まさに絶景ってやつだな」

彼女は慌てて振り返った。光沢のある金髪は、随分と乱れてしまっている。愛用のフード付きのマントも戦いで汚れ、ポロポロだ。

青い目を若干潤ませ、リサは叫ぶ。

「夢斗さん！」

彼女の甲高い声も谷の壁にぶつかり、いくつもこだまを走らせる。夢斗は「やあ」と手を挙げ、彼女に近づいた。

夢斗らがいるのは、渓谷の底にある古代遺跡である。左右は切り立った崖になっており、太陽光があまり届かないため、薄暗い。空気は妙に澄んでおり、静かだ。

岩を積み重ねられて構築された見事な遺跡。古代の民が過ごした重要な文化財も、今やレジスタンスの「武力派」という荒くれ者達が隠れ家として改造してしまっていた。

歩み寄る夢斗にリサは少し駆け寄り、心配そうに顔を見上げる。どこか彼女は泣きそうになりながら、問いかけてきた。

「大丈夫なんですか、怪我の方は？」

「ああ、うん。ニンバムのおかげさ。うっすら傷跡が残る程度、さすが、魔法使いだな」

言いながらも、服の上から腹をさする。まだ薬草が包帯によって巻き付けられているため少しごわごわするが、触っても傷み一つない。

「ごめんな。気を失ってたみたいで、あまりよく覚えてないんだ。気が付いた時には、ベッドの上で応急処置も全部終わった」

「そうですか...よかったあ～、心配だったんですよ！ もしかしたら夢斗さん、死んじゃったんじゃないか、って」

またもやりサは目に涙を浮かべ出す。元気な姿を見せて安心させるつもりが、なんだかこれでは逆効果だ。

「あ、いや、だから大丈夫だって。心配かけて、ごめん」

ついにリサはポロポロと泣き出してしまい、夢斗は慌ててしまう。必死に彼女をなだめ、落ち着かせた。

やがて涙をぬぐいながら、リサは口を開く。

「ごめんなさい...でも、でも本当に良かった！」

「リサの方は大丈夫？ 手の傷、直してもらったのか？」

「はい！ ニンバムさんの回復魔法のおかげで」

リサは自身の手の甲を見せてくれる。あの時、刃で切り裂かれた傷は、跡も残らず鮮やかに修復されていた。

夢斗もようやく肩の力が抜ける。

「そうか、良かった。とりあえず皆、無事みたいだな。起きてから大変だったよ。光一が来ては安心して泣くし、慌ててニンバムも連れてくるし、やっとバタバタから解放された感じさ」

せめてもと空気を和ませようとしたが、いまいちリサの気分は晴れないらしい。思うようにいかず、後ろ頭をかいてしまう。

これはいかん、と話題を無理矢理、変えてみる。

「あ〜...なにしてたの、こんなところで」

「ちょっと、色々考えちゃって...」

リサは視線を落とし、続ける。夢斗も切り立った谷の絶景を眺めながら、言葉を待った。

「私、あれからなんだか怖くなって.....最初はニンバムさん達を助ける、って意気込んでたのに...急に、自分がやってたことが、すごく怖くなったんです」

「怖くなった...あの兵士達と、戦うことが？」

こくりとうなずくりサ。彼女は弱々しくも、しっかりと自分の言葉で心情を吐露する。

「私、この世界に来て今まで、すごく楽しかったんです。見たこともない世界に、見たこともない力——『オーバー』っていう才能が、今まで夢物語だと思っていた世界に連れて来てくれた、って思っていました」

事実、リサは夢斗よりも空想の世界を好んでいた。故に彼女にとってここは、実在するおとぎ話の世界と映っていたのだろう。

「魔法の力を手に入れて怪物を倒す自分が、それこそ『勇者』にでもなった気分でした。どんな大きな相手でも、どんな凶暴な生き物でも、こんな小さな私が打ち倒せる。そう知ってから、私にとってこの世界はゲームや漫画なんかよりも、ずっと楽しい場所だったんです」

彼女は思わず、ぎゅっと自身の手を握りしめた。夢斗も小さな体を見つめ、黙っている。

「夢斗さんを始めて助けた時——荒野でのレジスタンスと王国の激突を見て、最初の『違和感』を感じました。そして、今日の戦いの中で、それがはっきりと『恐怖』に変わったんです。馬鹿ですよ...そんなの、最初から考えれば分かったはずなんです。彼らは遊びで戦ってるんじゃない。彼らがやっているのは本物の戦争——本当の殺し合いなんだ、って」

夢斗は身震いする彼女を見て、少しだけ納得する。

奇怪な怪物を相手にしている時、恐怖は感じて、それは高揚感で押し殺せたのだろう。それこそ、実際に自分自身が世界に入り込み「ゲーム」のように退け、打ち倒し、何かを得る。何かを倒すことは、すなわち自身の中に「成果」として残るのみだったのだろう。

だが、同じ「人間」を相手にして、初めて彼女には実感として伝わったのだ。戦いとは相手を傷つけることであり、その行く末は相手を倒すこと。

こと戦争という次元では、その先の世界——相手の命を奪うという領域に足を踏み入れる。

アジトを襲撃したルガリア王国の兵士達は、誰も躊躇していなかった。刃を相手の肉に滑り込ませることに何の迷いもなく、決意を持って前に出てきた。

その脅威が自身に向けられた時、少女の中で自分がいかに甘えた考えで、この世界を歩んでいたかが分かってしまったのかもしれない。

「ごめんなさい...夢斗さんをここまで、エスコートしておいて...今さらこんな、当たり前なのに怖がって.....本当、バカですね、私」

また少女の大きな眼が潤んでいくのが分かる。夢斗は後ろ頭をかきながら、必死に言葉を探した。

「何も謝ることはないさ。仕方ないよ、俺達みたいな『あっち側』から来た人間に、この世界は型破りにもほどがある。それにどうあれ、リサは俺を助けてくれたじゃないか。あの時、リサが戦ってくれなかったら、俺は今頃王国に連れていかれて、殺されてたかもしれないんだから」

リサは不安げな眼差しのまま、こちらを向く。明るく、自由に見えて、芯の部分では色々なことを考えてしまう性格なのだろう。

夢斗は慣れない笑顔を作りながら、それでも彼女に言う。

「なににせよ、レジスタンスの人達を助けるって目標も達成できたわけだからさ。その、なんだ...うまく言えないけど、結果オーライ。そう考えればいいんじゃないかな？ 考えることは大切だけど、それに引きずられ過ぎたら前に進めなくなるよ」

必死に言葉を紡ぐ夢斗。その姿をリサはじっと、どこか驚いたように見つめていた。

「まあ、あんま役に立ってない俺が言うなんて、おこがましいだろうけどさ...」

いまいち説得力のない言葉だな、とは自覚している。こういう時、どう声をかけるべきか、人を「励ます」ということにそこまで慣れていない。

だがリサは首を横に振り、声を上げる。

「そんなことないですよ」

今度は、夢斗が驚いて目を丸くする。リサの目にどこか力が戻ったような気がした。

「夢斗さん、凄かったです。夢斗さんも必死に戦ってくれたから、皆、無事でいられたんですよ。私、しっかりと見てましたよ」

「そ、そうかなあ...ただ、がむしゃらにやっただけなんだけどさ。それに、結局やられちゃったわけだし」

「ノット、アット、オール！（そんなことない）。あの剣士さんに、あそこまでやれたんだから、凄いですよ！」

リサの声に張りが戻ってくる。夢斗は苦笑いし、彼女に返した。

「そっか.....なら、良かった。俺も怖かったし、正直、最後のあたりは混乱してて良く分からなかったんだ。だけど、これだけは思った。『死んでたまるか』って。戦うのが良いことか悪いことか、なんて分かんない。だけど、だからって黙って死んで良いとは思えないよ。まだまだ見つけなきゃいけないものが、こっちにはあるんだ」

その一言はリサに重く響いたのだろう。彼女は夢斗を見つめ、言葉を失っている。

夢斗は遊ぶためにこちらに戻ってきたわけではない。こちらに置いてきてしまった「過去」の手がかりを探しに来たのだ。光一だけではない。こちらの世界のどこかにいるであろう、かつての「クラスメイト」の痕跡を。

それが何になるのかなど、今は分からない。彼らを見つけたから、あの時と同じ学級が戻ってくるのだろうか。長い空白の月日は、そんな簡単に埋めれるものなのだろうか。

それこそ、今の夢斗に答えは出せない。だが、だからと言って何もせず、またこちらの世界を「忘れる」なんてことは、それこそ死んでもできない相談だ。

谷底を一陣の風が吹き抜ける。塵もほこりもない澄んだ不思議な空気は二人を撫で、少しだけ体温を奪う。

「なんか、妙に寒いな...行こうぜ。ニンバム達が皆で一度、話がしたいとさ」

元々、夢斗の目的はそのためにリサを連れ戻すことだった。状況を理解し、素直に頷くりサ。二人は足早に、再び建物の中へと戻った。

遺跡は4階建てになっているらしく、その全ての階層をレジスタンスの面々が使っている。3階は物資室になっているようで、獣人達が壊れた武具の修理や、集めてきた物資の仕分けをしていた。

階段を降りてすぐ、夢斗を見て一人の獣人が声を上げる。

「お〜う、お前さん確か、あの時の」

野太く、どすの利いた声にびくりと身をすくめてしまうが、飛び込んできた顔に「あっ」と声を上げる。

アジトを撤退する際に分かれ道で最後に話した、あの豚の獣人だった。でっぴりした巨体を揺らし、彼はこちらへのそのそと歩いてくる。

片目には大きな傷が刻まれており、その顔は実に恐ろしい。何をされるのかと戦々恐々とする夢斗らに、彼は大きく口を開けて笑う。

「無事だったのか、小僧お！ へんちくりんな格好なやつだと思ってたが、やるじゃねえか！」

笑いながら、バンツと豪快に夢斗の背中を叩く。その衝撃に「いったあ！」と思わずのけぞってしまった。

リサも目を開いて驚いている。夢斗は痛みに耐えつつ、なんとか笑顔を作って見せた。

「あ、あんた達も無事なようで...なにより...」

「おうよ！ それも、お前さんらが時間を稼いでくれたからだ。本当、皆、感謝してるぜ」

彼の声に反応するように、その場にいる獣人達も手を振ったり頭を下げたりして答える。なんだか妙な空気に、二人の方がたじろいでしまった。

「しかし、妙な奴らだな。俺らみたいな荒くれ者に手を貸すなんざよ」

「べ、別にレジスタンスとしての活動をしてるわけじゃないよ。たまたま、知り合いがこっちにいたんだ。だからー」

「あ〜、そうか。そういうことか。確かコーイチのやつのことだな？」

獣人は妙に納得したように、腕組みをして頷いている。

「あいつの知り合いだったのか、そりゃあ納得だ！ あいつも最初は妙な格好のチビだと思ってたんだが、良いやつだぜ。気は利くし、賢い。それに物覚えも良いし、なにより約束もきっちり守る」

獣人は随分と光一のことを買っているらしい。彼は苦笑いしながら続けた。

「俺らあ、獣人の中でも荒くれ者の集まりだからよ。同じ種族からすら、はみ出しちまったやつがここに来るんだ。だから、どいつもこいつも外のやつらってのは、決まって俺らを汚いものでも触るように扱いやがる。厄介者集団ってな。だけど、俺らだって同じ志があってこそこにいるんだ。ただ暴れたいだけじゃあねえ。不当な扱いに息巻いて、ここに来たんだよ」

それは、彼ら「レジスタンス」という存在の、あり方を指しているのかもしれない。

王国からは蛮族と罵られ、獣と揶揄される彼らも、元はと言えば「心喰い」という謎の事件についての疑惑をかけられたが故に、こうして徹底抗戦の道を選んだのだ。

そう思うと、見た目は恐ろしい彼らも、苦しんだ上での行動だったのだろう。

「だがそんな俺らでも、コーイチは真面目に、真正面から接してくれた。そんな奴の知り合いなら、悪い奴なわけはねえよ」

そう言って彼は豪快に笑った。どうやら光一が持つ素直さが、彼らを解きほぐしてくれているようだ。

「あいつに会ったら、よろしく言っといてくれ。お前らも、なにかあったら遠慮なく言いな」

「あ、ああ。ありがとう」

夢斗らは頭を下げ、ようやくニンバムらが待つ2階へと再び歩き出した。

廊下を進みながら、隣を歩くりサに言う。

「ひ、人は見かけによらないもんだな」

「ええ。でもそれ以上に光一さん、優しい良い人なんですね。そっちは、見た目通りですよ」

「ああ、まあ。あいつは、昔っから裏表がないからなあ。時々、思いがけず意地が悪いから、タチが悪いけどな」

その一言にリサは思わず笑ってしまう。とはいえ確かに光一という人物は、その真っ直ぐさからか友達が多かったように思う。

2階に降りると、そこにも大勢の獣人が行き交っていた。2階は作戦室、医療室、食堂のように、部屋ごとにきちんと役割分担がされている。とりあえず二人は最南端にある作戦室を目指した。

歩き出してすぐ、再び獣人の一人に呼び止められる。

「その二人」

簡素な一言に振り向くと、そこには真紅の兜と軽鎧を見にまとった、鼠の獣人・マウマウが立っていた。

相変わらず兜から覗く眼光は鋭い。二人は「どうも」と挨拶をするも、彼女はズンズンと近付いてきて二人の目の前で止まった。

「これから、作戦室へ？」

「え……ああ、そうけど…」

簡潔な質問の後、彼女は黙る。いまいちその意図は分からない。しばしマウマウは黙って、じっと二人を見つめていた。

なんだか妙に緊張してしまう。それほどまでに睨みつける眼差しは強烈だ。目力だけで、押し倒されてしまいそうである。

やがて、マウマウはおもむろに兜を外し、初めて素顔をあらわにした。光沢のある金髪、白い体毛を持つ鼠の顔。目は大きく、ぎょろりとかちらを見つめている。

夢斗、リサはドキドキしたまま、姿勢を正して次の言葉を待つ。

彼女が戦う姿を見たが、まさに歴戦の猛者という荒々しい姿だった。それだけに、この強烈な威圧感も納得はできる。

それゆえ厳格で、冷酷な性格なのではないか――恐る恐る次の一手を待つ二人に、マウマウは言う。

「ちょうど良かったあ、あたしも呼び出されたところだったんだあ。一緒にいこっ！」

飛び出た一言に目を丸くしてしまう。今までの仏頂面が嘘のように、マウマウは手を上げて笑っている。

言葉を返すことができない、夢斗とリサ。目の前で起こった急激な変化に、脳が追いつかない。

「あれえ、どしたの、二人共お？」

「あ、いえ、あの……」

リサが返答に困り、言葉を詰まらす。

だが先回りしたマウマウが、代弁する。

「あっ、そっかあ。二人の前では、一度もこうやってお話ししたことないかあ。驚いちゃった？
ごめ～ん」

身振り手振りですわしなく動きながら話すマウマウ。表情がころころ変わり、まるで早回しを見ているかのように錯覚する。

リサは思わず、素直な感想を述べてしまった。

「な、なんか随分……戦ってる時と、ギャップがありますね」

「あははは！ そうでしょそうでしょ！ 私ねえ、昔っから切り替えが激しいって良く言われるんだ～」

にしても、激しすぎる――と、二人は同時に心の中で思っていた。あの人間離れした戦闘力を見ていて、てっきり獰猛で、野蛮で、冷徹な人物だと思っていたのだが、それはただの「仕事モード」になっていただけ、ということのようだ。

結局、彼女の勢いに押し負け、そのまま三人で会議室を目指すことになる。歩きながらも二人の横で、スイッチをオフにした状態のマウマウが、これでもかともくし立ててきた。

「いや～、それにしてもニンバムから聞いた時は、びっくりこいたよお。だって、まさか『オーバー』が二人も現れるなんてさ！ ねえねえ、本当に他の世界から来たのお？」

「あ、ああ…一応」

「へえ、すっごーい！ ねえねえ、向こうってどんなところなの？ 二人は何やってる人？」

「どんな…う～ん、まあ平和で、特に戦うこともないし……俺らは高校生…あ、分かんないか…学生だよ」

また一つ、大きな声で「へえ～！」と返すマウマウ。夢斗とリサの波長などお構いなしに、どんどんテンションが上がっていく。

「いいなあ、あたしも行ってみたいなあ〜。ねえねえ、どんな美味しいものがある？ あたし、辛いものよりも甘いものが好きなの〜」

終始こんな調子で、マウマウは二人に質問を投げかけ続けた。もはや会話のキャッチボールというより、マシンガンを一方向的に当て続けられているようである。

完全にペースを持って行かれてしまっている二人。これはたまらん、とりさがなんとかこちらからも話題を振ってみる。

「マウマウさんは、確か『融和派』の人ですよ。ニンバムさんと、お知り合いなんですか？」

「うん〜、ニンバムはねえ、傭兵時代に出会ったんだ〜」

これには素直に「へえ」と言葉を漏らしてしまう。マウマウはにこやかに告げた。

「昔ねえ、傭兵だった頃、雪山に住む魔物を倒しに行ったんだけど、その時にたまたま出会ったんだ。魔物ごと雪崩に巻き込まれて、お互い死にかけてたんだけど、なんとか協力して生き延びてねえ。それ以来、仲良くなっちゃった、って感じ〜」

彼女の口から言葉が飛び出すたび、驚かざるをえない。温和な賢人とにこやかな女戦士の出会いは、思いの外壮絶だったようだ。

「すごいですね、それは...」

「大したことない大したことない！ ニンバムの魔法であったかくして、あたしが熊狩って、余裕余裕！ 雪の中掘り進んでねえ、2週間後には自力で下山できたんだよ〜」

一つの事実を受け止め切ったと思ったのに、また新たな一言に驚き、落ち着く暇がない。どうやったところで、マウマウのペースを取り上げることはできそうにもなかった。

「本当は、あたしもニンバムも、戦いたくなんかないよお。だって、そんなことしてなんになるの？ げんこつ振り回して、魔法唱えて壊して、お腹減るだけじゃん」

本来、誰も「戦争」など望んではいないのだろう。情勢、怨嗟、時代——様々なものが人を縛り上げ、武器を取らせる。その中でマウマウほど率直に、自由に思いを打ち明けれるのも珍しい。

思わず、リサが問いかける。

「マウマウさんは、なんで戦おうと決意したんですか。やっぱり、ニンバムさんとの縁ですか？」

それはきっと、先程夢斗に伝えた気持ちが、渦巻いているからだろう。

戦うということに対し、リサは迷い始めている。当たり前のように、それこそ「ゲーム感覚」で力を振るっていた自分に、愚かさと、戸惑いを隠せないのだ。

だからこそ知りたいのだろう。レジスタンスの面々が、なぜ刃を振るうのかという理由を。

マウマウは歩きながら、やはり一切笑顔を崩さずに答える。

「ん〜、それもあるけどお。あたしは『本当のことが知りたい』からかなあ」

「本当のこと？」

マウマウは「うん〜！」と頷き、続けた。

「昔は森の獣人達と王国の人達も、仲が良かったんだよ。それが『心喰い』なんて変なやつのおかげで、互いに不信感が募ってさ。戦争を始めた人達のせいでもあるけど、一番の原因を作ったや

つをこの手で捕まえたいんだ」

楽観的な態度の裏に、どこか彼女が持つ信念のようなものが覗く。リサだけでなく、夢斗も彼女の顔を真剣に見つめてしまう。

恐る恐る、リサがまた問いかけた。

「捕まえたら...どうするんですか？ その.....殺す...んですか？」

彼女からしたら、随分思い切った問いかけだ。しかし聞いておきたかったのだろう。こんなにこやかに話す女性でも、戦士として、どんな覚悟で刃を振るうのか、を。

これにマウマウはやはり即答する。

「そういう獣人は多いねえ。でも、あたしはとりあえず、色々『聞く』かな」

「聞く...事件を起こした理由、ですか？」

「それ以外にも、もっと色んなこと。なんでやったのか、どういう気持ちだったのか、迷ったのかどうなのか、隠れていて何を考えたか。そいつについて、ぜ〜んぶ。それを聞き終えて、ちゃんとそいつのことが分かった時、初めて『これ』を使うかどうか、決めれるんだと思う」

言いながら、左右の腰に収めている愛用のナックルを叩く。分厚い手甲が、鎧と当たって音を鳴らす。

「拳を振ってる時、迷うと何も砕けないから。あたし、自分の力は自分が正しいと思うもののために使いたい。だから、今はニンバムと一緒に『正しいこと』を探してる最中。こればかりは、神様でもきっと教えてくれないからね。あたしが探して、考えて、見つけないと」

夢斗、リサがハッとする。彼女の何気ない言葉が妙に心を揺さぶり、動かす。

正しいことのために―――きっとそれは、口で言うほど簡単なことではないのだろう。ありとあらゆる外的要因が、いつだってその信念の邪魔をし、立ちはだかる。単純明快なその気持ちを貫くのは、想像以上に辛く、険しい。

だが、だからこそマウマウは、笑顔を失わずにいられるのだろうか。今まで選んだ道が、自身が納得できる「正しい道」と信じているから。

そんなことを考えると、夢斗、リサは何も言えない。あっけらかんと笑うマウマウの明るさに、返すことができない。

少し落ち込む二人に、これまた陽気な女戦士がガラリと話題を変え、空気をぶち壊す。

「ねえねえ、二人は何歳なのお？ あたしは、今年で23になるの〜」

唐突な質問に、少し戸惑いながらも夢斗が答える。

「16歳だよ。レジスタンスの皆から見れば、全然子供だよ」

「え〜、わっかーい！ いいな、いいなあ。ねえ、二人はどういう関係なの。付き合ってるの？」

「え―――」

思いがけない一言に二人の体がかぁっと熱くなる。目を見開き、二人してマウマウを見つめた。

「あれ、それとも夫婦う？」

「ち、違う違う違う違う！ そもそも付き合ってるとか、そんな――！」

「そうなんだ～。こっちでは、10歳とかで結婚するのも当たり前だからさあ～」

マウマウはあくまで自分のペースで笑う。慌てて弁解した夢斗は妙な汗をかいてしまい、視線が泳いだ。見ると、リサも歩きながら足元を見て、どこか恥ずかしそうにしている。

なんだか妙な雰囲気のまま三人は歩き続け、ようやく会議室へとたどり着いた。

扉を開けると、部屋の中央に大きなテーブルが置かれており、椅子には見覚えのある面々が座っている。

その中でも、一番奥にどっしりと構える赤毛の青年が笑った。猫型のピンとした耳と、口元につけたマスクは相変わらずだ。

「やあ、三人とも。待っていたよ」

思わず頭を下げる夢斗、リサ。「武力派」の長・グレンもにっこりと笑う。彼の左側には「融和派」のニンバムが。そして右側には光一が座っている。

夢斗、リサは光一の隣へ。そしてマウマウはニンバムの隣に座った。遺跡の一室に即席で作られた会議室で、まずはグレンが口火を切る。

「まずは、改めて礼を言うよ。ありがとう。君達のお陰で、我々も被害を抑えることができた」

彼の言葉に、旧友であるニンバムが頷く。

「思想が違うとはいえ、元は同じ獣人としての抵抗軍。困った時はお互い様ですよ。むしろ、我々に手を貸していただいた、ユメトさん、リサさんには迷惑をかけました。本当に申し訳ない」

彼だけでなく、マウマウ、そしてグレンもこちらに向けて頭を下げる。二人は恐縮してしまい、かすかに首を振った。

グレンも大きく頷く。

「いやあ、驚いたよ。ニンバム達が残って応戦していると聞いた時もそうだったが、それ以上にそこに二人がいたのもね。あの女剣士の注意を引いてくれていたから、撤退がやりやすかったよ」

目覚めてすぐに聞いた話だが、アジトを撤退する直前、煙幕によって夢斗達を救ったのは他ならぬグレン率いる精鋭部隊だったようだ。

なんでもルガリアの兵団が向かっていると察知し、グレンを含む主要メンバーは隠し通路から撤退し、応戦のための準備を進めていたというのだ。残っていたのはグレン帰還までの時間稼ぎのための部隊だったらしい。

「それにしてもすまない。完全に僕の判断ミスだ。王国の兵達を返り討ちにして捕らえ、交渉をしやすくするという算段だったんだが、向こうの勢力が思いの外多くてね。悪かったと思っている」

元より意表をついて迎撃し、あわよくば逆に彼らを捕虜にしてしまおうという作戦だったらしい。だが、ルガリア王国の兵力がそれを上回ったということか。

これには、ニンバムがため息まじりに言う。

「運が悪いのは相変わらずですね、我々は。なにせ、あの『閃光』まで来るとは、思ってもみませんでしたよ」

彼の言葉の意味を、いち早く光一が汲み取る。

「それって、あのエルフの女剣士のこと？」

「はい、ご明察です。私も対峙するのは初めてでした。名前はルーメル＝イヴァリス。ここ最近、王国の歩兵部隊の副隊長に就任した、凄腕の剣士です」

すかさずグレンがこれに付け加える。

「けっして見えず、捕らえれず、気がつけば叩き切られる『剛』の剣士——皆は畏怖の念を込めて『深緑の閃光』と呼んでいる」

全員の脳裏に、長い剣を振るい凜と立つ、エルフの女剣士の姿が浮かんでいた。空気すら切り裂きそうなその鋭い剣閃は、思い出ただけでも身震いがする。

少し暗い面持ちでニンバムは告げた。

「かねがね噂は聞いていましたが、想像以上でした。うちのマウをもって互角——個人的には、そんな怪物は見たことはありません」

どうやらマウというのが、彼の横で上半身を揺らしているマウマウの愛称らしい。そのマウマウが、刃を重ねたルーメルについて、振り返る。

「本当、どうかしてるよお。あたしの拳ならまだしも、ニンバムの魔法も全部見切っちゃうんだから。今までで一番強い相手だったかもね」

戦士の目線から見ても、魔法使いの目線から見ても、あのルーメルという女性は「異常」な実力を持っているようだ。

思わず光一が声を上げた。

「一体、どんな訓練してんだろうねえ。でもそんな化け物と、本当よく戦ったよ、夢斗君」

唐突に話題を振られてしまい「え、俺？」と声を上げる。全員の視線が、一斉に夢斗に向けられた。

リサも横で、少し興奮気味に言う。

「そうですよ。アジトに突入した時から時折おかしいなあ、とは思ってたんですが、なんであんなことできたんですか？」

「あんなこと、って…」

「通路で立ちはだかる兵士を薙ぎ倒したり、ものすごい速度で動いたじゃないですか」

言われて夢斗も思い出す。だが「どうやって」と言われても、本人からすれば無我夢中に動いた結果、としか答えようがない。むしろ、自分自身でも信じれないくらいなのだ。

その疑問に、グレンが少し真剣な眼差しを向けていた。

「その件は、僕もニンバムから聞いていたよ。ユメトさん、確かあなたも『オーバー』なんですかね？」

「ああ、まあ…じゃあ、あれもその『オーバー』の力だってこと？」

夢斗の問いかけに、グレンは首を横に振った。眉をひそめる夢斗にグレンは続ける。

「それはたぶん、半分正解で半分不正解、ってところかな」

妙に含んだ言い方に「はあ」と返してしまう。リサや光一も、じっと聞き入っている。

「ユメト。悪いんだけど、ちょっと立ってもらえるかな」

意図するところがいまいち分からないが、夢斗は大人しく言われるがまま、立ち上がる。手で

指示され、机から離れた。

その場の全員が夢斗の全身をまじまじと見つめる。降り注ぐ無数の視線に、どこか緊張してしまう。

「な、なに？」

ここで賢人・ニンバムが優しく問いかける。

「ユメトさん、その脚甲は一体どこで？」

「え...あ、ああ、これ？」

自身が履いているブーツを見つめる。白銀の脚甲がくすんだ光を放っていた。

「出発する前の、アジト—ああ、『融和派』の隠れ家で見つけたんだ。出かける前に準備したほうがいいから、って」

ここでリサも頷いた。

「倉庫の中にあった、使っていない防具の中から選んだんです。もしかして使ったらまずかったですか？」

「ああ、いえいえ。それは構わないのですがね。なるほど、なるほど、やはりそういうことですか...」

何かに納得し、深く頷くニンバム。だがあいにく夢斗らには、まだ真実は見えてこない。

やがて一呼吸置いた後、ニンバムは限りなく「真実」に近いであろう、憶測を語り出す。

「偶然か、はたまた何かの因果なのか...ともかく、ユメトさん。あなたが身に着けているその脚甲—それは、ただの防具なんかではないのです」

「え...ただの防具じゃないって...そんなすごいものだったのか、これ」

「ええ。我々は『オーバーテクノロジー』と呼んでいるものです。少なくとも、かつての書物にはそう記されていた」

夢斗ら三人は、少しハッとしてしまう。どこか聞き覚えのあるようなその言葉に、真っ先に光一が口を開いた。

「『オーバーテクノロジー』だって？ それって、僕らの世界の言葉なんじゃあ...」

本来それは、その時代、世界にとってあまりにも水準を逸脱した「超技術」とも言える存在の総称だ。オカルトやSF、創作の世界で時折姿を現す。誰よりも書物に詳しい光一だからこそ、まずピンときたのだ。

ニンバムは優しく、そして真剣なまなざしのまま続けた。

「我々もそのルーツまでは解明できていません。しかし過去の書物、伝承に『オーバー』が幾度も登場するように、『オーバーテクノロジー』もまた、彼らに寄り添い、登場してきました。我々の文明では到底理解できない原理を持ち、常識の範疇を超えた力を持つ、数々の技術。ユメトさん、あなたが身に着けているそれは、私達がかつて見つけて保管していた『オーバーテクノロジー』の一つなのです」

なんだか、突然の説明に頭がくらくらしてしまう。すかさず、これをグレンが緩和した。

「まっ、簡単に言うと『オーバー』専用の道具、ってことかな。どういうわけか、僕らには使うことができない。少なくとも、それを『起動』するためには『オーバー』が触れる、もしくは特

殊な措置を施す必要がある」

ここでニンバムが立ち上がり、夢斗に歩み寄る。そしてまじまじと彼が履いた『オーバーテクノロジー』とやらを観察していた。

「ふむ、これは...どうやら、脚甲内部の革がユメトさんの皮膚と限りなく、同化しているようです」

「ど、同化だって！？ 大丈夫なのか、それ」

「まあまあ、落ち着いて。あくまで密着しているだけです。ですが興味深いのは、その皮がユメトさんの皮膚から流れる『電気信号』や微弱な『魔力』を感知し、鋼部分に流し込んでいるようですね」

たまらずリサや光一も覗き込む。夢斗はどうして良いか分からず、たじろいでしまった。

「あの時の戦い方を見ている限り、この脚甲は急激にユメトさんの『脚力』を増強しているようです。踏み込む力、蹴りこむ力、果ては着地の際の衝撃を、空気を取り込むことで吸収すらしている」

「そ、そんなにハイテクなもんなのか、これは」

おそらくハイテクという言葉は彼らには通じなかったのだろう。しかしニンバムは構わず、察してくれる。

「実際、我々もこの姿、そして力を見たのは初めてです。なにせ我々が触っても、うんともすんとも動かない。ただのダボダボの防具ですからねえ」

期せずして夢斗らが手にしたこのブーツが、彼らを危険から救い出してくれたらしい。

思い返せば、アジトで起こった数々の出来事が合点がいくような気もした。一步、前に出ようと思っただけで、夢斗は高速で兵士にぶつかり、薙ぎ倒していた。更には頭上高く跳躍したり、高所からの落下も耐えて見せた。

全て知らない間に、この「オーバーテクノロジー」なる産物が成し遂げていたのである。

思わず光一が感嘆の声を上げる。

「へえ、すごいな、それ！ 夢斗君達だけが使える、秘密兵器ってこと？」

「まあ、ざっくり言うと、そんな感じでしょうかね」

笑いながら椅子に戻るニンバム。夢斗も椅子に座りなおすが、リサ、光一はなおまじまじと、足の先を見つめていた。

ここでようやくグレンが話を戻す。

「僕ら『武力派』の面々も、いくつかの『オーバーテクノロジー』は見つけていた。しかし僕らにとってはどれも、使い道の分からないガラクタばかりでね。その価値を見出すことができずにいたんだ」

これには「う～ん」と考え込んだ後、リサが声を上げる。

「でも、なんでそんな物が、この世界に？ もしかして、私達以外の『オーバー』が、作ったとか？」

「そうかもしれないね。なにせ、こういう代物が各地で見つかっている。この遺跡でもいくつか発見されたんだ。なんなら、後で見るといいよ」

その一言に、少しだけリサは目を輝かせる。どうやら夢斗同様に、未知なる道具に触れてみたかったのだろう。

だがグレンは微笑んだ後、真剣なまなざしを取り戻した。

「結果として、ユメトがそれを手にしたこと。そして皆の活躍で、被害は最小限に抑えることができた。だが、それでも今回の件で、失ったものは多い。なにせ我々からすれば、普段活動で拠点としていた場所をごっそり奪われてしまったからね」

こうしている今も、アジトはルガリア王国の兵士達が占拠しているのだろう。ニンバムの転移魔法で命からがら逃げてきたものの、結果として拠点を明け渡してしまうことにはなってしまった。もっとも、あのまま頑固に粘り続けていれば、今頃、どうなっていたかは分からない。

「実際、状況は芳しくない。今までレジスタンスと王国は拮抗状態が続いていたが、向こうもしびれを切らし、強硬手段に出てきたのだろう。一手、先んじられてしまった形だ」

お互い攻め込もうにも、手を出せばそれ相応の犠牲が出てしまう。だからこそ攻めすぎず、かといって沈黙を保たない程度に、相手と火花を散らしていたのだ。

その拮抗が一気に崩れた――レジスタンスにとって、これは実にまずい状況なのだろう。

ここで、ニンバムが深いため息を漏らす。

「いずれ、このような形になることは分かっていたのです。だからこそ、まずは『謎』の正体を解明すべきだったのですよ」

その一言に、グレンもどこか厳しい口調で返した。

「分かっているつもりさ、それは。ただ、だからと言って舐められっぱなしでは、彼らの思うがままだ。我々の持つ戦力も、明確にしておく必要はあるだろう？」

「しかし、それにしても『けん制』の域を超えていました。あれでは、彼らの言う通り、我々が蛮族と思われても仕方ありませんよ」

「じゃあ、どうすれば良かった？ どれだけ剣を向けられても、無抵抗でニコニコしていれば誇りが守られたのかい？」

明らかに互いの思想をぶつけ合い、熱を持っていく二人。これが、彼らが「武力派」と「融和派」として、根底では交わらない部分なのかもしれない。

ピリピリと張りつめた空気に言葉を失ってしまう。気まずさを感じながらも、三人はなんと声をかけていいのかわからない。

そんな中、その空気を問答無用に打ち壊したのは、やはりあの女戦士の一言だ。

「まーまーまー、良いじゃんか～。もう、なったものはしょうがないんだしさあ」

一瞬、グレン、ニンバムが声の主――マウマウに刺すような視線を向ける。夢斗らのほうが、逆に肝が冷えてしまった。

マウマウはやはりまるで意に介さず、あっけらかんと笑い、告げる。

「あーしたら良い、こーしたら良い、って、そんなの考えるだけ無駄じゃんか。来た道を振り返るばかりじゃ、前に落とし穴があっても、気付けないよお」

のんびりとした、そして楽観的な一言だが、それでいて的を射ている。彼女の態度が、少なからずグレンとニンバムの火照った頭を、冷やしてくれたようだ。

グレンがため息をつき、伸びをする。

「確かに、ね。こうなった以上、大切なのは次にどうすべきか、だな」

「ええ。なにせ、そのためにこうして、皆さんもお招きしたわけですし」

ずれかけた話題が、ようやく本線に戻ったようだ。レジスタンスの視線を夢斗らはまっすぐ受け止める。

思わず、リサは疑問を投げかけてしまう。

「このために、私達を呼んだ？ それって、いったい――」

「あんなことがあってから早々、迷惑なのは承知の上だ。だけどそれでもなお、君らに頼みたいことがある」

グレンの言葉に、どこか緊張した面持ちで次の一手を待つ三人。

なんだか、妙に時間の流れが遅く感じた。数秒の空白が引き延ばされ、重々しい空間を錯覚させる。

一呼吸置き、グレンは静かに告げた。彼の目にいつもとは違う色が宿ったように、感じてしまう。

「頼む。我々を助けてほしい」

三人は即答することはできなかった。三人が三人とも自身の頭の中で、その言葉の意味を繰り返し、考えてしまう。

真っ先に口を開いたのは、夢斗だった。

「助ける……助けるって、このレジスタンスを？」

静かにうなづくグレン。たまらず、リサも続いて問いかける。

「そ、それって…私達も戦ってほしい、ってことですか？」

「いや、厳密に言えば、そういうことではないんだ。なにも君達に戦争に加担してほしい、と言っているわけではない」

この一言に、かすかに心に去来していた不安が薄まる。だが、逆に「ならばどういうことなのか」という疑問が、色を濃くしてしまった。

グレンは静かに、しっかりとした口調で続けた。

「君らには、我々が争う理由となった『心喰い事件』を、解明してほしいんだ」

目を見開く三人。光一が少し身を乗り出し、声を上げる。

「『心喰い』だって？ あの事件の犯人を、僕らが捜すってこと？」

率直に言って、夢斗は彼らの意図がまるで分からない。「心喰い」という謎の猟奇事件が今回の対立を生んだ、ということは兼ねてから聞いていた。ルガリア王国の兵隊が心臓をえぐられ、殺されるという凄惨な事件。その犯人が森に住んでいる獣人だと、王国が決めつけたことが、事の発端でもある。

だからこそ、その事件の解明こそが、今回の対立を解消する一手になる、ということくらいは夢斗にだって理解できる。

しかし、だからと言って、なぜそれを夢斗らに任せるのか。その点は、何度考えても分からない。

これにはニンバムが助け船を出した。

「二者の対立は、元をたどれば『心喰い』という謎の殺人に起因します。そこに隠された『真実』。そして、それを起こした者の『正体』こそ、この戦争を終結する、一つのカギになると考えています」

言っていることは分かる。そこまでは夢斗らは理解しているつもりだったのだ。だからこそ、リサは不安げに問う。

「で、でもなんで、それを私達に？ つまりその犯人を見つけて、事件が獣人達の仕業じゃない、って証明しろってことですよ。それを、なんで私達が？」

「本来ならば、我々もすぐにでも調査に乗り出したいのです。ただ獣人である我々は、いかんせん動きが制限されてしまう。今や、各地ではレジスタンスを狩り取ろうと、王国の者達が躍起になっています。目立った動きをすれば、それこそ今回のように事態は急展開を迎えてしまうかもしれない。ルガリアが強硬手段に出れば、我々には勝ち目は薄い」

ここですかさず、光一も質問した。

「強硬手段...こ、これ以上、一体何を一一」

「もし、彼らが我々を『森ごと』排除する、と決めたら。もはやそれは戦争なんてレベルではない。一つの文明の終焉だ」

ぎょっとし、息をのむ。夢斗の口から咄嗟にその一言が飛び出した。

「森ごと、全てを消すだって？ そんな...無茶苦茶なことが...」

これには楽観的な女戦士が、率直に答えてしまう。

「できるかもね～、ルガリアなら。なにせ、兵隊の数も圧倒的。備えた魔法部隊も大勢だから、本気になれば一瞬でここら一帯、火の海かもしれないねえ」

再び息をのむ三人。それはもはや「災害」と言ってもいい。徹底的に逃げ場を失い、そして確実に駆逐されていく。圧倒的な破壊劇だ。

ニンバムはマウマウをなだめつつ、それでも真剣に告げた。

「そうなる前に手を打ちたいのです。少しでも動け、そしていざとなれば世界を『越える』力を持つあなた方に、協力いただきたいのです」

この願いに、戸惑ってしまう三人。

無理もない。なにせ三人にとってはまだ、この異界・クレイドルの全貌すら掴みきれていない。知らない世界で不確かな情報をもとに、何を信じていいかも分からず猟奇事件の犯人を探り当てるなど、雲を掴む話のように思える。

困惑を感じたのか、グレンが助け船を出す。

「協力と言っても、肩ひじを張らなくても大丈夫。君らには簡単な諜報活動や『オーバーテクノロジー』の解明を、手助けしてほしい。前者はもちろん情報収集。後者は我々の『もしも』の時のための戦力の増強のためにね」

彼らの真意は随分と分かってきたものの、それでもなお三人は首を縦に振ることはできない。互いの顔を見つめ、不安げな色を確認しあう。

自身の手を見つめた後、夢斗はおもむろに問いかける。

「俺に...俺達に、できるんだろうか。あなた達の、力になるなんて」

世界の大まかな概要を理解し、少しではあるが戦う力も持っている。その上、世界を行き来する力を持ったとなれば、おまけまでついてくるようなものだ。

だがそれが果たして、レジスタンスを「救う」ための力として機能してくれるのだろうか。ただの学生で、だらだらと学園生活を送るだけの自分に、そこまでの使命を果たすことなどできるのか。

ただただ、疑問と不安しか今は浮かんでこない。

それを察したのか、グレンはため息をつき、肩の力を抜いて告げる。

「まあ、無理にとは言わないさ。君らには、さんざん怖い思いもさせてしまった。我々は巻き込んでしまった側だから、強制するつもりもないよ。もし気持ちが悪ければ、助力いただけるとありがたい」

それだけ告げると彼は大きく伸びをして見せた。堅苦しい話をしたせいで、疲れてしまったのか。

「ひとまず、今、僕から君らに伝えれることは以上だよ。早々に堅い話をしてしまっただけで、悪かったね。とりあえずは、この拠点は安全なはずだ。部屋で休むもいいし、なんなら一度、元の世界に戻ってもらっても構わない。ここからは自由にしてほしい」

その一言をもって、ひとまず一同の作戦会議は幕を閉じた。

部屋にはグレン、ニンバム、マウマウだけが残り、夢斗ら三人は部屋を後にする。

退出する際に、レジスタンス達が使う休憩所の場所だけを教えられた。とにもかくにも三人はそこを目指し、歩きながら本音を語る。

「ねえねえ。どう思う、さっきの話。僕らが『心喰い』を見つけるだってさ」

問いかけてくる光一に、夢斗は「ああ」と少し暗いトーンで答えた。

「言ってることは、分かるんだけどな。でも、そんなの俺らでどうにかなるのかよ？ なにか手がかりでもあるのか？」

「う〜ん、僕も『心喰い』についてはいくらか聞いたことはあるけど、実際現場を見たこともないしなあ。っていうか、あんま見たくないよ。僕、グロとか本当、だめだからさ...」

光一のいつも通りな口調に、少しだけ心がなごむ。だが、やはり手がかりたるものが無い以上、あまりあてにはできそうにない。

リサも顎に手を当て、悩んでいる。

「でも、考えれば考えるほど変な事件ですよ。兵士の心臓だけが抜き取られて、殺されるなんて。なんで心臓が欲しいんでしょうか」

「欲しいって...犯人は、人間の心臓を持ち帰ってるってことか？」

「だって、そこばかり抜き取ってるってことは、なにか理由があってやってるって思うんです。ま、まあ...意味わかんないですけどね、それも。アンインテリジブル（理解不能です）」

リサも想像してしまい、なんだか気分が悪くなったようだ。夢斗も一瞬、猟奇殺人犯の姿を考えてしまい、気が滅入る。

人の心臓を抜き去り、一体どうなるのだろうか。

持ち帰ったそれを、何に使うのか。まさかとは思うがそれを文字通り、食べるのでは――考えただけで、三人共が口数が減ってしまう。

半ば強引に、光一は話題を変える。

「で、でさ...どうしようね、これ。本当に、僕らで解決するわけ？」

「ああ、いや...どうだろうな。実際、俺らに何ができるのか...」

夢斗と光一の気持ちは、期せずして一致していた。不安という以上に、そもそも何をすべきかすら浮かばない。殺人犯を追う、なんて探偵の真似事は、一度もやったことがない。

推理小説やドラマは見ることもあっても、あれとはわけが違う。この世界に本当に存在するであろう「殺人鬼」を探せというのだから。

後ろ頭をかく夢斗。その姿を見て、クラスメイトの不安を感じ取り、少しだけ苦笑いする光一。

だがここで、残った一人の「オーバー」が声を上げる。

「私は、やってみる価値はあるのかな、って思います」

慌てて立ち止まる夢斗、光一。

リサも歩みを止める。彼女は少し不安げに、うつむいていた。

「やってみるって...本気で、その『心喰い』を探すつもりかい？」

こちらを見上げるリサ。青色の瞳が揺らぎ、潤んでいる。しっかりと不安の色が見えるが、その奥底になにか言い知れない光も覗いているような気がした。

「正直、良く分かんないっていう気持ちもあります。何から手を付けるかも、まるで分かりません。誰に相談すればいいのかも、何を調べるのかも」

その気持ちは夢斗らも同じだ。だがそれでも、彼女は言葉を続ける。

「だけど、このままだときっと大変なことになる...そう思うんです。今日みたいに王国の人達が攻めてきたら...今日はうまくいったけど、今度はもっと大勢の人が傷付くかもしれない。そう思うと、なんだかすごく.....怖いんです」

その脳裏にはレジスタンスのアジトで見た、あの数々の戦いの光景が蘇っているのだろう。

「この世界は、私にとって夢のような場所でした。だけど、もしかしたら、もうすぐここで大きな戦争が起こって、森が消えて、誰もいなくなるかもしれない。昨日まで見てた景色も、人も、全部消えちゃうかもしれない。それがとても怖い.....だから、私達にできることがあるなら、せめてなにかしたいんです」

小さい体から、確かな「覚悟」が感じれる。黒い負の感情に消されないように、彼女が芯に抱く感情の炎が、しっかりと、小さくてもきちんと燃えていた。

言葉を返すことができない。彼女の紡いだ言葉に見合う、決意をまだ持ち合わせていない。

「もし、お二人が嫌だっていうなら、それでも構いません。私、一人でもやってみます。何ができるか分かんないけれど...でもそれでも、少しでも進むことが『正しい』と思えるんです」

きっとそれは先程、女戦士・マウマウの一言に感銘を受けたがゆえだろう。夢斗もその一言で、鼓動が高鳴る。

世界にとっての――もっと言うならば、運命というものにとっての「正解」など、分からない

。人が作るものが歴史だというなら、その中で何が正解なのかなど、きっと神様しか知りえることはできないのだろう。

神様の言う通り、ができるならきっと簡単なことだ。だが人間にそんな甘えは、たぶん用意されていない。用意されるべきではないのだろう。

どのコースを走るか、それくらい自分で決めろ——かつて大昔に夢斗が信条として抱いた、ある言葉が蘇る。それはやはり、夢斗がかつての「神隠し」以来、忘れていた大事な一言だ。

こんなものまで失くしていたのか、俺は——随分と自分が情けなくなり、そしてどこか苦笑してしまう。

思いがけない反応に、驚くりサ。光一も不安げにこちらを見上げていた。

「光一、『心喰い』について、詳しい奴はどれくらいいるんだ。このレジスタンスの中に」

目を見開く二人。光一は犬のしっぽを少し立て、驚いている。

「夢斗君……本当に、見つけるつもりなの？」

「できるかどうか、なんて分かんねえ。でも、リサの言う通りだと思う。俺らの世界とは違っていても、ここで生きてる人達が大勢いる。その人達が助かる可能性が、少しでも俺らにあるなら…それを捨てて逃げるなんてのは、一生悔いが残ると思うんだ」

リサと光一は少し驚いたように、夢斗の言葉を受け止めている。

「俺は今、何が正しいか、それが分からない。だから獣人達を助けたいとか、犯人を見つけないとか、それだけが理由なんじゃない。何が正しいのかを自分の目で確かめる。それが、俺の今の素直な気持ちだ」

歩みを止めないことを「正しい」と決め、前を向いたりサ。彼女のその決意に比べれば、夢斗の選択は随分と弱々しいのだろう。どうすべきか分からない。ならば、とにかく探しにいかねければいけない。

少しだけ歯噛みし、拳を握りしめてその言葉を吐き出す。

「もう、嫌なんだ…自分にはどうしようもない所で、理不尽に何かを奪われるのは。繋がった人や時間に、ぽっかりと穴が空いた、あんな日々は」

二人の心に、その一言は重々しく突き刺さった。

既に一度、夢斗は「過去」を奪われている。学生として当たり前前に過ごし、当たり前前に流れていた日常という時間が「神隠し」によって非情にも空白と化してしまった。

思い入れがあったわけでも、執着心があるわけでもない。だがそれでも、巡り合った誰かがいなくなるということに、夢斗は慣れることなどできない。ぶっきらぼうに見えて、冷徹に見えてその実、彼は誰よりも繊細な心を持っている。

「足手まといだっていうのは分かってる。でも、何か俺にもさせてくれ。どういうわけか『オーバー』なんて力を貰っちゃったんだ。どんな些細なことでも良いから、せめて役に立たせて欲しい」

必死に訴える夢斗にリサはたじろいでしまう。口を開け、じっとこちらを見上げていた。

だがやがて、彼女の顔に笑顔が戻る。力強く、彼女は頷いた。

「足手まといだなんて、とんでもないです！ すっごい心強いですよ！」

小さな姿にいつもの快活さが戻ってきたことで、夢斗もなんだか妙に安心する。下げかけた頭を、苦笑して戻した。

固められた二つの決意に、もう一人が続く。

「そっかあ。結局、やるんだね。なら道案内は引き続き、必要だね」

のんきに言う光一に、二人は振り向く。獣人のクラスメイトは大きな目をぱちくりさせながら「やれやれ」とでも言いたげにこちらを見ていた。

「僕だって元の世界に帰る前に、森ごと燃やされるなんてごめんだよ。真犯人に土下座して、全力で王国を止めてもらわないとね」

彼にだって、元の世界に帰るという確固たる目標がある。そしてそれ以上に、この世界に散らばったクラスメイトを探すという、意思もある。こんなところで、止まっているわけにはいかないのだ。

揺らいでいた気持ちを繋ぎ止め、三人は互いの顔を見つめなおす。

「決定、だな」

「大丈夫、きつとうまくいきますよ！」

「魔法使いに、弓使いに――それに、走り屋？　なんか変な『パーティ』だね」

光一の一言に夢斗が「なんだよ、それ」と突っ込み、リサが笑う。相変わらず、行くべき場所は何一つ分からない。

それでもなお、先程までの重々しい空気はそこにはない。

目標が定まったことで、少しだが思考が冷静になる。夢斗は後ろ頭をかきながら、さっそく本題に入った。

「しかし実際、なにから手をつけるべきなんだろうか。その『心喰い』の手がかり探しか？」

ここで光一も腕組みをし、悩む。

「やっぱこういうのは『足を使う』ことかなあ。あ、夢斗君みたいに蹴ればいいってわけじゃないからね。聞き込みをするってことで――」

「わ、分かってるよ、んなことは。聞き込みか...まずは、レジスタンスのメンバーにってことか」

周囲を見渡すと、遺跡の中をせわしなく行き交う獣人達の姿が見えた。「武力派」の獣人は「融和派」に比べて、随分と数が多い。全てのメンバーに話を聞いていくのは、一苦労だ。

どうにも骨が折れそうだ――そう思った瞬間、今まで張り詰めていた緊張の糸が切れたのか「ぐう」という大きな音が響く。

夢斗、光一が目を丸くし、とっさに振り向いてしまう。

音を鳴らした張本人は同様に目を開き、顔を真っ赤にして固まっていた。

「今のって...」

呟く夢斗に答えるかのようにまた一つ、リサの腹が鳴る。思わず、少女は声を上げた。

「わー！　わー――！」

何事か、と周囲の獣人達もこちらを見つめていた。慌てて腹を押さえ、弁解するリサ。

「ちがっ、これは、その！　だ、だって晩御飯も食べてないし、あの！」

いざ解決に乗り出すぞ、というこのタイミングで、なんとも間が悪い。夢斗や光一は苦笑しつつも、彼女をなだめた。

「だ、大丈夫だって。まあ、確かにな。考えれば、ずっと今日は動きっぱなしだったものな」
こちらの世界に来て、もう随分と時間が経っている。緊張の連続で空腹など気にする余地もなかったが、今となっては腹の中がすっからかんだ。

たまらず光一がため息をついた。

「調査開始は明日かなあ、これは」

うつむき顔を真っ赤にするリサが、小さな声で「ごめんなさい」と告げた。また苦笑まじりに、夢斗は彼女をなだめる。

外からまた一つ、谷に潜むなにかの遠吠えが響いた。反響し、窓から入り込むその音に、思わず外を見つめる。

どこかにいる殺人鬼を探す――戦いを乗り切った次に待っているのは、これまたとんでもない使命だった。こうしている今も、この世界のどこかに、獣人の心臓を抜き取る異常者がいるというのだ。

魔法がある世界でも、科学が発達した世界でも、変わらず心に「闇」を抱える人間がいる。

そう思うと、なんだか少し身震いがしてしまう。

大きく深呼吸し、ため息をついた。

不安とは裏腹に、澄んだ溪谷の空気は爽やかに肺の中を駆け抜け、満たしてくれた。

信じる「幸福」とは

診療所にかけられた時計の音が、午前11時を指す。窓から差し込んだ爽やかな夏の風が、白いカーテンを弄び熱を奪う。どこまでも続く青い空には、雲一つない。

カルテを見ながら、カウンセラー・羽多野は「ふむ」と呟く。

「なんだか、数日前と比べて随分体調も良さそうだね。なにかあったのかい？」

「あ、いや...と、特には」

問かけられ、苦笑する夢斗。そんな当たり前の反応すら、数日前までの夢斗にとっては困難なことだった。思わぬ変化に、羽多野はどこか驚いているようにも見える。

「そうかい。まあ、なににせよ、精神状態が安定してきているのは良いことだよ。随分、以前とは違う。心が動かないということと、心が平穩ということは違うからね」

夢斗は彼に「はあ」と答えながらも、チラチラと時計の針を見ている。約束の時間まではまだ余裕はあるが、実のところ早く帰りたいというのが本音だ。

「ただ、それでも過去の記憶が戻らないのは、残念なことだな。なにか新しい手を試してみるか」

ペンをくるくると回しながら、悩む羽多野。若く、美しい顔に陰しさが見えた。

苦笑しながらも、夢斗はどこか申し訳ないような気持ちになってしまう。

なにせ予約していたとはいえ、このカウンセリングを受けに来てからまだ一度も「失った過去について分かった」とは、打ち明けれていない。ゆえに、そもそも記憶を掘り起こすために行っているこのやり取りが、丸ごと無駄な時間になってしまっている。

真実を知らず、手を尽くそうとしてくれている羽多野には悪いが、それでも夢斗はどうしても本当のことを伝えれずにいた。

そもそも言えるはずがない。記憶を失っていた間、自分は異界・クレイドルにいて、クラスメイト達も皆、バスごと移動していた。自分は「オーバー」と呼ばれる力を持つ者で、唯一こちらの世界に帰ってこれたのだ、など。

すべて馬鹿正直に打ち明けたとして、失笑される未来を想像することはたやすい。

羽多野はあれこれ悩んではいたが、時間が来たことを察し、まとめに入った。

「まあ、何はともあれ、良好な方向に進んでいるのは良いことだね。引き続き、経過を見てみよう。もしかしたら、記憶が戻ってくるのも近いのかもしれないよ」

「はあ、ありがとうございます」

「じゃあ、次は問題なければ一週間後に。またね」

相変わらずこのカウンセラーは整ったルックスと、清楚な雰囲気は持っているのだが、どこか効率主義な言い回しが夢斗には好きになれない部分でもある。とはいえ、カウンセラーとして実力があるというのは、良いことなのだろうが。

荷物を担ぎ、ふっとあることを思い出す。再び椅子に座り直し、おもむろに問いかけた。

「あの、ちょっと良いですか？」

羽多野はカルテを書きながらも「なんだい」とだけ告げる。視線くらい向けてくれても良いも

のを、と思いつつ、とにかく疑問をぶつけた。

「先生は、心理学を学んだんですね」

「ああ、もちろん。カウンセラーだからね。それ以外にも色々やりはしたが」

「それって実際にいる人間の心理とかも、参考にしたりするんですか」

意外そうに羽多野はこちらを見る。

「なんだい、心理学に興味でもわいてきたのかい？」

「あ、ああ、まあそんなところですかね」

カルテを置き、やはりペンをくるりと回しながら彼は答えた。

「もちろん、どれだけ字面で学んだところで、実際に相手にするのは人間だからね。会って話を聞いたりすることもあれば、過去にいた人物の行動や思考を元に、学ぶこともあったさ」

「へえ、例えばどんな人から？」

「色々だよ。同い年の友人もいれば、会ったこともない女性。年の離れた大人、それこそ様々な職種のね。国籍が違ふとまた考え方も違ふから、外国の方も大勢」

人は「環境」に作られる、とどこかで聞いたことがある。生まれ持った素質が、その者の過ごす日常によって形を変え、どんな色にでも変化するのだ。

ここで密かに考えていた、あるシナリオ通りの質問を投げかけてみた。

「最近、テレビとかで犯罪心理学みたいなものがあるじゃないですか。ああいうのもやるんですか？」

「心理学の中では応用分野だが、根底の部分では地続きだからね。多少はかじったことはあるよ」

心の中で「しめた」と呟く。ここぞとばかりに、狙い通りの球を投げた。

「へえ～。じゃあやっぱ、とんでもない犯罪者とかも出てくるんでしょうね。この前、ネットで見たんですけど、なんでも『心臓を抜き取って殺した』ってやつがいたらしくって。頭おかしいですよ。でもそういうのも、心理学的には何か分かたりするんですか」

思いがけない一言だったのだろう。羽多野は少しだけ険しい顔をして、答える。

「随分と、悪趣味なサイトを見ているようだね。そういうのは感心しないな」

調子に乗った自分に、夢斗は少しだけ恐縮してしまう。羽多野は調子を取り戻し、言葉を続けた。

「しかし、確かに犯罪者で『被害者の体の一部を持ち帰る』というパターンは、ないわけではない。大体そういう犯罪者は、殺人というものを自身の中で神聖化している節もある。いわば切り取ったそれは、犯罪者にとっては一つの『戦利品』になるということさ」

それはまた、随分と常人には理解できない発想だ。そもそも抜き取った他人の肉体を、どこかに保管しておくなど、考えただけでも吐き気がする。

「戦利品、ですか」

「ああ。例えば君が言っている件の殺人鬼なら『心臓』という人間にとって最も重要な部位を持っていくのは、ある意味、相手に対する支配、淘汰、征服、といった意味合いがあるのかもしれないね」

「そりゃあ、まあ、心臓取られたら何もできないわけですけど...だ、だからって殺しますかね、相手を支配したいだけで」

「非人道的、非効率的と、一般的な脳ならば考えるかもしれない。だが、犯罪者——こと、サイコパスと呼ばれるような極限の心理は、特定の型にはけっして収めきれないものだよ」

なんだか考えれば考えるだけ、どんどん深みにはまっていく気がしてしまい、滅入ってしまう。気分が落ち込む前に、羽多野に礼を言って、再び帰る準備を始めた。

「気をつけるんだよ、夢斗君」

「え、気をつけるって？」

「好奇心は大切だが、あまりそういう闇の部分にのめり込むのは、良くない。感情や思想ってものは、病気と同じで人から人へ伝染する。殺人鬼を追っていた者が、その狂気に『あてられ』て同様に殺人を犯す——そんなこともあり得る」

一瞬、動きを止めて身をすくめてしまった。なんだか妙にゾッとしてしまう。自分がこれから調査しようとしている相手に、飲み込まれるなど、考えてもみなかった。

引きつった笑みを浮かべ、夢斗は告げる。

「だ、大丈夫ですよ。集めるんなら心臓なんかより、ゲームか漫画にしときますから」

空元気でジョークを返し、足早に診療所を後にした。立ち去る夢斗を見て羽多野は少し首をかしげていたが、いつも通りそそくさとカルテに経過を書き綴っていった。

カラッと晴れた街を足早に進み、家へと戻る。土曜日ということで、いつもより人通りは多い。もう少しすれば夏休みもやってくることから、皆、浮き足立っているのだろう。

自宅に戻り、とりあえずは一服する。台所で麦茶を飲んでみると、いつも通り母親が姿を現した。相変わらずだるだるのジャージ姿である。

「おー、おかえり。どうだった、今日は」

「ただいま。別に、特に進展もなしだよ。ちょっとばかし、精神状態は良くなってるっぽくてさ」

「ホォ〜、よかったじゃないのさ。どしたの、何か良いことでもあったの？」

「いや、別にになにもねえよ。たまたまじゃない？」

原稿と夢斗の顔を交互に見ながら、問いかけてくる母親。彼女にもやはり本当のことは告げていない。いくらそういう世界観に耐性があっても、息子が真顔で「異世界に行った」と言い出したら、どう思うことだろうか。

「あれ、そういや父さんは？」

「あー、今朝メールがあってね。お得意様のところでトラブルだから、帰るのは明日だってさ」

単身赴任の父は毎週土日しか返ってはこない。どうやら父はこの炎天下の中、まだ仕事に精を出しているようだ。

「お父さんも心配してたよ、あんたの容体。いっつも、気にかけてくれてんだから」

「父さんが？ いって、そんなの。こっちはこっちで、なんとかするから」

「ま〜たく、可愛げがないねえ。親の愛くらい素直に受け取りたまえよ」

痛快に笑う母を見ていると、どうも調子が狂ってしまう。対して、夢斗の父はかなり物静かで

堅実な男だから、この母とどういう経緯で出会うことになったのか、まるで謎である。

「あんた、お昼なに食べたい。どうせ家にいるんでしょ？」

「あ...いや、ちょっと今日は、用事があるんだ。外で済ませるよ」

この一言に、驚いたように目を開く母。

「あれ、珍しいじゃない。あんたが休日に外に行くなんて」

「俺だって引きこもりじゃないんだからさ...そういう時もあるっつーの」

夢斗の回答に「ふーん」と母は返す。関心があるんだかないんだか、なんとも掴めない抑揚だ

。

ひとまず、これから訪ねて来るであろう「待ち人」に備え、部屋に戻って準備をする。動きやすい格好は昨日と同様である。加えて、今度は包帯や消毒液、絆創膏といったちょっとした薬を持参する。

言わずもがな、これからあの幻想と危険が隣り合わせの世界に、おもむくためだ。

そうこうしているとチャイムの音が響いた。夢斗が出るよりも先に、台所にいた母親が扉に近付く。

独り言のように「はいはいはい〜」と呟きつつ、サンダルに足を通す母親。しかし、ドアの向こうから聞こえてきた元気な声に、驚き、顔を上げた。

「ゆーめーとーさーん！ 来ましたよー！」

恐る恐るドアを開ける母親。そこに立っていた金髪・碧眼の少女と、目が合った。

リサは母の登場にも動じず、ぺこりと頭を下げる。

「あ、初めまして。夢斗さんのお母さんですか？」

「あ.....ああ、はい、そうですけど」

「初めまして。同じ学校に通う、日向 リサと言います。以後、お見知りおきを」

なんだか女子高生がするには堅苦しすぎる挨拶だが、それでも深々とリサは頭を下げた。つられて、母もただ頭を下げる。

そうこうしていると、玄関に夢斗も戻ってきた。

「あ、夢斗さん、こんにちは！」

「おお、リサ。お待たせ。ん、どうしたんだよ、母さん？」

外にいるリサ、そして廊下に立つ夢斗を交互に見つめる、母親。彼女は思わず、ずいと夢斗に近寄ってきた。

「な、なんだよ？」

「あんた、や————ってるじゃんか！ ああ、そうか、そういうことか〜」

なぜかテンション高めに、嬉しそうに語る母親。しかし、その意図がいまいち分からない。

「なんだよ、どうしたの。急に」

「いや、なるほどね〜。これが、カウンセリングの調子が良い、理由ってことね。あんたも男になったねえ」

「は？ だから、なんだよ、それ」

「ガールフレンドができたんじゃないあ、休みの日にゴロゴロなんてしてられないってわけだ」

どきりと、鼓動が高鳴る。一方、話が聞こえてないリサはじっと二人のやりとりを見ていた。どうやら、母の小声は聞こえていないらしい。

「なっ、ばっ、ちげえっての！」

「しかも外国の子？ すっごいね、最近の高校生は、グローバルコミュニケーションってやつ？」

「だから聞けよ、そういうんじゃねえから！ ただの同級生だ！」

夢斗の主張など、全く聞く耳を持ってくれない母。リサに聞こえてるのではないのかと、気が気ではない。

「羨ましいねえ～、若いってパワーはさ。でもあんた、そんな格好で言い訳？ もっとビシッと決めて行った方がいいんじゃないの？」

「いい加減にしろっての！」

らちがあかない——夢斗は半ば押し切る形でとにかく靴を履き、外に出た。すでに顔は真っ赤で、リサも不思議そうに見ている。

「夢斗さん、どうしたんですか。体調でも悪いんですか？」

「ち、違う！ 大丈夫だから！」

なんとか平静を保とうとする夢斗。しかしここで背後にいた母が、追い打ちをかける。

「行ってらっしゃい、夢斗。あ、もしお泊まりとかになるんなら、ちゃんと連絡するのよ～。私はそういうの、全然オッケイだからね～。あ、でも、ちゃんとつけるものはつけなさいよ～」

ニコニコ、というよりはニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべたまま、母は返事も待たずに玄関を閉めた。振り返り、無機質なドア越しに、あらん限り威嚇する夢斗。

だが意味の分かっていないリサは、なおも問いかけてくる。彼女の純粹さが、今はただ辛い。

「お泊まり、って何ですか？ それにつけるって何——」

「な、なんでもないから、本当！ 行こう！」

恥ずかしさ、気まずさを紛らわすように、ずんずんと歩き出す夢斗。

前々から分かっていたが、デリカシーの欠片もない。帰ってからも当分はからかわれることを思うと、少し憂鬱になってしまう。

幸先、悪すぎるだろう——火照った頭を冷やすように進む夢斗。リサは首をかしげながらも、とにかく彼に続いた。

目的地に向かうその道中で、二人はまずは昼飯を済ませることにした。商店街の中にある「ワールド・バーガー」なるハンバーガー店に入る。昼時ということもあり、レジには行列ができていた。最後尾に並び、メニューを眺めながらも夢斗は言う。

「ご、ごめんな。いきなり、うちの親がうるさくて」

「いえ、とんでもないです！ 元気なお母さんですね、それに凄い若くて綺麗ですよ」

「そんなことないよ、必死にシワとか隠してるだけさ。あと、今日はたまたま、仕事終わりで調子が良かっただけだよ」

漫画家という職業柄、締め切り間際になると、連日徹夜でクマが出てくることも珍しくはない。確かに、母は見た目は若くスタイルも良いのだが、あの偏屈な性格が中に潜んでいると思うと、

憂鬱だ。

「でも、ちょっと羨ましいですねえ。私、お母さんがいないんで、憧れちゃいます」

思わず「えっ」と振り向く。リサは相変わらず、メニュー表を見上げたままだ。

「いないって……ご、ごめん、そうだったのか…」

「謝る必要なんてないですよ。もう随分前からですから」

ちらりと青い瞳がこちらを見た。二人の視線が、一瞬交わる。

「私のお母さん、日本で英語の先生をやってたんです。日本で国が大好きで、お父さんとは観光に来て出あって、その末に結婚したって聞きました。日本語も英語も、ペラペラだったんですよ」

母親が異国の出身で、日本で彼女を産んだ、とは聞いていた。しかし、まさか母親が亡くなっているとは、思ってもみなかったのだ。なんだか夢斗は気まずい空気に、歯噛みする。

時折、興奮した彼女の言葉に英語が混じるのは、それもまた母親の教えてくれた言葉だったからだろうか。

「私が、中学生の時ですかね。どういうわけか急にお母さん、いなくなっちゃって。警察の人も探してくれたんですけど、未だに見つかってないんです」

再び、彼女の顔を見つめてしまう。

「いなくなったって……失踪したってことかい？」

「はい。いなくなる前の夜、いつも通り一緒にご飯を食べたのを覚えてます。だけど朝、部屋にはお母さんはいなくて。調べたら、お母さんの机の引き出しから、手紙が見つかったんです。お母さん、仕事のこととか色々悩んでたらしくて…疲れて、限界だったみたいでした」

次から次へと出てくる辛い告白に、夢斗はどうして良いか分からない。また「ごめん」と言いたくなるが、彼女に気を使われてしまうのが怖かった。

夫と子供を置いての失踪——それが当時のリサに、どれだけのショックをもたらしたのか。今の夢斗には知る由もない。だが、聞いているだけの第三者でも、胸が張り裂けそうになる。

「元々、お父さんは仕事がすごく忙しくて、滅多に家にいませんでした。だから、お母さんと話すこともあまりなくて。それは子供の私でも、少しずつ分かってはいたんですけどね」

国という境を超えて、一度は温まった夫婦の絆。だがそれは時が経つうちに温度を失い、やがて互いを信頼できないほどに冷め切ってしまったのかもしれない。

言葉を失ってしまう、夢斗。だが、リサはあくまで笑顔を浮かべ、語りかけてくれる。

「もお、気にしないで良いですって！ 私も、そりゃあ昔は辛かったけど、いつまでも引きずり続けてるわけにもいかないじゃないですか。きっと、大人には大人にしか分からない世界があって、感情があるんだと思うんです。だからお母さんだって、なにか考えがあって、いなくなったんだと思うんです」

お気楽で、少し的外れで、それでいて明るい——そんな快活な少女は、夢斗でも驚くほど重い現実を受け止め、前に進もうと今日を生きている。夢斗ははっきり言って「不思議な子」程度にしか、彼女のことを考えていなかった。だからこそ、そんな自分の方こそ「気楽だった」のだと、自身を恥じてしまう。

それでもなお、彼女はにっこりと笑ってくれた。

「だから私、お母さんを嫌いになんてならないですよ。お母さんはいつまでも、私の大好きなお母さんですから。いつかきっと、またどこかで逢えればいいな、って思ってますから！」

彼女の眩しすぎる笑顔に、今の夢斗は耐えることができない。拳を握り、足元を見つめてしまう。

「リサは……強いな」

かつて夢斗も、記憶とクラスメイトを失い、抜け殻のようになっていたことを思い出す。理不尽な力によって、予期しない別れを強いられ、魂が凍りついていた時期があった。

もしそれが母親だったらどうなっていたのだろうか。ふっと、意地悪な笑みを浮かべる母の姿が思い浮かぶ。日々、独特のノリで、ベタベタと絡んでくる姿を、時折うっとおしくも思う。

だがそれでも、あの姿がある日ふっといなくなったら、どう思うのだろうか。自分はこの少女のように、耐えられるのだろうか。

そう思うとより一層、握りしめた拳に力がこもる。

今なら分かる。この少女が昨日、謎の殺人鬼を探す、と真っ先に決意した理由が。

夢斗だけではなかったのだ。彼女だって、誰かがいなくなる「痛み」を知っている。

どんなに困った顔をされても、謝ろう。そう決意し、夢斗は再びリサを見た。

だが彼女の顔に、ハッとする。

リサは再びメニューを見たまま、何やら真剣な表情を浮かべていた。鬼気迫ると言っても良い。まじまじとメニューを見つめ、腕組みをして直立している。何やらボソボソと、口元が動いていた。

「手堅くチーズ…いや、照り焼きも随分食べてないし、だったらダブル照り焼きでズドンと…ああいや、でも期間限定？ 期間眼底かあ……でも口コモコで目玉焼きなら、ベーコンエッグでもカバーできるし……」

ぶつぶつと独り言を言いながらも、着実に前の客に合わせて進んでいく姿は実にシュールだ。ついには指差し確認のように、メニュー表の内容を確かめだした。

「二つ頼むとして、和風と洋風…でもだったら三段重ねでもいいと思うし、だいたいポテトが来るから……」

「あ、あの…リサ？」

「ん、ナゲット？ ああ、鶏肉、いいですねえ。バーベキューソースか、マスタードのみというオツな食べ方か…」

どうやら夢中になってしまって、声が聞こえていないらしい。夢斗は目の前で手を振りながら、言う。

「リサ、おーい、リサ！」

「へあ！？ あ……ああ、ゴメンなさい！」

我に返ったリサが大声をあげ、周囲の客も驚いたようにこちらを見ていた。

「いや、まあ、大丈夫なんだけど…随分、真剣だったな」

「あ～……あ、あははは、ソーリー。私、食べることが大好きで、いつも夢中になっちゃうん

です」

先程までの重々しい空気が一変、いつものあっけらかんとしたリサが帰ってくる。困ったように笑う彼女を見ていると、なんだか必要以上に突っ込むのは、無粋な気もした。

窓際の一席を陣取り、昼飯にありつく二人。シンプルなハンバーガーセットの夢斗に対し、リサは結局、照り焼きバーガーのセットに、ダブルチーズバーガーと冷たいシェイクを追加した。

「いただきまーす！」

嬉しそうに手を合わせ、すぐさまリサは昼飯に手をつけた。包み紙を開け、一口食べては恍惚とした表情を浮かべ、それをコーラで流し込んで痛快なため息を漏らす。

恐ろしく食べるペースは早い。かつて購買のパンを次から次へと流し込む姿を、思い出した。

「そ、そんな急がなくても...別に、逃げやしないんだから」

「でも早くしないと冷めちゃいますよ？ 今がベストなんです」

言っている間に、なんと照り焼きバーガーが消えてしまった。マイペースで食べている夢斗はたじろぎつつも、着実に自分の分を口に運んだ。

リサが二つ目を食べ終えた頃、ようやく二人は本題に入った。

「『心喰い』か...あれから色々考えたけど、やっぱり良く分からないよな。一体何の目的があって、そんなことをするんだろうか」

「わっかんないですよねぇ。猛獣の仕業って考えもしたんですが、わざわざ心臓だけっていうのが、おかしな話ですしね」

思えばこんな場所ですら話でもないのだろうが、リサは気にせず、次はポテトに着手している。これまた、ハムスターのように高速で口の中に押し込んでいった。

「となると、やっぱり人がやってるって考えるのが無難だよな。状況だけ見れば、王国に恨みのある獣人がやっているように、確かに見えてしまうよな」

「う〜ん、その可能性も消えてはない気もするんですよ。レジスタンスも良い人は多いんですが、結構、血の気は多い人ばかりでもあるんで...」

「レジスタンスの人数は、確か数十人だったか。その中から一人一人、探りを入れてちゃあ時間が足りなすぎるな」

レジスタンスとて、いわば正式な管理をされていない義勇兵の集まりだ。その中で各々が何をしていた、どこにいたかなど監視できるかも怪しい。そうなった時、確かに王国が言うように獣人達の「誰か」がそれをやった、と思ってしまうのかもしれない。

だが、ここでリサがシェイクを飲みつつ、眉をひそめる。

「それに、もし獣人以外の誰かが犯人なら――探りを入れなきゃいけないのはもっと大勢になっちゃいます。そもそも、まだあの近くにいるのかも怪しいですしね」

もし犯人が旅人のように、土地から土地へと渡り歩いていたら。そうすると、もはや搜索範囲は世界規模になってしまう。現代社会の最新技術を用いても、困難な案件だ。

「ダメだなあ、なんか考えれば考えるだけ、八方塞がりになっていく気がするよ」

椅子にもたれかかり、天井を見上げる。蛍光灯のぼんやりとした灯りを見つめながら、ため息をついた。

だがそんな夢斗に、なおりサは力強い言葉を投げる。

「大丈夫ですよ。一つ一つ調べていけば、きっと何か手がかりがあるはずです」

視線を戻すと、にっこりと笑うリサが見えた。彼女はすでに、あれだけあった昼飯を平らげてしまっていた。

肩の力が抜けてしまう。リラックスした笑顔で、夢斗も返した。

「ほんと強いな、リサは。なんだか羨ましいよ」

「そんなことないですよ。困った時こそ、笑ってれば神様はきっと見ていてくれます。お母さんが、小さい頃そう教えてくれました！」

母という言葉に、再びハッとする。そしてまた、これでもかと痛快に笑うリサ。

母のことは嫌いではない——あの言葉はきっと本心なのだ。いなくなったから、とか。置いていったから、とか。そんなことよりも、なによりも。それでもリサにとって、母親はたった一人の母親なのだ。

思わず「そうだな」と呟き、改めて気合いを入れ直す。

がんじがらめにされ、しょげてる場合じゃあない。

「ここでずっとこうしてても、確かにしょうがないよな。よし、行こうぜ。もしかしたら、光一も何か見つけてくれてるかもしれない」

「はい、行きましょう！」

勢い良く立ち上がる二人。しかし、ここでリサの口から特大のげっぷが漏れる。今までの笑顔が消え、目をまん丸にする二人。

「あ———」

周りの客が、微かに笑っているのが分かった。

満腹になったリサは立ったまま顔を真っ赤にし、こちらを凝視している。

これがリサという少女なのだ——苦笑し、夢斗は告げる。

「あ～……ゆっくり、腹ごなししながら行こう」

困ったように笑う夢斗に、リサも恥ずかしげにこくりと頷いた。

こちらの世界と異界・クレイドルの場所が対応しているということを、以前リサから聞いた。「武力派」の新たなアジトから戻ってくる際、二人は街のはずれにある川のほとりに辿り着いていた。

ゆえにそこから「オーバー」の力を使えば、アジトの中に直接、移動できるはずである。

目論見どおり、二人は力を発動させることによって光に包まれ、気がついた時にはレジスタンスのアジトである古代遺跡の中にいた。

「おっし、成功！」

夢斗は自身の力に慣れてきたことで、無理なく世界を行き来できるようになってきていた。リサが思わず拍手する。

「すごいですよ、夢斗さん！ こんな短期間で、コツをつかむなんて」

「た、大したことじゃないよ。ちゃんとリサが教えてくれたからさ」

自分のことのように喜んでくれるリサを見ると、なんだか照れてしまう。

二つの世界の時間の流れは微妙に異なっている、ということも聞いたが、外を見ると太陽はまだ高い位置にある。しかし静まり返った室内と少し冷たい空気から、昼よりももっと時間は早いようだ。

「なんだ、来るのが早すぎたのかな」

「う～ん、どうでしょう。もしかしたら、早朝なのかもしれないですね」

だが耳を澄ますと、遠くから何やら声が聞こえる。そちらに向かってみると、そこは食堂代わりに使われている大きな広間だ。運び込んだ机が不規則に置かれ、各々が好きな場所で朝飯を食べている。

そのうちの一人が、二人に声をかけてくれた。

「おーい、夢斗君、リサさん、こっちこっち！」

見れば、壁際で光一が朝食を取っていた。駆け寄り、二人も座る。

「随分早かったんだね、二人共。てっきり晩に来ると思ってたけど」

「行動するなら、早い方がいいと思ってな。それに今日は土曜だからさ」

「あ～、休みなんだね。そっかそっか、二人は学校に通ってるんだもんなあ」

懐かしげに納得する光一。彼は朝飯である豆の煮込みをスプーンで口に運んだ。残っている品を急いでかき込み、食器を空にして、早速、本題に入る。

「まあ、実を言うと僕も二人が帰った後、早速色々、聞いて回ったんだ」

「ええ、もうやることやってたのか？」

「やるなら早いほうがいい、でしょ？」

自身の言葉で打ち返されてしまい、目を丸くしてしまう。対する光一は意地悪な笑みを浮かべていた。

「ただ、あまり状況は芳しくないね。皆『心喰い』に対する怒りは抱いていても、肝心の情報はほとんど知らないみたいなんだ」

「むう～、それは残念ですねえ。なにか知ってる人がいれば良かったんですが…」

リサも残念そうに眉をしかめる。夢斗は腕を組み、テーブルに視線を落とした。

「俺が通っているカウンセラーの人に聞いたんだが、犯罪者としては『殺したという象徴』を持って帰ることで、相手を支配したとか、達成感を味わうって心理があるんじゃないか、ってことらしいな。ま、理解には苦しむけど…」

「うええ、悪趣味だなあ。そんなの飾った部屋なんて気持ち悪いよ」

舌を出して嫌がる光一を見て、苦笑いしてしまう。だが、光一はすぐに真剣な表情を取り戻した。

「でも、もしかしたらなにか関係があるのかもね。僕も色んな人に事件の内容を聞いてたんだけど、死んでいた兵士達は『心臓を取られていた』ってこと以外は、ほとんど外傷はなかったらしいよ。まさに、犯人の目当ては殺すことだけじゃなくて、心臓をとる、ってことなんじゃないかな」

「ってことは、やっぱり犯人は抜き取った心臓に、強い意味を抱いているってことか」

こくりと頷き「たぶんね」と告げる光一。リサがこれに続く。

「じゃあ心臓っていう部分に、何か意味を見出せれば、そこから予測できるかもしれないですよ。もちろん、そういう『コレクター』っていう歪んだ考え方もあるかもですが……他にも、たぶんありそうな気がするんです」

「そ、それって、心臓の使い道ってことか？」

素直に頷くりサ。彼女もまた、真剣な眼差しで続けた。

「昨日、ちょっと考えてみたんです。確かに私達の世界では、心臓を抜き取ってなんて、ただの猟奇殺人事件でしょう。でも、この世界——クレイドルならではのなにかがあるんじゃないかな、って。そう考えた時、ふっと思いついたんです。こっちにしかない、ある『概念』が」

随分と難しい言い回しに、首をかしげる二人。

夢斗らの世界にはなく、異界・クレイドルにのみある存在——そんなものが、あるというのだろうか。

これには、よりこの世界に長く身を置く光一が声を上げる。

「それってもしかして、魔法のこと？」

ビシッと、リサが指をさす。その気合いに「わっ」と驚く光一。

「コレクト（正解）！　そうです、魔法です」

「魔法のために、心臓が必要って…ど、どういうことだ？」

あいにく回答を聞いても夢斗にはピンとこない。リサは静かに続けた。

「私がこちらに来るようになって、ニンバムさんから魔法についても色々教えてもらいました。魔法っていうのは元々、自然の中にある魔力を使って火を出したり、水を生んだり、風を走らせたりする、そういう基礎となる魔法の他に、もっともっておぞましいものもあるらしいんです」

リサの言葉にどこか迫力がこもる。二人は心して、彼女の言葉を待った。

「例えば、この世のものではない『精霊』や『魔神』を呼び出すためには、より強い力を生むた

めに生贄って考え方があったりするようなんです。生きた人間を差し出すことで、それを餌にして強い存在を引き寄せる、ってことらしいですね」

「そ、そりゃまた、随分おぞましい話だな。人の命を餌に、とんでもないものを呼びよせるってのか」

にわかには信じがたい事実だ。しかし、ここで光一が補足する。

「う～ん、確かにあり得る話かもね。僕も学生の時に本で読んだことあるけど、僕らのいた世界ですら海外では『魔女』や『悪魔』って考え方があったらしいよ。人の命を使って祈祷を行うことも、国や文明によっては当たり前のようにやっていたことらしい。ましてや、クレイドルはその『魔法』が現実に存在する世界なんだ。あながち、あっても変じゃあないかもしれない」

思わず夢斗は「へえ～」と素直に感心してしまう。さすが、本の虫だった光一だからこそできる援護射撃だ。

「てことは、誰かが『悪魔』だの『魔神』だのを呼び出すため、必要な数の『心臓』を集めている、ってことなのか？」

「確証はないですけど...でも、そう考えたら、なんだかしっくりくる気がして」

リサの言うとおりかもしれない。何も裏付けはないが、そう考えると今まで謎めいていた「心喰い」という事件が、少し怪奇性を失うような気すらする。

「そうなるよ、なにかそういうことに関する『魔法』を探っていけばいいのかな。てなると、ここで一番魔法に詳しいのは...ニンバムか？」

夢斗だけでなく、リサや光一も同意見だった。今のところレジスタンスの中で「魔法」に精通しているのは、彼くらいしか思いつかない。

しかし、ここでリサが疑問を投げかける。

「でもニンバムさんだって、この事件については調べてるはずですよ？ なら、とっくに調べ終わってるはずなんじゃあ...」

「あ～、そっか。その上で『分からない』っていうことなら、やっぱり手がかりは掴めてないのか...」

一瞬浮かび上がった微かな希望が、またずぶずぶと沈んでいってしまう。夢斗、リサも険しい顔をせざるをえない。

だが、これをすんでのところで、光一がすくい上げる。

「ならもっと他に、詳しい人に聞けばいいんじゃないかな」

思わず顔を上げ、彼を見る二人。

「もっと詳しい人って、ニンバムより詳しい人がいるのか？」

「う～ん、ここにはいないよ。そもそも、武力派は力技を使う人ばっかだから、魔法なんて、とてとても」

首をかしげる夢斗。光一はさらに続ける。

「前に聞いたことがあるんだ。ここ最近、ルガリアは白兵戦や騎馬戦以上に、魔法兵の育成に力を入れてるって。事実、レジスタンスの前にも、当たり前のように魔法兵団が姿を表すようになったしね」

そういえば初めて見たレジスタンス対王国の戦いでも、火炎の魔法が飛び交っていた。あれがまさに、王国が誇る魔法兵団というものなのだろう。

だがそこまで考えて、疑問を浮かべてしまう。

リサがいち早く、彼の思惑に気付いた。

「そ、それってまさか...ルガリア王国の人に、教えてもらうってことですか？」

ぎょっとする夢斗。だが、光一のまなざしは真剣だ。

「う～ん、さすがにそれは無茶があると思う。でも、ルガリアにはそういう魔法兵団を育成するために、各地から書籍や魔法学者を集めた専門機関があるらしいよ。そこに行けば、もっと詳しいことが分かるかも」

餅は餅屋、という言葉があるが、まさにそれだ。レジスタンス以上に魔法に精通した特殊機関。ともすれば、怪しい儀式や風習についても、関連する書籍や知っている人間がいるかもしれない。

ただし問題はそれが味方ではなく、敵対している国の内部にある、ということだ。

「それって...つまりルガリア王国に、潜入する必要があるってことか」

「そうだね。だから、はっきり言って無謀かも。なにせ、王国は今厳重な警戒態勢を敷いちゃってる。そもそも国に入ろうにも、検問に引っかかったら、おしまいだよ」

言ってはみたものの、と光一は困ったようにため息をつく。

妙案には思えるのだが、あまりにもそれはリスクが高すぎる。どれだけ情報量があろうとも、監視の目をかいくぐっての潜入などスパイに近い。もちろん、バレれば怒られるなんてレベルでは済まないのだろう。

リサはまだ諦めきれないらしく、腕を組んで唸っている。

「でもそれができたら、色々情報が得られますよ。森の中を探しまわるより、もっと効率的です。なんとかならないですかねえ」

敵対関係の勢力、すなわちルガリア王国に侵入するなど、考えてもみなかった。だが今思えば、レジスタンスや獣人のことについては随分と分かってきたが、相手側のことは何一つ情報を持ち合わせていない。

「検問、ねえ...それさえ突破できれば、中に入れるわけか」

「突破っていっても、何人も兵士が見張ってるからね。完全に武装してるから、見つければその場で戦いも免れないし」

考えれば考えるだけ、どんどん煮詰まっていく。少しだけ突破口が見いだせそうになっただけに、悔しくて諦めきれない。

ああでもない、こうでもない、と、食堂で議論する三人。夢斗らの知恵が底を尽きかけた時、聞き覚えのある声が響く。

「お～う、コーイチ。それにお前ら」

振り向くと、それはレジスタンス「武力派」に所属する豚の獣人だ。相変わらず恐ろしい見た目はしているが、彼はそれでも笑いながら手をかざしている。

光一も手を挙げ、彼に挨拶をした。

「やあ、スヴェン。おはよう」

獣人・スヴェンは巨体を揺らしながら歩み寄り、椅子にどかりと座った。抱えていた肉やら酒やらを机の上に置く。少し驚き、光一は問いかけた。

「あれ、どうしたの、これ。まさか食料庫から――」

「ばっきゃろう、んな怖いことできっかよ。料理長にぶった切られちまうわ」

皆、ちらりと厨房の方を見つめた。部屋の隅に道具を寄せ集めて作り上げた厨房では、虎の頭部を持つ獣人の女性が巨大な出刃包丁で料理をしている。あれが噂の料理長らしく、確かに恐ろしい風貌だ。

「いやあ、ちょうど行商のやつが来てるんだ。今回も、あれこれ色々と仕入れてきたらしい。ほら、見ろよ。こいつあ、南のマシズミ港で取れる岩マグロだ。干すといい肴になるんだよ」

まるで岩のようにゴツゴツと隆起した鱗を持つ魚だ。うまそうには見えないが、これも異界独特の珍味なのだろうか。

光一はなおも問いかける。

「行商だって？ 今、来てるのかい？」

「おうよ。何を相談してたのか知らねえが、お前さんも早く行かねえと、めぼしいもん、なくなっちまうぜ」

ここで光一に対し、夢斗は問いかける。

「誰かお客さんでも来たのか？」

「ああ、うん。まあ、僕の方がお客さんなんだけどね。旅の商人だよ。各地を渡り歩いてて、時折、アジトに寄ってくれるんだ」

これにはリサも興味を示す。

「へえ、その方も獣人ですか？」

「うん。でも、今回は久々だよ。最後に来たのが数ヶ月前かな」

見たこともない鱈甲色の石を撫でながら、スヴェルが答える。どうやら行商から琥珀を買ったらしい。

「おうよ。だから、お前さんらも運がいいぜ。なんでも品を探しに、随分遠くまで行っていたらしいな」

「へえ、それは確かに良いタイミングだな。そうだ、夢斗君達も見に行ってみる？」

突然の誘いだったが、確かにこのままここで煮詰まっていたらちがあかない。ある意味、良い気分転換にはなるかもしれない。

なにより横にいるリサが先程から興味津々な眼差しで、品々を見つめているのは夢斗にも分かっていた。

「そうだな、ちょっと行ってみようか？」

「はい、行きましょう！」

案の定、ワクワクしながら立ち上がるリサ。これもまた、彼女の言う「幻想の世界」に触れる良い機会なのだろう。

一同はスヴェンに別れを告げ、1階の大広間へと降りて行った。すでにそこには大勢の獣人達

が集い、朝飯も食べていないのに行商を取り囲んでいる。

数々の品の中央に立つのは、黄緑の肌をもつ獣人だ、目を凝らして見ると、それは体毛ではなく鱗であることが分かる。長い爪をもつ手足、ズボンからはみ出た長いしっぽ。特徴的なのはやはり頭部で、尖った口には牙がチラリと見える。髪のように見える部分は垂れ下がった耳で、ここにも鱗がついていた。

パッと夢斗が抱いたイメージは「ワニ」だ。ワニ型の獣人は大柄で、上半身に覗く筋肉は隆起している。かなり力がありそうだ。

群がる獣人達に、彼は大きな声で言い放つ。

「ほらほら、並んで、順番順番。んな、急がんでも逃げも隠れもせん。ちゃんと売ったるわ」

聞こえてきた独特の喋り方に、思わず足を止める。光一が少し首をかしげた。

「あれ...前来てた人と違うなあ。新人さんかな？」

ゆっくりと歩み寄る三人。しばらく遠巻きから、置かれている品々を眺めていた。袋いっぱいに入った黄色い芋。大蛇のように見える銀色の魚。キラキラと輝く砂の入った小瓶の数々。大小様々な、色とりどりの牙。

ありとあらゆる奇怪な品を獣人達も手に取り、眺めている。次から次へと目ぼしいものを見つけては、行商のワニ男に持って行った。皆、銅や銀のコインを持っている。

「は～いははい、そちらさんは銀貨4枚ね。はい、こっちは銅貨16枚。高いからって、まけへんからな。ほらそこお、買ってもないのに蓋あ開けるんやない」

手際よく商品の精算をしていくワニ男。その捌き方は見事で、あれよあれよと商品が売れていく。瞬時に計算し、釣り銭を渡していく姿は、実に鮮やかだ。

だが、その姿や商品もそうなのだが、先程から夢斗は彼の「喋り方」が気になってしまっている。

「まける？ アホ言え。はるばる東の砂丘で、命からがら手に入れた品やで。これでも大特価なくらいや」

何度聞いても、それは流暢な「関西弁」だ。独特の話し方にリサ、そして光一も気付く。

品がどんどん売れていき、徐々にだが獣人の群れも少なくなっていく。三人はようやく間近に歩み寄り、彼を見ることができた。ワニ男はあぐらをかいて座り、稼ぎを計算しているようだ。

不思議そうに見つめる夢斗らに気付き、彼は振り向いた。

「ん、なんや、あんたら。獣人以外の人種が、なんでこんなところにおるんや？」

いぶかしげな眼差しを向けてくるワニ男。その瞳は縦に長く、まさに爬虫類のそれだ。あまりにも人間離れした風貌にたじろいでしまうが、夢斗は先頭に立って対峙する。

「レジスタンスの人達にお世話になってるんだ。大丈夫、敵じゃないよ」

「ふ～ん、あっそ。珍しいやつもおるもんやな」

それだけ分かったと、彼はそそくさと視線を手元に戻し、勘定を再開する。どうやら、最低限の興味しかないらしい。

「これ、全部あんたが運んできたのか？」

「せやで。外に停めとる荷馬車に積んできたんや。どれも各地から直接仕入れた値打ちもんや」

周囲の品物を見渡す夢斗。リサはすぐ隣にある壺の中を覗き、声をあげていた。見ると、体長1メートルはありそうな黒いうなぎが数匹、水の中で泳いでいる。

光一もスイカのような毒々しい色の果物を眺めながら、問いかけた。

「前に来た人とは違うよね。担当が変わったの？」

「ああ、先代が調子が悪くなったから、ここらの地域もワイが回るようになったんや。なんや、不満でもあるんか？」

ギラリと睨まれ、光一は身をすくませてしまう。慌てて首を横に振った。その威圧感たるや、捕って食ってしまわれそうだ。

商品を眺めながら、光一が彼について教えてくれる。なんでも何人かでチームを組み、各地で仕入れた品を分け合いながら、地域を分担して行商を行う者がいるらしい。このワニ男もその類で、前々からレジスタンスだけでなく、ルガリア王国などにも商売を持ちかけるらしい。

思わず、夢斗が驚く。

「ルガリアだって。獣人なのに、王国に行くっていうのか？」

「うん、彼らは特別さ。もともと、王国とも長い付き合いがあるから、お得意様の関係みたいだね。だけど、レジスタンスとも関係を持ちながら、それを黙って王国ともやりとりするなんて、よくそんな危ない橋を渡るな、とは思うけどね」

商魂たくましいがゆえだろう。身の危険すら顧みず、儲けのためにあえて危険な地へと足を向ける。これはこれで、少し種類の違う「冒険」なのだろうか。

妙に感心してしまう夢斗。そうこうしていると、店じまいなのか残った品をワニ男は片付け始める。彼は品をまとめながらも、残った客に告げた。

「心変わりして欲しくなったら、いつでも言いや。ワイはもうしばらく、ここでのんびりさせてもらうさかいに」

彼はそれをまとめて担ぎ上げ、外へと運んでいく。腕力も相当なもののように、器用に、丁寧に荷物を運び出す。

口を開け、彼の背中を見つめる夢斗、リサ。光一がすかさず補足した。

「いつもアジトに来てから、2～3日はいるんだよ。旅の支度をして、また次の場所へ行っちゃうんだ」

旅先で商売をするついでに体を休ませ、そしてまた次の場所へ。まさに渡り鳥のような生活だ。

広間から散り散りに去っていく獣人達。だが夢斗らは残ったまま、ひそひそと相談する。

「こっちの世界にも、関西弁なんて喋る奴がいるんだな...妙な感じだぜ」

「私達の頭が、そう変換してるだけかもしれないね。『オーバー』の力が、自動的に言語を翻訳しちゃうせいで」

なんだかそう思うと、改めても妙だ。「オーバー」は世界を超えるだけでなく、そこに根付く言語を本能的に理解させてくれる、という副次効果があるが、便利なようなおかしいような、特殊すぎる力である。

光一が少し笑いながら、続いた。

「獣人言語は、だいたいどこでも統一されてるんだけど、確かに訛りってのはあるからね。僕もどういふわけか、この姿になると自然と聞き取れるようになったし。いまいち、その辺の仕組みは分かんないままだよ」

光一も人間の姿の際は、彼らの言葉が分からなかったのだ。獣人という同等の存在に「変わる」ことで、初めて理解できたのだろう。

一体、どういふ理屈なのか――だが今はそんなことを考えるより、もっと重要なことが気になっていた。

「なあ、あいつは獣人だけど、ルガリアに行くって言ってたよな」

「え？ ああ、うん、そうだけど」

「てことは獣人だったとしても、うまく王国に入り込むことができるってことか？」

二人は夢斗の心中を悟り、目を丸くする。

リサは先程までの話を思い出していた。

「で、でもそれは、あの人を王国と特別に付き合いがあるからでしょう？ 私達が行ったら、見つっちゃいますよ」

これには光一も賛同した。

「そうだよ！ 第一、王国に入るには城壁をくぐる必要がある。なんでもそこで入出国する人間を、厳しくチェックしているらしいしさ」

二人の怒涛の勢いに少し気圧されてしまう。慌てて夢斗は返答した。

「わ、分かってるよ。ちょっと考えただけさ。真正面から行って、どうにかなるなんて思っていないよ。ただ、それでも王国の中に入れるっていうんだから、なにかヒントでもないかな、と思っ
てさ」

画策していた三人にとっては良いタイミングだったが、いまいち決定打に欠ける。

くじけかける男二人の中で、やはり彼女は希望を捨てない。

「じゃあ、あの人に話を聞いてみませんか？ もしかしたら、何か手段を知ってるかもしれませ
んよ」

別段、夢斗らにとって、その提案を断る理由はない。今はとにかく、少しでも情報が欲しいのだ。

三人は互いに頷き、すぐに遺跡の外へワニ男を追って駆け出した。

谷の外は朝ということもあり、より一層空気が冷たく、澄んでいるように思える。切り立った崖の高さたるや、見上げるだけでくらくらしてしまうが、今は壮大な自然を堪能している場合ではない。

三人はすぐに、岩陰に止められた馬車を見つけた。ワニ男は荷馬車に繋いだ二頭の馬に餌をやり、寒波から身を守るための分厚い毛布を着せている。

駆け寄ると三人の気配を察し、背中を向けたまま彼は言った。

「なんや、さっそく心変わりか？」

この一言に怖気づくことなく、夢斗は言う。

「いや、悪いが物が欲しいんじゃないんだ。ちょっと、聞きたいことがある」

「ああ？ なんやねんな」

何度聞いても、清々しいまでの関西弁だ。ワニ男は紐をぎゅっと結ぶと、振り返って三人と対峙した。やはり大柄で、背の高い夢斗ですら少し見上げてしまう。

「あんた、ルガリア王国にも行くのかい？」

「ああ、せや。なんせあそこは市場もあるし、なにより人が多いからな。がっぽがっぽ儲けるで」

嬉しそうに、しかしどこか小狡く笑う彼を見て、三人は確信する。今度はリサがずいと前に出て問いかけた。

「どうやって、王国に入るんですか？」

「どうやってって、門からに決まってるやろが。検問で全部調べられるけどな。ま、ワイは違法なブツには手え出さんようにしとるから、正々堂々としとるけどな」

半ば予測していた返答に、三人は少しだけがっかりしてしまう。だが、なおもリサは食いついていく。

「他に、王国に入る方法とかないんですか？ 秘密の抜け道とか、ワープゾーンとか」

「なんやそれ？ 他にとって言われても知らんなあ、そんなん。だいたい、ルガリアは四方を城壁に囲まれてるんやで。そこを登ったり飛び越えようにも、城壁上にも見張り兵もおるし、巡回している『竜騎兵』もや」

ついには「竜」という存在の名までが飛び出し、ぎょっとする一同。まさにファンタジーのそれだ。

彼の話からいかにルガリアという大国の守りが固いか、ということが分かる。四方を囲む城壁。厳重な入出国審査。「竜」に乗り空を守る部隊。兵力、武力共に充実した歩兵団。そして戦場を焼き尽くす魔法兵団。

なんだか軽々しく「潜入」などと企んでいた自分達が、どれだけ浅はかだったかを叩きつけられたかのようだ。

絶句し、互いの顔を見つめる三人。その様子を見て、ワニ男はため息をつく。

「なんやレジスタンスさん、潜入工作でもするんかいな。ま、ワテには関係あらへんけど、やるなら用心しいや。王国で捕まりでもしたら、どんな拷問にかけられるか分かったもんやない」

ワニ男は最後に「おお、恐っ」とわざとらしく身震いし、再び馬の防寒具の手入れに戻った。ルガリア王国の難攻不落さ。そして捕まったその先のヴィジョンを少しでも垣間見てしまい、三人は身動き一つできない。

困惑する夢斗らに、背を向けたまま彼は言う。

「まっ、とはいえ、結局監視するのは『人の目』が頼りやからな。やろうと思えば、いくらでも隙なんざつけるんやろうけど」

その含みのある言い方に、思わず彼の背中を見つめてしまう。また一つ、彼は防寒具の留め具をしっかりと結び付けていた。

この男、何か知っている――直感的にそう考え、夢斗が切って出た。

「なあ、なにかルガリアに潜り込む方法を知ってるのか？ 頼む、教えてくれないか。俺らも困

ってるんだ。もしかしたら、戦争を止めることができるかもしれない」

意外そうに振り返るワニ男。しかし、その眼差しにはあまり本気の色は見えない。

「ほお、こらまた大きく出たな。戦争を止める、か。そら一刻を争う大仕事やな」

「ああ、だから頼む。どんな方法でもいいから、教えてくれないか」

「んで、いくら払うんや？」

切り返された一言に、ぎょっとする三人。

「払う、って――」

「こちとら、違法入国の手助けをするようなもんや。そんな危険を、ただでほしいとやると思うか？」

腰に手を当て、ふんっ、と鼻息を吐く男。

リサが横から助け舟を出す。

「お、おいくら支払えば、教えてくれるんですか？」

「そうやなあ、情報量ってのは特に値段を決めてへんが、そちらの言い値を聞いてみてからやな。ご相談次第ってやつや」

どこか意地悪に、そして得意げな表情を浮かべる男。この男、根っからの善人というわけではない。彼にとっては戦争だろうが、獣人と王国の抗争だろうが、それは等しく「商売の場」があるだけだ。

ご相談次第と言われても、その一言で三人は口ごもってしまう。なにせ、こちらの世界の通貨など一銭も持ち合わせていない。まさか、円なんていう見慣れたものを受け取るわけもなさそうだ。

払えるものがないということを感じ、また一つ大きなため息をつくワニ男。

「なんや、レジスタンスはそこそこ蓄えはありそうやけど、おたくら、文無しか？ なら、帰った帰った。この世界、タダほど高くて信用できへんもんは、あらへんからな」

結局、その一言がワニ男との最後の会話になってしまった。三人は反論する言葉も持たず、ただすすごと引き下がるしかなかった。遺跡の中に戻り、まずは光一がため息をつく。

「くっそお、銭ゲバにもほどがあるよ。同じ獣人だからてっきり協力してくれると思ったけど、まさか、ああくるとはね」

がっかりしたようで、尻尾がしゅんと垂れさがっている。もっとも、その気持ちは夢斗らも同様だった。

「金、か...て言ったって、無一文だもんな。あの様子だと、説得したところでどうにかなりそうもないしなあ」

「なんだか喋り方だけじゃなくて、性格まで『いかにも商売人』って感じでしたね...」

恐らく、ああやって異界各地を渡り歩いてきたのだろう。彼は各勢力に介入することはあっても、けして加担することはしない。あくまで商売相手としての卸所を増やし、土地から土地へ転々としているのだ。

ルガリア王国に対し、最も密に関われたであろう人物であっただけに、落胆も大きい。何か手はないかと頭を悩ませる。

光一が悩ましげに提案した。

「これはもう、素直にグレンとかに相談してみるのがいいかもね。事情を説明すれば、もしかしたら軍資金から出してくれるかもしれないよ」

「だけど大丈夫かな。俺らが敵の本拠地に入り込むなんて言ったら、止められたりしないか？」

「それも有りそうだけどね...どっちにせよ、賭けて感じは否めないけど」

グレンもまさか三人が敵の根城に直接潜入する、なんて策を考えついたなどと、予測できるだろうか。しかもその上で、中立の立場にある行商人まで巻き込むとなると、いささか反対の色は濃くなってしまいかもしれない。

いまいち煮え切らない三人。そんな一同に、またも見慣れた獣人が話しかける。先程、食堂で行商の品を持ってきていた豚型の獣人・スヴェンだ。

「おう、お前ら。行商には会えたのか？」

これには光一が空元気で返した。

「ああ、一応ね。と言っても、収穫なしさ」

「なあんだ、お目当ての品がなかったか。ご愁傷さまだな」

豪快に笑うスヴェンに、三人も苦笑いを浮かべた。もとより、夢斗らが欲していたのは品物ではないが、戦利品がないということには変わりがない。

光一は素直に気持ちを切り替え、次の目的であるグレンの居場所を探る。

「ねえ、どこかでグレン見なかった？ ちょっと確認したいことがあってさ」

問いかけに、スヴェンは「ああ」と頷き、答えた。

「大将なら、いつもの場所だよ。朝っぱらから、ガラクタ集めてご苦労なこって」

彼の返答に光一は納得したようだが、あいにく夢斗らにはその意味するところが分からない。戸惑う二人をよそに、光一はスヴェンに礼を言った。

「相変わらず研究熱心だね、グレンも。ありがと、行ってみるよ」

頭を下げ、そそくさと歩き出す光一。夢斗らも慌ててスヴェンに礼を告げ、後に続いた。

「おい、光一。あれで分かったのか？」

「うん。たぶんグレンは今、地下の『研究室』にいるよ」

「研究だって？ こんな場所で、研究なんてしてるのか」

夢斗の頭の中には、試験管やビーカー、見たこともない液体や標本が並ぶ部屋で、獣人達が白衣を着ている姿が浮かぶ。なんだか、今まで戦争だなんだと荒くれ者の集団と置いていただけに、ちょっと意外な光景だ。

しかし、光一も夢斗が想像しているイメージを察し、笑う。

「研究って言ったって、あくまで『戦いのための』ってことだよ。各地から仕入れた武器だとか、新たな戦術がどれだけ効果を出すのかとか」

やはり王国と戦うという前提がある以上、化学実験や物理計算なんて平和な世界が展開するわけもない。妙に納得し、夢斗らは光一の後に続いた。

遺跡の階段を降りると室温が一気に低下し、少し肌寒くなってしまふ。カンテラの明かりが照らす湿っぽい地下通路を進むと、大きな木製の扉を見つけた。迷うことなく光一がノックをす

ると、中から聞き覚えのある声が「どうぞ」と告げた。

重い扉を開け、中に入る。飛び込んできた光景に、夢斗は「おお」と声を上げてしまった。

広い空間にはそこらじゅうに武器や防具が並べられ、壁際にはそれを試すであろう木で作られた人形が置かれてある。ごちゃごちゃと散らかった机の上には、この周辺のものと思われる地図が広げられ、ペンで作戦と思われる記述がいたるところに記されていた。

スヴェンの言っていた「ガラクタ」とは、このことか――妙に納得していると、その武具の群れの中から赤毛の猫男・グレンがこちらに手を振る。

「やあ、君達。こんなところまで、どうしたんだい？」

三人は彼に歩み寄る。道具を蹴飛ばさないように慎重に進みながら、夢斗は答えた。

「ちょっと、昨日のことについて、相談が」

「おお！ じゃあ、協力してくれる気になったのかい？」

苦笑いしながら、夢斗は「一応は」と告げた。だが、三人の作戦は未だ問題だらけである。

夢斗だけでなくリサと光一もグレンに、自分達がやろうとしていること。そしてそのために行商を利用し、内部への潜入ができないかと画策していることを素直に告げた。

グレンは彼らが抱く具体的な案に、少し驚いたようだ。やがて口元のマスクを撫で、考え出す。

「潜入、か。実際、我々も幾度となく試みてはみたんだが、未だに内部に潜り込めてすらいない。それほどまでに王国の警備は嚴重だ。ただ、行商を利用するとはね。確かに、数ヶ月に一度だけ来る彼は、考えようによっちゃあ、またとないチャンスかもしれない」

思いの外、彼の返答は肯定的である。少し意外に思い、三人は驚いてしまった。

だが、ここでグレンの表情が少し曇る。

「だが...そうなる、ネックになるのはあの行商の性格だな」

首をかしげる三人に彼は説明してくれる。

「この地域の担当が、彼に変わったということは風の噂で聞いてはいたんだ。確か名前はキリウ。随分凄腕の商売人らしく、それでいてかなりの守銭奴だ。使えるものは全て使って銭を得る。そういうタイプの間人だね」

この言葉にリサは思わずため息をついてしまう。

「どこの世界にもいるんですねえ、そういう人。やっぱりお金って大事なんですね...」

ファンタジーの世界ですら、やはりそこには「金」が周り、人々に大きな影響を与える。なんだか信じていた世界観が急激に現実臭くなってしまい、ガッカリしたのだろう。

肩を落とす少女を見て、グレンは少しだけ笑った。

「まあ、お金持ちになりたい、は世界の共通の夢だからね。あのキリウって男は、その中でも物の価値を正しく知る一人さ。だからこそ、物だけじゃなく『情報』や『行動』、『協力』への対価は、特に高値らしい」

「なんだか徹底してるなあ。いかにも商売人って感じだけど、割り切りすぎてて嫌な感じだね」と、不満を漏らす光一。

「彼も真に価値を生むのは、物ではなく人間の『感情』や『信頼』ってものだって、分かってる

んだらうね。だけど、それらは往々にして不確かなものだから、やはり担保としての対価をより多く要求するのかもね」

不満を漏らす一同に対し、あくまでグレンは冷静だ。だがワニ男・キリウと話した夢斗らなら、その話は納得できる気もした。

難攻不落なのはルガリア王国だけではない。あの生粋の商売人も、一筋縄ではいかないだろう。

「彼を説得するために、レジスタンスとして資金を援助することには問題はないよ。ただ、彼がふっかけてくる額によるがね。なにせ、我々も国に所属した組織ではないから、使える金額も限られてしまう」

ルガリア王国というしっかりとした体制がある兵士団とは違い、レジスタンスはあくまで反乱分子の集まりだ。そこに集まった金額は、たかが知れているのだろう。

随分と雲行きが怪しくなってきた。そんな三人を少しでも励まそうと、グレンは話題を変える。

「キリウについては交渉次第といったところさ。だが、観点自体は悪くないと思う。僕も君らに負けてはいられないね」

言いながら彼は足元にあった道具をテーブルに置き、眺めていた。

思わず、光一が彼に問いかける。

「そういえばグレンは最近、そういうよく分からない道具ばかり持ち込んでるよね。一体なんなの、それ」

「よくぞ聞いてくれたね。ユメトさん達が来てくれたのも、良いタイミングだった。これは他ならぬ『オーバーテクノロジー』なんだよ」

思わず「ええ？」と声を上げる光一。夢斗らも驚き、机の上に横たわる謎の道具を見つめる。白い金属片が何やら組み合わさった一品ではあるが、あいにく用途はピンとこない。

夢斗は思わず、自身が履いている金属のブーツを眺める。

「『オーバーテクノロジー』ってことは、俺のこのブーツと一緒に物ってことか？」

「そのとおり！ 『オーバーテクノロジー』を保有しているのは、なにも『融和派』だけじゃあないんだ。僕らも各地でこう言う品々を、たくさん見つけている。ただ、あいにく『オーバー』がない現状では、何に使う道具なのかも判断できない状況だ。情けないことだがね」

最後に困ったような笑みを浮かべるグレン。「オーバーテクノロジー」は「オーバー」のみが使用することができる、未知の道具だったはず。であれば、グレンらにはこの謎の道具を使用することすらできないのだろう。見れば、似たような奇妙な形状のものが、部屋の所々に置かれている。

「本来、僕の方から君らを呼びに行こうと思っていたから、ちょうど良かった。頼みがあるんだが、これらの道具を調べるのを手伝ってもらえないかな」

思わずリサがグレンを見つめる。

「手伝う？ それって、何をすれば...」

「ああ、別段、危険なことは何もないよ。ただ知っての通りこれらの道具は『オーバー』でなけ

れば、起動すらできない。君達に、試しに使ってみて欲しいのさ。そうすれば、一体これが何を
するものなのか分かる。もしかしたら今後に役立つ道具や、その画期的な仕組みが解明できるか
もしれない、と思ってね」

いわば「未知」を「知」とすることで、王国に対抗する新たな糧にしたいのだろう。なるほど
、この部屋が研究所と呼ばれる理由が、なんとなく理解できてきた。

それ自体、二人には断る理由がない。夢斗、リサはグレンにおとなしく協力し、彼らの持
つ「オーバーテクノロジー」の解明を始めた。

グレンの読みは的中し、夢斗とリサが触っただけでそれぞれの道具は「起動」し、本来の姿を
取り戻す。まるで機械仕掛けのようにひとりで動き、専用の形態へと変形するのだ。

剣や槍、兜や鎧が当たり前のこの異界にて「オーバーテクノロジー」の造形はどこか「SF的」
な印象を受けた。どれも起動すると特殊な機関が発光し、多種多様な色を放つ。ブウウンという
重低音や、キュイイという電子音にも似た独特の音色も奏でている。

リサだけでなく、徐々に夢斗もその奇怪な道具の数々に心を奪われつつあった。「魔法」も随
分不思議な存在だが、これらの道具の「不思議さ」はまた別の方向性である。

時間にして30分ほど経ち、一同はひとまずグレンが持ってきた道具の数々を調べ終えた。最初
に感嘆の声を漏らしたのは、ほかならぬグレンその人である。

「いやあ、実に興味深いよ！ 一体、これらは誰が作ったのだろう。それに『オーバー』だけに
反応するように、どんな機構が組み込まれているんだろうか」

これには大きな筒状の一つを手に取りながら、光一も同意した。

「確かに不思議な道具だねえ。夢斗君らが触ってないと元に戻っちゃうやつもあれば、これみた
いに『起動』さえすれば、ずっと動いてるものもあるし。なんだか一貫性がないね」

「ああ、それも実に不可解な点だ。だが、まるでこれらは『機能を模索している』ようにすら見
える。これを作り上げた誰かが、徐々に作る過程で生まれた課題を、次の作品に反映させていっ
たのかもしれないね」

夢斗も目の前に置かれた一つを手取る。その見慣れた形状、そして見慣れた「機能」に首を
かしげた。

「しかも、どれも俺らの世界で見たことのあるような形をしてるな。しかも使い方までそっくり
同じなものだってある。これなんて――」

手に取ったその引き金を引くと、平べったい射出口から音を立てて熱風が噴き出す。熱す
ぎず、なにかを乾かすにはちょうど良い温度だ。

それはまるで「ドライヤー」のそれではないか。

「ま、まじで誰がこんなものを作ったんだ？ ハイテクなものだとは思うけど、なんでこんな世
界にそれが…」

これにはリサも手元の道具をいじりながら答える。拳大のそれはボタンを押すとくるくると回
転して宙に浮き上がる。いまいち、用途が分からないままのものも多い。

「謎が謎を呼びますね。とりあえず、どれもこれもデザインだけはカッコイイんですけどね」

彼女の言葉を受け、光一は手に持った筒を両手で構えて、その先端を壁際に向けた。木で作ら

れた人形に照準を合わせる。

「本当本当。これなんてまさに、SFに出てくるレーザーガンみたいじゃない？ ほら」

白い流線型のボディには赤いラインが引かれており、発光している。確かに、グリップの部分には引き金はないが、光一は嬉しそうに笑いながら人差し指で銃を撃つ真似をする。さしずめ、頭の中ではエイリアンか何かと戦う自身を想像していたのだろう。

と、次の瞬間であった。

突如、けたたましい音が部屋中に響き渡る。光一が構えた「オーバーテクノロジー」が火を吹き、筒の先端から連続で無数の弾丸が射出された。それは離れた位置にある木人形に当たり、次から次へと削り取っていく。

「うわわわわわわ！？」

光一は慌てて、それを放り投げる。床に落ちた衝撃で弾の発射が止まり、再び部屋には静寂が戻った。

夢斗、リサはとっさに身構えたまま、口を開けて光一を見ていた。グレンも目をまん丸に見開き、驚いている。

全員の視線が同時に壁際に向けられた。

木の人形はまさに「蜂の巣」といった様相だ。弾は落ちてはいないが、いくつもの穴が穿たれ床には破片が散らばっている。

「ごっ、ごめん！ でも、こんなつもりは——か、勝手にこいつが動いて！」

彼は腰が抜けてしまったらしい。ぺたりと座り込んだまま、息を荒げている。思わず夢斗、リサは駆け寄った。

「だ、大丈夫か、光一！」

「びっ———くりしましたあ！ な、なんなんですか、あれ」

手を貸して彼を立たせる二人。グレンだけは床に落ちたそれを拾い、壁際でその現象を調べている。

「物凄い威力だね、これは。コーイチ、君は一体、何をしたんだい？」

「え？ い、いやあ、ただこう、構えて...『銃』を撃つ姿を、思い描いただけなんだけど...」

これを聞き、グレンは腕を組み「ふむ」と唸る。

「銃、か。ということは、この道具は持った人の『イメージ』を引き金に、弾を発射したってことなのかな」

言うや否や先程の筒を片手で持ち、壁に向けるグレン。

瞬間、再び空気の爆ぜる音が部屋全体を揺らす。三人はびくりと反応し、呼吸を止めた。

石造りの壁が吹き飛び、深々とえぐれ、瓦礫が散らばった。再び何か、その筒——否、「オーバーテクノロジー」の銃から発射され、壁を破壊したのだろう。

その現象に目を丸くし、言葉を失う三人。だがたった一人、グレンだけは目を爛々として喜びの声を上げる。

「これはすごいな！ コーイチの言った通り、想像しただけで弾が発射されたよ。といっても実弾じゃあないな。魔法か...なにか見えない力を凝縮し、叩き込んだみたいだ」

破壊痕をまじまじと見つめ、分析するグレン。こういう荒事には慣れているのだろう。優男に見えて、やはり「武力派」の一人というところか。

「しかも、コーイチが使った時とは随分違った効果だったね。もしかして、使う者の意思を汲んでいるのかな」

ぶつぶつと一人で推理するグレンを、三人は冷や汗を浮かべて見ているしかない。だがやがて、彼は夢斗らの空気を察して苦笑いする。

「す、すまないね。つい、熱くなってしまった。昔からこういう見たことのない技術を見ると、気持ちが昂ぶってしまって。悪いクセなんだ」

彼は弁解するが、三人からすると、あの「銃」が暴発するんじゃないかと気が気ではない。続いてグレンも気付いたようで「おっと失礼」とようやく、机の上に銃を置き直した。

ため息をつき、汗を拭う光一。

「あ、焦ったよ。なんだよこれ、すごい危険な道具じゃないか！」

リサも机に隠れるようにしながら、置かれた銃を睨みつける。

「な、なんだか良く分かんないですね、『オーバーテクノロジー』って。なんに使うのか分からないようなものから、危険な武器まで。でも、どれもとりあえずは高性能っていうのも、おかしな話ですよ」

彼女が言うように、並べられた「オーバーテクノロジー」の機能には一貫性がない。おもちゃのようなものもあれば、実用的な生活用品もあるし、そして極めつけは武器まで揃えている。その上で、どれもこれも動力源も不明の不思議な性能をしている。

起動方法や使用方法は分かったとはいえ、まだまだ「良く分からない」という感想は消えそうにもなかった。

夢斗は自身の足元――そこにある超性能のブーツを見つめる。昨晚、オーバーの力で現実世界に戻った際、身につけたこのブーツも持って帰ってしまった。だが、向こうの世界では高速で走ることも、空高く跳び上がることもできない。ただ、ガチャガチャと音のする、重いブーツになってしまっていたのである。

「どういうことなんだろうな。俺らの世界に持って行った時は、まるで力を発揮してくれない。クレイドルだからこそ動く道具達、か」

一体誰が、何の目的で、どうやって作ったというのだろうか。

だが今の夢斗らに、それが分かるはずもない。

グレンは肩の力を抜き、実験の「成果」について告げる。

「いやいや、それでも大きな進歩だよ。少なくとも、君達のお陰で色々なことが分かった。ありがとう、助かったよ」

いつもの優しい口調に、ようやく夢斗らも緊張が解ける。三人揃ってため息が漏れた。

グレンは散らばった瓦礫を片付けながら、告げる。

「君達もここにある中で、役に立ちそうなものがあれば言ってくれ。なにせ、これらは『オーバー』ではない僕らでは、使いこなせないものばかりだからね。少しでも君達の活動の助けになれば、幸いだよ」

「あ、ありがとうございます」

彼の気遣いに、素直に礼を述べる。片付けるグレンをよそに、三人は並んだ道具を見つめて考えていた。最初に口火を切ったのは、光一だ。

「これ...役に立つかな。まあ、便利な品はあるけどさあ」

なんとも言い辛そうに、リサも答えた。

「どうでしょう...でも王国との問題解決には、あんまり関係なさそうですけどね...」

戦いに使えそうな品はあれど、それはあくまで王国と激突する最終段階の話だ。今の夢斗らにとって、目的はぶつかり合いではなく和解。事態の収束を望んでいるのだから、少し場違いではある。

リサは手元の一つを眺めながら、残念そうに呟いた。

「もったいないですねえ。使いようによっては、価値はありそうですけど。今は珍しいものを探しているわけじゃあないですもんね」

夢斗も苦笑し、一つを手取る。

おそらくグレンらのような人々にとっては、古代の遺産として価値があるものなのだろう。しかし、普通の人間のみでは使うことすらできない。だからこそ多くの場合、真の価値の分からないガラクタ扱いを受けてしまうのかもしれない。

そう、きちんと価値が分かれば――そこまで考え、夢斗はハッとする。

これらは「価値」のあるものなのだ。こちらの世界では誰も作れない、けっして量産できない、特別な物。

頭の中でいくつもの点が、繋がる。

「なあ、グレン。相談があるんだけど」

グレンだけでなく、リサ、光一も振り向く。三人はじっと、夢斗の一言を待っていた。

やれるかどうかなんて、分からない。たとえこれらがあったとしても「彼」が首を縦に振るかどうか。それは、夢斗らの手腕にかかっている。

夢斗が伝えた提案にグレンを含む三人は、驚きの声を上げた。夢斗自身、これは明らかなる「賭け」だと思っている。その反応も、当然だろう。

じんわりと手に汗が浮かんでいた。手元の道具に視線を落とす。光沢のある白い機体の表面にどこか不安げな、それでいて決意を固めた自身の複雑な表情が浮かんでいた。

己の「利」のため

アジトの食堂では獣人達が皆、昼飯を食べている。厨房担当の虎型獣人の女性が、次から次へと料理を作り上げ、食欲旺盛な荒くれ者達の要望に、応えている。

戦士達で賑わうその中に、一際声を荒げ、自身のことを語る男がいた。あの行商のワニ男・キリウだ。

「んで、もうあかん、と思ったその時や。ぱっと見えた足場に、とっさに飛び乗って、身を翻したんや。んで、こいつでヤツのどたまに一撃、叩きこんでやった」

周囲で聞いている獣人達から「おお」と歓声上がる。キリウが語っているのは、行商の最中、品物を手に入れるために行った、怪物との激闘の数々だ。今語っているのは、激流で戦った巨大牙ウナギとの一進一退の攻防である。ウナギの骨から作り出した武器は、すでに完売してしまっていた。

キリウが取り出したのは、背負っていた巨大な斧だ。しっかりとした留め具はなく、荒縄で無理矢理、棒と刃をくくりつけた原始的な武器である。刃も分厚く、どちらかというハンマーのそれに近い。「クロム鋤を切り出した刃の一品や。こいつにかかれば、牙ウナギの頭蓋程度、一撃やで」

キリウは多少の酒も入ったことで饒舌になり、次から次へと武勇伝を語っていく。嘘か誠かは定かではなくとも、彼の口をついて出る体験談はスケールが大きく、遠方の地で出会った数々の怪物の情景は、獣人達の心をつかんで離さない。

牙ウナギとの激闘を語り終え、また一杯、彼は安物のぶどう酒を飲み干した。

気持ち良く語る彼に、獣人達の中から、声上がる。

「商売ができるだけじゃなくて、腕もたつんだな」

キリウだけでなく、席に座っていた獣人達も振り返る。そこに立っていたのは、夢斗、リサ、光一の三人だ。なにやら、夢斗は大きな皮袋を肩に背負っている。

「おお、なんや、あんたらか。そうやで、ここいらで商売するなら、腕っ節もないとやってられへんからな」

あくまで気分良く語るキリウ。三人は空いている席に座り、彼と向かい合う形となった。光一が周囲の獣人らに頼み、席を外してもらう。

「そんなに強いのに、レジスタンスには入らないのかい？」

「強いからと言って、それを何に使うかは自由やろ。ワイは別に、王国の人間が獣人をどう思っとるかなんざ、どうでもええ。だいたい、人間の頭砕いたところで、一銭の儲けにもならんわ」

やはりその言葉の端々に、彼の徹底的な「守銭奴」っぷりが見え隠れする。彼が戦うのは「誇り」や「憤り」のためではない、あくまで獲物を仕留めるための「狩り」として刃を振るうのだ。

行動するための根本的な理由は、感情なんて不確かなものではない。あくまで「金」を生むかどうか、それだけなのである。

物騒な言葉が並び、少しだけ気圧されそうになる。しかし、たじろがずに夢斗は前を向く。そんな三人の姿を見て、ほろ酔いになりながらも、キリウはいち早く察した。

「なんや、また、王国に入り込む手段を探しに来たんか。あんなん、小細工したって無駄なだけやで。正面突破くらいしか、思いつかんわ」

「そうか。あんたが羨ましいよ。堂々と、大手を振って『行商』として入れるあんたが」

「それもこれも、結局は世渡りの成果っちゅうこっちゃ」

実に自慢げに、それでいて何ら揺らがない自信で語るキリウ。酔っているように見えて、その一貫し

た芯の強さは、一筋縄ではいかなそうである。

夢斗は再度、決断する。変化球は、この男には効果がない。響くのはど真ん中、愚直なまでのストレートだ。

「単刀直入に言う。そんなあんに、協力してほしい。俺らが、ルガリア王国に潜入するのを」
周囲で食事をとりながら雑談する獣人達は、夢斗らの会話には気付いていない。

夢斗らは静かに、しかしはっきりと向かい合う相手に、言葉をぶつける。

キリウの表情は揺らがない。だが、その鋭い瞳に、少しでも真剣な色が宿る。

「ワイにレジスタンスの片棒を担げ、って言うんか？ 嫌や、そんな。ワイまで王国の敵になるやないか」

「あくまで、俺らが城壁の中に入るまででいい。俺らはあんなの名前は絶対に出さない。だから――」

「絶対？ んなもん、ただの口約束やないか。信用できると思うか？」

やはり手厳しい。不確かな「信頼」などで彼は動いてくれる人物ではない。

だが物怖じせず、夢とは切り込む。リサ、光一も手に汗を握ったまま、視線をしっかりとキリウに合わせていた。

「ただで、とは言わないよ。払うものはちゃんと払う。これは、約束なんかじゃない。あんとあの契約だ」

「ホォ～、金払うっちゅうんか。けど、そこまでたいそれたことせえっちゅうんなら、それ相応の大金は用意してるんやろな？ ワイの馬車がごっそり、馬ごと買い替えられるくらいの、大金を」

結論から言えば、そんな大金は持ち合わせていない。おそらく、キリウ自身もそれを分かっている、提示したのだろう。レジスタンスの長ならまだしも、その協力者の人間風情が、満足な軍資金など用意できるわけがない、と。

その証拠に、彼は少し馬鹿にした調子で、言い放つ。

「ええで、そんな大お得意様になってくれるんなら、考えてみるわ。もっとも、それはおたくらが、正式なお客になった場合やけどな。払うもんを払って」

大きな口を開け、豪快に笑うキリウ。彼はグイと酒を飲み干し、下品な音を立ててため息をつく。

彼の言う通りだ。大金などない。彼を納得させるだけの、有り余る金など、持ち合わせてはいない。

そう、あくまで「金」は、だ。

夢斗は背負っていた袋の中から、幾つかの品を取り出し、机の上に並べる。ワニ男の目が、その見慣れない品々に釘付けになった。

「あん、なんやこれ？」

食い入るように見つめるキリウ。夢斗はまっすぐ彼を見て、少しでも鼓動を押さえ込み、告げた。

「『オーバーテクノロジー』。あんなら、聞いたことあるんじゃないか」

キリウは動じない。しかし、それでも彼の視線が、夢斗を強く睨めつける。

「なんやと、これが？」

「疑うなら、レジスタンスのリーダーに確認してもらってもいい。彼から預かった品だ」

それは、グレンに頼み込み、ここに持ってきた「オーバーテクノロジー」の数々である。どれも動きを止め、机の上に鎮座している。

これが通らなければ、またふりだしだ――一言を放つのが怖い。しかし、放たなければ、どうなるかなど分からない。呼吸を整え、意を決し、夢斗は彼に告げた。

「それを、あんにやるよ。気に入らなければ、まだ他にもある。持っていけばいい」

しばし、机の上の品々を手に取り、眺めるキリウ。しかし、やがて「ふんっ」と鼻息荒く、反論した。

「なめたらあかんよ、お兄ちゃん。ええか、これが、百歩譲って、モノホンの『オーバーテクノロジー』としようや。希少価値はあっても、これを誰に売れる？ ワイはコレクターやない、商売人や。買いた手のない品なんざ、ただのお荷物なだけやで」

思わず、横で聞いていたリサ、光一が息を飲む。

それは、キリウの凄味に参ってしまったからではない。

ここまで、一応のところ「想定通り」に事が運んでいるからだ。

夢斗も心では少しガッツポーズを取っていたが、顔には出さないように努める。

まだだ、もう数発押さなければ、城は落ちない。

「それは分かってる。あんたが商売人だってことも、な」

「なら、こんなガラクタ持ってくんや。珍しさでごまかそうとしても、そうは――」

「俺らなら、それを『ガラクタ』じゃなくできてか？」

喰い気味に叩き込んだ一言に、キリウが「ああ？」と声を上げた。

「ガラクタやなく、って...どういう意味やねん。こんなん、どこにいるかも分からん『オーバー』やないと、あつかえん代物や。それをどうやって――」

「俺らなら使える。その『オーバー』だからな」

またも喰い気味で、彼の出鼻を抑える。言葉を止め、目を見開くキリウ。

「お前らが、『オーバー』やと？」

ようやく、ここで光一が援軍として加勢した。

「僕は違うけどね。でも、こっちの二人は本物さ、嘘じゃない。もっと言うならこの二人は『オーバー』としてレジスタンスの幹部にも信頼されてる。『武力派』、『融和派』どちらからもね」

精一杯、凄んで見せるリサ。夢とはそれを横目に見て「やりすぎだ」と思いつつ、自身もできるだけ胸を張る。

打ってみたは良いものの、この弾がどこまで響くか、分かったものではない。

夢斗が思い付いた策、それはなんのことはない、夢斗らだけが持つ「価値」を、彼との交渉に使うということだ。偶然にも、夢斗らが授かってしまった「オーバー」という才能。それを、望ましくはなくとも、等価交換に使わせてもらう。

この策を告げた時、グレンも驚いてはいた。しかし、彼自身、キリウという男を動かすには、それくらいの代償が必要と感じたのだろう。問答の末、幾つかの「オーバーテクノロジー」を自由に持たせてくれた。

彼の恩義に報いるため、夢斗は慎重に、そして必死に一撃を叩き込んだつもりである。

キリウは腕を組み、夢斗、そしてリサの顔を交互に見ていた。

「お前らが『オーバー』。本物やっちゃんか。他の世界から、こっちへ来た、『神の使い』やと」

ここで、第2の援軍・リサが斬りこむ。

「そんな凄いのじゃないです。でも、証拠がいるっていうなら、向こうの世界のこと、なんでも語りますよ！」

ずいっと前に出た少女に、初めてキリウがたじろいだ。

今だ、と言わんばかりにリサが攻める。

「学校についてですか？ それともこっちの文化についてでしょうか？ 食べ物？ 映画？ スポーツ

？なにがいいですか？逃げも隠れもしません、なんでも話しますよ、気がすむまで！」

鼻から「ふんぬ」と息を吐き出し、得意げに笑うリサ。夢斗、光一が横目に見て、今度は「やりすぎだ」と心中で呟く。

だが、あながち、その猛攻は無駄ではなかったらしい。自信満々に前に出てくるリサの目を、キリウはじっと見ていた。世界を渡り歩き、様々な人種と商いをやってきた彼だから、分かるのであろう。

馬鹿っぽい女ではある。だが、こいつは嘘をついてない——ついに、キリウは長考に入った。腕組みし、品々を眺め、何やら考えている。

ゴクリと、唾を飲み込む夢斗。緊張からか、喉が渴いてしょうがない。

「お前ら、これらの作り方、分かるんか」

飛んできた質問に、身構えてしまう。しかし、虚偽は言えない。ならば、ありったけの本音を、できるだけ強気に言い放つのみだ。

「はっきり言えば、作り方は分からない。だけど、これらを起動できるのは俺らだけだ。あんたがこれを量産して売りたいっていうなら、その原理を調べる手伝いもしていい」

彼がこの品々を手にしたら、次に考えることは分かっている。それは、これらをどう「金儲け」に繋げるか、だ。

もはや彼の目に、酔いの色はない。キリウという男が持つ商売人の魂が、大きな体の中で彼を突き動かしているのだろう。

どう出る。どう返す——固唾を飲んで、三人は彼の返答を待つ。

時間にして1分。しかし、一同にはそれが5分にも、10分にも感じられた。

キリウは視線をようやくこちらに戻し、口を開く。

「手伝うのは門を超えるまで。そこから先は、ワイはいつも通り、行商としてやらせてもらう。この品だけじゃあ、そこが限度や」

夢斗ら三人の背筋に、電流が走った。確認のための一言を夢斗が吐き出そうとしたが、キリウに今度ばかりはかぶせられてしまう。

「それって——」

「契約は一日のみのもんや。そっから先は、ワイは知らん。王国に万が一追求されても、互いに出会ってもない、話したこともないということとする。ええな？」

明確な答えにはなっていない。しかし、その言葉に含まれる意味を理解し、肩の荷がどっと降りる。

成功した——安堵し、ため息を漏らす夢斗。拳がいつの間にか、机の下で震えていた。光一も椅子に座り込み、がくりとうなだれる。

ただ一人、最後まで元気な少女は、キリウに詰め寄り、彼の大きな手を両手で握った。

「セーンキューー！！」

その甲高い声に、キリウ、夢斗、光一だけでなく、食堂中の獣人達もこちらを振り向いた。

キリウは目を丸くし、焦っている。

「な、なんやなんや！なにすんねん！？」

「ほんっと、助かります！これで一步前進できますよ！良かった良かった！！」

握手のつもりなのだろうか、リサは握った手をぶんぶんと上下に振り、飛び跳ねている。キリウの大きな体が、座ったままバランスを崩していく。

何事か、と周囲の視線を集めてしまい、夢斗らも気まずくなってしまった。

「お、おい離せって！何度も言うが、協力やない、あくまで契約や！それ以上は絶対になんもせえ

へんからな」

「はい、もちろん！ ありがとうございます～」

にっこりと笑うリサに、どうもキリウは調子を崩されるらしい。ようやく手を解放さる、ため息をついている。

案外、リサをぶつけた方が、うまくいったのかもしれない。そう思うと、夢斗らはリサを見て苦笑してしまう。

キリウは気を取り直し、彼の言う「契約」の内容について、進めた。

「で、問題はいつに結構するか、やけど。お前ら、どうするつもりや」

この問いかけに、互いの顔を見合わせる三人。成功するかどうかも分からなかったため、これは考えていなかった。

しかし、善は急げということもある。夢斗は気持ちを落ち着かせ、確認する。

「できるだけ、早くがいい。準備するのにどれくらいかかる？」

「そうやなあ。ま、一日あればとりあえずは大丈夫やろ」

これには思わず、光一が問いかけた。

「一日だって、そんなんで大丈夫なの？」

「なんや、信用できへんのか。突入人数にも、もちろんよるがな」

三人は再び、互いの顔を見合わす。そうとなれば、どれくらいの人数で突入するか、だ。ここで、キリウはさらに補足する。

「あんたら三人だけなら一日。それ以上ってなってくると、もう少し時間がかかる。早く行きたいなら、ここにいる四人のみにするべきやな」

これは少しだけ、夢斗らにとってはプレッシャーだった。なにせ、敵の本拠地に乗り込むなら、もう何人が凄腕が欲しいところだが、人数制限があるとは考えてもみなかったのだ。

夢斗の問いかけに、リサは不安げな眼差しで答える。

「どうする、俺らだけで……い、行けるのか？」

「どうでしょう。もし向こうで、戦うことになったりでもしたら…なにせ、あそこには兵士さん達が山のようにいますからね」

だが、これには光一が切って返す。

「だけど、今回は戦うのが目的じゃあないでしょう？ だったら、少ないほうがいいんじゃないかな。大勢になると、今度は見つかる可能性まで増えちゃうよ。万一、撤退するってなっても、身軽に行動できるしさ」

それもまた、実には的を射ていると感じる。少し躊躇はしたが、夢斗らは決意を固めた。

「なら、メンバーはこの三人で頼む。できるだけ早く――明日決行できるか？」

この要望に、キリウは「あいよ」と返す。

「んじゃ、明日の昼に決行や。そうと決まれば、ワイは準備に移らせてもらうで。あんたらも、抜かりないようにしときや。向こうで見つかっておだぶつせんようにな」

なんとも後味の悪い言葉を残し、キリウは席を立ち、去っていった。

残された三人は彼の背中を見送っていたが、食道から外に出たのを確認し、一気に緊張の糸が切れる。

「緊っ張した！ 喰われるんじゃないかねえかと、気が気じゃなかったよ、まったく…」

汗を拭う夢斗。だが、リサと光一が賞賛の声を上げる。

「でも、見事に言いくるめましたね！　すごいです、夢斗さん！　コングラッチュレーション！」

「ほんとほんと、堂々としてるよねえ、夢斗君。任せて正解だったよお」

二人から拍手までされてしまい、なんだか恥ずかしくなってしまう。後ろ頭をかきながら、苦笑いする。

「ま、まあ、『オーバーテクノロジー』渡す事には、なっちまったけどな。そう考えると、高い買い物だよ」

「でも、もしこのまま戦争になっちゃったら、あれだって王国に奪われるか、戦場に埋もれちゃうかもしれませぬ。そうなったら元も子もないですよ」

確かに、彼女の言う通りかもしれない。本来、真っ先にどうにか手を打たなければいけないのは、目の前に迫っている王国との衝突だ。そうなれば、「オーバーテクノロジー」の解明など、悠長なことはやっていられない。

とにもかかわらず、今は前に進んだことを喜び、そして次の行動に移るべきなのだろう。

「明日、か...言ってみたものの、実際、不安は残るな」

夢斗に同感し、光一も頷く。

「王国かぁ。一度も入ったことがないから、楽しみではあるけども...こんな潜入ミッションで行くことになるなんてねえ」

どうしても迫る危機を前にすると、弱気が覗いてしまう。だが、少女だけは唯一、身を震わせ、負けん気で声を上げる。

「重要なミッションですよ、これは。明日、がんばりましょうね！」

きっと、本来ならば彼女も、怖くてたまらないのだろう。かつて、リアルな戦場で、兵士達の凶刃を受け止めた、あの感覚は小さな体の中にまだ残っているはずだ。

それでも、リサは覚悟を決め、己を奮い立たせている。その確かな強さを見ると、夢斗らの心の中の炎も、少しだけ強さを増すようだった。

風が一陣、部屋に吹き込む。冷たさが体の熱と共に、沸き立つ迷いを少しだけ、拭い去ってくれた。

頭上に広がる星空に、また一つ流れ星を見つけたが、別段、女剣士は表情を変えることなく、それを眺めていた。

闇夜の空と、その下に広がる王国の明かりを眺めていると、なんだか胸がざわつく。その理由を、ここ最近というものの、ルーメルは一人こうして、城の上から景色を眺めつつ、考えている。

元々は小さなざわめきだったはずだ。気にするにも値しない、かすかな靄のようなもの。ところがここ最近、その靄は徐々に濃さを増し、今ではしっかりと心の中の景色をぼやけさせてしまっている。

深夜近くだというのに、街の明かりはまだ消えない。きっと、夜通し酒を呑み騒ぐ者や、家族で団欒を過ごす者達がいるのだろう。その先に見える大きな城壁が、四方からこの国を守っている。

また一つ、力ないため息を漏らすルーメル。彼女に鎧の音が近付き、声をかけた。

「ため息をつくと、幸福が逃げていく――故郷にいた頃、祖母がよく言っていた」

振り返り、ハッとすするルーメル。目の前には、白銀の鎧を身にまとった、大柄の男性が立っていた。角ばった顔、短く刈り込んだ黒い髪。顔面には斜めに大きな切り傷が刻まれている。

見る者にはまず、恐ろしさを植え付けるその眼光を、ルーメルは受け止め、それでも微かに笑った。

「隊長。なぜここに――」

「別段、理由はないさ。涼みに出たら、たまたま浮かぬ顔をした部下がいた。それだけだ」

剛直な男ではあるが、それでも部下からの信頼は厚い。それは何より、彼が信頼するに値するだけの、兵士としての「器」を持っているからに、他ならない。

ルガリア王国、歩兵部隊、隊長を務める男・ナグルファ。彼にまつわる数々の逸話は、敵を畏怖させ、そして同時に味方を鼓舞する「生ける伝説」である。数々の戦場にて、前線にて武を振るい、数多の屍を築いてきた。

かくいうルーメルもまた、この男の手腕に惚れ込み、そして彼を目指して剣を磨いてきたのだ。

ナグルファはルーメル同様、夜の王国を眺めながら言う。

「今日の戦略会議にて、王からの承認が下りた。準備が整えば、軍を率いての『獣狩り』が本格的に指導する。長きにわたる混乱も、これで収まるだろう」

「そうですか...では『心喰い』も、ようやく駆逐することができますね」

同様に、夜の城下町に視線を戻すルーメル。しかし、女剣士のかすかな言葉の変化を、歴戦の猛者は見逃さない。

「どこか、迷いが見えるな。なにか、気に入らないことでも？」

一瞬、ルーメルは返答に迷う。だが、この男に隠し事が通じないことは、軍部の誰もが知っている事実だ。

「これで、解決すると信じています。信じては、いるのですが...なぜでしょう、本当にこれで終わるのか、どうしようもない不安が付きまとうのです」

「『心喰い』が逃げおおせると？」

「はい。というより、为什么呢。そもそも『心喰い』の明確な目的や正体が分からないことに、焦りを感じている自分がいます」

その言葉自体は、本心だ。軍部の決定には何ら疑問は持たないし、獣人達を駆逐するのも、大義があるがゆえだ。しかし、結局王国は謎の怪奇殺人者・心喰いを炙り出せないまま、事態は終息しようとしている。そこに、幾許かの迷いがあるのは事実だ。

だが、重要なのはそれだけではない。

なんだろうか——ルーメルの脳裏にかかった靄は、こんなことが理由ではないように思ってしまう。ただ、それをうまく言い表すことができない。

ナグルファは視線をそらさず「ふむ」と呟き、口を開く。

「確かに、いささか強行な手段であるとは、私も思っている。だが、これは虐殺ではない。あくまで彼らの中から『心喰い』をあぶり出すための、大規模な調査なのだ。そこにある大義をぶれさせてはいかん」

それは分かっている。分かっているのだが——ルーメルは少し視線を下げ、考えた。

「獣人達の穴倉に攻め入った際、奇妙な格好の男と女を見つけました」

「帰還してすぐ、報告した者達だな」

「はい。男と女——というよりも、青年と、少女といった風貌でした。獣人に協力していたのか、戦いを挑んできました。もっとも、武術には精通してはいないようでしたが」

それは他ならぬ、アジトで対峙した夢斗、リサのことである。あの時の二人の様子を、思い出していた。

なぜだろうか、思い返してみれば、あの二人に出会ってからだ。この心の靄が濃さを増したのは。

ナグルファも少し陰しい表情を浮かべていた。

「獣人に加担する人間、か。この王国の者だとすれば、これは大問題だな」

「はい。ただ、なんとなくではありますが、どこか異国の雰囲気も感じました。あくまで、私的な感想ではあります」

「異国、か。彼らが『心喰い』である可能性は？」

「現段階では、なんとも」

二人のやりとりは端的な問答が並ぶ。それは、彼らが王国の兵士として、そしてなにより部隊における上司、部下として、各々の役割を徹底しているということに起因する。

だが、そんな会話を続けても、結局事の真相は見えてはこない。思わずナグルファがため息をついた。

「依然、答えは闇の中、か。もっとも、考える必要もないのかもしれない。遅かれ早かれ、大攻勢に出ることは決まっているのだからな」

「本当に、それしか解決策はないのでしょうか」

「なんだ、不服なのか？」

ルーメルは一瞬、戸惑い「いえ」と視線を伏せる。

「私が未熟なだけかもしれませんが。どうしても今回の一件、剣を握る手に、迷いが出てしまいそうで」
腕力があれば、膂力があれば剣は持ち上げれる。筋力と体捌きが整えば、振り抜くこともできる。

だが、なにかを『斬る』ためには、心が決まらなければ無理だ。必ずそこに、ぶれと迷いが出てしまう。

ナグルファは悩める部下の顔に、少しだけ物悲しそうな眼差しを向けた。

「我々の目的は虐殺ではない。その先にある真実をあぶり出すための『正義』にて刃を振るうのだ。貴族、平民に限らず、この城下にて暮らす人々にとって、脅威となる存在を排除するための力。ただ、それを信じて柄を取れば良い」

一貫した考え方、そこに宿る強さを説く、ナグルファ。彼は踵を返し、城内へと戻っていく。

「人の進む道とは、剣と同じだ。一步目の踏み込みを躊躇すれば、いつまでもそれはつきまとう。大義を心で抱くだけではない、己の剣で示せ」

厳しくも刺さる言葉を最後に、彼は姿を消した。去っていく彼の背中を見て、ルーメルは何も言うことができない。再び一人取り残され、城壁の上から街を見渡す。

大義もある。そこにかける覚悟も確かにある。

しかし、ならばなぜ、自分はここまで迷ってしまうのか。

星空を見上げ、瞬く黒い海の中に、あの青年の顔を思い出す。

お前は、何を知っている。コウコウセイ——また一つ流星が尾を引き、闇の中に希望を灯す。世界の贈り物をその目で受け止めても、ルーメルの靄はなんら晴れることなく、いつまでも心の中を覆っていた。

汚れのない眼差し二つ

外からはけたたましく、蝉の声が鳴り響いている。天気予報ではここから一週間、見事に晴れ空が続くそうだ。

開け放たれた窓から、車の音と共に風が入り込んできた。夢斗は雑音を気にせず、ベッドに寝転がったままノートPCをじっと見つめている。画面の中では、動画投稿サイトでキックボクシングの試合映像が流れていた。

もう何本も見てはいるが、やはりただ観客として映像を眺めた程度で、コツなんて分かるわけもない。ただ相手を「蹴る」という行為に多種多様な技が存在する。今まで格闘技など興味もなかったが、こうして見ると、ただただ感心のため息が漏れてしまう。

これが何の成果になるかは分からないが、それでも夢斗は何かしていないと不安でしょうがなかったのだ。昨晚、ベッドで横になってからも、妙にそわそわして眠れなかった。

それ程までに、これから行われる一大作戦に不安の色を隠せない。

時刻はまだ朝の9時。日曜日とは思えない程に早起きをし、すでに準備も万端だ。リュックを抱え台所へと出て行く。

そこには、眠気覚ましのコーヒーを飲んでいる母がいた。

「あれ、おはよう。なにあんた、日曜日よ、今日？」

「いいじゃんか、別に。用事があるから、早起きしただけだよ」

その一言に母の目がまた爛々と輝く。思わず「まただ」と、夢斗はうんざりしてしまう。

「なになに、どこ行くの。あのガールフレンドのところ？」

「あのな、だからそんなんじゃねえっての。ただの友達だよ、友達」

「へえ、友達、ねえ。可愛かったねえ、あの子。ハーフなんでしょ？ お人形さんみたいだったね」

リサを見て以来、母はあれやこれや勝手に想像してニヤニヤしている。意地悪な彼女にその存在が知れてしまったことが、運の尽きだろう。

無用心だったな、と夢斗は後悔する。

「中身はバリバリの日本人だよ。時々、英語が飛び出すけど」

「へえ〜。良かったねえ、夢斗。これでセピア色の学園生活も、華やぐってもんじゃない」

「下世話な言い方するなあ...クラスメイトなだけだよ。何が変わるでもない」

相手をしていても時間の無駄だ、とリュックを担ぎ「行ってくるね」とだけ告げる。

玄関に向かおうとして一瞬、足を止めた。こちらを見る母の顔が妙に嬉しそうだ。それはあの意地悪な笑みとは、どこか毛色が違うように思えた。

「なんだよ？」

「いや、良かったな、って思ってさ。最近あんた、どこか楽しそうだしさ」

思いがけない一言に、言葉が出なかった。いつも通りにしていたつもりではあるが、どこか態度や表情から母は察していたのかもしれない。

「いいのいいの、楽しんどきな。あんたくらいの年齢は、間違ってもいいんだから。やりたいよ

うにやって、こけたらこけた時。起き上がって泥臭くいけばいいの」

心の底から嬉しそうに彼女はコーヒーを口に運ぶ。

なんだか、どう返して良いかが分からない。後ろ頭をかき、夢斗はただ「ああ」とだけ告げて家を出た。不器用に去りゆく息子に、母は「いってらっしゃい」と声をかける。

悩めよ、少年——なにがあったか、彼女は知らない。だがそれでも、過去を失った息子が「今」を楽しんでいる姿が、嬉しくてしかたがなかった。

調子が狂ってしまったが、とにかく歩き、目的地を目指す。やはり夏の日差しは容赦なく街を照らし、じりじりとアスファルトを焼いていた。無駄な体力を使ってもしょうがない。とにかく「彼女」に指示された場所へと歩みを進める。

駅の南口には朝ということでもまだ、あまり人はいない。だからこそ一足先に到着していた彼女を、すぐ見つけることができた。

「おはよう、リサ」

「あっ、グッモーニン！ 夢斗さん」

リサはベンチからぴょんと勢い良く立ち上がる。今日は私服姿で、水色のワンピースとサンダル姿だ。夏を感じさせるその格好に、少しだけ夢斗は鼓動が高鳴る。

「時間通りですねえ、素晴らしい」

「日曜日はいつも昼まで寝てるから、珍しく早起きしたよ。リサは朝から元気だな」

「はい！ って言っても、昨日ベッドに入って全然眠れなかったですよ。ちょっと目が重いです」

その感覚はどこか分かる気がする。なにせ、これから向こうに赴き、一世一代の大作戦を決行するのだから。夢斗は苦笑し、共感の意を伝える。

「戦争、救出ときて、今度は潜入か...なんだかスパイみたいだな、俺らは」

もっとも責任重大という意味では、あながち間違いでもないから困ってしまう。夢斗らの働きによっては、今後の二者の対立模様が変わってくるかもしれないのだ。

リサはあくまで疲れを感じさせない、はつらつとした顔で笑う。

「おお、なんだかそれもカッコイイですね。王国に潜む凶悪殺人犯を追う、凄腕スパイ」

なんだか、彼女の中の変なスイッチが入ってしまったらしい。リサは興奮気味に続ける。

「アジトの『オーバーテクノロジー』の中に、潜入に役立つ道具があれば良かったんですけどねえ。ペンの形をした麻醉銃とか、透明になれるマントとか。ああでも、魔法でもしかしたらできるんですかね？」

「さ、さあ...まあ、ニンバムとかなら、やれそうな気もするけどね」

彼女の勢いにたじろいぎつつ、二人はとりあえず歩き出した。なにも、お喋りをするために集まったわけではない。刻一刻と、作戦決行までの時間は近づいてきているのだ。

道中も、やはり今日の「王国侵入作戦」の話題が飛び交う。とはいえ、後ろ向きな感情を抱いても仕方がない。夢斗はできるだけ、ポジティブな話題を選んだ。

「リサも王国に入ったことがないんだよな。どんなところか、知ってる？」

「ニンバムさんから、話には聞いていました。なんでも、石造りの街並みが綺麗なところらしい

ですよ。それに各地から名産品が集まるから、食べるものも多いんですって」

「へえ、まるで観光地だな。にしても、ニンバムはなんでも知ってるな、本当」

「大昔はまだ獣人と王国は対立していませんでしたから、自由に行き来できたし、王国の中で職を持っている人もいたらしいですねえ」

また一つ「へえ」と感嘆の声を上げてしまう。

異界・クレイドルもこちらの世界と同様、長い歴史があるのだろう。その中で人と人が出会い、争い、生まれ、滅ぼしてきた。そう考えると、こちらと向こうはあまり変わらない。心持つ者同士がいることでそこに融和と、衝突が生まれる。

「なんだか、そう考えると変な話だよな。『心喰い』ってたった一人——だと思っただけど、そのおかしい奴のせいで、あれだけ大勢の人達が戦うことになっちゃうなんてな」

「なんかそう考えると、人って怖いですよ。集団心理ってやつでしょうか...最初は限られたグループ同士の小競り合いだったらしいんですけど、いつしかそれが、あんな戦争にまで発展しちゃったらしいです」

夢斗は前を向いて歩きながら、ふっと考える。

レジスタンスと王国、この二つは確固たる思想の元に成り立ち、互いを敵と認識しているはずだ。互いの尊厳のため、刃を取っているはずなのである。

だが、あの場にいる全員が、本当にそんな気持ちで戦っているのだろうか。

周りの皆がやるから、やる。周りがそう言っているから、そうなんだ。

つくづく、こっちもあっちも嫌な部分だけは非常に似通っている。

「『心喰い』...どんなやつなんだろうな。男か、女か、人間か、獣人か——そもそも、俺らがそいつを見つけたとして、捕まえることなんかできるのか」

言っておきながら「いかん」と心中で慌てる。目の前の大きな不安のせいで、ついつい弱音を吐いてしまった。

しかし隣を歩く彼女は、まるで物怖じするつもりなどないようだ。

「大丈夫ですよ。私達だって、もう戦う手段も持ってるんですから！ 私の『武器魔法』に光一さんの『弓矢』。それに、夢斗さんの『オーバーテクノロジー』まで。きっと大丈夫です！」

笑う彼女を見ていると、根拠はなくても随分心が和らぐから不思議だ。思わず苦笑いで返す。

「でも夢斗さん、結構体力あるんですね。あれだけ動き回っても、へとへとになってなかったです」

この一言に、夢斗は「ああ」と声を上げた。

「まあ昔、部活で頑張ってた時の名残かな。今は、全く走ってないけど」

「昔...転校してくる前ですね」

「そうそう。一応こう見えて、陸上部に入ってたんだ。短距離走のね」

リサは目を丸くして「へえ～」と声を上げた。

「夢斗さん、アスリートだったんですね！」

「そ、そんなカッコいいもんじゃないよ。ただまあ、あの頃は結構、真面目に練習してたんだ。体育祭でぶっちぎりだった時は、気持ちよかった」

こんな風に過去の部活動について語るなんて、いつ以来だろう。これもまた、異界で記憶を取り戻したおかげだろうか。

「昔から、走るの好きだったんだ。景色が高速で流れて、風が走るあの感覚がなんだか妙に気に入っちゃってさ」

「なるほど～、だから運動神経が良かったんですねえ」

「まさか、こんな時に役に立つとは思ってなかったけどね」

更に過去の出来事を思い出し、ずっとそれが口をついて出た。なぜだろうか、こんな話は滅多にすることは無い。リサというこの少女が、夢斗の心の鍵をこじ開けたのかもしれない。

「そこそこ成績も優秀だったから、周りは将来、それこそアスリートとして生きていけばいいって言ってたんだ。だけど、俺はそういうの興味なくてね。あくまで走るの好きだけで、それを一生背負っていく覚悟はなかったんだ」

リサは一変、真面目に夢斗の顔を見ながら話を聞いていた。

二人は横断歩道に差し掛かり、赤信号で止まる。

「だんだん周りからの視線が重圧にもなりだした頃、『ある人』にその時に言われたんだ。大会で走るコースは決まってる。だけど、人生でどこを走るかは、誰にも決める権利はない。だからそれくらい、自分の思うようにすればいい、って」

大人というのは時に良かれと思って、輝かしく、それでいて重い未来を子供に背負わせてしまうこともあるのかもしれない。しかし「あの人」は違った。夢斗はあの言葉で、随分救われたのを覚えている。

「それからかな。なにをするに関しても、変に気を使ってたんだなって自分で思うようになってね。それで、思い切ってわがままになったら、今度は自分勝手な人間になっちゃったけどね」

苦笑し、リサを見る。だが、彼女はあくまでまっすぐな瞳でこちらを見ていた。

「そっか。だから夢斗さん、しっかりしてるんですね？」

「しっかりしてるだって？」

「はい。迷うことはあっても、進むって決めたらぶれないじゃないですか。自分でコースを決めるってことは、自分の進む先を『覚悟』できるってことですよ」

思いがけない言葉であった。夢斗は立ち尽くしたまま、かすかに笑うリサを見る。

太陽の光のせいかな、それとも彼女の放つ独自の感情のせいかな。金髪・碧眼のその小さな姿が、輝きを放っているように錯覚する。

信号が青に変わっても、しばらく歩き出せない。こういう時なんと言っているのか、まだ今の夢斗は言葉を持ち合わせていない。

リサは笑い、導くように歩き出す。

「そんな夢斗さんだからこそ、きっと『オーバー』になれたんだと思いますよ。不思議なことなんて、なにもないです。正しいと思ったから、きっと神様はその力をくれたんだと思います」

心から出た彼女の言葉に、鼓動が高鳴る。なんだか体の芯から熱さが湧き上がってきた。

夢斗も遅れてようやく歩き出す。少し前に行く少女は「ほら、早く」とこちらに笑いかけ、手招きしていた。

時刻はもはや昼前。今まで本調子でなかった日差しは一気に強さを増し、休日の街を容赦なく照りつける。

街の南に位置するディスカウントストアから大量のビニール袋を抱え、二人は出てきた。どれもこれも大量のお菓子だのカップ麺だのが入っていた。

「よ～し、買い物終了です。とりあえず、ノルマは一つ達成ですね！」

嬉しそうに声を上げるリサ。しかし凄まじい重さのせいで、夢斗は笑顔を返せない。

「な、なあ、マジでこれ、全部持っていくのかよ」

「そうですよ。レジスタンスの人達、喜んでくれますかねえ」

リサ曰く、これはレジスタンスの面々への「差し入れ」なんだとか。色々とお世話になっているからこそ、せめて物資で礼をしたい、ということらしい。物凄い量だが、リサは全部自腹を切った。夢斗も散々払うと言ったのだが、聞き入れてくれなかったのである。

「まあ、さすがに向こうの世界にカップ麺はないと思うけどさ…」

「でしょう。意外とこういうのが珍しがられるかなあ、って思って！」

大安売りを狙い、わざわざこのショップまで来たらしい。夢斗は両手のビニール袋を担ぎ直す。いかにカップ麺とお菓子の山とはいえ、これは重い。

「じゃあ、もう行くのかい？ このまま」

「いえ。とりあえず、準備してから行きたいんです。こっちもお昼ですし、ご飯食べてからにしましょうよ」

ついに夢斗は「ええ？」と声を上げてしまう。男としてここは堂々としておきたいところなのだが、それをかき消すように両腕には着実に疲労が溜まっていつている。思えば確かに、リサは何も荷物は持ってきていないし、なによりいつもの動きやすい格好ではない。

このままこの大荷物を持って食事をするなど、夢斗は露骨にうんざりしてしまう。暑さだけでなく、重さが精神も蝕む。

「お昼だったって、どこで？ まあとりあえず、これ下ろせる場所はあるがたいけど…」

「私の家、近くなんです。いきましょ～」

そう言って嬉しそうに歩き出すリサ。しかし夢斗は一瞬、ぎょっとしてしまい、遅れてしまった。

「え……な、なあ、家って、リサの実家ってこと？」

「そうですよ。他人の家に招待なんてしないですよ」

不思議そうにこちらを見ているリサ。しかし夢斗が確認したのは、そういう意味があってではない。

「あ、いや、いいよ。その辺で軽く済ませればー」

「だって、どうせそのあと、向こうに行く用意もしなきゃいけませんし。向こうへの『入り口』も近いから、一旦休憩しましょうよ」

レジスタンスの新たなアジトである遺跡に転移する場所は、この地域に近い。それ自体は構わないのだが、夢斗からしたら少し気がかりなことがある。

別に他意があるわけではない。誓って言えるが、やましい気持ちも。そもそも、そんなことを

している場合ではないということも、分かってはいる。

それであっても男子生徒が、女子生徒の自宅に足を踏み入れるなど――夢斗はそもそも、そういう経験がない。

それを遠回しに言いたいのだが、あいにくリサは気付いていない。いや、むしろ気にしてすらないのだろうか。

あれやこれや、歩きながら悶々と考えてしまう。なんだか途端に、ジャージ姿というこんな野暮な格好が場違いに思えてきた。クレイドルに行く準備ではあるのだが、女性の家に行くにはまるで適していない。

少し先を歩きながらあくまでのんきに笑って、他愛ない話を続けるリサ。だが、さっきから夢斗は空返事しかできない。気が気ではないのだ。

そうこうしていると、2階建ての小さなアパートに辿り着く。リサは迷うことなく階段を上り、一番端の204号室に辿り着いた。

鍵を取り出し、彼女はそそくさとドアを開け始める。

「ここですよ～。ちょっと狭いんですけど、とりあえず休憩しましょ～」

嬉しそうに中に誘うリサ。だが、夢斗は全身に妙な汗がにじみ出している。暑さや、重さのせいだけではない。もっと内面的な焦りがもたらすものだ。

入り口前で固まっている夢斗を、すでに靴を脱いだリサが不思議そうに見ていた。

「どうしたんですか、夢斗さん？　なんか、顔色が悪いですよ」

「え、あ……あ～、なんでもないよ。うん。お、お邪魔します」

ここまで来て帰るという選択肢も、もはやとれないだろう。意を決して夢斗は一步、踏み込んだ。

だが入ってみると妙なことに気付く。そこはワンルームのようで、入ってすぐトイレへのドアや狭いキッチン、冷蔵庫などが見えた。ドアを閉じ、奥を見ても人の気配はない。本来、一人暮らしで使うような間取りである。

「あ～、お腹減った。それに、やっぱり昼に外出るときっついですねえ。もう、暑くて暑くて」

リサはいつも通り、のんきなまま奥へと進んでいく。夢斗も荷物を抱え直し、恐る恐る続いた。

部屋の中にはテレビ、テーブル、服かけ、ベッドが置かれており、カーペットとカーテンはどちらも白で統一されている。初めて踏み入れた「女子の部屋」は、思ったよりずっと簡素だ。

しかし、よく見ると微妙に想定外のものが並んでいる。

まず、テレビにつなげられた最新のゲーム機と、その横に山のように積まれたソフト。壁際の棚には漫画本だけでなく、あれやこれやとキャラクターのフィギュアが飾られている。可愛い女の子――ではなく、巨大な剣を持ったロボットだの、長い爪を持ったクリーチャーだの、銃を構えたガスマスクの兵士だの。

その異様な光景に身動きが取れない。カーテンを開けるリサと、その横に並ぶ数々の品が、まるで次元がずれているかのように錯覚する。

「何もありませんけど、ゆっくりしてくださいね。はい、これ」

リサは座布団を夢斗の前に持ってきた。思わず会釈し、座る。緊張からか、正座をしてしまった。

「お昼ご飯の準備してきますね。ちょっとだけお待ちを～」

言うや否や、彼女はカップ麺を二つ持ってキッチンへと消えていった。彼女の背を見送り、すぐにまた部屋の中に視線を走らせる。

てっきり女子の部屋というのは、もっと可愛らしいアイテムがそこここに並び、おしゃれなインテリアで飾られた、夢斗のような青年にとっては実に居心地の悪い空間だと思っていた。

しかしこの簡素な部屋に並ぶアイテムは、それこそ夢斗ら男子生徒の趣味に近いようなものである。ゲームソフトをおもむろに手に取ってみると、格闘ゲームやシューティング、ホラーにアクションなど幅広いラインナップだ。

今度は少し立ち上がり棚の漫画を見てみる。少女漫画は一冊もない。すべて、善と悪が殴り合いを展開するような、泥臭いバトル漫画だ。

その下に並ぶフィギュアの数々は、もはや可愛らしさなど消え去った世界観である。

「それこの前、ゲームセンターで取ったんですよ。大変でした。最後の最後ですっぽりはまって、動かなくなったんです」

背後からの声にぎょっとしてしまう。見れば湯を注いだカップ麺と箸、そしてお茶の入ったコップを二つ持ってきたリサが、いつの間にかすぐ後ろでフィギュアを見ている。

なにか言わねば、と咄嗟にフィギュアについての感想を述べる。

「なんか、ちょっと意外だなあ。こういうの、女の子ってあまり好きじゃないってイメージだったけど...これ、『ブレイダイザー』だろ。超熱血アニメなのに」

すぐ目の前の剣を構えたロボットの名に、リサは激しく反応した。

「夢斗さん、知ってるんですか!？」

「え.....あ、ああ、うん。一応、アニメ見てたから...」

「グレート！　すごい、知ってる人、初めて出会いました!」

テンションが急上昇したのか、飛び跳ねて喜ぶリサ。ドタドタと地面が揺れる中、夢斗は驚き身構えてしまった。

「カッコいいですよねぇ、このフォルム！　侍の甲冑をモチーフにしながら、所々に近未来感を出してるし、なにより、この剣の大きさが素晴らしい！　なかなか、クラスの女の子に言っても分かってくれないんですよお」

怒涛の勢いで語り出すリサ。しかし、まさかこんな話をクラスメイトの女子にもしているのだろうか。ならば確かに分からない子の方が多いだろう、と納得してしまう。

彼女はひとしきり語り終え、満足してテーブルに戻った。

「嬉しいですねえ、やっと語れる方に出会えるなんて。あっ、ラーメン伸びちゃいますよ。食べましょ」

なんだか、やはり慌ただしい少女だ。夢斗はとにもかくにも座り、彼女が作ってくれたラーメンを食べることにした。

昼飯を食べながらも、味どころではない。様々なことが気になって思わず問いかけてしまう。

「一人暮らしなんだな。てっきり、家族の人と住んでると思ったんだけど」

「そうですよお。私、前言ったように、お母さんはいないし、お父さんは海外で貿易のお仕事を
してるんです。だから各地を飛び交っていて、あんまり会えません。兄弟もいませんしねえ」

「そうだったのか...仕送りとかで暮らしてるのか」

「はい。って言っても、自分の欲しいものはアルバイトしたお金で買うようにしてます。お父さん
のお金で、趣味までやっちゃうのは、ちょっと後ろめたいんで」

なんだか、随分と複雑な家庭環境らしい。夢斗の父も単身赴任で月に数回しか帰ってはこない
が、それでも会えないというわけではない。

リサはずっとこの小さな部屋で一人、孤独に学園生活を過ごしてきたのか。だが彼女を見て
いて、陰のようなものはどこからも感じない。

「しっかりしてるんだな、リサは」

「そんなことないですよお。一人暮らしは一人暮らしで、自由で良いですよ。ずっとゲームして
ても、怒られないですし」

また無邪気に笑うリサ。しかし、どこかその笑顔を見て心が苦しくなってしまう。

「お母さんがいなくなって、お父さんと海外に行くって道もあったんです。でもどこかで、まだ
お母さんのことが諦めれなくて...だから、日本で暮らしたいって言ったんです。それから一人で
、ずっとですね」

突然いなくなり消えてしまった母を思い、一人に残る。それがどれだけ重く、そして悲しい選
択肢だったのか、夢斗には知り得ることはできない。そんな生活の中でここまで楽しそうに笑え
る理由も、夢斗の価値観の中では到底導き出すことはできなかった。

その答えをリサはあくまで笑顔を浮かべ、告げた。

「笑う門には福来たる——ってことわざ、ありますよね。お母さんが昔、いつも言ってた言葉
です。だから今でも大事にしてるんです。幸せになりたいなら、幸せになろうとしないと。しよ
げても、神様はなにもくれないと思うから」

与えられた言葉を心に刻み、社会の汚れで曇らせることなく、ただ純粋に自身の中に抱き続
ける。

簡単のようで、これほど難しいことはない。

けっしてぶれない、折れない何かを抱く、ということは夢斗にもできる自信はない。

言葉が出ない。彼女が歩んできた道の複雑さと、重さが身を貫く。

だがそんな強い少女はおかまいなしに自身のラーメンを食べ終え、スープを飲み干し、ため息
をついていた。

「あ〜、美味しかった。やっぱりラーメンはとんこつが一番です」

幸せそうな表情だ。そしてそれを見て、夢斗は一つだけ悟る。

だからなのだろう——彼女がクレイドルでの戦乱を収めたいと願った理由。それはなんのことは
ない、シンプルな理由だったのだ。

戦いが始まれば、多くの人々が傷つく。血が流れ、多くの痛みが生まれる。

そこには、彼女が望む「笑顔」など、無い。

その世界に「幸福」は二度と来ないかもしれないのだ――綺麗事と言われるかもしれない。しかし、その綺麗な心だから、進めている未来もある。

視線を走らすと、すでにベッドの脇には異界に行くための準備がまとめられていた。彼女が向こうで着ているローブが、そこには置かれている。

満腹になり、少し眠そうに目をこするリサ。私服の彼女は、どこでも見る普通の女子高生だ。

だがその体の奥底に、しっかりと根付いた「光」のようなものを感じる。彼女が丁寧に歩いてきたが故に作り上げてきた「心」がそこにはある。

夢斗の手元にあるラーメンは、どんどんと温度を失っていく。だが反対に彼の心の奥底は、なにかに感応するかのように熱く、震えるほどに燃え上がりだした。

異界の太陽は現実世界のそれとは違い、微妙にくすんでいるように思う。自然の体系そのものが違うせいか、吹いてくる風も質が違うようだ。

馬車に合わせゆらゆらと揺れる景色を眺めながらも、夢斗は緊張した面持ちで前を見ている。すでに格好はジャージ姿の上に、最低限の防具、そしてあの「オーバーテクノロジー」のブーツを装着済みだ。改めて、自分でもゲリラ兵のような出で立ちだと思ふ。

馬に乗って手綱を引いているワニ男・キリウが、前を向いたまま告げる。

「ルガリアの城壁は、ただの石い組み合わせた壁とはちゃう。高度な魔法障壁が表面に刻まれとって、転移魔法ですり抜けようにも、今度はそっちの壁に阻まれて、うまくいかん。まさに鉄壁の守りっちゅうことや」

丁寧に教えてくれるキリウの後ろ頭を、小窓から覗き込む三人。夢斗、リサ、そして光一はまた少し、緊張の色を濃くしてしまう。

荷台にはキリウが使う商売道具がいたるところに積まれており、三人はその隙間に身を縮ませて座っている。様々な匂いが混ざり合い、さらに言えば少し埃っぽい。居心地は悪いが、今は快適な旅がしたいわけでもないの、しかたなく耐えていた。

「前も言うたが、可能性があるのは正面突破。とはいえ、そこは嚴重な検問が敷かれとる。例の『心喰い』ってやつを見つけるためやな」

改めて聞くとやはり絶望的な状況だ。

たまらず、光一が弓の手入れをしながら問いかける。

「じゃあこのまま行ったら、僕ら一網打尽じゃないか。この積荷だって、全部調べられるんでしょ？」

「せやな。わざわざ入国のために、品物の一覧まで書きおこさせられる。もちろんワイも身体検査を受けるしな」

絶望の上塗りをされ、怪訝な表情を浮かべる光一。今度はリサが問いかけた。

「じゃ、じゃあどうするんですか？ 全員、倒すんですか？」

「あほう。そんなもん、城下町中の兵士が飛んでくるわ。それに、門番であっても奴らも手練れ。あっさりやられるタマやない」

どこかりサの発言は好戦的だが、あの部屋の内容を見ていると夢斗は妙に納得してしまう。見た目は小さくて活発な女の子だが、中身は限りなく熱血系男子に近い。

座り直し、リサは「むう」となる。

「まどろっこしいですねえ。私達がいれば、どうにかなりそうな気もするんですけど」

これには、たじろぎながらも光一が答える。

「君、結構、好戦的だね。レジスタンスの皆とうまくやれそうだよ」

苦笑する光一は弓矢の手入れを終え、今度は何やら縄に結わえられた瓶を取り出す。それをベルトのように腰に巻くと、幾つもの透明の瓶がずらりと並ぶ。

思わず夢斗は問いかけた。

「なんだ、そりゃあ。水筒か？」

「飲み水じゃないよ、夢斗君。『魔法』を使うために、必要なんだ」

一瞬なんのことか分からなかったが、夢斗は思い出し、声を上げた。

レジスタンスのアジトにて王国の女剣士・ルーメルと対峙した時、光一が見せたあの「力」である。「水」から「矢」を作り出し、それを自在に放って見せた。

「お前も魔法が使えるんだな。この世界の人、皆そうなのか？」

「う〜ん、皆ではないかなあ。けど、生き物は皆、生まれつきそれぞれ、自分の『マナ』を持ってるんだ」

思わず「マナ？」と問いかけてしまう。

「個人個人が持つ一番強い魔力のことだよ。『火』の力が得意な人もいれば『風』の力を持つ人もいる。僕はどうか、『水』の力を持ってるみたいなんだけど、まだ媒体なしに力は使えないんだ。実際の『水』を使うことで、初めて魔法が使えるんだよ」

「へえ。じゃあ、俺とかりサにもその『マナ』ってのがあるのかな」

「どうだろうねえ。僕もこの姿になって、初めてこの力が使えるようになったしね。でも二人にはそもそも『オーバー』の力があるじゃないか」

言われてみれば確かにそうだ。彼らにそれぞれの個性があるように、夢斗らもすでに「オーバー」としての世界を超える力を持っている。

光一は帯を締め直し、ずれないように確かめる。

「なにかあったときのために、一応ね。できれば使うことがなけりゃ良いんだけどさ」

自分の身は自分で守る、ということだろう。そう思うと夢斗は足にはめたブーツを。そしてリサは手首の腕輪を意識してしまう。各々の持つ武器を確かめ、決意を固める。

ここで馬車が突然止まった。何事かと振り返ると、キリウが馬を降り荷台の方にやってくる。

「おっし、もう後5分ほどで城壁や。準備するで」

ワニ男は説明もせず、荷台の奥から何やら荷物を引きずり出してくる。皮袋に包まれた大きな塊で、彼の腕力を持ってしても引きずるのが精一杯だ。

夢斗は緊張した面持ちでそれを見つめながら、問いかけた。

「なあ、もういいだろう。どうやって潜入するのか、教えてくれよ」

頭の中には様々な手段が浮かび上がっていた。

変装して潜り込むか。誰かが囷になった隙に突破するか。いずれにせよ、危険なことには変わらない。

そんな中、キリウはようやく大きな皮袋を引きずり出した。

「入国の審査は徹底しとる。せやけど、この世に『絶対』なんてあらへん。ましてや人間って生き物には『完璧』なんざあらへんのや」

いまいち、彼の言葉の意味が理解できない。三人は首をかしげ、キリウの顔を見上げる。ワニ男は大きな口を歪め、不敵に笑っていた。

「改めて聞くけど、帰るなら今やで。まだ間に合う。一度足を踏み入れれば簡単には出られん。それでもええんか？」

一同を見下ろし、返答を待つキリウ。その言葉に偽りはないのだろう。それほどまでに、夢斗らは危険な橋を渡ろうとしているということなのだ。

正直なところやはり不安はぬぐえない。あと数分で到達するその「門」は、外界を徹底的に拒絶する大国の入り口だ。そこに踏み込めば、夢斗らは排除対象と見られるのだろう。

だが、それでも夢斗は決意を固める。隣の二人も同じ顔をしていた。

ここまで一つずつ積み上げてきた石を、崩す気などない。

「構わないよ。なにか掴めるかもしれないというなら、行く理由が俺らにはある。そのためなら、なんでもするよ」

夢斗の言葉を受け止めて、キリウは押し黙っていた。だがやがてにんまりと笑い、頷く。

「兄ちゃん、ええ度胸しとるな。よし分かった。男に二言はないで？ 言うたよな、何でもするって」

その笑みはどこか、意地悪な色もはらんでいるように見える。覚悟と言葉に偽りはないが、なんだか嫌な予感がした。

キリウは再びあの大きな皮袋に視線を落とす。この中に、検問を突破する秘策が入っているというのだろうか。

「ま、せやけど、これはあくまで『賭け』や。さっきも言うたように『絶対』なんてこの世にはない。やることやったら、あとはあんたらの運にお任せや。日頃の行いがよけりゃ、生き残れるやろな」

ケタケタと不謹慎な笑い声をあげるキリウ。しかし険しい表情のまま、三人はその袋をじっと見ていた。

吉と出るか、凶と出るか――キリウは皮袋の紐を解き、ただちに「秘策」の実行に移った。

ルガリア王国は他国からも「鉄壁の守り」を高く評価された大国だ。西と北は切り立った山脈に守られ、東、南は鬱蒼と生い茂る森に囲まれている。城下町をぐるりと囲むように作られた城壁が、外敵を跳ね返し寄せつけないのだ。かつてこの地に複数の国が生まれ、覇権をかけて争ったが、不動の守りを固めたこのルガリアを誰も落とすことはできなかった。

「そこの荷馬車、止まれい！」

門番が槍を携えたまま、門へと入ってくる荷馬車に叫ぶ。門の奥では別の旅人が荷物を地面に並べ、一つ一つ尋問を受けていた。

馬に乗ったまま、キリウは兵士に笑う。

「ど～も～、行商のもんです。以前からこちらさんと取引させていただいていた、バクウの後任で来ました～」

愛想良く笑うキリウに対し、あくまで兵士達は警戒した眼差しで問いかけた。

「バクウだと？ 確かに王国が招き入れた特待商人ではあるが...」

「はい、お世話になつとります～」

言いながら、キリウは首に下げていた銀色のネックレスを見せた。兵士は歩み寄り、それを睨みつける。

「う～む、確かに。バクウはどうしたのだ？」

「それが半年前くらいに体調が優れませんか。代わりにワイが各地を周っとるんですわ」
兵士はそれを聞き「なるほど」と頷く。だが、すでに数名の兵士が荷馬車の後ろに回っていた。

「事情は分かった。だが生憎、現在、嚴重体制を敷いている。積荷についても検査させてもらうぞ」

あくまで彼らはキリウが「獣人」であることを、警戒しているのだろう。先程から一切笑みを見せず、睨みつけるようにワニ男を見ている。

だが、なおもキリウは笑顔で対応した。

「はいはい、それはもう。是非」

そう言う、馬から飛び降り、なんら躊躇せずに荷馬車を開けて見せた。兵士はキリウと一緒に荷を一つずつ下ろし、地面に並べる。

「随分な量だな。ふむ、刀剣類は所持していないな？ どんな理由があるにせよ、武器類は持ち込み禁止だ」

「はい、そらもう、心得てますわ」

キリウは品物の一覧を羊皮紙に書き記しながら、笑う。

「食料ばかりだな……この瓶はなんだ？」

「北方で仕入れた先住民の酒ですわ。なんでも雪男のシヨンベンから作るそうです。良ければ、一本いかがですか？」

「え、遠慮しておこう。こっちはなんだ？」

「紅姫海で採れた、エンマフグですわ。ああ、丁寧に扱ってくださいねえ。衝撃を与えると破裂して汚れますんで」

「ヌウ…ゲテモノばかりだな、これは…」

他にも二人の兵士が積み荷の検査を手伝っているが、出てくるのはどれも一癖二癖ある品々だ。その度に丁寧にキリウは説明するが、兵士は眉をしかめ、すぐに手放す。

「ん？ なんだ、この袋は」

兵士達はついに、キリウが夢斗らに見せていた巨大な皮袋を引きずり出した。相当な重さで、持ち上げることはできない。

「ああ。そいつは注意してくださいねえ、いきなり開けると――」

キリウの制止も聞かず、兵士は二人がかりでその皮袋を一気に開いた。

中から顔をのぞかせたのは――巨大な肉の塊である。

腐らないように香辛料がまぶされており、隙間からは血色の良い肉が顔をのぞかせている。

その巨大さに驚く兵士はいない。

否、正確には、彼らは袋を開けた瞬間、肉体を襲った強烈な感覚に支配され、肉の巨大さなど二の次になってしまったのだ。

「ぐおおおお！？」

叫んだのは、中を覗き込んだ兵士である。彼だけではない。袋を開いた二人も鼻を押さえ、額に脂汗を滲ませていた。

馬車を一瞬で包んだ強烈な臭い。生臭い香りは周囲に広がり、体にまとわりついてくる。

「な、なんだこれは!？」

「あ〜、だからいきなり広げないように、って言おうとしたのに」

あくまで笑顔を崩さないキリウ。だが兵士達は気が気ではない。体の奥へ奥へと入り込んでくる強烈な異臭に、身動きができない。腐卵臭のようで、しかし香辛料の酸っぱさが独特だ。タンパク質の香りをこれでもかと混ぜ込んだような、蒸せ返る臭気である。それでいて時折、魚臭さのようなものも混じるから、たまらない。

平然としているキリウ。兵士の一人があまりの臭気に何度も咳き込み、がくりとうなだれている。

「おまっ...こ、これはなんだ! 新手の兵器か!？」

「ちやいますよお。西の大国で捕まえた、マグマカエルの酢漬け肉ですわ。普段、硫黄の沼の奥に隠れてるんで、捕まえるの大変でしたよお」

ニコニコしながら説明するも、兵士はもはや涙まで浮かべていた。ついに臭気は遠くにいる門番にまで伝わったようで、遠くからえずく声が聞こえてくる。

「現地民ではご馳走で、この独特の匂いと、食べるととんでもない精力がつくっていうんで、マニアには飛ぶように売れるんですわ、これ」

「そ、そう...か...うお.....」

「ああ、これも検品されるんやね。待ってってくださいね、今、袋から出しますんで」

おもむろに皮袋の口を開くキリウ。より一層、袋の中に充満していた臭気が外に漏れ出す。

「ッ!! 待てー動くな、貴様!」

「なんでですか? 検査するんですやろ?」

また少し皮袋をこじ開けると肉がごとりと動き、臭気は強さを増した。

「も、もういい! 十分だ! それ以上、その袋を開けるな! とっとと馬に戻れ!」

「ええ、でもー」

「いいから戻れと言っとるだろうが!」

キリウはしばし、ぽかんとしていたが「はいはい」と皮袋に封をして、馬へと戻っていった。

品物の一覧を受け取ると、兵士は鼻を押さえたまま吠えるように言う。

「問題なしだ、行け。いいか、くれぐれもあの袋、むやみに開けるなよ! 騒動になるからな!」

「はいはい〜、了解ですわ。おおきに〜」

ぺこりと頭を下げ、ようやく馬車は進み出す。既に何人かの兵士は馬車から離れ、退散していた。背後からこちらを睨みつけている兵士に、最後の最後までキリウはニコニコと笑う。

馬車はそのまま城下町の中を進む。大通りには大勢の人々が行き交い、露店では果物やらパンやらが売られていた。キリウ同様、行商の姿もそこここに見える。

キリウはそんな町の風景を眺めながらも、城下町の端にある大きな倉庫の陰に馬車を止めた。

馬から降り、周囲を警戒する。人影はないことを確認し、荷台を開いて言う。

「ご苦労さん。もうええで、潜入成功や」

キリウのその一言を聞いた瞬間、馬車がガタガタと揺れ出す。いや、正確にはあの巨大な肉塊を包んだ皮袋が、ひとりでにボタンボタンと暴れ出したのだ。

しばらく周囲を見張りながらも、横目でその袋を見ているキリウ。袋の中から、何かうなり声のようなものも聞こえてくる。

そしてついに中から三人の人影が飛び出し、馬車から転がり落ちた。

「くっせええ！！」

叫び、そのまま大声でえずく夢斗。坊主頭には、肉に振りかけられていた香辛料がこびりついている。

リサ、光一もゼエゼエと息をしながら、涙をぬぐっている。

「きぼち悪いでずう... ぐええ..... アンビリーバボー...」

「はあ... はあ..... し、死ぬかと思った... 臭さで死んじゃうかと...」

うなだれ深呼吸を繰り返す三人に、キリウは「フン」と少し得意げに言う。

「よう頑張ったなあ、あんたら。ちいときつかったろうが、見事に成功や。大したもんやで」
だがそんな賞賛では、身体中にこびりついたこの悪臭は拭えない。夢斗は汗と涙をぐいと拭い、吠える。

「冗———談じゃねえよ、マジで！ ああ、ダメだ、体の中からくせえ...」

なんだか、吐く息そのものが汚染されているように感じる。

「しかたないやろ。なにせ、いつものより香辛料を3倍にしとるからな。ワイでもちょっぴしきついくらいや」

キリウは皮袋をきつく閉じ、荷馬車の奥へと押し込んだ。そして代わりに彼は小さな皮袋を、夢斗に投げ渡す。

「ほら、消臭効果のある薬草や。本来はこの肉を食う奴が、調理に使うんやけど、それ振りかけとけば少しはマシやろう」

彼の言葉を信じ、慌てて袋から草を取り出し体に振りかける。刻んだ薬草が服の隙間にも入っていくが、気になどしない。夢斗に続いてリサ、光一もとにかく、体に刷り込んだ。

爽やかな草の香りが臭気を抑え込んでくれる。だが、それでも完全に臭いは消えたわけではない。

「これ、いつまで続くんだ...」

「大した事あらへん。臭いはきつついけど、風呂入ればきちんと落ちる。安心しいや」

不安がる三人を見て、キリウはけらけらと笑っている。あいにく夢斗らからすれば必死なのだから、少しだけムツとしてしまう。

「しかしまあ案の定、中身までは調べられんかったなあ。思惑通り、良かった良かった」

作戦が功を奏した事に、キリウはどこか満足げだ。

ルガリアの検問は厳重だ。馬車、そして品物の隅々まで調べられ、管理される。馬車のどこかに隠れようが、見つかってしまうのは目に見えている。

だが、どうやっても調べられるというなら、その大根底を変えてしまうしかない。すなわち「

調べられない」という状況を作り出す。検査を行っているのは機械ではない。心を持ち、怠惰に付け込まれる「人間」なのだ。

光一が遠巻きにあの肉の袋を見ながら、意外そうに言う。

「なんだか信じられないなあ。あんな簡単にいくなんて」

「ここ最近のレジスタンスとの小競り合いのせいで、警備も強化したらしいなあ。と、いうことはや。それだけ兵士の方々、激務をこなしてるってことやろ。そろそろ疲れも見えてくる頃や。そこに来て、あないなけったいなもん調べろってなれば、うんざりすると思ってな」

いかに鉄壁の守りといえど、それを成し遂げているのは感情を持つ「人間」だ。疲れもすれば、迷いや隙も生まれる。ましてや、連日激務の彼らにとって、キリウが仕掛けた「臭い」という罠は効果覿面だったのだろう。

もっとも、その肉の袋の奥の奥で臭気に耐え忍び、声を殺してじっとしていた夢斗ら三人は気が気ではなかった。外が見えないという不安もそうだが、なにより呼吸すればするほど身体中に染み込んでくる悪臭に泣き出しそうだったのだ。

リサは体の汚れを払い落とす。

「に、二度とやりたくないです...」

「残念やけど、それは難しいなあ。なにせ、戻るためにはまたあの門を通らんとな」

リサが思わず「うええ!？」と声を上げる。少なからず、これには光一も落胆したようだ。

そんな中、夢斗は周囲を見渡しようやく冷静に事態を把握できた。

「おい、あれって...」

夢斗の見上げた先には巨大な城が見える。石造りのそれは、映画やゲームの「ファンタジー」の中でしか見たことのない、立派な建造物だ。

リサ、光一も思わずその荘厳な姿に見とれてしまう。

「すごい.....綺麗...」

「噂には聞いてたけど、僕も初めて見るよ。うわあ、なんだか変な感じ。RPGの世界にいるみたい」

異界・クレイドルには慣れてきたつもりだったが、目の前に広がった新たな光景には毎度、感嘆せざるをえない。敷き詰められた石畳、煉瓦造りの民家。水路には水車が回り、遠くには先程超えてきた城壁が見える。

中世ヨーロッパの世界に迷い込んだかのような錯覚に、くらくらしてしまう三人。そんな心ここに在らずの三人に、キリウが言い放つ。

「じゃあまあ、ワイはこのまま自分の仕事に移らせてもらうわ。あんたら、帰りたくなったら言いや。またあの袋、貸したるからな。サービスや」

ケラケラと笑い、彼はそそくさと荷物を降ろし始める。心遣いはありがたいのだが、あの袋のことを考えると、いまいち喜べない。

だが確かにこれで終わりではない。三人には確固たる目的があったのだ。

「よし、まずは第1関門クリアだな。じゃあ次は、いよいよ『心喰い』の手がかり探した」

大きく頷くりサと光一。光一は少し得意げに答える。

「なら、急ごう。確か『王立魔法機関』は大きな赤色の屋根が目印らしいよ」

目的地ははっきりしている。あとはできるだけ穏便に、迅速に事を進めるのみだ。

三人は即座に、光一が前もって調べていた建物を目指した。

王国は広く、城下町の光景はまさに「剣と魔法の世界」のそれだ。大勢の人々が行き交う通りの端を、目立たないように歩く。活気付くその光景に、思わずため息が漏れた。

「すげえな。いかにも王国、って感じだ。一体何人が住んでるんだ」

「本当ですねえ。あんな立派なお城もあって、ぐるりと壁に囲まれた町なんて、こっちの世界にはありえないですよ」

見上げれば鳥の影に混じって、明らかに大きな物体が飛び交い、上空を見張っている。あれが件の「竜騎兵」なのだろう。

思わず光一も声を上げた。彼だけは獣人のため、顔を隠すターバンを巻いていた。

「これだけの大国なら、さぞたくさんの兵力を蓄えてるんだろうね。レジスタンスが束になっても、敵いそうもないなあ」

喋っていると、すぐ目の前を鎧を着たルガリアの兵が通り過ぎた。息を呑み、思わず三人は立ち止まってしまう。変にかしこまっても怪しまれるだけだが、気が気ではない。

「こう見ると、やっぱり獣人の数は少ないな。キリウみたいな行商人しか、受け入れてないのか」

「みたいですね。警戒しているのか、兵士の数も多い気がします」

先程から何度も巡回兵とすれ違っていた。その度に緊張し、妙に体がこわばってしまう。

できれば別の形で、堂々と観光がしたかったところだ。露天に並ぶ奇妙な食材の数々や、大道芸でいくつものボールをジャグリングする男。魔法の力で動く針で服を治す修理屋や、新たな民家を作るために、大量の石を運ぶ大男達。

キリウのように荷馬車から大量の商品を下ろし、声高に宣伝している者もいる。その話に聞き入る者達の隣では、子供達が荷馬車を引いてきたサイのような生き物の頭を投げ、きゃあきゃあと声を上げていた。

その姿だけ見ていれば、異国文化を見ているようでまるで飽きがこない。ここで暮らす人々がいて、ここには独自の文化がある。そう思うと、こそこそと隠れて行動しなければいけないことが、少し情けない。

通りをまっすぐ歩いて行くと、光一が声を上げた。目的地と思われる屋根がはっきりと見える。足早に路地をかけていくと、巨大な赤い屋根の建物が姿を表す。

「あった、これだ！」

「でっかいな、こりゃあ。間違いないのか、光一？」

「うん、ドンピシャ！ ちゃんと看板に『王立魔導機関』って書いてるよ」

残念ながら「オーバー」の力を持ってしても、こちらの言語は読み取れないらしい。よくわからない記号は、光一しか解読できない。

入り口の大扉に歩み寄りつつ、リサが少し不安げに言う。

「大丈夫ですかね。これ、私達が入れるでしょうか」

「分からない...だけど、なんとかするしかないさ」

緊張した面持ちで扉にたどり着く。二人の顔を見つめた後、夢斗はゆっくりと扉を開き、中に入った。

目の前に広がっていたのは美しいロビーだ。床、壁、柱のどれもが光沢のある石でできており、大理石を彷彿させる。白を基調とした館内は実に落ち着いており、静かだ。

扉をくぐった三人に真っ先に声をかけたのは、正面の受付に座る女性である。

「ようこそ、魔導機関・テルメナへ」

会釈をする女性に驚いてしまう。青の帽子、ローブを身につけた銀髪の女性は、微かな笑みを浮かべこちらを見ていた。

怪しまれてはいけない、と三人はそそくさと受付へと近寄る。

「どういったご用件でしょうか？」

「えっと...あ〜...あの、調べ物があって...」

「調べ物——資料室をご利用でしょうか？」

良く分からないが、おそらくそこに王国に貯蓄された資料があるのだろう。夢斗は頷き、答える。

「あ、ああ、そう。それぞれ」

「どういった内容をご所望でしょうか。適したお部屋にご案内いたします」

思わず言葉に詰まる夢斗。てっきり、一部屋に全ての資料がまとめられているのかと思ったが、そうではないらしい。

とっさに助け舟を出したのは、リサだ。

「魔法学に関する資料が見たいんです。魔法と民俗学の調査をしてまして」

「ああ、そうでしたか。では右手の階段を上がられまして、突き当たりを左。第5資料室が適しているかと思います」

とっさの判断で見事に部屋を聞き出したリサ。民俗学など偽りもいいところなのだが、素晴らしいアドリブである。

「ありがとうございます。助かります！」

リサは深々とお辞儀をし、足早に階段へと駆けていく。夢斗、光一も戸惑いつつ、受付嬢に頭を下げた。彼女はにっこりと微笑み「ごゆっくりどうぞ」とだけ告げた。

二階の通路を進みつつ、小声で夢斗は言う。

「な、ナイスアシスト。さすが」

「いえいえ！ でも大きな建物ですね。資料だけで、そんなに部屋があるんですね」

光一も周囲を見渡しながら口を開く。ガラス越しに部屋の中が見えるが、怪しい器具が並ぶ部屋もあれば、棚いっぱい資料やら壺やらが並ぶ部屋もあった。

「なにせ王国が蓄えている『魔法』に関する知識や資料が、全て集まってるところだからね。王様の意向で、国民にも知識を共有するってことから、一部分はこうやって公開されてるみたいだ」

「へえ、そりゃまた、太っ腹な王様だな。国民には優しいんだな」

この一言に、光一も少し暗い表情を浮かべた。

「うん。そもそもルガリア王国は人であろうが、森に住む獣人であろうが、分け隔てなく受け入れる豊かな国だったらいいんだけどね。あの『心喰い』事件から、全てが変わっちゃったんだって。元々、国王も心優しい人だったみたいなんだけどね」

なんだかそう考えると、改めて「心喰い」という存在が怖くなってしまふ。国一つを変えてしまふくらい、その殺人犯は力を持ち、人々の心の中に影として存在し続けていることになる。

薄ら寒さを感じながらも三人は歩みを進め、目的地である「第5資料室」にたどり着いた。

扉をくぐると、まず「おお」と感嘆の声を上げてしまふ。目の前には高らかと本棚が並び、そこにありとあらゆる書物が、隙間なく並べられている。壮観を通り越し、啞然としてしまふほどだ。

本棚と本棚の間を、なにやら羽の生えた小人のような生物が行き交っている。数冊の本を抱え、所定の位置に戻しているようだ。ここの職員かなにかだろう。

「ま、まじか...これ全部、その『資料』だっていうのか？」

「ここが第5資料室...ってことは、少なくともこんな部屋が、あと5つも...」

夢斗、リサはなんだか肩の力が抜けてしまった。光一も「う～ん」と唸りながら、眉をひそめる。

「こ、これは想定外...ここから、手がかりを探すのか.....」

部屋に入りゆっくりと歩きながら、左右の本棚を見上げる。まるで切り立った崖だ。それほどまでに、陳列された本の数々に圧倒的な迫力がある。

「お、おい、光一。どれだ、どの本を見ればいい？」

「ええ、僕う！？ わ、分かんないよそんなの」

困惑する光一。リサも困ったように声を上げた。

「どうしましょう...こんなの、1日じゃとても探しきれませんよ...」

夢斗とリサには言語が読めない以上、解読は光一頼みになる。だが、だからこそ総当たりでこの書物を読み解くのは、至難の技だ。

目的地に辿り着いたというのに、今度は別の壁にぶち当たってしまう。考えなしにここまで走ってきてしまったことに、夢斗は若干、後悔していた。

なんとかせねば――必死に悩む三人の背後から、突如として低い声が響く。

「何をお探しかな」

思わず声を上げ、驚く三人。振り返り、絶句してしまふ。

いつの間にか三人の背後に巨大な黒い影が立っていた。いや、正確にはその影は空中にふわふわとうきあがり、こちらを見下ろしている。3メートルほど上空に浮かぶ石造りの仮面から黒いマントが垂れ、ひらひらと揺らいでいた。

仮面からは鋭く光る眼光が、こちらを見下ろしていた。巨大な影に身動きが取れない三人。光一に至っては、尻もちをついてしまい、口を開けている。

そんな中、黒い影はまた低い声で言った。

「これはこれは、驚かせてしまい申し訳ありません。私、当魔導機関・テルメナの案内役を承っ

ております。グノーシスと申します。以後、お見知りおきを」

黒い仮面の男・グノーシスは深々と頭を下げた。黒マントから伸びた長い腕が、自身の胸を押さえている。

「見たところ、何かお困りでしょうか。もしよろしければ、私にも何か手助けができればと思い」

見た目と声は恐ろしいが、その言葉は実に丁寧だ。しかも、どうやら親切心から声をかけてくれたらしい。

緊張で固まったままの二人を差し置き、リサが言う。

「はい、是非助けてください！ 私達、魔法の歴史について調べてるんです。民族の魔法で『生贄』なんかを使う魔法について、書かれた書物はありますか？」

夢斗は再び、心の中で「さすが」と呟く。こういう時、とっさに動けるのがこの少女の強みだ。

グノーシスは「ああ」と納得したように頷いた。

「なるほど、でしたらこちらへ。大陸内外の呪術などについての資料をまとめております」

グノーシスは三人を導くように、ふわりと浮き上がって移動する。真っ先に駆け出すリサ。少し遅れて、夢斗は光一に手を貸し、起こした。目を見開き、驚いたままの顔で光一は言う。

「あ、あの子、タフすぎるでしょ。なんであんな鋼のハートなの？」

「さあな。でも、お前と意外と仲良くなれると思うぜ」

思わず「ええ？」と驚く光一。だが、それ以上言及はせず、夢斗もリサを追う。オタク趣味という意味では、リサと光一は実に良く似ているような気がしたのだ。

グノーシスはふわふわと進みながらも、三人に問いかけてくる。

「しかし魔法と民俗学については、珍しい。アカデミーの生徒様でしょうか？」

また新たな単語の登場にたじろいでしまうが、やはりリサが力強く打ち返してくれる。

「いえ。私達、各地を旅している者です。ルガリアの魔導機関の情報量はすごい、ってお聞きしまして。各地で行っている調査にも、役立つかなあって」

「ほほう、なるほど。お若いのに、随分と難しい分野の方なのですね」

「そんなことはないですよ。放浪してるみたいなものですから」

驚くことに異界の、それこそ人かどうかも分からない存在との世間話が成り立っている。少し離れて歩く夢斗と光一は、ただただ目を丸くするしかない。だが彼女の臨機応変さは、たとえ嘘をついているとしても、この場において心強い。

やがて壁際の棚にたどり着き、グノーシスが止まる。

「でしたら、この辺りでしょうかね。大陸内の儀式や事件にまつわる魔法であれば、この一冊を。大陸外の文献はこちらがよろしいかと」

そう言って、彼は長い腕で上段からいくつかの本を取り出してくれた。手渡されたそれを夢斗は慎重に受け取る。一冊一冊が分厚いせいで、かなり重い。

「貸し出しの場合はお呼びください。受付で手続きをいたします。お読みになられる際は、あちらの机でよろしくお願ひします」

丁寧に指示する仮面の男に、リサはなおも笑顔で頭を下げた。

「ありがとうございます。助かりました！」

「いえいえ、とんでもございません。知識は誰しもの宝です。あなた方の行く末に少しでも光を指せば、幸いです」

深々と頭を下げ、グノーシスはまたふわふわと浮かび、その場を立ち去る。

去っていく黒い影を見送り、リサはまた嬉しそうに言った。

「親切な人でしたね。良かったです、これで探す手間も省けそうですよ」

「し、親切なのはそうだけど...人なのか、あれは」

「不思議な方ですよねぇ。でもいいじゃないですか、親切なんだから」

なんとも豪快な理由で片付けられてしまい、リサはそそくさと机の方に歩き出す。

多分、考えたところでどうにもならないのだろう。ここは異界・クレイドルなのだ。「そういう物」と割り切るのも、ひとつのコツなのかもしれない。

とにかくにも、ようやく一同は資料を手に入れ、机に座る。他にも何名か資料を読んでいる人影が見えたため、一番端の席を陣取り、すぐに読解にかかった。

がらがら読み進めていく光一。物凄い勢いでページをめくっていく姿に少し不安になり、問いかけた。

「な、なあ。それ、読んでものか、ちゃんと？」

「大丈夫、任せてよ！ 文字数は多いけど、分かりやすく書いてくれてるからさ」

クラスメイトの中で「本」と言えば、この少年ほど得意な人間はいなかった。思い返してみると、かつての彼の自宅にはダンボール箱に入った無数の小説が置かれていた。新しい本を買っても、1週間あれば十分読み終えてしまうらしい。調子が良い時は「二周目」ができるんだとか。

まさかここで彼の本好きが役に立つとは、誰も思っていなかった。そうこうしているうちに、もう彼は分厚い資料の三分の一を読み終えてしまっている。

「あ～、これは違うかなあ。なんか歴史は書いてるけど、魔法が生まれた根底の話とか、概念の話が多いよ...そっち先に見ていい？」

光一は唐突にもう一冊に切り替え、解読を再開した。夢斗は受け取った一冊を眺めてみるが、やはり文字が読めないで、ただの記号の羅列にしか見えない。だが挿絵には魔法使いが杖をかざし、洪水を起こす姿が描かれている。

真剣にページを読み進める光一。

時間にし10分ほど経ったその時、ようやく彼は手を止めた。

「おっと～、これは来たんじゃないかな？」

得意げに笑う光一。思わず夢斗、リサもページを覗き込む。挿絵には、なにやら人々が「赤い塊」をいくつも、王座に座る人物に差し出している。ただ、座っている者の額からは、禍々しい角が生えていた。

「なにが書いてあるんだ、光一？ 『心喰い』についてか？」

「う～ん、さすがにそのものずばりは書いてないんだけど『生贄を用いた儀式魔法』ってのにつ

いて、書かれてるね」

それはまさに、夢斗らが探し求めていた魔法についてだ。緊張したまま光一の言葉を待つ。

「ここには、こう書かれてある。まず、この世界に漂う『魔力』っていうのは自然と調和することで様々な現象を引き起こすんだけど、その力を使いすぎると、自然界そのものに影響をもたらしてしまうんだって。だから、昔から自然の魔法力を必要以上に吸い出すことは禁忌とされてきたらしい。ひどい時は、それ自体が罪にもなったんだとか」

「自然の力、か。魔法も自由に使い放題ってわけじゃないんだな」

「うん、まあ現実世界での環境破壊の問題に近いかもね。ただ、そうすると新たな魔法を生み出そうにも『魔力』の限界があって、うまくいかない。そこで、そういった制限が存在しない別の場所から『魔力』を得ようとしたんだってね。それが『魔神』と呼ばれる存在と契約を結ぶ、言わば『召喚の儀式』さ」

仰々しい単語の登場に息を飲む夢斗、リサ。思わず互いの顔を見合わせてしまう。

リサが恐る恐る問いかけた。

「な、なんですか、その『魔神』っていうのは。それが、ラスボスですか？」

「ラスボス、なのかは分かんないけどね。存在自体は不確かだけど、昔から魔法使い達が力を得るため、契約を結ぼうと躍起になっていた存在らしい」

苦笑し、答える光一。先程「馬が合いそう」と言われた理由をどこか理解した。

「魔力を生み出し、実体を持たない『神様』みたいなものらしい。魔法使いはその存在と交信し、契約を結ぶことで力を得ることができる、って信じられてるみたいだ。ただ、もちろん『魔神』だって簡単に力は貸してくれない。それ相応の対価が要求されるらしい」

「対価ってのはなんだ。金とか、食べ物ってところか？」

「まあ、神様だから買い物はしないね。でも、食べ物ってのは近いかもしれない。ただ————もっとおぞましいものだけだ」

なぜか光一はどこか言い辛そうだ。少し言葉を躊躇し、それでも事実を告げる。

「『魔神』にとってもっとも糧となるのは、自身の力を潤してくれる生命の力さ。生きた存在を捧げられることで、その者が生まれ持つ『マナ』を喰らい、自身の力に変える」

息を飲む二人。リサが少し声を荒げた。

「それが...生贄ってことですか？」

「ああ。しかも、これ.....場合によっては人の肉体ではなく、もっとも生命力、活力が宿る物——思考をつかさどる『脳』や、命の源である『心臓』を捧げることもあったみたい」

ぎょっとし、言葉を失う。思わず周囲の目を気にしてしまい、小声になる。

「おい、それって——」

「うん。この本、ビンゴかもしれないよ。特に『心臓』は命の象徴だ。そこから得られる力も、供物としての価値も高かったらしい。大昔では『魔神』を呼び出すために用いただけじゃなくて、狂氣的な魔道士が他人の魔力を奪うために殺人を繰り返した、って話もあるよ。人体実験の類だね、これは」

なんだか、おぞましい話に身震いしてしまう。魔法の力を得るためだけに、そんな凶行が過去から実際に存在していた、というのだろうか。他者の命を奪ってまで、人は「力」を望むものなのか。

「じゃあ...今回の件も、その『魔神』だのを呼び出すために、誰かが殺人を続けている、ってことなのか？」

「可能性は大きいんじゃないかなあ。まだなんとも言えないけども...」

本の中身を覗き込んでいたリサも、不安げに挿絵を見ていた。

「この人が、その魔導師さんですかね.....確かに、すごい怖い顔してます」

挿絵には、ローブを被った鉤鼻の男が描かれている。その両の手には、人間から引きずり出したであろう心臓が二つ握られていた。鮮血が腕を伝い、顔を濡らしている。

「どれどれ.....20年前に実在したヴァドス＝アーズレンって言うらしいね。非道を極めたような男で、実の息子の体にすら魔法実験を施したり、めちゃくちゃやっただらしいよ。その非人道的な行いのせいで、連合を組んで処刑されたんだとか」

思わずリサが顔をしかめる。

「ひどい...自分の息子さんを使ってまで...」

「まあ、この人は処刑されたって書かれてる。しかも捕らえたのはルガリア王国の兵団らしいね。処刑後は、その首が10日ほど晒されたらしい」

おぞましい内容だが、これはこの世界で起こった現実なのだ。過去にも他人の命を糧に、力を得ようとした狂人がいたというのだから、改めて身の毛がよだつ。

夢斗は腕を組み、少し視線を落として考える。

「そう考えると『心喰い』ってやつも、そういうイカれた魔導師なんだろうか。力を得るためにルガリアの兵士を殺して、その心臓を取っている、ってことか」

「可能性は捨てきれなくなってきたね。ただ、いまいち分からないのは、なんでわざわざ、ルガリアの兵士に限定しているのか、ってことだよ。そもそも生贄なら誰だって良さそうなものじゃないか――ああ、ごめん、不謹慎かもだけど」

ルガリアの兵士以外ならば良い、というわけではない。だが仮に「生贄」を欲している者の犯行だとすれば、あえて兵士達をターゲットにする理由が分からない。

「こういうのって、考えられるのは王国に対する恨みとかか？ でもそうなる...」

思わず、夢斗は言葉を濁してしまった。

王国に恨みを持つ――そう考えた時、真っ先に思い浮かんでしまうのは獣人達だ。しかし、一瞬考えるとそれも妙な気もした。そもそも、王国と獣人の対立には「心喰い」という存在が先行しているはず。ならばこの対立が生まれる前に、王国に恨みを抱いていた人物がいるはずだ。

考えれば考えるほど、思考の迷路に入り込んでしまう。だがこの迷宮を踏破しなければ、その奥にある秘宝――真実は見えない。

更にページをめくると、そこには一人の老人の似顔絵が記されていた。王冠と法衣を身につけた優しそうな男性である。思わず、リサが声を上げた。

「誰ですか、このおじいちゃん？」

「どうやら、これが現在のルガリア国王らしいね。エイムダルっていう名前らしい。現在に至るまで、この王国を収め続けている偉い人だよ。魔法に関する乱用や生贄儀式の取り締まりを強化したのは、彼が最初らしい。王族でありながら、若い頃は魔導士として各地で戦火鎮圧のため、前線にも出てたんだって」

思わず夢斗達は「へえ」と声を上げてしまう。

描かれた国王の表情は穏やかだ。少し垂れ下がった目でこちらを見つめ、微笑んでいる。蓄えた白い髭が特徴的だ。

「こんな爺さんが、戦争を起こそうとしてるっていうのか。なんだか分かんねえもんだな」

「ほんとですねえ。見た目は普通に、囲碁とかゲートボールとかしてそうなのに。特徴も髭と、この目の横のほくろくらいしかないですよ」

リサに言われて夢斗らも気付いたが、確かに特徴的なほくろがある。左目の横に、三角形を描くように三つのほくろがあった。特徴のない老人、と言えればそれまでだが、やはりどこか威厳を感じるの「国王」としてのその姿がゆえだろうか。

実際、かなりの情報を得ることはできたのだが、再び手詰まりな感は否めない。耐えかねた光一が本を閉じ、口を開く。

「もしかしたら『恨み』や『復習』って線を当たっていった方がいいのかもね。もしかしたら、犯人はこの王国内部にいるかもしれないし」

「ってなると、この国の全員が犯人候補なのか...と、途方も無いな」

資料室に入った瞬間のあの感情が蘇る。調べるにしても、人の数はレジスタンスの比では無い。

だが辟易しかける二人に対し、やはりいち早く決起したのは彼女だ。

「でも新しい可能性が見えてきたんですから、収穫ありですよ。そうと分かれば、あとは足で探すしかないですね！」

勢い良く立ち上がるリサ。目を丸くしたまま、夢斗は問いかけてしまう。

「あ、足で探すって、どういう...」

「決まってるじゃないですか。聞き込みですよ聞き込み」

返答を聞いても「ええ？」と驚いてしまうばかりだ。光一が「まじ？」と呟いてしまう。

「それって、王国の人に実際に聞いて回るってこと？」

「そうですよ。兵士の人にはさすがに無理ですけど、お店の人だとか、ここで暮らしてる人だとか。もしかしたら、手がかりが見つかるかもしれせんよ」

敵国の内部で、実際に聞き込みを行い情報を得る。まさにスパイのそれだ。

一瞬、途方も無い事に思え、息を飲んでしまう。だが考えれば考えるほど、そういう行動こそがもっとも手早く、率直に真実に近づく手段にも思える。

夢斗、光一も立ち上がった。

「確かに、な...よし。とにかく、いろんな奴に聞いてみよう。こうなりゃ、あとは数がものを言うんだろうな」

「王国は広いからねえ。まあ、観光がてらに歩き回ってみるのもいいかもね」

決意を固め、互いにうなずく三人。

そうと決まれば、こうしてはいられない。大きな本を担ぎ上げ、三人は足早にその場を後にした。

三人は魔導機関の建物を出て、まっすぐ大通りに戻る。人の数はどこか、少しだけ増えているようにも思えた。

物怖じしていても始まらない。とにかく、三人は売り物や店を見ているていで近付き、できるだけ情報を得ようと探る。

王国には多種多様な店が軒を連ね、扉をくぐるたびに別の世界が広がっていた。光一が冗談交じりに「観光がてら」とは言っていたが、いつしか素直に興味をそそられ、目の前に広がる不思議な光景を眺めている三人がいたのだ。

壁一面に時計が掛けられた店。その場で薬草を調合し、オリジナルの薬を売ってくれる店。古今東西の魔法菓子が瓶に詰められ、4本腕の店主が量り売りしてくれる店。スライムやグリフォン、火龍の雛をペットとして扱っている店。

気を抜くと、ここが敵地であることを忘れてしまいそうだ。まるで修学旅行にでも来たようなノリである。

1時間ほど経ち、ひとまずは噴水広場のベンチに腰掛け、休憩する一同。あれやこれやと貴重な体験はできたが、それでも実質、収穫はない。

ぐったりと背もたれに体を預け、夢斗は弱音を吐いてしまう。

「ダ～メだな、こりゃあ。ここまでやっても、手がかりゼロか」

「予測はしていたけど、難しいもんだねえ」

光一も頬杖をつき、遠くの噴水を眺めていた。

あれだけ勢いのあったリサも「う～」とうなっている。

「なかには『心喰い』事件なんて、知らないって人もいましたねえ。そんなに情報は出回ってないんじゃないか」

「国民の不安を煽らないために、極秘にしてるのかもなあ。まあ、近くに心臓を抜き取る殺人犯がいる、って思ったら気が気じゃないのかも」

あくまで、王国の人々は変わらない日常を過ごしているのだろう。こちらの世界にはテレビもないだろうから、そういう事件が明るみになることは、思いの外少ないのかもしれない。

また一つ、夢斗はため息をついてしまう。

「しかし、どうすっかな。まだ調べてない場所はあるけど、果たして情報が出てくるだろうか...」

王国はまだまだ広い。だがどうしても、ここまでの反応を見ていると弱気になってしまう自分がいる。

意気消沈しかけてしまう二人を、それでもリサは励ます。

「頑張りましょう！ これだけ人がいるんだから、きっと何か知ってる人はいるはずですよ。国の人達が知らない情報を持つてる人も、いるかもしれません」

相変わらず、この少女は折れるということを知らない。その姿を見ていると、自然と心が前向

きになるから不思議だ。

揺らぐ決意を固め直す三人。だが、そんな夢斗らの足を背後からの声が止める。

「そんな無駄足は必要ない。お前達が向かうのは城下町ではなく、独房だ」

照りつける太陽をかき消すほどの冷たい感覚。

固まったはずの意思が、鋭い一撃に大きく揺れた。

三人は振り返らずとも、過去の記憶と本能から背後に立つ者の正体を察する。

鋭く、どこまでも冷徹な刃――再び出会ってしまった「彼女」に、一斉に振り返った。

太陽の光が深緑の長髪を滑り、揺れる。尖った長い耳、美しいまつげと金色の瞳。どれも三人の記憶の中のそれと、まるで変わっていない。光を受けてたたく姿は、何もしていないのに、ただただ美しい。

王国歩兵部隊、副隊長。エルフの女剣士・ルーメルがそこにはいた。彼女だけではない。その背後には鎧を身にまとった兵士が五人ほど、連れられている。

立ち上がり、事態に気付く夢斗達。

いつの間にか取り囲むように、兵士があちこちから近寄ってきていた。会話をしている間に、包囲網が完成していたらしい。総数はおおよそ20。退路は絶たれてしまった。

夢斗は歯噛みし、声を上げる。

「くそっ、見つかったのか...」

この一言にくすりと笑うルーメル。思わず三人は彼女を睨み付けた。

「奇妙な格好の三人組が、あれやこれやと聞きまわっているとのことだったのでな。変装も何もせずに敵地を練り歩くとはい、勇猛を通り越して、無謀だぞ」

明らかな嘲笑をぶつけられ、怒りを抱いてしまう。しかし、ルーメルは三人の心境などお構いなしに、質問を続けた。

「貴様ら、何を嗅ぎ回っている？ この王国で何をやるつもりだ？」

夢斗達は黙っている。どう切り替えすべきかを考えるのもそうだが、なにより、この状況を突破する方法を模索していた。周囲を取り囲むこの兵士達を、どうやって退けるか。

そんな中、それでもルーメルに彼女が真っ向から立ち向かう。

「悪巧みなんてしてないです。『心喰い』について知っている人がいないか、聞いてまわっていました」

リサの一言に、ルーメルは「ほお」と少し驚いたようだ。だが、余裕な表情は揺らがない。

「『心喰い』——貴様らがそれを知って何になる？ あんなもの、どうせ狂った獣の所業に決まっている。王国を良く思わない蛮族の、凶行だろう」

やはり彼女は「心喰い」事件の犯人を、獣人の仕業だと決めつけているようだ。圧倒的な偏見がその言葉からは伝わってくる。

「前々から、王国と森に住む蛮族との間で、問題は多々起こっていたからな。それもこれも、獣人が古くからの風習などに捕らわれ、王国の意向を理解できないことに他ならない。大方、それに不満を持った獣共が、当てつけとしてやったのだろうさ」

まるで、自分達の崇高な思想を理解できない者は全て敵だ、とでも言いたそうだ。高飛車な態度に、夢斗、光一はむかつ腹が立ってくる。

だがリサは違った。彼女はまっすぐ前を見て、ルーメルを正面に言い放つ。

「あなた達も何も知らないんですね」

思わず、ルーメルが「なに？」と返す。女剣士が纏う殺気が増しても、リサはまるで動じない

「だってさっきから『こうだろう』とか『ああだろう』って全部憶測じゃないですか。証拠もないのに決めつけて、ろくに調べもしないで言い張って。バカみたいです」

小さな体から放たれたあまりにも直球な一言に、夢斗らまでぎょっとしてしまふ。彼女だけでなく、周囲の兵士の出方も伺い、気が気ではない。

案の定、その一言が兵士達の反感を買ったようで、武器を握った男達はいきり立っている。それは、あの女剣士も同じであった。

「貴様、言葉を慎め。無知な蛮族が、調子に――」

「知らないのはあなた達も一緒でしょう？ それなのに、他人のことは馬鹿扱いするのは、大馬鹿のやることですよ」

ついに兵士達がざわつく。だが、リサはまるで引かない。夢斗らの方が、むしろ焦ってしまう。

だが夢斗と光一は、立ち向かうリサを見て気付く。

握りしめた拳が震えていた。

拳だけではない。小さな体が、微かだが震えているのだ。彼女は精一杯それを押し殺し、目を見開いて女剣士と対峙している。

怖くないはずなどないのだ。武器を持ち、自分達を殺すことすら躊躇しない集団を前に恐れなど、むしろ異常だ。

それでもなお、彼女は言いたかったのだろう。こんな状況を作り上げている一派に対し、訴えたかったのだろう。

ルーメルは不快感をあらわにし、吐き捨てるように言った。

「いきがるなよ、小娘。我らの大志のなにが分かる？ 貴様らのような――」

今にも剣を引き抜きそうなルーメル。真っ向からぶつかる圧力に、リサは退きそうになってしまう。

だが、ルーメルを迎え撃ったのは、リサではない。

「蛮族、だろ？ 分かりやすいな」

言葉を制され、目を見開くルーメル。彼女だけでなく、リサも含めた全員が振り向く。

ポケットに手を入れ、つまらなそうな表情を浮かべる夢斗。ポケットの中で拳を握りしめ、自身に湧き上がる恐怖に耐える。

怖気ている場合ではない。リサはこんなにも戦ってくれているのだ。もう何度も、彼女に救われたのだ。

これくらい、耐えてみせないでどうする――リサが心に宿した炎が、夢斗へと引火していた。

「あんたらさ、面倒臭いんだろ、考えるのが？ 俺らもあんたらも、まるで一緒だ。何も知らない。何も分かってない。なのに、あんたらは数だけ多いから、勢いに任せて振り切ろうしてるんだろ？」

「面倒だと……言葉を慎め！ 我らは大義の元に進軍する。我らの『正義』は絶対だ。それこそがルガリアの誇りだ！」

「だったら、納得させてみろよ。その大義とかいうやつ」

ルーメル、そして兵士達が気圧されている。リサは夢斗の顔を見上げたまま、驚いて口を開いていた。

まっすぐ、前を見て威嚇する夢斗。その姿はどこか恐ろしく、それでいて力強い。

虚勢がないわけではない。それでもなお夢斗の中には、ある感情が湧き上がっていたのも事実だ。

初めてではない——かつて夢斗が陸上選手として活躍していた際、周りの人々はあれやこれやと好き勝手なことを口にしていた。選手として活躍すべきだ、もっと大きな舞台がある、ここで終わっていいのか。そのどれもが、耳障りだけは良い「憶測」の塊だった。本人のことなどどうでも良い。無邪気な良心から生まれた、限りなく無責任な言葉の羅列。まるで「呪文」のように、それは当時の夢斗を苦しめていた。

だが、そんな夢斗にかつて「恩人」は告げた。生きることはレースとは少し違う。自分の走る道は自分で決めればいい、と。

いつもそうだった。行く先が分からなくなった時は、いつもこの言葉を心に呼び起こし、奮い立っていた。

目の前に群がる、彼らは同じなのだ。

あの時、目先の事実には捕らわれ、他人の生き方まで変えようとした無責任な連中に。

言葉なのか、刃なのか——武器が違うだけで、根本は何も変わっていない。

だからなのだろう。その過去を知っているからなのだろう。

ただ、ただ、無性に腹が立ってくる。

「説明してみせろ。理解できない、じゃねえ。やってみせろ。あんたらの持つてるその剣が『蛮族』の牙とは違うって証明しろよ」

誰も反論できない。と共に、ルーメルを含めた全員が驚いていた。

出会った瞬間は、ただの青年だったはずだ。レジスタンスに加担する謎の人間。まだ成人もしていない、どこかあどけなさの残るガキだったはずだ。

なぜここまで、強いのだ。晒された武力の束に揺らぐ、狼狽することもなく言い返していく彼の姿に、大の大人が揃いも揃って何もできない。

「俺らは戦争なんか興味はない。そんなくだらないこと、どうでもいい。どっちか上か下かも、野蛮かどうか、高貴かどうか。俺らは本当のことが知りたいだけだ。だからここに来た」

息を荒げ、一歩前に入る夢斗。ついに兵士の数人が、後ずさってしまう。

「理由も分からないで、決めつけて。数にもの言わせて、侮辱して。気に入らなけりゃあ、その剣で叩き斬る。『蛮族』はどっちだ？ 答えろ！」

少年の心が吠えさせた、理不尽に対する憤り。その咆哮は兵士達に戸惑いを、そしてリサと光一の心に希望をもたらす。

光一もついに顔を隠していたバンダナを脱ぎ捨て、前を向く。

「夢斗君、相変わらず怒ると怖いねえ。まっ、今回ばかりは僕も大賛成だけどね」

リサも前を向きなおす。小さな体に、あらん限りの怒気をまとって。

「『正義』とか『大義』とか、聞こえは良いけど、ペラッペラのうっすうすです。ただの歪んだ

プライドの塊じゃないですか、そんなの！」

三人の向き先が一致する。囲まれた暴力に屈さず、前を向き、力強い眼差しを叩きつける。もはや凶暴なまでに研ぎ澄まされた感覚が、兵士達を寄せ付けない。

狼狽する歩兵団。だが、やはり真っ先に剣を引き抜いたのは、エルフの女剣士だった。彼女もまたあらん限りの怒気を孕み、こちらを睨みつけている。

「なるほど、な。理解したぞ。貴様らはどこまでも、我々が気に入らないらしいな」

その鞘走りの音に我に帰り、兵士達も一斉に武器を引き抜く。そこら中から響き渡る武装の音に、三人の体が強張った。

剣を構えるルーメルの背後に、ゆらりと燃えたぎる闘志が見えたように錯覚してしまう。

「我々が準ずる『正義』が偽りか否か。それすら分からぬ無知こそが最大の罪だ。反逆こそ敵であり、排除すべき悪！」

一斉にその矛先がこちらに向く。三人は身構え、戦闘態勢をとった。

背中合わせになり、四方八方の敵を警戒する。じりじりと近寄ってくる兵士達を睨みつけながらも、小声で相談した。

「ああ、もう。結局こうなるのかよ。とことん強情だな、あの女」

「本当、嫌になります。黙ってれば綺麗なのに、喋るとポンコツじゃないですか」

リサの毒舌も冴え渡るが、あいにくこの状況はかなりまずい。弓矢の照準を合わせながら、光一も返す。

「かなりスッキリした啖呵だったけど、言葉じゃあどうにもならなそうだね。とにかく、今はここから離脱しないとさ」

とはいえ、多勢に無勢も甚だしい。これだけの人数をどうやって切り抜けるべきか。

夢斗は腰を落とし、構えたまま考える。

混乱に飲み込まれたら終わりだ。窮地に立った時、考えなければ人はそのまま飲み込まれてしまい、ダメになる。

必死に視線を走らせた。兵士達の殺気立った眼差し。広場の騒ぎを聞きつけ、やってきた野次馬。そんな喧騒はおかまいなしに、マイペースで吹き上がる噴水。

思考を巡らせ、そしてある結論に行き着く。

「なあ、一点突破できると思うか」

「冗談でしょ？ いくら三人の力を合わせても、この人数だよ。重装備の兵士もいるし、戦力差がありすぎる。真正面からは無理だよ」

言われてみれば、確かに兵士の中には大盾と斧を携えた重装兵まで混じっている。どうやら、何が何でも三人を捕らえたいらしい。

リサも汗を浮かべながら呟く。

「アジトの時も、ニンバムさんとマウマウさんが攪乱してくれたから、どうにかかなりましたしね。せめて隙ができれば……」

その言葉に、夢斗は少しだけ自身の考えに確信を持つ。

「攪乱……かき乱せりゃいいんだよな」

夢斗の一言に思わず振り向く二人。もう、あまり猶予は残されていない。

「光一、頼みがあるんだ」

首をかしげる光一に、手早く説明する夢斗。二人は警戒しつつも、その提案に驚きの声を上げた。

「うええ、マジ？ そんな、うまくいく？」

「分かんねえよ。だけど、もしかしたらチャンスはあるかもしれねえ」

必死に夢斗は考えていた。今まで見てきたもの、今ここにあるものを全てかき集め、何ができるのか、を。

これに対し、リサは大きく頷いた。

「やってみる価値、あると思います。光一さんが良ければ、ですが」

リサもどこか申し訳なさに、光一を見た。彼女の視線を受け、少年は困ったように眉をしかめる。

だが近寄ってくる兵士達を見て、猶予がないことを悟った。

「分かった、分かったよ。それでいこう。大役だなあ、これは…」

観念したのか、彼は小さくため息をついた。

三人の会話内容に構わず、ついにルーメルが吠える。

「抵抗するならば斬る。手足を失おうとも、連行させてもらうぞ！」

兵士達が剣に力を込め、前に出る。だが、それよりも早く動いたのは夢斗だ。

「いやなこった！」

瞬間、夢斗が身につけた「オーバーテクノロジー」が稼働する。変形し、戦闘形態を取ったそれは凄まじい速度で動き、誰よりも早く蹴りを放った。

だが、蹴り飛ばしたのは兵士ではない。

すぐ横で覚悟を決め、歯を食いしばっている光一だ。

蹴りは光一の尻を捉え、乾いた音と共に小さな体を宙に吹き飛ばす。予想外の事態に、ルーメル達はその軌跡を目で追った。

「い———ったああああい！！」

叫ぶ光一。小さな体は見事な放物線を描いた後、兵士達の頭上を飛び越え、彼方の噴水の中へと水しぶきを上げて落ちた。

まさかの行動に、一瞬、誰もが動きを止めてしまった。しかしルーメルはいち早く我に帰り、前を向きなおす。

「うろたえるな！ 数名であの獣人を仕留めに行け！ このまま離脱する気だ！」

いち早く思惑を察し、指示を下す。光一だけを無理矢理にこの場から逃し、救援を呼んでくると睨んだのだ。

すぐさま兵士が数名、噴水に向かって駆け出す。残った包囲網が夢斗らに向き直り、距離を詰めてきた。

ルーメルは剣を構えたまま、吠えた。

「浅はかだぞ、小僧！ 王国から、そうたやすく逃げ出せるとするな！」

身構える夢斗、リサ。先陣を切る兵士達の刃が、二人目掛けて放たれようとした。

だが、兵士達は聞こえてきた悲鳴に足を止めてしまう。

「————何？」

ルーメルまで、その不可解な光景に絶句した。誰もが振り向き、奇妙な状況を凝視する。

噴水へと駆けて行った2名の兵士が、仰向けに倒れている。なぜか彼らは水浸しで、鎧の胴体部分がへこんでいた。

何が起こったのか、誰も理解できない。だが夢斗とリサだけが、その光景に微笑を浮かべていた。

ついに夢斗が吠える。

彼方にいる、彼に向かって。

「思いっきりやっちまえ、光一！！」

瞬間、噴水の水が向きを変える。天に向かって伸びるのではなく、まるで「矢」のように真横に発射され、襲い掛かった。包囲網を作っていた数名の兵士に炸裂し、鈍い音を立てて吹き飛ばす。

「あれは————まさか！」

ルーメルが飛来した「水の矢」を剣で弾き落とす。こうしている間にも、次から次へと飛来する水に打ち倒され、次々と兵士は減っていく。

噴水が静まり、水の中から光一が姿を現した。びしょびしょで、片手は尻を抑えている。

「いったあ…夢斗君、思いっきり蹴りすぎだよ。痔になったらどうすんのさ！」

悪態をつく光一。兵士達はすぐさま夢斗らに向き直るも、彼らの胴体に叩き込まれたのは蹴り、そして魔法で作り上げた「ハンマー」であった。

兵士を二人薙ぎ倒し、包囲網を突破する夢斗とリサ。追いかけてくる兵士数名を、光一が「水の矢」を叩き込み、黙らせた。

「悪りい悪りい、でもうまくいったら？」

「あ～、これ、腫れてきたんじゃないかなあ…腰が折れたかと思ったよ、本当」

痛そうに臀部をさする光一。確かに、どこことなく腫れているようにも見える。力加減が分からず、思い切り蹴ってしまったのは失敗だったか。

光一が言っていた。「水」を媒体として魔法を使うことができる、と。だからこそ、夢斗はそこに賭けた。噴水の芳醇な「水」を使うことで、この場をしのぐ策を。

ルーメルは歯噛みし、吠える。

「小賢しい真似を…怯むな、捕らえろ！！」

兵士達は奮いたち、一斉に向かってきた。だが光一はさらに力を集中させ、水を操る。彼の眼が水色に輝きだした。

「今日の天気は曇りのち晴れ。午後から——矢が降るかもね！！」

吠えるように両手を叩きつけると、間欠泉のように水が吹き上がる。そしてそれは宙で散らず、硬さと重さを持ったまま矢の雨となって兵士達に降り注いだ。水とは思えない鈍い音が機関銃のように響き渡り、兵士を次々に打ち倒していく。

たった一人、飛来する水弾を見切ってルーメルだけが距離を詰めてくる。

「なめるなよ、ガキ共。小細工など、我が剣には通じん！」

凄まじい速さで踏み込み、剣を振りかざすルーメル。水滴を切り裂き、圧倒的な速度で刃は目の前にいる夢斗に迫った。

しかし夢斗は逃げない。意を決し、その感情を「オーバーテクノロジー」が受け止め、答える。

高速でしゃがみ込み、ルーメルの前足を蹴り飛ばした。女剣士の体がバランスを崩し、縦にぐるりと回る。

「ッ！？」

高速回転する中で、それでも女剣士の卓越した動体視力が、何が起きているかを捉える。今度は夢斗ではなく、リサが飛び上がり、腕を振りかぶって魔法を発動していた。

空中にできたのは巨大な「斧」だ。すでに振りかぶられたそれが、リサの気合いに呼応する。

「飛んでけえええええええええ！！」

吠えるリサ。腕を振り抜いた瞬間、まっすぐ真横に、ルーメル目掛けて刃が叩き込まれる。

一瞬早く、ルーメルは剣を挟み込んでガードを固めた。だが斧の巨大さ、そして何よりリサの「感情の爆発」により、魔法の推進力が上回る。リサはそのまま、お構いなしに腕を振り抜いた。

まるでバットとボールだ。鎧を着たルーメルが轟音と共に弾き飛ばされ、広場の宙を舞う。遠くで見ていた野次馬達から、歓声と悲鳴が混じった声上がる。

天地上下を見失い、呼吸ができないまま女剣士は民家の屋根へと落下し、煉瓦を砕き割った。着地し、構えを作るリサ。

その豪快すぎる一撃に、夢斗、光一は度肝を抜かれてしまう。

「な……ナイス、リサ…」

辛うじて投げかけた賞賛に、振り返って力強く彼女は笑う。

「成敗完了です！ あ～、スッキリしました」

安心したのか、空中の斧も光となって散ってしまう。

残った数名の兵士は武器こそ構えていたが、攻めあぐねている。

無理もないだろう。彼らにとってルーメルという女剣士は、闘争心の支えでもあったのだ。凄まじい剣術により、文字通り道を切り開く、信頼すべき副長だったのである。

そのルーメルが、ついに押し負けた――広場はそこら中が水浸しになり、気絶した兵士達が転がっている。つい先程まで三人のガキと舐めていた彼らにとって、これはあまりにも予想外の事態だった。

そんな中、ようやく一人が懐から何やら長細い水晶のようなものを取り出し、耳に当てる。彼はその石に向かって、語りかけた。

「ふ、噴水広場でレジスタンスと交戦！ 応援を要請する。至急応援を！」

事態にいち早く気付いたのは、光一だった。

「やっべ、応援が来るよ。急がないと！」

ダメ押し、と言わんばかりに光一は力を発動し、残った兵士達を「水の矢」で吹き飛ばした。彼は勝利の余韻などどこ吹く風で、踵を返し、駆け出す。夢斗、リサもそれに続いた。

広場から路地へと入り、右へ、左へと走る。先頭に行く光一に、息を切らしながらも問いかけた。

「お、おい、どこ行くんだよ！」

「行き先は決めてないよ。ただ、さっきのは『通信機』みたいなものさ。応援を聞きつけた兵士が、わんさか集まってくるよ」

そういうことか、と納得してしまう。いわば、あれがこちらでいう携帯電話みたいなものなのだろう。

こうなれば、王国中に夢斗らの侵入がばれてしまったと言っても、過言ではない。今頃、血眼になって侵入者を探しているのだろう。

路地を曲がろうとして、思わず立ち止まる。樽の影に身を隠すと、すぐ目の前を兵士達が駆け抜けていった。

「あぶねえ、焦ったぜ…」

むやみに逃げ回っていてもしかたがない。三人は息を潜め、次の一手を考える。

光一は水浸しの服をぬぐいながら、周囲を警戒していた。

「派手にやりすぎちゃったかなあ。逃げだせたのはとりあえず結果オーライなんだけど、状況は悪くなっちゃってるよ」

遠くから、兵士のものと思われる声が聞こえる。どうやら、大規模な「搜索」が始まってしまったらしい。

リサは後方を警戒している。

「このままじゃあ、見つかるのも時間の問題ですよ…どこかに身を隠さない」と

「身を隠す、って言っても、どこに行くんだ？ そこら中、兵士だらけだぞ」

分かってはいたが、やはりここは「敵地」のど真ん中。一度こうなってしまうと、逃げ切ることは難しいのかもしれない。こうして一時的に隠れてはいるが、いずれここにも兵士達はやってくるだろう。

顔を上げると家々の隙間に、あの城壁が見える。なんとかあの外まで到達すれば、脱出することが可能なのだが。

意を決し、夢斗は提案する。

「こうなったら城門を突っ切って、とにかく脱出するしかないのか…」

「いやあ、どうだろうね。今となっては外に僕らを逃さないために、門自体が封鎖されてるかもしれないよ。もしたどり着いて開いてなかったら、袋の鼠だ」

「マジか…なら、他に手立ては—」

あれこれと考えを巡らす三人。しかし背後からの声に、慌てて振り返る。

「おう、お前ら。なにしとるんや、こんなところで」

そこには、いつの間にかワニ男の行商・キリウがいた。兵士かと思い、鼓動が高鳴りっぱなしだ。

「び———っくりしたあ、脅かさないでよ！」

「なんや、こそこそして。こないな倉庫の裏で、どないしたっちゅうねん」

焦る光一を見て、首をかしげるキリウ。言われて夢斗も気付いたのだが、そこは一同が馬車に隠れて、最初にたどり着いたあの倉庫である。見覚えのある荷馬車がそこにはあった。

とっさに思いつき、夢斗はキリウに言う。

「な、なあ、頼む。また荷物の中に隠れさせてくれよ！」

「ああ？ なんでまた——あ、お前ら…まさか、見つかったんか？」

キリウの表情が急に曇る。なんだか嫌な予感がした。

「かぁー、アホやなあ。どうりで兵士が騒いどると思ったら、お前らやったんか」

「なあ、頼むよ。騒ぎが収まるまででいいからさ！」

「んなこと言うても、それかて見つかるのは時間の問題や。こうなったら連中、草の根分けてでもお前らを探すやろ。袋の鼠やで」

キリウは「面倒なことになった」と後ろ頭をガリガリかきながら、荷馬車の方へと歩いて行ってしまふ。夢斗らは樽の影から、彼を見ていた。

「悪いけど、これ以上は付き合いきれんわ。なんとか、うまいこと逃げ切ってくれ」

「そんな！ だって帰りは、送ってくれるって……」

「何事もなけりゃ、そりゃそれぐらいのことはしてやったけどなあ。王国に顔が割れたとなれば、ワイも協力するわけにはいかへん。関係者やと知られば、ワイも共犯や。しかも今度こそ、嚴重になった検問で確実に見つかるやろしな」

非情なようだが、これも商売人がゆえの判断なのだろう。これ以上、情に任せて夢斗らに加担するのは、リスクが大きすぎると判断したのだ。

思わず物陰からリサが飛び出し、駆け寄った。夢斗らも周囲を警戒しつつ、馬車の影へと移動する。

「そ、そんなのひどいです！ お願いします、この通りです！」

キリウは彼女の訴えなどどこ吹く風で、荷物をまとめている。おそらく、売り上げを持ち帰る準備をしているのだろう。

「いくら頼み込まれても、あかんもんはあかん。ほら、離れろや。一緒におられると、見つかったときに面倒やろ」

「私達が捕まったら、どっちにせよ、あなたのことだってばれますよ!？」

「おお、脅しにかかるんか、おチビちゃん。ええで、ワイはどうとでも言える。お前らに脅されてやった、とも。そもそも証拠もないんやから、関係ないとも言い張れるしな。まっ、お前さんが捕まってる間に、次の土地にとんずらすれば終いやしな」

まるでこうなることも想定していたかのような、用意周到さだ。どれだけこちらが凄んでも、まるで彼の余裕は揺らがない。おそらく、それだけ各地で商売人として「黒い」場面にも遭遇してきたのだろう。

おチビちゃん、と言われたリサが怒りから反論しそうになるが、彼を納得させるだけの言葉を持ち合わせていない。歯噛みし、唸り声を上げることしかできない。

光一は周囲を警戒しながら、言い放つ。

「ダメだ、こんなところで時間食ってられないよ。どこかに移動しなきゃ」

「おー、それがええな。はよせんと、手遅れになるで」

とことん無関係を決め込むキリウに、夢斗、光一もムツとしてしまう。

だが実際、すぐに行くべき場所は見当たらない。どこにどれだけの兵士がいるかも分からない以上、逃げるべきか、隠れるべきかも定かではない。今となってはこの城壁に囲まれた町が、三人にとって広大な「檻」のようである。

駄目押しとばかりに、ケラケラ笑いながらキリウは三人に言った。

「結局、世の中はギブアンドテイク。おたくらのくれた『オーバーテクノロジー』じゃあ、護衛の料金まではまかなえんからなあ。必要とあれば、払うもん払えばええだけやで」

つくづく、根っからの商売人である。

だが、もはや彼に苛立っていてもしょうがない。夢斗、光一はその場を立ち去ろうと、振り返った。

しかしただ唯一、リサだけはじっとキリウの顔を睨み付けていた。それは、諦めがつかない——というわけではない。なにやら、この小さな体で彼女なりに「策」を考えているようだ。

夢斗、光一は焦りつつも、立ち止まったりリサに声をかける。

「リサ、ほら行こう。もう、なに言ったって無駄さ」

「そうだよ。僕達、そんなお金があるわけでもないんだからさ。どこか、隠れる場所探そうよ」

だが、その呼びかけに彼女は答えない。

代わりに彼女は思いついたように目を見開き、キリウに言う。

「追加料金、払えばいいんですか？」

「そうやで。なんや、おチビちゃん。金目のもん、持っとるんか？ それとも、お嬢ちゃんが体で払うってか？」

ケラケラと下品な笑い声をあげるキリウ。しかしリサはむすっとした表情のまま、自身が抱えていたリュックを下ろした。開くと、そこには彼女が詰め込んできた、大量の「お菓子」が顔をのぞかせる。非常食にと現実世界で買ってきたものだ。夢斗にも覚えがある。

そのうちの一つ、ビニールに包まれたチョコバーを荒々しく掴み、まるで剣のようにキリウに向けた。キリウだけでなく、夢斗と光一も目を見開く。

「ああ、なんやこれ？」

ワニ男はそれを受け取り、眺めていた。表面には英語で商品名が書かれているが、彼では読めないらしい。

「それ、あげます。食べてみてください」

「食べるって、お前——」

「早く、ハリア——ッ！！」

小さな体が、これでもかと吠える。キリウは渋々、その包み紙を開け、中の茶色いチョコの塊を取り出した。

「なんやこれ、泥の塊——」

「いちいち良いから、食べてください！」

なおも凄むりサ。ここまで彼女が怒っているのを、初めて見た。夢斗と光一はなぜだか自然と背筋を伸ばし、そのやりとりを見守る。

キリウは少し匂ったのち、そのアーモンドチョコレートを口に放り込んだ。少し舌で転がすと、溶けたチョコレートが一気に広がり、凄まじい甘さを身体中に行き渡らす。

「おっほ、なんやこれ。うんま！」

予想外の味にワニ男の顔がほころぶ。彼は指についていた欠片も長い舌で舐めとった。

なぜ、こんな時にチョコ菓子など——そう思っていた夢斗らの疑問が、リサの一言で解消する。

「それ、私達の世界で作られた食べ物です。これ、とりあえずここにある分、全部あげます」

ぴくりと反応するキリウ。もごもごとチョコを舐めながらも、少しだけ瞳が厳しく、鋭くなる。

「ほお、取引かいな。でもおチビちゃん、舐めたらあかんで。こないな菓子の一つや二つで命を守れなんぞ、等価になってへん。不釣り合いや」

それは奇しくも、夢斗らも思っていた。交換できる品として、あまりにもインパクトがなさすぎる。キリウという商売人を納得させるには至らない。

だがその不安が、またもリサの一言で吹き飛んだ。

「ええ、確かにこれは安いお菓子です。私達の世界なら、いくらでも買えます。でも、『私達の世界にしか』売ってません」

キリウが真剣な表情になる。夢斗らも彼女の思惑に気付いた。

「取引しましょう。私達を守って助けてくれたら、これからこっちの世界に来るたびに、これ、あなたにあげますよ。こっちの人には珍しいんじゃないですか？ なにせ『別世界でしか売ってない』お菓子なんて」

凄い手を思いつくものだ——夢斗と光一は互いの顔を見合らし、苦笑いする。

チョコレート1個、お菓子1個の価値などたかが知れている。しかし、本質は商品としての価値ではない。その商品の「背景」が持つ価値だ。

このクレイドルでは作られていない、異界の菓子——その話題性で、リサは取引を持ちかけている。

キリウが顎に手を当てながら包み紙を眺め、考えている。あの目は、商売の算段を練っている目だ。

「これ、作り方分かるんか？ こっちの世界で量産することは？」

「基本的な作り方なら、知ってますよ。材料とかさえあれば、ですけどね」

「ほお...なら、いずれ大量に作ることもできるわなあ」

さすが商売人、といったところだろう。異世界から仕入れたという名目で売りさばき、その熱が冷めてきた頃には大量生産することで、普通に美味しい菓子として売りさばく。一粒も二粒も美味しいというわけだ。

さらに一押し、あまりにも強気のリサが斬りこむ。

「どうですか。なんなら、レジスタンスのアジトにはもっといっぱいありますよ。どうしますか？」

大きな体のワニ男と、小さなハーフの女子高生が真っ向から対峙する。

ピリピリと張り詰めた空気に、夢斗らも気が気ではない。

やがて、ついにキリウが決断を下す。

「ま、お前らを守ってやるのは、見つかった時の話やからな。とりあえず隠れて外にでる道を探す。そうと決まれば迅速に行動や」

イエス、ノーの返答ではなかったが、とりあえずは承諾してくれたらしい。

勝った一一と言わんばかりに、リサは「ふんっ」と鼻息を荒く吐き出した。

思わず夢斗と光一も駆け寄る。

「ほ、本当か？ 助けてくれるのか？」

「落ち着けや、あくまで見つかった時の話や。このままむやみに動き回っても、勝ち目はあらへん。とりあえず身を隠して、やり過ごすんや」

キリウはひとまず荷馬車の荷台を開ける。入国した時に比べて、随分と品は売り払われてしまっていた。

「そうやなあ、とりあえずここに入って、馬車ごと移動するか...いや、でもそれやと目立ちすぎるか。どっかこの辺だとええところは一一」

真剣に考えているキリウ。

一悶着はあったが、夢斗ら三人はどうにかかなりそうな雰囲気、ホッと胸をなでおろす。

だがそんな安息は、長くは続かなかった。

「おい、いたぞ、あそこだ！！」

慌てて振り返る一同。そこには、6人の兵士がこちらを睨みつけていた。

全員の背筋に緊張が走る。キリウは「ああ〜」とがっかりし、うなだれた。

「もお、せやからとっとと行動せえって言うたのに。台無しやで」

これではもはや、隠れるもクソもない。夢斗らは身構え、兵士らと再び対峙する。

「そこの獣人も仲間だな！ 大人しくしろ、抵抗するならば斬る！」

「ああ、いや。ワイはただの行商一一」

だが言い訳しようとしたキリウを、リサの言葉が先制する。

「はい、そうです！ この人に協力してもらって、入国しました！！」

事もあろうに侵入経路を暴露するリサ。夢斗、光一以上に、キリウが驚愕し声を上げる。

「おまっ、何言うねん、コラァ！」

「ほら、早く守ってください！ 契約したんでしょ！？」

何とも強引に押し切ってしまった。こればかりはキリウも頭を抱え、苦い顔をしている。

ドタバタと騒ぐ一同を見て、兵士達は声を上げた。

「ええい、さっきからごちゃごちゃと...構わん、やれ！ すでに大勢の同胞が手に掛けられている！ 躊躇するな！」

しびれを切らした兵士達が突っ込んでくる。数は向こうの方が多い。夢斗らは身構え、まずは先頭の一人に照準を合わせる。

夢斗の蹴り、リサの武器魔法、光一の弓矢――そのどれとも違う一撃が、先頭の兵士に叩き込まれる。

「ああ、クツッ、最悪やで今日は！」

最初に動いたのは、ワニ男だった。キリウは背負っていた大きな斧を手に取り、真横に振り抜く。兵士の左肩に炸裂し「ごがん」という音と共に薙ぎ倒した。

予想外の一撃に驚く兵士達、そして夢斗達。キリウは斧を担ぎ、一步前が出る。

「しゃあないな、これでもうこことも取引できへんが――まあ、その分、元は取らせてもらうでえ、おチビちゃん！」

さらに向かってきた一人の剣を、斧で受け止めるキリウ。巨体はまるで揺らがない。それどころか大きな足で顔面を蹴り飛ばし、叩き伏せた。豪快な戦い方である。斧を振り回すたびに、一人、また一人と戦闘不能になっていく。

強い――夢斗らは初めて見るキリウの戦いぶりに絶句してしまった。

巨大な斧を振るう度、次から次へと兵士が薙ぎ倒される。そもそも、その豪快な一撃を兵士は止めることができない。剣で受ければ折られ、盾で受ければへこみ、いずれも腕力で無理矢理に叩き伏せられてしまう。

クロム鉱という強靱な鉱石を削り、作られた特注品の斧が、彼の怪力とあいまって凄まじい破壊力を実現していた。この力を使って彼は今まで各地で様々な生物と戦い、肉を、骨を、商品として獲得してきたのだろう。

騒ぎを聞きつけたのか、増援の兵士が次から次へと駆け付け、キリがない。気がつけば夢斗、リサ、光一も加わっての大混戦に発展していた。

夢斗の蹴りが一人を吹き飛ばし、数名を巻き込んで薙ぎ倒す。体力が尽きてきていた。ゼエゼエと息をし、吠える。

「ダメだ、キリがねえよ！ このまま、全員は相手できねえ！」

リサも攻撃を盾で跳ね返し、答える。

「で、でも逃げる場所なんて...どこにも...！」

光一は弓矢で数名を射抜き、的確に膝を撃ち抜く。時折、腰の瓶から取り出した「水」で変幻自在の矢を作り、応戦していた。

上空から飛来する「飛竜兵」も、彼が迎撃してくれている。

「ワニの人！ なにかないの、どこか秘密の逃げ道とかさ！」

少し離れた位置で斧を振り回すキリウ。強烈な一撃で二名を同時に吹き飛ばし、周囲を見渡す。

彼自身も圧倒的な数の不利を感じていた。このまま国中の兵士と戦うなど、それはもはや「戦争」である。非効率にもほどがある選択だ。

行商で鍛えられた頭脳が高速で働き、ある一つの答えを導き出す。

「お前ら、ワイの近くに來い！ 急げや！」

彼の一声で夢斗、リサ、光一は目の前の相手を倒し、一斉にキリウに近寄る。一同が引いたのを合図に、兵士達は攻撃に転じた。

だが周囲の空気の温度が、急上昇する。激しい運動のためだけではない。明らかに肌を通じて、気温が上昇している。

その理由に夢斗らだけでなく、兵士達も一斉に気付く。

キリウの目の色が赤く光る。彼の口からゴォと音を立てて発射された「火炎」が斧の刃に纏わりつき、うねりだした。頭上に掲げると、まるで松明のようである。

「悪いことは言わん、離れときいや。火傷すると、しばらく痛いぞ！」

瞬間、キリウは斧を真横に振り抜く。刃で渦巻いていた火炎が広がり、一瞬で広場が火の海と化した。悲鳴を上げ、進軍を止める兵士。さらにもう一撃斧を振り抜き、火炎が力を増す。

壮絶な一撃に言葉を失う一同。だが、キリウの行動は実に素早かった。兵士達が足止めを食っている間に、彼は三人を導く。

「おら、行くぞ。遅れて、けつ刺されても知らんからな」

言うや否や「それ」を使って姿を消すキリウ。その行動に一瞬、三人は躊躇したが、あいにく迷っている暇はない。兎にも角にも、今はキリウを信じ、続いた。

ごおごおと燃え盛る炎は、徐々にその勢いを増す。兵士達が気が付いた時には、夢斗ら四人の姿はどこにもなかった。

「なっ...ど、どこに逃げた!？」

慌てて周囲を見渡すも、どこにも隠れる場所などない。荷馬車の中や樽の影も即座に確認するが、もぬけの殻だ。

歯噛みし、悔しそうに吠える兵士。

「馬鹿にしおってえ...探せ、探すのだ! まだ近くにいるはずだ、何としてもひっ捕らえろお！」

部隊長の怒号を聞き、兵士達は散開していく。残った数名が倒れている同胞を起こし、救護していた。

天下のルガリア兵団が、たった四人の蛮族になんてざまだ――苛立ちを解き放ち、兵士長は足踏みをする。金属のブーツが下水へと続く蓋とぶつかり、ガァンという無骨な音を立てた。

金属の音は狭い空間にぐわんぐわんと響き、鼓膜だけでなく体全体にしみこんでくる。兵士達の足音や気配を察し、夢斗ら四人はじっと押し黙っていた。

しかし、やがて静寂が戻ってきたことを察し、小声で言う。

「なあ、もう大丈夫じゃないか？」

それを合図に、目の前でポツという音と共に火が灯る。キリウが取り出した簡易カンテラに火をとめたのだ。微かな炎が周囲を照らし、細く、じめじめした通路を浮かび上がらせる。

「とりあえず、バれてへんみたいやな。さっすがワイ。とっさに考えたにしては、上出来や」

にんまりと笑うキリウ。彼は斧を担ぎなおし、ため息をついた。

その横で、リサは鼻を抑え、周囲から伝わる悪臭に耐えている。

「なんですか、ここお...これってまるで...」

「王国の地下に広がる水路や。汚れて不要な水や、ゴミがここを通じて外に流れ出す」

ようするにそれは、下水道ということだ。

キリウが火炎魔法を放った直後、兵士達の目をくらました一瞬で、四人は下水への入り口を見つけ、そこに思い切って飛び込んだ。結果、見事に兵士達は夢斗らを見失ったのである。

大きなため息をつき、また尻をさする光一。

「落ちるなら、先に行ってほしかったよ...ま～た、お尻打っちゃった...痔になるよ絶対」

「アホウ、んなもん、想定外やったんやから、仕方ないやろ。大体、のろのろしてて見つかるなんざ、最悪やで、ほんま」

悪態をつくキリウ。しかし、彼はすぐ横に立つリサに言った。

「しっかしまあ、怖いおチビちゃんやで。そんなちっこいナリして、えげつないことしよる。案外、商売人向きの性格ちゃうか？」

実際、リサの機転によって、このキリウという男を巻き込み、事態を乗り越えることができた。そういう意味では、彼女のお手柄というところだろう。

どこか、キリウはリサの手腕を褒めているようにも見える。不敵に笑い、隣のリサを見ていた。

だが、何を思ったのか、リサは急に彼のすねを蹴り上げる。鈍い音と響く悲鳴。夢斗と光一は息を飲む。

「あ————いっだあ！ なにすんねん、コラァ！？」

「さっきからあなた、失礼じゃないですか！？ チビチビチビチビって、何回言いました！」

すごんだつもりが、相変わらずリサが真っ向から叩き返す。小さな体から発せられる怒気に、あのワニ男がたじろいでいた。

「え...んなもん、別に数えて——」

「人が気にしてることずけずけと、しかも体で払えですって！？ そういうの、セクハラで訴えられても文句言えませんか！！ ドゥー、ユー、アングスタン！！」

ずずい、と歩み寄るリサ。どうやら、先程までのあの不機嫌な姿は、彼女の背丈に対する、キリウの無神経な物言いがもたらした怒りだったようだ。

よく理解はしていないが、それでもキリウはその謎の迫力に押し負けてしまい、身動きが取れない。リサは「ふんっ」と鼻息を荒くし、腕組をしていた。

「まっ、契約はしたわけですから、約束は果たしてもらいますよ！ さ、そうと分かれば、早くここから脱出しましょう」

キリウだけでなく、夢斗や光一も言葉が出ない。光一は小さな声で、横に立つ夢斗に問いかけた。

「ねえ、向こうでもああなの？ やっぱ海外の方って怒るときすごいんだね」

「いや、あんま関係ないと思うぞ、それは...」

苦笑いしつつも、夢斗は地下通路の奥を見つめる。どこまでも続く闇が、まるで一同を飲み込もうと、怪物が口を開けているかのようだ。少し不安になり、キリウに問いかける。

「本当にこれ、外に繋がってるのか？」

「ああ、そやで。外どころか、王国中、どこにでも繋がってる。まあ、こんな風に逃走経路に使うとは、思ってもみなかったけどなあ。まっ、盗賊とかはこういうところから、王宮とかに侵入するんやろな」

本来は人が入り込むような場所ではない。王国から排出されるものが集まり、自然へと廃棄されるための場所だ。この悪臭も、いたしかたないのだろう。

「とはいえ、もうワイも盗人みたいなもんか。ったく、割に合わん仕事になったで。せめて、国家機密でもくすねへんと、元が取れへんわ」

あれこれと良からぬ計画を立てるキリウ。夢斗は興味本位から、問いかけた。

「国家機密...そんなものまで売るのが、あんた」

「いや、ただの例えや、例え。けどまあ、ルガリアの方々なら、いくらでも黒い秘密、持ってそうやからなあ。使いようによっちゃ、甘い菓子売りさばくより、全然金になるかもな」

ようやく冷静になったリサが、首をかしげる。

「黒い秘密？　なんですか、それ」

「ワイら商売人の間じゃあ、有名な話やで。ルガリアの奴ら、なにやら汚い金の流れがあるらしい。こっそり、何人かの奴隷が城に連れ込まれたって話も聞く。奴隷商人の奴から、飲みの席でも聞いたしな」

ぎょっとする一同。なんだか暗闇の中であるような話ではない気もして、余計にぞっとしてしまう。

光一も周囲を警戒しつつ、息を飲む。

「なんだよ、それ。ルガリア王国って言えば、豊かな国ってイメージだったんだけどなあ...本当に、そんな汚いことしてるのかな？」

「んなもん、表面上はどうにでもできる。これだけの大国や。あれやこれやと、きな臭いことも手え出しとるんやろ」

それがきくと「社会の真実」というやつなのかもしれない。そこで生きる国民には、裏で行われている「淀み」のようなものは一切見せず、あくまで綺麗に、美しく発展していく姿を見せることで、余計な不安を煽らないようにしているのだろう。知っているようで、人は自分達が生きる世界をあまりにも知らない。

「まっ、奴隷が何に使われようが、それで何をしようが、今はどうでもええがな。おら、とりあえずこっから出るで。ほとぼりが冷めるまで、おたくらのアジトに匿ってもらうからな」

カンテラを片手に、そそくさと歩き出そうとするキリウ。こんな暗闇に取り残されたのでは、たまったものではない。光一、リサも慌てて続く。

だが、夢斗はすぐに歩き出すことはできない。キリウ達が進む、その逆の通路を見つめ、考えてしまっていた。暗闇はかなり先まで続き、水の音が絶え間なく聞こえてくる。

リサが立ち止まり、振り返って名前を呼んだ。

「夢斗さん、どうしたんですか？　早く行かないと」

だが、夢斗はすぐには答えない。そのおかしい様子を察し、キリウらも立ち止まる。

「なにしとんのや、ほら、急がんと。日が暮れてまうで」

夢斗の耳に、彼らの声は届いてはいたが、頭の中を巡るある考えに、返答ができない。

何かが、根本的に変なのだ――レジスタンスと王国の対立。「心喰い」という怪事件が引き起こしたすれ違い。もちろん、それらは最初から、一連の騒動として、まるで正常ではないということは分かっている。

だがそれ以上に、なにかがひっかかる。それは、先程、直接ルーメルと対峙したあの時から、感じ始めていた違和感だ。

「なあ、この地下水路って、王国中に続いているのか？」

「ああ？　まあ、そうやけどな。それがなんやねん」

「じゃあ、もしかして、城にも通じてる？」

その一言に、全員が目を見開いた。真っ先に声をあげたのは、光一だ。

「ちょっ、夢斗君、なにするつもり!？」

夢斗自身、どうすべきかは考えあぐねていた。このままおとなしく撤退するのが賢明だとは思って

いる。しかし、ある意味、これはまたとないチャンスかもしれない。このまま奥に進めば、何かもっと、手がかりが見つかるかもしれないのだ。

ある意味、この先は王国の中枢――危険はもちろん、ともなうだろう。だがそれ以上に、この騒乱で見ていない、何かがある気がして、ならない。

ルガリア王国は、なにをやろうとしているのか。そして、誰がそれを突き動かしているのか。

「キリウ、頼みがある。カンテラを一つ、貸してくれないか」

誰もが夢斗の思惑を察し、息を飲む。たまた、ワニ男は声を張り上げた。

「お前、正気か？ 城に向かって、どないするっちゅうねん！？」

「分からない。実際、そこには何もなければいいかもしれない。みすみす、相手の懐に飛び込んで、それこそ捕まってしまう可能性もある。それは、十分わかっているつもりだ」

汗はじっとりとして体を濡らす、それでも意識ははっきりしている。

「王国に来て色々なことはわかった。だけど、戦争を止めれるほど、決定的な手がかりじゃあない。もっと直接的な何かが、必要だと思うんだ」

リサは不安げな眼差しを、夢斗に向けている。光一はやはり、たまた彼を止めた。

「そりゃあ分かるけど...で、でも無茶だよ！ さっきみたいな兵士が、あの城には山のようにいるんだ。もし見つければ、今度こそ逃げ場がなくなる！」

「分かっているつもりだ。安全場所なんて、きつくない。これは多分――限りなく部の悪い賭けなんだろう。だけど――」

もはや、悠長にしている暇はない。

「一步を踏み込まなければ、きっと手遅れになる。なんだか、そんな気がするんだ

漠然とした感覚ではある。だが、なんとなく身に染みて分かるのだ。実質、もうあまり、時間は残されていない。

一度戦争が始まれば、もう互いに止まることはないだろう。歯止めを失った両者は、互いの信じる大義名分を縦に、刃を振るい続ける。そうなれば、被害は急加速的に増えている。一分一秒遅れるたびに、人が傷付き、死んでいく。

だが、夢斗も無策で、感情のみを頼りに言っているのではない。

「逃げ場がないのは分かっている。だけど、一応考えてはいるよ。最悪、どうしようもなくなったら、俺の『オーバー』の力で向こう側に戻る。そうすれば、さすがの奴らも追っては来れない」

その意外な作戦に、驚く三人。とりわけ、同じ「オーバー」であるリサは、意表を突かれたといった感じだ。

いかに「オーバーテクノロジー」の恩恵を持ったとしても、それで王国の兵力全てを相手取るなど、無謀も良いところだ。ましてや夢斗は歴戦の強者などではない。あくまで少し運動経験のある、高校生の男子生徒なのである。特殊な道具だけでは、戦力差を埋めることは到底できないだろう。

だが、身につけた「力」なら、一つだけある。世界の境界すら超えるこの力なら、城の中だろうが、下水の中だろうが関係はない。

もっとも、移動した先がどこになるのか、という不安はつきまとうが。

「光一達は、先にアジトに帰って、今日のことをグレンに伝えてくれ。俺だけでも潜入して、もっと情報を探してみる。やばくなったらすぐに、元の世界に戻るからさ」

夢斗を止めようにも、彼から伝わってくる確固たる意志に、誰も反論できない。自分なりに考え、迷い、それでも進むと決めた者のみを持つ、揺るがない強さがそこにはある。

暗闇の奥を睨み、その先に潜む恐怖、そしてまだ見ぬ真実を、夢斗は見据えていた。

そんな中、ようやく一人が声を上げる。

「私も行きます」

夢斗、光一、キリウが振り向く。

リサは拳を握りしめ、強い眼差しを浮かべ、夢斗を見ていた。

「私だって、『オーバー』です。だから、もし危なくなっても、向こうの世界に離脱することもできます。一人で行くより、二人の方が何かあった時、安全ですよ」

今までの夢斗なら、反射的に彼女を止めたのかもしれない。だが、今となってはそんな言葉は、湧き

上がってこなかった。

リサという少女のことを、ほんの少しではあるが、以前よりも知っている。快活で、感情豊かで――だがその実、けして明るい事ばかりではない過去と、その逆境にくじけない強さを持つ少女。

その彼女が言う言葉を、今なら信じるべきだと思えるのだ。

「ああ、分かった。ありがとな、リサ」

頷く夢斗に、リサは微かに笑った。不安と焦りは混じっているが、それでも進む場所だけは揺らがない。

二人のやり取りを見守っていたキリウ、そして光一がため息をつく。

「マジか、お前ら...やっぱり『オーバー』ってのは、変な奴らやで、ほんま」

「今回ばかりは、あんたに同意だよ。夢斗君、前よりもずっと強情になったね」

どこか呆れた表情を浮かべる光一らに、夢斗は苦笑する。

だが、もはや彼らもそれを止めない。キリウはもう一つ、カンテラに火をつけ、渡してくれた。

「方角的に、ここをまっすぐ進めば、城に着くはずや。ワイらはお言葉に甘えて、撤退させてもらうわ」

「ああ、分かった。すまない、あんたを巻き込んで」

夢斗の謝罪にも、キリウは「ふんっ」とつまらなそうに答える。

「ほんまやで。おい、おチ...お嬢ちゃん、ちゃんと生きて帰ってきいや。あんたには、あの菓子の仕入れをしてもらわんと困る。市に逃げなんてずるいことされたら困るからな」

そんなぶっきらぼうな一言を最後に、キリウは再び出口に向かって歩き出した。光一も最後に一言、激励して後に続く。

「気をつけてね、二人共。僕もアジトで聞き込み、続けておくよ。また、後で！」

手を振り、走り出す光一。二人の明かりはどんどん遠くなり、小さくなっていく。

それを少し見つめていたが、感傷的になっている場合ではない。夢斗とリサもカンテラの光を頼りに、歩き出す。

「ごめんな、わがまま言って、付き合わせてさ」

「ノープロブレム！ むしろ、事件の核心を見つけれるチャンスなんですから。がんばりましょう！」

明かりに照らされ、浮かび上がるその笑顔に、随分と心が救われる。夢斗も微かに笑って頷き、歩を進めた。

遠くから聞こえる反響音と、水の音。時折まとわりついてくる悪臭を振り払い、進み続けた。5分ほど歩くと、やがて一本のはしごを見つける。二人は恐る恐る、そのはしごを登ってみた。

ゆっくり、警戒しながら下水の蓋を持ち上げる。人の気配はない。地下道よりは明るい、なにやら薄暗い部屋に出た。

「どこだ、ここ。城の中なのか？」

ゆっくり、警戒しながら部屋に侵入する二人。カンテラをしまい、リサも周囲をうかがう。なんだか妙にカビ臭い。下水とはまた違った不快な臭いである。

「それにしても、随分薄暗いですね。地下室でしょうか？」

「窓もないし、そうかもな。兵士の姿はないけど...」

下水の蓋をばれないように、そっと閉める。床は苔まみれで、蓋も同様に汚れてしまっている。これではまるで隠し通路の入り口だ。

よくよく見ると、部屋の中には幾つもの鉄製の檻が並べられていた。随分大きなもので、人間もこの中に閉じ込められそうである。

「牢屋か、ここ。本当にあるんだな」

ゲームや創作の世界ではお馴染みだが、実際に目になると、なんとも嫌な気分だ。ここに捕虜を捉え、拷問などをすると思うと、寒気がする。

奥に扉を見つけ、歩み寄る二人。だが、突如響いた声に驚き、立ちすくむ。

「オオオオゴオオオ！」

悲鳴をあげそうになるリサ。固まって目を見開く夢斗。二人は反射的に身を引き、扉のすぐ横にある檻を見つめた。

その中に、人間が入っている。鎖で繋がれ、口には特殊な鉄製のマスクをつけられていた。まともに喋ることができないらしい。

瘦せ細った体の老人だ。ボロボロの衣服をまとい、目を見開いて檻を掴んでいる。

「オゴォ！ オウウオゴ！」

鬼気迫る表情で、何かを訴えてくる。ここから出せ、とでも言いたいのだろうか。

完全に震え上がってしまう、二人。だが、夢斗は足早にドアを開け、その場を去る。

「ご、ごめん！ 悪いけど、また今度な！」

そんな間の抜けた言葉を最後に、二人は別室へと退散した。

ドアを閉めても、まだあの老人の声は聞こえてくる。バクバクと加速する鼓動を抑えながら、ため息をつく。

「焦ったあ...お、お化け屋敷かよ。なんだあれ」

「罪人かなにかでしょうか。怖かったあ〜！」

「心臓がまだ痛いよ、まったく...と、とにかく急ごう」

出鼻をくじかれた感じだが、二人はすぐに階段を見つけた。足早にそれを登ると、陽の光が差し込むドアを発見する。恐る恐る近付き、少し開いて様子を伺う。

長い石畳の通路と、日が差し込むガラス窓が見えた。奥に見える景色は緑が豊かな庭園である。遠くに、鎧を着た兵士が確認できる。

「ビンゴだ。どうやら、ここは城の中らしい」

「良かったですね！ じゃあ、そうと決まれば急がないと。なにか手がかり、探しましょ」

「ああ。だけど、兵士の数が多いな。このまま動き回ったら、すぐ捕まりそうだよ」

見覚えのある鎧を着た男達が、いたるところを歩き回っている。潜入するとは言っても、この全ての監視の目をかいくぐるのは、至難の技だ。

「ベリーハードモードですねえ、これは。まともにやっても、勝ち目ないですよ」

ゲーム風の感想を口走るリサ。苦笑しつつ、夢斗もどこか納得した。

と、ここでリサが先に思いつく。

「そうだ。あの時と同じ作戦はどうでしょう！」

「あの時だって？ それって――」

「レジスタンスのアジトに、初めて行った時の作戦ですよ。ほら、マウマウさんがやってた」

一瞬、何のことを言っているか分からなかったが、すぐにピンときた。

確かに明暗である。これだけの警戒の目、一つ残らずかいくぐるのは不可能だ。

兵士以外の格好をしている者が闊歩していれば、一瞬で侵入者とバレてしまう。

そう、兵士以外の格好なら――夢斗とリサは、無言で頷く。二人はすぐさま、その作戦に移った。

城下町の騒ぎを聞きつけ、出払ってるとはいえ、それでも城に在中する兵士は多い。重要拠点である城を開け放つわけにもいかないのだろう。最低限の、しかし堅牢な護衛兵が場内を巡回していた。

二人一組で廊下を歩く兵士。彼らは耳に入った噂話に花を咲かせている。

「なあ、聞いたか？ なんでも、侵入したレジスタンスのやつに、ルーメル副隊長がやられたらしい」

「本当か、それ？ あの鬼の副長が、倒されたっていうのか？」

「ああ、どうやら本当らしいぜ。相手の方が多かったにせよ、気を失って運ばれてきたらしい。しかも、副長を吹っ飛ばしたのは、ガキだったんだとか。しかも、女の」

早速、城下町で繰り広げた夢斗らの戦闘は、知れ渡ってしまっているようだ。兵士は女剣士・ルーメルを倒した謎の少女・リサについて興奮気味に会話を続ける。

「ええ、嘘だろ。よりによって、ガキにやられたっていうのか。なんか信じられねえな」

「いやあ、俺もそう思ったんだがな。でも、報告では背の小さい、金髪の子供だったらしいぜ。獣人じゃなくて、普通の人間の」

「はあ？ ますます妙だな。なんでまた獣人じゃないやつが、レジスタンスにいるんだ」

「俺が知るかよ。噂によると、そこそこ可愛らしいぜ」

男二人の会話は、どんどんと下世話な方向へと反れていってしまう。

「へえ...美少女、ねえ。捕まえて尋問するなら、ぜひやらせて欲しいな」

「おい、お前そういう趣味かよ。相変わらずえげつねえな」

「ここ最近の激務で溜まってんだよ。もう女も二週間ほど抱いてねえ」

「まあ、その気持ちは分かるがなあ。まったく、王が急に宣戦布告なんざしなけりゃ、今頃家で休暇を過ごしてたのによ。災難だぜ」

噂話は最終的に、組織の上に対する悪態に繋がってしまう。下卑た笑い声をあげながら、兵士二人は通路を進む。

そんな二人を、悲鳴にも似た声が引き止めた。

「だ、誰か来てくれ！ やばい、捕虜が暴れてるぞ！」

思わず立ち止まり、振り返る二人。二人の視線の先には、地下牢へ続く扉が見えた。よく見れば、少し開いている。

「な、なんだあ、おい。どうした、大丈夫か！？」

兵士二人は慌てて扉を開け、階段を下りていく。何かと警戒し、槍を握りしめていた。

扉が閉まり、立て続けに奥から「うげっ」「ぐはっ」という唸り声が二つ、響く。だがそれは、誰の耳にも届くことはなかった。

しばしの静寂が戻ってくる。やがて、扉を開けて二人の兵士は出てきた。

「うまくいったな。なんか、もうちょっと警戒されるかと思ったけど」

鎧を身にまとっているのは、先程までの男二人ではない。他ならぬ、夢斗とリサだ。

先程の悲鳴は、ただの嘘。おびき寄せた兵士二人を即座に昏倒させ、その装備を剥ぎ取ったのである。

。

リサはサイズが微妙にあっていないのか、どこか兜がグラグラしている。気合いでそれを持ち上げ、背筋を伸ばしていた。

「まぬけな二人で助かりましたね。まったく、皆、人のことをチビだの背が低いだのって。気にしていることをズケズケと、失礼ですよ！」

男達の噂話を聞いてしまい、また少しリサはむくれてしまう。その怒りを解消したかったのか、気絶させる程度のはずの一撃は、随分と豪快に、男を吹き飛ばしていた。

「あいつらからしたら、災難だったな、本当。だけど、これで随分動きやすくなったぜ。まあ、バレないように気をつけないな」

二人は鎧姿で偽装したまま、堂々と城の中を散策し始めた。

こうやってみると、ルガリア城の内観は実に美しい。石造の建築物は丁寧に磨かれているのか、埃一つなく、それでいて中庭には大きな木が植えられ、鳥の姿なんかも見える。

優雅な風景に見惚れつつ、けしてバレないように警戒を続けた。すれ違う兵士二人に咄嗟に挨拶を交わし、少しだけ肝が冷える。

1階の部屋を見て回るが、どこも兵士の詰所や食堂、武器庫や便所と、あまり手がかりがありそうな場所ではなかった。そもそも、どこの部屋も兵士の数が多すぎて、危険すぎる。

そうこうしていると2階に続く階段を見つけ、そそくさと上の階へと進んだ。

階が上がったことで窓からは遠くの景色が見え、城下町と高い城壁の姿が確認できた。おそらく、あの町中を兵士達が駆け回っているのだろう。今となっては、夢斗とリサも立派なおたずねものである。

2階の部屋を覗き込みながら、ひそひそと二人は相談した。

「随分広い城だな。これはこれで、手がかりを探すのも難しいぜ」

「1階すら、まだ見てない部屋もありますしね... なにか手がかりがあればいいんですが...」

そんな時、不意に二人の視線に中庭の光景が飛び込んでくる。

「なんだありゃあ。随分派手な格好だな」

思わず窓越しに見つめる二人。なにやら白地に金の刺繍が施されたローブを身にまとった老人が、歩いている。白髪をたっぷりと蓄えた頭の上には、豪華な装飾の冠が載せられていた。

「あれって、もしかして...！」

呟くと同時に、リサは駆け出す。突然の彼女の行動に、夢斗も慌てて追った。

2階の吹き抜けに辿り着くと上から中庭の様子がよく分かる。通路からあまり身を乗り出さないよう、下の様子を伺った。

中庭の真ん中に置かれた、巨大な石像——大きな盾を構えた屈強な男の像である。その石像を見上げるように、冠を被った謎の老人は首を持ち上げている。すぐ横には、白銀の鎧をまとった屈強な男が付き添っていた。

耳を澄ますと、二人の会話が微かだが聞こえてくる。

「石像の手入れがしっかりと行き届いておるな。兵士にやらせておるのか？」

老人は低い声で問いかける。すぐ横の騎士は、その問いにそれを上回るような低く、そして野太い声で答えた。

「はい。持ち回りで毎朝、掃除しております」

「なるほど、な。素晴らしいじゃないか。この像——我が王国設立のきっかけとなった、英雄王・ロイの像は、我が国の礎と言っても良い。時にナグルファ。この像が剣を持たぬ理由、知っておるか？」

さらに問いを投げかけられ、騎士・ナグルファは「はっ」と毅然とした態度で返した。

「かつてこのルガリア建設の折、かの地を奪い合っていた他国との交戦の際、我が軍は撤退寸前まで追い込まれたと聞きます。その際、最後の最後まで戦線を守り続け、孤軍奮闘し、援軍の到着まで耐え抜いた兵士——剣を砕かれ、矛を失い、盾一つになろうとも、その身を挺して戦い続けた『英雄譚』に由来すると」

どうやらその回答に満足したようで、老人は少し笑い、石像を見上げた。

「その通りだ。ワシも先代の王——我が父から幾度となく聞かされたよ。抗う術はなくとも、己が持った一枚の延板のみで、群がる矛に挑み続けた、英雄王の逸話を」

老人の言葉に、ぎょっとする夢斗、リサ。二人は息を殺しつつも、目を見開く。

今の言葉が真実ならば、二人はとんでもない相手を目の前にしているのかもしれない。そして、二人のその疑惑は、騎士・ナグルファの一言で、確かなものとなる。

「兵団に入団する際、誰しものが必ず覚えるよう、徹底しております。かの英雄王の存在こそ、我々ルガリアの騎士が抱くべき、誠の騎士道精神でございます、陛下」

陛下と呼ばれた老人は、満足げに、また笑う。だが、その事実を知った二人は、鎧の中に汗がじっとりと浮かび上がるのを感じていた。

ただの老人ではない。その荘厳な姿以上に、彼から伝わる言い知れぬ気品は、彼のこの国における「地位」によるところが大きいのだろう。

ルガリア王国を統べる「国王」。後に夢斗は、かの老人の名がエймダル＝ロイス＝ルガリア、だということを聞く。

国王・エймダルは、再び視線を石像に向けた。

「騎士、そして『国』は、そこに生きる力無き民を守るという使命がある。時には己が身を削り、襲い来る刃を受け止め、退ける——これは我々が背負うべき、大いなる『天命』なのだ」

王の言葉にナグルファは異を唱えず、大きく頷く。ルガリアという大国の頂点に立ち、そこに集まった人々の命を守るという大義。それこそ、国王・エймダルが心に抱く、揺らがない「盾」なのだろう。

そんな国王の眼差しが、どこか鋭さを帯びる。

「故に、国の平和を脅かす存在など、生かしてはおけぬ。ましてや、鎖を引きちぎった『獣』などな」
急に増した「圧」に、隠れて見ている二人まで、息を飲んでしまう。

騎士・ナグルファは彼の意図を汲み、答える。

「潜り込んだ賊は、現在も捜索を続けております。どうやら行商の手を借り、検問をくぐり抜けたようです」

「そうか、やはりどのように利を生む存在だとしても、外界から立ち入る存在を許したことが、今回の落ち度に繋がったようだな。して、検問を行った兵士は何名だ？」

「侵入したと思われる時刻には、5名が警護に当たっていました」

「なるほど、な。では、ただちにその者らを処刑せよ」

聞こえてきた言葉に、己が耳を疑う夢斗、リサ。

処刑だって——にわかには信じがたない。確かに、夢斗らは兵士を欺き、この国に不法入国をした。実際、夢斗らの偽装工作を兵士達が見抜けなかったということは事実だ。

だが、それだけであの男は、関係者を全て「殺す」と言ったのか。

国王の眼差しは揺らがない。まるで感情などどこかに置き忘れたかのように、無表情で告げる。

「鼠一匹、防げぬ盾などに用はない。ただちに廃棄しろ。いいな？」

この申し出に、ナグルファはなんら動揺せず、涼しい顔で頭を下げた。

「はっ。ただちに該当者を割り出し、処刑を行います」

「頼んだぞ。それと、獣人達の『滅却』準備も問題なからうな？」

「もちろんです。明後日にでも進軍の準備が整います。もうしばし、お待ちいただければ」

「ふむ、よかろう。躊躇せず、徹底的にやるのだぞ。長い歴史から、あの蛮族共を排除する良い機会なのだ。女子供も関係ない。一人残らず駆逐せよ」

また一つ、はっきりとナグルファは「はっ」と答えた。

夢斗、リサはたまらずその場から立ち去ってしまう。通路を歩きながら、少しだけ己の体が震えてるのを感じた。

「な、なあ。あれ、本当なのか？ 本当に、殺すって...」

服の上に鎧まで着込んでいるにも関わらず、体の芯が冷えてしょうがない。嫌な汗が、首筋を伝っているのが分かる。

リサも緊張した面持ちで答えた。

「あんなの、異常ですよ...あんな人が、この国の王様だなんて...」

二人の中で、豊かな幻想世界の王国・ルガリアが、どんどんとす黒く、おぞましい存在へと変わっていく。壮大な建造物に、美しい自然が融合した、騎士が守る都。しかし、その実態は外界を徹底的に排除するだけでなく、自分達の仲間ですら、役に立たないならば即刻、切り捨てる。

その上で、やはりこの大国は、もはや獣人達の言い分など聞く気はないらしい。誰が「心喰い」のかなど、どうでも良いのだ。彼らがやろうとしているのは、国に最も近い場所にいる異物の駆除――それはもはや、ただの大虐殺に他ならない。

なんとかしないと――二人は改めて、自分達に時間が残されていないことを、悟る。

足早に二階の部屋を探っていく二人。

と、ようやくリサが足を止め、夢斗を呼ぶ。

「夢斗さん、ここ！ 誰もいないし、資料がいっぱいありますよ！」

駆け寄って覗き込むと、確かに誰もいない。だが、開けようとドアノブを回すと、残念ながら鍵がかかっていた。

「くそっ、嚴重なこって。どうするかな、まさか蹴破るわけにもいかないし...」

困惑してしまうが、リサはまるで動じず、言い放つ。

「夢斗さん、誰か来ないか、見張っててください」

唐突な頼みに少し驚くが、リサは力強い眼差しで頷く。夢斗は言われるがまま、通路を見張り、警戒した。

リサは即座に行動に移る。右腕の腕輪に力を込め、空中に魔法で武器を出現させたのだ。しかし、今回生み出したものは小さい。紫色に輝く「ナイフ」が宙に浮いている。

瞬間、リサが人差し指で切断する真似をすると、ナイフが扉の隙間に入り込み、鍵を破壊してしまった。扉を開け、急いで中に入るリサ。

「オッケイです、夢斗さん。早く！」

言われるがまま、慌てて中に入る。彼女の行動力のおかげで、事なきを得た。

部屋の中には大きな机が幾つか並べられており、その上には乱雑に資料が並べられている。なにやら壁際には壺や瓶が並び、小さな檻の中には見た事もない色の鳥や、猿のような動物が入れられていた。

どこか薬品のような臭いが漂う部屋で、二人はようやく兜を脱ぎ、周囲を見渡した。

「資料室でしょうか？ でも、変な薬もいっぱいありますね...化学室？」

「どうだろうな。どっちかというところ、研究室って感じがするけどな」

なにとはともあれ、二人は少しでも手がかりをと、片っ端から資料を探し出す。

どれも羊皮紙になにやら知らない言語が書かれており、どうにも解読できない。王国に来てすぐ、王立魔導機関での出来事がデジャヴュとなって蘇った。

「しまったなあ、どれが何書いてるのか分からないじゃ、機密文書かどうか分からないよ……」
光一も連れてくるべきだったか、と一瞬考えはしたが、それでは肝心の時に「オーバー」の力で逃げることはできない。即興で考えたとはいえ、自分の詰めの甘さが嫌になる。

しかし、焦る夢斗をよそに、リサはさらに奥の棚を注意深く探っていた。
「機密文章や大事なものなら、そんな机の上に置きますかね？ もっと、嚴重に保管するんじゃないでしょうか」

言いながら、リサは「あっ」と声を上げる。夢斗が振り向くと、リサは棚の上から大きな木箱を引きずり出していった。なにやら、真鍮製の錠前が取り付けられている。

急いで駆け寄り、夢斗は箱を引っ張り出す。リサは感謝の言葉を述べ、すぐに箱を見つめた。

「これ、まさにそうじゃないですか？ 大切なものが入ってそうです」

「ああ。でも鍵がやっぱり——って、うわっ!？」

夢斗の言葉も待たず、リサはまた魔法の腕輪を使い、生み出したナイフで鍵をこじ開けた。バキッという鈍い音と共に、見事に箱が開く。

「ちゅ、躊躇しないな、リサ」

「今更、まどろっこしいのは無しですよ。それより、ほら」

箱を開け、中を覗き込む二人。なにやら資料の束や、箱に詰められた品がいくつか入っている。

一つ一つ取り出し、眺める。やはり文章については良く分からないが、品物は実に奇怪なものが多い。

それぞれを床に並べてみる。手にとって眺めながら、リサは首をかしげた。

「なんですかね、これ。見たこともない道具ですよ」

「ああ。なんに使うんだろう…だけど、なんだかどこか、見覚えがあるような気もするな」

夢斗はうまくは良い表せれないが、並んだ意味不明な物体に、酷い既視感を抱いた。使用用途は全く分からない。もしかしたらそれは、なにかの部品なのかもしれないが、これだけ見るとただのガラクタに他ならない。

だが、どこことなく、その形や材質に見覚えがある。手に取ったガラスの球は、現実世界でいう電球のそれに似ていた。

夢斗は自分の中に湧き上がった推測を、言葉にする。

「まさかこれって…『オーバーテクノロジー』じゃないか？ でも、なんでまた王国がこんなものを」「う～ん、王国も独自に、研究を進めていたってことなんですかね。でも、なんていうか、それにしてもアジトで見たのと、ちょっと違う気がします」

それは確かに、夢斗も抱いていた疑問だ。

アジトに集められていた「オーバーテクノロジー」は、どれも機能こそ違えど、似た造形をしていた。色や材質などは、おそらく共通のもので作られたように思える。

一方で、今目の前にあるこれは、どれも材質がバラバラで一貫性がない。それに、「オーバー」である二人が触っても、まるで起動する気配もない。

リサはとりあえず、抜き出した資料を折りたたみ、必死に腰の袋に詰め込みながら言った。

「でも、もしかしたら何かのヒントになるかもしれないです。できればこれも、持って帰りましょう」

夢斗は素直に頷き、まず手に取っていた電球のような物体をしまう。他の品も、同様に持ち帰ろうと手を伸ばした。

だが、背後からの声に、手を止めてしまう。

「あえて敵地に飛び込み、火事場泥棒とはな。蛮族とはいえ、惜しい。実に剛毅だ。それとも、恐れを知らぬ馬鹿なのか」

飛び上がり、振り返る。目の前に立っていた姿に、絶句した。

先程中庭で見かけた、角ばった無骨な顔立ちの彼は、二人を見ても別段表情は変えない。ただ冷静に、夢斗とリサを睨みつけている。

国王に付き添っていたはずの騎士・ナグルファがそこには立っていた。

見つかった——慌てて構えを作り、威嚇する。そんな二人にまるで動じず、ナグルファは続けた。

「ルーメルが倒されたとのことで、賊とはどんな輩かと気にはなっていた。だが、噂通りで少し驚いて

いる。よもや、こんな年端もいかぬ少年少女とはな」

ナグルファは二人を分析し、なおも余裕の表情を浮かべていた。否、正確には彼の感情が読み取れない。まるで不動の心のまま、ただ目の前の事態を見据えているようで、なんだか恐ろしい。

だが、見つかってしまったものはしょうがない。夢斗だけでなく、リサも抗戦の構えを見せている。取り巻きはいない。数で言えば二対一、こちらに分があるはずだ。そのせいか、どこか強気になれてしまう。

ナグルファはちらりと部屋の中を一瞥し、告げた。

「何を探し回っている、貴様ら。わざわざ城の研究室にまで忍び込んだのだ。何を企んでいる」

気圧されては駄目だ。夢斗は心なしか身を乗り出し、返す。

「あんたらが裏でやってることが、知りたくてね。なんでも、あれやこれや、黒いことしてると聞いてたもんだからさ」

「王国の『暗部』を暴く、英雄気取りか。くだらん。そんなもの、あるはずがなかろう」

その態度は、やはりあの女剣士・ルーメルに似ている。完全にレジスタンスの人間を見下した、傲慢さが伝わってくる。

だが、このナグルファという男は、どこか別格だ。ルーメルにあった感情の起伏が、まるで感じられない。まるで機械のように、喜怒哀楽の波が感じ取れないのだ。

無駄だとは分かっている、夢斗は腰を落としたまま吠える。

「戦争の準備を止めさせてくれないか？ 悪いのは獣人達じゃない。全ての原因は『心喰い』だろう？」

「我らルガリアの兵を食らう、怪人——現場の痕跡から、あれが『獣』によるものだと確信している。胸部に刻まれた歯型は、まさに牙のそれだった」

「そんなの、野生の猛獣かもしれないだろうがよ。それだけで決めつけてるのか？」

「野生の猛獣がいたとして、腕も足も喰らわず、ただ一心不乱に『心臓』を抜き去るなど、考えられるか？」

悔しいことに、それは正論なのかもしれない。証拠は限りなく少ないが、それがもたらす事実は明白だ。言い返せない自分に、歯噛みしてしまう。

そうこうしていると、ナグルファはゆっくりと腰に携えた剣を引き抜いた。ルーメルが持っていた剣より短い、非常に分厚い刀身を持つ。彼が構えた瞬間、部屋の気温が低くなったかのように錯覚する。

「貴様らはただ、ただ、混乱を広めている暴徒にすぎん。いたずらに事実を捻じ曲げ、民の心をかき乱すその所業。捨て置けんな」

ナグルファが塗り固めた「忠誠」という名の砦は、ルーメルのそれに比べて、更に堅牢だ。まるで心が動じていない。疑問すら抱かず、自身の剣こそが「大義」の代名詞であると、信じきっている。

激突は避けられないか——夢斗が覚悟を決めた、次の瞬間である。

ナグルファの体が、一瞬で二人の目の前へと移動した。息を呑み、身動きが取れない二人。彼の初動を、まるで捉えることができなかった。

すでに剣を上段に構え、ナグルファは二人を見下ろしている。どこまでも冷静——否、冷徹な眼差しと声が、二人の心臓をえぐる。

「反逆者には、すべからく死を」

恐ろしい一言と共に、振り下される一刀。夢斗は真横に、リサは後ろに飛び退いて直撃を交わした。

ゴォという風切り音の後、床板が切り裂かれ、破片が飛び散る。吹き飛んだ木片が夢斗の頬を擦り、切り裂いた。

伝わった痛みに、一瞬目を閉じそうになるも、ナグルファの体勢を見て息を飲む。彼はすでに刃を持ち上げ、次の一撃に移っていた。照準は、すぐ目の前で尻餅をついている、無防備なりサに向けられている。

やばい、と夢斗が心に抱いた瞬間、なんら躊躇することなくナグルファは刃を振り下ろした。

刃は空中で、光の「盾」にぶつかって防がれる。甲高い音が響き、剣と盾がギリギリとせめぎあった。リサは間一髪、魔法で直撃を防いだのである。

夢斗はすでにブーツを展開させ、その力をあらん限り使って、跳ぶ。

「っの野郎ッ！」

一瞬で距離を詰め、真横からナグルファの巨体に蹴り込む。しかし、その圧倒的速度ですら、ナグルファは即座に対応して見せた。超速度での飛び蹴りも、ナグルファの刃によって防御されてしまった。

ガァン、という金属音を立て、飛び退く夢斗。ブーツの材質のおかげで足は切れなかったが、伝わった感触にゾツとしてしまう。なんとかリサも体勢を立て直し、距離を取っていた。

もう一撃、今度は夢斗目掛けて刃が走った。机を蹴り、飛び退くことでかわす。机の上の資料や研究材料ごと、ナグルファの剣がまとめて削ぎ落とす。

強すぎる――たった数回の激突だが、そんな圧倒的な力量差を二人は感じ取っていた。

あの女剣士・ルーメルも、二人からすれば絶望的な強さを兼ね備えていたはずだ。鮮やかな剣捌きは見とれるほどで、その速度、正確さは他の兵士とは一線を画していた。

しかし、このナグルファという男は、その更に「上」を行っている。放たれる剣はまさに「剛」の剣で、軌道上の全てを薙ぎ払う、極上の斬撃だ。物体の材質などお構いなしに、放てば問答無用で斬る。

それでいて、反応も超人的であった。夢斗はブーツの力を使い、高速で回り込んで飛びかかる。かつて鎧を着た兵士を打ち倒した「オーバーテクノロジー」を利用した蹴りが、この男には通じない。どれだけ意表をついても、行動を先読みされているかのように、かわされる。

それはリサも同じで、魔法によって作り上げた斧、ハンマー、槍、鎌、そのどれもがことごとく、剣をぶつけられ、砕かれてしまう。三人が暴れれば暴れるだけ、壁や天井が揺れ、部屋が瓦礫の山と化していく。

再度斬り結んだ後、二人は距離をとって、呼吸を整えた。ゼエゼエと肩で息をする二人に対し、ナグルファは呼吸一つ取り乱していない。

「奇怪な力を使うな。特に、なんだその脚甲は？ 貴様からは魔力を感じないが、それだけの動き――ただの魔導防具ではないな。何者だ、貴様ら」

冷静に分析するナグルファ。しかし、夢斗は唾を吐き捨て、彼を睨みつける。

「あいにく、あんたらじゃあ分かるわけねえよ。他の世界からいた、俺らのことなんざな！」

「他の世界、だと？ 貴様らは、まさか――」

瞬間、夢斗はナグルファの一瞬の動揺を見逃さなかった。何の前触れもなく、一気に駆け出す。蹴り込んだ地面の板が吹き飛び、木屑が舞い散った。

剣を持ち上げるナグルファ。しかし、彼が剣を振り下ろした瞬間、更に夢斗は加速し、一気に彼の股下へと滑り込む。サッカーのスライディングの要領で、地面を滑る夢斗。摩擦でズボンが破れ、皮膚に熱さを感じるが、お構いなしに動いた。

見事に股下を抜け、更に地面を蹴る。ナグルファの背後の壁まで飛翔し、そのまま壁に足から「着地」する。

まだ、ナグルファは振り返れない。下ろした刃を持ち上げるまでに、数秒はかかる。夢斗は確信にも似た感情を抱き、一気に壁を蹴って飛んだ。まっすぐ、ミサイルのようにナグルファの背中に襲いかかり、蹴り込む。

普段なら、絶対に不可能であろう、超人的な攻撃法だ。「オーバーテクノロジー」の恩恵だろう。足と一体化したブーツが、驚異的な脚力をもたらし、その奇跡を成し遂げる。

当たる――夢斗だけでなく、距離をとって見ていたリサも、その常識外れの攻撃の命中を確信していた。

だからこそ、響き渡った鈍い音に、絶句する。

夢斗の蹴りが、剣によって受け止められていた。ナグルファは振り向いていない。前を向いたまま、ただ剣のみを背に当て、片手で夢斗を受け止めている。

衝撃を腕一本でしのいだということ。そしてそれ以上に、こちらを見もせずに攻撃のタイミング、位置、角度を見切ったこと。

前を向いたまま、ナグルファが吐き捨てる。

「常人を超える力は持っている。だが、殻はあくまで素人のようだな」

瞬間、ナグルファは右足で背後の夢斗を蹴り飛ばした。腹部に命中した蹴りが、肺の空気を無理矢理に押し出し、激痛をもたらす。夢斗の体は壁際まで吹き飛ばされ、叩きつけられた。

部屋がズウンと揺れるのと、リサが叫ぶのは、同時だった。

「夢斗さあん！！」

倒れ、地に伏せる夢斗。腕の力だけで起き上がろうにも、体が言うことを聞かない。

軽く触ると、炸裂した腹部の鎧がへこんでいるのが分かった。凄まじい一撃である。剣術だけでなく、体術までも、このナグルファという男は驚異的な実力を持っている。まして、鎧を着こんだあの体で、あれだけ素早く、そして鋭い蹴りを放つなど。

剣を下ろし、上体を起こすナグルファ。振り返りながら、夢斗を睨みつける。もはや、壁際で身をすくませているリサなど、眼中にはない。数多の戦いを切り抜けてきた歴戦の猛者だからこそ、分かることがある。

心の折れた相手など、畏るるに足らず一剣を持ち上げながら、ゆっくりと夢斗に近付いてくる。

「よもや、獣人達に『オーバー』が加担しているとはな。過去、この世界に幾度も姿を現し、その度に恩恵をもたらす『天使』。あるいは破滅をもたらす『悪魔』と称されてきた。貴様らは、まさに後者だ」

一步を踏み出すと、ずんと地面が揺れた。がれきを踏み砕き、彼は距離を詰める。

「貴様らのような規格外の存在は、必ず国に災厄をもたらす。異文化と言えども聞こえがいいが、新たな技術、知識は新たな『戦火』に繋がるのだ。このまま貴様らが獣人に加担すれば、やつらがどんな手段をもって暴れるか、分かったものではない。獣が機械を操り、我らの遙か先に行く――そんな未来は許容するわけにはいかない」

つくづく、夢斗とリサは、この男に対し、言い知れない恐怖を感じる。圧倒的な武力を有しているから、だけではない。彼の根底を作り上げている頑ななまでの「愛国心」が、まるで別の生き物と対峙しているように錯覚する。

ようやく体の感覚が戻ってきた夢斗。だが、まだ応戦するには、回復しきっていない。脂汗をにじませ、必死に呼吸を繰り返す。だが、すぐ目の前までナグルファは近付いてきていた。

「異界からの来訪、ご苦労だ。だが、残念だよ。我々は貴様らを、歓迎などしない」

振り上げられる剣。リサは動こうにも、目の前で繰り広げられる惨劇に、恐怖で身がすくむ。

夢斗は歯を食いしばり、その数瞬に、思いを巡らせた。

やはり、無謀だったのだろうか。「オーバー」という特別な力を持ったがゆえに、いつの間にか、この異界で人並み以上の働きができる、と思い込んでいた。だが、実際に相対してみると、たった一人の兵士すら打ち倒せないという、無力さを味わっている。

体に刻まれた痛みが、思考を止めようと立ちはだかった。もういい。もうこれ以上は、嫌だ。何度も何度もそう、本能は訴えかける。

しかしそれでも、夢斗の視界に入った「彼女」を見て、感覚が研ぎ澄まされる。

リサが怯えている。あれだけ快活に、自分を励まし、ここまで歩ませてくれた彼女が、悲しんでいる。

。

鼓動が跳ね上がり、そして意識を加速させた。夢斗自身、気付いていなくとも、足元のブーツが音を立てて起動する。

目の前に立つナグルファ。切り裂かれた机、がれき。割れた瓶、壊れた棚。凄惨な光景の中で、驚くほど研ぎ澄まされた感覚が、それらを一瞬で認識させる。

空を裂き、振り下ろされる剛剣。リサが目の前の光景に、まぶたをぎゅっと閉じた。

走る風切り音、そして炸裂する斬撃の音。

地面が揺れ、一撃の大きさを物語る。

閉じた目を、恐る恐る開くリサ。

彼女の目に入ったのは、切り裂かれた絶望などではない。

驚きという名の、確かな希望だった。

「なっ――――」

驚きの声を上げたのは、ナグルファだ。夢斗の姿が、一瞬にして消える。しかし、気配を察知し、その居場所を瞬時に把握した。

天井に、さかさまに張り付くかのように、夢斗がいた。足元のブーツに刻まれたラインが煌々と光り、見ている者の網膜に残像を刻み込む。

早すぎる――今までの速度を更に超越するような、超スピード。

天井へと舞い上がった夢斗自身、何が起こったかは、いまいち把握できていない。

だが、逆さになった視界の中で、夢斗は思う。

もはや、どうでもいい――なぜ、だとか。どうして、だとか。そんなことは後で考えればいい。

進むと決めた。失った「過去」を再び得るため、この世界の「真実」を掴むと決めた。

歓迎されようが、されまいが、そんなことはどうでもいい。そんなこと、こちらから願い下げだ。

たった一つの、純粋な思いが、夢斗の体にみなぎり、足元の神速の靴に注ぎ込まれる。大きく展開された「羽」を模した機構。それがもたらす力が、一気に爆発する。

天井を蹴って急降下する夢斗。ナグルファもさすがで、向かってくる「オーバー」目掛けて剣を持ち上げる。撃ち落とすことは不可能だ。とにかく、刃を当てて直撃を防がなくては。

夢斗の中に渦巻いていた、数多の感情。それが、たった一つの「思い」へと凝縮し、肉体を動かす。

驚くほどわがままで、驚くほど理不尽な、ある一つの感情。最後の最後、雄たけびに乗せて、その思いをぶちまける。

邪魔するな――縦にぐるぐると回転し、ついに放たれる、超高速の「踵落とし」。刃とブーツがぶつかり、ぱっと火花が舞い散る。

空気が揺れ、突風すら生んだその一撃が、ついにナグルファの顔を驚愕の色に染めた。

想像を絶する、規格外の「重さ」。ナグルファの肉体を真上から押しつぶすその一撃が、ついには地面を砕き、あろうことか2階の床を砕く。

気が付いた時には、夢斗は吠えていた。降りぬいた足がナグルファの巨体を地面目掛けて叩き込む。床に大穴が空き、彼の体は1階へと落ちていった。

下の部屋は、食堂だったのだろう。兵士達の机の上に、仰向けに突き刺さったナグルファ。意識はあるようだが、全身を襲った衝撃に、身動きが取れない。

兵士達も驚愕し、口々に彼の名を呼ぶ。ナグルファは立ち上がろうとするが、足腰が言うことを聞いてくれないようだ。

夢斗は2階の床に着地し、ぽっかりと空いた穴を見つめる。だが、やがてがくりと膝をつき、大きく息を吐き出した。まるで蒸気のような熱された吐息が漏れる。

「夢斗さん、大丈夫ですか!？」

駆け寄ってくるリサに、かろうじて笑顔を返す夢斗。視界がふらつくが、なんとかリサを見つめた。

「あ、ああ...結構、ぎりぎりだったけどな...悪い、体にうまく力が入らない」

そうこうしていると、下の階の兵士達も、夢斗らに気付いたらしい。皆武器をもって、2階へと走ってくる。やがてここにも、大量の増援が駆けつけるのだろう。

もたもたしている暇はない。夢斗は判断し、リサに吠える。

「ここらが、限界か.....頼む、リサ。撤退だ!」

「ッ! は、はい!!」

リサは夢斗の体を抱きかかえ、目を閉じて意識を集中する。すでに部屋の前には、兵士達の足音が近付いてきていた。

部屋のドアが音を立てて開く。兵士達は武器を構えていたが、すでに夢斗、リサの体は淡い光に包まれていた。

逃がすな――その声を最後に、二人の視界が真っ白に染まる。「オーバー」の力が発動し、二人は一瞬にして元の世界へと転移してしまった。

一瞬にして消えた二人に、絶句する兵士達。どこを探しても、夢斗達は見つからない。代わりに、さんざん荒らされた研究室と、ぽっかりと空いた穴だけが残される。

1階でようやく身を起こすナグルファ。大丈夫ですか、と問いかける兵士に、まるで答える気配はない。

。

王国の歩兵団、団長は自身の剣を手繰り寄せた。その手から伝わったあの凄まじい感触に、いまだに戦慄してしまう。

「悪魔の……使いめ…」

苦々しく、行き場のない怒りを吐き出すナグルファ。彼は憤怒を消し飛ばすように、剣を真横に薙ぎ払う。目の前にあった食堂の机が真一文字に裂け、兵士達が身震いした。

虚空を睨む、騎士の眼差し。

揺らがないはずの大義と誇りが、どこか黒く、染まりはじめていた。

背中に伝わった固い感触に「いってえ！」と声を上げてしまう。夢斗、リサはとっさに飛び起き、周囲をうかがった。

「こ、ここって……」

先程まで激闘を繰り広げていた城内ではない。民家が立ち並ぶアスファルトの道路に、二人は倒れていた。茜色の空の元、帰路につく会社員や部活帰りであろう、野球チームの学生が見える。幸い、二人が突如として出現したことは、誰も気付いていないらしい。

高鳴る鼓動を感じつつも、夢斗は地面にへたり込んだまま、言う。

「だ、脱出できたんだな？ 焦った～～！」

天を仰ぎ、これでもかため息を吐き出す。少しでも体内の熱気を排出したい。

リサはすぐに手を貸し、夢斗を引き起こそうとする。足腰がまだうまく機能していない。ブーツもこちらの世界に戻ってきたことで、機能を停止していた。

「ごめん、汗だくで汚いよ」

「そんなの、全然！ 大丈夫ですか？」

汚れることなどお構いなし抱え上げてくれる彼女に「ありがとう」と礼を言った。ふらつきはするが、なんとか立ち上がれる。道路脇の塀に、もたれかかった。

「惜しかったなあ、途中まではうまくいったんだけど。まさか、見つかるなんて…」

「ゴメンなさい…私が不用意に、魔法なんて使うから…」

「ああ、いや、しょうがないさ。相手の方が一枚上手だった、ってことだろう」

魔力を感知する、なんて発想自体が、夢斗やリサにはなかったのだ。迂闊ではあったが、それでもあの状況で、そこまで気にしていられなかった。

「だけど、一応収穫はあるしな。いくつか、持って帰れたかい？」

「ええ、まあ…でも、一体何が書いてあるかも分からないし、そもそも重要な文章なんじゃないか？」

懐から何枚かの羊皮紙を取り出すリサ。あの箱の中に厳重に保管されていたものの、数枚である。希少価値は分からないが、なにかしら情報が書かれているはずだ。

ふう、とまたため息をつく夢斗。

「まあ、また光一にでも解説してもらおう。ニンバムとかにも見せれば、なにか分かるかもしれない。何はともあれ、生きてただけで、結果オーライさ」

空気でも、笑顔を作る夢斗に少しだけリサは驚いていたようだ。かつての夢斗ならば、置かれた状況に困惑し、疲弊してしまっていたのだろうが、微かでも前を向こうとする彼の変化を、感じ取っていた。

少し戸惑いながらも、やがて頷くりサ。彼女なりに、夢斗の配慮を汲む。

「しかし…あのおっさん、まるで怪物だな…前に戦った女剣士よりも、よっぽど」

「はい、こんなこと言いたくないけど、勝てるってイメージが思い浮かばなかったです。なんていうか、人とのしての『隙』がなさすぎて…」

さすが、ルガリアの歩兵団、団長を務めるだけの猛者である。剣を抜き、刃を向けるという行為に、まるで迷いが無い。それは踏み込みや体捌き、剣の速度に如実に表れていた。力量を存分に振るえるだけの、圧倒的な精神力。それが、今まで出会ったどんな人間よりも異質である。

「夢斗さんの力があつたから、どうにかなりました。相変わらず、すごいですね、それ。まるでスーパーマンでしたよ」

リサに賞賛され、困ったように後ろ頭を掻いてしまう。

「俺の力ってか、このブーツのおかげだよ。『オーバー』なんだから、リサだってきっとできるさ」
「そうですかねえ...でも、なんだか段々、そのブーツの力が強くなってるような気がします。最初見た時もすごかったですけど、今日のはそれ以上でしたよ」

言われて、足元のブーツを見つめてしまう。

確かに、思い返してみれば、自身でも信じられないほど、超人的な動きをしていた。映画のCGでしか見たことのないような、天地上下を度外視したアクションである。

そう思えば、このたまたま出会ったブーツに、助けてもらってばかりだ。

しかし、ブーツを一一いや、夢斗らの格好を見つめているのは、なににも二人だけではない。その不意の視線に、夢斗とリサは気付く。

道行く人々が、歩きながらも横目に二人の姿を見ていた。理由は明白で、なにせ異界・クレイドルで冒険する格好のまま、元の世界に戻ってしまったのだ。今までは人気のない場所をポイントとして移動していたが、今回ばかりは一か八かの賭けだったため、そこまで気が回らなかった。

さながらゲリラ兵のような風貌の夢斗。そして遊牧民のようなマントを身にまとったりサに、道行く人は奇異の目を向けている。

「ああ...と、とりあえず帰ろうか...なにはともあれ、着替えを一一」

気まずさに少し顔を赤らめ、歩き出そうとする夢斗。だが、まだ全快したわけではなく、思わずふらついてしまう。慌てて、倒れそうになる夢斗をリサが支えた。

「ご、ごめん！ 悪い、助かった」

「まだ動いちゃダメですよ！ ゆっくり、とりあえず落ち着かせないと」

確かに、なんだかまだ足元が自分のものではないように、麻痺してしまっている。急激に筋肉を稼働させ続けた代償かもしれない。「オーバーテクノロジー」とはいえ、万能ではないということなのだろうか。

無理をしても歩けるわけではない。素直に壁にもたれかかり、感覚が戻ってくるのを待つ。

だが、そんな二人に一人の男が声をかけた。

「おや、諸星じゃないか。なにしてるんだ、お前ら。そんな格好で？」

思わず振り向き、心の中で「げえ」と声を上げてしまう。こちらを怪訝そうにジロジロと見る男は、学校で見た時と同様、少し焼けた肌に目も覚めるような白いシャツを身につけていた。運動で鍛えた筋肉を、わざと見せつけたいのか、少し小さめの服を着ている。

泉道高校の陸上部顧問、体育教師の伊達である。

転校生として、色々突っかかれていた夢斗からすると、あまり好んで会いたい相手ではない。夢斗が元陸上部だったということで、あれこれコンタクトを取ってきたのだが、当時の夢斗は無下に突き放してしまっていた。

「仮装パーティか何かか？ ハロウィンには随分早いが」

他愛のない疑問のはずだが、随分と彼の喋り方はねちっこい。元々、生徒を信じることより、疑うことを優先するような男だ。大方、良からぬ想像でもしているのだろう。

夢斗は吐き捨てるように返した。

「そんなところです。ちょうどもう、帰るところですけど」

「ほお。部活動もせず、悠々と遊べていいもんだな、帰宅部ってやつも」

チクリと投げかけられる嫌味に、ムツとしてしまう。肉体が疲弊している分、尚更だ。

「そっちは確か、別のクラスの日向か。珍しい組み合わせだな。お前ら、仲が良かったんだな」

「ええ、まあ。何か問題でも？」

「いやあ、とんでもない。仲睦まじいのは良いことだ」

なにか奥歯に物の挟まったような言い方に、余計イライラしてきてしまう。

「もっとも、うちは不純異性交遊は厳しく取り締まっている。青春を謳歌するのは構わんが、学生の本分は勉学に励むことだ。その辺、くれぐれも勘違いはするなよ？」

ついにさらけ出された本音に、夢斗は齒噛みしてしまう。

自分にちょっかいを掛けるだけならまだいい。だがこの場合、横にいるリサも可愛そうでならない。デリカシーのない一言に、彼女だって傷付いてしまう。

「だから、ただの友達ですから。そんなの——」

「それにしても、最近やたら一緒にいるところを見るからなあ。いやいや、余計なお世話だったらすまん」

どこまでも、こいつは俺のことが気に入らないらしい——前々から、薄々は感じていたが、こうもあからさまに態度に出されると、むかつ腹が立ってくる。

疲れからか、感情を制御できない夢斗。それを感じ取ったのか、リサも戸惑いの色を見せていた。

拳を握り、また言い返そうと、ニヤニヤ笑う体育教師の顔を睨み付けた。

だが、夢斗の言葉を、覚えのある透き通った声が遮る。

「おや、諸星君じゃないか。こんばんは」

振り向き、そこにいた男の姿に息を飲む。私服姿で、買い物の帰りだったのだろう。本屋の袋を下げたまま、彼はこちらを見ていた。

いつもは白衣姿しか見ていないが、シンプルな黒を基調とした私服姿でも、やはりさまになっている。元々の整った顔立ち、若々しい容姿がそう感じさせるのだろう。

夢斗が世話になっているカウンセラー・羽多野がそこにはいた。

「あ...どうも」

「なんだか、珍しい格好だね。仮装パーティの帰りかなにかかい？」

同じ質問を投げかけられ、困ったように苦笑いする。

横槍を入れられたことに、あからさまに不快な表情を浮かべる教師・伊達。だが、羽多野が言葉で彼を制する。

「諸星君の学校の先生ですか？ お初にお目にかかります、心理療法士の羽多野 充と申します」

「あ、ああ、これはこれは。諸星が世話になっとります。いやあ、お手数おかけしてすみませんね。とんだ厄介者で」

丁寧に挨拶を返す伊達だが、しっかりと夢斗を下げる言葉も含めている。また少しイラっとしたが、羽多野が微笑を浮かべて返した。

「いえいえ、とんでもない。私自身、諸星君のケースは非常に興味深く、学ぶことも多い。それに問診にも素直にに応じてくれて、助かっています」

「素直ですって？ これは、珍しい。学校では常にぼおっとしておって、すっかり腑抜けてしまっているとばかり」

この分かりやすい揶揄に、リサまでムツとし、顔をしかめる。

しかし、羽多野の返す刀が突き刺さった。

「心に負った傷や、無意識が作った壁は、本人がいくら奮起してもなかなか解きほぐせないものです。そんな時こそ、我々のような理解ある大人が助力し、内側から心を奮い立たせてあげる必要がある。先生のような快活でしっかりと生徒の方を見ていただけてる方がいて、私としても助かりますよ」

夢斗とリサは同時に気付く。羽多野は笑顔を浮かべたまま、しかし微妙に言葉の中に、分かりやすい棘を少しだけ含ませていることに。

「何気ない仕草や、とっさの反応にこそ、その人間の深層心理が反映される。私よりも、より日常生活に密接している先生方のような存在こそ『心の壁』を取り払える、希望なのです」

「こ、心の壁...ですか。それはまた——」

「良ければ今度、諸星君の今後の療法について、ご意見伺えませんか？ お時間良ければ、今からでも。私の診療所が、もう少し行ったところに——」

怒涛の勢いで食ってかかる羽多野に、明らかに伊達はたじろいでいた。彼は苦笑いを浮かべ、後ずさる。

「ああ、いえ、私はたまたま通りかかっただけですので、ちょっと用事がありましてね。ここらで、失礼させていただきますよ。お前らも、また来週学校でな」

まさしく退散、といった形で体育教師は足早に、その場を後にした。去っていく背中、筋骨隆々と

しているようで、実に情けない。

邪魔者が去ったことを確認し、やっと、羽多野の作っていた笑顔が消える。彼はいつも通りの涼しげな顔で呟いた。

「生徒を導かないといけない存在が、その立場を『強者』と勘違いして傲慢になる――ありがちだが、実際目にすると、どうも悲しくなるね」

彼は「やれやれ」とでも言いたそうに、大きな、乾いたため息をつく。だが、どうやら二人は彼に救われたらしい。

思わず、夢斗は礼を告げてしまう。

「あ、ありがとうございます。すいません、迷惑かけて…」

「いやいや、いいさ。僕だってたまたま、買い物帰りに通りがかっただけだ。それに、あんな風に余計なストレスを植え付けられても、カウンセリングに悪影響も出るしね。営業妨害されても困る」

実に割り切った言い方だが、その鋭い切り込み方が、今回ばかりは妙に心地良い。

「だけど、本当に妙な格好だね。イベントか何かあるのかい？」

「あ、ああ、はい。まあ」

「そうか。気分転換が来ているようなら、なによりだ。どんなことであれ、息抜きは必要だからね。いたずらに考えるだけが、答えに近づくわけでもない。助走のためには、足踏みも必要な時はある」

こう聞いていると、むしろ羽多野の方が人を導くという意味で、教師にふさわしいような気すらしてしまう。彼の心を聞いていると、自然と安心できるから不思議だ。

「それじゃあ、僕はこれで。諸星君、また来週の検診、よろしくね」

そう告げて、颯爽と去っていく羽多野。その後ろ姿は、教師・伊達のそれとは別格だ。吹き抜ける風も相まって、実に凜として、絵になっている。

二人は彼の背中を見送り、ため息をついてしまう。

「かーーーーっこいいですねえ、あの人！ クールで、上品で」

興奮気味に声を上げるリサ。なんだかその反応が、初めて心療内科を訪れた際の、同伴した母にかぶってしまう。やはり女性は、ああいう男性に目がないらしい。

とはいえ、今回ばかりは彼の話術に救われたのも事実だ。夢斗も顔き、苦笑いする。

「カウンセリングの時もあんなだから、ちょっと調子は狂うけどね。でも、頼りになる人ではあるよ」

「本当ですねえ、。それにひきかえ、あの先生、何なんですか？ ネチネチネチネチネチネチと、嫌な感じですよ！」

一瞬で、リサの中の矛先が体育教師・伊達に向く。さっきまでほころんでいた顔が、不快に歪んだ。

怒りをあらわにするリサを見ていると、夢斗の中の憤怒がどこか和らぐ。共感してくれているせいかもしれない。

「俺が元陸上部だったけど、勧誘を断ったのが気に入らないのかもな。まあ、嫌な噂も多いやつだし、気にしないようにしてはいるんだけどね」

「ああ、そういえば聞いたことがありますよ！ あの人、セクハラまがいのこと、あれこれしてるって！

魔法が使えたら、ぶっ飛ばしてやれたのに」

ぶんぶん腕を振り回すリサ。物騒な物言いに、少しだけたじろいでしまう。だが、なんだかその威勢の良さは、彼女らしい。

予想外の事態ではあったが、話していて随分と、体の方も落ち着いたようだ。夢斗は足首を慣らしながら、確かめる。

「なんだか、すっかり緊張の糸も切れちゃったよ。いつまでも、この格好でぶらぶらもできないしね。ひとまず、今日は帰るとするか」

あの後、光一やキリウがどうなったかは気になるが「オーバー」の力は何度も使うこともできない。まして、このボロボロの状態で帰って、何ができるというわけでもないだろう。いち早く状況を伝えたいところだが、今は焦ってもしょうがないのかもしれない。

リサも首を縦に振る。

「そうですね…明日、学校が終わったらすぐ、アジトに行きましょう！ この資料も、忘れず持ってきますね」

リサはそう言い、王国から奪取した羊皮紙を、丁寧に折りたたみ、しまった。

互いに次の目標を定め、頷く。二人は踵を返し、足早に帰路に着いた。顔を上げると、街を照らす夕日が、茜色の光をばら撒き、視界を染める。週末の晩独特の、夕飯の香りがどこかから立ち込めてきた。

。 夢斗、リサ、二人の腹が同時になってしまう。互いに焦ったよう目を見開くも、互いの人間臭い反応に、苦笑してしまう。

足踏みも時には必要、か——カウンセラー・羽多野の言葉を、どこか反芻する夢斗。今回の王国侵入が、ただの足踏みではなく、飛び立つ為の助走だと、信じたかった。

期待と不安を胸に、歩き出す二人。異界・クレイドルの未来への不安は、激戦の疲れとなって、重く肩にのしかかっていた。

夜に紛れて

王国での騒動から一夜、月曜日の気だるさもひとしおで、ほとんど授業など頭に入らない。一応形式上は真面目に授業を受けている夢斗も、今日ばかりは時折意識が飛びかけた。

疲れがどうにも抜けきっていない。なにせ昨日まで潜入、諜報、戦闘と終始動き回っていたし、なにより気を張り続けていたのだ。休養などとれるはずもない。

だからと言って、今日はのんびり過ごしていただけるほど余裕がないことも分かっている。結局、足早に帰宅し、すぐさま準備をして、二人はそのまま異界・クレイドルへと旅立った。

降り立った異界はすでに夜の色が濃かった。現実世界と異界との時間の流れは、どうも不安定にズレが生じるようだ。今日はほんの少し、日が落ちるのが早かったようである。出現した二人の姿を見て獣人達が驚き、こちらを見つめてくる。しかしながら、もはや夢斗とリサにとってこの反応も随分と慣れた。

変わらずアジトを行き来する獣人達を見て、どこかホッとする。もし一夜の間に戦争が勃発していたら、と思うと気が気ではなかったのだ。

「良かった。まだ本格的な戦争にはなっていないみたいだな。来た瞬間、アジトがなかったりしたら、どうしようかと...」

「ひとまずは良かったです！ でも、のんびりもしてられないですよ。早く、これを読んでもらしましょう」

リサは例の紙の束を取り出した。王国から持って帰った謎の書類である。やはり何度見ても、言語を読み取ることはできない。

獣人達に聞き、まずは光一を探す。彼を見つけるのにそう時間はかからなかった。情報通り、食堂のテーブルの一つに小さな姿を発見し、駆け寄る。

がらんと人気のない食堂の、奥のテーブルに彼は腰掛けていた。

「夢斗君、おかえり！ 帰ってこないから、心配したよお。大丈夫だったの？」

「ああ、まあな。そっちも無事そうで、なによりだよ」

クラスメイトが何事もなく帰還したのを確認し、ひとまずホッとした。しかし向かい側に座るワニ男・キリウがふてくされたように口を開く。

「無事なことあるかいな。水路を抜けたは良かったけど、森で結局、兵士とまた交戦になるし散々やで」

「そ、そうだったのか。すまない、あんたにも迷惑かけたな」

「礼はきっちり、ブツで払ってもらうからな」

徹底した損得勘定は相変わらずのようだ。一悶着はあったようだが、それでも二人がアジトにたどり着いていたことはなによりである。

光一だけでなく、更に机の奥に座る二人に気付き、夢斗とリサは驚いてしまう。

「あれ、あんた達は...」

見れば、そこには「融和派」の二人、ニンバムとマウマウが座っている。彼らは変わらぬ様子で、挨拶を返した。

「どうも、お久しぶりです。お元気そうで、なによりですね」

「もお、待ちくたびれちゃったよお～。ご飯も食べちゃったし、寝ちゃおうかと思ってたのお！」

礼儀正しいニンバムに対し、マウマウはやはり兜を脱いでいる時は実に饒舌だ。

リサが彼女の言葉を聞き、不思議そうに返す。その疑問には、代わりにニンバムが答えてくれた。

「待ちくたびれたって、私達を待ってたんですか？」

「ええ。なんでも、皆さんが王国に潜入されたとお聞きしましてね。しかもユメトさんとリサさんは、城にまで潜入されたとか。随分と、危ない橋を渡られましたね」

どこかニンバムの表情が曇ったように見えた。二人が危険に身を晒したことが、残念なのかもしれない。彼も夢斗らに事態の解決を依頼した身として、複雑な心境なのだろう。

光一がここで、補足してくれる。

「二人のことをグレンに報告したら、ニンバムさん達がいた方がいいだろう、って。と言ってもグレンは今、準備であれこれ忙しいんだけどね」

思わず「準備？」と聞き返してしまう二人に、今度はキリウが口を開く。

「いつ王国が切り込んできても良いように、ちゅうこっちゃん。ほとんどの獣人が、大急ぎで戦争の準備を始めとる」

「戦争の準備だって？　じゃあ、本当に王国は――」

「まっ、今すぐにとってことはないやろうけど。近々、大規模な合戦があるかもな」

昨日、城の中で聞いてしまった、あの言葉を思い出してしまう。国王が部下であるナグルファに告げた、あの一言を。

それを察したのか、ニンバムは着席を促しながらも優しく二人に言う。

「ささ、どうぞ。その様子だと、随分多くの『なにか』を見てこられたのでしょうか。是非、お聞かせ願いたい」

彼だけではない。その場に居合わせた全員が、夢斗らを見ている。恐らく二人の持ち帰った情報を、待ち望んでいたのだろう。すでに会議の場は設けられていた、ということらしい。

夢斗とリサは椅子に座り、すぐに昨日の出来事を説明した。王国に侵入してからの出来事、王立魔導機関で見つけた文献、ルーメルとの激突、そして城での出来事。

上手く伝えられているかは自信がなかったが、それでも一同は黙って、時折頷き、それを聞いてくれていた。

やはり最初に口を開いたのは、ニンバムだ。

「『滅却』――ですか。国王がそこまではっきりとした意思を示したのならば、もはや戦争は避けられないのかもしれないかもね」

ルガリア国王・エイムダルの口にした言葉。それは暗に、森に潜む獣人達を片っ端から殺害する、ということを示しているのだろう。

これには光一が声を上げた。

「そんな、いくらなんでも無茶苦茶だよ。ろくな証拠もないくせに、そんなのやったもの勝ちじ

やないか」

肝心の猟奇殺人「心喰い」のことは、なにも分かっていない。王国は一方的に獣人の犯行「だろう」と決めつけ、問答無用に彼らを根絶やしにしようとしているのである。

キリウが「はっ！」と呆れたように笑い声をあげた。

「まあ、薄々勘付いとしたけどなあ。やつら、はなから和解する気なんてあらへんのや。『心喰い』なんて不安要素をちまちま解決する気もあらへん。怪しいと思うなら、ごっそり捨ててまう。そういう腹積もりなんやろう」

「なんだよ、それ。乱暴にもほどがあるよ！」

「ワイに怒られてもなあ。それに、あくまで推測や、推測。お偉いさんの頭ん中なんか、分かりたくもないわ」

光一はどこか悔しそうに歯噛みし、うつむく。

だが今度はニンバムがその「心喰い」について、推測を始めた。

「ユメトさん達が魔導機関で見つけた資料には『魔神』との契約のための供物——そう、書かれていたのですね？」

「ああ。たまたま見つけた一冊に書いてあっただけけどな。でも、内容が似てるのかなって思ったんだよ。今回の事件と」

「確かに。実際、私もその線は当たって見たことがあります。事実、過去に『神』と称した存在との壁を取り除くため、供物を備える文化は当たり前のように存在していました。ただ、これだけだと、いまいち特定には至れないかと。せめて儀式の形式などが明らかになれば、あたりもつけれるのですが」

やはり賢人・ニンバムがそう言った可能性を考えないわけではないだろう。心当たりはあれど、今の物証だけでは選択肢が多すぎる。

ここで恐る恐る、リサが記憶を頼りに問いかける。

「あの、うろ覚えなんですけど...資料室で見つけた本には、過去にヴァドスって極悪な魔導師さんがいて、その人が似たようなことをしたとも書いてたと思います。今回の件も、同じような人が事件を繰り返してるって可能性はないんでしょうか？」

ヴァドスというその大罪人の名には、ニンバムだけが反応する。おそらく他の面々は知りもしないのだろう。

「ヴァドス＝アーズレン、ですね。かつて『黒き鬼人』とすら言われた大魔導士です。我々魔導士の間では、有名な歴史の人物ですよ。ただそうなると、彼と同様に巨大な魔力を欲する魔導士が暗躍している、ということになりますね」

その選択肢もどこか恐ろしかった。ただの殺人犯ではなく、圧倒的な魔力を有し狂気的な思想にとりつかれた魔法使いが、更に強い力を求めて殺人を繰り返す。おぞましい真実には違いない。

それもまた、ただの可能性の一つでしかない。一同は悩み、言葉に詰まってしまう。

ここで、マウマウが伸びをしながら気の抜けた声を上げる。

「あーあー、なんか、どこもかしこも変なのおー。あたし、ルガリアの王様は昔から優しいおじ

「いちゃんだって聞いてたのに、実際はそんな腹黒クソジジイだったなんて、がっかりー」

のんきな言葉に苦笑してしまう一同。夢斗は脳裏に国王の姿を思い返ししながら、問いかけてみる。

「確かに、冷酷な人物に見えたな。昔はああじゃなかったのかい？」

これには、ニンバムが少し真剣な面持ちで答える。

「どこか妙な気もします。というのもマウマウがお伝えしたように、ルガリアの王と言えば他国に対しては苛烈ですが、けっして戦を好む人ではなかったはずですよ。それゆえに獣人達とも今まで平和の道を歩み続けていたはずでした。それがいったい、いつからそのようになってしまったのか...」

過去を知っている者にとってはルガリア国王の人柄はあくまで、敵と戦う厳しさの中に無益な戦火を嫌う優しさを内包した、崇高な「器」を持った人物と映っていたらしい。

だが思い返してみると、夢斗が見たあの姿は他者を受け入れる気持ちなどまるでない、冷徹な機械のようであった。老人ではあっても、その体から伝わる覇気は徹底した敵意のようなものすら内包していたように思う。

変わってしまった国王、その意思を組んで刃を振るう軍隊、その兵士を狙った「心喰い」という凶行――何か繋がっているようで、それでいてどこか欠けている。答えに触れれそうで、まだ霞が行く手を阻んでしまい、身動きが取れない。

それを振り払うべく、リサが声を上げた。

「そうだ。王国で、変な研究室みたいなところを見つけたんです。そこにあった、重要そうな書類なんですけど...」

彼女は懐からあの書類の束を取り出し、ニンバムに渡した。皆が覗き込む中、ニンバムはそれをしっかりと受け取り、すぐに目を通す。

彼が解読を進めている中、光一が首をかしげる。

「城の中に研究所なんてあったの？」

「ああ。そんな雰囲気の一部屋だったよ。檻の中に動物が閉じ込められてたり、変な色の液体が瓶に並べられてたりな。その紙はわざわざ鍵付きで保管されてたやつを、くすねてきたのさ」

「へえ。じゃあ、ずばりここに、犯人の名前がネタバレされてるといいんだけどなあ」

光一の一言に、夢斗は「そうだな」と苦笑してしまう。そこまで上手くいくわけではない、と思いかけたその時。

「なるほど、これは――随分と、不可解な文章ですね」

思わず全員がニンバムを見る。夢斗も声を上げてしまった。

「え...ま、まさか本当に、ネタバレが...」

「犯人の名前までは、残念ながら。ただし、これを王国側が厳重に保管していた、となれば、何か見えてきたかもしれません」

ニンバムはその束を、光一に手渡した。まるで読み上げろ、と言っているかのようである。

「ええと、なにになに.....『秘術・心移し』の実行方法。必要なものは対象から取り出した細胞。そしてそれを繁殖させるための苗床としての肉体――なんだこれ？ 心移し、って？」

まるで分からず、誰しものがニンバムに助けを求めた。賢人の表情が曇る。

「心移し、ですか――かつて、とある魔導士が生み出し、そして彼の死と共に封印された禁忌の術です。ある人間から採取した細胞を元に、別の人間を『培養』する魔法ですね」

彼の口から告げられた事実に息を飲む。思わずリサが、不安げに問いかけた。

「人を...培養？ そ、それってどういう...」

「これを開発した魔導士は、ある一つの悩みを抱えていました。野心を持ちすぎた彼はどれだけ力を蓄えようとも、けっして人間が『老い』には逆らえない、ということに恐怖していたのです。いずれ必ず来る『死』。それを克服しようと、あるとんでもない術を開発しました。それこそ、この『心移し』なのです」

誰も、何も言わない。ただ黙って賢人の言葉を待つ。人気のない食堂の静けさが、妙に心を締め付ける。

「簡単に言えば、新たな肉体を作り、そこに自身の『心を移す』ことで肉体を乗り換えるということですね。つまるところ、古くなった肉体を犠牲に、新たな肉体に精神のみをすげ替えるのです」

そのとんでもない発想に、夢斗も声を上げてしまう。

「か、体をとっかえるだって？ まじかよ、そんな...SFの世界じゃないか」

「エスエフ、というのはちょっと存じ上げませんがねえ。肉体の取り替え――ただしそれに必要な代償は大きい。簡単に言えばもう一つ、魂を抜き取った肉体が必要なのです。ずばり誰かの死体ですね。しかも朽ちていては意味がありませんから、なるだけ新鮮な死体になります」

なんだか身震いがしてしまう。人間が生き続けるため、別の人間の体へと魂を移してしまう。そんな暴挙を、真面目に実行に移そうとした者がいたというのだ。

夢斗は何かを悟り、吠える。そして他の面々もほぼ同時に、その事実に辿り着いていた。

「不老不死――まさか、それを真面目にやろうとしているやつが、王国にいるっていうのか！？」

どこかで合点が行く。これにはリサ、そして光一が続く。

「じゃ、じゃあ...もし本当に王国がそんなことを行っていたというなら.....もしかして『心喰い』って」

「王国内部に犯人がいたってこと！？」

ぞくりと全員の背筋を冷たさが撫でる。腕組みをしていたキリウが、机を睨みながら言う。

「あり得るなあ。思えば、王国に人身売買の噂がたった後に『心喰い』は起こった。王国がこの実験を延々続けていたというなら、そら、随分多くの『実験体』が欲しかったやろな」

納得がってしまうのだ。ここまで出てきた全ての推測を絡めることで「心喰い」という存在の影が、うっすらとだが輪郭だけでも、見えてくる。

わなわなとりサは震えていた。汗すら浮かべ、彼女は恐る恐る伝える。

「不老不死...って、ことはですよ.....つまり、それって若さを取り戻せるってことですよ？ 長く生きれるってことですよ？」

ニンバムはこの問いかけに、一度だけ大きく頷く。リサは更に震えを押し殺しながら続ける。

自身の肩を思わず抱いていた。

「じゃあ……その術をやりたい人っていうのは…『歳をとった』人なんですよ？ もう長い間生きて…でもまだまだ、生き続けたいような」

まさか————いち早く察した夢斗が、リサの憶測を口にする。

怖い。なぜこんなに、一言を口にするのが怖いのだろうか。

核心が欲しかったはずだ。今まで追い求めていた答えが、目の前にあるはずだ。なのに、なぜだろう。それを暴いてしまうことが、たまらなく恐ろしい。

深呼吸し、震える手を握りしめる。

前を向き、力強く問いかけた。

「あの王様か————不老不死になりたいのは」

誰しもの体に電流のような衝撃が走った。一同の鼓動がそれぞれのペースで、しかし着実に加速していく。

わなわなと震え、光一が言う。

「待ってよ……じゃあ、これってもしかして————全部、自作自演ってこと？ 『心喰い』も何もかも、実験材料を手に入れるための、計画された殺人だったってこと!？」

汗が湧き出る。紐解いてしまった事実が、ただただ恐ろしくてしょうがない。

そんなおぞましい所業が、あっていいのだろうか。己が力を手に入れ、しかしどうしても敵わない「老い」という存在を克服すべく、自身が生き残るための「秘術」を追い求めた。人身売買で足がつくことを恐れ、ついには「心喰い」という架空の狂人を作り上げ、実験に使用する死体を作り上げていた、としたら。

リサだけでなく、夢斗や光一まで震えが止まらなくなる。気温が急激に下がったように錯覚してしまった。冷たい何かが、心を鷲掴みにしているかのようだ。

この問いかけに、視線を落としたままニンバムが答えた。

「あくまでこれらは仮説——ただ確かにそれが、現段階での一番筋道の通った説明に思えます。しかも厄介なことに、この『秘術』は——かの大罪人・ヴァドスを作り上げたものなのです」

思わず、呼吸を忘れた。たまたま王立魔導機関で見つけた事実までが、ここに繋がる。

「これはひょっとすると……とんでもないことが起きているのかもしれませんが。かつての邪悪な魔導師が行おうとした理想を継いでしまった人間がいる、と。『心移し』は、ヴァドスが討たれたことによって未完成のまま、闇に葬られたはずです。ですが、それを受け継ぎ、完成させた者がいたとすれば…」

終わったはずの邪悪な意志が、再び王国という聖域の中心で燃えあがろうとしている。それこそが獣人、そしてルガリアが置かれた現状ということなのか。

うつむき、何も言えない。結果から言えば、もしかしたら夢斗とリサが掘り当てたものは、偶然にも事件の核心だったのかもしれない。

だが全てが明確になったとはいえ、次にどうすべきかが分からない。国王が国を使って行おうとしている凶行。それを止めるために、何をすべきなのか。早くしないと、このままでは戦争は免れない。これは言わば、大規模な証拠隠滅なのだ。

夢斗は一同の顔を見渡す。誰も何も言えないまま、押し黙っていた。

無理もない。殺人犯を見事言い当てたからといって、それが実際、何になるのだろう。もしこれが事実なら、これから一同が戦いを挑もうとしているのは、ルガリアという大国の頂点――すなわちそれは、国そのものと戦うということだ。

戦争と、何が違うんだ――夢斗も置かれた状況に、歯噛みしてしまう。

しばしの沈黙。遠くから聞こえる獣人達の声や戦の準備の音が、どんどん小さく、意識の片隅へと追いやられる。

その静寂を、あの能天気な声が砕く。

「困ったおじいちゃんだね、ほんとー。わがままにもほどがあるよお」

マウマウの一言に全員が顔を上げた。不思議そうに見つめる皆に、むしろマウマウが驚いている。

「だって、そうでしょう？ 長く生きればいずれ、死んじゃうよ。誰だってそりゃ怖いし、嫌だもん。だけどさあ、だから悔いがないように一生懸命生きてるんだよ。食べたいもの食べて、やりたいことやって、寝たい時に寝て――それを自分だけ、もっともって、子供だねえ」

あまりにもあっけらかんとした、気の抜けた一言である。

だがその楽天的すぎる声が、一同の固まっていた心に、ヒビを入れた。

夢斗は己の手を見て、考える。

その通りだ。こんなのただの、子供のわがままだ――長く生きたい、というただの欲。人生のどこかで誰もが抱いてしまうであろうわがままを、あの老人は本当に成し遂げようとしている。あらゆる犠牲を顧みず、人の命をもてあそび、自分勝手に欲のみを追い求めている。

とてつもない巨悪に見えた。しかし、心の中に浮かび上がった国王の大きな影が、マウマウの一言ではっきりと定められる。

「良いわけない、こんなの」

夢斗の一言に振り向く一同。握りしめた拳を見つめながら、内に湧き上がってくる感情を吐き出した。

「たったそれだけのために...そんな下らない理想のために、皆戦わされてるのか？ 必死に命を削って、傷まで負って、痛い思いしながら、爺さんの『長生き』を助けようとしてんのかよ。なんだよ、これ？」

城で見た、国王の姿が蘇る。荘厳な装飾を施した冠。贅の限りを尽くした素材をちりばめた、高級な法衣。

それを身にまとうのは、ただの人の形をした「邪悪」そのものに他ならない。

そう思うと、なんだかやるせなくなる。胸の奥底に、なにかムカムカとした言い知れない感情が湧き上がってくる。

今の夢斗では、その心を言い表すだけの言葉は持ち合わせていない。しかしこの先いずれ、それが何かを理解する時がくる。

彼が無意識に抱いた「邪悪への怒り」――夢斗は前を向き、吠えた。

「止めないと.....こんなの許して良いわけがねえよ。こんなの、なんの『大義』も『正義』も

ない！」

大義が何か、正義が何か。今の夢斗には、まだそれらをはっきり定義することなどできない。もし問われれば答えることなど、できないのだろう。

だが、心が訴えかける。その簡潔な言葉を受け、本能がそう叫んでいる。

こんなものではない。きっと、こんな「どす黒い」ものじゃあない——そう思うからこそ、考えるよりも先に言葉が出た。

少年から放たれた「強さ」に、誰もが驚いていたのだろう。あのニンバムですら一瞬、言葉を失っていた。

しかし、やがてすぐにいつもの笑顔を取り戻し、頷く。

「ええ。個人の私利私欲のため、滅ぼされて良い命なんてありません。是が非でも、止めなければいけませんね」

賢人の笑顔が、その場の空気を解きほぐす。

やらなければいけないことは決まっている。恐怖や不安に揺さぶられた心は、なんとか繋ぎ止められていた。

光一が真剣な眼差しで、問いかけた。

「じゃあ、次はどうしよう。ターゲットは決まったんだ。なら、あとは行動あるのみだよ」

これには、腕組みをしたままのキリウが気だるそうに言う。

「せやかて、どないするんや？ 相手は『鉄壁』で有名なルガリア王国の親玉。そう簡単に改心してくれるとも思わんがな」

悔しいがそれは事実だろう。なにせ、問いただすにもその国王はルガリア王国の最深部、城の王座にいるのだ。どうやってそこまでたどり着き、そして真実を引き出せというのか。

光一が「う～ん」と顎を撫でる。

「こういうのって、やっぱ『物的証拠』だよな。この紙はかなり強い証拠だけど、関係ないって言われてしまえば、それまでだもんなあ。もっとう指紋とか、血痕とか、DNAとか、そういうんじゃないとき」

おそらく、推理小説と同じ感覚で考えているのだろう。確かにそういったものがあれば大抵犯人は言い逃れできないのだが、この魔法だらけの世界で同じ道理が通用するようには思えない。

だが、この一言がリサの心に火をつける。

「こういう時こそ、現場検証ですよ！」

がたんと立ち上がる少女に、全員が驚く。少女の青い眼差しが、力強く煌めいていた。

たじろぎながらも、夢斗は隣のリサに問いかける。

「げ、現場検証だって？」

「そうです！ やっぱり、証拠は足で探すものですよ！ 事件はアジトで起こってるんじゃないんです！」

おおよそ、彼女もまた刑事ドラマか何かに触発されたのだろう。リサはそのまま力説する。

「今の私達なら、現場から何かヒントを見つけれるかもしれません。一見意味のなさそうなものでも、もしかしたら残ってるかもしれませんよ！」

確証はやはりない。それでもその行動の爆発力には毎度毎度、感服してしまう。

彼女の提案にはニンバムも賛成した。

「それが良いかもしれませんがね。当時『心喰い』事件が起こった際、我々も現場は調べたのですが、今のような発想には至っていませんでした。もしかしたら見落としはあるかもしれませんが」

やはりこの賢人に納得してもらおうと、どこか勇気が湧いてくる。夢斗らは互いの顔を見合わせていた。

しかし、彼は少しだけ困ったような表情を浮かべる。

「ただ、ちょっとタイミングが悪いですね...できれば我々も同行したいのですが、この後、グレンに会いに行かねばならないのです。なんでも、今後のルガリアに対しどう打って出るべきか、を話したいんだとか。これはこれで、きちんと説得しておく必要はあるかと」

元々、ニンバムら「融和派」の二人が呼ばれたのは、そういう理由なのだろう。となれば、彼らには「武力派」であるグレンをひとまず説得してもらうのが賢明だ。

外はもう夜も深まっている。これから出るのは、少しおっかないというのが本音のところだ。

光一は悩ましげに問いかけてきた。

「どうする? 『心喰い』事件の最初に発生した場所なら、僕も知ってるよ。案内はできるけど、森の中だからちょっと危険かも...」

夜の森、しかもどんな生物がいるかも分からない危険地帯に足を踏み入れるということに、少しだけたじろいでしまう。明るくなってからの方が良いような気もしたが、そこまで悠長に待っている余裕もないような気はした。

事は一刻を争う――声をあげたのはリサだ。

「大丈夫です。私も、こっちで夜の森や砂漠や荒野で戦ったことはあります。急がないと、王国の準備が整ったら、攻めてくるかもしれないですよ!」

それはその通りなのだ。彼らがこちらの出方を待つとも思えない。王国はもはや準備が出来次第「滅却」作戦を実行に移すだろう。

窓の外の漆黒を見つめ、それでも夢斗も覚悟を決めた。

「俺も行くよ。このまま朝までなにもしないまま待つなんて、耐えれない。連れて行ってくれ」

夢斗の決断に微笑むリサ。光一も「そうくると思った」と苦笑する。

リサは笑みを浮かべ、夢斗らに告げた。

「大丈夫ですよ。こっちは四人もいるんですから」

「え、四人? 俺らだけなら、三人なんじゃ――」

「私と、夢斗さんと、光一さんと、キリウさんと四人ですよ」

無邪気なりサの声に、ワニ男がたまらず声を上げる。

「はあ、なんでやねん!? 勝手に頭数に入れんなや!」

「だって私達を守ってくれるって契約したじゃないですか。お菓子の材料や作り方、知りたくないんですか?」

たまらず立ち上がるキリウ。皆が大きな体を見上げる。

「あれは脱出するまでやろが、それで契約成立やろ！」

「そんなこと誰も言ってないです。私は『クレイドルにいる間、私達が困ったら守ってください』って意味で言ったんです」

「はあ、アホ抜かすなやこのチビ女！」

夢斗、光一が「やばい」と思った次の瞬間、リサが机の下に潜り込んで鋭い蹴りを放っていた。炸裂した箇所は、すねなんかよりもっと痛い場所である。股を押さえ、悲鳴をあげるキリウ。

「うあああああああああ！？」

「男らしくないですよ。屁理屈ばっかこねてると、女の子に嫌われますからね！」

屁理屈はどちらなのか、と心には思ったが、保身のために二人は黙る。相変わらずとんでもない力技で、リサはキリウをねじ伏せて見せた。その様子を見てニンバムは苦笑を、そしてマウマウは大爆笑していた。

「こんのボケ...覚えとれよ...」

「そっちこそ、ちゃあんと契約内容は覚えておいてくださいね。さっ、そうと決まれば急ぎましょ」

キリウのことなどお構いなしに、決起するリサ。相変わらず最後の最後は、彼女の破天荒な強さに突き動かされる形となった。

苦笑を浮かべ、それでも夢斗は窓の外を見た。一寸先すら見えぬ闇が広がっている。

この奥に、ついに「真実」があるというのだろうか。それに触れるのが待ち遠しいような、それでいて少し怖いような、複雑な気持ちだ。

だがそれでも、もはや体は震えない。拳をぎゅっと握り、前を向く。

真っ先に目に入ってきたのは、すぐ横で出発の声を上げる、まるで太陽のような髪の色をした少女であった。

開け放たれた窓から吹き込む風が、シルクのカーテンを揺らす。ベッドに横たわったままルーメルは腹部を押さえ、伝わってくる痛みに歯噛みした。

傷は随分と癒えていたが、あの時の苦い思いは拭い去れない。侵入してきた三人のレジスタンスー彼女の名を知りはしないが、特にリサによって叩き込まれた魔法の斧による一撃は、女剣士の肉体の奥の奥に重く響いていた。

情けない話だー昨日の出来事を思い返し、歯噛みする。

ルガリア王国にて最強と呼ばれる歩兵団の、仮にも副団長を務める自分が賊に遅れをとった。それも屈強な戦士でもなければ、荒れ狂う獣人にでもない。まだ年端もいかぬ、無邪気な少女の一撃で、だ。気を失い、目が覚めた時はこの医務室のベッドに横たわっていた。

窓の外に広がる城下町の夜景。人々が暮らしている町の明かりを見つめながら、ルーメルは考える。

不思議なことに、あれだけの大敗を喫したにも関わらず、なぜか悔しさが湧いてこない。いや、正確には湧きあがろうとする後悔よりも何よりも、別の感情が現れ、肉体を支配している。その感情について自問自答するが、先程から答えが出ない。何度も答えに辿り着きかけるが、導き出した「それ」に納得がいかない。

特にルーメルが色濃く覚えているのが、獣人の少年と、背の高い人間の少年だ。

戦いの最中だというのに、まるで旧知の仲のように語り合うあの姿。敵意や戦意とは関係なく、不敵に笑うあの二人。

なぜだろう、あの光景に不安にも似た「懐かしさ」を感じるのは。

視線を窓から、ベッドの横に置かれた「剣」へと移す。今日まで一心不乱に振るってきた自身の愛剣だ。数多の戦場をくぐり抜けてきた相棒は鞘に収まり、戦いの時を待っている。

その剣を見ると、今度は言い知れない不安が襲いかかった。これまでそんなことを考えることもなく、日々王国のために尽くしてきたはずなのに、今ではただひたすら怖くてしょうがない。

私は一体、いつからこの剣を振っていた――始まりはいつだ。剣を手に取り、いつから王国に忠誠を誓った。

そんな中、ふっと思い浮かぶ光景がある。目を閉じ、暗闇の中で臃げなそれを必死に具現化する。

縦横無尽に飛び交う怪物。けたたましい咆哮に埋もれそうな少女の悲鳴。

随分と彼女はおびえていて、こちらになにか分からないが、訴えかけている。見たこともない格好をした女性だ。幼い少女は、腰を抜かしていた。

戦い、退け、振り払う――最後の最後に自身の腹部を触り、手のひらを見る。

真っ赤に濡れていた。それは、あの少女の血ではない。

一体これはなんだ。この覚えのない記憶はなんだ。

ルーメルは静かに、湧き上がる震えを噛み殺し、問いかけた。

私は一体、何を知っているんだ？

夜風が美しい肌を撫で、熱を奪う。机の上に飾られた一輪の白百合が、不安げに、臃げに揺れた。

喰らい人

予想はしていたが夜の森は闇に包まれ、明かりがなければ一寸先すら見えない。現場に到着してからも、夢斗らはカンテラの光だけを頼りに必死に周囲を探る。光が揺れるたびに闇が洗われ、その隙間を確認し続けた。

「夢斗く～ん、そっち、どう～？」

「駄目だ、なんつにも。そっちは？」

「草と、木と、また草と～。ああ、魔女イチゴはあったから取っといたよ～」

「お前、なにしてんだよ。ちゃんと探せっての」

マイペースに探索を続ける二人。その別方向からリサも声を上げた。

「う～ん、手がかりゼロですねぇ。やっぱり、そうそう簡単に証拠は見つからないですねえ」

随分こうして闇の中で探索を続けているが、まるで進展はない。そんな中、キリウはさっさと探索を諦め、離れた場所でたき火を始めてしまっていた。夢斗らも休憩がてら、一度その周囲に集まる。パチパチと音を立てて燃え盛る火が体を温めてくれた。

「はあ、せやから散々、言うたやないか。こんな真夜中に探し物なんざ、よせって」

「うっさいですねぇ。私達には時間がないんですよ。寝ている間に戦争が始まったらどうするんですか？」

リサの頑固な姿勢に、勘弁してくれ、という表情を浮かべるキリウ。彼はなにやら火の側でやかんを温めている。

キリウの隣には、この森に棲む怪物の死体が積み重ねられていた。ここにたどり着くまでに夢斗らが遭遇し、打ち倒したものである。歩く樹木・トレントの子供や、鉤爪を持つ赤い猿。樹木を体に生やした恐竜など、様々なラインナップだ。

4人で協力して打ち倒したそれを、一つ残らずキリウは持ち帰った。なんでも、せっかくなので素材としてばらすことで、商品に変えるらしい。

炎に照らされて浮かび上がる怪物達を見て、光一が問いかける。

「そんなの、本当に商品になるの？ 一体誰が買うのさ」

「アホやなあ、トレントから出るオイルは嗜好品になるし、このサルの牙はナイフに使える。肉は食用、革はなめしに。骨も内臓も、全部使い道があるんや。捨てるなんてもったいないわ」

商人である彼には、出会う怪物の全てが「金」に直結しているのかもしれない。思わず光一は「へえ～」と大きなため息を漏らす。

そんな中、休憩する一同にキリウは言った。

「ほんま、おたくらようやるわ。特にそっちの背の高いのと、こっちのチーお嬢ちゃんは、元々別世界の人間やろ？ 今回の件に、ここまで肩入れする利点が思いつかんわ」

チビ、と言いかけて凄まれ、また言葉を変えるキリウ。彼は夢斗とリサがここまで熱心になる意図が理解できないらしい。

キリウはやかんを取り出し、コップに湯を注ぎ始めた。湯気が立つと、なにやらハーブに近い香りが鼻腔をくすぐる。ポコポコにへこんだ金属のカップを、彼は差し出した。

「遙か南方、ザビーヌ砂漠で取れる熱帯ハーブを乾燥させた茶や。温まるで」

唐突な心遣いに困惑してしまう。夢斗は受け取り、冷ましながら一口飲み込んだ。爽やかな中にもピリリとした辛味が広がる、不思議な味だ。体の芯が暖かくなってくる。

「あ、ありがとう」

「はい飲み込んだ。銀貨2枚ね～」

思わず「ええ？」と声を上げてしまう。受け取った光一も、眉をしかめている。

「冗談や、アホウ。金取るなら、最初から注ぎもせんわ」

「な、なんだよそれ。素直じゃないの」

光一が文句を言いながらも一口飲み込み「あっづ！」と叫ぶ。慌てて息を吹きかけて冷ましていた。

リサにカップを渡し、やかんを置きながらキリウは告げる。

「お前らの来た別の世界ってのは、争いもないんやろ。平和に暮らせてる世界から、わざわざこんなドンパチやっとなる所に来て、なにがしたいんや、ほんま」

夢斗らの世界に争いがないかと言えば、きっとそんなことはないのだろう。大なり小なり人は傷付け合い、日本ではない何処かの国では戦争だってある。見えていないだけで、もしかしたら本質は同じなのかもしれない。

だが、少なくとも高校生として過ごす夢斗にとっては、日常はなんら危険のない、生きていく分には申し分のない環境のはずだ。家族がいて、雨風をしのげる家がある。娯楽もあって、家にいながら世界を見ることもできる。

そう考えると「魔法」はあっても、この異界・クレイドルは随分と荒れた場所のようにも思えた。

「なにも戦争を終わらせるって目的が、最初からあったわけじゃないよ。それはあくまで、レジスタンスに頼まれたってのがきっかけだった。多分本当はもっと別――俺はこの世界と、どうやら因縁があるみたいだからさ」

その一言に「ああ？」と不思議そうに声を上げるキリウ。夢斗はハーブティーを飲み干す彼に、今までの経緯を説明した。

「ほお...んじゃあ、お前さん、いなくなったその～『くらすめいと』っちゅうやつを探しとるんか。んで、その第1号が、そっちの犬っころ君てわけかい」

随分な言われように、少しむすっとする光一。だが実際的確ではあるから、夢斗は苦笑してしまう。

「まあ、そんなところだよ。きっとまだ皆、こっちの世界のどこかにいる。だからちゃんと探して、どうにか元の世界に帰ってやりたいんだ。その中で、『オーバー』って力を役に立てる場所が、たまたまあった、ってことだよ」

レジスタンスという存在に加担するという予定など、思えば当初は考えもしなかった。だが人々が戦う姿を見て、いずれ来るであろう激突の時を予感し、夢斗、リサはまず対立問題を解消しようと思立ったのだ。

数日前の出来事のはずなのに、色々なことがありすぎて随分と懐かしく思えるのが不思議である。

「なにより、光一がお世話になっていた人達がこうして危機にさらされてるんだ。そんな人達を放っておいて元の世界に帰るってのも、おかしいって思ったんだよ」

「は～ん、なるほど、ね。若いなあ、自分。まだまだ青臭いんやね」

その言葉の意味がいまいち分からず、不思議そうにキリウを見つめてしまう。彼はまた一口、ハーブティーを飲み込んだ。ワニの鋭いまなざしの中に炎が映りこみ、踊っている。

「このクレイドルっちゅう世界はお前さんらの世界とは違って、まだまだ開拓されてる途中や。どいつもこいつも武器を背負って『冒険者』って肩書きで、一攫千金を狙おとる。ある意味、力あるものが全てを持っていく、って言うても過言やない」

まさに弱肉強食の世界、だと言いたいのだろう。法があるとはいえ、それは国や村といった限られた空間の一取り決めに過ぎない。誰もが戦う道具を持ち、力を体現できる「魔法」を有する。

「ある意味、今回のレジスタンスと王国のいざこざも、本来ならどっちかが勝って終わるだけの話やったのかもしれん。何が正しいか、やない。勝ったから正しい、と歴史が作られるんや」

これには思わず、リサが反論する。

「そんな...それじゃあ、あまりにも乱暴ですよ。力で全部ねじふせた人が正しいなんて」

「しゃあないやろ。それに文句を言う奴はおらへん。それこそ、力で上から叩き潰される。今はそういう時代や」

まさにその構図こそ、今回のルガリア王国のそれに近いのかもしれない。彼らは「心喰い」というきっかけを使い、蓄えた戦力で歴史を変えようとしているのだ。

それが正しいかどうか。それは勝った者のみに語り継ぐ権利があるのだろうか。そう思うと、なんだか寂しくなってしまう。

「せやから、おたくらが首い突っ込んだんは、思っとる以上に厄介事やったっちゅうこっちゃ。ご愁傷さまやな」

彼は腰の皮袋に入れていたチョコレート菓子を取り出し、器用に包み紙を破る。大きな口にそれを頬張り、ご満悦な声を上げた。

「こんなうまいもんがある、ぬくぬくした世界におられるなら、ワイなら二度と出えへんがな。あったかい部屋で、商売の算段練っとるほうが安全やで」

夢斗達からすればその割り切りは、どこか寂しい考え方だと思う。だが、もし自分がこの世界に生まれ、この戦乱の中で育っていたら、どうだろうか。己が身を守り、脅威を退けながら生きなければいけない世界からすれば、夢斗らが過ごしてきた日常のなんと安全なことか。

とても言い返せない。だからこそ、夢斗はまず彼に聞いてみた。

「なあ、キリウ。あんた、家族はいないのかい？ どこか故郷があるのか？」

「なんや、急に。元々、親の顔なんざ知らへん。孤児としていろんなところ転々として、どこに寄ったかすら、忘れてもうたわ」

彼もまた、このクレイドルという荒れた世界で生まれ育った一人なのだ。生まれや過去ではなく、彼にとって必要なのは商売人としての「今」だ。

このキリウというワニ男を作り上げているのは、徹底した「商売人」としての生き方らしい。過去や生まれ、家族。彼にとってそれは、こちらの世界では煩わしいだけなのだろう。

「ワイからすれば獣人達もこんなことで命削るなら、どっか別の地で生きていける道い探した方が、全然マシやで。一銭にもならん戦争なんざして、何が残るっちゅうねん」

吐き捨てるように言うキリウに、光一はたまらず反論する。

「そこまで言わなくてもいいじゃんか。僕だって元々、ここに住んでたわけじゃないけど、グレン達の気持ちはちょっと分かるよ。昔から自分達が生きてきた場所を否定されて、一方的に侮辱されたんだ。怒るのもしかたないよ」

「ほお～。『誇り』っちゅうやっちゃん。ワイには理解できんで、んなもん。金え生まへんもん、そこまで執着するなんてな」

皮肉を吐き捨てるキリウに、光一は「あのねえ」と声を荒げた。

だが、口論に発展しそうになる二人を、彼女の声が遮る。

「お金では手に入らないから、価値があるんですよ、きっと」

キリウだけでなく、夢斗と光一も振り向く。リサはカップを両手で持ったまま、夜空を見上げている。黒い海に浮かぶ無数の星空を眺めているのだろう。

「誰かとの繋がりや、生まれてきた場所。出会った人との絆や、そこで過ごす日常。あなたが言うように、そんなもの、いくら重ねてもお金は生まれません。でも、だからお金じゃ買えません。きっと人は、それが一番欲しいって思うんですよ」

少女のまっすぐな瞳を受け止め、キリウは「ああ？」と眉をひそめた。その姿を見ても、リサは笑う。

「初めてこの世界に来た時、心が躍りました。それは今でも変わりません。人とのぶつかり合いを見て、戦う怖さを知って――でもやっぱり、この世界を嫌いにはなれませんでした。不思議な力を持っていて、全く知らない生き物がいて、そこに別の文化がある。もっともっと、この世界を知りたいって思います」

そこで、リサはふっと視線をカップに移した。少し冷めたハーブティーは、彼女の顔を浮かび上がらせ、揺れる。

「そんな世界で誰かが傷付くのは、悲しいですよ。笑ってなきゃ、幸せはやってこないです。たとえ家族じゃなくても、知り合っただけの関係でも、その人が泣くのを見たくないなんて、難しいことじゃないと思うんです」

どこまでも利益を生まない、しかし「価値」のある言葉。その一言にキリウは調子を狂わされてしまったらしい。どこかバツが悪そうに、焚き火を見つめている。

夢斗も火の中心を見つめたまま、呟く。

「そうかもな。俺だって今まで、クラスの皆と過ごした日々が大切だなんて分からなかった。誰もが当たり前を持っていて、当然のように手に入れられるものだって。けどさ、いざ無くなってみると、昔過ごした思い出にどれだけの価値があったのかが、良く分かるよ」

夢斗の独白をリサ、光一、そしてキリウは黙って聞く。リサと同じように星空を見上げると、そこには緑色の満月が浮かんでいた。

「単純なんだろうな、きっと。人がなんでそれを欲しいのか。そりゃあ、当然なんだ。心が『欲しい』と思ってるからなんだよ。お茶でもお菓子でも、そして『友達』でも『誇り』でも――それに近付こうとするから、人は歩いていけるんだと思う」

かつて、記憶と過去を失った日々を思い返す。毎日は当たり前のようにやってきて、勉強をし、食事をとり、眠る。その繰り返しは確かに時を刻み、夢斗の中に歴史を作り続けていた。

だが、それは歩いていたのではない。ただ、ただ、不可抗力として過ぎていく時間の流れに、身を任せていただけだ。死んだ心を持ち、曇った目で見たくもない現実を映し続けていただけだ。

心臓は確かに動いていても、そこに「心」などない。ただの傀儡と同じだ――夢斗はなぜだか、体に力が湧き上がるのを感じていた。

彼の姿を微笑みながらも見つめるリサ、光一。その中で、キリウはどこかあつけにとられたように、口を開いていた。

「ほんま、おかしなやっちゃな、お前ら。大商人になって、自分の宮殿でも立てて、豪遊して暮らす——そんなことしか考えられへんワイからしたら、聖人君主様やで」

あくまで皮肉を吐きながら、彼はまたチョコレートの包みをやぶり、口に放り込む。随分と気に入ったようだ。

この様子に、光一は諦めたようにため息をつく。

「まったく、徹底的な商売人だな。やっぱこの喋り方の人って、どこの世界でもこうなのかな？」

「いや、まあ、関西弁は関係ないとは思うけどな、商売人氣質に」

苦笑してしまう夢斗。あくまで「関西の人間」＝「商売人」というのは、少し偏ったイメージだ。もっとも、夢斗も分からなくてもないだけに、おかしくなってしまう。

この言葉にキリウが眉をひそめる。

「なんや、そのカンサイベンっちゅうのは」

「その喋り方のことだよ。僕らの世界でも似たような喋り方の人はいっぱいいるからさ。大阪とか特にそう」

またキリウは「オオサカ？」と首を傾げている。彼らに日本の地理が分かるわけもない。ここで、リサも少し意地悪に声を上げる。

「じゃあやっぱり、たこ焼きとかお好み焼きとか、好きなんですかね。あと串カツに焼きそばに——」

キリウに聞いても分かるわけではないが、リサは関西の食べ物を思い浮かべているようだ。

夢斗はまた少し笑ってしまう。

光一は我慢することなく笑い声をあげた。

「でもそう言えば、僕らのクラスにも一人いたよね。関西弁の男子！ やっぱり、たこ焼きとか好きって言ってたな。ソウルフードなんだよ、きっと」

「ああ、いたなあ、そういや。名前、なんつったっけ...」

「う～ん、思い出せないよ...こう考えると、随分と異界のせいで記憶が曖昧だなあ、僕。クラスメイトの名前言えって言われたら、無理かもしれない。やばいよ、これ」

夢斗も言われて考えてみるが、確にかつてのクラスメイトの名前が、まるで出てこない。これにキリウが思わず突っ込む。

「なんや、昔の仲間探そうとしてんのに、名前も思い出せんのかいな」

「まあ、そうなんだけどなあ...やっぱり、まだ俺の記憶が全部戻ったってわけじゃないらしい。だけど靡げには覚えてるんだ。どんな奴がいたってのは」

思わず後ろ頭を掻いてしまう。まだまだ、この脳みその中には鍵の掛かった扉が無数にあるようだ。

困惑する二人に、リサが笑いながら励ます。

「大丈夫ですよ。だってこの数日で、色んなことが思い出せたんです。これから探していけば、きっと全部思い出せますよ！」

焚き火に照らし出される底なしの明るさが、なんだか心地良い。吹き付ける夜の寒さも、かすかに和らいた気がした。

夢斗もなんだか、かすかに笑みを浮かべ「そうだな」と揺れる火に視線を落とす。

ハーブティーを飲み干す夢斗。おもむろに立ち上がり、カンテラを持った。

「どこ行くの、夢斗君？」

「手がかり、探さなきゃいけないだろ？ その前にちょっとトイレ行ってくるよ」

トイレと言っても、森の中なのだからどこかの陰でやるしかない。「気をつけてね」という光一に答え、三人から離れていった。

夢斗を見送った光一が再び腕を組み、視線を焚き火に戻したまま唸る。

「う～ん、僕もちゃんと思い出さないとね。誰だったかなあ、あれは。絶対いたんだよ、関西弁の子。わりと僕らともつるんでたしさあ」

「なんや、まだ言うとるんか」

「一度、気になるとダメなんだよ、僕。なんだったっけなあ、くっそお」

かつてのクラスメイトの名を必死にひねり出す光一。リサは微笑み、残っているハーブティーを飲む。

そんな一同のやり取りを、先程の夢斗の言葉を思い浮かべながらキリウは眺めていた。

心が欲しいと思うか、か——その一言が、商売人の気持ちを妙に揺さぶる。

自分は何が欲しいんだろうか。もちろん、他人に聞かれれば「金」と即答するはずである。金銀財宝なんでもござれ。金になる木は大歓迎。そうやっていつだって、この世界を渡り歩いてきた。

だが、初めて抱いたこの感情はなんなのだろうか。異世界から来たという、この少年、少女を見ていると、妙に決意が揺らぐ。どんな偉い人間の演説を聞いても鼻で笑っていた自分が、今ではすっかりと思悩んでしまう。

思い返せば、彼らだけではない。この数日間、妙なことに巻き込まれたせいか、自分自身の中にもなにか言い知れない「不安」のようなものが湧き上がってくる。

獣人と王国の戦いを垣間見たからか。その中で必死に「無価値」を追い求める彼らを見たからか。

いや、そのどれとも違う――うまく説明できないが、この心のざわめきは、そんなありていなものではない。

また一つ、口にチョコレートを放り込む。包み紙に書かれた英語を眺めていると、どうにも妙な気分になってくる。

既にさんざん食べてきたはずの、異界の甘い菓子。

キリウという生粋の商人の中で、甘さだけでなく、何かいつもとは違う感覚が芽生え始めていた。

一方、夢斗は焚き火の灯りを確認しつつ、少し離れた茂みの奥で用を足し終えた。水筒の水で手を洗うと、夜の冷たさもあり強烈に目が覚める。

再び星空を見上げ、ため息をついた。夢斗らが暮している街では、ここまで見事な星の海は見えない。目の前に広がる世界だけを見れば、この異界・クレイドルは美しく、胸が踊ってしまう。リサの言うことも、理解できるような気がした。

流れ星に少しだけ目を奪われてしまう。しかし、背後から聞こえた足音に、慌てて振り返った。

「なんだ、光一か？ それとも、リサか？」

足音の主に問いかけるが、闇から返答はない。よくよく確認すると、まだ三人は焚き火を囲んで談笑を続けている。

不審に思い、再び闇の中を見つめた。もう一步、木の枝を踏みしめる音が確かに聞こえた。

「誰かいるのか？」

暗闇に吸い込まれた言葉はやはり戻ってこない。違和感を抱き、少しだけ身構える。

野生動物か、それとも――全身に緊張が走る。

パキリ、とまた小枝の折れる音が響いた、次の瞬間であった。

一瞬、何が起こったかは理解できない。闇の中に浮かび上がった「それ」に反応し、飛び退く。ブーツが意思によって起動し、高速で肉体を押し出した。

飛び退いた瞬間、背後にあった木の幹が音を立てて砕ける。乾いた音に息を飲んだ。

なんだ、あれは――木の幹に残された傷跡を見て、絶句してしまう。正確に言えば砕けたのではない。大木の表面が、ごっそりと「えぐられて」いた。スプーンか何かですくいとったように、丸くえぐれている。

視線を戻し、構えた。ようやく闇の中から歩み出たその人物を、視界に捉える。

奇妙な格好をしていた。肌は一切露出しておらず、全身を黒い革の衣服が包む。同じ素材の手袋、ブーツを履いている。顔にはとげとげしい仮面をかぶっており、男か、女なのかも分からない。

王国の手の者か――真っ先に考えたのは、それだ。夢斗らを追って王国から手配された襲撃者。そう予測し、構えを作る。

だが、なんだか妙だ。理由は分からないが、その謎の襲撃者から伝わる言い知れぬ気配に、身震いがする。今まで出会った、どんな人物のものとも異なっていた。

ゴォ、と風を切る音が聞こえ、なにかが迫ってくるのを察した。夢斗は再び飛び退く。今度は先程まで立っていた地面が、音を立ててえぐれていた。木の葉も、木の枝も、土も、まとめて消え去っている。

思わず、夢斗は叫んだ。

「皆、来てくれ！ 敵だ！」

向かってくる気配に再び真横に回避する。しかし、急激な圧力が足首を締め上げた。不可解な力に絶句してしまう。

ギリギリと締め上げられる足。だが暗闇に溶け込んでいて、何が巻きついているのかが分からない。引き抜こうと足掻くも、まるで効果はない。

やばい、と思ったその時、とてつもない力で足が引っ張られ、夢斗の体が宙に浮いた。地面の硬さが足裏から消え、悲鳴を上げてしまう。

宙に釣り上げられ、手足をばたつかせて暴れることしかできない。真っ黒な「何か」が確かに足を絡め取っているの

だが、目を凝らしても実態が分からないままだ。

仮面の人物はこちらをただ、直立して見上げている。その無機質な仮面を睨みつけ、歯をむき出しにして威嚇した。

しかし見えない何かは、そのまま夢斗の体を引きずり落とし、地面に叩きつけた。落下し、受身すら取れず地面の上を跳ねる。衝撃で呼吸が止まり、痛みが炸裂部から全身へと広がった。

容赦ない一撃に体の動きが止まる。足首の圧迫感は消えたが、代わりに全身を包む痺れと熱さに、汗が絞り出された。

視界が霞む。地面に這いつくばり、目の前に立つ襲撃者を睨んだ。奴は何も言わず、両手を下ろしたままじっとこちらを見ていた。

一歩近付く襲撃者。だが、黒い影は即座に身をひるがえし、飛び退いた。一瞬遅れて、数発の矢が木に突き刺さる。

「夢斗君っ、大丈夫!？」

駆け付けた光一が、矢を構えたまま夢斗の前に立つ。リサが肩を貸し、起こしてくれた。

「しっかりしてください、夢斗さん！」

「あ、ありがと……大丈夫、肩を打っただけさ…」

そうは言ったものの、軽く触れただけでビリビリと痛みが走る。それでもなんとか両の足で立ち上がり、前を向いた。

援軍が駆けつけてもなお、襲撃者はまるで動じない。静かに立ったまま、こちらを向いて黙っていた。

「王国のものか？ にしては、随分とけったいな格好やな」

キリウも駆けつけ、その手に愛用の大斧を携えていた。気だるそうな眼差しが、それでもあらん限りの敵意を襲撃者に叩き込む。

互いに武器を構え、真っ向から向かい合う。それでも襲撃者は一言も発しない。

痺れを切らしたのは、光一だった。

「随分と無口じゃなか。孤高のダークヒーローでも気取ってるわけ？」

挑発し、相手の出方を待つ。ついにこの一言に、襲撃者は答えた。

「土地を守る英雄を気取る、お前達も同じようなものじゃないか」

仮面越しの声に言葉を失う。まるで機械で変換したような無機質な音声だ。性別すら分からない。

瞬間、問答無用でキリウが踏み込む。大斧が薙ぎ払われ、空気をかき乱した。

しかし、ひらりと飛び退く襲撃者。黒い影を捉えきえることはできず、分厚い刃が空振ってしまう。

立て続けに仕掛ける光一。矢を連射するが、これもまた鮮やかな体捌きでヒラヒラとかわされてしまった。常人の動きではない。

苛立ちを露わにした光一が吼える。

「こんのっ、じっとしてろお！」

腰に下げた瓶を開け、そこから「水」の力を発動する。闇夜の中で彼の瞳が水色に光り、無数の水の矢が宙に舞う。

襲いかかる魔法の力を見て、誰しもが「当たる」と予感した。襲撃者は立ち止まり、回避行動すら取らず光一をじっと見つめている。

しかし、あと一歩で矢が炸裂するというその刹那、空中で全ての「水」が弾け、砕けてしまった。

予想外の事態に光一だけでなく、他の三人も驚く。腕一本、指一つ、奴は動かしていない。にも関わらず、見えない力が光一の「魔法」を打ち消した。

物怖じすることなく駆け出すリサ。彼女は雄叫びと共に腕を振り浮き、宙に作り上げた「ハンマー」を真上から叩き込む。

どんっ、という鈍い音が響く。しかし、ハンマーは仮面に到達はしない。何度振り下ろしても何かが一撃を受け止め、すんでのところで防御している。

奇怪な現象に脂汗を浮かべながら、彼女も飛び退いた。

なにが起こっているんだ――全員が、同様の疑問を抱き、構えたまま動けなくなってしまう。武器の姿は見えない。それどころか、仮面の人物は先程から身動き一つとっていない。

ただの兵士なんかではない。目の前に立つ異質な存在に、全員が妙な焦りのようなものを感じつつあった。

正体の分からぬ仮面から、あの心の消え失せた声が響く。

「大人しくしていれば、良かったものを。残念だ」

その言葉の真意は分からない。まるで一同の存在そのものを否定するような、容赦のない侮蔑。だが、皆はそれに不快感を抱くよりも先に、鼓膜を揺らした轟音に息を飲む。

空気が火を吹いた一ドゥンッ、という大砲のような音と主に、見えない力で光一が吹き飛ばされた。彼の小さな体は放物線を描き、草むらの上に倒れる。

振り返り、倒れる光一を見た。彼は腹部を押さえ、痛みを震わせている。口からかすかに血が流れていた。

混乱する一同に、再度、奇怪な現象が襲いかかる。今度は原因不明の地響きが、足元を揺らす。何かの気配を感じ、意識を研ぎ澄ました。

瞬間、今度はリサの足元の地面が吹き飛んだ。土や草と共に、大きく弾き出されるリサ。彼女はまるで対応できていない。目をつぶり、ぐるぐると回転している。

「リサぁ！！」

夢斗は叫び、駆け出した。ブーツの力で大地を蹴り、彼女に追いつく。吹き飛んでいく小さな体を、すんでのところまで受け止めた。大地を削り取り、ようやく停止する。

「あ、ありがとうございます…」

リサはなにが起こったか分からないようだ。うろたえながら、それでも自身の足で立ち上がる。

残されたキリウが本能的に力を発動していた。夢斗らに手を貸すというわけではない。彼はあくまで、目の前の怪物から己が身を守ることを優先させたのだ。ワニ男の目が赤く光り、口からあらん限りの炎を吐き出す。一瞬で、森の中が火の海と化した。

火炎が到達するよりも早く、襲撃者の姿が空へと浮き上がる。奇妙なことに足の力はまるで使わず、一人でにその肉体が浮き上がったかのように見えた。

ごごごと燃え盛る火の海の中で、キリウは斧を構えたまま「ちい」と舌打ちをした。

「魔法使いか、おどれ」

先程からの奇妙な現象の数々。超常現象としか思えないその力を、キリウだけでなく夢斗やリサ、光一もそう断定し始めていた。

夢斗とリサ。そして何とか体勢を整えた光一も、再び武器を携えて火の海に近付き、見上げる。

森の上空から、驚くほど明瞭な声で仮面の人物は告げた。

「浅はかだな。理解できなければ『魔法』の一言で片付ける。どこに行っても、無知を隠そうとする傲慢は同じだな」

再びの嘲りに誰もが息を飲む。星空を背負い、更に仮面の人物は言った。

「もう戦争は止まらない。お前達程度にどうにかできるほど、人が抱く敵意は簡単なものじゃあない」

空中に浮かんでいた仮面の人物が、グンッと急加速する。飛来するその影を見据え、4人は構えた。

キリウ、そして光一が動く。斧を振り上げることで「炎」を。弓を放つことで「水」を操り、襲い掛かった。しかし、そのどれもが飛び込んでくる仮面の襲撃者に触れる寸前で、吹き飛び、無効化されてしまう。

追撃しようとするも再び謎の力が働き、キリウ、光一がまとめて後ろに吹き飛ばされた。

夢斗目掛けて落ちてくる襲撃者。その間にリサが割って入り、魔法で大きな盾を作り上げる。見えない力は盾に真正面からぶつかり、衝撃が彼女の体を襲う。

「ッ！？」

その絶大な力に歯をくいしばるリサ。盾が砕け、リサは夢斗にぶつかって倒れる。なんとか彼女を受け止め、前を向いた。

咄嗟に大地を蹴り、一旦後ろに下がる夢斗。担ぎ上げていたリサを下ろし、再び前に出る。

自身の足で立ち、襲撃者は夢斗と対峙した。

やはり妙だ。この人物から感じる気配や雰囲気は、王国の面々のそれとはどこか異質だ。うまく説明できはしないのだが、「誇り」や「大義」を武器として戦いを挑んできた、兵士の毅然とした強さとは違う。ましてやルーメル、ナグルファのような「正義」のみを糧として生きる者の、徹底した鋼の心、そして気迫も感じない。

怒りも、悲しみも、戸惑いも、何もない。

完全なる「無」の心の存在に、言い知れぬ不安を抱く。

今度はメラメラと燃え盛る火炎を背景に、襲撃者は言う。

「かわいそうに。知らなければ、ずうっと幸せだったんだ。モロボシ ユメト」

名を呼ばれ、息を飲む。火炎の熱と夜の冷たさの瀬戸際で、夢斗は拳を握りしめた。

「お前、なんなんだ？ ルガリアの兵士でも、レジスタンスでもない...お前は一体――」

「知ることが全て、幸せになるとは限らない」

瞬間、仮面の背後の火炎が不自然に揺らいだ。夢斗は再び、とっさに飛び退く。やはり一瞬遅れて、地面がえぐれた。またあの力だ――もはや夢斗は覚悟を決めた。なんの組織なのかも、誰なのかも分からない。だが、ぼやぼやしていたら、このまま謎の力に削り取られてしまう。

左へ踏み込み、まっすぐ蹴りを放った。常人ならば認識できないであろう速度だ。加速した鋼が仮面を砕くべく、迫る。

だが、やはり顔面を捉える寸前で見えない力に足首が絡め取られ、宙へと持ち上げられてしまう。景色が高速で流れ、空気の音が鼓膜を撫でた。

星空、夜の森、そして――最後に到達した景色は、燃え盛る大地だった。

そのまま夢斗の体は火炎の中に叩きこまれる。火の粉がぱっと立ち登り、リサが悲鳴をあげた。

「夢斗さぁん！！」

駆け寄るが、少女の前に仮面の襲撃者が立ちはだかる。息をのみ、足を止めるリサ。

「どいてください！ どかないなら、どうなっても知りませんよ！！」

構え、答えを待たずに武器を生み出すリサ。渾身の一撃を生み出す特大の「ハンマー」が、頭上に浮かぶ。

負けたくはない。だが、どうしてもリサは、湧き上がる感情に汗を浮かべてしまう。

勝てるイメージが、まるで浮かばない――今までこんなことはなかった。こっちの世界に来てどんなものと対峙した時も、実力云々の前に、持ち前の負けん気が前を向かせた。だからこそいつだって、乗り越え、打ち倒してこれたのだ。

この仮面の人物には、そんな感情が湧き上がってこない。静かに佇むその黒い姿が、心の平穏を全て奪っていつてしまう。

ゆっくりと、そしてしっかりと襲撃者は言い放った。

「振り下ろせばいい。それまでは待つ。だが、振り下ろせば確実に動く。決めるのはお前だ」

冷徹な、研ぎ澄まされた刃のような一言が、リサの心臓をえぐる。

すなわちそれは、リサ自身に選ばせるということだ。自分が喰らいつかれる、その時を。

身動きが取れない。すぐにでも、とにかく全力でこの力をぶつけないはずなのに、まるでそれができない。

怖くて仕方がなかった。自分自身で戦いの火蓋を切るという選択肢が、どうしてもとれない。

震える小さな体。歯を食いしばり、前を向くその目に、ついには涙まで浮かび出す。

そんな彼女にとどめを刺すかのように、襲撃者は言い放った。

「進んでしまった者の、背負うべき咎だ。誰のせいでもない。進むと決めたからこそ、お前達が背負った責務のはずだ。これが、見なくて良い物を見た者の、末路だ」

どくんと、リサの鼓動が高鳴る。まるで心臓を鷲掴みにされるかのように、胸の奥がギュウと締め付けられた。

行かなくてはいけない。なのに、もはやリサは戦意を失ってしまっていた。湧き上がる恐怖――痛みよりも何よりも、自身のもっともうしろめたい感情を掘り起こされ、体が動こうとしない。

いつだって不安だった。だからこそ振り向かず、自身が正しいと信じたものを糧に前を向いていた。

だが仲間が傷付けられ、動けずにいる自分に叩きつけられたのは、今まで見ようとしなかった「不安」そのものだ。

呼吸が荒くなる。肩が震え、涙がポロポロと落ちる。一緒に歩んできた皆が一瞬で砕け散ってしまったような、虚無感がリサを襲う。

「もういい。黙って終わろう。ここがお前達にとっての終わりの場所――それだけのこと」

踏み出す襲撃者。火炎を背負うその姿に、後退することすらできない。

一歩、また近付くたびに、圧が増す。

見えない何かが背後で渦巻く。その力の流れを表すかのように、メラメラと燃え盛る炎が形を変え、うねる。リサを嘲笑うように――非情な火炎は、けっして消えない。

襲い来る恐怖に目が細まる。涙で景色が歪み、カチカチと歯が鳴った。

さらに一歩、襲撃者が踏み込む。

火炎を焚きつけるかのように、吹きすすんでいた風。

熱を帯びた荒々しいそれが―――向きを変えた。

ずんっ、という音と共に大地が揺れる。リサは目を開き、その不可解な音に前を向く。思わず「あっ」と声を上げてしまった。

襲撃者の背後の火炎が、ぱっくりと割れた。吹き飛んだ炎の中から、大気を突き破り、風をまとった「彼」が姿を現わす。身にまとっていた衣服は火炎で燃えてしまっていた。ポロボロになった布切れの隙間から見える肌も、大地の熱で焼け焦げている。立ち上る白煙を振り払うように、彼は加速した。

それでも、止まらなると決めた少年の喉元から、雄叫びが上がる。

「おおおおおおおおお！」

背後から襲撃者に飛びかかる夢斗。鬼気迫る表情を浮かべ、あらん限りの力で大地を蹴った。

しかし、仮面の人物はまるで慌てない。ゆっくりと振り返り、焦ることなく向かってくる夢斗を見据える。

すでに防御は完成している――夢斗の蹴りを受け止め、そのまま足首を砕くつもりでいた。

だが「掴んだ」という感触は残らない。予想外の事態に、仮面の奥の瞳が見開かれる。

放った蹴りは偽物――当たる直前で引き戻し、そのまま右へと踏み込んで旋回する、ただの「フェイント」だ。

夢斗はがら空きになった襲撃者の脇腹目掛けて、本身の一撃を撃ち放つ。黒い仮面はとっさに防御し、見えない力が脇腹の手前で蹴りへとぶつかった。

しかし、不意をつかれたせいで固め切れていない。衝撃は殺せず、襲撃者の体が真横に吹き飛んだ。何が起こったのかをリサが認知できたのは、この辺りからであった。

地面を擦り、止まる襲撃者。傷一つ付いてはいないが、余裕が少し揺らぐ。

「夢斗さん！！」

「大丈夫。結構熱かったけど――問題ない」

無事なわけがない。全身に火傷を負い、皮膚そのものが痛みに変わってしまったかのようだ。意識が飛びかける。呼吸もうまくできず、喉の奥に焦げ臭さが入り込んでくる。

だが、夢斗はそれでも歯を食いしばり、仮面の襲撃者を睨みつけた。

一步を踏み込む。ブーツが踏み抜いた大地が砕け、また地面が揺れた。

「お前が―――勝手に終わりを決めるんじゃねえよ」

突き刺さった言葉に、息を飲んだのはリサだけではない。少年が吐き出した渾身の一言が、襲撃者にも届く。

「お前が言った通り、進んだのは俺達だ。勝手にここまで来たのは、俺達自身だ。けどだからって――なんでお前が、それを終わらせるんだ？」

炎の中で意識を取り戻し、耳に入ったあの言葉。立ち向かう少女をズタズタにしようとした、あの容赦ない襲撃者の一言。

それが夢斗の中の憤怒を呼び起こした。一方的に、彼女の「覚悟」を踏みにじろうとするその姿に、ただ、ただ、怒りが湧いてくる。純粹に世界を愛し、当たり前の感情で誰かを守ろうと奮起する、少女に立ち塞がったその邪悪さに、心の底から怒りが湧いてくる。

まるで蒸気のように身体中から白煙をたなびかせ、また一步、夢斗は踏み出す。ズタズタになり傷付いたその背中が、それでもリサの心に纏わりついていて凍てついた恐怖を溶かす。

仮面の襲撃者はリラックスした立ち姿のまま、やがて夢斗を見て呟く。

「不可解な感情だ。不確かなものを信じて、あえて危険の中に飛び込む、その姿勢。一体、どんな『心』をしているんだ」

夢斗、リサは身構える。パキパキと音を立てて燃え盛る炎を背景に、襲撃者はなぜかため息をついた。

「是非、喰らってみたい――だけど、残念だ。やっぱり、つまみ食いはやめておこう。お前達をもっと見ていたい」

その不可解な言葉に、一瞬、二人は考えてしまう。一体、何を言っているのか。感情なき襲撃者の言葉の真意を探る。

心。喰らう――その二つの単語に、ひどく聞き覚えがある。

重要なキーワードが、対峙する仮面の異質な雰囲気と相まって、脳内である「疑惑」を作り上げた。

鳥肌が立つのが分かる。不意打ちに備え、構えていたはずが、思わず緊張が解けてしまった。

目の前に立つ者の正体を、二人は同時に、直感的に理解してしまっていた。

「お前、まさか……お前が…！」

「そんな……心……喰い!？」

戦慄し、吠える二人。だが、そんな二人には構わず、仮面の襲撃者の体がふわりと浮き上がった。

見えない力で浮遊したまま、黒き影——「心喰い」が告げる。

「もう、互いに構えた刃は止まらない。明日にでも、戦争は始まるだろう。多くの命がぶつかり、そして消える。倒れていた光一、キリウもようやく立ち上がり、夢斗らと同様に浮かんでいく襲撃者を見上げていた。闇夜の中に溶け込むように、殺人鬼・心喰いの体がぼやける。

「人と獣のぶつかり合いなんて、どうでもいい。本当に見たいのは、その中で足掻いて、成長して——世の中の常識を堂々と超えていく、お前達のような『子供』の『心』だ。だから知りたければ飛び込んでこい。戦地へ——その混乱の中に、答えがある。モロボシ ユメト」

あくまで、夢斗に向かって語りかける、殺人鬼。夢斗が「待て!」と叫ぶも、その声は虚空を震わすのみだ。仮面の姿は黒の中に完全に溶け込み、消え去ってしまう。

一歩、駆け出そうとしたが、体が言うことを聞かない。がくりと膝をつく夢斗に、三人が駆け寄る。

「夢斗さん、しっかりしてください!」

「あ、ああ…ごめん、上手く体が動かなくて…」

夢斗の肌から伝わってきた熱さに、リサは息を飲む。

光一は腰の皮袋から薬草を取り出し、すりつぶして夢斗に塗り込んだ。

「ひとまず、応急処置だけど、帰って診てもらったほうがいいよ。レジスタンスの医療班、叩きおこすからさ!」

「わ、悪いな。お前らの方は、大丈夫なのか?」

「まあ、ちょっと痛かったけどね。一瞬、氣い失ってたみたい」

苦笑いする光一。薬草のおかげで痛みは少し和らいだようだ。

そんな中、真剣な眼差しを夜空に向けたまま、キリウが問いかける。

「おい、あいつ、まさか——」

あえて言葉を濁すキリウ。夢斗は襲撃者の言葉を思い返しながらか、答えた。

「確証はない。だけど、多分あいつだ。あいつが——「心喰い」の犯人だ」

一同に、改めて衝撃が走る。光一が処置を施しながら、声を上げた。

「そんな…なんでまた、真犯人がこんな場所に? そ、それに僕らを襲うなんて…」

「さあな。だけど、俺らのことを随分知っている風だったぜ。もしかしたら、事件の真相を探ろうとしてるから、直接手を下しに来た、ってことじゃないのか?」

かつての事件現場で証拠を探す夢斗らを、夜に紛れ、殺しにきた。そう考えると、どこか合点が行くような気がする。

キリウが吐き捨てるように言う。

「口封じ、ちゅうわけか。せやけど、それにしちゃ、あっさり引き下がったな」

光一もこれには同意し、頷く。

「言ってることも、意味分かんないよ。なんだかあれじゃあ、戦争なんてどうでもいい、って感じだった。それに、むしろ僕達のことを気になるって…」

その言葉の真意を、誰もが考えていた。

人と獣の衝突に興味などない。そうではなく、その中で進んでいく幼い心にこそ、興味がわく——いよいよ、意味が分からない。この戦争が仕組まれていたもので、ルガリア王国が「秘術」のためにカモフラージュで起こした事件が「心喰い」だったのではないのか。

根底が崩れ、なんだか思考がふらつく。

しかし、そんな中で、リサが微かに震えながら胸の内を明かす。

「でも、理由や思惑はどうあれ…あの人、犯人だと思います」

三人はリサを見つめる。彼女は少しうつむき。対峙した殺人鬼の姿を思い描いていた。

「一対一で立ち向かった時、確かに感じました。あの方は、今までの誰とも違う——獣人の戦士や、王国の兵士が持つような、相手と戦うための『気迫』も『迷い』も『恐れ』も、なにもない。なんだか、相手を殺すって『殺意』だけが、そこに立っているみたいでした」

潤んだ瞳で、こちらを見るリサ。武器を構え、それでも前に出れなかった、あの恐怖が蘇っているのだろう。
「ごめんなさい、私——夢斗さんや、皆を助けなきゃって思ったのに...戦うことができなかった.....武器を振ったら、その瞬間、自分が殺されちゃうんじゃないかって.....私、怖くて...ごめんなさい.....」

ただ、ただ、自身の「弱さ」を悔いるリサ。

助けなければいけない、と思っていた。何をすべきかなど、理解していたつもりだ。今までだって、何度もそうやって切り抜けてきた。

そんな当たり前の一步が、目の前に立つ黒い影に押さえつけられ、踏み込めない。初めて味わう本物の「恐怖」の前に、あまりにも少女は無力だったのだろう。

何度も、かすれるような声で「ごめんなさい」と繰り返すリサ。

思わず、夢斗は彼女の方を押さえた。

「そんな、リサが謝ることなんてないよ。不覚を取ったのは、俺らだって同じさ」

震えが、両の手に伝わってくる。彼女の中から湧き上がる黒い感情を抑え込むように、夢斗は指に力を込め、必死に支えた。

「あんなわけ分かんない力を持った奴に襲われて、命までは取られなかったんだ。それだけでも儲け物だよ。全員で足掻いたから、こうしてまだ、立ってられるんだ。あの時、リサが時間を稼いでくれたから、俺だって反撃できたんだから。そんな無理に、自分を責めるなよ」

夢斗に言い聞かされ、リサはようやく、涙を拭う。間近で、二人の視線が交わった。ボロボロになってはいても、夢斗は精一杯、微笑む。

この小さな少女は、底抜けに明るい。だからこそ、必要以上に何かを背負おうとしてしまう。

夢斗の笑顔で、なんとかリサも落ち着いたらしい。ローブで涙をぬぐい、こくりと頷いた。

気持ちが整ったことを察し、光一は真剣な眼差しで問いかける。

「どうするの、これ。あいつ、戦争は明日にでも始まる、って言ってたじゃんか。あれ、本当なのかな？」

「さあな、どこまで信じていいのやら...だけど、妙に説得力があると思うんだ。あいつが本当に『心喰い』なら...可能性はある気がする」

思わずリサも、不安げな表情で返す。

「じゃあ、やっぱりあの人は、王国の関係者なんじゃないかな。王国の状況を知っていて、準備が整ったから、それで...」
あり得る話だ。戦争を開始するだけの戦力が整った、ということを知っていなければ、あそこまで断言はできない。となれば、ますます今回の事件がルガリア王国の自作自演であるということが、信憑性を帯びてくる。

キリウもため息をつき、バツが悪そうに吐き捨てた。

「えぐい話やで。結局、お偉いさんの不祥事を隠すために、ワイらみたいな邪魔者も排除しに来た、って話かい。胸糞悪う」

だが、これには唯一、夢斗が待ったをかける。

「本当に、そうなのかな...」

「え？ ど、どういうことだよ、夢斗君」

光一が目を開き、問いかける。リサ達も、その意外な言葉に驚いたようだ。

「いや...確証や、満足な推理ができてるってわけじゃないんだ。でも、本当にそんなことなんだろうか、これは」

「なんやなんや。ルガリア王国の仕業じゃないっちゃんなら、誰が犯人やねんな」

王国の老いた党首が、密かに画策していた「心移し」という秘術。その研究、実行のための被験体として、多くの新鮮な死体を用意する必要があった。故に、王国はそれを猟奇殺人犯の仕業として隠蔽し、クーデターを起こした獣人達をまとめて排除する。国王が行ったタブーと、無理矢理に獣人という邪魔者を排除するという、二つの「黒」を隠すための、カモフラージュ。それが、夢斗達が推理していた「心喰い」という事件の真相だった。

筋が通っているように見える。だが、なぜか夢斗は、この一連の流れの中に、一種の違和感を抱いてしまう。

それは、先程ぶつかり合った、あの「心喰い」から感じた「妙な点」である。

なんだ、自分は何に戸惑っているんだ——夢斗自身、己が抱いた違和感の正体に気付かず、後ろ頭をぼりぼりと搔いてしまう。火傷を負った指が痛み、思わず顔をしかめた。

「分からない...ってというか、正直、何が『おかしいのか』すら分かんないんだ」

「はあ？ なんやねん、それ」

「だけど、なにかが引っかかっているんだ。あの『心喰い』ってヤツは、どこか今まであった奴らと、違う点があった。それが、なんなのかが...」

悩む夢斗に、リサも一緒になって考えた。

「今までと違う...私も、あの人の立ち振る舞いや、他とは違う怖さはありませんけど...そういうことじゃあ、ないんですか？」

「う〜ん、そのせいなのかなあ...なんだか、すごい些細なことの気もするんだ。けど〜」

納得がいかない一考え、眉をしかめる夢斗に、光一がたまらず告げる。

「と、とにかく、まずはアジトに帰ろう！ 傷の手当てもそうだし、なにより、明日のことも伝えないとさ。本当に戦争が始まっちゃうなら、いよいよやばいよ」

彼の言う通りかもしれない。考える必要があるが、まずはこの事実を、誰かに伝えなければいけない。「心喰い」が現れた、という事実。そして、戦争がすぐそこまで迫っている、という事実だ。

また一つ、風が吹き抜け、戦場の熱を奪う。叩かれ、焼かれた肉体には、夜風の冷たさはいささか刺激が強すぎる。目を閉じて耐えつつも、夢斗は顔を持ち上げ、夜空を見上げた。

そこに、もはやあの姿はない。しかし、夢斗だけでなく、リサ達三人にも、あの姿がはっきりと焼き付いている。

ついに姿を現した猟奇殺人犯・心喰い。

男か女か、王国に人間か獣人かも分からない、謎の人物。

その仮面の奥にある素顔を思い浮かべ、夢斗は目を閉じた。

姿は見えたとはいえないのに、そこに潜む「真実」は、依然として一一いや、今まで以上に、ぼやけたままだ。

歯噛みし、星を眺める夢斗。

頭上に広がる黒い海は、皆で見た時となにも変わらないはずなのに、今ではなんだかひどくおぞましく、心をざわつかせる。

真実と嘘、各々の思惑。

様々なものが「星」となって渦巻く、混沌がそこに映し出されているようだ。

部屋の壁に無理矢理に貼り付けられた時計の音が、重々しく時を刻む。

報告を受けた赤い猫耳の男は、椅子にぐったりともたれかかり、ため息をついた。

まいったーと言わんばかりに脱力し、彼は言い放つ。

「なるほど、なあ。これは僕らが想像していた以上の、一大事だね」

レジスタンスの長・グレンは再び視線を戻し、向かい側に並んで座る夢斗らを見た。その眼差しは相変わらず穏やかではあるが、どこか真剣な色が見える。

急遽、夜の作戦室にはグレンとニンバム、そして激闘から帰還した夢斗らが集められていた。

夢斗は上半身裸で、そこら中に包帯を巻かれている。その下には火傷を癒す特殊な薬草が何枚も貼り付けられており、更にレジスタンスの医療班の治癒魔法まで施されていた。なんだか全身が暖かい。傷が治っていくのが、はっきりと分かる。

そんな満身創痍な夢斗らは、そのまま流れるように作戦室に通された。急を要する自体ということで、突如、グレンやニンバムが集められ、つい先程、事のあらましを語り終えたところだ。

リサや光一、キリウも椅子に腰掛け、グレンを見つめている。ニンバムはどこか、悲しげな表情を浮かべていた。

グレンは机の上で手を組み、静かに言う。

「思わぬ進展、と言えるだろうね。おそらくユメトが言うように、その人物が『心喰い』で間違いないだろう」

もはや、それは誰も疑わない。

森で夢斗らを襲った黒い仮面の襲撃者――その謎の人物が残した言動から、奴が件の猟奇殺人者であると、グレンらも認めている。

その上で、彼は言葉を続ける。

「だからこそ、その言葉も真実だと僕は思うよ。恐らくだが、ルガリアは進行の準備が整ったのだろう。決行日時は明日――いよいよ、戦争が始まるってことか」

これに対し、夢斗は大きく頷く。

「確証はないんで、もしかしたら嘘かも。だけど、なんとなくだが……あいつは嘘をついてない気がする。誰かをそそのかすだとか、ごまかすって感じはどこからも伝わってこなかった」

この一言に、グレンも頷いて返してくれる。

「虚偽かもしれない、という警戒はもちろんある。しかし、君らの体験したことを聞くに、僕も全く同じ気持ちだ。立ち振る舞いからこそ、伝わってくることもある。きっとそいつは、その真実を伝えるために、わざわざ姿を現したんじゃないかな」

グレンの推測に、光一が頬杖をついたまま言った。

「わざわざ、かあ。なんか、嫌味なやつだね。勝利宣言のために堂々と、向こうからやってくるなんて」

「まあ、もちろん、最初の目的は君達を始末するってことだったのかもしれない。ところが、君らが予想以上に手強かったのだろう。部が悪いと思ったのかもね」

グレンの優しい一言に、光一もなんだか気が抜けてしまう。

一方、真剣な眼差しのリサが自身の手を見つめた。

「なんなんでしょう、あの実力。見えない力が、あの人の周りで渦巻いてました。光一さんを吹き飛ばしたり、夢斗さんを振り回したり—それに、私の武器も全部受け止められました」

恐ろしい実力であったのは誰もが認めている。深刻な眼差しの一同に、ニンバムが独自の見解を述べた。

「高度な魔法使いの術式でしょうかね。空間を操作する術か...いずれにせよ、熟練の者でなければそこまでの戦闘力は成し遂げれないかと」

賢人を持ってして「高度」というのだから、あの襲撃者の実力は並大抵のものではないのだろう。

今でもよく生き残れたものだと、肝が冷えてしまう。

続けて、ニンバムは隣に座るグレンに問いかける。

「こうなった以上、まずは一つ一つ、事に当たらねばなりません。ひとまず目の前の問題としては、攻め込んでくる可能性のあるルガリアですが.....どうなされるつもりですか、グレン？」

誰もが赤い猫耳の男を見つめ、回答を待つ。

相変わらずマスクをつけているため、表情は読み取りづらい。

彼はしばらく悩んだ末に、静かに告げた。

「そんなの決まっているだろう———とにかく、我々は防御を固め、守りに徹する」

思わず、目を見開く一同。中でも光一は声を上げてしまった。

「あ、あれえ？」

「ん、なんだい、コーイチ？ どうしたの？」

「あ.....い、いやあ。意外だなあ、と思ってさ」

キョトンとするグレンに、全員の緊張の糸が緩んでしまう。

それはきっと、誰しもが共通の予測を立て、そして裏切られていたからだろう。

「武力派」の長たるグレンのことだ。てっきり「徹底抗戦だ」と、嬉々として戦争を受け入れるつもりなのは、と嫌な予感がしていた。もしそうなれば、本格的に両者が対立することとなる。戦争を止めるのに、まずはグレン達を抑えなければいけないのだ。

ところが、グレンは特に息巻くでもなく、いつも通りのあっけらかんとした口調で告げたのだ。一同は見事に肩透かしを食ってしまった。

壁際にいたキリウが意外そうに声を上げる。それにはリサも続いた。

「なんや、てっきりノリノリでどんぱちやるんかと思うたわ」

「グレンさん達、戦うために集まったから...このまま戦争を始めちゃうんじゃないかと...」

一同の驚きっぷりに、グレンは痛快に笑って見せた。彼の悪友であるニンバムも、どこか驚いたようにグレンを見ている。

「僕も随分と乱暴者と見られていたんだなあ。いやいや、確かにもちろん戦うために、我々は集まったけどね。でも、君達の話聞いていたら、事態はそこまで単純じゃあないということも分かるよ」

グレンは再び真剣な眼差しを取り戻した。

「これがルガリアとレジスタンスの単純な戦争ならまだしも、恐らく裏に潜む真実はもっと複雑だ。それでいて、今まで憶測の域を出なかった『心喰い』との関連性が、確かなものになりつつあるんだ。ここで戦争に持ち込めば、それこそ思う壺じゃないか」

どうやら夢斗達が思っていたほど、この男は「野蛮人」ということではないらしい。

戦う道は選んではいるものの、ニンバムと同じで冷静に状況を把握する頭は持っているようだ。

なんだか一同は、グレンに随分と失礼なイメージを抱いてしまっていたようで、恥ずかしくなってしまう。

そんな中、ニンバムがフッと笑う。

「おやおや、随分と私の知る旧友は、私の知らない間に成長していたようですね。見くびってましたよ。傭兵として、戦場で暴れまわっていた頃とは、大違いですね」

「ニンバムう、やめろってその話は。若気の至りってやつだよ」

困るそぶりを見せるグレンに、ようやく一同も笑顔を浮かべられた。

とりあえず、このまま事態が急展開を迎えないようで、一安心だ。

だが、そんな緩みきった空気も、グレンの一言で少しだけ張りを戻す。

「けど、僕らもただ沈黙し続けるってわけにもいかない。ルガリアがこのまま全力で攻撃に転じてきた場合、なにもしなければ獣人達は皆殺しにあってしまう。つまり最低限の戦い、は避けられないだろうね」

思わず夢斗は「最低限の戦い」と繰り返してしまった。

すかさず、グレンは真剣な眼差しで続ける。

「ようは、戦いの準備だけはどっちみち必要ってことさ。レジスタンスの面々で防衛線を展開して、もし向こうが打って出て来るようなら、応戦して追い返す。あくまで守備のための戦いだけに徹する、ということさ」

浮かび上がりかけた心が、また少しだけ沈んでしまう。

思わず、夢斗は拳を握りしめて口を開く。ずきりと痛んだのは、治りかけの火傷のせいだけではない。

「戦いは、どっちにしろ始まっちゃうんだな」

「残念だけど、ね。けど許して欲しい。僕らも、無抵抗で殺されるわけにはいかないんだ」

考えてみれば、甘い理想を抱いていたようにも思う。レジスタンスの出方に関わらず、王国が攻めてくれば戦火はあがってしまう。未だ、巨悪達は動きを止めたというわけではないのだ。

それに対し、死なないように抵抗するのは、至極当然のことだ。

落ち込む一同に、グレンは諭すように言う。

「もちろん、さっき言ったように、不必要な戦いは避けるつもりだ。明日の早朝には、防衛線に戦士達を配置して備える。この近くには、いくつか我々の利用している防衛拠点があるから、そこで食い止めれるように努力するつもりさ」

これに対し、より不安を取り除こうとニンバムは言う。

「我々、融和派も今回は協力し、防衛にあたるつもりです。大丈夫。戦争といっても、相手を殺すことが目的の戦いはしません。あくまで守りきり、追い返すのみです」

いずれにせよ、まだのっぴきならない状況は回避できていない、ということらしい。

ごくりと唾を飲み込み、リサが言う。

「わ、私達はどうすればいいですか？ 私達も、何かできることがあれば、お手伝いします！」

少しだけ夢斗達も驚いたが、すぐに彼女の一言に納得する。

ここまできて、もはや無関係というわけにもいかない。今回の事件に関わっているという意味では、夢斗達ほど核心に近い所に触れた人間もいないのだ。

もとより夢斗、光一もその意見に賛成だ。

「危険だってことは分かってる。だけど、俺らもなにかさせてくれ。アジトでの手伝いでもいい。このまま向こうの世界に帰っていたら、戦争が始まってしまうかもしれないんだ」

夢斗の言葉に頷くりサ、光一。

これに対し、グレンは少し悩んだように間を置き、そして告げた。

「ありがとう、ユメト。その気持ち、受け取っておくよ」

思わず、夢斗は「えっ」と声を上げる。リサ、光一も目を見開いていた。

「どういうことだ、それって...」

「君達の気持ちは良く分かる。だけど、今回ばかりはダメだ。危険すぎる」

予想外の返答に息を飲んでしまう。だが、反論する前にニンバムが制した。

「皆さんの性格は、この数日で理解しているつもりです。ですが、グレンの言った通り——この先は、もはや今までとは比べ物にならない。国と森をあげての戦争に、あなたがたを巻き込むわけにはいかない」

「そんな！ わ、私達、それも覚悟の上で、ここまで来たんです！」

声を張り上げるリサ。しかし、グレンが重い一言を投げかける。

「君達には、まだ分からないかもしれない。けどね『戦争』って空間は、特殊なんだ。今まで君達だって、何度も戦いを繰り広げて来た。それは認めている。けど、はっきり言えるんだ。そんなものじゃあ、きっと生き残れない」

ずばり言われてしまい、身動きが取れない。夢斗、リサ、光一は言葉を失い、前を見ているしかなかった。キリウは腕組みをしたまま無言で、ため息をつく。

「大勢の大人が武器を取り、対峙する全てを破壊し尽くすために動く——これはね、はっきりいってまともじゃあないんだ。『殺しても良い場所』っていうのは、今までの戦いとは『格』そのものが違う。そんな場所に、異世界から来て助けてもらえばなしの、君らを連れてはいけない」

夢斗もリサも、言い返したかった。大丈夫だ、と。自分達は分かってるつもりだ、と。

だが、そんな大言壮語は吐けない。それはグレンの告げた言葉が、事実だと分かってしまうからだ。

特にリサは、心にその一言が突き刺さっていた。あの殺人犯と対峙した時、奴から伝わる「気」にあてられ、身動き一つ取れなかったのを覚えている。

本気で、迷うことなく人を「殺す」と決めた者が持つ、異質な感情。きっと「戦場」には、それが無数に飛び交い、互いを食らい尽くそうとぶつかり合うのだろう。

改めて、震えてしまう。武者震いなどではなく、純粋な恐怖が身を包み、ざわつかせる。

言葉を飲む二人に向けて、ついにニンバムが決定的な一言を放った。

「ありがとうございます、ユメトさん、リサさん。異世界の住人でありながら我々のような者のために、ここまで奮起していただいたこと、感謝しています。だからこそ、せめて受け取ってください。あなた方にこれ以上、無関係な傷を負って欲しくないのです。『心喰い』という真実をあなた方が手繰り寄せてくれただけでも、素晴らしいことなのです」

無関係なんかじゃあない——そう、叫びたかった。机を叩き、立ち上がりたかった。

だが、夢斗とリサにはできない。

グレンとニンバムという、この世界を良く知る大人達の言葉に、太刀打ちすることができないのだ。

結局、会議はその淀んだ空気のまま、終了してしまった。

会議室にはグレンとニンバムだけが残り、ここからどう動くかの討論を引き続き行なっている。

夢斗ら4人は、とぼとぼと通路を歩く。

誰もなにも言えない。せっかくたどり着いたはずなのに、ここまで来て舞台から降りることを望まれるなんて、考えもしなかった。

言い知れない空気の中、声をあげたのは犬の姿をした少年だった。

「ありがとうね、夢斗君、リサさん。ここまでついて来てくれて」

立ち止まり、振り向く。

光一は少し疲れたような、それでも屈託のない笑みを浮かべていた。

「なんだよ、急に」

「いやあ、考えてみれば、グレン達の言う通りかなって。夢斗君らにとってここは『異界』。本来いるべき場所じゃあ、ないわけだからね。これ以上、危険に突っ込むのも、おかしいのかなって」

思わずリサが声を上げた。誰もいない通路に、彼女の悲痛な訴えがこだまする。

「そんなことないです！ 異界だとかどうだとか、関係ないですよ！ 皆でここまで来たのに、これじゃあ...」

悲しむリサに答えたのは、ため息をついたキリウだ。

「底なしの善人やな、嬢ちゃん。せやけど、お偉いさんの言う通りや。向こうの世界のお前らには、戦場は危険すぎる。きっと明日から始まるんは、歴史に刻まれるような大戦や。今までのそれとは、規模が違う」

キッと睨みつけるリサに、キリウは「おお、こっわ」とおどけてみせる。

だが夢斗もやはり諦めきれず、拳を握った。

「だけど.....だからってこんなこと...戦いが始まるって言うのに、俺達、なにもできないのかよ」

悔しい。ただ、ただ、己の無力さだけが心を締め付ける。

走れる足があって、触れる腕があって、考えれる頭がある。傷は負っていても、まだまだどうにでもできると思っていた、心がある。

なのに、ここから先に進むことは許されない。その唐突な幕引きに、まるで納得できずにいる。

歩きながら、それでも光一は笑う。

「十分だよ、夢斗君。君達が来てくれたこと。それだけでも、僕にとっては嬉しかった。数日間だったけど、一緒にまた話したり、駆け回れたのもね」

ハッと、彼を見つめる。

まるで変わらずに笑いかける彼の姿が、過去の姿とかぶり、これでもかと心を締め付けた。

こういうやつだった——どんなに辛くても、怖くても、それでも自分のことではなく、他人のことを真っ先に考える少年。人の痛みを考え、自分を盾にしてしまう。小泉 光一とは、そういう少年だ。

「大丈夫だよ。戦争が始まったからってそのまま全員、死んじゃうわけじゃあない。僕らだってちゃんと応戦するさ。全てが落ち着いたら、その頃にまたこっちに来れば良いんだよ。きっとまた、皆で会える。そしたら、クラスの皆を探しに行けば良いんだよ！」

力強く、だがどうしても弱さを隠しながら言う彼に、言葉を返すことができない。

握りしめた拳に爪が食い込み、痛みを走らせる。なのに心の奥に居座った痛みは、まるで晴れてくれない。

わなわなと震え、夢斗は小さな声で彼に言う。

「ごめん……」

光一は笑って、首を横に振った。リサは足元を見つめ、目を潤ませている。

巻き込まれ、翻弄され、それでも今日まで前に進んできた。戦士の真似事だと分かっているけども、自分達が持つ武器を頼りに、真実を追い求めて走ってきた。

その終わりは実にあっけなく、そして虚しい形で訪れてしまったのだ。

どんよりとした空気の中、キリウは大きなため息をつく。

「さて、と。なら、ワイも身の振り方、考えんとな。こうしちゃおられんわ」

彼は荷袋を担ぎ直し、夢斗らとは別の方向へと歩いていく。立ち止まって不思議そうに見つめる夢斗達に、キリウはあっけらかんとした声で言い放つ。

「じゃあな『オーバー』のお二人。契約は無期限、延長や。また会えた時にあの菓子の作り方、教えてもらうからなあ」

強欲で率直な行商は、そんな言葉を最後に一同と別れた。おそらく外に置いている馬車に荷物を置きにいくのだろう。

去っていく彼の背中を見つめ、乾いた笑みを浮かべる光一。

「雑な人だなあ。でもこういう時は、あれくらいの方が楽なのかもね」

苦笑いする光一。その無理矢理な笑顔が、夢斗やリサには心苦しい。

しかし、ガックリとうなだれている一同の背後から、今度は聞き覚えのある豪快な声が響く。

「よお～、お前ら！」

振り向くと、そこには豚の姿をした獣人・スヴェンがいた。でっぴりした腹が、歩くたびにブルブルと揺れる。凶暴な眼差しは相変わらずだ。

ドスドスと音を立てて近寄ってくる彼に、光一が問いかける。

「ああ、スヴェン。どうしたの？ こんな遅くまで起きてるなんて、珍しいね」

見上げる3人に、スヴェンは豪快に笑った。

「馬鹿野郎、寝てなんかいられるかってんだ。お前らを探してたんだよ」

思わず「ええ？」と声を上げてしまう夢斗。「お前ら」ということは、光一だけではない。夢斗やリサをも、彼は探していたのだろう。

「おい、お前ら。聞くところによると、王国に潜入したって話じゃあねえか！ 本当かよ？」

言い寄られ、夢斗はたじろぎながらも首を縦に振る。

「あ、ああ、確かに...城に潜入したけど」

「城だって！？ かあ、こいつあすげえや！ やつらの懐に飛び込んだってわけかい！」

どうにもスヴェンは興奮気味だ。不可解なテンションに、夢斗とリサは戸惑ってしまう。

「レジスタンスの中で噂になっててな。壁を突破して、ルガリアのやつらとどんぱちした、ってよ。もし本当なら、すげえことだぜ！ レジスタンスの誰もやったことねえ、快拳だってな！」

なんだか、思わぬ方向に噂は広まっているらしい。たじろぐ二人に、またもやスヴェンはずい、と近寄る。

「なあ、本当なんだな。ルガリアの兵士達と、戦ったってのも！」

「あ、ああ。そうだけど.....そ、そんな大したことじゃあ...」

この夢斗の返答に、豪快に笑うスヴェン。なんとも嬉しそうである。

「すげえな、そいつあ！ よっし、王国からの生還者達の労をねぎらわねえとな！ 実は、お前らを一目見ようと、大勢が集まっているんだ。ちょっとで良いから、顔だしてやってくんねえか？」

思わず「ええ？」と驚きの声をあげる夢斗、リサ。

光一も二人を見て、肩をすくませている。

そのまま半ば強引に、3人は食堂へと連れていかれた。扉をくぐって思わず息を飲む。姿を表した3人を、まずは歓声の波が叩いた。

「おお、来たぜ！ コーイチに『オーバー』二人だあ！」

「本当に王国から帰って来たのか？ まじかよ」

「向こうの世界の住人か...あれが.....」

席に着くや否や、一斉に周囲は獣人達で埋め尽くされてしまった。所構わず投げかけられる熱視線に、一同はたじろいでしまう。

思わず夢斗は周囲を見渡ししながら、小声でリサと光一に言う。

「ど、どう言うことだよ、これ。なんで、こんな騒ぎに...」

「なんだか、私達、随分と珍しい生き物みたいに、見られてるみたいですよ」

光一は困ったように笑い、ため息をつく。

「あはは...こりゃあ、大変だ。皆、血気盛んだから、夢斗君らのこと『英雄』扱いなんだよ、きつと」

思わず「英雄う？」と声をあげる夢斗。だが、お構い無しにスヴェンが大声で告げた。

「この二人が、向こうの世界からやって来た『オーバー』だ。ルガリアのクソ野郎どもに、目にも見せてやったらしいぜえ！」

その一言に大歓声が部屋中を揺らす。肉体を叩く大声に、思わず耳を塞ぎそうになった。

「俺らのために、危険な『壁』を超えて、なんと城にまでたどり着いて、暴れてくれたらしいぜえ。勇敢な『オーバー』二人に、戦士として感謝する！」

スヴェンは二人に頭を下げた。またもや沸き上がる大歓声に、ビリビリと肌が痛む。

たまらず二人は互いに弁解した。と言っても、別に悪いことをしたというわけではないのだが、できるだけ事を穏便に済ませようと必死だ。

「ま、待て待て待て、待ってくれ。確かに成り行き上、戦いはしたけど、俺らはそれが目的じゃなくてだなあー」

「そうですよお。ちょっと潜入調査をしてただけで、そんな英雄だなんてー」

だが必死の弁解も効果をなさない。二人の言葉を捕まえた獣人達が「おお！」とまた声を上げ、より一層、沸き立ってしまう。

スヴェンがこの勢いに乗せ、更に大声で嬉しそうに告げた。

「二人の功績を称え、今宵も『盃』を交わそうと思う！ 野郎共、酒は忘れてねえだろうなあ！」

彼の一言に、周囲の皆は酒を注いだグラスを持ち、一斉に声をあげる。

ど真ん中にいる夢斗とリサは「え！？」と驚いてしまった。

光一はようやくその状況を飲み込み「ああ〜」と納得したかのように、苦笑いする。

「なんだあ、結局そういうことね」

「お、おい。なんだよ、これ。どういうことなんだよ？」

「いやあ、皆いつも通りってことさ。夢斗君らの功績を『肴』にお酒が飲みたいってこと」

思わず「はあ！？」と声をあげるも、スヴェンの大きな「乾杯」の一言でかき消される。お構い無しに獣人達は各々、酒を飲み干していく。

たじろぐ夢斗らの側に次々と獣人達は歩み寄り、質問を投げかけて来た。

「随分と若いのねえ、あんたあ。まだまだ子供じゃないのお」

「なあなあ、その足につけてんのが『オーバーテクノロジー』ってやつかい？」

まずは大柄な夢斗に、男女構わず質問が投げかけられた。夢斗はたじろぎながらも、必死に答える。先程から獣人達が話すたびに、酒の強烈な匂いが鼻腔を刺激した。

中でも、女戦士のリーダー格と思われる豹の獣人の女性が、一際近くで夢斗を眺めている。すでに相当飲んでいるのか、乱れた服のせいで目のやり場に困った。

「あんたあ、良い体つきしてんじゃないのさあ。向こうの世界でも戦ってんのかい？」

「い、いや...昔、陸上をーあ〜、えっと...走る競技の選手だったっていうか」

「走るう？ 配達人かなにかだっというのかいい？」

彼女を筆頭に、次から次へと向こうの文化について聞かれる。説明しようと奮闘するも、新たな単語が登場するたび、別の質問に繋がってしまうので、きりが無い。

一方、リサはというと、スヴェンをはじめとした男の戦士達に詰め寄られていた。

「おお、あんたの持って来てくれた、あの『カップメン』てえのは、不思議な食いもんだなあ。湯をかけただけで作れちゃうなんてよ。それに『チヨコレイト』？ だったか、あれも堪らねえ甘さだったぜ」

「俺あ、湯、入れずに食うのも好きだがなあ。歯ごたえがあってよ。でも、あの包み紙がまだ、うまく開けれねえんだわ、これが」

夢斗と違い、やはりリサは適応能力が高いのか、荒々しい男連中の会話にも、自然と溶け込む。

「お気に召したようで、良かったです！ こっちの世界でも、面倒くさい時は、バリバリそのまま食べちゃったりしますよお。あの包み紙、ギザギザのところをひねれば、簡単ですよ！」

落ち込んでいた二人はいつの間にかレジスタンスの宴会に巻き込まれ、翻弄されていた。慌ただしく獣人達の相手をする中で、少なからず淀んでいた心が晴れていく。

不思議なものだ――夢斗とリサは彼らを見て、改めてそう思う。

獣と人を掛け合わせたような異形の姿をしていても、中身は我々と変わらない。異界から来た二人を珍しがり、異国の文化に興味を示す。戦いについての荒々しい話より、むしろ日常に関する他愛ない話の方が多い。

いつしかスヴェンの計らいで夢斗、リサ、光一の分の飲み物も用意されてしまった。目の前のカップにはそれぞれ、濃い色の液体が注がれている。もちろん、酒などではない。フルーツを絞って作ったジュースだそう。

3人がカップを持つと、スヴェンがまた大声で言う。顔が先程よりも、随分赤くなっていた。「我々と共に歩んでくれる異界の戦士達に改めて、この一杯を捧げるぞお！」

大笑いする彼と共に、またもや獣人達は歓声を上げた。

まさに体育会系のノリだ。これではニンバム達が噛み合わないのも、少し納得してしまう。夢斗、リサも苦笑し、カップを持ち上げる。

そんな二人に少年は言った。

「意味があったんだよ、やっぱり」

思わず「えっ」と声をあげ、光一を見た。彼もまたカップを手に持ち、こちらに優しい眼差しを向けている。

「夢斗君やリサさんにはそのつもりがなくても、皆からすれば誰かが自分達のために動いてくれたことが、嬉しかったんだ。だからきっと、ここまで歩んでくれたことだって、しっかりと意味があるんだ。君達が戦争にまで巻き込まれる必要は、どこにもない。大丈夫、彼らは明日以降も進んでいけるから」

やはりそれは、光一という少年の持つ素直な優しさだったのだろう。

たとえ夢斗とリサが向こうの世界に戻っても、それで今までの歩みが消えるわけではない。

夢斗達なりに悩み、苦しみ、進んで来たことが、今この場にいる獣人達を作り上げている。あの日ーールガリアに攻め入られたアジトで、もしかしたら彼らの命は潰えていたのかもしれない。

二人の決断が間違いでなかったと、光一は大きく頷いた。

安心して向こうに戻って良いんだ、と。

言葉を失う、夢斗とリサ。再び落ち込もうとする二人に、光一はカップを突き出す。

「大丈夫。絶対うまくいくよ。だから信じて」

光一から伝わってくる強い眼差しを、まっすぐ受け止める。

小さくとも、非力でも、これからくるであろう戦乱を覚悟し、受け止めた男がそこにはいた。

震える指で、それでもカップを前に出す夢斗とリサ。周りの喧騒がひどく遠くへと離れていく。

チンッ、と音を立て、乾杯する三人。肉と骨を伝わり、その振動が心臓に響く。

大丈夫ーその言葉を信じ、たまらずカップの中の液体を飲み干した。流れ込んできたフルーツの甘みに、しょっぱさが混じったのは、調合のせいだったのだろうか。

流し込まれた明日への活力が、また一つ、まぶたの裏側に熱い雫を湧き上がらせる。

かすみ、揺れる視界の中に映る光一が、その一瞬だけはかつての姿を取り戻していたかのよう、錯覚した。

目を閉じると、激しく打ちつける雨の音が聞こえた。ここ最近の快晴が一変、朝から驚くほどの土砂降りである。窓ガラスに打ち付けられるしぶきが、その強さを物語っていた。

時刻はちょうど昼。朝飯も食べていなかったせいで、胃はすっからかんである。ベッドに横たわり、目を閉じてみるが、まるで空腹は紛れてくれない。

いや、むしろこの気だるさは、空腹のせいなどではない。寝不足のせいでも、ましてや昨晚の激闘で負った火傷のせいでもない。

納得がいかない、心のせいなのだろう。

平日にもかかわらず、夢斗は学校を休んだ。それはもちろん、昨晚の傷が癒えきっていないということもある。

だがそれ以上に肉体が、その奥に潜む精神が前を向いてくれない。

「オーバー」である君達に、これ以上先は危険すぎる――グレンの口から、夢斗、リサは「自宅待機」を命じられたのだ。

グレンの思惑も、分からないではない。あくまで別の世界の住人である夢斗とリサに、これ以上「戦争」まで協力させたくない、ということなのだ。

だが、それをすんなり聞き入れることは難しかった。ここまで進んできて今更手を引くなど、真実の何一つを知らず、撤退するということだ。戦場は確かに恐ろしい。だが夢斗らだって、この時のために覚悟と決意を持って、進んできたつもりである。

そして何より、向こうに取り残された光一は――かつてのクラスメイトのことは、どうすればいいのだ。「オーバー」の力を使っても、彼をこちらには連れてこれない。ましてや彼だけを救えたから、今回の件が解決するというわけでもないのだ。

迫る激戦の時に、夢斗は気持ちを整理できずにいる。こちらに戻ってきてリサと別れてからも、まるで気持ちは晴れない。

だが、だからと言って、どうすべきなのだろうか。途端、頭の中には色濃い霧がかかってしまう。今まで見えてきていた真実がなんだか急に遠のき、様々な事実によってかき乱されてしまっていた。

そんなこともあり、夢斗はとても学校になど行く気になれなかったのだ。体がだるいと仮病を使い、こうして休んでいる。

まるで外に降りしきる雨は、夢斗の心を体現しているかのようだ。途端、何をする気にもなれない。こうしている間にも、向こうでは戦争が始まっているかもしれないのに、何もできない自分がもどかしい。

おもむろに体を起こし、台所へと出て行く。そこにはコーヒーを沸かしていた母親がいた。

「お～、夢斗。どうなの、体調は」

「ああ、大丈夫。随分、楽になったよ」

ありきたりな嘘で、とりあえず母親をかわす。椅子に座ると、グッドタイミングと言わんばかりに、母親はコーヒーを注いだマグカップを目の前に置く。

弱々しい声で「ありがと」と告げ、飲み込んだ。砂糖もミルクも入れない、どすんとストレートな苦味が伝わってくる。完全な母親の好みだ。

母も横に座り、自分のカップを揺らしながら問いかける。

「珍しいね、あんたが学校休むなんて。なんだかんだで、今まで無遅刻無欠勤だったのにさ。雨の気圧のせいとか？」

「さあな。そうかもね」

なんだか会話をする気にもなれない。気まずさからか、コーヒーがすすむ。苦味は体の中に染み込み、ぼやけた頭を叩き起こしてくれた。

「ここ最近のあんた、随分調子良さそうにしてたのにさあ。まるで、悩みが消えたかのようにハツラツと青春してたしね」

おそらくそれは、クレイドルに赴くために一緒にいたりサのことを言っているのだろう。

「だから、あの子はそういうんじゃないっての。ただ、たまたま知り合ったんだよ。ほっとけて」

「なによ、その言い方。つれないわねえ」

母のズケズケとした態度はこういう時、煩わしい。台所に出てきたのは失敗だったか、と悔やむ。

「転校する前は、なんだかんだであんたも、色んな友達がいたのにねえ。無趣味に見えて、家にいることの方が少なかったじゃないのさ。皆でご飯食べに行ったり、夜通し泊まってゲームしたり——そう思うと、勉強はぜんっぜんしなかったわね、あんた」

過去の思い出を語る母。だが、彼女がどんなに思い描いても、その絵は夢斗には伝わらない。すっぱりと抜けた「過去」は、まるで夢物語のように実体がない。今となっては唯一、異界で出会った旧友・光一の顔だけが思い出す事ができる。

「だから女の子で、しかも異国の女の子連れて来た時は、びっくりしたわよ。随分——前に進めたんだな、って」

「え？」

母の言葉尻に今までとは違う色を感じ、思わず顔を上げる。ようやく、隣に座る母と目が合った。

「なんであんたが記憶喪失になったのか、そんなことは一切分かんないけどさ。それでもあんたは、あんたなりに新しい環境で前に進んでるんだな、って思ってね。嬉しくなっちゃったのよ。もちろん、彼女ができたって言うてくれれば、もっとワクワクしたけど？」

最後の最後に意地悪な笑みこそ浮かべたが、思いがけない母の本音が、そこには溢れていた。嬉しそうにコーヒーを飲む彼女の横顔を、少しだけ口を開け、力なく見つめてしまう。

「前に進めたからこそ、そうやって何か、迷ってんでしょ？」

思わず心中を覗かれ、焦る。夢斗は視線をそらしてしまった。

「べ、別に、そんなんじゃないあ——」

「無駄な抵抗はよしたほうが良いっての。あんた仏頂面のように見えて、誰よりも顔に出やすいんだから。大体、何年、あんたの母親やってるとかってんのよ」

それは、かつて光一に言われた内容にも似ていた。どうやら心模様は、知らず知らずのうちに表に出ていたらしい。自分の単純さが少しだけ嫌になってしまい、口を真横に結んだ。

しかし、母の一言にまた顔を上げる。

「あなたの好きにきなよ、夢斗。自分のコースくらい、自分で決めな」

言葉を失ってしまう。微笑みを浮かべる母の目には、言い知れない「強さ」が宿っていた。

あの時と同じだ――かつて陸上の世界で、周囲の大人達が無理矢理に夢斗を持ち上げようとした時。ただ好きだった「走る」ということを「道具」にされかけた夢斗の前に立ち、周りに強く言い放ってくれた、あの時と同じ輝きがそこにはある。

かつて自分を必死に守り、自分のわがままを大切にしろ、と教えてくれた「母親」がそこにはいた。

「いつも漫画を描く時も、そうなんだよね。『世界を守る』って言い放つ主人公は綺麗だけど、描いててちっとも楽しくないのよ。それが、周りがどれだけ望む姿でも、そいつの本心って思えないからなんだろうね。多分、人ってもっと自分勝手なことだからこそ、本気が出せる生き物なの」

漫画家としての経験を通じて、母は大切なことを伝えようとしていた。夢斗はコーヒーを飲むのも忘れ、聞き入ってしまう。

「競技の中では、あんたは決められた場所を走るしかない。でも、あんたの人生の中で、誰かがあんたのコースを決めるなんて、おかしいことよ。いつだって、やりたいように進んでみればいい。ダメなら転んで、また立ち上がって――血だらけ、泥だらけになって、見える景色だってあるの」

コーヒーを飲み干し、彼女はこの上なく痛快で「綺麗」な笑顔で言い放つ。

「迷って迷って、どうしようもならなけりゃ、思い切って勝手にスタートしちゃうっても良いのよ。それが生きるってこと。どんな無茶苦茶でも、ルールなんて自分で決めればいい。それが私が人生を楽しんでるコツ、かな？」

痛快に笑う母。夢斗はおもむろに、隣の部屋に散らばっている彼女の漫画原稿に目をやった。

白い原稿用紙に、黒いインクで縦横無尽に描かれた「物語」。毎度毎度、型破りで、とんでもない展開を主人公が痛快に乗り切る「冒険活劇」だ。世の中の流行りなど知ったことかと言わんばかりの、熱苦しい絵柄、そしてノリ。彼女が「やりたい」と望んだものこそが、そこに描かれている。

微笑み、彼女は席を立つ。台所のシンクで、自身が飲み干したカップを洗う。

「さて、と。そんなこんなしてたら、もうお昼じゃん。冷蔵庫になにがあったっけな〜」

いつも通りの彼女に戻り、マイペースに昼の献立を考えている。

しかし最後のその言葉は、思い悩む夢斗の耳には届かなかった。

どうしようもならなけりゃ、思い切ってスタートすれば良い――夢斗はかつて、陸上の試合に出ていた時のことを思い出す。

スタート地点に立ち、ライバル達と横に並び、前を見据えた。ゴールラインまでは遠い。観客席から見た景色と、そこはまるで違う。100メートルという距離がその何倍にも、何十倍にも感じ

られる。

スタートの体勢をとり、じっとその時を待つ。

どれだけ練習を重ね、どれだけ準備をしてきても、いつだってその時は怖い。走り出す直前、腕が、足が、胸が震える。何かあったらどうする、走りきれなかったらどうする、ライバルの方が速かったらどうする――襲いくる無数の不安。だが、そのどうしようもない恐怖に、いつも立ち向かってきた。

そうだ、自分はスタート地点に立ったんじゃないか。

止まるつもりなどない。ここで止めて、逃げる気もない。自分は走り出したいから、ここに来たんだ。

そう思うと、いつも震えが止まった。顔を上げて見据えたゴールが、少しだけ距離を縮めたような気すらした。

あの時と同じ――座ったまま、カップを見つめる夢斗。その目にはベッドに横たわっていた時とは違う、確固たる強さが戻ってきていた。

後ろでは相変わらず、母が冷蔵庫を漁っている。玉葱と人参を手に、献立を考えているようだ。

しかし、突如として鳴ったチャイムに、彼女は顔を上げて駆けていく。

「は～い、はいはい！　すぐ出ますよっと」

夢斗を残し、玄関へと急ぐ母。彼女はサンダルを履き、おもむろにドアを開ける。雨が運んできた冷たさよりも、湿気よりも、そこにいた少女の輝きに息を飲む。

「あら...あなた」

水で濡れた傘を持った金髪・碧眼の少女。彼女は深々と頭を下げた。しかし、笑みは浮かんでいない。代わりに、この上ない真剣な眼差しで母に告げた。

「こんにちは。夢斗さんおられますか？」

その一言に、いつもの母ならば、また意地悪な笑みを浮かべていたのだろう。

だが、今回ばかりは違う。少女から伝わる並々ならぬ覚悟に、真剣な眼差しで笑みを浮かべた。

「ああ、いるよ。ちょうど起きてきたところさ」

母親はそれだけ告げ、そそくさと台所に戻り、夢斗を呼んだ。予想外の人物の登場に、夢斗は慌てて玄関へと駆ける。

「り、リサ！？　なんで、まだ学校じゃあ」

「早退しちゃいました。勉強どころじゃないんですもん！　それに散々、携帯にメッセージ入れたのに、全然既読にならないんで直接来ました」

一応、リサとは携帯のアドレスとチャットアカウントを交換していたが、机の上に放り投げたままにしていた。思わず「ごめん」と謝る。

「で、でも早退って...じゃあ、まさか――」

「はい！　私、クレイドルに行きます」

思わず夢斗は後ろを警戒した。母親は空気を読んだのだろう。若い二人の話を聞かぬよう、台

所に戻っている。

「行くなって...でも、グレンが言ったじゃないか。このまま戦争に巻き込まれるのは、って」
「分かっていますよ。今日、学校に行く時も、行ってからもずっと、さっきまで考えてました。戦争が始まったらどうなるんだろう、とか。どうやったら止められるんだろう、とか。でも結局、何回考えても何にも答えなんか出ないです」

リサの言葉はまるでぶれない。なぜか、確固たる強さが彼女の視線から伝わる。

「だから決めました。分からないなら、最後まで見届けようって。私、やっぱり納得できないです。身勝手な王様のせいで、皆が戦って、悲しむ人がいるなんて。そんなファンタジー、すこっしも面白くないです！」

少女の言葉がどこか、母親が語っていたそれにかぶる。どくと、夢斗の心が跳ねた。

「世界を救うだとか。英雄になりたいだとか。そんなの私、少しも思い浮かばないです。私があっちの世界に行くのは、いつだって自分がそうしたい、って思ったから。そう思えるから『オーバー』の力は、私を連れて行ってくれたんです。私の願いを、自分自身で叶えさせるために」
大義名分など知らない。聖人君主のような理想など、思いつく頭は持っていない。

リサが今日まで抱いてきたのは、いつだって同じ感情だ。内容は変われど、その根底にあるものはどこまでもぶれない。

自分がこうしたいという、わがままだ――誰かが傷付くのも、誰かが悲しむのも、見たくなどない。国王だろうがなんだろうが、そんなねじ曲がった理想などに、振り回される人々を見たくなどない。

「あの王様が――いえ、『心喰い』が、わがままに戦争を起こすっていうなら、やることは決めました。私は、私のわがままに戦います。資格とか言われる筋合いはありません。本当のこと、何が何でも知りたいんです！」

降りしきる雨を背景に、己が意思を言葉に乗せるリサ。

太陽など見えない曇天のその下で、それでも彼女の金色の髪が、青い大きな瞳が、まるで光を放っているかのように錯覚する。

小さな小さな「太陽」が、夢斗の心の氷をその熱で溶かす。

ぐっと拳を握りしめ、前を向く。どんな顔をしていいか分からない。だが、それでも必死に、彼女に想いを告げた。

「俺も.....俺も行くよ」

怖いという思いはある。向こう側に広がる未知の闇に、触れてしまう恐怖が。

だが、改めて思う。

自分は望んで、スタート地点に来たんだ――だから、この体に眠る「力」は、自分を向こうへと運んでくれたのだろう。

夢斗は決意する。再び己自身が望んで、世界と世界の境界を「超える」ことを。

「そうだよな。心に決めたはずだったんだもんな。俺は会いたい、あの世界のどこかにいる『あいつら』に。だからまずは、たった一人でも出会えた光一のことを――あいつの周りの皆を、救わないと」

このまま雨の中、一步も出ずに家に引きこもる。そうすれば、遠いどこかの地で「スタート」の音が鳴り響き、全てが動き出す。誰が先に到着したのか、誰が転んだのか、何があったのか一どれ一つ、進まなかった自分に知る権利などない。

「頼む、一緒に行かせてくれ。俺も俺の『わがまま』を、叶えさせてくれ」

夢斗の力強い一言に、頷くりサ。彼女はようやく、いつもの笑みを浮かべた。

「分かってます。そう言うと思ったから、こうして学校、サボったんです！」

笑うリサを見て、なんだか嬉しくなってしまう。急激に加速する鼓動が、濁っていた体の血に、火を灯した。

足早に部屋に帰り、準備をする夢斗。いつもの装備をリュックに詰め終えると、台所で昼食の準備を始めていた母と目が合う。

「ありゃ、あんた出て行くの？ お昼は？」

「ああ、ごめん。どうにか済ませるよ。急がないといけないんだ」

慌ただしくリュックを抱え、玄関へと歩いていく夢斗。彼を追ってきた母は、靴を履く息子の背中に告げた。

「そっか、残念。夢斗——晩御飯、何がいい？」

靴ひもを結び、ハッとして振り返る。母は何も聞かず、ただ微かに笑って問いかけてくる。

「帰ってくるまでに作っとくからさ。遠慮せずに言いなよ、ほら」

彼女がどこまで分かっているのかは、定かではない。これから息子が、戦場に赴くことも。世界を超え、怪物が巢食う地に足を踏み入れることも。きっと、何一つ知りはしないのだろう。

だがどこに行こうが、何に立ち向かおうが、彼女は息子を信じている。だからこそ聞いたのだろう。ちゃんと戻って来るであろう、覚悟を決めた息子に。

夢斗はしばらく、靴を履いたまま何も言えなかった。しかし、じんわりと胸に広がる感覚を抱きつつ、前を向いた。

「じゃあ、オムライスが良いな。いつものやつ」

「おっけい、チーズの入ったやつね。了解了解。じゃあ————いってらっしゃい」

学校に行く際、いつも怠惰な毎日の中で聞いていた言葉。その言葉が今はやけに清々しく、心に響く。

「いってきます」

夢斗はその言葉を最後に、踵を返してリュックを担ぎ直す。

一步を踏み出すと、冷たい外気が体にまず襲いかかった。だが、ひるむことはない。しっかりとした足取りで、前が出る。

共に歩き出すリサ。二人は互いの顔を見て微かに笑い、そして頷く。

白と黒の髪を持つ長身の男子生徒。そして、金の髪と青い目を持つ小さな女子生徒。

全く境遇の違う、しかし共に「超える」力を持った二人。

彼らはぶつかる冷気をもろともせず、己の「わがまま」という武器を手に、旅立った

獣の本性

案の定、アジトの中では獣人達が慌ただしく走り回っていた。中には窓に木板を打ち付けたり、バリケードをこしらえている者もいる。おそらく、このアジトに敵が押し寄せた際の守りを固めているのだろう。

太陽の位置は真上。どうやら今日は、現実世界と時刻がほぼ同じらしい。ただ、雨一つ降っていない快晴だ。

夢斗とリサは人伝いに「彼」を探す。足早に進むと、武器庫の前で難なく再会できた。

「えっ、夢斗君！？ そ、それにリサさんも！」

「よお、光一。昨日の怪我、大丈夫か？」

驚く光一に、夢斗はいつも以上に陽気に返した。その意図が分からず、光一は混乱している。

「う、うん、まあ...あ、いや、そうじゃなくて。なんで二人共、こっちに来たのさ！？ グレンにおとなしくしてるように、言われたじゃないか」

「ああ、まあそうなんだけどな。でも、やっぱ無理だ、すまん」

「む、無理だって？」

狼狽し、目をまん丸にして声を荒げる光一。周囲の獣人達が、そのやりとりを不思議そうに見ていた。

「いや、確かに戦争は怖いけどさ。だからって家でずっと引きこもって、そわそわしてるなんて嫌なこった。せっかく皆で真実に辿り着きそうだったのに、そんなの納得いかねえよ」

「そ、そりゃあ気持ちは分かるけどさあ...でも、事態は思っている以上にやばい状況なんだよ」

必死に説明する光一に、首をかしげてしまう。リサが思わず、問いかけた。

「やばいって、どうしたんですか？ ま、まさかもうルガリアが攻めてきたとか？」

「う～ん、まあ、半分正解かなあ。今朝早くに、ルガリアの先行部隊がこっちに進軍を開始した、って報告があったんだ。あくまで、偵察だけの部隊なんだと思うけどね。でもそれを聞いて、グレンが急に考えを変えちゃってさ。『少しでもアジトにたどり着く前に、戦力を削ぐ』って、戦闘ができるメンバーを連れて、出て行っちゃったんだよ」

夢斗らは目を見開いてしまう。たまらず問いかけた。

「なんだって、迎え撃つだけじゃあ、なかったのかよ？」

「まあ、元はと言えば王国が動いたのがきっかけなんだけどね...でも数時間前にもう皆、出発しちゃうみたい。残った僕らは、ここの守りを固めてるところさ」

それで合点がいった。アジトで慌ただしく駆け回っている獣人達は、どうにも数が少ないように思える。戦えるメンバーは、すでにグレンと共に戦線へと向かったのだ。

まずい――事態は着実に、全面戦争のシナリオに向かって動き出してしまったらしい。このままでは、ルガリア国王の思う壺だ。

もはや猶予はない。リサは力強く言い放つ。

「急がないと！ 私達も行きましょう！」

「い、行くなって...グレン達を追いかけて、どうするのさ！？」

「分かんないです。でも、とにかく獣人達と王国の戦いを止めないと。このままじゃあ、喧嘩する必要もないのに、互いに傷付け合っちゃいますよ！」

今まで以上のリサの押しの強さに、光一は戸惑う。理論理屈など知ったことかと言わんばかりの、圧倒的な推進力に、たじろいでしまった。

夢斗も冷静に、それでいて力強く答える。

「俺も行くよ。光一、グレン達が向かった先、分かるか？」

「ちょっと、夢斗君まで！ 本気なの！？」

「もちろん。方法なんて分からないけど、まずは両者がぶつかるのを止めないと。俺らが戦場を掻き乱せば、どうにかなるかもしれない」

これまたいつも以上の強い眼差しに、たじろぐ光一。

光一にとって、決意を固め直した二人の「強さ」は、不可解ではしょうがないのだろう。

しばらく彼は考えていた。しかし、やがて「あ〜！」と声を上げ、頷く。

「まあ、確かにねえ…皆、頭に血がのぼっちゃってて、冷静じゃないんだ。これじゃあ王国が言うように、本当に蛮族が暴れただけになっちゃうよ。殴ってでも止めないと」

「もちろんです！ 最悪、全員ぶっ飛ばして、眠ってもらいます。それくらい、やらせてもらいます！」

「あ、いや…そこまでやると、結局、俺らが悪者ってことになる気がするが…」

やる気満々のリサに、少しだけたじろいでしまう。

しかし、それでも三人の意思は変わらない。どんな手段を使っても、両者が命を奪い合うのを止めなければ。

勢いに乗ったリサは、光一に問いかける。

「そうと決まれば、急ぎましょう！ あ、そうだ、あのワニ男さんはどこですか？ せっかくだから、あの人もいてもらったほうがいいですよ。口が悪くて乙女心の分からないダメなワニさんですが、腕っぷしは強いですから」

さんざんな言われようである。よほど、自分の背を馬鹿にされたのが気に入らないのだろう。この場にはいないからということで、言いたい放題だ。

だが、確かに商人・キリウの腕っぷしは、頼りになる。夢斗も頷いた。

「ああ、キリウか。あの人はあてにならないと思うよ？」

「えっ、なんでだよ？」

「だって、王国が動き出したって聞いた途端、すぐに退却の準備を始めちゃったもん。たぶん、今頃は荷造りも終わってるんじゃないの？」

目を丸くし、リサは声を上げた。

「なっ—ど、どこにいるんですか、あの人は！？」

「ええっと、馬車のところだと思うよ。出てすぐの所の」

「だ、駄目ですよそんなの！ あんなにお菓子あげたのに、契約違反です！」

そこまであの菓자에絶大な価値があるわけではないと思うのだが、今は言うだけ野暮だろう。キリウの戦力が抜けるのは、いささか厳しい。今は少しでも手が欲しいところなのだ。

三人は慌てて外へと駆け出す。獣人の間を縫って、すぐにアジトから飛び出した。

岩の影には荷馬車が止められており、キリウはそこで荷物を積み込んでいた。ロープでしっかりと固定している。

「ああ、いた——！」

「おお、お嬢ちゃん。なんや、結局来たんかいな」

「当たり前ですよ、何やってるんですか！ ドンムーブ！！」

英語で叫ぶが、たぶん彼には伝わっていない。キリウは「なんやねんな」と眉をしかめる。

「勝手に退却の準備なんて、どういうことですか？ 一緒に来てくださいよ、守ってくれるって契約でしょ！？」

「ああ、それな。悪い。これ、返すわ」

キリウは目の前にどさりと革袋を置いた。見れば、中にはまだ食べていないチョコレート菓子の山が入れられている。かつてリサが「契約」と称して、彼に渡したものだ。

「か、返すって...」

「いくつか喰った分については、もう返したはずやで。なんやかんやで、あの『心喰い』からも守ってやったんや。契約違反とは言われとうないわ」

「そんな、勝手ですよ！」

「勝手はどっちやねんな。王国にあんたらを突き出さんかった分、感謝してもらいたいくらいやで」

彼の話し方は、実にさばさばと乾ききっている。まるで、出会った当初のそれだ。「利」にならないものを徹底的にそぎ落とす、あの商売人のスタンスである。

「ええか。そら、レジスタンスも王国も、ワイにとっては貴重な商売相手や。でも、お前らにかかわったせいで、もう王国とはつるめへん。まして、そいつらが拳して押し寄せてきてるんなら、こんな場所に残る意味があらへんわ」

夢斗、光一は何も言えず、押し黙ってしまう。唯一、リサはなおも食って掛かる。

「でも.....あなただって、獣人でしょう？ 同じ仲間が傷付くかもしれないですよ、なのに——」

「勘違いすんなや。ワイは獣人かもしれへんが、ここのやつらとは関係あらへん。商売のためにちょっと寄っただけや。んなもん、仲間もくそもあらへん。ワイにとっては、食わせてくれるやつが味方やからな」

徹底した商売人の生き方にリサは歯を食いしばり、怒りをかみ殺す。すでに痛いくらいに拳を握っているが、どうしようもできない自分に、苛立っていた。

リサだけでなく光一までも腹を立たせ、食ってかかろうとする。

だが唯一、夢斗は冷静な眼差しを彼に向け、言い放った。

「そうか、分かった。時間とらせて、すまない」

思いがけない一言に、リサ、光一が振り向く。どこか、キリウも驚いた様子だ。

「行こう、リサ、光一。早く、グレン達に追いつかないと」

「で、でも...」

「仕方ないさ。もともと、キリウは俺らが巻き込んだんだ。これ以上、手を煩わせるのも悪いよ。それに、こんなところで立ち止まっている場合じゃあない。行かないと」

その眼差しから迷いや後悔など、微塵も伝わってこない。力強い彼の一言に、キリウを含めた全員が息を飲む。

何があったんだ、こいつは――キリウはまっすぐ夢斗を見て、そんなことを考えていた。数日前までの戸惑いや恐れが、まるで感じられない。目的のためにただ進むべき道を冷静に、素早く見極める。その徹底した姿勢に、どうにも調子が狂う。

「良いの、夢斗君？ 僕ら三人だけで、戦うことになるけど...」

「しょうがないさ。元々、俺とリサだけでも行くって決めたんだ。だからここに来たし、それにただ黙ってやられるつもりもない。晩飯までには、帰らなきゃいけないからな」

唐突に出た一言に、光一まで「ええ？」と驚く。無理もないだろう。母とのやり取りを見ていたリサだけが、夢斗の「強さ」の理由を知っている。

「命を散らす気なんてない。俺らは戦士とか、そういうんじゃないんだ。世界を超える力を持ってようが、中身はただの高校生。俺の気持ちは、最初から変わってないよ。この世界のどこかにいる、皆を見つけない。だから、ここで死ぬなんて、死んでもごめんだ」

もはや止まるつもりなどない意思が、容赦などせず言葉に乗って叩きつけられる。

ついには光一も「やれやれ」とうんざりした顔をした。

「分かったよ...うん、行こう。リサさんも、ワニ男さんのことは諦めよう」

驚いて光一を見るリサ。少年の顔には諦めの中にも、どこか懐かしい色も混じっている。

「あの目はダメ、夢斗君はああなったら絶対聞かないんだ。クール頑固なんだよ、昔から。びっくりするくらい強情なんだもん。でもまあ、そういうときは大体、理由もなく言ってるんじゃないから、皆結構、うまく利用してたんだけどね」

この一言に、思わず夢斗も眉をしかめる。

「なんだよそれ、クール頑固って。そんな風に思ってたのか、お前ら。別にクールにした覚えも、頑固なつもりもないんだけど...」

「顔が怖いからなあ、夢斗君。もっとうんざり、美顔パックとかやったらどうなの」

「んなもんで治るかよ、顔の怖さなんざ。生まれつきだ、これは」

立つ世界も互いの姿も変わっていても、そのやりとりだけはかつての「クラスメイト同士」の会話なのだろう。学校の校舎で、机に座りながら二人はきっと、こうして馬鹿を言い合っていたのだ。

それを見ると、リサは緊張の糸が緩んでしまった。急な事態に張り詰め、がんじがらめにされそうになっていた心が、戻ってくる。

だが唯一、二人のやりとりをキリウだけは啞然として見ていた。荷を結ぶ手も止まり、少年少女達の声聞く。

理解ができないという以上に、キリウの中に何か別の感情が湧き上がる。思わず、彼は問いかけていた。

「おい、ユメト。お前らは――『オーバー』は皆、こうなんか？ 命知らずで、無鉄砲で、非効

率的で」

「随分言ってくれるな。でも、関係ないよ、『オーバー』かどうかなんて。あれはただ、世界を行き来できるだけ。俺は何も変わったつもりはないよ」

返ってきた言葉になおもキリウは狼狽する。

「じゃあ...『コウコウセイ』やからか？」

「だから関係ないよ、そういうの。地位とか年齢とか立場とか――生まれつきこうなんだ。きつとこういう人間なんだろうさ」

ここで、またも光一が意地悪に続いた。

「そうそう。夢斗君の頑固さは生まれつきだよ、きつと。入学した時から変わらないもの。一回スイッチが入ると、なんで？ ってくらい頑固なんだ。雷オヤジの才能があるよ、きつと」

「だから、そんな頑固なつもりはないんだけどな.....リサ、そう思うか？」

「ふえ？ あ〜.....ど、どうですかねえ」

急に問いかけられ、苦笑いをするリサ。その様子からだと、光一の言葉を否定しきれないらしい。どうにも納得いかない夢斗は、後ろ頭を搔いてしまう。

微笑ましい光景も、キリウからしたらなぜか浮世離れした絵に思えてしまう。啞然とし、笑うことができない。

なんだ、これは――キリウは自身の脳内に湧き上がる強烈な「デジャヴュ」に戸惑ってしまう。激しい既視感を抱き、眩暈すらした。

クレイドルは戦乱の世。それゆえに、そこには「非効率」な輩がごまんという。報酬などなくとも戦場に立ち、己の「信念」のみを糧に武器を振るう。キリウからすれば「阿呆」の集まりが、そこそこにいるのだ。

大義名分など金にならない。綺麗事を重ねた結果、己の命を絶たれたのではただの無駄死にだ。どんな英雄を見ても、キリウの心はそうとしか動かない。「心」だけでは食っていけないし、野たれ死ぬ者を助けてくれなどしない。

その思想は、商売人として各地を渡り歩き始めた時から、変わらないはずだ。

目の前の彼らは、今まで見てきた青臭い「英雄気取り」と同じ――そう思いたい自分が、なぜか心の中に違和感を抱く。昨晚、森で「心喰い」に襲われる前、焚き火の前で感じた、あの感覚だ。

思わず、己が手を見つめた。見覚えのあるはずの鱗をまとった手が、ひどく異質に見える。

だが戸惑うキリウに構わず、ついに夢斗らは踵を返す。去り際、彼は最後にキリウに言った。

「短い間だったけど、ありがとう。またどこかで会えたら、サービスしてくれ」

軽快に駆け出す三人に、キリウは何も返すことができなかった。ただ、去っていく背中を見つめたまま考える。

自分の気持ち、自分で理解できない。こんな感情は初めてだ。それは、彼の言葉に感化されたからだけではない。夢斗らのやり取りに、ひどく見覚えがある。

おもむろに、懐にしまっていたチョコレート菓子の包み紙を取り出した。破られたビニールの上に書かれたその異界の文字を、じっと眺める。

ミルクチョコレート―数日前までは、まるで何のことか分からなかった記号が、今では明瞭に読み取れる。

自身の体に起こった変化に戸惑い、キリウは再度、離れていく小さな背中を見つめた。

異界からやってきた「コウコウセイ」。静かで頑固な少年、モロボシ ユメト。

その響きに鼓動がまた一つ、高鳴った。

ひたすら走り、休む間もなく森を、そして平原を抜ける。やがて三人は荒野に足を踏み入れた。隆起した土の丘の上に、無機質な岩石が転がり、所々に巨大なカニのような生物や、恐竜を彷彿とさせる群れが見える。だが、今は異界の生物を眺めている暇などない。

「光一、まだつかないのか!？」

振り返り問いかけると、光一はゼエゼエ言いながらも、なんとか追いついてきていた。元陸上部だけあって、夢斗の体力と足の速さは一級品だ。対して光一は元々運動などしないから、長距離走は慣れていないのだろう。

「も、もうちょっとだよ...多分.....そろそろ...『塔』が見えてくるんだ...グレンはそこで.....迎え撃つって言ってた」

「だ、大丈夫か、光一」

「大丈夫じゃないよ、まったく! あ〜、お腹痛い...」

やっと追いつき、がっくりとうなだる光一。何度もむせる姿は、実に苦しそうだ。

リサは荒野の先を見つめる。砂埃の奥に、何やら大きな影を発見した。

「あれじゃないですか? あそこに皆さん、いるはずです!」

リサが指差し、全員が振り向いた、その瞬間だった。

三人の視線の先から「ドンッ」という音と共に、地響きが伝わってきた。ぎょっとし、目を見開く。耳を澄ますと、何かがぶつかり合う、激しい音が聞こえる。

思わず夢斗が吠えた。

「そんな...もう、戦いが始まっちゃってるのか!？」

真っ先に一步を踏み出したのは、リサだった。

「急ぎましょう! とにかく、止めないと!」

今更誰も否定はしない。三人は休む間もなく、体力を振り絞って再び走り出した。

土煙が晴れ、やがて戦闘拠点である大きな塔が見えてきた。これも恐らく、過去の誰かが作り上げた遺跡なのだろう。今ではすっかり、作戦のための拠点とされている。

だが一同の視線はその遺跡ではなく、荒野の中に広がる光景に奪われてしまった。

先頭を走っていた夢斗が、足を止める。

「なっ―――」

言葉が出なかった。目の前の状況を、とっさに理解することができない。それはリサと光一も同様だったのだろう。絶句し、悲鳴すらあげそうになってしまう。

荒野に転がる、無数の兵士、獣人の体。皆、ボロボロで、おびただしい量の血が大地を赤黒く染める。砕けた武器が、鎧が、戦いの凄惨さを物語っていた。

風に乗って伝わる、生臭い匂い。生き物がただの肉塊へと変わったことを告げるおぞましい香りに、めまいがする。

あの時と同じ――夢斗が初めてこの世界に来て、巻き込まれた「戦場」に漂っていたのと、同じ臭いだ。

気をしっかり持ち、歯をくいしばる。しかし、三人は嫌悪感を露わにするよりも前に、その倒れた戦士の群れの奥に立つ「彼」の姿に絶句する。

血の海のその中心にたった一人、立ち尽くす人物。

紺色のローブが風に揺らめき、バサバサと音を立てていた。白い体毛に覆われた頭部、手。そして長い「兎」の耳。彼は杖を片手に携えたまま、こちらに背を向けている。

近付きつつ、思わずリサが声を上げた。「彼」ともっとも密接なつながりを持つ、彼女が。「なんで...あなたがここに...」

冷静に考えれば、それは何もおかしいことではないのかもしれない。「彼」もまた獣人であり、レジスタンスに所属している一人だ。ただ、その思考が「武力」による対立ではなく「融和」による解決に寄っていた。それだけの違いである。

ローブの男は三人の気配を察し、ゆっくりと振り返る。

優しい眼差しだ。全てを見透かしたかのような瞳に、いつもとは違う冷たさが混じる。見慣れた彼の顔には、べっとりと返り血がついていた。

その言い知れぬ気迫に不安がよぎる。

どういう経緯かは分からない。だがまるでこれは――彼の仕業のようにすら見える。

レジスタンスの「融和派」として、少数で活動を続けていた長・ニンバム。

彼は血の海の真ん中で、こちらを見て少し驚いているようだった。

「あなた達――なぜ？」

鼓動が加速する。夢斗達は抱いてしまった想像に、どうしようもない恐怖を感じてしまう。

兵士と戦士。どちらも動かない血の海に佇む、たった一人の獣人。杖を持ち、圧倒的な魔力を有した賢人。

この惨状を作ったのは誰だ？ この場で、惨状を作り得るのは、誰だ？

その答えを、三人はかの賢人に向けてしまう。

ついに夢斗が叫ぶ。

「ニンバム.....何してるんだ？ あんたが何で、ここに...これは、一体...」

緊張し、回答を待つ。

頭の中によぎった最悪のシナリオ。それはすなわちこの賢人の正体が、心の臓を喰らう「怪物」であるということだ。

風の音が周囲に渦巻く。砂塵を浴びながら、ニンバムは三人に告げた。

「駄目です、こんな所に来ては。あなた達には危険すぎる。まして『彼』の姿は――」

謎の言葉に首をかしげてしまう。だが、突如聞こえた水音に振り向いた。

夢斗らだけではない。ニンバムもまた杖を握りしめ、緊張した面持ちを浮かべている。

ニンバムから離れた位置に「真っ赤」な人物が立ち上がっていた。血と泥に濡れたせいで、全

身がボロボロだ。汚れた命の水をポタポタと垂らしながら、彼は天を仰ぐ。先程の音は、体から滴り落ちた血と泥の音だと分かる。

「あ～～、効いたよ、さっきのは。ニンバム、相変わらず容赦しないねえ、君は」

聞き覚えのある声にハッとする。その正体に真っ先に気付いたのは「彼」と馴染みの深い、光一だった。

「グレン……？」

血だまりの中から起き上がった人物の正体に、誰もが気付く。頭から血だらけになり、全身真っ赤に染まった「武力派」の長。

猫型獣人の男・グレンだ。本来、全身を覆う体毛は鮮やかな真紅なのだが、血に濡れてしまい、より濃く赤がにじむ。

立ち上がったグレンに声をかけようとした。だが、それよりも早く彼は動き、右手に携えていた「武器」を持ち上げる。視線すら合わさず、その切っ先は離れた位置にいる、ニンバムに向いていた。

瞬間、血が見えない力で放射状に吹き飛ぶ。グレンが持っている武器の先端から「放たれた力」がまっすぐ飛来し、ニンバムに襲いかかった。しかし、賢人はすぐさま魔法で防御壁を展開し、これを防ぐ。空気が吹き飛び、風が砂塵をかき乱した。

突然の事態に、夢斗達はついていけない。だがそんな中で、血塗れのグレンは視線をニンバムに向ける。

大きく見開いた目に、いつもの優しげな光はない。

「あははは！ さすが、素早いなあ。以前よりも、魔法の反応速度が早くなってる。真面目に修行してたんだなあ」

そう言って笑うグレン。優しさやおおらかさなど、そこにはない。まるでこの絶望的な状況に歓喜しているかのようだ。

おぞましい光景に夢斗らは言葉が出ない。そうこうしていると、振り返りざまにグレンはまた1発、2発と、かざした「武器」を作動させ、ニンバムを襲う。

その武器には見覚えがある。かつてグレンが夢斗らに起動を依頼した「オーバーテクノロジー」だ。引き金を持たない、見えざる力を「弾丸」として射出する、銃である。

ニンバムは再び防御壁をぶつけて防ぐ。ドオン、という空気が揺れる音が、何発も荒野に響いた。

ようやく、光一がこの理解できない状況に声を上げる。

「なにやってんだよ、グレン！　なんで、ニンバムと…その人だって、レジスタンスだろ！？」

ようやく、グレンはこちらに気付いたらしい。ぎょろりと見開かれた目が、三人を捉える。その恐ろしさに、一同は息を飲んでしまった。

なんだ、あの表情は。

「あっれえ、なんで君達がここにいるんだ？　大人しくしておけって言ったのに、仕方がないなあ」

投げかけられた言葉はどこか間延びしていて、かつての彼の快活さなど見る影もない。夢斗達

は冷や汗を浮かべ、その奇怪な姿を見つめる。

「まっ、いいか、なんでも。君達には感謝してるんだあ。こんな素晴らしい道具を使えるようにしてくれたからね。おかげで見てよ、これ。こんなに殺すことができた！」

手を広げ、嬉しそうに言うグレン。その一言で全員が戦慄する。

反射的に、夢斗が口を開いていた。

「殺した——だと。この兵士も、獣人も……あんたが」

「そっ！ 僕がやったんだ。すごいねえ、この道具は。なにせ、そこら中にある『空気』を取り込んで、思った通りの軌道、破壊力の弾を撃てるんだ。これじゃあ、弓矢なんてとんだ時代遅れだよ！」

嬉しそうに手にした「オーバーテクノロジー」を見つめるグレン。だが、誰一人笑うことなどできない。あの兵器の使い道なんかより、もっと聞かなければいけないことがある。

リサがわなわなと震え、問いかけた。

「なんで、ですか……これ…王国とレジスタンスが戦ったんじゃあ…」

「ああ、もちろん王国とはぶつかり合ったさ。だけど奴らが撤退しようとしたから、このまま王国に直接進軍しようって言ったんだよ。だけど、どいつもこいつも怖気付いてさ。がっかりだよ、まったく」

明瞭に、しかしどこか無邪気な壊れた口調で、彼は答えた。リサは更に声を荒げてしまう。

「な、何言ってるんですか？ 気に入らないから…味方まで手にかけてっていうんですか!？」

「だから、そう言ってるじゃないか。だって面倒だろう？ や〜っと、奴らと思い切り戦争できるんだ。それなのに、ここまで来て一旦下がろうだなんて。こんな腰抜けの集団だとは思わなかったよ」

身体中の血液が速度を増す。唐突に突きつけられた現実を、とても受け止めきれない。

なんだこの光景は——死屍累々の山のその中央に立つ、二人の獣人。全身が血に濡れ、それでもいつものように明るく、緊張せずに話すグレン。ある意味、彼は何も変わっていない。アジトで多くの獣人をまとめ上げていた、戦士達の先陣を行くリーダーとしての、底なしのポジティブな姿勢が伝わってくる。

だが、だからこそ、夢斗らは彼が恐ろしい。ここはアジトではない。命を削り、血を流してでも前に進む非情な戦場だ。その中で仲間が死に、多くの命をあえて奪った者が、その笑みを浮かべる。

何かがおかしい。今まで抱かなかった特大の違和感を、ようやく全員が身をもって知った。

この男、何かが狂っている。

「どうだって良かったんだよ、『心喰い』の正体とか」

その一言に、息を飲む夢斗達。グレンの浮かべた笑みは——マスクの奥で歪んでいるであろうその狂笑は、けっして止まらない。

「王国が気に入らなかった。僕らを野蛮だと嘲笑う人間どもが、憎くて憎くて仕方なかった。だから戦えるだけの人材を集めた。シンプルな理由だろう？ 僕らは「力」でやつらをねじ伏せたかった、それだけさ。事件がどうか、どうでも良い。ずっと前から、こうやって堂々と戦え

る機会を伺ってたんだ」

ようやく一步を踏み出し、夢斗は吠える。むせ返る血の匂いに屈せず、思いを叩きつけた。「おい、ふざけんなよ...あんたら、散々『真実を探せ』だの言うておいて...結局は、ただ戦いたかっただど？ わけ分かんねえこと言うなよ！」

「やかましいんだよ、さっきからあ！！」

夢斗に向かって、グレンはあの「銃」を発射した。轟音と共に炸裂する空気の大砲。思わず目を伏せたが、光の壁が夢斗を守る。

息を飲む一同。夢斗も目を開き、その魔法の使い手を見つめた。

ただ一人、グレンだけは彼を――ニンバムを睨みつける。

「随分と優しいんだな、ニンバム。君はどっちの味方なんだ、ああ？」

彼に向き直り、だらりと腕を下すグレン。ニンバムは力強い眼差しを前に向けたまま、杖を構えている。

「君だって、ここまで同じ志でやってきたんだろ？ 獣人達を踏みにじる奴らに、飛び切りのお灸をすえるためにさあ」

「確かに...私達は元を正せば、王国に対し武器を取った同志。獣人の尊厳を取り戻すため...最悪の場合、人々を血に染め上げて、前に進む、と」

一瞬、三人はニンバムにも恐怖を感じてしまう。血の海の中に立つもう一人の「長」に、疑惑の念を抱いてしまった。

しかし、ニンバムはなおもグレンに言い放った。

「だが、力でぶつかり合い、潰しあい、それではいけないと気付いた。だから私はあなたの元を去り、別の解決策を日々、模索し続けた。だからこそ今日――こうやって、あなたを止めに来たのです。グレン」

杖を構え、まっすぐグレンを睨むニンバム。あっけにとられている夢斗らに、彼は強く言い放つ。

「皆さん、来てはいけません！ ここから先は、もうあなた達が踏み込むべき領域ではない。彼らは本気です。本気で――――王国の人間を、皆殺しにするつもりなのです」

その一言で、衝撃が夢斗らの体を貫く。しかし一方で、当のグレンはへらへらと笑ったまま、体中の血を拭っていた。

「見せたくはなかった。だが、最悪の結末になってしまった。これが.....これこそが、我々の真実です。彼は今日までずっと抑え込んできた。内に秘めた狂気を。『皆殺しにしたい』という、願望を。しかし今日、それがようやく叶いかけた時、もはや『理性』を『狂気』が食い破った。私がレジスタンスにいたもう一つの理由。それこそ、この男を抑制するために他ならない」

賢人の口から語られた真実はあまりにも唐突で、そして重かった。呼吸を荒げ、ニンバム、そしてグレンを交互に見る。

もはや快活に笑う優男は、そこにはいない。

立っているのは殺戮道具を持ち、戦場にやってきた一匹の「獣」。

内なる殺意をまるで隠さず、無邪気さに任せて純粋な牙に変えた、狂った「猛獣」。

怪物は――グレンはけらけらと笑い、前を向く。

「随分言ってくれるなあ、ニンバム。さすが、僕の親友だ。よおく、僕のことを知ってる。だから僕だって同じだよ。僕だって――」

瞬間、バシッと音と共に、赤いしぶきが上がる。血が巻きあがり、グレンが大きく踏み込んだ。赤い姿が尾を引き、ニンバムに迫る。

「君のことはよく知ってる！！」

狂気と凶器。それらが「紅蓮」の風となって、賢人に襲い掛かった。見ていた三人が息をのむ。グレンは右手で銃を握りしめているが、もう一方の手には大きく湾曲した刃を、逆手に持っていた。いずれも血で濡れ、雫が宙に飛び散っている。

杖を構えたまま、備えるニンバム。既に肉体のうちに「術式」を整え、魔法の力を身にまとう。攻撃でも防御でも、即座に対応できるだけの備えがあった。

グレンは更に踏み込み、加速する。だが刃の射程距離に到達する前に、彼は銃口を持ち上げ、心の中の「引き金」を引いた。

彼の意志をくみ取り「オーバーテクノロジー」が作動する。ごがんっ、という音と共に圧縮し、放たれる「空気」。グレンが向かう先の地面に炸裂し、土と血が混ざり合ったしぶきをまき散らす。

視界が一瞬、黒と赤に染まった。だが、見えなくても賢人は気配で位置を察知する。高速で動くグレンの位置を、視界外に確かに捉えていた。

しかし、それでも彼はただの魔導士だ。戦場においてここまでの接近を許してしまったこと自体が、彼の命運を分けてしまう。

右にいる――ニンバムが視線を走らせると、すぐ目の前にグレンのぎらぎらと光る眼差しが見えた。逆手に構えた一刀を持ち上げ、首目掛けて薙ぎ払ってくる。

もう驚きはしない。もとより心のどこかでニンバムは、いつかこの瞬間が来るだろうと予感すらしていたのだ。

杖を振りぬく賢人。周囲の大気が急加速し、切れ味を生む。ニンバムを中心として発動した竜巻が、グレンの体に真横から襲い掛かる。

放たれたグレンの刃の切っ先がニンバムの首筋をかすめ、彼の首元のチョーカーを切り裂いた。きりもみになり、吹き飛ぶグレン。彼ははずたはずたになりながら、再び離れた血濡れの大地に叩きつけられた。

「ッ！！」

思わず首元の傷を抑えるニンバム。致命傷ではない。出血量も大したことはないはずだ。

しかし、問題なのは傷口の深さなどではない。立ち上がったグレンが、背を向けたまま笑う。「あーあーあーあー、当たっちゃったなあ、ニンバム！ 心臓をえぐられるよりも、脳味噌を引き抜かれるよりも――そこが君の致命傷だ。よおく、知ってる！」

首をかすっただけのはずだ。しかし、ニンバムはがくりと膝をついてしまう。

固唾を飲んで見守っていたリサも、声を上げてしまった。

「ニンバムさん！」

恐れ、前に出れないリサに、グレンが高らかに言う。

「お嬢さん——いや、君達い。よおく見ておくんだ。この男だって僕と同類。中身は何ら変わらない、獣だってことを」

振り向くグレン。こちらに笑いかけるその顔に、絶句してしまう。

先程のニンバムの一撃で全身はズタズタだ。衝撃で口元を覆っていたマスクが吹き飛んでしまったらしい。初めて、その下の素顔が三人の前にさらけ出された。

緑と青のオッドアイ。鋭く、大きく、しかし怪しく光るその眼の下に、大きく開かれた口がある。ずたずたに切り裂かれ、歯茎も、牙も丸見えになった異形。予想外の姿に、夢斗らは声が出ない。汗がまた少し、勢いを増した。

ばっくりと切り裂かれた口を大きく開け、彼は笑った。あれが、あれこそが——あのグレンという男が、マスクの下で浮かべていた笑みだったのだ。

「どうだ、怖いだろ？ 大昔、奴隷として扱われていた時、人間どもに面白がって唇を全部切り裂かれたんだ。痛かったなあ、あれは——これを見て、人間どもはいつも言う。『野蛮な醜い獣だ』って。うふふっ。道具が使えて、ぬくぬく暮らしているだけで、随分偉そうだよねえ」

それだけの悲痛な過去を語れども、グレンの笑みは揺らがない。彼の眼差しがとろんと、どこか酔ったように緩む。

「あの時からずっと...ずうっと待ち焦がれた瞬間だったんだ。やっと堂々と、人間どもを駆逐できる。『心喰い』なんて奴が現れてくれたおかげで、やりやすかったよお。お互い敵と敵——王国とぶつかり合うことに、誰も何も疑問に思わないんだからねえ」

こうしている間にもニンバムはうずくまり、傷を抑えて苦しんでいる。

たまらず、光一がグレンに真意を問う。

「そんな.....それじゃあ、あんたは——最初っから、堂々と戦争するために...『心喰い』を利用していったってこと？」

「随分物分かりがいいじゃないかあ、コーイチい！ やっぱり君は、頭が良いねえ」

「そんなこと.....それなのに...一緒に来てくれた皆を.....皆をっ...！」

わなわなと少年の瞳が震える。その大きな眼に、地面に横たわる獣人達の姿があった。

どの顔も知っている。生まれや育ちは違えど、同じ志の元に集い、今日まで歩んできた。異邦者である光一を受け入れ、乱暴ではあるがそれでも元の世界に戻るために知恵を絞ってくれた。初めて狩りが成功したとき、お祝いだと一緒にばか騒ぎしてくれたことも、よく覚えてる。

。

夢斗とリサだって、その気持ちは同じだ。昨日の夜——「オーバー」である二人の功績を称え、まるで自分たちのことのように喜んでくれた。一緒に盃を交わし、互いの世界のことを語り合った、愛すべき乱暴者の群れ。

見慣れた顔が、そこら中で横たわっている。一人、また一人と知り合いを見つけるたび、どうしようもなく体が震え、冷たくなっていく。

彼らは、今はもう動かない。腕が欠け、足が折れ、体に穴が開き、横たわっている。

全部、彼のせいだ——ニンバムは止めに來ただけだ。この惨劇を作り上げたのは、全てあの赤

い獣がやった。

光一という少年に湧き上がる悲しみ、そして怒りを、この中では誰よりも彼と一緒に歩んできた「クラスメイト」がくみ取る。

その無念を怒りに変え、戸惑いを押し込んで吠える。

「あんた……最初からこういうつもりだったんだな。俺らに会った時も、全部分かったうえで」「そうそう。君達『オーバー』が現れた時、笑いが止まらなかったよ。だって、これは僕らにとって、この上ない戦力の増強に繋がると思ったからねえ。事実、誰も『これ』の力になすすべもなかった。今まで見たこともない、原理も分からない道具に、見るも無残に倒れていったよ！」

手に持った「銃」を眺め、高らかに笑うグレン。彼は血に濡れた銃身を撫でながら、恍惚とした笑みを浮かべていた。

「できれば、君らには向こう側で、おとなしくしてて欲しかったんだよなあ。邪魔されても面倒だから、親切に気遣ってあげたのに。悪い子だね、君らは」

昨晚、夢斗達を戦争から遠ざけたのは、このためだったのだ。

彼らの身を案じてなどいない。ただ邪魔だったから、グレンは夢斗らをここから排除したのだ。

思い切り、自身が殺戮劇を楽しむために。

おぞましい――それは、彼の見た目がどうということではない。彼が今日まで隠し、育み、しかし確かに抱き続けたどす黒い本性。怒りや妬みが生み出した、彼の中の「真実」に、ただ、ただ、そう思う。

だが、それに気付いた時にはもう遅い。うずくまっていたニンバムが声を上げ、苦しみだした。

「ニンバムさんっ!？」

「あーあー、始まった。今まで必死に抑え込んできたのに、あっけないもんだねえ」

空気が鳴動した。地に伏せ、必死にもがくニンバム。彼の体から、とてつもない力が溢れ出す。

「君だって一緒だろう、ニンバム。賢いかもしれないが、根底は何も変わらない。君だって人間を憎み、そのマイナスを力に変えてきたはずだ。そうだろう？」

ニンバムの肉体が肥大する。その光景に、夢斗らは息を飲んだ。ローブが破れ、肩が、腕が、体中の肉が盛り上がっていく。

それをただ一人、満足げに眺めながらグレンは笑った。

「憎いよなあ、憎いよなあ!？ ただの人間として生きていけるはずだったんだ。だけど、君の『親父』は君にそれ以外を求めた。だからそんな姿になったんだろう？」

その言葉に、誰もがグレンを見つめてしまった。

父親が、どうしたというのだ――どくん、とニンバムの鼓動が大気を震わす。地面が揺れ、荒ぶる力が賢人の肉体を肥大化させ続ける。

三人は戦場の真ん中で変貌していくニンバムを見つめていた。グレンだけではない、この優しい賢人もなにかを持っている。夢斗らに今までひた隠しにしていた、なにかを。

「必死に魔法を学び、自身の呪われた力を『さが』を抑え込み続けた。だからこの首輪で、自縛の道を選んだんだろう？ だけどそれももう終わりだ。ニンバム」

笑うグレンの手に、彼が切り裂いたチョーカーが握られていた。ニンバムが首にはめていたものである。

ついにニンバムの姿は、見上げるほどの巨体へと変わってしまっていた。隆起した肉、長い腕と足。その表情にかつての面影はない。焦点が定まらない目で、彼は荒々しく息を吐きだしながら、周囲を見渡していた。

絶句し、後ずさりしてしまう一同。ただ一人、グレンだけが高らかに笑う。

「もう、自分を偽る必要もない。一緒に行こう！ 二人で王国にいる人間を、根絶やしにしよう！ 呪われた『大罪人』の父、魔導師・ヴァドス＝アーズレンの意志と呪いを継ぐ男！ ニンバム＝アーズレン！！」

夢斗だけでなく、リサ、光一の脳内に、ある記憶がはじける。

王国に潜入した際に見つけた、過去の呪われた魔法史。そこに記述された大罪人の名が。

「魔神」との邂逅を望み、禁忌の秘術に手を出したことで、邪悪な魔導士として処刑された世紀の大罪人。過去の歴史とばかり思っていたその大罪人の記述を、思い出す。

実の「息子」すら実験材料として扱い、秘術「心移し」を編み出した、呪われし名前。

かつての大魔導師・ヴァドス＝アーズレン——その忌むべき血を持つ「息子」は、まさに目の前にいる。

ヴァドスの息子・ニンバムが吠えた。もはやそこに、あの優しい波長などはない。そこに立っているのは一匹の猛獣。獰猛な本性をさらけ出した、造られた「怪物」である。

全てを理解すると同時に、身構える三人。巨体を揺らし、怪物・ニンバムはこちらへと向かってくる。一步を踏み出すごとにどすどすと地面が揺れた。

理性も、知性も、友情も、愛情も——全てを捨て去った怪物は、長く大きな牙を剥き出しにし、かつて仲間であった三人を睨みつけていた。

向かってくる猛獣を見据え、各々が行動に出る。夢斗は左、リサと光一は右側へ飛びのいた。少し遅れてニンバムが両の腕を振り下ろし、地面に叩きつける。大地が砕け、クレーターのよう
に陥没した。人外の破壊力に、息を飲んでしまう。

我を忘れたニンバムの瞳は、獲物をひたすらに探している。これが彼の真の姿なのだろうか。知を尊び、静かなるを愛する彼は、もはやそこにはいない。

絡み合った因果は理解できた。しかし、今はどうかこの状況を打破しなければいけない。覚悟を決めた夢斗が身構え、彼の意志を汲んだブーツが作動する。その音に気づき、光一が声を上げた。

「夢斗君、まさか――！」

「やるしかないだろう。どんな理由があるにせよ、黙って潰されるわけにはいかない！」

ニンバムは照準を夢斗に合わせた。荒れ狂う「暴れ兎」は丸太のような腕を、迷うことなく振り下ろす。夢斗は上から迫る一撃を高速移動で回避し、後ろからニンバムの腰を蹴りこんだ。

だが、まるでびくともしない。柔らかさに包み込まれた巨大な岩のようだ。足から伝わる感触が、その奥にある強固な芯を感じさせる。

跳ね飛ばされていまい、体勢を崩す夢斗。すかさずニンバムは真後ろへと蹴りこんできた。巨木のような足がまっすぐ、夢斗に突き刺さる。

鈍い音と共に、今度はニンバムの巨体が揺れる。間一髪のところでもリサが魔法の盾を展開し、直撃を防いだ。

「さ、サンキュー、リサ！」

「どういたしまして！ で、でも……こんなの、どうすれば…」

不安げなまなざしで、構えたままニンバムを見上げる。もはや今の彼に理性はない。周囲に立つ「人間」を所かまわず襲う、正真正銘の怪物だ。父である大魔導士に改造され、化け物へと変えられてしまった忌むべき血。今まで、自身で開発した「封印」をチョーカーに施し、肉体を抑え込んできたのだろう。

夢斗は歯噛みし、再度、向かってくる拳を避けて跳ぶ。胴体に蹴りこみ、素早く撤退した。やはり効果などそこにはない。

荒ぶる暴力を見て、ご満悦な笑い声をあげたのはグレンだ。

「いいぞ、いいぞお、ニンバム！ それでこそ君だ！ どんなに綺麗事を並べようが、君は怪物！ 人間と獣人は交わることなど、けっしてできない。自分の本性を隠し続けるなんて馬鹿らしいこと、もうする必要はないんだ。真実の君を見せるんだ！」

実に嬉しそうに、大きく手を広げて笑う。

共に「人を駆逐する」という思想の元、今日まで歩んできたグレンとニンバム。二人にとって人間とは忌むべき相手であり、その人間をいかに根絶やしにするか――それを今日まで考えてきたのだろう。

賢人が奥底に抑え込んでいたのは「狂気」――かつて、彼の父親から施された禍々しい魔力に

よる改造。それによって得た力と、ありったけの憎悪。自身の首に「枷」をつけることで、常に彼はそれを抑制していたのだ。

解き放たれた猛獣は止まらない。必死に応戦する夢斗に、野生の本能のみで襲いかかるニンバム。巨体に何発も高速の蹴りが叩き込まれるが、まるで意に介さない。巨大過ぎる肉体に、蚊の一差しなど意味を持たないのだ。

振り回される大木のような腕を避け、距離をとる夢斗。吹き出た汗が風と共に流れる。ニンバムの拳が地面を砕き、散弾のようにこちらに飛んできた。リサがすんでのところで、盾を作り上げ、守ってくれる。

リサは魔法で応戦しながらも、吠えた。

「ニンバムさん、ニンバムさあん！！ やめてください、こんなの...こんなこと...！ あなたは、あんなに優しくなかったじゃないですか！」

必死に呼びかけるも、怪物はまるで聞く耳を持たない。小さなリサを踏み潰そうと、雄叫びをあげながら足を振り下ろす。

間一髪、夢斗が駆け抜け、彼女を救った。大地が揺れ、亀裂が走る。衝撃にぐらつきながらも二人は回避し、立ち上がる。

「こんなの、ひどすぎます！ あなたは人間と.....話し合いで解決を望んでたじゃないですか！？」

夢斗ら三人の中で、ニンバムのことをよく知っているのは、他ならぬこの少女だ。こちらの世界で初めて出会い、さまざまなことを教えられた。「オーバー」であるという以上に、人としてニンバムは優しく、丁寧に接してくれた。

そんな彼を知っているからこそ、諦めきれない。夢斗の制止を振り切り、リサは吠え続ける。

その異常な光景に、光一は足がすくんで動けない。眼の前で起こっているあまりにも残酷な事態が、素直に弓矢を構えさせてくれない。

リサの声に、怪物の後ろからグレンが笑い声をあげる。

「君達が彼の何を知ってるんだい、ええ？ 他の世界から来た君達が、虐げられた彼の何を！ 呪われた父親を持ち、人として生きることを捨てさせられた、彼の何が分かるっていうんだい！」

もっともな皮肉は三人の心に絡みつく。彼の言う通り、ニンバムと出会ってリサですら数ヶ月しか経っていない。彼の人生、彼の過去など、考えたこともなかった。

ゆっくりとこちらに顔を上げるニンバム。怪物の眼光は目の前の少年、少女を捉え、一步を踏み出させる。

夢斗は歯噛みしつつも、覚悟を決めた。腰を落とし、向かってくる巨人を見据える。そのすぐ後ろで未だに構えを作れないリサ。そして、震えて前を向くしかない光一がいた。

また一つ、狂気を帯びた笑い声が響く。

「すべてニンバムの望み通りだ！ いや、彼だけではない。僕の、我々の望みが今日叶う。なんて――なんて素晴らしい日だ！！」

天を仰ぐように笑うグレン。大きく裂けた口から、牙をむき出しにして、ただ笑う。

おぞましい——夢斗らは、何度そう思ったことだろうか。今までの微笑ましいやりとりが、この世界で出会ってからのすべての思い出が、黒く塗りつぶされていく。

全ては幻。出会った二人の心優しい獣人の「核」は、今日の前に広がっているこの光景だ。人も獣もない。邪魔する者を全て破壊し尽くす、荒ぶる怒り。

それこそが真実——もう一步踏み出すニンバム。その姿に、誰もが絶望と敵意を、心に抱こうとしていた。

グレンの笑い声、砂塵を運ぶ風。

それらに混じり、誰よりも透き通ったはっきりした声が、空気を揺らす。

「なめんじゃないよ、さっきから」

グレンの笑い声が、止まった。夢斗、リサ、光一も目をも開き、振り返る。ニンバムもその声を聞き、足を止めた。

いつの間にか、無数の獣人達の死体の中に「彼女」は立っていた。全身ボロボロだが、特徴的な大きな丸い耳、赤を主体とした軽鎧と、武器である両拳のナックルは見覚えがある。

愛用の兜は右半分が大きく欠けていた。肩で息をしながら、彼女は鋭い眼差しをグレンに向けている。

ニンバムと共に「融和派」で戦い続けていた、陽気さと激しさを兼ね備えたネズミの女戦士・マウマウ。彼女は血に濡れたまま、それでも前を向き、立つ。

グレンは呆れたようにため息をつき、笑った。

「なめるな、だって？ 分かりやすい虚勢はよしてくれよ。戦場で大事なものは結果だ。どれだけ吠えようが、倒れていてはただの負け犬の遠吠え——」

「私を、じゃない。ニンバムを舐めるなって言ってる」

マウマウから放たれた気迫に、グレンが息を飲む。夢斗らは荒々しく呼吸を繰り返すニンバムに警戒しつつ、彼女が放った言葉に足を止めた。彼女の言葉に、いつものような陽気さはない。兜をかぶり、戦闘へとおもむく「武人」の気迫が、そこにはある。

グレンには、その言葉の真意が分からない。獣人への侮辱以上に、怪物として暴れまわるニンバムを馬鹿にされたことに怒るなどと。少なからず困惑するグレンに、マウマウは吠える。

「あんたが出会うずっと前から、あたしはニンバムのことを知ってる。初めて雪山の奥地でこいつを見つけた時、同じように暴れまわっていた。何度も何度も、拳ぶつけて——右腕の骨がボロボロになって、ようやく仕留めれた。そんなどうしようもない、怪物さ」

その一言で、夢斗らは気付く。かつてマウマウと話していた、ある言葉を思い出していた。

ニンバムとマウマウの出会い——傭兵時代、雪山に潜む怪物を打ち倒す中で、命からがら帰還したことが始まりだったと聞いた。それはてっきり、ある「怪物」をニンバムとマウマウが、二人で打ち倒したものと認識していた。

しかし実際は違ったのだ。二人で怪物を討伐したのではない。

マウマウが討伐した「怪物」こそ、ニンバムその人だったということなのだろう。

「だけどね。力を失って、ボロボロになったこいつは私に言ったよ。『ごめんなさい』って。自分のせいで、傷付けてしまってすまない、って。目を覚まして状況も分からない、死ぬかもしれ

ないそんな状態で、こいつはそう言ったんだ。だから、あたしはこいつを連れて帰った」

強く、曲がらない言葉が戦場を走る。マウマウの握りしめたナックルが、震えていた。

「ずっと苦しんでたんだ。自分の父親が大罪人だって知ってる。自分がもうまともな人間に戻れないことも知ってる。だからヤツは必死に勉強して、自分を抑え込む術を学んだ。誰よりも努力して、毎晩暴れそうになる自分をわざと傷付けて制して――死ぬことだって選べたのに、こいつはそうしなかった。怖かったからじゃない、呪われた血でも、誰かを救えるようになるって信じたからだ！」

一歩、踏み込んで構えるマウマウ。ギリギリと食いしばった牙が、彼女の怒りを表す。自身が見てきた「友」の過去を、知りもせず決めつけ嘲笑う男に、これでもかと敵意をむき出しにする。

「お前なんかとは違う。お前は自分の過去や今を盾に、ただ殺戮がしたいだけの『化け物』だ！考えるのが面倒で煩わしいから、力で潰す。ただの心を失った『怪物』だ！」

放たれた言葉が全員の心を打つ。高ぶっていたグレンを、そして戸惑っていた夢斗らを、純なる女戦士の言葉が叩く。

「そいつは、殴り飛ばしてでも連れて帰る。お前なんかと一緒にには行かせない。もちろん、お前も絶対に！」

マウマウが緊張した構えを作り、吠えた。おふざけなどまるでない。ただ、ただ、純粋な「正義」が抱かせた怒りと、巨悪に対する憤りが、彼女を突き動かす。

しかし、これを聞いてもグレンという「怪物」はまるで揺らがない。嫌になる、と言わんばかりに大きなため息を吐き捨て、顔を上げる。

とろんと垂れた眼は、彼方で構える邪魔者を見据えていた。

「あ～、はいはい、分かった、分かったよ。失礼失礼。で、どうする？ そんな短い腕で、ここまで来て、僕をぶん殴るかい？ どうぞどうぞ、やってみればいい。一体、何発、かわせるかな？」

ゆっくりと銃を持ち上げるグレン。銃口がまっすぐ、マウマウを捉える。

「一発では殺さないからな。まず足だ。次に腕。動けなくなったら、ぐちゃぐちゃになるまで、胴体に端から打ち込む。頭は絶対に傷付けないよ。だって、自分がどうなっていくか、最後まで見ていてほしいからね！」

おぞましい計画を嬉々として語るグレン。もはや、その心は異常を通り越して「奇妙」だ。気に入らないものを壊すということにだけ特化した心。それを堂々と実現してしまう肉体。全てが異形のそれだ。

ニンバムの唸り声が、また大きさを増す。この場の殺気に反応しているかのようだ。

グレンはなんら躊躇せず、心の中の引き金に指を添える。離れた位置に立つうるさい鼠に向けて、弾丸を放とうと笑った。

しかし、彼は「風切り音」に気付き、目を見開く。

身を翻し、かわすグレン。一瞬遅れて、数発の矢が宙を穿った。かすった一発がグレンの右肩を裂き、バツと血を散らす。

その血を眺めた後、彼は矢を放った少年を睨む。

「おいおいおいおい、勘弁してくれよ。君はもうちょっと賢いと思ったのになあ、コーイチ」
夢斗、リサも振り返り、息を飲む。

いつの間にか光一が弓を構えていた。すでに次の矢を装填し、歯を食いしばっている。微かに震える小さな体。

だがどこか、今までとは違う。彼もマウマウと同様に牙を見せ、彼方にあるグレンを睨みつけていた。

少年の敵意を受け止めてもなお、グレンは揺らがない。壊れた心でまっすぐに言う。

「死にかけていた君を救ってやったのは僕だっていうのに、その僕に刃を向けるのかい？ 恩はきちりと返せって、君らの世界では教育しないのかなあ、悲しいことだよ」

銃口がゆっくりと、光一に向けられる。銃と弓矢——その戦力差は考えるまでもない。

夢斗が光一の名を呼ぶが、クラスメイトの少年は息を荒げ、それでも返す。

「光一……」

「大丈夫だよ、夢斗君。大丈夫…もう、分かった。ちゃんと分かったんだ」

その意図するところは、夢斗らにはまだ伝わらない。だが、それでもしっかりと感じた。

少年の抱いた、意志の強さを。

「グレン、あんたの言う通りだよ。恩を仇で返すなんて、悪いことだと思う。あんたがいなければ僕は今頃、夢斗達に会えずに死んでたかもしれない。それは分かってる。でも——」

ぎりり、と弓を引く。

汗を滲ませ、呼吸を荒げ、それでも瞳はぶれない。

「僕は——僕らは、戦争を止めるためにここにきた。人殺しを助けるためにきたわけじゃない！」

「あーあー、全く。君もそんな感じか。嫌になるよ、まったく。どいつもこいつも、くだらない正義感に酔いしれる馬鹿ばっかだ。これだから人間は嫌になる。ましてやガキは、もっと嫌いだよ」

本性を叩きつけるグレン。その一言に、むしろ夢斗が声を張り上げそうになる。

だが彼よりも早く、そして力強く、友人の少年が吠えた。

「ごめんね、馬鹿でどうしようもなくてさ。なにせ自分達の世界のことすら、まだまだ勉強中なんだ。けどどね、世間知らずの馬鹿にだって分かるよ。『正しいかどうか』くらいは、自分一人で考えれる！」

全員の鼓動が跳ね上がる。

ある殺戮狂の胸には戸惑いを。ある学生らの胸には勇気を。その一言が宿す。

「あんたはレジスタンスの長でもなんでもない。あんたはただのわがままな大人。しょうもない、小さな悪者だ！」

恐怖はそんな言葉では消えない。だが、消す気などさらさらしない。それよりももっと大きな光一——勇気で少年は影を押し殺し、進む。

矢が放たれ、まっすぐにグレンに迫った。向かってくる一矢を見据え、仮初の長は引き金を引

いた。

「知った風な口を聞くなよ、ちっぽけなクソガキがあ！」

ゴウン、という音と共に放たれる見えざる弾丸。矢を粉々に粉碎し、まっすぐ推進力を殺さずに光一に迫る。戦力差は圧倒的だ。だがそれでもなお、光一という少年は揺らがない。

ここにいるのが一人ではない、と知っているからだ。

突如、空間に現れる、光る「盾」。光一を覆い隠したそれは見えない弾丸を防ぎ、叩き落とす。リサが展開した力に少年は守られた。

グレンが牙をむき出しにし、リサを睨んだ。しかし、その際にその場にいた全員が動く。

大地を蹴り、駆け出すマウマウ。彼女は急加速しながらも、吠えた。

「脛とこめかみだ、ニンバムはそこを狙えば倒れる！」

それはかつて激戦を繰り広げた、彼女だからこそ分かる急所だった。そして同時に彼女がそれを伝えた真意を、夢斗らは汲み取る。

戦場の殺気に反応し、ニンバムも動いた。高らかに吠え、駆け出す巨人。彼の標的は、あくまで近くにいる夢斗達だ。

一瞬、夢斗とリサは互いを見つめ、そして頷く。二人の視線は一斉に、向かってくる巨体に向けられた。

夢斗が大地を蹴り、駆け出す。一蹴りで地面が砕け散り、長身を前に弾き出した。

マウマウは任せただけ――夢斗とリサに、戦うことを。自分と光一がグレンという怪物を抑え込んでいる間に、かつての「友」を救うことを。

真実を知り、戸惑い、狼狽え。

だがそれでもなお、夢斗らは進むべき道を決めた。

期せずして、その場の全員が各々の雄叫びをあげる。

誰よりも早く目的地にたどり着いたのは、夢斗だった。ニンバムは高速で至近距離に到達した夢斗目掛けて、拳を振り下ろす。巨拳は岩を遥かに凌ぐ硬さを持って、叩きつけられた。まるで隕石の落下のように、大地がえぐれ、吹き飛ぶ。ガタガタになった地面に、すでに夢斗の姿はなかった。

さらに踏み込み、加速しながらもしゃがんで狙いをつける。マウマウの言う通り、手加減など一切せずにニンバムの「すね」に目掛けて蹴り込んだ。金属同士がぶつかったような轟音が、一撃の威力を物語る。鋭い衝撃に、ついにニンバムの口から悲鳴が上がった。

いける――夢斗はすぐさま引き、揺らぐ巨体を見て確信した。

もう一撃、と突っ込む夢斗。ニンバムも本能に任せ、再び拳を振り上げている。

しかし、彼の背後から振り下ろされた巨大な「ハンマー」が肩に叩き込まれた。激痛に再び悲鳴が上がる。隙を縫うようにリサが飛び上がり、渾身の力で一発を叩き込んでいた。

小細工など通用しない。放つ攻撃は常に最上級。常に叩き伏せる覚悟で前に出る。生半可な優しさや戸惑いなど、この場で更なる悲しみを生むだけだ。

苦しむニンバムに、押し込む夢斗。もう一方のすねに踵を叩き込んだ。

ついに巨人が揺らぎ、がくりと膝が落ちる。激痛に唸り声を上げ、焦点の定まらない目で大地

を見ていた。

夢斗、そしてリサが吠えた。

「リサ、いくぞお！」

「分かってます！ おっらああああああああ！！」

呼応し、同時に動く二人。

飛び上がり、ブーツの力を最大限に放つ夢斗。そして、ハンマーを再度振り抜くリサ。

蹴りとハンマー、打撃と打撃。

二つの衝撃が同時に、ニンバムの左右のこめかみを叩く。重ねられた打撃にニンバムの頭蓋が震え、その奥の脳みそが揺れた。

ズウン、と膝をつき、そのまま倒れるニンバム。大地が揺れ、土煙を撒き散らし、沈黙する。

夢斗とリサは着地し、体内の熱を宿したままようやく息を吐く。

やった————コンビネーションの成功に一瞬、安堵を浮かべるも、鼓膜を震わせた炸裂音に振り向く。

グレンの放った一撃を、寸前でマウマウが避けていた。彼女はすでに、あと一步の距離まで近付いている。

「ちょこまか動くな、ドブネズミがあ！」

グレンが唾を吐き捨て、逆手に持った一刀をぶつける。マウマウのナックルとぶつかり、火花が散った。

もう一発、拳を引き絞るマウマウ。しかし、彼女もまた体力の限界だった。失った血のせいもあり、視界がふらつく。

その一瞬の隙をグレンは見逃さない。胴体に回し蹴りを突き刺し、マウマウを吹き飛ばした。

引き裂かれた口で笑い、銃口を倒れた鼠に向ける。だが、その一撃を光一の矢が横から遮った。回避行動をとり、再び怒りをあらわにするグレン。

「チィ、どいつもこいつも、大人しく死んでくれないかなあ！？」

ついには標的を光一に向けるグレン。光一もすでに駆け出し、距離を詰めていた。矢の速度が最高速を維持できる、最適な位置だ。

周囲の血の匂いに、肉の香りに吐き気がする。数時間前まで一緒に語らい、互いに戦おうと前を向いていた獣人達。その死体の群れに、己の現実を壊されそうになってしまう。

血に濡れた泥を踏みしめ、それでも前を見て矢を放つ。この湧き上がってくる全ての感情を奴に叩き込む。

グレンは銃を突き出し、迷うことなく引き金を引いた。大砲のような一撃が木の矢を吹き飛ばし、光一に迫る。少年はとっさに横に飛び退き、回避した。

しかし、駆け抜けた見えざる弾丸は、光一の足先をかすってしまう。削り取られた足から血が吹き上がり、激痛に悲鳴を上げてしまった。

「ぐっ——ああ！！」

「光一い！」

駆け出す夢斗、リサ。マウマウもやっと体を持ち上げれたが、思うように立ち上がれない。

倒れ込む光一。彼は弓矢を手放してしまい、うずくまる。血だまりの中に転がる少年に、グレンは笑いながら照準を合わせた。

「なあ〜んにも、怖くないよ、コーイチ。彼らと一緒に逝くだけだ。寂しくなんかないさ！」

間に合わない。光一が腰の「水の瓶」を取り出した時には、弾丸は発射されていた。夢斗の加速を持ってしても遠すぎる。リサの魔法も、完全に範囲外だ。

万事休すーその逃れようのない悲劇の到来に、たった一人、グレンだけが笑っていた。

しかし、飛来したのは空気をかき集めた弾丸ではない。

熱波を伴う、空飛ぶ「焰」だ。

「なっ!？」

ゴォ、という音と共に飛来する火球。向かってくる熱にもグレンは素早く対応し、弾丸を撃ち放つ。ごがん、という音と共に炎は宙で弾け、無に帰してしまった。

たまらず、全員が火炎の先を見つめる。砂塵の向こうから、見慣れた大きな影がこちらに近づいて来た。

「あーあー、こらひどいわ。まったく、えげつないことしよるな」

彼はそこら中に散らばる死体を見つめて、それでもどこか気だるそうに呟く。各地を渡り歩いてきた彼にとって、こんな惨状も日常的な光景なのだろうか。

現れた商人の姿に、夢斗が叫ぶ。

「キリウ！」

名を呼ばれても、あくまで気だるそうにワニ男・キリウはこちらに歩いて来る。愛用の斧を担ぎ、前を向いたまま。

だが、どこかその眼差しがいつもと違う。脱力した中にも、真剣な色が覗いていた。

驚いている一同をよそに唯一、狂人・グレンがつまらなそうに言いすてる。

「おいおい、今度はなんだよ。誰かと思えば、商人まで僕の邪魔をするのかい？ 勘弁してよ、まったく」

困ったように笑う彼に、罪悪感などない。数多の命を奪おうとも、その行為に後ろめたさや戸惑いなどまるでない。

ヘラヘラと笑う「純粹悪」。その顔をキッと睨んだまま、死体の群の中に立つキリウ。

思わず、立ち上がった夢斗が問いかける。

「あんた...いったい、なんで...」

「何度考えても、あかんのや。どれだけ思い出そうにも、まるで見当がつかん。せやから、お前に教えてもらいに来たんや。ユメト」

「え...お、俺？」

彼はまっすぐ、強い眼差しを夢斗に向けている。今までのぶっきらぼうで、醒めた感覚とはまるで違う。強く、強固な意思がそこから伝わってきた。

「お前は、一体何者なんや？」

投げかけられた唐突な疑問に言葉が出ない。己の身の上など、ここに至るまでに話したはずだ。彼らからすれば異なった世界からきた「オーバー」である少年。何者と問われても、夢斗はそ

れくらいしか答えを持ち合わせていない。

「そんなの...前に言った通りだ。俺達は元いた世界から来た、ただの高校生だよ」

「そうやんな。お前、ワイとどこかで会うたことあるか？」

意外な部分に食いつかれてしまい、「ええ？」と驚きの声を上げてしまう。

このやり取りを見ていたグレンが、またもつまらなそうに吐き捨てた。

「なんだい、そんなどうでもいいことを聞くために、わざわざ割り込んで来たのか？ まったく、空気をちょっとは読んで——」

「じゃかあしい、黙っとれ！ 用が済んだら、おとなしくするわ、ボケェ！！」

初めて声を荒げるキリウ。言葉を叩き伏せられ、グレンが息を飲む。しかし、狂人は懲りずに「やれやれ」と言った表情で肩をすくめた。

異様な気迫に、夢斗達の方が身をすくませてしまう。しかし再び視線を戻し、キリウは続けた。

全員がグレンの出方を警戒しつつも、キリウの言葉に耳を傾ける。

「教えてくれや、ユメト。お前とワイ、以前にどこかで会うとるか？」

「いや.....そんなわけないよ。俺がこっちの世界に来たのは、本当、数日前だ。あんたとはアジトで初めて出会ったわけだし」

キリウは斧を担いだまま「そうかあ」と呟き、視線を落とす。

「そうやんな。そら、そうや。なら———ほんま、なんでなんやろなあ」

少し悲しげな表情で自問自答するキリウ。夢斗らには彼の感情が理解できない。戦場に現れ、なぜ今、そんなことを問うのか。単純に助太刀に来たというわけでもなさそうだ。

少しだけ目をつぶる、キリウ。その真っ暗な海の中に無数の光景が浮かび、すぐさま消える。

今まで夢斗らの口から放たれた、いくつもの言葉。クレイドルの各地を巡っても、一度も出会ったことのない「向こうの世界の言葉」。

最初はまるで輪郭も、意味も分からなかったそれが、今ではなぜかはっきりと理解できる。

そして同時に、またあの光景が暗闇に浮かんだ。

四角い机が並べられた部屋で、語り合う黒い服——学生服を着た生徒達がはっきりと見える。白黒の映像などではない、色を持った鮮やかな「記憶」としてキリウの中に蘇っていく。

間違いない。目の前で笑い合う二人の男子生徒は夢斗と光一だ。武装などしていない、獣人の姿でもない、人間の二人。その姿をキリウは知っている。

行ったことも無い向こう側の世界の光景。しかし自身の中で、その問いに答えを導き出す。

「そうか、ワイは——」

目を開くキリウ。

しかし、痺れを切らしたグレンが、大声で言い放った。

「あー、悪い悪い。そろそろタイムアップだ。こんなところでいつまでも、あれこれ問答をしている時間なんてないんだよお、僕は」

瞬間、どんっという炸裂音が空気を震わす。放たれた一撃をマウマウは飛びのいて避け、歯噛みしたまま構え直した。誰しもが再び身構え、グレンを睨む。

「余計なことに首をつっこむのは感心しないよ。商人は損得勘定だけしてるのが賢い生き方だ。金にもならないことに足を踏み入れると、大損しか待っていないよ」

どこか得意げに、彼はキリウにアドバイスする。やがて、グレンは何かを思いついたように笑った。

「そうだ、こう言うのはどうだい？ レジスタンスの軍資金の半分を君にやろう。頼みがあるんだ。このガキどもを殺すのを、手伝ってくれないか？」

予想外の提案に、キリウを含めた全員が驚愕する。弓を一矢構え直した光一が、思わず叫ぶ。「ふざけるな、なんだよそれ！」

「これも立派な取引だよ。どうだ、レジスタンスは確かに裕福ではないが、それでも君の売り上げの数ヶ月分くらいなら払うことができる。悪い話じゃあないだろ？」

ぱっくりと裂けた口で笑うグレン。血濡れの怪物は、本気でキリウにその話を持ちかけている。

リサとマウマウは警戒しつつも、自身の呼吸が荒くなっていくのを感じた。仮にも今まで共に戦っていたキリウに対し持ちかけられた「殺害依頼」。おぞましい発想に、ただただ恐怖が湧き上がってくる。

キリウはしばし、黙っていた。

悪い話ではない。それが素直な感想だ。商人とはいえ、各地で生き残ってきた己の腕っ節には、自信がある。ここにいる消耗した四人を退けると言うなら、なおさら手軽に大金が手に入る。

商人としての彼ならば、その提案に乗るのだろう。それこそが賢い選択であり「利」に最も近い話だ。

だが、今はその提案に心がざわつく。心臓の鼓動が加速し、体の内側が揺れていた。

夢斗達を殺す――異界から来た彼らを。一時は共に王国と戦った彼らを。昨晚、焚き火を囲んだ彼らを。

そして「なぜか昔から知っている彼ら」を。

迷うキリウ。不安を浮かべ、構えたままのリサ達。

そんな中、答えたのはワニ男ではなかった。

「好きにしてくれ、キリウ。あんたに任せる」

息を飲み、顔を上げるキリウ。そしてリサ達。

グレンまでもが銃を構えたまま、言葉を失っていた。

夢斗はまっすぐ、グレンを睨みつけている。泥と血に濡れ、傷跡の痛みにも包まれながら、それでも彼は汗をぬぐい前を見て立っていた。

「なんやて...」

「あいつの言う通りだ。わりの良い話だと思う。色々巻き込んだけど、あんたはこっちの世界の商人なんだ。あんたにとってそれが利益になるなら、そうしてくれれば良い」

はっきりと言い放つ彼の目に、言い知れない光が宿っている。それを見ていると、リサ達の心にまわりついていた恐怖が、少し揺らいだ。

「だけど、ごめん。何があっても、俺らも引く気なんてないんだ。だから、あんたがもし俺らを

殺すって言うなら――俺らも全力で相手をする。それだけだ」

きっぱりと言い放つ夢斗。彼は少しだけ、戸惑うキリウを見つめる。

怒りも、憎しみもない。澄んだ瞳の中に宿るのは、それでも前に進むと決めた「覚悟」だ。それだけが夢斗を恐怖から救い出し、前を向かせている。

グレンが「ひゅう」と茶化すように口笛を吹き、笑った。

「良いねえ、カッコいいねえ！ 気分はすっかり、世界を救う勇者ってところかな？」

「そうなれたら、綺麗なんだけどな。でも、そんなんじゃないんだ。俺は俺がやりたいようにしてるだけ。心の底から思う。あんたは間違ってる、って。あんただけじゃない。このくだらない戦争そのものが、間違ってる」

どくん、とキリウの心臓が揺れた。

目の前に立つ少年から放たれる言葉に。そこに見える「光」に、ひどく覚えがある。

いつだってそうだった。この少年は昔から、妙な時にはっきりしていて、そして困難な時こそ誰よりも前を向いていた。

澄ました顔をしているくせにその実、色々考え、どんな時でも納得がいくまで悩み、決断する。

面倒臭い奴だ、と皆は言っていた。しかし、だからと言って嫌われ者ではない。彼のそのまっすぐさを皆は慕い、ここぞという時に頼りにしていた。

揺れて揺れて、迷いに迷い。だからこそ最後の最後、この男は強い。

それこそ、この少年の――諸星 夢斗という男の「心」の価値そのものだ。

斧を握るその手に、自然と力がこもる。揺らいでいた瞳がしっかりと定まり、彼を捉えた。

全て、理解した。自分の心が、やっと分かった。

「せやなあ。そら随分と、おいしい話やで」

彼の一言に息を飲むリサ達。しかし、夢斗はあくまで彼を睨む。

キリウの決断を察し、誰しもが悲しみの色を浮かべた。

「お前らのいう通りや。ワイは商人やからな。売れるもんはなんでも売ったる。『利』になるもんは、全部手に入れたる」

瞬間、キリウは斧を担いだまま、大地を蹴って前に出る。その推進力にも誰かが、彼に照準を合わせた。

しかし迎撃することができない。キリウの非情な選択に、まだ思い切ることができないのだ。

夢斗は身構え、腰を落とす。だが、キリウの突進を機にグレンもまた動いた。高らかに笑い声をあげながら、銃口を夢斗に向ける。

「これが現実さあ、少年！ 人なんて結局、損得の生き物――持つべき者と持たざるべき者がいるんだよ！！」

なにも躊躇せず、ただ己の「欲」のまま、彼は引き金を引く。轟音と共に発射された空気弾は、もはや視認できるほどの濃度、破壊力を持って夢斗にまっすぐ迫った。

身構えるも、間に合わない。一瞬、キリウに視線を奪われたことで、反応が遅れていた。

歯噛みし、それでも前を睨みつける夢斗目掛けて、キリウは斧を迷うことなく振り下ろして

いた。

「夢斗さあん！！」

リサが叫び、思わず目を瞑ってしまいそうになる。誰の助けも間に合わない。少女の叫びの後、空気の爆ぜる炸裂音が戦場に響いた。

突風が再び、汚れた大地を洗う。

砂塵が吹き荒れ、そこに戦の匂いが乗り、彼方へと運ばれていく。

斧を振り下ろしたままの体勢で、キリウは止まっていた。

だが、静止した斧は夢斗に当たってはいない。彼の頭のすぐ前で静止している。

「な————っにしてるんだ、おい！？」

初めて、グレンが驚きの表情を浮かべた。

彼が放った弾丸はキリウの分厚い斧によって受け止められ、効果をなさない。事もあるうにキリウは武器をぶつけて、夢斗を空気弾から守っていた。

その思いがけない行動にはリサ達だけでなく、ついに夢斗も息を飲んでしまう。すぐ真横で斧を構えたまま、沈黙しているキリウを見た。

「あれもこれも、なんでも売っちゃう。それが商人。せやけどな——」

顔を上げるキリウ。ぎらりと光った眼差しが、しっかりと間近にいる夢斗を捉える。

ワニ男は大きな口で確かに微笑み、そして彼方の男に言い放つ。

「やっぱり、あかんわ。『友達』は売れん。ましてや『クラスメイト』はな」

思わず夢斗は「えっ」と声を上げてしまう。驚く一同を尻目にキリウは斧を担ぎ直し、グレンを睨んだ。

「ちゅうわけで、交渉決裂や。残念やったなあ」

ついにキリウの方が笑い、不敵な眼差しで前を向いている。対するグレンはあっけにとられたように口を開き、銃口を下ろしてしまっていた。

「なにをしてる...なにをやって——」

「まっ、こっちの世界に生きる、おたくには分からへんわな。クラスのダチ売って儲けるなんざ、胸糞悪いわ、んなもん」

圧倒的な優位から言い放つキリウ。その姿に夢斗はあっけにとられたまま、問いかけてしまう。

「おい、あんた。今なんて...クラスメイトって言ったのか？」

「せやで、夢斗。ちゅーても、こんなナリじゃあ、ピンとけえへんやろうけどな」

ニヤニヤと笑うキリウ。突然に彼が見せたその態度に、なんだか夢斗の方が呆気にとられてしまう。

キリウは振り向き、離れた位置の光一にも声をかけた。

「光一も随分変わったなあ。昔っからチワワみたいなやっちゃと思っとったけど、ほんまに犬になるとはなあ」

馴れ馴れしく、あっけらかんとした言葉。

しかしその独特の波長に、明らかに二人は覚えがある。

関西弁に、なんてことではない。キリウという男の喋り方、態度、そのものに聞き覚えがある

。クレイドルに来てからではない。もっと遥か昔からだ。

「ワイ自身、驚いとるけど、それでももう忘れてりなんざせえへんで。見た目が鱗まみれになろうが、牙と尻尾生えようが、お前らのことは全部覚えとる。クール頑固と感動馬鹿。そこに『ナニワ守銭奴』を合わせりゃ、昔の三馬鹿、再結成やで」

そのどうでもいいような言葉が、夢斗、光一の肉体をガツンと叩く。

リサとマウマウ、グレンからすればまるで覚えのない不思議な単語に、この二人だけがひどく覚えがある。

言い出したら聞かない静かな頑固、夢斗。活字を受け止めれば涙まで流す感動屋、光一。

そんな二人と共に、いつもつるんでいた男子生徒がいた。

記憶の扉がまた一つ、開く。

それは夢斗と光一が出会った瞬間の、あの現象に似ていた。自身の中で鍵をかけられていた無数の「過去」が色を取り戻し、一気に体の中から溢れ出る。

もう一人、いた――休み時間に、放課後に。いつも決まって一緒にいた、男子生徒。関西出身で、喋り方や乱暴な物言いから、初対面の人間は必ず距離を置いてしまう。しかし、それでいてどんな人間との垣根もズカズカと入り込み、気がつけば壁を取り払ってしまう「仲良くなる天才」であった。

その癖、とにかく彼は金にがめつかった。

ジュース一本、文房具一つ、シャーペンの芯ですら買うのを渋るほど、金を使いたがらない。いつも遊びに行くと何かとケチな場面に遭遇し、周りからいじられる対象であった。

そんな「ナニワ守銭奴」の姿が、目の前に広がる光景に並ぶ。

戦場の中、斧を担いで自慢げに笑うこのワニ男に、かつての姿が被る。

夢斗が犬の姿をした少年に、光一を重ねたように。

ワニ男の上に、かつての「友」の姿を見た。

夢斗と光一の脳裏に、ある名前が浮かぶ。そしてもっとも近くに立つ夢斗が、脱力したままそれを口走った。

「桐生―――鉄也」

「おっ、思い出したんか、夢斗？ ごっ名答！ ご褒美に飴ちゃんやろか？」

あくまで意地悪に笑うワニ男・キリウ。夢斗らの体に走る電流のような衝撃は、彼の顔の上に、かつての「友」を完全に思い描かせる。

神隠し組の一人。かつての「1-A」に在籍していた、関西出身のケチな男子生徒。夢斗、光一と共に「三馬鹿」と呼ばれていた、粗暴な少年。

名を桐生 鉄也。

まごうことなき、夢斗らの「友達」だ。

啞然としたまま、それでも真っ先に声をあげたのは、光一である。

「ちょ……はっ、ええ！？ ど、どういうことだよ、これ！ キリウが、桐生君！？ な、名前

は確かに似てるけど……」

混乱し、あたふたする光一。そんな小さな姿を見て、キリウこと桐生はけらけら笑った。

「な～いすリアクションやな、ほんま。お前さん、芸人向いてるんちゃうか？」

「か、からかわないでよ！ まじ、わけ分かんない！」

混乱し、頭を抑える光一。だが、これにはリサも戸惑いを隠せないらしい。

「そんな……光一さんだけじゃなくて、キリウさんまで、夢斗さんのクラスメイト——神隠しにあった一人だったなんて…」

つまり、そういうことになるのだろう。

光一がこちらの世界に来て、世界の影響を受けて獣の姿を得たように、桐生もまたこちらの世界によってワニ男の姿へと変貌してしまった。かつての世界での記憶は薄らぎ、やがて「こちらの世界で生きる人間」としての記憶が、肉体を支配していたのだろう。

鼓動の加速が止まらない。夢斗は汗をだらだら流し、すぐ横のキリウを見つめる。

「本当——なんだな？ お前…桐生なのか？」

誰もが彼のことは、皆、苗字で呼んでいた。確か、クラスの中で光一が最初に「竜みみたいな発音でかっこいい」と言い出したからだ。

「ほんま、けったいな世界やで。こんなもん、戻って誰かに言っても、信じてもらえへんやろなあ」

悪態をつき、苦笑するキリウ。しかし、彼の目から力が消えることはない。

斧を担いだまま、その鋭い眼差しは彼方で呆けているグレンを睨みつけた。

「まっ、積もる話はとりあえず後回しや。とりあえず、あの大馬鹿、叩きのめさんとなあ」

その一言に、全員の体に緊張が戻ってくる。誰の合図を待つでもなく、キリウは斧を担いだまま、大地を蹴った。

巨躯がドスドスと音を立てて進む。その進路は、まっすぐグレンを狙っていた。

怒りをあらわにし、またもや奇声をあげながら銃口を向けるグレン。彼の弾丸に合わせるようにキリウは目を赤く光らせ、火炎を口から目一杯放った。

一瞬、グレンの視界が炎に染まり、弾丸を放つのを躊躇してしまう。群がる熱波に顔を覆い、一歩たじろいだ。

その火炎を突き破り、ワニ男の長い腕が伸びる。キリウは至近距離に到達し、グレンの首を掴み上げた。

「ッ——！！？」

絶句していたのは、グレンだけではなかつたろう。夢斗らも、その迷うことなき突進にあっけにとられてしまう。

メキメキと首に食い込むキリウの指。剛腕がグレンの細い体を持ち上げ、自由を奪う。グレンは声が出ないのか歯を食いしばったまま目を見開き、必死に手足をばたつかせていた。銃口を向けようとした刹那、キリウが彼の体を一気に引き寄せる。

メキッという嫌な音と共に、キリウの「頭突き」がグレンに叩き込まれた。グレンの整った顔が歪み、鼻から真っ赤な血が溢れ出る。視界が揺らぎ、それでも目の前でこちらを睨む、凶暴な

眼差しを見つめた。

「大勢、奪ったんや。それ相応のもん、払う覚悟があるんやろな、お前。ましてや——」

言いながら、宙に放り投げるように手を離すキリウ。ふわりと浮いたグレンは、まだ混乱で動くことができない。

彼は何かを口走ろうとした。おそらく痛みに激昂し、あらん限りの罵声を浴びせようとしたのだろう。

しかし、それは叶わない。そんな自由すら、キリウは奪ってしまう。

一歩踏み込み、飛び出したのは分厚い斧の刃ではない。

ごおごおと燃え盛る炎を纏った、渾身の右拳だった。

「人のこと、舐め腐りおって。売ったんやから、買わせてもらうわ。その喧嘩あ！」

ソフトボール投げのような、大きく、荒々しい軌道で叩き込まれる右拳。肉が肉を叩く音とは思えない轟音。炸裂した瞬間、グレンの顔面が醜く歪み、ついには炎が破裂した。

ぐるぐると回転し、飛んでいくグレン。彼の体は地面に土煙を巻き上げながら落ち、パタリと動かなくなった。

豪快で圧倒的な攻撃に、絶句しっぱなしの一同。脅威を文字通り「叩きのめし」、キリウは「はっ！」と笑い声をあげた。

「ワイが、んな汚い金にホイホイと動くほど『安いやつ』って思うなよ、ボケナス。顔洗って出直せ、あほんだら」

斧を担ぎ直し、パンパンと手をはたくキリウ。とにかく口が悪い。自身を取り戻したせいか、急に態度がギラつき出す。

だが、その無縫な様が今の夢斗らには、なんだか心地良い。立ち上がり、皆一斉に彼に駆け寄った。

驚いたままの表情で、光一が彼を見上げる。

「む、無茶苦茶だなあ。頭突きと、ぶん殴りって...商人っていうより、チンピラだよ、これじゃあ」

「ああ？ ええやろ、別に。結果オーライや。気にすることあらへん」

大きな口を歪め、にんまりと笑うキリウ。その乱暴だがどこか気さくな態度に、夢斗も思わず笑みがこぼれる。

「ああ、本当だ...まじで信じられねえけど、本物だよ。その雑な感じ、桐生と同じだ」

「同じも何も、本人や、言うてるやろ。まっ、ワイ自身もびっくらこいてるけどなあ」

キリウは困ったように笑いながら、改めて自身の体を見つめる。

「いつからやろな。思い出すんは、確か逃げてる先で気い失って——目を開けた時には、見知らぬ行商に助けられとった。獣人の行商らしくてな。言葉は分からなんだが、随分と親切にしてくれたんや」

困惑しつつ、それでもなんとか当時のことを思い出す。

それは、光一同様にこちらの世界に連れてこられてすぐのことだったのだろう。

「理屈は分からんが、だんだんとワイの体に妙なことが起こり始めてな。肌の色が変わったり、

鱗や尻尾が生えたり。一週間もすれば、この格好の完成っちゅうわけや。わけ分からんで、どうにかかなりそうやったけど、不思議なことにこっちにいるやつらの喋ってるのが、分かるようになってな」

この事実に関一が声を上げる。

「それ、まさに僕と一緒にだよ！　じゃあ、桐生君もその姿になって、それで――」

「ああ。せやけど、厄介なことにこの体になってから、だんだんと向こう側にいた頃の記憶が思い出せへんようになってきた。最初はそれこそ行商の奴らと仕事しながら、帰る手がかりを探してたんや。そんな目的すらいつの間にか忘れて、気が付いた時には『行商・キリウ』の誕生、っちゅうわけや」

苦笑いしながら言うキリウ。

その重い過去に、リサが少し困惑してしまう。

「体と一緒に、記憶まで変わってっちゃうなんて、そんなこと...」

肉体の変貌と記憶の変貌。この二つは、連動しているということなのだろうか。夢斗も後ろ頭をかいた。

「俺もおんなじだ。光一の時もそうだったように――俺だって知ってたはずなんだ、桐生のこと。だけど、今の今まで思い出せなかった。関西弁で喋る奴がいるって、確かに分かっていたはずなのに...」

かつて、クラスで過ごした日々は分かっていたはずだ。だが、それでもそこにいた人々の顔や名前だけが、すっぽりと抜け落ちている。

自身の記憶にかかった謎の「鍵」の存在に、夢斗はやはり言い知れぬ不安を感じてしまう。

そんな深刻な空気を、ワニ男が笑い声で振り払った。

「ほんま、けったいな所やで。ま、でも、なにはともあれ、お互いに思い出せたんやから結果オーライや。せやろ？」

笑う彼を見て、しばしあっけにとられてしまう一同。今までのような冷めた表情はどこにもない。商人であるワニ男の中に宿るのは、かつてのクラスメイト・桐生に間違いはない。

そう思うと夢斗と光一も、ようやく嬉しさが湧き上がってくる。離れ離れになり、それでもこうして形を変えて出会えた。偶然の再会に、自然と笑みがこぼれる。

そんな一同に、片腕を押さえたまま歩み寄ってくるマウマウ。彼女は少し驚いたように、キリウを見ていた。

「なにになに、どゆことよ。ユメトもリサも、コーイチもキリウも、皆、結局向こう側の人だったってことなのお？」

「ごっ名答。そういうこっちゃ、ネズミの姉ちゃん」

「ほえ～、おったまげ。全然気づかなかったよお」

なんだか妙に、マウマウとキリウの波長は合っている。傷だらけだが笑うマウマウに、夢斗は問いかけた。

「大丈夫なのか、マウマウ。その怪我...」

「ああ、問題ない問題ない。それより、ありがとね、皆。あいつらを止めてくれて」

あいつら——その言葉の意味するところを察し、少しだけ夢斗達は悲しい目をした。

レジスタンスの「武力派」と「融和派」。二つの思想を持つ獣人達の長が、今この戦場に倒れている。

一人は隠していた「破壊欲」を解き放ち、一人は抑え込み続けていた「自我」に苦しみ。

それでもマウマウは戦いの終わりを察し、頷く。

「あたしにもっと力があればね...もしかしたら、もっと早くあいつらを止めれたかもしれない。ごめんねえ、きっとこれは私だけじゃない...私達獣人が、なんにも見えてなかった、ってことなんだろうね。恥ずかしいよ、本当」

一同はその言葉に、戦場を見渡してしまう。

砂塵が吹き荒れる中、血で染まった大地とそこに倒れる無数の獣人と兵士。

戦いを止めたくて、ここまで来たはずだ。だが、そこで解き放たれた力を夢斗らはどうすることもできなかった。いや、もっと言えば今日まで歩いて来た、グレン、ニンバムの中に潜んでいた過去からの思いを、なに一つを理解できていなかったのである。

少年達の心に宿る罪悪感を、マウマウはあくまで傷だらけの笑顔で拭う。

「本当に、ありがとう。あいつらはもしかしたら、このまま王国を滅ぼした大罪人になるところだったかもしれない。皆のおかげで、それを防ぐことができた。感謝してるよお」

彼女から伝わる感謝の意に、なんだか己の無力を感じてしまう。

誰かを救うことはできたかもしれない。だがそれでも、全てを救うことはできなかった。

これが戦い。これが——戦争なのか。

心を締め付けられる少年、少女。それでも獣人の女戦士は前を向いていた。

「さて、と。とりあえず、伸びちゃってるうちの大將を起こしに行くか」

歩き出すマウマウを見つめ、その先に横たわっているニンバムを見た。白い体毛に包まれた彼の体は、すっかり小柄な魔導士に戻っている。起き上がる様子はないが、それでもよく見ると確かに息をしていた。

夢斗、リサ、キリウも歩き出す。

光一も続こうとしたが、あることに気付き、振り返った。

出遅れた光一に、夢斗が問いかける。

「どうしたんだよ、光一？」

「あ、ごめん。弓、落としちゃってさ」

先程跳びのいた際に、どこかに愛用の弓を落としたようだ。探すと、少し離れた位置に転がっている。

歩いていく夢斗らに遅れないよう、光一は小走りでそれに駆け寄り、手を伸ばした。

離れた位置の光一を見て、夢斗も再び歩き出す。

戦いの終わり——それを予感した誰しもの耳に、嫌な炸裂音が響いた。

動きを止める。光一も手を伸ばしたまま、絶句してしまう。

すぐ目の前の地面が砕け飛んでいた。あと少し手を伸ばしていたなら、腕が粉々になっていたかもしれない。

恐る恐る、振り向く一同。彼方に立つその真っ赤な姿に、言葉を失った。

「どいつも...こいつも.....どこの世界でも...馬鹿しかない...」

ゼエゼエと息を荒げ、彼は銃口をこちらに向けている。顔面が大きく崩れ、真っ黒に炭化しているのが見えた。見開いた目、切り裂かれた口、焦げた肌、全身を覆う血。まさにその姿は、怪物のそれである。

グレンが再び立ち上がり、怒りをあらわにしてこちらを見ていた。

「戦争は.....終わってない.....これから始まる！ どいつもこいつも.....人間は、粉々にしてやる！」

誰もが、反射的に駆け出していた。

銃口は光一を狙っている。だが、彼までは遠い。どんなに急いでも、弾丸の方が早い。

動かなくてはと意思を固めても、光一も何もできない。こちらに向けられた銃口から、ごがんとする音と共に空気が爆ぜる。

「目障りだ、消えろお！！」

怒号とともに放たれる一矢。

砂塵を貫くように飛んだそれは、曲がることなく、まっすぐ光一の頭部に狙いを定めていた。

ドンッ、という音と共に宙を舞う、血しぶき。空間を赤に染め、バツと散った命の花。

その光景に、夢斗、リサ、キリウ、マウマウの足が止まる。

目を見開くグレン。

そして、目の前に立つ「彼」に絶句する、光一。

誰しもが見覚えがある。その大きな体に。その無骨な眼差しに。死体の中から、突如として立ち上がり、光一の「盾」となった、彼の姿に。

血に濡れ、すでにズタズタになった彼は、それでも両腕を広げて立ち、グレンの一撃を胴体で受け止めた。

「へ...へへ.....やっ、おめえらにもらった『借り』...返せた...かな」

腹部からバツと、また血が噴き上がった。口からもおびただしい量の血を流し、膝をつく巨漢。

豚の獣人・スヴェンが笑う。彼は笑みを浮かべたまま、光一に言う。

「おら、ぼさっとしてんなよ、コーイチ.....すまねえ...俺らのいざこぎに...突き合わせてよ...」

その言葉を最後に彼は倒れた。ずしん、という音と共に血が飛び散り、光一を濡らす。足元に広がっていく赤い海に、わなわたと震えた。

無愛想で、乱暴で、喧嘩っ早くて――それでも共に進む仲間を思い、勇ましく戦おうと声をあげていた、獣人・スヴェン。

夢斗らからすれば、出会ってたった数日だ。だがそれでも、彼の言葉や態度から根っからの悪人ではない、ということは理解できていた。

そんな彼は、もう動かない。血の池に突っ伏したまま、ピクリとも。

わなわたと震える光一。夢斗達も言葉が出ない。

一人の命が消えた――その光景に、あの狂人の声が響く。

「あーもー、邪魔なデブだなあ……勘弁してくれ、ほんっと、うっとおしい」

人の心などとうに捨て、嘲る紅蓮の悪魔。

彼は怒りに染まった眼差しのまま、銃口を改めて光一に向けた。

「まっ、安っぽい命を華々しく散らせたんだ。彼も本望だろうね」

どくん、と鼓動が高鳴った。

誰しものが、目の前の惨劇に駆け出せずにいる。唯一、一步を踏み出したマウマウも、体力の限界かふらつき、膝をついてしまう。

しかしその中でたった一人、ついに恐怖が振り切れた人間がいた。

「今度こそ君の番だ、コーイチ。怖いかい？ 最後に言い残す言葉は？」

どくん、とまた一つ、今度は大気が揺れる。夢斗達はようやくその変化に気付く。だがグレンは相変わらず、壊れた笑みすら浮かべて前を向いていた。

血の中に座り込んだまま、うなだれている光一。

彼は真っ赤な地面を見つめたまま、答えた。

今までとはまるで違う、はっきりとした、透き通った波長で。

「なんだろう……分かんないよ、怖いかどうか……馬鹿だからかな？ なんか……そんなの、感じないんだ…」

どくん、と全員の肌に空気の鳴動が伝わる。グレンもようやく、その変化に気付いた。

光一を中心に、血が波立つ。波紋のように広がり、戦場全体がざわざわと音を立てた。

どくん——その鼓動と共に、ゆっくりと顔を上げる、光一。

「なんだろう、怖いってというか、もっと……もっともっと…変な気分だ……」

汗一つかいていない。血に濡れ、泥にまみれ、それでも大きな目を見開き、まっすぐこちらを見ている。時にお調子者で悪戯好きの彼が、初めて見せる表情だ。

なにかが振り切れた——グレンがたまらず銃を握る手に力を込める。しかしまた一つ、今度は鼓膜をはっきりと揺らすほどの鼓動音が、戦場を叩く。

「安っぽくなんかない」

「え……ええ？」

「安っぽくなんかないさ。スヴェンの———皆の命は安っぽくなんかない」

次の瞬間だった。

特大の鼓動が鼓膜を震わせ、光一の眼が青く光る。今までにないほどの力の鳴動。それこそが鼓動の正体だと、全員が悟った。

ざああ、という音と共に地面から宙へと浮き上がる、大量の血液。地面に流れ出た獣人達の血が、光一の魔法によって操られ、その姿を変える。

グレンを含めた、全員が絶句した。

一瞬にしてそこら中に浮かび上がる、真っ赤な「血の矢」。巨大な楔のような禍々しいそれが、一本残らずグレンを向いている。

それだけではない。その矢の一本一本に、ぼんやりと浮かぶ姿。光一と共に歩み、一時はグレンを信じてついてきた獣人の戦士達。

幻覚だったのかもしれない。だが確かに、夢斗達の目にすら、そのヴィジョンがはっきりと映る。あまりにも凄惨な光景に言葉が出ない。

全員がグレンを睨みつける。突如として現れた亡霊の群れに、グレンは言葉を失っていた。

あたふたと、周囲を取り囲む「矢」に銃口を向けるグレン。最後の最後、光一と彼の視線がぶつかった。

「グレン……あんたの言った通りだ。何も怖くない。皆が一緒だ」

瞬間、狂気に任せて蹂躪を楽しんだ狂人への、処刑が始まった。

真っ赤な矢は一斉に放たれ、あらゆる軌道でグレンに襲いかかる。一発だけ、グレンが放った弾丸は矢を捉えるも、弾丸ごと切り裂かれ彼の腕を貫いた。「オーバーテクノロジー」が粉々に砕け、バラバラに分解される。

グレンの体に突き刺さる矢。切り裂く音を立て、彼の血しぶきと一緒に、宙が赤に染まる。赤い狂人の喉元から悲鳴が上がった。

「やめろ———やめろおおおおお！！」

人を捨て、獣すら否定した怪物の遠吠え。それすら、飛来する無数の矢がかき消してしまう。顎に突き刺さった一矢が頬を貫通し、穴を開けた。

きりもみになり、駒のように回転し、ただの肉片へと変わっていくグレン。

彼を信じ、そして裏切られた獣人達の無念が。

そして全てを否定され、臨界点を越えた光一の「怒り」が。

容赦などせず、慈悲もなく、ただ怪物を切り刻んでいく。

殺意の嵐が去り、血の風が周囲を赤に染めた。その中央で、もはや人の形をとどめていないグレンが、フラフラと立っている。辛うじて繋がった手足、おぞましいほどに変形した顔。美しいレジスタンスの長など、もうそこにはいない。

彼は血走った目をこちらに向け、最後の最後に吠える。

「くそ……ガキ…が——」

最後の最後に放った一言は、鈍い音でかき消された。ついに駆けつけたマウマウが飛び掛かり、まっすぐその顔面に拳を叩き込む。雄叫びと共に地面へと叩きつけられ、グレンの頭が潰れた。

血が吹き上がり、大地が揺れる。狂った赤い猛獣は、その一撃でついに動かなくなった。

立ち上がり、血を拭い去るマウマウ。その目に怒りや悲しみなどない。ただ暴走してしまった獣を見つめる、哀れな色だけが覗く。

ふらつきながらも、一同は光一へと歩み寄った。

しゃがみ込み、力なくうな垂れる光一。無意識の爆発力があつたと言え、その心は深く傷付いているのだろう。

起こってしまった悲劇に歯噛みし、夢斗はそれでも声をかけた。

かつてのクラスメイトとして。

「光一……」

「僕は、大丈夫。ごめんね、僕が……モタモタしてたから」

自分達の無力さに、ふつつつと湧き上がってくる悲しさ。

もっと早く気付いていたら、なんとかできたのだろうか。もっと早く見抜けていたら、彼らを救えたのだろうか。

だが、もはやいくら「もしも」を重ねても、戻ってくるものは何もない。

倒れて動かなくなったスヴェンを見つめる。最後の最後、彼が身を挺して守ってくれた意味を、どうしても考えてしまう。

光一だけではない。リサまでも涙を浮かべ、かすかな声を上げてしまう。キリウも今回ばかりは、何も言うことが出来ない。

砂塵と共に渦巻く匂いと目の前に広がる光景に、今更ながら、震えが止まらない。

歯噛みし、前を向く夢斗。

これが、戦争なのか———ぶつかり合い、奪い合い、傷つけあい、殺しあう。互いの違う思想のために、互いの意を通すと言うことのためだけに、こんな景色が広がらなくてはいけないのか。

心が締め付けられた。湧き上がってくる無念さと、涙を抑えることができない。

誰も何も言わず、身を包む感情に打ち震える。少年、少女らにとって、あまりにも残酷な現実がそこには広がっていた。

しばらく心を落ち着かせ、ようやく夢斗は言葉を振り絞る。

「ごめん...なんて言うべきか、分からない。俺も後悔はしてるよ。俺らがもっとなんとかできたんじゃないかって...ここに来てからずっと、嫌になるくらい振り返って、悔しくなる」

全員が夢斗の顔を見つめていた。潤んだ瞳のまま、それでも夢斗は光一に手を差し伸べる。

「だけど、今は泣いてる場合じゃない。スヴェンは託してくれたんだ、俺達に。だったら彼の思いに報いないと。こんなところで、引き返せないよ」

今でも、しっかりと焼き付いている。あの獣人の戦士が事切れる前に、見せてくれた笑顔が。そこに乗せた言葉が。

このまま泣き崩れてしまったら、その思いすらも消える。彼から渡された思いすら砕けてしまう。もはやこれは、夢斗達だけの戦いではない。

しばらく光一は彼を見上げていた。しかし、やがて涙をゴシゴシとぬぐい、弓を拾い上げて手を握る。泥と血にまみれた少年は、それでもしっかりと頷いた。

怖くても、悲しくても、行かねばいけない。なぜなら夢斗ら全員が、そう決めたのだから。

一同は満身創痍の身体を引きずりながらも、倒れているニンバムに近付いた。マウマウが起こすと、ニンバムは意識を取り戻す。

「皆さん.....すいません...私は.....」

残る力を振り絞り、謝るニンバム。先程までの凶暴さなどどこにもない。彼らを今日まで導いてきた、賢人がそこにはいた。

「本当に...なんて言ったらいいのか.....私はグレンを止められなかったばかりか...あなた方まで、手にかけてしようとした.....本当に、根の部分はまるで変わらない...私は.....怪物ですね...」

マウマウに抱えられ、虚しく笑うニンバム。その目には、涙が浮かんでいるようだった。

「グレンと私は、傭兵時代に出会って以来、ずっと『世界を変える』なんていう、夢物語を語り合ってきた...人種や生い立ちに左右されない、誰もが平等に理解される世の中を作りたい、と。酒を交わす度に語るグレンの目は、まるで少年のように純粹だったのを覚えています。だが、彼は.....純粹すぎた。他人の痛みや悲しみ、その先に待つものすら考えようとしないう、無垢な殺人者になってしまった...」

ふっと、賢人はグレンの亡骸を見つめていた。黙して動かない彼を見て、言葉を続ける。「分かっていたはずなんです、こうなることは.....あなた方が現れるずっと前から...なのに、私は結局、何も止めることができなかった。私は賢人などではない。ただの.....愚鈍な、呪われた怪物です」

珍しく弱音を吐くニンバム。

自身を呪い、過去を呪い、友を呪い――目の前に広がる結果に、無力さを呪う。

卑下し、涙まで浮かべる友に、マウマウもどこか悲しげな視線を落としていた。昔の彼を知っているからこそ、その心の痛みは人一倍分かっているのだろう。

どんな思いがあったにせよ、理想があったにせよ、それでも多くの人が傷付き、いなくなった。

のしかかる責任にニンバムは言葉が出ない。それは一同の前で彼が初めて見せる、心からの弱音であった。

か細い声で言うニンバム。

だが、そんな彼の弱音を全て駆逐すべく、大きな声で彼女が言い放つ。

「何言ってるんですか。ニンバムさん、最後の最後までちゃんと戦ってたじゃないですか！」

リサの一言に、目を見開くニンバム。少女は一步を踏み出し、吠える。

「生まれがどうか、過去がどうか、関係ないです！ 今は今、ニンバムさんはニンバムさんでしょう？ どう生きるか、何をするかは、全部あなたのものです。誰に決められる必要もない。だから、あなたはグレンさんを止めに来たんでしょ？」

「リサ...さん.....」

夢斗、光一も彼女の言葉に心を動かされていた。

過去がどうだったかは知らない。もしかしたら彼の父は正真正銘、異邦の魔導士と呼ばれた大罪人だったのかもしれない。

だが、その過去がその後のすべての歴史を決めていいものなのだろうか。後に生まれてくるすべての命に、つきまとうべきなのか。

「私、覚えてますよ。『心移し』の話聞いた時、人一倍、あなたが悲しそうな目をしたのを。今なら分かります、きっとお父さんのことを思い出してたんですよね。お父さんが作った魔法が、また悲しい事件を引き起こしてるんじゃないかって」

彼の父である、大魔導士・ヴァドス。その所業を、夢斗達は知らず知らずのうちに、えぐっていたのだろう。

「見た目や過去はどうだか知らないです。知ったこっちゃないんです！ あなたは痛々しい過去に苦しむことができ、間違っている人に立ち向かえてるんでしょ？ それを『正しい』と思

ってやってるんですよ。なら、間違いないです。あなたは誰がなんと言おうと、立派な人です！」

ついにその言葉が、ニンバムの擦り切れた心を揺れ動かす。賢人は横たわったまま、涙を浮かべた。

過去を変えることはできない。きっとそれは、これからもずっと、それこそ死ぬまで自身と寄り添ってくるのだろう。

グレンと語り合った過去も、マウマウと出会ったあの日も、父に利用されたあの時も、全て真実。

だがそれらを背負ってなお、ニンバムは今日まで抱いてきた、一つの単純な思いを取り戻す。進もうと思った——だからこそ、必死に魔法を学んだ。そして自身の呪われた血を制御する道具を生み出した。

そうやって生きていこうと思ったのだ。多くの人を少しでも幸せにするように、生き抜こうと。

賢人の心を縛っていた「枷」が、それでも少しだけ、緩む。

「あなた方が、ここに来た理由が...分かった気がします。『オーバー』だからでは、ない.....あなた方は...初めから、そうだったのですね」

「そうですよ？ 『オーバー』かどうかなんて、どうでもいいです。それこそ知ったこっちゃない、トゥーです！ 私達、自分達が正しいと思ったから、こうして来たんですから」

過去、生まれ、憎悪、悲劇——それらの曲がった諸々が、底抜けの真っ直ぐさの前では、ひどくちっぽけに感じる。ニンバムは心の中で理解し、頷いた。

「あなた方を『オーバー』だから、と——特別だから、と決めつけていた無礼をお許してください...答えは単純。あなた方は、ただの立派な人間だった.....それに気付けないのだから、私はやはり、随分と頭が悪いですね...」

困ったように笑うニンバム。そのいつも見た笑顔に、ようやく一同は安堵する。

怪物の咆哮など、どこにもない。彼は皆が良く知る、おっとりした、どこまでも控え目な正しき魔法使いである。

夢斗がため息をつき、言う。

「あんたが頭悪いなら、俺らなんざミジンコレベルだよ。勘弁してくれ」

「夢斗君、自信満々に言うことじゃないよ、それは」

「せやで。しかもお前がミジンコなら、ワイなんかなんやねん。ミドリムシかなんかか」

疲弊から、いつものようには笑えない。だがそれでも夢斗らは、変わらぬやりとりで互いを奮起させる。しょげている暇などない。

まだ、終わってなどいないのだ——汗と、泥と、血を拭い、前を見る。その強い眼差しに気付いたニンバムが悟った。

「あなた方は、このまま進まれるのですね。この戦いを、終わらせるために」

「ああ。獣人と王国の戦いは、終わったわけじゃあない。大軍が進んでくる前に、なんとかしないといけない」

激突したのはあくまで王国の偵察部隊。さらなる大軍が、この先には控えているのだろう。このままでは、ルガリア王が計画している「滅却作戦」が始まってしまう。

夢斗は後ろ頭をかきながら、悩む。

「しかし、どうすりゃいいんだ...俺らがいくら説得したところで、あいつらは止まってくれないだろう。ましてや、大軍と真っ向からぶつかるなんて、それこそ戦争を俺らが始めちゃうことになる...」

叩くべき相手は「心喰い」だとは分かっている。しかし、ならばどうすればいいのだろう。

奴は夢斗らに言った。戦地の混乱の中に真実がある、と。まるで、夢斗達をあえて迎え入れようとしているかのようだ。その不可解な言葉の意味は、相変わらず分からない。

リサも眉をしかめ「むう」と唸る。

「『心喰い』を捕まえるにしても、どうにかして進軍を止めないと...その間にもし戦争が起こったら、それこそ...」

最悪の事態だ。真実は見えても、犠牲を止めることはできない。

光一も必死に脳細胞を働かせ答えを探す。

「戦争が始まるより前に、とにかくその王様に話をつけて、進軍を止めてもらうとか？ でも、どうやって...大軍をスルーして、王様まで一直線に潜り込むことなんて、できるのかな」

「バグ技でも使わないと無理です！ アンリーザナブル！（無茶苦茶です）」

悲しいかな、彼らの言う通りだ。もちろん国王をこらしめ、軍自体を止めてもらえれば、全てが丸く収まる。今回の戦いを始めた張本人の力で、全てをゼロに戻す。

だが、実に非現実的な手段だ。それを裏付けるように、マウマウがニンバムに肩を貸し、起こしながら言う。

「あたしが偵察しただけでも、城壁外に待機している軍の数は、ざっと500。王国内には後続部隊がまだ控えている。真っ向から突っ込めば、蜂の巣だよ」

肝が冷え、言葉を失う一同。数百を超える剣が、槍が、矢が、魔法が降り注ぐというのだ。

身震いはするが、それでも夢斗は諦めない。考えて、考えて、考え抜く。何かがあるはずだ。ここから、何かができるはずだ。

足を止めてしまったら、ゴールになんて絶対にたどり着けない。

「なんとか王国にもぐりこめれば。城壁も使わず、誰にも見つからないように――」

悩み、ひねり出した言葉。それに反応したのは、ワニ男の姿をした桐生である。

「そんなん、簡単やろ」

思わず、全員が目を見開く。振り向いた彼の顔は、また悪そうな笑みを浮かべていた。

「簡単って...どうするつもりなんだよ、桐生」

「いや、だってワイら一度、あそこから脱出したやないか。なら、そこからもう一度、中に入れるやろ？」

一瞬、理解が遅れてしまう。しかし、すぐに言葉の真意に気付き、互いの顔を見つめる三人。しかし、ニンバムとマウマウだけは事態が理解できていない。

「あれ.....か。確か、あの先は」

「はい！ 城にまで続いています！」

「うん、間違いないよ。出てきた時に、ちゃんと目印もつけてる。あそこから入っちゃえば――」

思いがけず、微かな笑みが浮かんだ。たまらずニンバムが問いかける。

「入り口、とは？ 城壁をくぐる以外に、そんな道なんかが…」

「ああ、あるんだよ。光一達はそこから脱出してきたんだ。じゃあ逆に、入ることだってできるはずだ」

三人が脳裏に浮かべていたのは、城の地下に張り巡らされた地下水道だ。光一とキリウは脱出したが、夢斗とリサは逆にそこを通じて、城内まで侵入した。

変わらず使えるかは謎だが、少なくとも大軍の海を切り開くよりは、素早く行動出来る。

三人の思惑を察し、ニンバムは笑う。

「なるほど、まさに起死回生の道ですね…申し訳ない、最後まであなた方に頼ることになるなんて」

頭を下げるニンバム。続けて、マウマウも頷いた。

「あたしら、レジスタンスのアジトに戻って、このことを伝えるよ。出来るだけ防衛戦を固めて、進軍が始まってもしっかり守りに徹するよう、説得してみる」

各々の進む方向が決まり、決意を固め直す一同。再び、あの臭い下水道に行くことになるとは、思ってもみなかった。

だがあの闇の奥に、もしかしたら「光」はあるかもしれない。そう思うと、拳に自然と力がこもる。

互いを見つめ、頷く。

キリウが「やれやれ」と言いたそうに首を振り、呟いた。

「まったく、ま～た、あのくっさい所に行くことになるとはな。勘弁やで、ほんま」

彼は腰に下げたカンテラを差し出した。

「灯り代は10分で銀貨1枚――の所やけど、学割全額免除、ってことで」

クラスメイトとして、そして「商人」としての二つの人格で、不敵に笑う桐生。

その不器用な優しさに、全員の顔が晴れた。そんな彼の手をリサが掴み、ぶんぶんと振る。突然の事態に、ワニ男は声を上げた。

「おわ――わわわわ！？」

「ありがとうございます！ また一人、仲間もできたし、これで百人力ですよ。絶対勝てます！
コングラッチュレーション！！」

暴れる小さな体を、キリウは制することができない。離された手首をぶらぶらと振りながら、相変わらずなりサを見てため息をつく。

力強い助っ人であることには、間違いない。思いがけない援軍に心が高鳴った。

「よし、なら急ごう。とにかく、城の奥――あの王様を目指すんだ」

頷き、駆け出す三人。ニンバム、マウマウも彼らを見送る。

大きな真実と共に、あまりにも多くのものを失った。

だが、失くしてばかりではない。その中でかすかに、得たものだってあるはずだ。

一同はそう自身を奮い立たせ、前に進む。汚れなど振り払うことすら忘れ、ただ前に。

風が一阵吹き抜け、砂埃を舞わせる。それを突き破るように夢斗達は進んだ。

自身らで背負った使命のため進む、四人の「高校生」。

その眼差しの中に、マウマウやニンバムが「戦士」と呼ぶ者達と同じ光がまだかすかではあるが、それでもしっかりと宿り、キラキラと揺れていた。

破れていく殻

人の気配がないことを察し、素早く夢斗とリサが部屋へと入る。下水の入り口を登ってくる光一に手を貸し、引き上げた。

「大丈夫か、光一？」

「うん...でもそこら中、臭くて勘弁してほしいよ...下水抜けたと思ったら、なんだよこの部屋...」

獣人になってから、ずいぶん光一は鼻が効くようになったらしい。そんな彼からすれば、下水の臭いも地下室の湿っぽさも、たまらないのだろう。あからさまに嫌な顔をして、飛び出す。

その後ろからぬっと、ワニの頭が覗いた。

「おお、こないなところに繋がったんか。城の地下みたいやな」

「ここから、城の中に出れる。急ごう」

地下水道を進んだ夢斗達は、かつて城に潜入するためにたどり着いた、地下室へと戻ってきていた。暗闇の道は臭くて恐ろしかったが、それでも兵士に遭遇することもなく、無事にたどり着くことが出来た。

夢斗を先頭に駆け出す一同。

だが部屋から出ようとする彼らに、夢斗、リサにとっては聞き覚えのある声が響く。

「オオオゴオオオ！」

声を上げ、飛び退いてしまう四人。見れば扉の脇に置かれた檻の中から、鎖に繋がれた人間がこちらに向けて声を上げている。以前、ここに忍び込んだ夢斗達には見覚えがあった。特殊な口枷をつけられた、ガリガリにやせ細った老人である。

光一が壁際に張り付き、声を上げる。

「びー——っくりしたあ！ な、なんだよ、もお！」

「ウゴ！ オグウオオウ！」

老人は両手で檻を掴み、力を振り絞って何かを訴えかけている。大きく見開かれた目が血走り、髪を振り乱す様は幽鬼のそれだ。

キリウが少し覗き込み、呆れたように言う。

「おおよそ、盗みでも働いて捕まった小悪党やろ。こんなジメジメした所にほっとかれて、可哀想やで、ほんま」

言い捨てる彼に、感情は特に込められていない。あくまで皮肉でそう言っているだけだ。

「おら、相手してる暇ないで。とっとと王様んところ行って、戦争止めてもらわんと」

扉を開け、隣の部屋の様子を伺うキリウ。やはりそこは手薄で、誰も守っていない。安心して移動した。

光一、夢斗もそれに続く。去りゆく一同に、また老人は必死に檻を揺らして訴えかけていた。

「オゴオオウ！ ウゴ、ウゴオオオオウ！」

その姿を、リサは立ち止まって振り返る。不安げに彼を見つめるリサに、夢斗が声をかけた。

「リサ、ほら急ごう。早くしないと、進軍が始まっちゃう」

「は、はい……」

立ち去ろうとするリサに、またも大きな声で訴えかける老人。びくりと立ち止まり、振り返る。

老人の顔に悲痛な色が見えた。必死さがどこか、悲しみへと変わっている。大きな目の中に浮かぶ銀色の瞳の端からは、止めどなく涙が溢れ出ていた。

もはや彼は大声をあげず、檻にすがりつきこちらを見ている。

なぜだろう。リサはひどく、その眼に見覚えがある。薄汚い老人のはずなのに、とても盗人とは思えないほどの透き通った眼差しをしていた。

涙がポタポタと流れ落ち、床に落ちる。

おもむろに、少しだけリサは歩み寄った。カンテラの明かりを近づけ、よく彼の顔を見つめる。

シワの刻まれた弱々しい顔。白くふさふさとした眉毛。銀の瞳。

そして明かりを近づけることで、ある特徴を確認する。

左目の真横――そこに綺麗に「三角」を描くように並んだ、三つのほくろ。

どくん、と鼓動が跳ね上がる。リサは立ち尽くし、身動きを取ることができない。

見たことがある、この顔を。だが奇妙なことに、彼に会ったわけではない。何かで、全く同じ顔を見たことがある。

やせ細り、汚れていたとしても、その眼差しや面影は変えることができない。

どこで見たのか、自問自答する。

そう、確かあれは「本」だ。ページの中に白黒で描かれた胸像。

古びた書物の一ページに載せられていた「彼」を見たのだ。

「お、おいリサ。何してるんだよ、ほら、行こうぜ」

語りかける夢斗。しかしリサは何を思ったのか檻に手をかけ、引っ張り出す。その異様な光景に夢斗は驚き、声を上げた。

「ちょ、ちょっと、リサ!？」

「手伝ってください、この人を助けないと！」

ガシャガシャと音を立てるリサ。だが、少女の力では檻はびくともしない。騒ぎを聞きつけ、光一、キリウも戻ってきた。

「な、なにしてるのさ!？」

「お嬢ちゃん、アホなこと止めときや。そんな小さな親切、今はええねん！」

しかし、一同の制止をリサは聞かない。代わりに大声で吠えた。

「親切だとか、可哀想だからとかじゃないんです！ この人は、この人は――！」

うまく説明ができない。そもそもこんなこと、リサの思い過ごしかもしれないのだ。

だが、理論理屈ではない。直感がリサにそう告げている。自分自身、ずっと得意げにしていたことがある。

一度見た人間の顔は、絶対に忘れない。

彼女の鬼気迫る姿に、それでも事態を飲み込む一同。真っ先に前に出たのはキリウだ。

「ちょいどきいや。ワイに任せとき。追加料金やけど、こいつも学割や」

彼は懐から何やら、先端が曲がった金属の棒を取り出した。それを鍵穴に差し込み、カチャカチャと音を立てていじる。どうやら鍵を開けようとしているらしい。固唾を飲んで、三人は見守った。

1分もしないうちに、見事に檻は開けられる。その瞬間、転がり落ちるように老人は外へと飛び出してきた。倒れた彼はすぐ前にいたリサに掴みかかり、這いつくばったまま何かを訴えている。

「ゴオオオオオ！ オオオオ！」

「お、落ち着いて、ちゃんと助けますから！」

老人の両足につけられた枷を、キリウは同様にピッキングで解除する。口に取り付けられた奇妙なマスクもとり外した。

ついに老人が声を上げる。

「ああ、あああ！ 良かった……良かった…やっと、自由になれた……ありがとう。どこのどなたか存じ上げないが…本当にありがとう！」

地に頭を下げ、何度も礼を告げる老人。リサは戸惑いつつも笑い、それに答える。

しかし夢斗だけがあることに気付き、目を見開いた。

この声、どこかで――老人は涙をポロポロと流し、訴える。

「ずっと…ずっと閉じ込められていたのだ。今がいつなのか、それすらもう分からん……恐ろしかった…私のいない所で『奴ら』が暗躍し続けていると思うと…ただ、ただ怖かった…」

なんだか妙だ。てっきり彼はコソ泥か何かで、ここに捕らえられていたとばかり思っていた。しかしどうもその様子を見ていると、彼がこの穴倉に放り込まれたことには、わけがあるらしい。

口元が露わになり、蓄えた白いヒゲが見える。よだれまで流し、彼は声を上げて泣いた。

「なあ、教えてくれ…あなた方は先程『戦争』と言っていたが……ここは――ルガリアは今、どうなっているのだ！？」

なぜか、彼の言葉には妙な気迫がある。少したじろぎつつも、夢斗が答えた。

「王国が獣人達を全滅させるための戦争を仕掛ける、一步手前ってところさ」

「なんだと！ そ、そんな……そんな最悪の事態に…！」

また、おいおいと泣く老人。夢斗らにはいまいち、事態が飲み込めない。なぜこの老人が、ルガリア王国の現状を気にし、そして嘆いているのかを。

ただ一人、老人の真正面に立つリサだけが、その真意を汲み取ろうとしていた。まっすぐに老人の顔を見つめ、そして記憶の「彼」と照らし合わせる。

あの時見た「彼」とは違う。だが、あの時見た「彼」とは一緒だ――恐る恐る、リサは問いかけた。

「あなた……誰ですか？」

他愛のない質問のはずだった。しかし、その一言が部屋の空気を一変させる。

ピタリ、と老人の泣き声が止んだ。彼は大きく目を見開き、リサを見つめる。

誰もがリサに視線を向けた。金髪・碧眼の少女は拳をぎゅっと握りしめたまま、対峙した老人の視線を受け止めている。

この状況でこの少女のみが、真実に最も近い。

驚きの声を上げたのは、老人だった。

「私は……私は……」

老人は己の名をしっかりと噛みしめ、前を向く。

戸惑いの色はある。涙に濡れた肌には、キラリと光る筋も残っている。

だがそれでも先程までのみすぼらしさは、どこにもない。

なぜだろう。彼はか細く弱々しい老人のはずなのに、なんだかその体から毅然とした「光」のようなものが感じられた。

「私の名は――」

放たれた、たった一つの名前。

その言葉の羅列が、その場にいた全ての人間に染み込み、心臓を鷲掴みにする。

それは誰しもが目の前の老人を――「彼」を知っているからだ。

言葉を失う一同。その中でやはり先陣を切るのは、リサだ。

「あなただったんですね。やっぱり」

点と点が繋がっていく。それは急加速的に、とめどない速さで。

こくりと頷く老人。大きな銀の眼差しの中に、もはや弱さはない。

やがて彼は全てを語り出した。

仄暗い地下室の奥に並ぶ四人の侵入者と、一人の囚人。

言葉が放たれるたびに鼓動が加速し、体が震える。

夢斗は数分前の老人と同じように、叫び声すらあげたくなる、奇妙な不安感を覚えた。

顔を上げると窓から差し込む陽光が暖かく、心地良い。少し視線を傾ければ、ルガリア王国が――そこにいる兵士達が尊び、目指す「英雄王」の石像が遠くに見える。もう何度、こうしてここで眺めたことだろう。遠き過去、かの地で盾一つを持ち、それでも大軍を抑えたというその逸話。まるでそれがペテンではないと理解できる。語り継がれる「魂」に偽りがないと信じれてしまう。

いつだって、その武勇伝に力をもらった。今だってそうだ。彼女は大きく息を吸い込み、直立したまま、軽く腰の剣に触れる。

剣を振る手に迷いはない。刃を駆る度に心が燃え、向かうべき正義に雄叫びを重ねた。

そう、心に決めていたはずだ。

それなのに、なぜなのだろうか。今朝から今に至るまで、やはりあの靄が消えてくれない。目を閉じると脳裏に浮かぶのは、見覚えのない――しかし、どこか見たことのある光景だ。

周囲に並ぶ兵士達も、どこか浮き足立っているかのようだった。武器を携えて隊列を乱さない

ようにしつつも、そわそわしているようで、落ち着きがない。

その先頭でまた一つ、ルーメルは大きく深呼吸をした。

やがて一人の兵士が声を上げる。それは周囲に伝染し、そこら中がざわめいた。

ゆっくり目を開けるルーメル。目の前の回廊をまっすぐ、こちらに向かって歩いてくる。

「来ると思っていたぞ。コウコウセイ」

ルーメルは前を向いたまま、向かってくる侵入者一同に言い放つ。

夢斗、リサ、光一。そしてキリウの横には、あの老人がいる。

一同は兵士達の群れの前で立ち止まり、対峙した。

「真正面から堂々とは、随分と勇ましいな。いや、それとも我々を舐めているのか？」

問いかけるも、誰も答えない。夢斗らは堂々と立ったまま、まっすぐ前を向いている。

「滑稽なものだ。これだけの軍隊を揃えていても、抜け道一つで簡単に懐に入られる。お前たちのおかげで、随分と我が軍の改善点が浮き彫りになったよ。まずはそれに対し、礼を言うべきだな」

ルーメルの背後で兵士達は殺気立ち、武器を構えている。だがそれを受けてもなお、横一線に並んだ夢斗らは揺らがない。なぜか、その眼差しから全てを押しつぶすかのような、強烈な威圧感が放たれていた。

「しかも、随分と妙な仲間が増えたのだな。なんだ、その老人は？ 偉大な魔法使い様か何かか？」

キリウが脇に連れている老人を見て、ルーメルは笑う。老人は外套を着せられ、顔を隠していた。

それだけ皮肉交じりの言葉を叩きつけても、なおも沈黙を保つ夢斗達。

ルーメルはついに苛立ちを露わにした。

「どうした、随分と大人しいんだな。もはや話し合うつもりもない、ということか。そうやって堂々と反逆しようというのだな、貴様らは――」

「どけよ」

言葉を、簡潔な一言で叩き潰される。ルーメルだけでなく、兵士達もその威迫に息を飲む。

夢斗が前を睨みつけたまま、言い放つ。

「あんたに用はない。どいてくれ。俺らにあんたらの王様に用事があるんだ。こんなところで無駄話をしてる暇はない」

「ほお...随分と、堂々とした立ち振る舞いだな。だが、我々がそれをおとなしく通すと思うか？」

「我らが王の元に、貴様らのような蛮族を招き入れるとでも？」

剣を引き抜くルーメル。長く美しい刀身が、光を浴びて輝く。

だが、そんなルーメルに、今度はリサが食ってかかった。

「随分と王様のことが好きなんですね」

「我らが王は大国の礎を築き、偉大なる英雄の意志を継ぐ名君だ。王があつてこそ、今日のこの国がある。だからこそ、我らはその『剣』となりて、邪悪なる外敵を退けるのは、至極当然の事

」

心まで王に陶醉し、彼の抱く「殺戮」すら正義と言い張るルーメル。他の兵士達もその言葉に感化され、少し勢いづく。

しかし、光一の放つ矢のような一言が、それを揺らがす。

「やっぱりあんた、全然変わってないね。痛い目見て、ちょっとは反省したかと思ったのにさ」
「反省だと？ 戯言をっ。我らが信念の、何を省みることが――」

「良く分かったよ、あんた達の目が節穴だって。まあ、こればかりは仕方ないか。『こんな事』、見破れる方がどうかしてる」

思わずルーメルが「なんだと」と眉をしかめる。斧を携えたキリウが、一步、前に出た。

「あんたらもある意味、被害者っちゅうこっちゃ。だから悪い事は言わん、黙ってどきいや。手え出さんかったら、何もせえへん」

妙な余裕に、たじろぐ兵士達。揺らぐ彼らの心を、とどめのように夢斗が押し込む。

「頼む、どいてくれ。立ちはだかるなら――もう容赦できない」

汗一つかかず前を見る夢斗に、兵士達は真っ向から立ちはだかることができない。数日前、この謎の侵入者を絶対的な「悪」と決めつけ、堂々と刃を向けた。王の意思を邪魔する反逆者として、駆逐するつもりで戦いを挑めた。

だが、今は違う。目の前に立つ少年、少女、獣人達が身に纏う気迫の「質」が違っている。だからこそ、襲い掛かれない。容易に前に出てしまえば、あの少年が言ったように「容赦などされない」のだから。

夢斗は――いや、彼の横に並ぶ皆が、その感情を抱いていたのだろう。自分でも不思議なくらい心が研ぎ澄まされている。怖くないと言えば嘘になるだろう。剣に槍、魔法が恐ろしいというのは、いつだって変わらない。痛みを負うことなんて、慣れれるわけではない。

だがそれでもなお、まるで動じるつもりなどない。

なぜなら、夢斗らは知ってしまったのだ。

それだけの「真実」を――この王国の特大的「歪み」を。

だからこそ、行かなければいけない。なんとしても、この先へ。

並々ならぬ気迫を叩きつけられても、やはりあの女剣士は揺らがない。ルーメルは一步、前に出る。光沢のある長髪がふわりと揺れた。

「とことん舐められたものだな、我々も。良いだろう、容赦しないというなら、やってみれば良い。お前らの言う通り、容赦などする必要はない。己の『意』を示してみろ！」

女隊長の一吠えに後押しされ、辛うじて兵士達は構えを作っている。しかし、この場において士気の差は明白だ。たとえ数では劣っていても、個々の放つ「気」の大きさが、夢斗らは違う。

少しだけ、ため息をつく夢斗。うつむいた彼の顔をルーメルは睨みつける。

だが、ルーメルの言葉通り「意」を決した彼が、こちら睨み返す。

瞬間、ルーメルの心がぐらりと揺らいだ。叩きつけられた少年の覇気に決意が揺らぐ。

まただ、この感触は――王国に侵入してきた彼らと対峙し、痛手を負って以来、心の奥底に沸き立つ感情だ。

あの瞳はなんだ。屈強でもなんでもない、あんな少年から放たれる、あの真っ直ぐさはなんだ

。

なんで————私はあの瞳を知っているんだ。

瞬間、夢斗が駆け出す。渾身の力で地面を踏みぬき、真っ直ぐ目の前のルーメルに迫った。

放たれる蹴り。剣を持ち上げようとしたルーメルの胴体に、それよりも一手、二手——否、三手ほども早く、突き刺さる。丸太を叩き込まれた方な衝撃が肺を押しつぶし、女剣士を一撃で吹き飛ばした。

絶句する一同。これにはさすがに、リサ、光一、キリウも驚く。

はるか後方の石柱に叩きつけられ、瓦礫と共に落ちるルーメル。夢斗は石畳を擦って止まり、立ち上がった。機構を展開させたブーツが白煙と、青い光を空間に立ち上らせている。一瞬で女剣士を蹴り飛ばし、一同の背後へと着地した彼に誰もが振り返った。

「か————っはぁ!？」

ルーメルは剣を握りしめたまま、それでも腹部の衝撃に声が出ない。今まで味わったどんな蹴りよりも重く、鋭く、そして疾い。初動すら見えず、剣を持ち上げた時には、己が体が宙を舞っていた。

続いて、ずんっという地響きが回廊を揺らす。兵士達が慌てて前に向き直ると、巨大な魔法の「ハンマー」が石畳を砕き割っていた。

リサが光る腕輪を構え、吠える。

「ほら、どいてください！ 来るならさっさと来てください！ ハリアーッ！！」

小さな体から放たれた声に大の大人達は何もできず、後ずさる。立ちはだかっていた兵士達の群れが、ばっくりと割れた。

その隙間を武器を携えたまま、悠々と歩いていくリサ、光一、キリウ、そして老人。夢斗に向かって、光一が真剣な眼差しで言う。

「行こう、夢斗君。王座へ」

「ああ、分かってる」

何も語ることなどない。それほどまでに一同の心は決まっている。行くべき場所など、もはや固まっているのだ。

去ろうとする夢斗達の背中に、女剣士はそれでも声を叩きつける。

「待て……止まれ…貴様らぁ！」

振り返る夢斗。仲間達もまっすぐに、女剣士を見る。

ルーメルは全身に汗を浮かべ、歯を食いしばり、立ち上がった。剣を持ち上げ、それでも構えを作る。腹部を守る鎧に、深々と夢斗の足跡が刻み込まれていた。

「なんなんだ、貴様らは……一体、なんだというんだ？」

ルーメルは力なく震えながら、その言葉を絞り出す。

心が揺らぎ、鼓動が加速する。蹴りの痛みのせいではない。一撃の寸前にあの少年が見せた、あの「目」のせいだ。

「何をするつもりなんだ？ この先で、何を——」

彼女が今まで固めてきたはずの「覚悟」が揺れる。ひびの入った「騎士道」がポロポロと音を

立てて崩れ、瓦解していくのが分かる。

何が起きているのだ——もはや、ルーメルはかすかに涙すら浮かべていた。

この「心」は何だ。胸に去来するこの「懐かしさ」は何なのだ。

彼らを見て以来、何故私は「自分」を貫くことができない。何故今更になって「自分」を疑わなくてはいけない。

一步を踏み出すことはできない。がくりと膝をつき、肩で息をするルーメル。

そんな彼女に、夢斗は言った。

「なんにも、特別なことなんかしないさ。俺らはただ探しに来ただけだ。本当のことが知りたかったんだ。『オーバー』とかなんとか、関係ない。良く分からないまま、何かに傷つけられることが嫌だった。だから、自分の足でここまで来た」

オーバー、という言葉に誰もが息を飲む。兵士達がざわめく中、ルーメルは顔を上げた。

見覚えのある「彼」に向かって、言う。

「『オーバー』...異界の住人...」

「だから関係ないんだ、そんなこと。俺らの世界と、こっちの世界は確かに違う。だけどそんなことは、今回のことには関係ない。俺は自分のクラスメイトを探しに来たけど、そこで誰かが悲しんで、虐げられるのがただ嫌だった。そんなワガママな高校生。それだけだよ、俺なんてな」

どくん、とルーメルの心が跳ねる。だが驚く彼女に目もくれず、夢斗らは踵を返し、奥へと進んでいってしまう。

侵入者達を、誰も追いかけることはできない。代わりに兵士達がうなだれるルーメルに駆け寄り、大丈夫ですか、と問いかけてきた。

しかし、そんな声は彼女には今や届かない。去っていく夢斗らの背中を見つめ、ただ、震える

。クラスメイト——ルーメルの脳裏に、蘇る光景。かつて夢だとばかり思っていた、あの記憶の断片。

森で襲われていた異国の洋服を身につけた少女を、助けた。毅然として、しかしどこかまだ幼い彼女は、怯え、それでも自分を頼り、縋った。

森の中、血と肉の匂いに群がる猛獣を退け続けた。その果てに、少女は倒れてしまう。力無く横たわる彼女を、わなわなと震えながら見つめる、自分。

いや、違う————倒れているのは、深緑の長い髪と尖った耳、白い肌をもつ女剣士だ。

自身が持つ剣を「私」に託し、そして「生きろ」とだけ告げ、事切れたエルフの女剣士。

倒れているのは、私？

どくん、とまた一つ、鼓動が高鳴る。

女剣士のその心の奥に、もはや光り輝く「騎士道」はない。

その奥から姿を現したのは、ルーメルを作り上げていた「芯」。

色褪せて、未熟で、弱々しい——けれども、どこまでも白く、強く輝く、彼女を作り上げるもの。

仮初の騎士道を壊し、顔を覗かせる真の「心」。

だがその光は確かに強く、激しく彼女の中で輝き始めていた。

薄暗い回廊を進みながら、夢斗は少しだけ呟く。

「やっぱり、やりすぎたかな。あれは」

その一言に、横を歩くりサが振り向く。

「そんなことはないですよ。向こうだって刃物持ってるんだから、あれくらいでちょうど良いんです」

「う～ん、いや、そうだけどさ。仮にも女の人だったわけだしさ...」

「関係ないです、そんなの！　今やジェンダーフリーの世界ですよ。女だから甘えればいいのか、そういうのナンセンス！」

リサは相変わらず、徹底的な自分理論で切り返す。ずんずんと進むリサに、夢斗はたじろいでしまう。

これには光一、キリウも呆れたように言った。

「あーあー、出たよ、またクール頑固が。気になるといつまでもブツブツ言ってるんだから」

「せやで。やったことはしゃあないやろ。帰って謝る気か？」

「い、良いだろう別に？　本当は、戦わないで済むなら、それが良かったわけだし」

「優しすぎるよお、夢斗君は。相手はあのまま、真っ二つにしてこようとしてたんだよ。言っても分からない奴には、あれくらいしょうがないさ」

思わず、夢斗は「そうかな」と黙りそうになってしまう。しかし、複雑な心境を吐露した。

「どうしても今回の件、割り切れないってのがなあ...やっぱり、あいつらもどっか、可哀想っていうか」

これには、横を老人と共に歩くキリウが答えた。

「んなこと言うても、しゃあないやろ。こんなんどでかい『イカサマ』みたいなもんやで。ましてや、国一つ使ってこんなことされた日には、気付けっちゅう方が無茶やで」

「うん、そうは思うんだけどな。ごめん、迷ってる暇はないって、決めてるつもりなんだけど」

それほどまでに、夢斗らが知ったある「真実」は理不尽なのだ。こんな禍々しい計画が日常の裏で行われていた。そんなことを、この王国に住む何人が気付けたというのだろうか。きっと真実を明かしたとしても、受け止めきれない人が大半だ。

老人はせかせかと歩きながらも、不安げに夢斗の横顔を見つめていた。しかし、彼は前を向きなおす。

「それにしても、すごい女性だったな。女なのにあれだけ堂々として、王国のために命をかけるよとしてたんだ。あれはあれで、まっすぐすぎる」

だからこそ最後の最後に、覚悟を決めたのだ。ルーメルを退けるのは、もはや言葉では無理だ。折れない鋼と鋼。交わったのならば、どちらかが砕けるまでまっすぐであり続けるしかない。

光一も素直に頷いた。

「歳もまだ若そうなのにね。なんか学級委員とかになったら、超怖そう」

「ああ、まさにそうだな。そういや俺らのクラスの学級委員も、怖かったよな。1年の学級委員長までやってたし」

ふっと思い出し、互いに見つめ合ってしまう。同い年の女子高生なのにやたら厳しく、毅然としていた。どんな相手にも立ち向かい、真っ向から切って返すその姿。

臆げながら思い出した彼女の姿は、まさに「騎士」のそれである。キリウも「ああ」と思い出し、続けた。

「めっさ怖かったわ、学級委員。ワイが早弁してたの見つけて、脇腹一撃どつかれた時は呼吸が止まったで。でも変な感じやな、確かに」

「変な感じ？ どういうことだよ」

「いや、ワイも改めて考えるとクラスのこととか、体育祭だの林間学校のことは思い出せるんや。せやけどお前らが言うたとおりに、クラスのメンバーだけが、どうやっても思い出せん。こんな奴がいたよなあ、ってふわっとした形でしかな...」

やはり、かつての「1-A」の存在は、一同の心の中で何か見えない鍵がかけられているらしい。きっとそれは、今後もふっとした瞬間に開かれるのだろうか。

蘇ったかすかな記憶に夢斗は呟く。

「いざこざにケリがついても、まだ終わりじゃないんだ。それでやっと思える。皆を一一クラスメイトを探さないとな」

前を向きなおし、歩き続ける夢斗。

思えば、とんでもないことに巻き込まれたものだ。過去を求めやってきたこの場所で、戦争を止める救世主として駆り出されてしまった。そして今、一国の「王」に直談判しようとしているなど、あの時の自分からは想像できない。

だが、奇妙な運命に翻弄などされない。こうして絨毯を踏みしめ歩く足は、間違いなく自分の足なのだ。

終わらせないと一一前を向く夢斗の姿に、リサ、光一、キリウも勇気付けられる。

やがてたどり着いた大きな扉を開け、飛び込んできた光景に一同は息を飲んでしまう。回廊の薄暗さから一気に、まばゆいまでに光が差す大広間へと到達した。天高く飾られた巨大なステンドグラスには、盾と剣を持ち、馬に乗って戦いへとおもむく騎士の絵が刻まれている。そこから降り注ぐ鮮やかな色は、夢斗らの網膜を眩く彩る。

だが、すぐに全身に緊張が走った。真正面、絨毯の続く先に見える大きな椅子に、彼は座っている。

銀細工の施された冠と、白い法衣を着た老人は声高らかに告げた。

「ようこそ、『オーバー』諸君。我らが城へ」

驚くほど透き通った声で言い放つ老人。数日ぶりに目にするその姿はやはり年老いてなお、あまりある威圧感を持つ。

ルガリア王国を統べる国王、エイムダル＝ロイス＝ルガリア。

彼は侵入者の登場にもまるで動じず、微笑すら浮かべ、こちらを見つめていた。

大きな部屋の壁際には、兵士達がずらりと並ぶ。先程まで相手にしていた者達とは、明らかに格が違う。いずれも顔を兜で覆い、誰が誰だか見分けがつかない。

だが、彼らは攻撃してくる様子はない。ただ槍を手に携えたまま、じっと待機していた。

困惑する一同に、なおも国王・エイムダルが言う。

「どうぞ、こちらへ。大丈夫、彼らは私の命令がない限り、襲いなどせんよ。もっと近くへ」

事もあろうに、夢斗らを招き入れるエイムダル。一瞬どうすべきか悩んだが、こんなところで止まっても仕方がない。夢斗は仲間達の顔を見渡し頷いて、歩みだした。

近付きながら王座を見つめる。悠然と座る彼の横には、あの大柄な騎士・ナグルファがいた。相変わらずその眼差しは無機質で、感情を読み取れない。

数メートルの位置まで近付き、立ち止まる夢斗達。

王は笑い、語りかけてくる。

「お初にお目にかかる、『オーバー』諸君。お会いできて光栄だよ」

余裕綽々の一言に、好意的に返す気になどなれない。眉をしかめ、拳を握りしめたまま言う。

「ありきたりな挨拶をしに来たわけじゃあない。俺らは侵入者だぜ」

「これは失礼、確かに確かに。兵団の者が何人も、そなたらの手にかかったと聞いた。随分荒々しい挨拶だ」

夢斗の怒りを真っ向から受けても、まるで動じない。さすが王たる器だ。

「『オーバー』は、その時代に繁栄、はたまた破滅のいずれかをもたらす、とかねてから語り継がれているが、残念なことにそなたらは後者だったようだな。厄介な来訪者だ」

皮肉をぶつけてくる彼に、リサが言い放つ。

「誰も、好きで戦ってなんかいません。あなた方が無茶苦茶しなければ、おとなしくしてました。チョコだって好きなだけあげましたよ」

「無茶苦茶、とな。それはどういうことだろうか。我々は、この国を守るため尽力しているつもりだ。元々、その治安を乱したのは獣人達の所業であろう」

光一が牙をむき出しにし、彼には珍しく怒りをあらわにした。

「よく言うよ！ 自分らで自作自演しておいてさ。全部、獣人を排除するための口実だろう！」

「おや、それは随分物騒な物言いだな。我々が自作自演を行っている？ 馬鹿を言ってはいけないよ、少年」

「知ってるんだぞ、お前らが『心移し』のために、人殺しをやってるってことを。全部、あんたが仕組んだってことを！」

この一言になおも王は笑っている。彼の代わりに、隣にいるナグルファが口を開く。

「浅はかな推理だ。稚拙すぎて笑えもせん。我らが王が、そのような禁断の術に手を染めていると？ 馬鹿馬鹿しい」

ここでキリウがつまらなそうな眼差しのまま、問いかける。

「ほなら、おたくらが買い取った奴隷は、何に使うとるんや。城に入ったっきり、姿を見んって話やけど」

「彼らは遠征の地にて作戦を行う特殊兵団として、我らが招き入れたのだ。戦闘術を学び、各地

で特務に勤しんでいる。それを秘術のための生贄などと、実にくだらん曲解だ」

ナグルファの一言に「へえ」とキリウが返す。

どれだけの事実を叩きつけられても、まるで揺らがない王。そしてナグルファ。無理もない。ここまで夢斗らの語ったことは、全て確証を持たない憶測でしかない。

動じない二人に向かって、夢斗は問う。

「何もやってない。何も知らない。そう言うんだな、あんたら？」

「ああ。我々もそもそも『心喰い』などという大罪人は早々に見つけ出し、処刑したかったところだ。そちらもどうやら怪事件を追う中で、一つの結論に辿り着き、ここにやってきたらしい。しかしながら、どうやら勘違いということらしいな。我々はあくまで王国のため、獣人達の中に潜む『狂気』をあぶり出したいだけだ」

にこやかに、しかしどこかに刺すような冷徹さを秘め、王・エイムダルは言う。

「どうだろう、各々方。ここは一つ、矛を収めてはくれぬだろうか。我々も『オーバー』として異国――いや、異世界から来たそなたらを、歓迎したいのだよ。そなたらの世界の文化に、実に興味がある。我々と共に、繁栄の未来を作ってはくれないだろうか」

柔らかな眼差しである。

それでいて清らかで、迷いがなく、毅然とした言葉が一同に降りかかる。

しばらく誰も何も言わない。静寂の中、ただ王とナグルファは黙して答えを待った。

「俺らのやったことを、許してくれるっていうのか？」

「ああ、もちろんだ。なにセクレイドルについて右も左も分からぬ状態では、なにを信じていいかも分からなかったであろう。色々勘違いしてしまっても、仕方がないことではないか」

寛容に、あくまで器によって夢斗らを受け止めようとする国王。

夢斗は前を向いたまま、彼に問う。

「こっちの世界に来て、不安だったんだ。魔法だの何だのが飛び出す世界で、どうすりゃいいのか。いつも迷ってた。だから導いてくれるっていうなら、助かるよ」

その一言に大きく頷く国王。

ナグルファは隣で、ふう、とため息をつく。

射しこむ陽光。神々しい光を浴び、しっかりと彼らを見据えて夢斗は答えた。

「けど、ごめん。無理だ。俺らはガキかもしれないけど『嘘つき』についていくほど、頭悪くはないつもりなんだ」

その一言で場の空気が一変したのが、分かった。

国王は表情を変えない。あくまでにっこりと笑ったまま、こちらを見ている。

「嘘つき、とな？ それは一体、どういう――」

「国の過去だとか、成り立ちだとか。そんなでかいことは俺らには分からない。だけど、そんなどうしようもない奴でも、分かることってのはある。あんたは俺らに、本当のことなんて言うつもりはないってこと」

寂しく苦笑する夢斗。彼の態度にナグルファが声を上げた。

「貴様ら、黙って聞いておけば...我らが王が、牙をむいた貴様らですら受け入れると申されてお

られるというのに。事もあろうにその王を嘘つきなどと――もはや、許しておけん」

彼の一言に王も「ふう」とため息をつく。老人の笑顔の中に、それでもはっきりと分かる「狂気」が混じった。

「誠に、残念だ。あくまで我々と対立し続ける、というその意思。それもそなたらの立派な信念だ。否定するつもりはない。ただ我々もまっすぐ――受け止めるだけだ」

その一言を合図に、壁に並んでいた兵士達が一斉に動く。槍を構える音が、冷たく部屋の空気を震わした。

一瞬にして、絶体絶命に陥る夢斗達。

目の前に立つナグルファも吠え、愛用の剣を引き抜く。

「国王、お下がりください。ここは我々が。このような蛮族の群れ、我が剣のさびとしてくれませすぞ」

「うむ。悲しいことだが、頼んだぞ。ナグルファ」

ナグルファは「御意」と頷き、王と夢斗らの間に立ちはだかる。

一同の背後から、無数の兵が駆けてくる音が聞こえた。その群れの先頭にいた女剣士が、王の間の光景に絶句し、足を止める。

ルーメル、そして彼女の部隊の兵達は、取り囲まれた夢斗らをじっと見つめた。

剣をぐるんと回転させ、ナグルファが言い放つ。

「再びだな、忌むべき旅人『オーバー』共。残念だが、これまでだ。貴様らの悪行、我が剣が断つ」

じりじりと、周囲の兵士達も距離を詰めてきていた。ナグルファと、彼が率いる軍の「一番隊」。実力者のみを集めた屈強な兵団が、夢斗らに迫る。

固唾を飲んで一同の出方をうかがう、ルーメルと兵士達。

そんな中、誰よりも小さく、誰よりも明るい彼女が、まっすぐ言い放った。

「これが、あなたの考えたシナリオだったんですね」

リサの言葉に誰もが眉をしかめた。リサ達はなにも動じずに前を見ている。

前――いや、正確にはそこに立ちはだかる王国騎士・ナグルファを睨みつけていた。

「だから、私達をわざと『招き入れた』んですよね。王様の厚意をむげにした、野蛮な侵略者。そういう風にしたうえで、堂々と私達を消したかった。なるほど、なるほど、理解しました」

少女の言葉に、少なからず全員に動揺が走っていた。

だが唯一、その言葉を受け止めたナグルファだけが真っ向から切って返す。

「ふん、苦し紛れの戯言を。我らが王は慈悲深き御人。その国王が投げかけた手を、払ったのは貴様らではないか。こうして話し合いの場すら設けたものを、なんと嘆かわしい」

しかし、今度は光一が腕組みをしたまま、ふてぶてしく返す。

「もちろん、話し合いするつもりで来たんだ、僕ら。でも、そんな王様なんかじゃあない。あんたと話すために来たんだよ。勘違いしないでくれる？」

ナグルファが息を飲むのが分かった。彼の部隊にも隊長の動揺が伝わったらしい。皆、足を止め、不可解な光景に首をかしげている。

揺れるナグルファに、夢斗も強く叩きつけた。

「やっと前に出てくれたな。ありがとう、話しやすいよ」

「何を言っている、さっきから。貴様ら、負け惜しみか？」

「負けたつもりなんてないさ。光一の言った通り、ただ単純。あんたと話をしに来たんだ。国王だの、兵士だの、どうでもいい。あんたと話をつけに来たんだよ」

夢斗ら「反逆者」の群れにまた一步、兵士達が歩み寄る。

しかし、その踏み込みは実に浅い。武器を構え、頭からつま先までを武装した鉄の鎧達は、確実に戸惑い躊躇している。

その気持ちは、遙か後方で見つめる女剣士・ルーメルも同様だった。

血にまみれ、泥にまみれ、傷だらけで立ち尽くす反逆者達。その群れを、王国直属の歩兵団が取り囲む。鍛え上げられた肉体に、磨き上げられた武具を身にまとい、確固たる「正義」の元、剣を持ち上げている。

そう信じるべきなのに、ルーメルの目に映る光景はまるで違う。

今までとは異なる景色に、震えすら起こっていた。

兵士達の中央に立つ彼らが、なぜか眩しく見える。それは怯える心が見せた幻覚か。はたまた、差し込む後光が作り上げた錯覚か。しかし確かに、ルーメルの眼には彼らから放たれる「光」が見える。

未だに剣を持ち上げれない。携えた長剣が、ひどく重く感じる。

歩兵団長・ナグルファはなおも、吐き捨てるように言う。

「蛮族と交わす言葉など、持ち合わせておらん。貴様らが王国に仇なす者であることは明白。これ以上の侮辱、暴挙、もはや捨て置けん」

剣を持ち上げ、緊張した構えを作るナグルファ。その目に圧倒的な殺気が宿る。

「散れ、反逆者共。我が剣が示しし『正義』の前に！」

ほんの一瞬、その言葉は兵士達を鼓舞したのだろう。わずか数秒だけでも、彼の言葉は戦う者達に勇気と、前に進む光を見せた。

だが、戦いは始まらない。

しゃがれた、しかしはっきりとした口調の声が、全員を制する。

「『正義』か——随分と堂々と言い張るな、ナグルファ。性根がどうであれ、そのまっすぐな部分は変わらん。実に惜しい」

ついに、ナグルファの顔にもはっきりと動揺の色が見えた。周囲を取り囲む兵士達。そしてルーメルまでも一斉に息を飲む。

一步、夢斗らの前に、外套をかぶったままの老人が歩み出る。地下牢で夢斗達が救い出した謎の囚人だ。外套から見える腕と足は痩せ細ってしまい弱々しい。

だが、彼の眼差しはぶれない。剣を持つナグルファの前に立とうとも、けっして。

その老人の声に誰もが聞き覚えがある。だが、だからこそ困惑してしまうのだ。なぜ「彼」がここにいるのか。否、正確には何故、「彼」と同じ声を持つ者がいるのか、だ。

外套を脱ぎ、素顔をあらわにする老人。少しはげ上がった頭にはボサボサの白髪が残っており

、蓄えたひげが口元を覆う。微かに潤んだ眼差しの奥で、怒りのような炎がメラメラと燃えている。鋭い眼光は、歩兵団長・ナグルファを臆することなく睨みつけていた。

「いつ以来だ、こうして言葉を交わすのは。今まで地下牢でお前から一方的に、利用されるだけじゃったからのう」

「貴様...なぜ」

「日頃の行いが良かったのだろう。神はまだ、こんな老いぼれを見捨てないでいてくれた。彼らと偶然、私を巡り合わせてくれた。それだけだ」

老人の後ろでなおも堂々と立ち、前を見ている夢斗達。

まるで揺らがない彼らに対し、明らかにナグルファの心は揺れている。

「貴様の思惑は、すべてワシが知っておる。ワシを利用するため、なまじ生かしておいたのが仇となったな」

「何を、馬鹿な――薄汚いコソ泥が、虚勢を張る――」

「愚か者があ！！」

老人の一喝が、全身の肉体に突き刺さった。その強烈な「覇気」には、夢斗達も驚いてしまう。か細い肉体のその奥から、老人が放つ異常なまでの気迫に冷や汗が垂れた。

「なおもしらばっくれるつもりか、貴様！ 己の抱いた邪悪な思想を『正義』と偽り、人の道を踏み外したその所業。民を守るべき『盾の心』を捨て去り、己が欲望の『牙』へと変えた大馬鹿者が、恥を知れ！！」

真っ向から、苛烈に、徹底的に言葉の刃を放つ老人。彼の放つ一太刀一太刀が鎧を、肉を、骨を通り抜け、着実に「心」へと突き刺さる。

その言い知れぬ「威厳」に誰も何も言い返せない。ポロ一つを纏ったこの老人にその場の全員が一喝され、動くことができない。

「あれやこれやと言葉を並べ、その実、貴様の考えているのは自身の身勝手な願望だけではないか！ 国のためと称し、獣人達を蛮族と嘲り、一方的に駆逐する。野蛮なのはどちらだ？ 貴様らが振るう剣のどこに『正義』があるというのだ！」

それは今まで夢斗らが、そして獣人達が必死にルガリアに対して訴えてきたことと、同じなのかも知れない。無実の罪に剣を向ける彼らの非道を、怒りに変えてきた。

だが同じ内容でも、老人の放つ言葉の「圧」が違う。それは彼が今までの人生で積み重ねてきた経験、そして作り上げてきた人としての「器」がそうさせるのだろう。

真横で聞いている夢斗らは、彼が――「本物」が持つ格の違いをまざまざと見せつけられ、ため息すら漏れてしまう。

誰も、何も言えない。

すぐにでも襲いかかりたいはずのルガリア兵達が、一步も動けない。

誰もが、もう気付いている。見た目が変わっても、格好がみすぼらしくなっても――それでも、あの老人の持つ「輝き」をよく知っている。彼が持つ「威厳」の意味するところを分かっている。

混乱し、互いに見つめあってしまう兵士達。かの女剣士・ルーメルも、汗を拭うことすらでき

ない。

老人の正体を誰もが悟る。理屈ではなく、本能で。理由など知らず、肉体がそう告げる。

ナグルファに真っ向から立ち向かう、ボロを纏いし老人。彼の威光が、偉大さが、暖かさが、今までルガリアという大国を支えてきた。

ルガリア王国、第16代目国王・エイムダル＝ロイス＝ルガリア。冠も法衣も纏っていない。しかし彼が「国王」として築き上げた人としての「器」が、その場の全員を制していた。

しかし、同時に理解した面々は混乱してしまう。

ルガリア国王ならば、既にこの部屋の中にいるのだ。ナグルファの後ろで王座に座り、穏やかな中にも冷徹な眼差しを宿したまま、黙している。

この場に王が二人いる――その異常な光景に、頭が追いつかない。

だが彼らの心を、金色の髪を持つ少女が繋ぎ止める。

「ニンバムさんが前に教えてくれた通りですね。『心移し』は完璧じゃない、ってこと。やっぱり、あの人はなんでも知ってますね」

「『心移し』だと？」

ナグルファが眉をしかめる。一度持ち上げた彼の剣は、既に切っ先が下を向いてしまっていた。

リサの横に立つ光一が、どこか意地悪な笑みを浮かべた。

「さすがだよ、リサ。まさか顔のホクロと、前に魔導機関で見つけた肖像画だけで気付くなんてさ」

「おじいちゃん、随分と覚えやすいホクロ持ってたんで、分かりやすかったですよ！」

その一言に、ボロを纏った国王・エイムダルは少し振り向き、優しく笑った。彼の左目の横にある、三角形に配置された三つのホクロ。そして王座に座るもう一人の「王」を見て、兵士達も遂に気付く。

瓜二つだが、たった一点だけ違う場所がある。それはホクロの有無だ。三つのホクロは、ボロを纏った老人しか持っていない。王座に座る国王の顔には、むしろシミひとつないほどに綺麗だ。そう思うと途端、王座に座る「彼」はまるで作り物のような無機質で、不自然な美しさすら感じる。

リサがあの時、地下牢で彼が国王・エイムダルだと気付いたのは、まさに彼女が持つ「人の顔は忘れない」という特技の賜物だった。かつてこの王国に潜り込み、王立魔導機関・テルメナの資料室で見つけた、王の肖像画。克明に描かれたその顔を、リサはしっかりと覚えていたのである。

思えばあの時も、王は檻の中から夢斗とリサに訴えていたのだろう。口を塞がれ、それでも必死に叫び、自身を救ってくれるようもがいていたのだ。

彼自身の――王自らの口から語られた真実を、地下牢で夢斗ら四人は、すでに聞いている。

そして受け取った言葉を持って、ここまで進んで来た。このどこまで「くだらない」いざこざの真相を持って。

ワニ男はどこか呆れたような顔で、目の前に立つナグルファを見る。

「トチ狂うた王様が『不老不死』なんて歪んだ野望に取り憑かれて、『心移し』で肉体を入れ替えようとした——誰もがてっきりそう思っったが、どうやらトチ狂っったのは、あんたらしいな。団長さん？」

全員の視線がナグルファに注がれる。兵士達もすでに武器を下ろし、自身らが所属する歩兵団の団長を見つめた。

夢斗は前を見据え、全身に力が漲るのを感じながら、静かに言う。

「王様自身が、代わりの肉体を作ろうとしたんじゃない。王様を作ったのはあんただ、ナグルファ」

兵士達がざわつく。だが夢斗の言葉に、ナグルファが吠えた。

「馬鹿も大概にしろ、小僧！ 私が王を作っただと？ なんのために。皆の者、賊の戯言になど耳を貸すな！ 荒唐無稽なデタラメだ、くだらん！」

しかし荒ぶる彼の態度に、明らかな心の揺れを感じさせる。夢斗はぎりっと歯を食いしばり、負けずに立ち向かう。

「気に入らなかったんだろ、あんたは。これだけの大国を持ちながら、あくまで他の国への進行もせず現状を守ることしかしない王の態度が。獣人っていう、あんたからすれば忌み嫌う種族と和平を望む、王の存在が。全部邪魔だったんだ。だから、あんたは作った。『王様そっくり』の操り人形を」

これだけのことが起きているにも関わらず、王座に座るもう一人のエイムダルは瞬き一つしない。まるで糸が切れた操り人形だ。今までのような人間としての立ち振る舞いは何も無い。ただ黙して、前を見ているだけである。

この推理を聞き、ついに後方で見ているだけだった女剣士が呟く。

「嘘だ……そんなこと…団長が、王を作っただと？」

そんな彼女に振り返り、リサが言う。はっきりと明確に。どれだけ非情でも、その真実を告げる。

「あなた達、ずっと王様のために戦ってきたみたいですけど、それ間違いです。あの王様はただの人形。全部、あなた方はこの団長さんの思う通り、動いてただけです」

兵士達の動揺が、さらに強くなっていく。

王を信じ、今日まで進む道を疑いすらしなかった、ルガリアの兵士達。ダイヤモンドのような砕けないはずの「純」なる心に、今、まさに明確なヒビが刻まれた。

たまらず、女剣士・ルーメルが声をあげる。

「本当なのですか、団長…その老人が…本物の国王陛下なのですか？」

「うろたえるな、ルーメル。臆したか、逆賊の言葉に揺れ動かされるなど」

なおもシラを切り続けるナグルファ。だがもう、逃がすつもりなどない。真の国王・エイムダルは彼を見据え、吠える。

「観念せい、ナグルファ。貴様の悪行もここまでじゃ。傀儡を使い王国を操ろうとしたことも。そのために『奴』と手を組み、騎士道を捨て去ったことも！」

奴、と言う単語に兵士達がざわめく。夢斗らもこの存在について、既に地下牢で説明を受けて

いた。

ぎりり、と歯噛みする夢斗。他の仲間達も、言い知れない憤りと不安が心を包み込む。

やはりすべての鍵を握るのは、あいつなんだ。

一同の怒りを察し、それでも国王は続けた。

「半年ほど前から、貴様が『奴』と妙な研究を行なっていることは、気づいておったわ。『奴』に焚きつけられたのか、何かの知識を植えつけられたのか——いずれにせよ、その謀略を見抜けなかった自身を恥じておる。貴様を信頼し、貴様の『正義』が真なるものであると疑わなかった己の浅はかさをな」

苦悶の表情を浮かべる国王・エイムダル。その様子からすると、どんな結果であれ団長・ナグルファに全幅の信頼をおいていたのは事実のようだ。それだけに、突きつけられた真実は、彼の心を締め付けるのだろう。

真実を知ったルガリアの兵士達。彼らが困惑する中、夢斗は最後の一手に出る。

「もういいだろう、こんな茶番。全部、これで終わりにしたいんだ。こんな無意味な戦争も。あんたが自作自演してやろうとした国の乗っ取りも——あの『心喰い』との狂った計画全てを」

王は言った。ナグルファは「奴」と出会ってから、変わった、と。

罪なき兵士を殺し、その死を獣人達のせいだと偽装し「心移し」なる秘術で王を作った。しかし、その凶行全てが、ナグルファだけの手によるものではない。

もう一人いるのだ。この事件の鍵を握る、重要な人物が。

ざわつく兵士達の中で、それでも黙って、前を向くルーメル。不安、恐怖が混じるその目は、それでもそこに起こる「真実」を見極めようとしていた。

リサ、光一、キリウ。そして、真の国王・エイムダルが改めて覚悟を決めた。この先に待つ、ある存在との邂逅を。

うなだれ、剣を下ろすナグルファ。動揺の色は無い。あくまで冷静な眼差しのまま、彼は言う。

「やはり……『変わり身』が出来上がった段階で、あなたをこの世から消しておくべきだった。それができなかったのは、私の弱さ。一瞬の情が招いた、結果だ」

ついに放たれた彼の一言に、兵士達からも声があがる。ルーメルが汗を滲ませた拳を握りしめていた。

リサが腕を組んだまま、睨みつける。

「や〜っと認めてくれましたね。なんのためにこんなことしたんですか？ 国を乗っ取るつもりだったんですか」

「そんなこと、まるで興味などないさ。金だの、地位だの、名誉だの、まるで——私はただ、ただ、この国が好きだったのだ」

眉をしかめる一同。ナグルファは剣を握りしめたまま、心情を吐露する。

「国に拾われ、ひたすらに剣の腕を磨いた。あらゆる敵を打ち倒し、国が大きくなるたびに喜びを感じた。忠義を誓ったこの国こそが私の居場所であり、国の発展こそ、私が生涯をかけた望

みだった」

語る彼の表情は、驚くほど穏やかだ。自身の悪行を暴露されたというのに、まるで動じていない。

この男は、まだ死んでいない——そのあまりにも実直な強さに、夢斗らは少し、息を飲む。「その思いに、一点の曇りなし——だからだ。だからこそ、この国はもっと強くならねばならんだ。各地で国が生まれ、強きが弱きを飲み込むこの世界で、比類なき強国としてあり続けなければならぬ。そのためには、今のやり方ではダメなのだ。激動の変化こそが国を育て、逆境こそ真の価値を進化させる。それを乗り越えた先にこそ、国としての真の幸福があるのだ」

異界・クレイドルはまさに戦国時代と言っていい。国が生まれ、そしてどこかで消えていく。異なった思想同士の国々は武器を取り、別の流れを飲み込むべく、日夜どこかで戦争が起こっている。

そんな中で国が生き残るためには、どんな激流にも屈しない「芯」が必要だ。

しかしこの理論に、光一が噛み付いた。

「なんだよそれ...じゃああんた、国を強くするために、わざと平和を手放したのかい？ そんなことのために、獣人達を皆殺しにするのかい！」

「そうやって平穏な世界を繰り返して入れば、襲い来る外敵を退けれるのか？ それだけはない。どれだけ取り締まろうとも、窃盗、強盗、強姦、殺人——国に混ざった心なき人間の手によって、内部であろうともいつだって事件は起こる。いくら潰そうと、ただのイタチごっこだ。この国の持つ平和はあまりにも未熟。故に、自分達自身でいずれ、それを食い潰しかねん」

ナグルファの目に、強さが宿る。

彼の持つ、彼なりの「信念」の強さがうかがえた。たとえ非人道的だったとしても、彼がその先に抱く理想像の強さが、瞳から伝わる。

「歴史はいつだって何かを犠牲にし、前に進んだ者達が掴み取ってきたのだ。我々には国民を守り抜く義務がある。彼らの安息を作り上げるために、この国に必要なのは停滞ではない。その先に待つ進化だ！ その大義のため、何かを切り捨てることを躊躇するつもりなどない！」

夢斗はかつて、この城の中でナグルファと切り結んだ時のことを思い出していた。放たれる剛剣の重み、踏み込みの迅速さ、不意に動じない精神力。全て、間違いなく一級品のそれだ。歴戦の猛者が成し遂げられる確固たる土台。ナグルファの剣の重さは、彼が歩んできた経験があるからこそそのものだ。

それ自体は、素晴らしいことなのだろう。そこに迷いなき信念があるということは、偉大なことなのだろう。

たった一つだけ、彼は踏み込み過ぎたのだ。人としての良心を超え、道徳という線を踏み越えたのである。

「だからこそ誓った、背負ったのだ！ 私が愛したこの国そのものを！ 例え大罪人と罵られようと、その覚悟に一点の曇りもない。どう蔑まれようとも、これこそが私の愛国心——忠義の剣、そのものだ！」

放たれた気迫に、兵士達は完全に気圧されてしまう。ナグルファの所業を知らながらも、彼が

持つブレない芯に刃を取ることが出来ない。

信じてしまおうとしていた。ナグルファが抱いた狂信を、自分達も同様に抱くことこそが正しいことだと思ってしまう。彼らを一瞬で信じさせるだけの揺るぎないものが、その言葉からは感じ取れた。

ざわつく部屋の中で、団長・ナグルファの前に立つ少女が、その「芯」を真横から叩きつける。

「大声と勢いだけでごまかさないでくださいよ。がっかりです」

全員の視線がリサに集まる。国王・エイムダルも振り向き、驚いていた。

リサの瞳はまるで揺らいでいない。腕を組み、むすっとしたまま堂々と言い放つ。

「あなた、見た目も堂々として、剣士としても強いです。でも、やっぱり王国を支えられるだけの『器』はないです」

「なんだと、小娘...」

「国を強くして、他の誰かを潰して、そうして最後に幸せが手に入る？ そんなの、ただの自己満足じゃないですか。あなたはただ、自分達だけが平和ならそれで良い。他の人は知ったこっちゃない。そう言いたいだけでしょ？」

ナグルファという剣士の心を、容赦なく叩くりサ。目の前で吠える小さな反逆者に、負けじとナグルファも切り返す。

「貴様のような小娘には分かるまい、我が大義など。我らの向かおうとする理想など――」

「分かるわけじゃないじゃないですか、そんなの。勝手に獣人達を『切り捨てるもの』って決めて、自分が罪人と呼ばれても良いて予防線まで張って。聞いてれば、わがまま言って、力づくで片付けようとしてるだけじゃないですか」

放った言葉の刃が、まるでリサに通じない。横に立つ少女の姿を、夢斗、光一、キリウも見つめた。

相変わらず、この少女は底抜けに明るく――型破りがゆえに、強い。

「王様を拉致して、その姿を借りて無理矢理に国を従えて。それでいて自分は知らぬ顔で兵士達の前に立って。都合の悪いことは全部隠して、拳句、獣人達になすりつけて。あなた、騎士でもなんでもないです。ましてや、王様になれる人間でもない。あなたはただの悪い人です。それも、とびっきり自分勝手な、わがままな人です！」

彼女の言葉が叩いたのは、ナグルファの心だけではない。夢斗達、国王・エイムダル、そしてそこにいる全ての兵士達だ。

太陽のような少女だ。

彼女の言い分は、もしかしたら子供っぽいと捉えられるかもしれない。時代や人、そこに至るまでの背景を知らず、己の見たものだけで、感情に乗せて放たれる言葉に思われるかもしれない。

だが、それゆえに混じりっ気がない。何かに気を使うことも、無理矢理に他に合わせることもしない。ただ、ただ、唯我独尊を貫き、己の「心」をありのまま叩きつける。

粗暴で、愚直で――しかし、限りなく「純」な心が放つ、真っ直ぐな言葉だ。

だからこそ、聞く者に刺さる。ナグルファは反論できない。言葉を必死に選び、考えているのだろう。

だが、彼の回答が整う前に、リサの言葉を受け止めた夢斗が吠える。彼女からもらった「勇気」に、自分の心を乗せた。

「あんたの理想を理解しに来たんじゃあない。俺らは戦争を止めに来た。やらなくても良い命の奪い合いをすることに『大義』なんて感じない。だからここに来た」

兵士達の心がその一言で動く。今まで揺らいで来た感情が、少しずつだが同じ方向を向きだす。

「汚い部分を誰かに投げて、綺麗な部分だけを見て全てを忘れる——忘れられた人達を『犠牲』なんて簡単な言葉で片付けて欲しくない。迷って、考えて——それでも、そう思うから俺らは、ここまで来れた」

夢斗はふっと、かつての自分をそこに重ねた。そして同時に、あの時失った面々の顔を必死に思い浮かべてみる。残念ながら、光一と桐生以外のクラスメイトの顔は、まだ霞みがかっていた。

消えてしまったものを忘れ、前に進むことはできる。後ろを振り返らず、何も疑わず黙って「未来」を見ていれば、きっと楽なのかもしれない。そこで出会う誰かを知り、何かを愛できれば、そこには確かな一歩が刻まれる。

だがそこまで夢斗は——人間という生き物は、器用ではない。どんなに些細でも、あの時いたクラスの面々を覚えている。当たり前のように過ごしていた日常を、くだらない会話を、体が忘れてはくれない。

それが失われたという事実は、失くなってはくれない。

失ったことを納得させて踏み出した一歩では、きっと「未来」なんて作り上げられないのだろう。穴がぽっかりと開いたままの自分で、何かを掴むことなんて出来ないのだろう。きっとその穴から、全てどこかへ漏れ落ちていってしまうのかもしれない。

ぎゅっと握りしめた拳が熱い。皮膚に食い込む爪が、張り詰めた筋肉が痛い。

そんなはっきりとした感覚に自身を奮い立たせ、言い放つ。

「あいつは、どこにいるんだ。あんたをこの道に踏み込ませた、あいつは——『心喰い』はどこだ？」

核心に迫る一言に、息を飲む一同。

ナグルファはすぐには答えない。ただ黙したまま少し目線を伏せ、何かを考えている。

静寂が部屋を包み、空気が張り詰めた。

リサも、光一も、キリウも、国王も——全員が彼の答えを待つ。

やがてナグルファは汗ひとつ流さず、なんら普段と変わらない穏やかな顔で、前を向いた。

「『オーバー』か、やはりお前らは、奇妙な存在だ。『光』と『闇』を我らにもたらず。奴が私にとっての光。そして貴様らが——闇だったというわけか」

その言葉の真意に気付く前に、一同の頭上から聞き覚えのある無機質な声が響いた。

「いやあ、正確には彼らも『光』であり『闇』なんだと思うがね。ただ、この光は我々にはまぶ

しすぎる。影すら消してしまうそれはもはや閃光。一種の狂気だ」

誰もが一斉にその黒い姿を見上げ、そして絶句した。夢斗らの全身に、ざわり、という嫌な感触が走る。

ただ姿を見ただけで、心にまとわりつく冷気。

あの時からなにも変わらない。陽光を背負い、限りない白の中にいるのに、肉体から湧き出る「黒」が周囲の大気すら歪めているようだ。

拳を握りしめる一同。

じつとりと濡れる汗の感触に、ざわりと心が揺らいだ。

広間の壁、その高い位置にあるステンドグラスの前に「奴」はいた。

あの夜、夢斗らの前に姿を現した時と同様、全身が黒い。革製のぴったりとした衣装を身にまとい、顔は仮面で隠している。

見えない力で浮かんだまま、いつの間にか奴は一同を見下ろしていた。

心喰い――事件を引き起こした元凶であり、ナグルファを狂気に走らせた黒幕。

その登場に兵士達がざわめいた。

自身に湧き上がった戸惑いを拭うように、キリウは奴を睨みつけ、吠えた。

「おーおー、大層な登場の仕方してくれるわ、やっこさん。おい、降りてこいや！ 全ての黒幕さんよお！ その趣味の悪い仮面、ひっぺがしたるわ！」

背負っていた斧を担ぎ、構える。リサ、光一も身構え、武器を握りしめた。

「出ましたね、もう逃げられないですよ。格好と同じで、心の奥まで真っ黒なその本性、暴いてやります！」

「お前らのせいで...いろんな人が傷ついて、悲しんでるんだ。悪いとは思わないよ。徹底的にやってみよう！」

荒ぶる仲間達の中、夢斗もその気持ちは変わらない。一步を踏み出し、頭上の黒衣に目掛けて吠える。

「もう絶対に逃がしなにかしない。必ず、どこまでも追いついてやる。今日で、このくだらない戦いも終わりだ！」

ありったけの敵意をぶつけられながらも、黒衣の仮面・心喰いはまるで動じない。宙に浮かんだまま、静かに、無機質な声で言い放つ。

「その『心』、実に興味深い。あれだけの逆境と劣勢をぶつけられても、全てをはねのけ強引に押し切ってまで、ここまで来て見せた。その爆発力に、興味が湧いて仕方がないんだ」

心喰いはなおも動じず、腕を掲げる。すると彼の真横の空間に、なにやら布に包まれた大きな物体が出現した。息を飲む一同。警戒する夢斗らに、心喰いは言い放つ。

「もっと見せてくれ、お前達の心の炎を。人が持つ不確かな力を」

ふっと手を下げる黒衣の仮面。浮いていた物体が地面へと落下し、音と地響きを立てた。つんざくような金属音に身構えてしまう。

すぐ隣に落ちたそれに、ナグルファは少しだけ視線を向ける。そして、上空にいる「共謀者」に告げた。

「なるほど。こうなっては、全てを『ゼロ』としろ、ということか」

「今更、言い訳をしてもしょうがないだろう。前向きに考えないと。これで正々堂々、諸々を試すことができるんだから」

ナグルファは心喰いの言葉に「ふんっ」と息を吐き捨て、彼が落とした何かを、布の中から取り出した。姿を現したそれに夢斗らは息を飲む。

巨大な物体だった。白い金属の胴体は「柄」と巨大な「刀身」から構成されている。一見す

ると、それは大きな剣だ。しかし柄と刃の間には、なにやらごちゃごちゃと入り組んだ「機巧」が取り付けられており、エンジンのようにも見える。

ナグルファは自身の一太刀を捨て、見慣れない巨大な剣を代わりに両手で握りしめる。彼は迷うことなく、渾身の力を込めた。

瞬間、剣が轟音を立てて「稼働」する。ドルルルル、という激しい音が静かだった部屋の空気を一気にかき回した。地面を伝わってくる振動に、誰もが絶句する。

ナグルファの持つ剣の刀身部分で、無数の小さな刃が並び、高速で移動していた。一本一本の動きが速すぎて、帯のようにすら見える。風を起こし駆動する刃を見て、夢斗が声をあげた。

「なんだ、あれ……あれってまさか…『オーバーテクノロジー』？」

直感的にその事実を悟った。白い金属の胴体を持ち、赤い光を放ちながらひとりで動く刃。それはまるで、現実世界でいう「チェーンソー」だ。小さな刃を電気の力で駆動させることで、対象を切り刻む道具である。

ドドド、と地響きをつ続ける中、ナグルファは再びその表情に狂気とも取れる気迫を乗せ、言い放った。

「使えるものは、すべて使う。我らの輝かしき『未来』を切り開くのに、手段など選ばぬ。それに抗うと言うのなら、全て罪人として切り捨てる！！」

瞬間、ナグルファは振り返り、王座に座っている傀儡の王目掛けて、その刃を薙ぎ払った。おぞましく、この上なく不快な音と共に、偽の国王・エイムダルの胴体が真っ二つに切断された。

悲鳴をあげるリサ。目を見開き、息を飲む光一、キリウ。取り囲む兵士達からも、声が上がった。

血を撒き散らし、ぼたりと地面に落ちる偽の王。彼の体はすぐさまドロドロに崩れ、ただの肉の塊に変わってしまった。これが「心移し」で作られた、肉人形の末路なのだろうか。

血の海を作り上げ赤く染まった王座を背景に、彼は荒ぶる剣を持ち上げ、吠える。

「来い！ 違法者でも、反逆者でも構わん。立ちはだかると言うなら、すべからく切り刻む！！」

心を振り切り、ついに騎士としての体裁すら捨て、殺戮者としての本性をあらわにしたナグルファ。

その異様な殺気に兵士達は声をあげ、退いてしまう。誰も抗うことができない。目の前で暴れようとしている怪物に、なすすべがないのだ。

夢斗達にだって、異常なまでの「圧」が叩き込まれ、恐怖となって心を締め付けていた。とめどなく汗が溢れ、肉体が縛られる。分かってはいたはずなのに、いざ対峙するとなると、やはり不安や戸惑いが消えない。

それでも彼らに、戦わないという選択肢などない。

一步を高速で踏み込む、夢斗。ブーツの力で急加速し、ナグルファではなく、横に立つ国王・エイムダルに向かって跳ぶ。まずは彼を抱きかかえ、一気に離れた壁際まで移動した。

老人は己が身に起こった出来事が理解できていない。しかし、彼に説明している暇などなかった。安全圏にひとまず彼を逃し、再び大地を蹴る。今度は一気に、ナグルファ目掛けて突進

した。

剣士の卓越した目が、その高速移動すら捉える。巨大な剣を迷うことなく、荒々しく向かってくる夢斗に振り下ろした。落ちてくる無数の「牙」を見据え、急停止し、方向を変える夢斗。

地面に落ちた剣は瞬く間に石畳を削り取り、バラバラに食い散らした。凄まじい光景である。舞い散る火花と瓦礫が、まるで飛沫のように視界を染める。

とても至近距離に入れない。巨大なチェーンソーの圏内に入って一撃でも貰えば、バラバラにされてしまう。夢斗は目の前で暴れる刃の群れに、息を飲んでしまった。

だが、その一瞬の隙を光一がつく。もはや実弾など使わない。ハナから瓶の中の「水」を使い、変幻自在の矢を撃ち放った。湾曲した軌道を描き、数発の「飛び魚」がナグルファを襲う。

騎士は慌てず、身にまとっていたマントを翻すことで、己が身を隠してしまう。水の矢は展開された布に当たり、空中で砕けてしまった。

「弱い弱い弱い弱い！ 弱すぎるわ、雑魚どもが！」

マントを捨て、狂気の瞳を光一に向けるナグルファ。だが、前を向いて息を飲む。

すでに一瞬の隙をついて、彼女が跳んでいた。

渾身の力を込め、腕を振り下ろすリサ。宙に作り上げた巨大な「槍」がナグルファ目掛けて飛ぶ。向かってきた魔法の槍にナグルファは刃をぶつけ、流した。ガリガリと火花を立てて軌道を変える。槍は後方へと跳び、壁にぶつかって砕き割った。

「ま、だ、ま、だああああ！」

宙にいる間に、さらに腕を振りぬくりサ。今度はお得意の「ハンマー」を生み出し、思い切り真上から振り下ろした。受け止めたナグルファの体が轟音と共に沈む。巨大な力同士がぶつかり、火花を散らしてせめぎあう。

「ふんっ！！」

ナグルファは渾身の力で刃を押し込み、ハンマーを砕いてしまう。魔法の力ですら、彼の巨体を揺らがすことはできない。縦にまっすぐ刃を振り下ろし、リサを襲う。

真横に跳び、それを避けるリサ。間一髪、凶刃は空を切り、その先にある地面をごっそりとえぐり飛ばす。恐ろしい威力だ。当たった箇所が跡形もなく消し飛んでいる。

膝をつき、着地するリサ。至近距離のナグルファと目が合い、息を飲む。迷うことなどなく、男は刃を再び持ち上げた。

だが、彼の真横から「火の玉」が叩き込まれ、全身を炎が包む。流石にこれは予想外だったのだろう。キリウが放った火球が、炸裂していた。

「ぐっ、ぬううう！！」

唸り声を上げるナグルファに、夢斗らは容赦しない。揺らぐ彼の顔面めがけて、力を解放した光一が攻め立てる。限界を超えた彼の弓から、雨あられのような水の矢が放たれた。

岩石が叩き込まれるような衝撃が、無数にナグルファの上半身を襲う。倒れないように踏ん張るも、そこにさらに次の一手が叩き込まれた。

大地を蹴り、夢斗が駆ける。

「おおおおおお！！」

雄叫びと共に、ナグルファの胴体目掛けて蹴り込んだ。もはや人を蹴る音ではない。どごん、と言う衝撃音が炎すら吹き飛ばし、ナグルファの巨体を後方へ吹き飛ばす。

会心の一撃を予感したが、ナグルファは地面を擦って、耐えた。その強固な肉体に四人は絶句する。

炎と水を振り払い、歩兵団長はなおも吠えた。

「その程度で何かを止めるなど、粋がるなよ！！」

言葉に乗せられる狂気の波動。それに負けじと四人は武器に力を込め、前に出た。

人知を超えた戦いが、王座の間で繰り広げられる。飛び交う数多の力に、屈強なはずの兵士達は何もできず、ただそれを見ていることしかできない。反逆者として城に乗り込んできたあの四人は、各々の肉体と武器のみを頼りに、ひたすら団長・ナグルファに向かっていく。

目にも留まらぬ速さで動き、蹴りを放つ夢斗。魔力で武器を作り上げ、ぶつけるリサ。水を操り、矢として打ち込む光一。巨大な斧と炎の力で荒ぶるキリウ。

どれも極上の戦力だ。どれ一つとして、兵士達は弱いとは到底思えない。

だが、その全てをたった一人で、団長・ナグルファは受け止め続ける。攻撃を受けてもなんら怯まず、むしろ堂々と斬り伏せ、叩き落とす。刃の一撃は炸裂しないが、それでも時には殴り、時には蹴り、時には掴んで投げることで、彼らを寄せ付けない。

目の前に展開される戦いを、先頭で見つめる女剣士・ルーメル。

わなわなと震え、動悸がおさまらない。

自分は一体、何を見ているのだ――今まで「王」だと思っていた者は既にその姿をたもたず、ただの肉塊になってしまっている。真実を突きつけられたナグルファは、共謀者から渡された「未知の武器」を駆り、鬼気迫る姿で立ち向かっている。上空にいるあの黒い影は、今まで頑なに信じていた「正義」が偽りだった、とその身で示しているのだ。

かすかに、涙すら浮かんでいた。人一倍、自身の剣に誇りを持ち、今日まで歩んできたルーメルにとって、全てが崩れ落ちたこの光景は悪夢以外の何物でもない。

しかし同時に、やはりルーメルは脳裏に浮かび、景色を遮るように差し込まれるある光景に息を飲む。

「オーバー」であるあの少年と出会い、曲がることのない力を叩きつけられたあの瞬間から、止まることはない。次から次へと沸き上がり、脳内を飛び交う覚えのない「記憶」。

私は誰だ。私は何だ。私はどこからきた。私は――何を知っている。

また一つ、ナグルファが音を立てて地面を削り飛ばす。夢斗はすんでのところまで後ろに跳び、それを回避した。

ゼエゼエと肩で息をする四人。攻防によって服は破れ、擦り傷、切り傷もそこここに見える。致命傷こそ負っていないが、確実に疲労と痛みが肉体に刻まれていた。

対して、ナグルファもその姿はボロボロだ。しかし彼自身はまるで動じず、剣をなおも持ち上げ、前を向いている。

たまらず、夢斗が呟く。

「さっすが親玉。今までとはまるで格が違う」

キリウがこれには、ペッと唾を吐き捨て、悪態をついた。

「実力は化物やって噂、本物やったようやな。クッソ、勘弁やで」

息を整える一同に、ナグルファは静かに言う。

「貴様らとは抱いた覚悟が違うのだ。感情論に任せ、先も見据えずに振るう刃など、老木の枝にも劣るわ」

だが負けじと光一、リサも言い返す。たとえ少しでも、目の前のこの存在に同調などしたくない。

「まったく、良く言うよ、本当にさ！ あくまで自分は正義の味方って言い張るんだね」

「じゃあ、何度だって言ってやりますよ。あなたは悪者です！ 身勝手に、ずるくて、汚い心を持った大人です！ それだけは、なにされようが曲げる気なんてないですから！」

仲間達の声が心を押してくれる。どんな劣勢でも、ここまで一緒に歩いてきてくれた皆の声が体に染み込み、心地良い。だからこそ、夢斗もまだ前を向いていられる。

「あんたがそれを覚悟だって言うなら、構わないさ。俺らだって俺らなりに、苦しんで、悩んで、ここまで来たんだ。走って来た道が間違いじゃないってことくらい、自分達で証明してみせる！」

腰を落とし、身構える夢斗。だが、真っ向からナグルファはそれを睨み返す。

「良いだろう。折れるものなら折ってみるがいい。正義こそが不滅。貴様らの抱いた戯言など、この瓦礫のそれと同じなんだよ！」

あくまで全てを否定し、再び踏み込んでくるナグルファ。持ち上げた駆動刃を、あらん限りの力で夢斗目掛けて振り下ろしてくる。

避けなくては――そう判断したが足がもつれてしまう。今までの攻防が予想以上に体力を奪い、肉体の自由を乱す。

歯を食いしばり、落ちてくる剣を見据えた。スローな視界の中で轟音を立てる刃と、狂気に満ちたナグルファが見えた。

その視界の中に、ふわりと鮮やかに舞う深緑が混じる。

「なっ――」

声をあげたのは夢斗だけではない。剣を振り下ろした、ナグルファも驚愕していた。

落ちて来た剛剣に自身の長剣をぶつけて、女剣士は受け止めた。押しつぶされそうになりながらも歯を食いしばり、耐える。頭のすぐ前で、ガリガリと音を立てて火花が散る。

ルーメルは渾身の力で、ナグルファの一撃を弾き飛ばした。だが、予想以上の衝撃にがくりと膝をついてしまう。

夢斗だけでなく皆が驚き、彼女を見つめる。

「あんた...なんで...」

「こんな...こんなのは、正義ではない...」

彼女のつぶやきに、ナグルファは「なに？」と不快な表情を浮かべた。そんな団長に、顔をあげてルーメルが問いかける。

「団長、教えてください！ 本当に、あなたは王を捕らえ、あまつさえ王国中の人々をあざむこ

うとしたのですか!？」

「なにを聞いていたのだ、ルーメル。あざむくなど勘違いも甚だしい。全てはこの国の未来のためだ」

「未来...罪なき者を足場とし、上り詰めるその先が未来だと言うのですか、あなたは！」

戸惑いをありったけの言葉でぶつけるルーメル。彼女はまだ抗いたいのだ。この運命に。

自身が信じていた者を信じれない———ただそんな自分を「信じたくはない」だけだ。

狼狽するルーメルに向かって、ナグルファはまた冷酷な眼差しで言っただけのける。

「貴様は、もう少し聡いと思っていたのだがな。どこまでいったところで、女は女。生まれ持った甘さは消えん」

放たれた一言に絶句する女剣士。毅然とした強さは、もはや彼女の顔にはない。戸惑い、絶望の淵に佇む姿に、夢斗らもなにも言えない。

「死にかけて森から帰還した貴様を、一時は優れた剣士としての力量から重宝してやったが.....我が大義を理解できぬなら、我らが王国を守る剣としては不要。貴様も、その愚かな反逆者らと、なにも変わらん」

ナグルファの言葉を聞き、目を見開くルーメル。

なんだ、それは———たまらず、問いかけなおした。

「森から...どういうことですか？ 私が、死にかけていた...？」

「覚えていないと言うのか？ 一週間も連絡を断ち、死にかけて帰還したあの出来事を。受けた恩すら忘れるとは、どこまで愚鈍なのだ、貴様は」

嘲笑されるも、ルーメルはまるで意に介さない。いや、もはやナグルファの笑い声など、まるで聞こえていないのだ。

バツと、脳内に映像が弾ける。

血濡れで歩く森。手には「彼女」から授かった剣だけが握られている。杖のようにそれを使い、自身の足で外を目指す。

雨が降っていた。ぬかるんだ地面に足を取られ、ふらつき、こけてしまった。すぐ目の前の水溜りには、見覚えのない「黒髪の少女」が写っている。

いや、自分は彼女を知っている———揺らぐ水面でこちらを見つめ、不安げにしている彼女の名を。

自身を救ってくれた女剣士から剣を授かり、森の外を目指す、力無き「異邦者」の少女を。

ああ、そんな———汗も涙も止め、ただ目を見開いて前を向くルーメル。しかし彼女の感情など関係なしに、ナグルファは大剣を振り上げた。

「錆びた剣など、用はない。消え去れ、邪魔だ！」

躊躇することなく剣が宙を走り、女剣士の頭目掛けて落ちる。向かってくる圧に目を見開き、息を飲むルーメル。

もはや、回避行動をとることすらできない。駆け抜ける無数の刃が、すぐ目の前に迫る。

だが、ルーメルの体は切り裂かれず、高速で真横に吹き飛んだ。いや、正確には夢斗が彼女を抱きかかえ、刃の軌道上から飛び退く。すんでのところで、荒ぶる剣の直撃を避けた。

「あっぶねえ、間一髪！」

夢斗はリサ達の脇に、ルーメルを下ろす。汗をぬぐい、大きく息を吐いて前を向きなおした。ナグルファは地面を剣の力を使って削り飛ばし、振り向く。

「小賢しい...だが素晴らしいな、この剣は。どんな素人でも平等に一瞬千斬を身に付けることができる。一人の剣士を育て上げる手間暇より、遥かに効率的。技術こそ力であり、新たな時代を切り開くもの」

ルーメルなど二の次で、自身が手にした「力」に酔いしれるナグルファ。つくづく狂っている。夢斗らは齒噛みし、前を見た。

しかし、すぐ横でへたりこむルーメルは、不思議そうに夢斗の顔を見上げていた。

「お前...なんで.....」

一時は刃を交え、命まで奪おうとした相手に投げかけた疑問。それは少年の、なんの飾り気もない一言で返される。

「悪いことは言わない、逃げてくれ。残念なのは分かるけど、無理に傷つく必要なんかないさ。俺らみたいな『馬鹿』は放っておけばいい。『正義』だの『使命』だのより、自分を大切にしてくれ」

それだけ言い放ち、前を向く夢斗。

座り込んだまま見上げた彼の顔に、ルーメルはまた一つ、鼓動が跳ね上がる。

ああ、そうだったのだな。私は、本当は一一瞬間、夢斗らが再び攻勢に出る。力と力がぶつかり合い、大気が何度も揺れた。雄叫びが上がり、何度吹き飛ばされても、夢斗らは諦めずに食らいつく。

その中央でもはや笑みすら浮かべ、ナグルファが吠える。

「なにも知らないガキどもが、青臭い正義感で、大義の前に気安く立ち足かかるんじゃないぞ。異世界から来たか知らないが、ここは戦場。意を示すものこそが正義。力を押し通す者こそ真！」

「さっきから、大義大義うっせえな！ 戦場に変えてんのはあんただろう。それに俺ら、ただの『高校生』なんだ、青臭くて結構！！」

渾身の力で蹴り込む夢斗。その一撃が巻き起こした突風が、呆然と見つめるルーメルの頬を撫でる。

高校生一一一一その一言が、ルーメルの心の鍵を開けた。彼女の脳裏に浮かぶ景色が、映像が、思い出が、全て一点へと結ばれる。

震えが止まり、汗が止まった。身体中の血液が、確かな暖かさを肉体にもたらしてくれる。

思い出した、私は一一一一見つめる先でまた一撃、夢斗がナグルファの蹴りを受けて倒れた。

「ぐっは！」

「夢斗さん！」

リサが駆け寄り、起こす。ナグルファはゆっくりと近付きながら、こちらを睨みつけていた。

そんな剣士に、頭上から傍観していた心喰いが告げる。

「ナグルファ。もたもたしていると、援軍が来るかもしれない。できるだけ早めに、ケリをつけ

てくれ」

「分かっている、そう急かすな。もとより、そのつもりなのだ」

ゆらりと、剣を持ち上げるナグルファ。彼は渾身の力を込め、全身全霊の踏み込みを持って、夢斗とリサに切り込むつもりだ。

光一が弓を構え、キリウが炎を生み出す。しかし、間に合わない。この距離からではナグルファの方が早い。

盾を展開しようと、力を放つリサ。ナグルファは狂気の笑みを浮かべたまま、一步を踏み出す。

どんな力だろうが、最大出力の剣で砕き割る。その奥に隠れている二人の肉と骨ごと、粉微塵に切り刻んでくれる。

確実な勝利、そこにある確実な「殺し」を予感し、ナグルファの全身が躍った。

剣の音が、大気を震わす。

風を切るような、鮮やかな音。それは今まで聞いていたような、あの荒々しい駆動音とはまるで違っていた。

夢斗達、四人だけではない。兵士達、そしてナグルファと心喰いも息を飲んでいて。

剣を持ち上げたままのナグルファの口から、声が漏れる。

「貴様……」

瞬間、ナグルファの右腕が切り裂かれ、真っ赤な血が吹き出す。がくりと体勢を崩し、揺らぐ剣士。

そのすぐ傍に、もう一人の剣士がいる。一步の踏み込みにて真横を駆け抜け、愛用の長剣で見事に腕だけを切り裂いた、女剣士。彼女はしっかりと踏み抜き、剣を振り抜いたまま、静止していた。

そんな中、ルーメルは剣を下ろし、振り返る。

「こんな時ですら頑固なんだな、お前は。だがどんな理由にせよ、暴力は感心せんで、諸星」
思わぬ一言に夢斗だけでなく、全員が目を見開いた。

「え…はっ、俺え？」

「それに小泉と、桐生も。もしクラスでやらかしたなら、ただちに報告するところだ」

続けて光一が「ええ!？」と目を見開く。キリウこと桐生も目を見開き、息を飲む、

ルーメルの態度が変わった。それは急に生き生きとした、というだけではない。夢斗、光一、桐生の名を呼ぶ際のイントネーションすら、今までと違う。どこか言葉に迷いが無い。

今、何と言ったんだ——整った顔立ちと、剣士として毅然とした態度を貫く、王国歩兵団の副団長・ルーメル。そんな異界の剣士の口から、事もあろうに夢斗らの「苗字」と「クラス」という言葉が発せられたのだ。

一気に混乱してしまう一同。夢斗はすぐ横にいるリサ、そして離れた位置で口を開けている光一、キリウを見つめる。

ナグルファは傷を抑えてふらつき、ルーメルに向き直る。

「小賢しい真似を…徹底的に恩を仇で返すのか、貴様」

強い口調で言い放つナグルファ。しかし、ルーメルは全くもって動じない。剣を握りしめたまま、前を向く。

「あなた方に救ってもらったことは、感謝している。あのままだったら、私はきっと森でのたれ死んでいたろう。襲い来る無数の怪物を退ける手段は、私にはなかった。『彼女』がいなければ、私はこうしてここにいない」

どこか、悲しげな表情を浮かべるルーメル。しかし、その真意がまるで分からない。ナグルファは傷口を押さえながら、問いかけた。

「なんだ？ 貴様、何をたわけたことを言っている」

「ああ、すまない。確かに、こんなことを言っても、あなた達には分からないだろう。私自身、全てを思い出した今、驚いているのだからな。失敬した」

圧倒的な武力を前にしても、ルーメルの態度はまるで揺らがない。それどころか、妙な余裕すら見える。彼女は軽く頭を下げ、前を向きなおす。

何があったのだ、彼女に――ナグルファだけでなく、その場の全員がわけがわからず、彼女を見ていた。

先程までと、まるで別人だ。姿形は何も変わらない。エルフ族特有のすらっとした手足、美しい白い肌。尖った耳と、深緑の長髪。全て、見覚えのある女剣士の姿だ。

しかし、明らかに何かが違う。この一瞬で、彼女の中で何かが変わったのだ。

息を飲み、じっとルーメルの言葉を待つ。彼女は少しだけ考えた後、目の前のナグルファに向けて。そしてこの場の誰しもに向けて、強く言う。

「ルガリア王国、歩兵団・副団長。女剣士ルーメルは―――既に死んでいる」

ざわり、と部屋中から声が上がった。夢斗、リサ、光一、キリウも言葉を失う。国王・エイムダルも壁際に身を寄せ「なんと」と呟く。

衝撃を受けたのはナグルファも同様だったのだろう。剣を握りしめてはいるが、まるで動けず、目を細めた。

「何を...言っているのだ.....戯言――」

「信じられないかもしれないが、真実だ。数ヶ月前、森で『私』を救い、女剣士・ルーメルはこの世を去った。彼女は私を身をていして守り、事切れてしまったのだ」

悲しみが彼女の目に宿る。きっとそこには、彼女が言う「ルーメル」という女性の最後が思い描かれているのだろう。

誰しもが、その事実を受け止めきれない。なぜなら、あまりにも彼女の言葉が、この場に広がる光景に矛盾しているからだ。

思わず叫んだのは、弓をおろしてしまった、光一だ。

「ちょ、ちょっと待ってよ！ ルーメルは死んだって...ここにいるじゃんか！」

その通りなのだ。夢斗らは息を飲み、その回答を待つ。

じゃあ、ここにいるこの女性は、誰なのだ？ 誰しもが女剣士として、そして副団長として今日まで慕い、疑うことなく接してきた彼女は誰なのだ。

その答えは、彼女自身がしっかりと全員に告げる。

「数ヶ月前、この世界に突然放り出され、無我夢中で私は森の中を逃げ惑った。共に巻き込まれた皆ともはぐれ、右も左も分からないまま、見ず知らずの土地を歩き続けていた。そんな中、私は森の中で彼女にルーメルに出会った」

思わず夢斗は声をあげそうになるが、グツとこらえ、彼女の言葉を待つ。

「戸惑い、言葉すら分からない私を、彼女はそれでも守ってくれた。私を救おうとしてくれていた。だが彼女はすでに、深手を負っていた。森に潜む数多の猛獣と、やりあった後だったのだろう...」

拳を握りしめるルーメル。もとい「謎の女性」。彼女はそれでも、言葉は止めない。

どれだけ辛くても伝えなくてはいけない。それが、託された「私」の使命だから。

「旅の中で息絶え、彼女から私は『剣』を託された。絶望の中、この一振りのみを抱え、必死に歩き続けること数日――その頃からだ、私の肉体に変化が起こったのは」

「変化？」

思わず声を上げたりサに少しだけ振り向き、頷くルーメル。まるで今までのような邪見さはない。

「髪の色が、耳の形が、肌の質が、声が一――すべてが少しずつ元の姿を捨て去り、やがてある一つの形を成し遂げていった。私の姿が完全に変貌したその時、私の『記憶』までもが、『彼女』へとすり替わっていった」

この言葉に、誰よりも反応してしまったのは光一だ。

なぜなら彼もまた、それに近い境遇で「その姿」になったのである。

「見た目と記憶がすり替わる――じゃ、じゃあ！」

「どういうことなのかは、私にも分からない。『別世界』から迷い込んだ私が、なぜこんなことになったのか――だがいずれにせよ、この姿こそが事実だ。今ならばっきりと思い出せる。女剣士・ルーメルとしての自分も。そして、かつての学生だった自分も」

どくん、と全員の鼓動が高鳴った。夢斗は立ち上がり、目を見開いて問う。

「学生.....あなた、誰だ？ いったい...誰なんだ？」

ルーメルがこちらに、眼差しを向けた。

凜と立ち、微笑むその姿に、かつての弱弱しい姿はどこにもない。不可解であっても自身を受け止め、自分の現状を知る。だからこそ、放てる女性としての「光」がそこにはある。

そのまなざしを見た瞬間、夢斗、光一、キリウの脳裏に、ある情景が浮かぶ。

それは二人がこちらの世界で初めて出会った、あの時と同様の現象だった。

閉じていた「記憶」の扉が一気に開き、そこに眠っていた大量の光景が溢れ出す。

夢斗と光一とキリウが一――かつて長い時を共にした三人が、忘れていた互いを思い出した、あの時と同様に。

個性派ぞろいのかつての「1-A」を、先陣でまとめ続けていた、一人の女子生徒。

短い黒髪の下できっと吊り上がった、毅然とした強さを宿した眼差しが彼女の特徴であった。規律に厳しく、しかし口うるさくも面倒見の良い彼女の存在に、誰もが盤石の信頼を置いていた

クラスの学級委員という居場所に責任を抱き、周りの痛みを全て受け止めようとしてしまう。強く、しかしどこか弱い彼女だからこそ、誰もが嫌味も何も感じず、ただ純粋に信頼していたのだろう。

そんなかつての「彼女」が姿も形も変わり、いまや教科書ではなく「剣」を携えた、今に繋がる。

まるで違う姿になってしまった。それでもしっかりと前を見据える、その眼差しだけが変わらない。

忘れていたはずの名が、しっかりと戻ってくる。

夢斗らが口走る前に、ルーメルは―――否、かつての「彼女」が剣を構え、吠えた。「帝凜高等学校、1のA。出席番号7番。1年の学級委員長を務めさせてもらっている。金城 しおりールーメルとなる前の、私の名だ」

かつての彼女を知る夢斗らだけでなく、リサ、国王・エイムダル、ナグルファ、そして兵士達。全員が息をのんだ。

夢斗がわなわなと震え、口を開く。

「ちょっと待ってくれ...金城.....だっていうのか、お前！」

「うろたえるのも無理はないな。私自身、自分に起こったことを、うまく言い表せない。だが混乱していても、他人に『お前』というのはどうかと思うぞ、諸星」

透き通った波長でたしなめられ、思わず「えっ」とうろたえてしまう。その女性でありながらはっきりとした物言い、まるでぶれない正論こそ、思い出の中の「彼女」とかぶる。

リサが立ち尽くしたまま、一同の顔を交互に眺めながら、問いかけた。

「金城 しおりさん――あなたも、夢斗さんの『元クラスメイト』なんですか？」

「ああ。まだ理解はできていないが、しっかりとと言える。それだけは絶対に間違っていない」

困惑し、身動き一つとれない一同。光一が全員の戸惑いを代弁するかのよう、吠えた。

「な、なんだよそれ！ ルーメルって人の記憶を...金城さんが、受け継いだってこと？」

「どういうこと、なんだろうな。だが、これが――『彼女』から受け取ったこの剣のせいだろうか。これに宿った意思が、こういう結果をもたらしたのだろうか...」

戸惑いつつ、それでも光一とキリウはどこか身に覚えがある。

こちらの世界に来てすぐ、光一はレジスタンスの獣人達に拾われた。最初は言葉すら分からなかった彼らと接するうち、徐々に変化を始めた肉体。体毛が全身に生え、しっぽが生え、牙が生えた。

ただの高校生だった光一は、知らず知らずのうち、少しずつだがクレイドルに「染まって」いったのだ。やがて、その姿は完全な獣人となり、こちらの言葉を理解できるまでになった。

キリウもまた、拾われた相手が行商ただただで、その変化自体は同様であった。

女子生徒・金城 しおりの身に起こった変化も、それと同等なのかもしれない。エルフの女剣士・ルーメルに命を救われ、彼女から託された「剣」が、しおりの肉体、精神、記憶をむしばみ、やがて染め上げてしまったのだろう。

結果、彼女は今日まで「金城 しおり」ではなく「女剣士・ルーメル」として、人生を歩んで

きてしまった。

この一言に、ナグルファが笑い声をあげた。

「なるほどなるほど。声も姿も記憶すらも、まったく同じ『別物』だったというわけか。では、出来損ないなわけだ。貴様は我が大志を引き継いだ、あの優秀な女剣士などではないのだからな！」

剣を持ち上げ、構えるナグルファ。彼の照準は、目の前のルーメルことしおりに向いていた。「従順で、我らが正義を執行していた女剣士はどこにもいない。まがい物など、興味はないのだ。早々に消え去れい！」

再び踏み込み、動き出すナグルファ。巨大な駆動刃を、全身の力で振り下ろしてくる。緊張がゆるんでしまった一同は、再動する凶刃に対応できない。

叫び声を上げそうになる夢斗、光一、キリウ。

そんな中、たった一人だけ「己」を取り戻した女剣士が前を向く。

剣を跳ね上げるルーメル。銀の剣閃が落ちてくる巨大な刃にぶつかる。しかし、彼女は受け止めるということはしない。あくまで向かってくる刃に「浴える」ように繊細な動きで剣を操った。

いままでとは鋼の音が違う。しゃおん、という甲高い声が一同の鼓膜を震わした。これまでの攻防とは違う音色に、誰もが息をのむ。

ルーメルは動かず、そのまま肩から先の動きだけで刃を流す。火花が散り、滑るように軌道を反らした。

駆動した刃はルーメルの体を捉え損ね、真横の地面へと突き刺さり、砕く。思いがけない手ごたえに、ナグルファも目を見開いた。

「小癩なっ！」

再び力を込め、刃を切り返す。例え勢いはなくても「オーバーテクノロジー」の力が無数の刃を走らせ、当てるだけで対象を切断してしまう。まさにそれは「チェーンソー」のそれだ。剣術を学ぶ必要など、何もない。ただ荒々しく、まっすぐ対象にぶつける事で、駆ける刃が切断してくれる。腕力さえあれば、誰しもが確実な「破壊者」になれる殺戮兵器だ。

だが真横に荒ぶる刃が薙ぎ払われた時、すでにルーメルはそこにはいなかった。一步、石畳を蹴って真後ろに跳ぶ。軽やかな身のこなしが、一気に彼女の体を射程距離外へと退避させた。

空を切った一撃に、ナグルファを含む全員が息を飲む。しかし真に一同が驚くのは、この次の一手だった。

再び大地を蹴り、一気に前に出るルーメル。高速で踏み込む彼女に、ナグルファの刃は間に合わない。長剣が走り、しかし小さな動きで団長の左手の甲を切り裂いた。

「ぐう！？」

ついに顔をしかめ、動揺するナグルファ。切り裂こうと前を見たが、すでにルーメルはいない。身をひるがえして脇をすり抜け、距離をとって構えている。

速すぎる――今までもルーメルの剣技は、その長剣という得物の愚鈍さを感じさせない、軽やかなものであった。相手の攻撃を見極め、確実に踏み込み、距離を詰めて叩き斬る。女性とは思

えないほどの「動」の剣こそが、彼女の持ち味だった。

しかし先程の動きはナグルファ自身、初めて見る。相手の攻撃を弾いたり受け止めたりするのではなく、力に「合流」して流す。最小限の動きで最大限の回避を成し遂げる「静」の剣だ。

怖気付く事なく、斬りかかるナグルファ。何度も駆動刃が空を裂き、その先の石畳をえぐる。一撃でも触れれば致命傷となり得る猛撃が、縦横無尽にルーメルに襲い掛かった。

しかし、女剣士を捉えることはない。それどころか、その鮮やかな剣技が徐々にナグルファの体を刻んでいく。時に激しく、時に静かに。二つの相反する戦い方を即座に切り替え、凶刃に立ち向かい続けている。

その光景に、夢斗達は息を飲んだ。

この場にいる「高校生」だけが、この「型」を知っている。ルーメルが――いや、金城 しおりが繰り広げるこの剣術を、見たことがあるのだ。

異界・クレイドルで、ではない。他ならぬ現実世界で、である。

戦慄し、息を飲みながらも光一が呟く。

「思い出した...そうだ！ 金城さんは確か...」

その一言に夢斗とキリウも頷く。そして、彼女に会ったことがないリサが、言う。

「これって...剣道？」

加速し、銀の剣を操るルーメル。その戦い方はまさしく金城 しおりが所属していた「剣道」のそれだ。独特の歩法、凄まじい踏み込み、的確な斬撃――しかし、そこに時折、豪快な剣閃が混ざり、限りなくオリジナルのフォームを作り上げている。

切り刻まれ、至る箇所から血をほとばしらせるナグルファ。ついに雄叫びを放ちながら、彼はルーメルを睨みつけていた。

「貴様――貴様あ！ 凶に乗るんじゃないぞ！ このような、小賢しい技術で――」

「未熟であると自覚はしているつもりだ。だが、退くつもりなど無い。気に入らないなら叩き伏せてみる。貴様の剣術で」

まるで動じない女剣士の姿に、誰もが見惚れてしまう。剣を構える彼女は女剣士・ルーメルであり、そして同時にクラスメイト・金城 しおりだ。

「『彼女』が託してくれたもの、捨てる気などない。そして私が私である過去も、消すつもりなどない。すまないな、私は――こいつらと同じ。ただのわがままな『高校生』なんだ」

胸を打たれる夢斗達。しかし、ナグルファが彼女の全てを否定する。

「知った風な口を聞いてんじゃないぞ、クソガキどもが！」

もはやそこに、かつての団長としての矜持など何も無い。今まであらゆる手を尽くし、自身を気高き騎士に見せようとした彼は、全てをかなぐり捨て血まみれで襲いかかる。

それはもはや「猛獣」のそれだ。鎖を外され、道徳も論理も捨てた、怒りに任せて牙を振るう獣。

だが真上から落ちてきた刃に、ルーメルは静かに剣を当て、押す。流れるように軌道は変わり、勢い余った巨剣はすぐ真横の地面に突き刺さった。

「ッ！！」

ナグルファが伝わってきた感触に、焦る。一向に刃が持ち上がらない。深々と突き刺さったそれは、何度力を入れても引き抜くことができない。

反らすだけではない。ルーメルは落ちてくる刃にあまつさえ力を「貸す」ことで、その勢いを加速させ、想定外の力で地面に叩き込んだのだ。

その躊躇する一瞬が、命運を分ける。

「静」から「動」――「金城 しおり」から「ルーメル」へと移り変わる女剣士。彼女は一步を大きく踏み込み、持ち上げた剣を渾身の力で薙ぐ。走った光はナグルファの右腕を通過し、空気と共に一撃で切り裂いた。

「ッ――――ああああ!？」

悲鳴をあげるナグルファ。鮮血が吹き出し、大きな体がぐらりと揺らぐ。一步、地面を蹴って、ルーメルは返り血を浴びることなく、距離をとっていた。

見事――誰もその圧倒的な強さ、そして美しさに、拍手すら送りそうになってしまう。

剣を振り払い、まとわりついた血を拭い飛ばすルーメル。美しく長い剣の風切り音が、今ではなぜかひどく心地良い。

「お前は偉大な剣士だったかもしれない。だがそんな道具に頼り、己の剣を捨てた――あの時に、剣士としてお前は終わったのだ」

堂々と言い放つルーメル。その言葉を受け、がくりと膝をつくナグルファ。

勝者と敗者――その構図は、誰が見ても明白であった。

あっけにとられている夢斗らに、ルーメルが歩み寄る。凜とした眼差しに、皆何も言えない。ただ啞然としたまま、彼女を見つめるしかない。

ルーメルは――金城 しおりは、まずは一度、頭を下げた。

「すまない、皆。私のせいで、迷惑をかけた」

返す言葉が見つからない。夢斗はたまらず、疑問を投げかけてしまう。

「ほ、本当に...委員長なのか？」

「ああ。今ならはっきりと思い出せる。私の名前は金城 しおり。あの日、どういうわけかこちらの世界に放り込まれ、今日まで彷徨い、女剣士・ルーメルとして生きてきてしまった。信じろ、と言われても困るかもしれないが...」

思わず駆け寄る光一とキリウ。彼らも興奮気味に告げた。

「それは、僕らも一緒だよ。今なら委員長の顔とか声、しっかり思い出せるんだ。まるで僕と夢斗君が出会った時と、おんなじだ！」

「いや、ごっつ驚いたわ！ せやけど、分かるで。確かに委員長や！」

あの時もそうだった。夢斗がクレイドルに来て、初めて光一と出会った時。そして戦場でキリウから正体を告げられた時。

獣人の姿をした彼らと話して、一気にかつての記憶が蘇った。閉じられていた扉が一つ開かれ、その先に隠されていた過去が見えてきたのである。

興奮する二人を見て、ルーメルはどこか驚いているようだ。

「小泉も桐生も、随分変わったな。犬と...怪獣かそれは？ 着ぐるみ――ではないな」

「違う違う、本物だよ、これ。それに、変わったって言えば委員長も一緒じゃんか」

ルーメルは改めて自身の体を見て「確かにな」と呟く。獣人とエルフ、見た目が大きく変わったという点では、二人は共通している。

だからこそ、彼女は啞然としたままの夢斗を見て言った。

「その点、お前は変わってないんだな、諸星。不思議だ——なんなんだ、この世界は？」

「あ、いや...俺は違うんだ。俺はこっちの世界にいたんじゃないくて、あっちから来たんだ」

「なんだと？　じゃあ、元の世界に戻れるのか？」

全てを取り戻した彼女にとって、何から何まで、分からないことばかりなのだろう。二つの世界、そしてそこを行き来する「オーバー」の存在。奇妙な現象が次の奇妙な現実を引き寄せる。ある意味、こちらに来てすぐ混乱していた夢斗のそれに近い。

だが、それを全て説明している暇はない。気付いた夢斗が、再び緊張した表情で前を向く。

「色々あるんだ、委員長。俺らも本当、驚いてばっかなんだ。でも——ごめん、説明は後になりそうだ」

全員が気付き、振り返る。緩みかけた緊張の糸が、再び張り詰めた。

ナグルファが傷付いた体をおして、再び立ち上がる。ガクガクと震え、傷口からは滝のように鮮血が溢れ出ていた。

思わず、弓を構えながら光一が吠える。

「しつこすぎるよ、もう！　大人しくお縄につけて！」

だが、少年に鬼気迫る表情で男は返した。

「俗物などに、我が大義も、覚悟も理解できぬわ。力のために犠牲はつき物！　この程度の痛み、乗り越えずして何ができるか！」

そのおぞましい「力」への執念に、構えつつもリサが呟いた。

「おかしいですよ、こんなの...なんでですか？　なんで、その心を真っ直ぐ、正しく使えないんですか！？」

「ガキ共の稚拙な価値観に、我が霸道など理解できぬわ！」

あくまで己が崇拝する「力」を求め、そして正しいと信じ切って前に進むナグルファ。この精神力こそが、彼が国一の剣士として名を馳せた、その所以でもあるのかもしれない。

身構える一同の前で、頭上で見ている心喰いにナグルファは吠える。

「おい、予定変更だ。『アレ』をくれ」

「いいのかい？　重ね重ね言うが、元に戻れる保証はないのだよ」

「構わん、もたもたするな！　小賢しい蠅を叩き潰すためには、そのようなこと、怖くもなんともないわ！」

巨悪二人の会話に嫌な予感がする。空中で傍観していた心喰いは、どこか気だるそうに、懐から何やら赤い肉片のようなものを取り出した。かすかに鳴動しているようで、小さな心臓のようにも見える。

「そうか、分かった。幸運を祈るよ」

迷うことなく、それを足元のナグルファ目掛けて投げる心喰い。ナグルファは振り返り、切断

された左腕を落ちてくる肉塊にかざした。

落下してくる小さな赤と、剣士の傷口の赤。

二つが接触した瞬間、ナグルファの傷口で肉の塊が隆起し、一気に巨大化する。ぐちゃぐちゃと嫌な音を立て、急激に成長していく肉。そこら中から、思わず悲鳴が上がった。

「な、なんだあれ!？」

「腕が元に...いや、これは!」

光一、ルーメルが吠える。こうしている間にも、ナグルファの唸り声と肉の展開する音が、嫌に鼓膜を揺らした。

キリウが戦慄した。

「あのボケ...人間辞める気かあ!!」

その一言に、誰も驚愕する。行商として各地を回った彼だからこそ、いち早くその思惑に気付けたのだろう。

やがて変形を終えたナグルファは、ゼエゼエと息をしながら、こちらを見て笑った。

切断された左腕で肉塊は育ち、新たな「腕」を作り上げた。しかし、その姿はまさに怪物のそれだ。巨大に発達し、棘まで生えた大きな腕は、ところどころが赤く発光していた。こちらを見て立つ彼の姿は、実にアンバランスである。

引きつった笑みを浮かべ、ナグルファが恍惚と言う。

「時代を切り開けぬ剣などに用はナない。私は一ワタシハァアア!!」

おぞましい咆哮と共に腕を振り抜くナグルファ。怪物の雄叫びと共に、その異形の腕が一気に伸びる。夢斗らはとっさに飛びのいて避けたが、遙か後方の兵士達が巻き込まれ、上半身を吹き飛ばされた。

大惨事に悲鳴が上がる。舞い散る血しぶきに絶句してしまうが、唯一、ナグルファだけが笑っていた。

「アハハハハ! ホーラホーラ、逃ゲロ逃ゲロ!!」

伸縮自在の腕を振り回す度、そこら中から悲鳴が上がり、部屋が揺れた。柱や壁が砕け散り、鎧を着た兵士が宙を舞う。巻きぞえを受けないように、一同は必死に回避し、時に受け止め、防いだ。

弓矢を放ちながら、光一が叫ぶ。

「クツソ、なんだよこれ! 無茶苦茶じゃなか!」

腕の一撃をしゃがんで避けるルーメル。彼女も突進する機会をうかがっているが、荒ぶる力に前に出れない。

「さっきのは何なのだ? もはやこれは、人の力ではない!」

盾で一撃を受け止め、リサも不安げに言う。

「こんな...こんなことって...これも『禁呪』か何かだって言うんですか?」

この一言に斧で瓦礫を防ぎつつ、キリウが叫ぶ。

「詳しくは分からへんけど、おそらくあれも『心移し』の研究中に、作ったんやろ。王様一人、こさえて見せたんや。腕一本くらい、問題ないってことか...」

叩き落とされた一撃を真横に跳びのき、夢斗も顔を上げる。飛び散る石畳で顔が切れたが、気にしてられない。

「なんでもいい、止めないと！ このままじゃあー」

そんな中、腕を大きく引き戻し、腰を落とすナグルファ。その殺気を感じ取った、キリウが叫ぶ。

「ぼさっとすんなや、お前ら！ 伏せろおおお！！」

次の瞬間、肉体を竜巻のように回転させ、ナグルファは腕を振り抜いた。真横に大きく払われた一撃が突風を生み、触れてもいないのに切断し、薙ぎ倒す。兵士達だけでなく、反応が遅れた一同は倒れてしまった。

「つつ！？ ちっくしょう...」

身体中を包む激痛に、歯噛みする夢斗。衝撃で視界が揺らぎ、身動きが取れない。

そんな中、荒々しく息を吐くナグルファが一步、こちらに歩み寄る。ずしりと大地が揺れ、彼の重さを予感させた。

「我ラガ大義ノタメー大義、大義、大義大義ギッギギギギギギギギギ」

ついに人とのしての理性が砕け、ただの怪物に成り下がってしまうナグルファ。彼の一步は誰しもの心に、恐怖と絶望を抱かせてしまう。

立ち向かわなければいけない。しかし足元がふらつき、うまく動くことができなかった。兵士達はすでに戦意喪失し、逃げる者、泣き出す者、失神してしまう者、様々だ。

遙か頭上で見ていた心喰いが、やはり何の感情の起伏も見せず、冷酷に告げた。

「惜しかったとは思いうよ。だけど、やはりしょせんはただの『高校生』か。お前達のような子供の可能性にこそ、私の見たいものがあるかと思ったのだが、買いかぶりすぎていたかな」

また一步、近づくナグルファ。彼は本能から怪物の腕を振り上げ、目の前の夢斗に狙いを定めていた。

避けようと足に力を込めるも、ずきりと痛み、反応が遅れた。躊躇する夢斗をナグルファは待ってなどくれない。怪物の本能に任せ、ただ純粋な破壊欲のみを頼りに、彼目掛けて巨腕を振り下ろした。

空気を突き破る音。そしてそれを遥かに凌ぐ衝撃音が、王座の間そのものを揺らす。

目の前に広がる光景に、息を飲んだのは遠巻きに見ていた兵士達だけではない。夢斗も、そして頭上にいる心喰いも同様だった。

夢斗の前に立ちはだかり、リサが「盾」を展開させ、一撃を受け止めている。降りかかる重さを歯を食いしばって耐え、必死に押し返す。

「なめないで...くださいよ.....私達を」

その一言に目を見開く夢斗。彼女の言葉は、上空からこちらを見下ろす黒い仮面に向けられていた。

さらに腕を押し込むナグルファ。しかし、ドンッという音と共にその顔が苦痛に歪む。

脇腹めがけて、キリウの放った大斧が叩き込まれていた。大きな体躯を利用し、全身を稼働することによって叩き込まれた渾身の一撃が、彼の炎の力を伴い、爆炎と共にナグルファを吹き飛

ばす。

ワニ男は燃え盛る大斧を構えたまま、怒りをあらわにして吠えた。

「お嬢ちゃんの言う通りやで。なんや、それ？ ただの高校生やから、がっかり、だあ？ 随分露骨に売ってくれるんやなあ、喧嘩を！」

ぶんっと斧を振り上げ、吠えるキリウ。リサも魔法を解除し、ひるむどころか前に一步出た。

そんな少女に、宙に浮いたまま心喰いが首をかしげる。

「なんだ、随分と怒るんだな。こんな程度の言葉に」

「当たり前です！ あなた、さっきからなんなんですか？ 王国と獣人をめっちゃめっちゃにかき回しておいて、堂々と姿を現したと思ったら、高みの見物。それだけのことしておきながら、立ち位置も態度も、人を見下して偉そうです！」

子供っぽく、しかし的を射た怒りが心喰いに打ち付けられる。

ナグルファが前に出ようと踏み込んだが、その足目掛けて水の矢が突き刺さった。痛みに吠えると、怪物の体をさらに無数の「飛び魚」が至る箇所から切り刻む。光一が魔法の矢を放ち、青く光る瞳のまま牙をあらわにする。

「ほんとほんと、どれだけ年上か知らないけど、盗人猛々しいにもほどがあるよ。お前達のせいで、いろんな人が傷付いて、いなくなったんだ。それに腹が立ってしょうがないから、僕ら、こうしてここまで来たんだ」

短い間ではあっても、確かに仲間と呼べる面々と出会い、そして失った少年の怒号。その言葉をかき消させない為にも、リサは更に吠えた。

徐々にではあるが、恐れおののいた兵士達も、少女の訴えに耳を貸し出す。

「あなたがどんな人か、知ったこっちゃないです。あなたからすれば、私達はそりゃあ、ただの子供かもしれません。でもそんな子供だって、大人と同じように悩んで、悲しんで、それでも考えて考えて、ここまで来たんです。それを勝手に『可能性がない』なんて、重ね重ね、何様なんですか！？」

じっとこちらを見下ろす心喰い。そうこうしているうちにも、ナグルファは体勢を整え、こちらを睨みつけていた。

「怪物になるなら、それで結構！ いいえ、むしろ神様にでも悪魔にでもなってみればいいです！ もう、決めましたから。なんであろうと倒します。倒して倒して、ぶっ倒します。あなた達みたいなわがままで、理不尽な人達に、怯えてなんかやりませんから！」

小さな小さな少女の放つ、強く、果てしない「覚悟」の一言。誰もが悟った。この少女は決して虚勢など張っていない。兵士達は震えを止め、動かない体でそれでも拳を握り、怪物に立ち向かう少年、少女を見つめる。

場を包む緊迫感に、そして力無き彼らの強い眼差しに、息を飲む。

その一言に決意を固める仲間達。そんな中、彼女に守られた夢斗が、頷き、一步前に出る。

「相変わらず、すごいこと言うな。神様でも悪魔でも、か。わがまま合戦ならリサの一人勝ちだよ、こりゃあ」

「信じてくれなくてもオッケーですよ。心の底から、負ける気なんてぜんっぜんしないです

から！」

腕を組み、ふんぬっ、と鼻息を荒げるリサを見て苦笑してしまう。しかし夢斗も一呼吸し、前を向く。

澄んだ瞳の中に、この上なく燃えたぎる烈火が宿った。

「いや、信じるさ。そんなリサがいるんだ。俺らだって、このまま負けてなんかやれない。なにせ俺ら――わがままな『高校生』なんでな」

瞬間、夢斗の足が爆ぜた。石畳が砕け散り、少年の体が前へと吹き飛ぶ。ブーツの推進力が少年の肉体そのものを「槍」とし、鋭い蹴りをナグルファの鳩尾にひねり込んだ。

怪物が苦痛に顔を歪める前に、もう一撃が走る。二つの「ドンッ」と言う音が重なり、鼓膜をいやに震わせた。駿足の二撃と共に、夢斗は後ろへと引く。

苦痛に歪みつつ、それでも腕を上げるナグルファ。だが、突如として彼の周囲に降った「雨」に、その身が刻まれ、悲鳴が上がった。

光一がすでに天目掛けて放った「水の矢」が、鋭さとしなやかさをそのままに、ナグルファを断截していく。思わずその鮮やかな連携に兵士達、そして国王・エイムダルから歓声があがった。

。

しかし、まだ終わらない。終わってなどやらない。

ナグルファが血だらけになりながら前を向く。しっかりと視界に夢斗を捉えるも、轟音と共に景色が傾いた。

すでに踏み込んでいたキリウが斧を振り上げ、顎にまっすぐ、火炎の一撃を叩き込む。爆発によって顎骨が砕け散り、ナグルファの大きな口がだらりと開いた。

照準をすぐ横のキリウに合わせるナグルファ。しかし怪物となった彼には、その連携の真意など読み取れなかったのだろう。

唯一、遠目に見ていた兵士達が、驚きの声を上げる。

ニヤリと不敵に笑い、キリウが叫ぶ。

「ぶちかましたれやあ、お嬢ちゃん！！」

ようやくナグルファも気付く。自身目掛けて、大きく大地を蹴り、跳んでくる彼女に。

夢斗の蹴りも、光一の矢も、キリウの斧も――どれも確かな破壊力は持っているが、けっして本命ではない。

彼らは託したのだ。

この場で誰よりも強く、光り輝く、あの少女に。

殺人鬼と怪物を目の前にしても、まるで怯まなかった、小さな「英雄」に。

金色の髪が風になびき、差し込む光を受けて輝く。リサは空中で、目の前に迫るナグルファを睨みつけていた。

とてつもないサイズの「ハンマー」が、空中に浮かぶ。彼女の心を表すかのような激しい光に包まれたそれを、まっすぐ、なんの迷いもせずに振り下ろした。

小さな英雄の放つ雄叫びに、ついにナグルファが恐怖を覚える。

「おっらあああああああああ！！」

慈悲なき鉄槌が怪物を潰し、地面を砕く。地割れのように亀裂が走り、ついには壁までも崩れ、砕け散った。

衝撃が生んだ突風に、皆、己の顔を隠して防ぐ。もはやそれは攻撃という次元を超えた「災害」のそれだった。

クレーターの中央でピクピクと痙攣し、立ち上がらないナグルファ。怪物の姿はすでに肉の塊となり、原形をとどめていない。

光が散り、まるで蛍のように魔法の残り香が宙を照らす。その中心に立つ少女の姿を、夢斗は夢中になって見つめてしまった。

鬼気迫る表情の中に、それでも揺らがない信念が見える。少女は体を持ち上げ、ふんっとため息をつき、言い放つ。

「泉道高等学校、1-B、日向リサです。文句があるなら、何度だってかかってきてください。何十回でも相手します。何百回でもぶっ倒しますから！ 不意打ち、卑怯も大いに結構！ 全部全部、真っ向から叩き潰します！」

正々堂々と腕組みをし、ナグルファだけでなく頭上の奴に言い放つ少女。

強すぎるだろー思わず苦笑してしまう夢斗達。

光一、キリウが思わず歩みより、夢斗を小突きながら小声で言った。

「お前、えらい女見つけたな」

「本当本当、ある意味委員長より怖いんじゃない。あの子」

ヒソヒソ言う二人に、夢斗は引きつった笑みのまま返す。

「ああ、正直俺も、こればかりはそう思うわ...」

一同の中で最も小さな彼女が、その中で遥かに巨大な爆発力を持つという矛盾に、どこか心が弾んでしまう。

ついに兵士達からも大きな歓声が上がった。怪物を打ち倒したことでルガリアの兵達は安堵し、夢斗らを称えている。

その予想外の声に、戸惑ってしまう少年・少女。しかしエルフの女剣士だけは剣を構えたまま、冷静に言い放つ。

「まったく、喜ぶのが早い。一番の大物が、まだああして残っているのにな」

全員がリサと同じく、前に出て横に並ぶ。少年・少女は皆、一様に決意を固め直し、各々の武器を持って頭上を見上げた。

そんな圧倒的力を見せつけられても、浮かんだままの黒幕はまるで動じない。

「いやはや、驚いたな。たかが言葉一つに対し、ここまで爆発力を見せるなんて。未成熟であっても、それゆえに底の見えない感情と成長。やはり子供の心というのは面白い」

どれだけ劣勢に立たされようとも、まるで揺らがない心喰い。声はやはり変換されて無機質だ。男かも、女かも分からない。そもそも感情の揺らぎというものすら実に微弱だ。

誰もが怒りをあらわにし、黒幕を睨みつける。しかしそんな中、たった一人、その黒い姿に向かって「疑惑」を抱き、夢斗が語りかける。

「全部、あんたがやったんだな。今回の事件。『心移し』をナグルファに教えて、戦争を起こ

させ、最後の最後まであいつを操った」

「協力しただけだよ。彼は元々、その内に破壊願望を兼ね備えていた。その背中を少し押してあげただけだ」

まるで自身は関係ない、とでも言いたげな物言いだ。その一言にリサ達がより一層、怒りをあらわにする。

だが、なおも夢斗は問う。

「そうか...だから用意したんだな。あんな無茶苦茶な『機械』を」

その瞳が冷静さを取り戻している。思わず全員が視線を落とし、夢斗が見ている「兵器」を見つめた。

そこにはナグルファが扱い、あらゆるものを荒々しく削り取った、あの大剣がある。まるで「チェーンソー」のように動く「オーバーテクノロジー」だ。

忌々しい武器を見て、リサ達もようやくある違和感を抱く。思わず、光一が声を上げてしまった。

「あれ.....そ、そういえば...なんか変だよ。だってあの武器は――」

しかし、砕けた床の奥から、唸り声が響く。歓喜していた兵士達も再び緊張し、各々の武器を構えた。

ギョッとする一同の前で、陥没した床の中から原型を止めないナグルファが歩み出てくる。血に濡れ、骨まで飛び出したそのおぞましい姿に、誰もが息を飲んだ。

「タイギ.....タイギノ.....タァメー」

理性が消え、戯言のようにかつての記憶を繰り返す怪物。

皆が後ずさる中、たった一人、仮にも彼の部下であった女剣士が歩み出る。

剣を下ろしたまま、静かにルーメルは口を開いた。

「哀れだな、本当に.....多くの人々を先導し、数多の希望を生むだけの心があったのだ。だが、たった一つの盲信がそれを全て、こんな怪物へと変貌させてしまった。人の『心』は、怖いものなのだな」

どんな経緯があったにせよ、どんな最後だったにせよ。

それでも短い間でも、ルーメルは――金城 しおりは、兵団長として振る舞う彼を見てきた。

己の正義を通し、己の覇道を信じる彼が選んだ道は、邪悪な存在へと肉体を委ねること。

狂気を宿した眼差しが、すぐ目の前のルーメルを捉える。

「タァアイギ.....ノォ...タイギィィィ...」

皆が見守る中、ついに剣を持ち上げるルーメル。

彼女は覚悟を決め、己の心を動かす。

終わらせなければいけない。その責務が、ルーメルにはある。

「ありがとうございます、そしてすまない。あなたの教え――今、果たします」

瞬間、銀の閃光が甲高い音と共に走った。瞬く間に三度切りつける、ルーメル。

美しく、鮮やかな太刀筋はもはや芸術的だ。

断末魔が途切れ、バラバラになるナグルファ。

力に歪み、溺れ、囚われた一人の哀れな歩兵団長は、ようやく物言わぬ骸に変わってしまう。大義は己の剣で示せ———かつて彼がルーメルに告げた一言が、いつまでもその心に染み渡っている。

剣を収めるルーメル。そして彼女は強い眼差しで、心喰いを睨みつけた。

「答えてもらうぞ、全て。そして必ず、その罪、償ってもらう！」

委員長の一言に、再び気持ちを固める一同。

ついに兵士達までもが、頭上に浮かぶ一人の黒い影を睨み付けていた。全ての矛先を向けられ、心喰いは溜息をつく。

「分かった、分かったよ。好きなだけ答えてあげよう。あれもこれも、皆」

身構え、一歩前に出る一同。そんな彼らに、あくまで黒い仮面は気だるそうに言い放つ。

「だけど、君達に裁かれるつもりはない。自分のやったことは理解している。それがどれだけ、世間から忌み嫌われるかもね。だけど、無理だ。だからと言って止めることはできないよ。人の『心』とは、そういうものだ」

彼は懐から何かを取り出し、おもむろに地面に放り投げる。警戒し、身を引く一同。

なにやら肉の塊のようなものが、ベチャリという音を立てて数個、地面に落ちた。

次の瞬間、皆が正体を察する前に、肉の塊が肥大する。悲鳴が上がった時には、三つの塊が各々の形に「進化」していた。

人型をした怪物がまた新たに三匹、立っていた。それはナグルファの失った腕を補った、あの謎の細胞と同じものである。

しかし今度は腕だけではなく、肉体そのものを作り上げ、まさしく「怪物」の形相でこちらを見て笑っていた。

弓を構え、声を上げる光一。

「嘘でしょ！ やっと倒したのに、また三体も！？」

背を合わせ、構える一同。しかし、そんな夢斗らに頭上から声が響く。

「もし私を止められなければ、それが王国中にばら撒かれる。大勢が死ぬだろうね。それが嫌なら、ついておいで。もっと高くて、おあつらえ向きな場所で話そう」

思わず見上げた一同の目の前で、ふわりと舞い上がる心喰い。彼の体はすぐに空間に溶け込むように消えてしまった。

焦り、声を上げてしまう夢斗とリサ。

「あの野郎...逃げやがった！」

「もっと高くて、おあつらえ向きな場所？ いったい...」

だが、この疑問には壁際に身を寄せている国王・エイムダルが答えた。

「この建物の上には、城を見渡せる展望塔がある！ おそらくそこに向かったのでは」

誰もが、彼の一言に納得してしまう。怪物を睨みつけながら、キリウが吐き捨てた。

「そら随分、おしゃれなこって。100万ドルの夜景でも見せたいんか、あの黒レンジャー」
相変わらずの乱暴な物言いだ、今はとても笑って返せない。

怪物達は一歩ずつ、確実にこちらに近付いて来ている。

ジリジリと迫る脅威を前にして、女剣士の姿をとったかつての委員長が言う。

「諸星、それに日向 リサ、だったな。お前達は先に行け」

思わず、全員が彼女の目を見る。美しいエルフの眼差しの上に、金城 しおりの色が確かに覗く。

「行けて……委員長達は！？」

「こいつらを片付けたらすぐに行く。私達だって、奴に言いたいことは山ほどあるからな。だが、今はもたもたしてられない。あいつが逃げおおせれば、それこそ王国中、その外の世界にも怪物が放たれるんだぞ」

力強く、状況を冷静に判断した言葉は、かつての委員長のそれだ。聞く者の心を落ち着かせ、冷静さを取り戻させてくれる。

それでも不安そうな眼差しを浮かべる夢斗とリサに、なおもルーメルは言い放つ。

「なんだ、その目は？ お前、私がこんな怪物に負けるような、やわな腕前だって言いたいのか？」

「い、いや！ そういうことじゃあ、ないんだけど…」

戸惑う夢斗についてルーメルは笑い、剣をくるりと回して見せた。

「なら、信じる。姿形は変わっても、お前のかつてのクラスメイトなんだ」

ハッとしたのは夢斗だけではない。隣で不安げに聞いていた、光一、キリウも一緒だ。

ルーメルの視線に、迷いなど一切ない。

どれだけ怖くても、どれだけ堅物でも、それでも彼女は嘘など一度もついたことがない。

困ったように、ため息をつくキリウ。しかし、それでも瞳に宿った強さは本物だ。

「あーあー、これや。いつも通りの委員長やな、ほんま。周りのことなんかお構いなしやで」

だが苦笑しながらも、やはり強い眼差しで光一も返す。

「諦めよう、桐生君。文句言うとお説教が始まるよ」

「分かってるじゃないか、小泉。気に入らないと言うなら、後でいくらでも苦情は聞くぞ？」

ルーメルのその一言に、震え上がる光一とキリウ。二人は慌てて武器を構え直し、前を向く。

だが最後に、光一は夢斗達に告げた。

「頼んだよ、夢斗君、リサ！ 遠慮せず、あいつ、懲らしめちゃっていいからさ！」

キリウも斧を担ぎ上げ、吠える。

「おうよ。たとえ奴が気い失おうが、叩き起こして無理矢理聞いたるわ。何度でも、腐る程なあ！」

また一步、距離を詰める怪物。

最後にルーメルは、高らかに吠える。

「任せろ。クラスのメンバーを守るのも、委員長の仕事だ。騎士である前に、私にはその責務がある」

各々の言葉が染み込み、心の奥底に伝わる。どんなに怖くても、彼らはまるで顔に出さず、自分達を後押ししてくれている。

その優しさに、じんわりと目頭が熱くなった。

だが今は泣いている暇などない。彼らの心に、答えなければ行けない。

「皆...ありがとう.....また、後で！」

それは、かつてのクラスメイトと交わしたのと、なんら変わらないお決まりの一言だった。

仮面の下の真実

長い石の階段を駆け上り、塔の頂上へとたどり着く。息を整える二人の前に広がっていたのは、広々とした展望台と、そこから見える城下町の景色だ。茜色の夕暮れが町だけでなく、その先に広がる森をも染めあげている。

開け放たれたバルコニーから吹き込む風が、火照った体を癒す。だが、二人はまだ落ち着くわけにはいかない。

紅に染まる景色を見つめる奴の背中を、再び敵意に火をつけ、睨んだ。

「ナグルファ曰く、国王はここからの景色を毎日のように眺めていたという。確かに壮観だ。この景色を見て、変わらない王国の姿に、彼は心の平穏を得ていたのかもしれない」

心喰いはまるで緊張するそぶりもなく、リラックスして立っている。夢斗とリサは対照的に身を強張らせ、押し黙っていた。

「心ってやつは、肉体と同じで『栄養』を求める。より多くの感動、より多くの怒り、より多くの悲しみ——そういうものが心を揺れ動かし、もっと強靱な精神力へと変貌する」

ようやく振り返る黒い影。仮面と革の衣服の表面を、夕日が滑る。

向き合い、しばし心喰いは黙っていた。どうやら、夢斗とリサの姿を観察しているらしい。

「子供の心は未発達で脆い。だがそれゆえに逆境をこじ開け、理論をねじ伏せ、それでも進んでしまうだけの成長力を見せる。大人ではなかなか手に入れることのできない、飛躍的な成長力。その意味するところが、私には分からなかった」

その声は無機質ではあってもどこか穏やかで、聞いている者の心に入り込んでくる。もっとも、だからといって信用する気にはなれない。

「これは『賭け』だった。お前達二人の存在を知った時、早めに排除すべきかどうか、正直なところ迷いはしたんだ。我々の脅威になる前に、芽を摘んでおくべきではないか、と。だがそれ以上に、私は見てみたかった。降りかかる逆境に、理不尽に、お前達がどう立ち向かうのか。もし潰れず、ここまでたどり着いた時——小さな芽は、果たしてどんな大樹に成長しているのか」

心の内を語る殺人犯に、ついに夢斗が返す。

「賭けだった、だと？ お前、そんな興味本位で……これだけのものを巻き込んだのか。王国の人間を、獣人達を——賭けの代金にしたっていうのかよ！」

その怒号を聞いても、心喰いは揺らぐことはない。少しだけため息を漏らす。

「どうやったって、私が悪人である、ということは理解しているさ。だからもう逃げはしない。自分のことくらいは、分かっているつもりだ」

開き直るその態度に、リサも怒りをあらわにし、吠える。

「今更、素直になってももう許さないです。あなたを許すことなんて、絶対してあげません。どんな理由があろうとも！」

少年、少女は拳を握りしめ、一步前に出た。

噛み付いてくる二人の視線を受け、心喰いはまた、ため息を漏らす。

「本当に、強くなったなあ。実に興味深い。やっぱり次に『開ける』のは、君達の心が良い。奴

隷や、兵士のようにくたびれた心じゃあだめだ。若々しくて、それでいて未熟で——こうして会えたことがもし『運命』だっていうのなら、あながち、こちらに来たのも悪いことではなかったんだらうな」

勝手に納得し、頷く心喰い。また一つ、リサは怒りをあらわにし、言葉を放とうとした。

しかし、夢斗の冷静な言葉が、それを制する。

「やっぱり、そういうことなんだな」

驚いたように振り向くリサ。心喰いもどこか揺らいだようで、じっと夢斗を見ている。

「そうか...なら、全て合点が行く。今まで見て来た、あれも、これも。そもそも、俺が初めてお前と会った時に抱いた、あの『違和感』の正体も」

じっとりと汗が染み出す。だが、狼狽しているわけではない。沸々と内から湧き上がる熱を、抑え込む。

リサはたまらず、前方を警戒しながらも問いかける。

「夢斗さん、どういうことですか？ 違和感って、一体...」

「初めてこいつと出会ったあの夜——ズタズタにされて、奴を取り逃がしたあの瞬間から、何か胸につかえていたんだ。その答えはずっと分からなかったけど、ここに来るまでいくつもの『違和感』が見つかって.....今までずっと、その答えを考えてた。ようやく、なんとか一つに繋がったよ」

息を飲むリサ。

すなわちそれは夢斗だけが心当たりがある、ということなのだろう。

心喰い——王国をたぶらかし、獣人達を蹂躪しようとした、この仮面の奥に潜む、奴の素顔に。

戸惑うリサ。唯一、心喰いだけが冷静に、静かに返した。

「その眼差し———そうか、嘘はついてないんだね。はったりではない、お前は私のことを理解したんだな」

「確証はない。だけど.....限りなく、確信に近いものはあるさ」

怒りに任せて進もうとしていたリサも、その行進を止めてしまう。彼女の戸惑いを察し、夢斗は前を向いたまま語り出す。

「そもそも、ずっと不思議だったんだ。王国の人達に話を聞いても、何一つ怪しい人物の姿なんかいないと言っていた。なら、ナグルファのような王国の関係者が犯人かとも思ったが、王様もその正体に検討もついてないみたいだった。いくらうまく周りを騙したところで、手がかりをまるで残さず、それでいて城でナグルファと手を組み、計画を実行に移せるのか。そんな疑問が、いつまでたっても拭えなかったんだ」

今日に至るまで、心喰いという事件自体は知れ渡っていても、その犯人に繋がる目撃情報や証拠は何一つ見つけれていない。あくまでナグルファの計画も、たまたま城に忍び込んだ際に見つけた「心移し」の資料、そして突入の際に出会った国王の口から、明らかになっただけである。

「けどあの日ついに、お前は俺達の前に姿を現した。そして俺達を問答無用で叩き伏せて、余裕綽々で帰っていったんだ。その時だった———あの一言に、違和感を抱いたのは」

リサはすぐさま、当時の出来事を思い返す。

真夜中、光一、キリウを連れて「心喰い事件」が起こった現場を調べにいった。手がかり一つ見つからない中、突如姿を現した犯人・心喰い。四人がかりで対峙するも、その不可思議な力の連鎖に歯が立たず、結果、捕らえることは出来なかった。

リサは今でも、しっかりと思い出せる。夢斗達が倒され、たった一人で対峙した時の、あの恐怖を。絶望が心の奥底に滑り込んでくる、あの感覚を。

その記憶の中から必死に「違和感」を探る。だが、あいにく恐怖と痛烈な感情ばかりが湧き上がり、埒があかない。

「あの一言、ってなんですか。あいつ、一体何を――」

「なんてことはない一言さ。あいつは、去る間際に呼んだんだ。俺の名前を」

言われて、リサも思い出す。確かに、その場を立ち去る間際、奴は言ったのだ。

知りたければ来い、モロボシ ユメト――そう、あの黒い影は告げ、姿をくらましたのである。

だが、そこまで思い出してもなお、リサは首を傾げてしまう。

「ど、どういうことなんですかぁ？　なんで、夢斗さんの名前が、違和感なんですか？」

リサの言葉に、夢斗はすぐには答えなかった。自身の憶測に目の前に立つ影がどう反応するかを、注意深く観察している。

何も言わず、黙したままリラックスして立つ心喰い。

その揺らがない氷の心を砕くべく、夢斗はついに疑惑という「剣」を差し込んだ。

「お前、確かに言ったな。モロボシ ユメトって。なんで、俺の苗字を知ってるんだ？　こっちの世界では『夢斗』としか名乗ってないのに」

リサは思わず「あっ」と声をあげる。拳を握りしめ、なおも夢斗は前を向く。

「それだけなら、たまたまかと思ってたんだ。どこかで俺の名前を耳にしたのかも、って。だけど、ナグルファと戦って分かったよ。お前はあの時、あの男に見たこともない『兵器』を渡していた。あれはただの剣なんかじゃない。俺が履いているコイツと同じ――『オーバーテクノロジー』だった」

ナグルファが心喰いから受け取った巨大な剣。金属の小さな駆動する刃を持つ、無慈悲な武器。

チェーンソーを彷彿とさせるそれに、夢斗も、リサも、ひどい既視感を抱いていた。

ついにリサも夢斗の推理が分かってくる。汗を浮かべ、夢斗ではなく彼方の心喰いを見つめていた。

「あいつに『機械』って言葉を教えたのも、お前だよな。今思えば、おかしい話なんだ。このクレイドルって世界は、魔法はあっても機械はない――そんな中で、なんであの男がそんな言葉を知ってたのか。全部、お前が教えたんだな」

一歩、ゆっくり歩み寄る夢斗。

距離を詰め、さらなる気迫を持って言葉を放つ。己の中の「疑惑」が「確信」に変わった、一つの事実を。

「ついさっきもそうだった。お前、言ったよな。『こちらに来たのも、悪いことではなかった』って」

遅れていたリサも、ついに追いつく。夢斗に並び、たまらず声をあげた。

「夢斗さん、じゃあ、あいつは――！」

自身の鼓動が高鳴っているのが分かる。展望台に吹き込む風が、どこか生暖かく、嫌に肌を撫でた。

黙したままの黒仮面・心喰い。否定もせず、動揺もせず、ただ、ただその言葉を肉体で受け止めている。

明らかにするべきなのだろう、この真実を――夢斗は少し深呼吸し、しっかりと前を見据えて言い放つ。

「同じなんだな、お前も。俺らと同じ――『オーバー』なんだな」

予感していた一言に、リサがそれでも衝撃を受ける。慌てて視線を心喰いに戻した。

「俺達と同じ世界から来た人間なんだな。それでいてお前は――俺達が知っている人間だ」

自身の疑問が解決したはずなのに、体は火照ったままで汗が止まらない。放った言葉がそのまま不安や恐怖に変わり、肉体の奥に居座り続けている。

誰の目にも触れず、王国の中枢にいるナグルファと出会う。そのために王国に潜伏する必要も、ましてや地下道のような隠し通路を使って侵入する必要もない。

奴は堂々と会いに来ていたのだ。道も使わず、ドアすら開けず。

「オーバー」の力を使って、現実世界から直接、この城の中に。

目撃などされるわけがないのだ。ナグルファと会う以外の多くの時間、彼はこの世界にそもそもいないのだから。

そして確かに口走ったモロボシ ユメトという「本名」。これを知っているのは、リサや光一、そして記憶を取り戻したキリウとルーメルしかいない。獣人達は今まで「ユメト」とだけ呼んでいたのである。

フルネームはこの世界では知れ渡っていない。ならその名前が多くの人々に伝わるのは――他ならぬ現実世界だ。

拳を握りしめ、臨戦態勢のまま夢斗は黒い影を睨みつけた。

「残念だけど、ここが限界。いまの俺では、ここまで予測するのが精一杯だった。もう、いいだろう。それを知るために、あんたが言うようにここまで来たんだ。教えてくれ、あんたは一体――何者なんだ」

こんかぎり悩み、こんかぎり考え、そして歩き続けて、ここまで辿り着いた。そんな夢斗の今までを噛みしめるように、心喰いは少しうつむき、黙っている。

戦争を引き起こした張本人、心喰い。その正体は邪悪なる魔導師でも、狂気にまみれた騎士などでもない。もっと当たり前で、もっと身近な世界からやって来た存在。

夢斗やリサと同じ。世界を「超える」才能を持った、現実世界の人間だったのだ。

高鳴る胸を押さえ、言葉を待つ二人。

そんな少年と少女に、黒い仮面はゆっくりと告げる。

「そうだね。もしあの時、私がそう言わなかったとしても——お前達はきっと、私に辿り着いていたのかもしれないな」

ついに黒い姿が動く。心喰いは静かに仮面に手をかけ、うつむいたままそれを外した。

「ただの高校生だと思っていた。不安定な心を持つ、他愛ない存在だとね。だけど、随分と思い違いをしていたようだ。君は——実に興味深い」

仮面を外したことで、ついに心喰いの本当の声が響いた。

男だ。まだ若さの残る、男の声である。聞き覚えのあるその声から察する前に、静かに彼は前を向いた。夕暮れを背負い、輪郭を少し失いつつも、その顔が二人の前に露わになる。

息を飲む、二人。

夢斗だけでなく、リサまでも絶句してしまう。

「そんな……あなたは、確か…」

「あんた…あんただったのか？ あんたが全て——」

湧き上がる焦りを抑え込むことができない。自然と荒くなっていく呼吸に、喉の奥が焼けるようだ。チカチカする視界の中で、ただ一点、男の顔を見つめる。

整った顔立ちだ。さらりとした黒髪とシミひとつない白い肌は、まるで女性のようにもある。男でありながら確かな美しさを内包した彼の顔に、心を奪われる女性が多いのだろう。

そんな美しい素顔も、今となってはただ、ただ、恐ろしい。彼の見慣れた眼には、どこかいつもとは違う異質な光が浮かぶようであった。

リサは一度しか、彼に会ったことはない。だが、そんなたまたまの出会いですら、覚えてしまうほどの強烈な美しさ。

しかし、今は別の意味で心が動く。見慣れた彼の凶行に、彼がここにこうして、いるということに。

人の心を分析し、多くの心を救い出してきた男。かくいう夢斗も彼を頼っていたのだ。自身の失われた記憶を取り戻すため、何度も何度も、彼の診療所を訪れた。

失われた記憶のその場所に、失われた過去を探っていた「彼」が立っている。

カウンセラー・羽多野 充。

冷静に、そして静かに「心」の扉を覗く彼が、そこには立っている。

「なんで……あんたが…あんたも……『オーバー』なのか」

分かっていたはずだ。考えに考え、現実世界の人間の顔がああ仮面の向こうにあると、覚悟していたはずだ。

だが、それでもなお、夢斗はうろたえてしまう。呼吸が荒くなり、冷静ではいられない。隣に立つリサもまたかすかに震え、事態を飲み込めていない。

そんな狼狽する二人に、羽多野は告げる。カウンセリングを行う時のように、いつも通りの透き通った波長で。

「それだけの手がかりで、ここまで来るとはね。本当、世辞でもなんでもなく、心から感心するよ、夢斗君」

賞賛する彼の言葉には、驚くほど抑揚がない。笑いもせず、悔しがる素振りも見せず、ただ淡

々と告げる羽多野。

「獣人達の中に『オーバー』が混じっているという報告を聞いた時は、半信半疑だった。だがあの日、現実世界に戻ってすぐの君達二人を見て、驚いたよ。なにせ、ナグルファから聞いていた特徴が、そのまま当てはまっていたのだからね。君達が、獣人達と同行している『オーバー』だと、すぐ気付いた」

かつて城に侵入し、ナグルファとの戦いの中で現実世界へと離脱した時の出来事だ。

現実世界で教師に絡まれている二人を、偶然通りかかった羽多野が救ってくれたのである。

ぞくり、と二人の背筋を嫌な感覚が撫でる。あの時、何気なく話しをしていた彼は、すでに多くの命を殺めた「心喰い」だったというのだから。

「たちまち、君に興味を湧いたんだ、夢斗君。君の失われた過去——その情景から察するに、きっと君はもっと前にクレイドルに赴いていたのではないかと。そして、僕と同じ才能を持つ人間が、他にもいたってことにも驚いた。だから、たまらず会ってみたくなったのさ。こちらの世界で君達二人と」

拳を握りしめる夢斗。頬を伝う汗に構わず、言い放つ。

「だから...だからあの夜、俺らの前に姿を現したのか？」

「ああ。リサさんの魔法の腕にも驚いたが、それ以上に君が『オーバーテクノロジー』を使いこなしているのも、びっくりしたよ。しかも、徹底的に痛みにさらされたにも関わらず、それでも立ち上がり、さらに成長して見せた。あの時、真剣に悩んだんだ。あの場で、君達邪魔者を消してしまうかどうか」

冷静に語ってはいても、その内容は実におぞましい。興味本位で姿を現し、そして事と次第によっては躊躇なく、夢斗らを完全に殺すつもりでいた、というのである。

いったい、なんなのだ、この男は——現実世界で出会った時は、整った顔立ちの秀才、くらいにしか思わなかった。周囲の人間の評判も良く、夢斗の母親からは「イケメン」などと呼ばれ、もてはやされた存在だったくらいである。

その時から羽多野の態度は別段、大きく変わったわけではない。特に感情の起伏もなく、ただ淡々と相手に対し接する。その様が、見方によってはクールとも捉えられるのだろう。

だが、なぜだろう。今、対峙している彼に、ただただ不安になる。数多の殺人を犯し、国と民族を巻き込んだこの男が、それでもなお平静を装っていられるということに、何か大きな人間の「ズレ」のようなものを感じる。

姿形は人のそれだ。しかし、今まで見たどんな怪物より、その姿がおぞましく見える。

「僕は見てみたくなったんだ。君達がこの騒動の中で、一体、どうなってくれるのかを。理不尽な圧力に足を引かれ、奈落に落ちるのか。それとも全てを切り抜け、傷をまといながらも前に進んでくれるのか。結果は後者——賭けた甲斐があった」

「賭けた甲斐があった、ですって？ 何考えてるんですか、あなた。じゃああなたは、こうして私達を招き入れるつもりだったんですか？」

「ああ。ナグルファや王国の兵士に殺されるなら、それまで。だけど、こうしてここまで、君達はたどり着いた。つくづく理解できない。だけど、だからこそこうしてまた、君達と話すことが

できる」

混乱していく二人。真実は何一つぶれていないはずなのに、その真実そのものに戸惑わざるを得ない。

羽多野 充という男を、読むことができない。

「僕はね、子供の頃から病気なんだ。生まれつき、僕には感情ってものがない」

「感情が...ない.....だって？」

思わず繰り返す夢斗。一度だけ頷き、羽多野は続ける。

「嬉しかったり、悲しかったり、苦しかったり――喜怒哀楽の全てが、元々、抜け落ちていた。自分に何が起ころうが、他人が何をしようが、心底どうでもいいとさえ思えてしまう。怪我をして血が出れば痛い。でも、それは悲しくもなんともないんだ。ああ、痛い、としか思わない。それだけなんだよ」

言わばそれは「心」を失った状態ということなのだろう。淡々と、事実のみを告げる羽多野。

「生きていて、楽しいことも、苦しいことも、全部どうでもよかった。周りに合わせて喜怒哀楽を『演じて』はいたが、その実、何かで心が揺れ動いたことなど、一度たりとなかったよ。つまらない人生の中で、淡々とやるべきことをやって来た。それだけの日々だった」

空虚なる過去を語る羽多野。

そんな彼の揺れ動かない心に、やはり二人は不安を隠せない。

身を包む恐怖には、覚えがある。あの夜、初めて心喰いと――彼と対峙した時に感じた、あの感覚だ。

「だからこそだろうね。自分が持っていない『心』に興味を抱いた。結果、心療内科を開けるまでになり、色んな人間の『心』の中を、堂々と見るができるようになったんだよ。けどね、世の中の人間というのは、実に多種多様で、奇妙な『心』を持っている。どれだけ法則を見つけようとも、次から次へと型破りは繰り返される。やがて僕は、その『心』を持つ『人間』というものに、強く興味を持つようになった。そんな頃さ、ある日突然、僕がこの世界に来れたのは」

人の心を紐解き、解明し続けてきた彼は、夢斗達と同じく「オーバー」の才能に導かれ、こちらの世界に降り立ったのだろう。

彼はさらに、異界・クレイドルについて語る。

「さすがに最初は、理解に苦しんだ。けど冷静に一つ一つを見ていくと、この世界の輪郭が見えてきた。手に入れたこの力を使って、僕は僕なりにこの世界を調べていた。そんな中、気付いたんだ。僕の診療所と、この城の一室が位置的に繋がっている事を」

息を飲む二人。夢斗らが察した事を表情から読み取り、彼は頷く。

「やがて僕はナグルファと出会った。彼は『オーバー』である僕を、自身の『改革』にはなから利用するつもりだったんだろうね。他の誰にも僕の存在を漏らさず、極秘裏に様々な事を教えてくれた」

「それが.....あんと、ナグルファの出会いってことか」

二人が出会うもっと前から、ナグルファという男の中には野心が渦巻いていたのだろう。歪ん

だ愛国心にとって、目の前に現れた「オーバー」は利用価値の高い、改革の礎と捉えられていたのかもしれない。

だが一つ、ナグルファに誤算があったとすれば、彼が思っている以上にこの羽多野という男は賢く、そして同時に壊れていた、ということだろう。

「あとはだいたい、君らが見てきた通りだ。僕は独自に魔法学や歴史を学び、その中で見つけた『心移し』を彼に伝え、計画は動き出した。王国が独自に保有していた『オーバーテクノロジー』も実戦で使えるように研究に手を貸したということだ」

それがこの巨大な騒動の発端だったのだろう。狂気にまみれた剣士は、突如として世界を超える異端者と出会い、彼に感化され、国王を傀儡にすり替えるという計画を思いつく。未知の武器と術を使い、邪魔であった獣人を駆逐する算段を立てていたのだ。

全てが繋がったように思えた。しかし、ここでリサが疑問を投げかける。

「ちょっと、待ってください！ あなたは何も文句を言わず、あのナグルファって人に従っていたんですか？ こんな大事になるって言うのに、なんで……」

「もちろん、僕だって目的はあったさ。僕と彼の目的が一致していた。だから今回の計画に賛同した。それだけだよ」

「目的だと？ 国王をすり替えること…それとも、獣人を殺すことか？」

だが、どちらもまるで羽多野という男に噛み合わない。彼がそれを思いつく、理由がないのだ。

羽多野はあくまで笑いもせず、泣きもしない。

少しだけうつむき、自身に訴えるかのように語る。

「さっきも言った通り、僕はこの異界・クレイドルにも興味はあったが、それ以上に『人の心』に興味は尽きなかった。僕が持っていないものを、こちらの世界の人々も当たり前のように持っている。たとえ獣の姿をしていても、たとえ剣と魔法の世界で生きてきても、やはり変わらずに『心』は持っている。僕はただ、その中身が知りたかったんだ」

首をかしげる二人。

しかし、すぐに語られた「真実」に、一瞬、思考が止まった。

「魔法の研究や『オーバーテクノロジー』の実用化。それとは引き換えにナグルファもまた、僕に協力してくれた。あっちの世界では絶対にできなかったこと———僕に『研究材料』をくれた」

その言葉の意味が一瞬、分からなかった。

まるでそんな二人の心中を読みきったかのように、思考を待たず、羽多野は言う。

ほんの少しだけ、その顔に影のようなものが張り付いた気がした。

「奴隷や捕らえた獣人だったな、初めは。彼らの『心』が知りたくてね。痛みを与えたり、辱めたり、色々な実験をしたよ。だけど最後は結局『心のありか』が知りたくなかった。だから———心臓の中を見たかったんだ」

ぞくり、とまるでつららが背中に当てられたかのようにであった。

そして、すぐに肉体が火照ってきてしまう。自身の鼓膜のすぐそばに心臓がやってきたかのよ

うに、鼓動音が肉体を打つ。

まさか———二人の嫌な予感を、彼は現実のものとする。

「よく『心』は脳にあるのか、心臓に宿るのかって論を聞くけど、僕は『心臓』じゃないか、と思うんだ。生まれながらにしてその人間の持つ『さが』というものは決まっている。それは他ならぬ、命を動かすための心臓にあるんじゃないかって。だから調べてみることにしたんだ。実際に、生きている心臓を切り開いて」

また一つ、どくんと鼓動が響く。夢斗とリサの体の奥底で、彼が散々「解剖」してきたそれが、恐怖に脈打つ。

「彼だって『心移し』を行うために死体は必要だった。そして僕だって人間の『心臓』が欲しかった。お互いの欲しいものを与えあった。それだけのことだよ」

なんてことだ——二人は一斉に気付く、そして恐怖におののく。

かすかに肩が震えていた。今まであんなに暖かかったはずの空気が、今ではやけに冷たく感じてしまう。あの男が、一気に冬を連れてきてしまったかのようだ。

富も名声もいない。地位や権力も、何もいない。

彼が欲したのは、ただ一つ。「心」を解き明かすという欲求だ。それが、自身が持たない「感情」を理解するための、最高の手段だと思ったのだろう。

だが、彼のその思想は歪んでしまった。

考えても考えても、けっして辿り着けない、その途方も無い命題。それを解き明かすため、ついに彼はある結論に達する。

限りなく荒唐無稽で。

限りなく稚拙で。

そして限りなく純粋な、まるで子供が抱くような願望。

心臓の中を見てみたい———ついに夢斗は吐き気まで湧き上がってきてしまう。口元を押さえ、必死に耐える。見開いた目は瞬きを忘れ、痛みすら覚えた。

この男は嘘など言っていない。心の底からそう思っている。自分の中に湧き上がった素直な願望を、ただ迷うことなく、夢斗らに告げている。

快樂殺人者ではない。悪意に満ち満ちた大罪人でもない。

どこまでも純粋で、どこまでも奔放で。

しかし、どこまでも狂気に染まった存在が、そこには立っていた。

絶句し、倒れそうにすらなってしまう二人。リサが必死に呼吸を荒げ、恐怖と戦っているのが分かる。

これが真実——この異界を巻き込んだ、殺戮劇の真相。

全てを知り、狼狽する二人に、それでもなお羽多野は変わらない波長で言う。

「君達の心の中は、一体どうなっているのだろう。君達の成長が、そこに詰まっているのだろうか。僕はただただ、それが見たい。それを知りたいんだ」

心臓を切り開いたから、何かが分かるわけでは無い。ましてやそこに、目で見える形で「心」があるなど、馬鹿げた話だ。

しかし、目の前のこの男は本当にそう「信じて」いる。そこに答えがあると。そこを見れば、何かが分かると。

狂っている――二人は戦慄し、羽多野という狂人を見た。

そんな彼の姿が、ついにふわりと宙に浮き上がる。今までと同様だ。魔法を唱えるそぶりなどまるでない。なのに重さを感じさせず、空中を漂っている。

身構える二人。震えを押し殺す夢斗達を頭上から見下ろし、心喰い・羽多野 充が言い放つ。「迷い、挫け、戸惑い、考え、感じ、笑い、泣いて、進んだ―――そうして出来上がった心は何の色をしている。そうして育った心はどんな形をしている。それをどうか、見せて欲しい」

二人の「心」を、凍てつくような感覚が掴み、離さない。ブルブルと内側から震える肉体。流れ出る汗、それがつたう手足の感覚が消え去ろうとしていた。全身の毛が逆立ち、ざわりざわりと風に揺れ、皮膚そのものを刺激する。

戦わなくてはいけない――二人はそう、心に決めてここに来た。数多の苦難を乗り越え、多くの人と出会い、そして別れてここまで進んできた。どんなことがあろうと、このくだらない戦争を終わらせる、という決意の元。

そこまで覚悟していたはずなのに、目の前の怪物に飛びかかることができない。向かってくる邪悪な存在に、敵意を向けることができない。

それほどまでに、彼のことが恐ろしい。同じ世界に生きている住人のはずだ。同じ髪の色、肌の色、国の言葉を持つ、何ら特別ではない日本人のはずである。

その内側に潜む、どこまでも黒く、どこまでおぞましく、そして――どこまでも純粋な「悪意」に、身動きが取れない。

怖気付いているのだ。肉体が、思考が、細胞そのものが「進むな」と叫んでいる。

駆け出してしまおうと、何度も心に鞭を入れた。だがそれでも、今まで従順に自身の意思を反映してくれていた体が、言うことを聞かない。

初めての経験だ。たった一人の人間――いや、純粋な殺意を宿した心喰いという存在に、体の芯から震えが止まらない。

歯を食いしばり、苦々しく前を向く夢斗。そのすぐ隣で、かすかな呼吸の音が聞こえた。

振り向くと、リサが両手で必死に胸を押さえている。小さな体はやはり震え、潤んだ瞳で前を向いていた。きっとそれは、夜の森で羽多野と対峙したあの時と同じなのだろう。本能に訴えかけてくる本物の「恐怖」に、肉体が縛り付けられ、動かない。

だがそれでも彼女は涙を浮かべながら、強い眼差しを捨てない。どれだけ小さな体がぶれても、青い瞳だけはじっと彼方の「黒」を中心に据え続けていた。

その姿を見て、夢斗の心が動く。だからこそ再び前を向き、震えを押し殺しながら言う。

「怖いよな。俺も、正直ちびりそう。こんなの、初めてだよ」

一言に振り向きリサ。彼女の視線を感じ、前を向いたまま精一杯苦笑いする。

「どうすりゃいいか、分かんないよ。俺を診てくれていた先生が殺人鬼で、その理由が『心臓を開いて見てみたい』だなんて。頭がどうにかなりそう。こんなの―――まともじゃない」

ぎゅっと拳を握りしめ、一步を踏み出す夢斗。

一瞬、脳裏に無数の場面が蘇った。それは今日この時まで歩いてきた、無数の記憶である。

過去を探し、リサと出会い、偶然にも迷い込んだ異界・クレイドル。そこで出会った、犬の姿をしたクラスメイト・光一。獣人達との戦いに巻き込まれ、やがてルガリアの兵士達とも刃を交えた。

集っていく仲間と、散っていった者達。

外に広がる茜色に、現実世界の風景が重なる。きっと今頃、あっちの世界でも、こんな燃えるような夕焼けが世界を染めているのだろう。

この世界のどこかに、今でも「皆」はいる――また一步、前に出る夢斗。風と共に肉体にまとわりつく恐怖に、耐える。

「でも、どうであれ、受け入れるしかないよ。これが真実――俺らの探してた答えなんだって。だから……だから、やらなきゃいけないことも、分かってるつもりだ」

振り返り、リサを見る。驚いたように目を開く彼女と、視線が交わった。

頷き、彼女の背中を押すように言う。夕焼けを浴び、光り輝く彼女に、またいつものような「太陽」の明るさを取り戻してもらうために。

「行こう、これで全部終わらせよう。こんなところで終わりたくなんてない。ここを超えてようやく――俺達は進めるんだ」

間違った戦いに終止符を。歪んだ悲しみに決着を。

そのピリオドを経て、ようやく夢斗達は本来の道を進むことができるのだろう。

いなくなってしまった「仲間」達を探すという、全ての「始まり」へ。

前を向く夢斗。

その背中に心を押され、ようやく少女も一步を踏み出す。

駆けぬける風。部屋の空気をかき乱し、暖かさと冷たさ、そこにいる三人の感情を混ぜ合わせる。

深呼吸をし、肺を空気で満たし、前を向いた。

こちらに向かい、優しい眼差しを向ける羽多野。茜色を背負う黒い影目掛けて、ようやく夢斗は真の「一步」を踏み出す。

大地を蹴り、急加速して前進した。止まっていた周囲の景色が流れ、次の一步でさらに肉体が加速する。

三步目で大地を蹴り、空中の羽多野に目掛けてまっすぐ跳んだ。向かってくる夢斗を見据えている「心喰い」。その顔面目掛けて、ついに吠える。

「やることは変わらない。あんたは止める――もう、迷わず、全力で蹴る！」

突風を生み、放たれる夢斗の蹴り。「オーバーテクノロジー」によって加速した一撃は、もはや人間の目では捉えることはできない。

炸裂音が空気を震わし、波を生む。衝撃波は部屋全体を軋ませ、リサの髪をかき上げた。

夢斗の脚甲を纏った蹴りは、羽多野に当たる寸前で止まっていた。しかし、足先に伝わった感触に夢斗は気付く。

何かいる――見えない何かが夢斗と羽多野の間に挟みこまれ、蹴りの一撃を受け止めている

のだ。

疑問に思っている暇はない。その「何か」を蹴る反動で、一旦後方へと身を引く。地面をこすって止まる夢斗。それとは交代するように、今度はリサが前に出た。

既に空中には巨大な「槍」が浮かんでいた。振り上げた拳を、あらん限りの力で前に放つ。少女の雄叫びと共に、槍はまっすぐに羽多野に飛んだ。

「いっけええええええええ！」

もはや手加減などしない。全身全霊を込めた躊躇なき一撃が、ぶれることなく羽多野の顔に迫る。

今度はガキーンという甲高い音と共に、空中で槍が止まってしまう。二人が息を飲むその目の前で、何かの力がめきめきと槍をへし折り、光の粒に変えてしまった。

やはり、羽多野は浮いたまま何もしていない。ただ向かってくる二人の力を静かに見据えているだけだ。

「もっとだ。きっと、もっとできるはずだろう」

羽多野は無表情のまま、さらなる攻撃を促す。この一言に、夢斗とリサは怒号で答えた。

「なめんなよ。もとより、こんなんで終わるつもりなんかねえよ！」

「そうです、見くびらないでください！」

再び駆け出す二人。高速移動が成し遂げる蹴りと、魔法の腕輪が作り上げる武器による猛攻が始まった。

交互に一撃を放ち、当てては退く、に徹底する。同じ方向から重ねて、時には左右に揺さぶるように豪快に、挙げ句は天井を使って真っ逆さまに――ありとあらゆる角度から、たった一人の人間目掛けて、二人の持つあらん限りの火力を叩き込んでいく。

しかし、まるで効果がない。やはり、なにか見えない力が全ての攻撃を受け、防いでしまう。

また一つ、今度はリサが「鎌」を作り出して投げつけるも、寸前でそれは受け止められ、強引にねじ折られてしまった。

「激しい攻撃ではある。まだまだ、君らの心が燃えていくのを感じるよ」

無表情で、無気質に言い放つ心喰い。羽多野目掛けて再び飛びかかり、夢斗は蹴りを放つ。

その高速の一撃も、やはり空中で受け止められた。しかも今度は足首を強烈に圧迫され、宙に吊り上げられてしまった。かつてと同様の現象に、声を上げる。

「くっそ、また――！」

瞬間、夢斗の体が浮き上がり、天井に叩きつけられた。衝撃に呼吸が止まり、視界が揺れる。

そのまま足を引っ張られ、下降する夢斗。真下に、大理石で作られた硬い床が見えた。

だが間一髪、落下する前にリサが間に合う。作り上げたハンマーで、下からすくい上げるように羽多野に襲い掛かった。その一撃はやはり止められてしまうが、夢斗の拘束は解け、なんとか受け身を取ることができた。

身を翻し、二人は再び構え直した。

「悪い、リサ。助かったよ！」

「ユアウェルカム！ けど……なんなんですか、これ。まるで歯が立たないです。あの力は、

一体…」

その気持ちは、夢斗も同様であった。かつて森の中で彼と対峙した時と、まるで同じなのである。

全く目には見えない謎の力に、手も足も出ない。理由も分からず、自身の力が無効化されてしまうということに、だんだんと焦りが湧き上がってくる。今だに無傷で宙に浮かぶその姿に、どうしても己の無力さを感じてしまうのだ。

焦る気持ちを抑え、夢斗は集中する。諦めれるからといって、進むのをやめれば未来は決まってしまう。足を止めれば、その先の「ゴール」など二度とたどり着くことはできない。

冷静に状況を把握する。だがそんな中、リサがぶるぶると首を振り、迷いを振り切って駆け出してしまった。

「ええい、面倒臭いです！ 答えがどうだろうが、やることは一つ——叩いて叩いて、叩くのみです！」

夢斗の制止も聞かず、彼女は武器を作り上げ、雄叫びをあげながら襲いかかった。ハンマー、斧、槍、鎌——ありとあらゆる武器を作り上げ、縦横無尽に力を叩き込み続ける。

荒々しい一撃はかわされたとしても地面を砕き、壁に穴を開け、粉塵を巻き起こす。美しかった展望台が、徐々に瓦礫まみれになっていく。

夢斗は必死に、つつこむタイミングを計っていた。隙を縫おうにも羽多野はそれを理解しているようで、事あるごとに夢斗の方に体を向け、警戒している。これではとても、奇襲は成功しない。

なんとかせねば——必死に羽多野を睨んでいるとリサがまた一撃、飛び上がってハンマーを叩き込んだ。

しかし鉄槌は受け止められ、砕かれてしまう。それだけに留まらず、ついに少女の足首をなにか見えない力が掴み、その体を振り上げた。

「きゃああ！！」

天地上下を失い、悲鳴をあげるリサ。彼女の体が大きく宙を走り、金色の残像を残す。

彼女の名を叫びそうになった。

だが目に飛び込んできた光景に、一瞬動きが止まる。

あれは、なんだ———駆け出す夢斗。向かってくる彼を見据え、羽多野は言う。

「猪突猛進ばかりでは、真実は掴めないよ。時には目をこらすことも——」

冷ややかに言い放つ心喰いの言葉を、夢斗は高速で駆けながら叩き返す。

「うっせえ！ 言われなくても、俺らは俺らなりに考えてんだよ！」

大地を蹴る夢斗。だが、その方向は羽多野ではない。高速で振り回される、リサ目掛けて跳んだ。

蹴りを放つも、その目標はリサなどではない。彼女の真横——何もない空間に蹴りがぶつかり、鈍い音を撒き散らした。

その不可解な衝撃で、リサの拘束がふっと緩む。彼女は空中に放り出され、ゴロゴロと転がって倒れた。

すぐ真横に駆け寄り、夢斗は彼女の安否を気遣う。

「大丈夫か、リサ!？」

「は、はい! だけど...なんですか、今の。夢斗さん、なにしたんですか?」

意外そうに顔を持ち上げるリサ。彼女の視線を受け止め、夢斗は続いて羽多野を見た。

「たまたまだったんだ。リサが戦う姿を見ていて、偶然見えた。あいつの周りには『あれ』が」

「あれ.....な、なんです、それ」

「よく見てみな。リサがいろいろ壊してくれたお陰で、見えやすくなった」

思わず少女は「ええ?」と驚きの声を上げる。夢斗同様、顔を上げて心喰いの姿を見つめた。

リサが大暴れしたせいで、床や壁、天井に至るまで、ボロボロに変貌している。そのせいでくもくと粉塵が漂い、部屋の景色が少し霞んで見えた。

羽多野はそんな淀んだ空気の中に浮かんでいた。黒いシルエットをじっと見るうちに、リサも「それ」を確認し、息を飲む。

羽多野の周囲に何かが動いている。空中を飛びかう塵によってその存在が浮き上がり、ようやく見えてきた。

しかも一匹ではない。数匹が羽多野の周りを取り囲み、まるで彼を守っているかのようだ。

二人の反応を見て羽多野は少しため息をつき、告げた。

「お見事。そうか、気付いたんだね。『こいつら』の存在に。ならもう、隠している必要もないか」

羽多野はそう言うと、なにやらぶつぶつと呪文を唱えはじめた。彼の体から紫の光が湧き上がり、蛍のように宙を照らし出す。

身構え、心喰いの出方を伺う二人。羽多野が両手を胸の前で打ち付けた瞬間、ついに「それ」の姿が空中に現れた。

再び絶句してしまう、夢斗とリサ。戦いによって固まりかけていた決意が、またもや揺らいでしまった。

一言で言えば、巨大な蛇だ。それぞれ赤、青、黄、緑の皮膚を持つ蛇のようなものが四匹いる。太さは羽多野の胴と同じくらいであった。

奇妙なことに、その蛇はどれも羽多野の「背中」から生えている。そして、二匹が羽多野の体を宙に持ち上げ、もう二匹は空中でうねり、彼を守っていた。先程まではその姿が魔法によって隠されていたが、あらわになる事で彼の「怪物」の姿がようやく二人にも理解できた。

蛇の目はない。先端にはただ、むき出しになった歯茎を持つ、大きな口のみがついていた。

「『心移し』の研究を続ける中で、色々な『禁呪』を見つけた。細胞を急激に成長させ、対象に力を与えるもの。擬似的な生命を生み出し、所構わず襲わせるもの。僕のこれも、そんな呪われた技術の産物だ」

おもむろに自身の上着を脱ぎ捨て、レザースーツのベルトを外す羽多野。彼の上半身があらわになり、透き通った肌が光を受けて輝く。

だが、そんな肉体美などよりも、二人は彼の胸についている四つの禍々しい物体に、息を飲む

そこにあったのは「心臓」だ。四つの心臓が皮膚の上にむき出しになり、張り付いたまま、どくん、どくんと音を立て、それぞれのリズムで鳴動している。

衣服も、魔術の衣も脱ぎ捨てた真の姿に、夢斗とリサは戦慄した。

「あんた……そんな、まじかよ……既に人を――」

心だけではない。彼はついに、人間までとうの昔にやめていたのだ。己の肉体に、彼が興味を持つ「心臓」を埋め込み、禁呪によって得た四つの「口」を携えて。

「興味があったから使った。便利だから使った――それだけさ。それをおぞましいと思うなら、思えばいいよ」

あくまで彼に感情の波はない。怒りも悲しみも、戸惑いも後悔も何もない。己の肉体を捻じ曲げることなど、そう彼にとって、躊躇すべき事ではないのかもしれない。

うねうねと動き、まるで各々が意思を持つかのように、威嚇する触手。

先端でガチガチと音を立てるその姿で、誰もが悟る。

あれこそが「心喰い」の由縁――多くの命を殺め、その心臓を食いちぎってきた、彼の「力」

異形の牙にて、数多の「心」を抜き取ってきた、羽多野が持つ真の刃。

あらわになったその姿に、息を飲む夢斗達。

確かに固めたはずの「心」が、それを狙う視線に怯え、確かに震えていた。

空中の二つの口が、こちらを向いた。そして少し反動をつけ、何かを発射する。その一撃に気付いた二人は、反射的に飛び退いた。

先程まで二人が立っていた地面が、轟音と共に弾ける。飛んでくる瓦礫を腕で防ぎ、慌てて前を向きなおした。

真っ先に気づいたリサが、夢斗に吠える。

「右側の口です！ 気をつけて！」

彼女の言うように、また右側の口が「それ」を発射してくる。飛び退くと、次から次へと足元に穴が開いた。もし立ち止まっていれば、肉体が吹き飛ばされていただろう。

逃げ惑う二人に、さらに羽多野は追い討ちをかける。

「痛いのが嫌いなのか、熱いのが嫌いなのか、どっちだろう？」

瞬間、今度は左側の口がありったけの炎を吐き出した。一瞬で温度が上がり、床に火炎は広がっていく。迫る紅の絨毯から、慌てて二人は身を引いた。

火の海の中、ついに羽多野が動く。背中から生えた触手を巧みに動かし、天井や床を掴む――いや、むしろ「噛む」事で、肉体を移動させている。その異様な光景に、二人はようやく理解した。

今まで彼が宙を移動していたのは、あの腕を見えないように隠し、こうやって成し遂げていたのだ。

天井にぶら下がった羽多野は、今度は青色の触手をこちらに向ける。

「それとも、寒いのが嫌かな。どうだい？」

その優しい一言に嫌な予感がした。そして、それは当たってしまう。

口を開いた青い触手から、凍てつくような冷気が放出された。避けようにも、火炎で逃げ場がない。

とっさに前に出て「盾」を作り上げるリサ。受け止めるも、冷気によって盾の表面がみるみる凍っていく。凍てつくような寒さに体の芯までが一気に冷え、周囲の炎すら消えてしまう。

吹雪に耐え忍ぶ二人に、さらに一撃を叩き込む羽多野。

「だが、やはり痛みか。直接的に、より鮮明に恐怖を与えられるのは」

残った黄色い触手の「口」が開く。そこから圧縮された岩石が発射され、リサの盾目掛けて砲弾のように突き刺さった。岩石は炸裂した瞬間に砕け散り、まるで散弾銃のように盾を氷もろとも吹き飛ばす。悲鳴をあげ、夢斗とリサは倒れてしまった。

痛みに歯を食いしばり、それでも前を向く二人。熱さ、冷たさがあべこべに肉体を襲い、混乱してしまいそうになる。

ガシガシと音を立て、触手によってぶら下がったまま羽多野は近付いてくる。どくどくと動く四つの心臓はそれぞれの色に鳴動し、おぞましい音を響かせていた。

「便利な力さ。今では自身の手足のように、自由に動かされる。だけど幾つも心臓を持ったとしても、やっぱり『心』についての本質は理解できなかった。力を得た愉悦も、僕にとってはどうでもいい感情さ」

間近に迫り、羽多野は「氷」と「土」の二つの触手を持ち上げ、先端の「口」を開く。並んだ大きな白い歯が何度も噛み合い、音を立てているのが見えた。

「教えて欲しいんだ、夢斗君。君達は一体、なんでここまできた？ 君が失った過去を取り戻したいって言うことと、この戦争は別の話のはずだ。君の友人らだって避難させておけば、どうにでもなったろう。それをあえて戦火の中に進み、そこまでして意地になる理由はなんだい」

荒ぶる力を抑え、二人を見下ろしながら問いかける心喰い。その目は相変わらず、感情の波など感じない。色もなく、ただ淡々とした質問事項をこなしているだけに過ぎない。

カウンセリングを行っていた、あの時と変わらぬ瞳――だからこそ、夢斗達は戦慄してしまう。人の命を奪い、罪を認め、怪物の姿をさらした彼が、それでも日常と変わらぬ目をしている、と言うことに。

「誰かを救いたかったから――そういう答えは、望んでないんだ。リアリティがまるでない。自分の血縁でもない、知り合いなだけな存在を守るために、命なんてかけられないだろう」

数多の「心」を解きほぐし、そしてある意味「操作」してきた羽多野の手腕が、二人を追い詰めつつあった。固めたはずの決意を、無理矢理に解きほぐされる。暴力や悪意でない分、夕チが悪い。あたかも味方であるように己の心に寄り添い、そして心の「壁」を超えてくる。

心を追求し、心を求め続けた男が、再びカウンセリングを行おうとしていた。夢斗のためではない。その中に存在する「心」を自身が理解するため。

身構えたまま怪物の姿を見つめ、それでも二人はその言葉で考えてしまう。

彼の言う通りだ。夢斗は元々、この異界・クレイドルに、失った過去の記憶、そして「友人」らを探すために戻ってきたのだ。

戦争を終わらす理由も、あえて危険に飛び込む必要もない。それこそ「利害」という意味でいえば、最小限にする方法はいくらでもあったはずだ。

おそらく羽多野という男にはそれが、純粋に不思議でならないのだろう。

「『正義』だの『大義』なんていう表面上のものでは、人はどこかで折れる。だから、君達のはそういう不確かなものではないはずだ。教えてくれ。何がそうさせた。それともやっぱり『心』の中を見てみないとだめだろうか？」

彼が伸ばした触手の先の「口」が、またガチガチと音を立てて近付く。正義や大義を剣に乗せた、ナグルファや王国の人々をきっぱりと否定しながら、羽多野は夢斗とリサの「心」を喰らおうと、迫った。

身動きできず、返答すらできない二人。

しかし、そんな両者に割って入るように、突如、数発の矢が飛来した。

羽多野の「口」が空中でそれを捉え、砕く。触手は受け止めた矢を、そのままバリバリと食べてしまった。

振り向くと、展望台には仲間達が到達している。

「うっわ、なんだあれ...まるでホラー映画じゃんか」

矢を構えたまま、驚く光一。キリウとルーメルも、羽多野のおぞましい姿に目を見開いていた。

「あれが『心喰い』か。予想以上にえげつない格好やなあ。まあ、黒幕らしいっちゃ、らしいがな」

「醜い...ナグルファもそうだったが、それ以上だ」

駆けてくる彼らに対し、羽多野は「風」と「岩」の口から、それぞれ圧縮空気と岩石の弾を発射する。攻撃に少し驚きつつもルーメルが剣で岩石を、キリウが斧で圧縮空気を叩き落とし、そのまま前に出てくる。

突然の援軍にも、羽多野は至って冷静に言葉を投げかけた。

「不可思議なものだね。それだけボロボロなのに、まだあえて進もうとする。君達ももしかして、僕みたいに恐怖を感じないのか？」

彼が言う通り三人の姿はボロボロだ。羽多野が放った怪物の相手は、一筋縄ではいかなかったらしい。皆、傷だらけで、装備も激しく破損している。

だがそれでも、後方で矢をつがえた光一が吠えた。

「怖くないわけじゃないじゃんか。ここに来るまで、いつだって怖かった。こうしてる今だって、正直、逃げ出したいくらいだよ！」

心境を吐露する光一に、羽多野は「なら、なぜ」と問いかけた。こちらを向く怪物めがけて、小さな狩人はそれでも己の中に抱き続けていた、思いを吐き出す。

「だけど、色んな人達が託してくれた。それで、背中押された『友達』が、行くって決めたんだ。僕だけ何もしないまま引きこもってるなんて、ごめんだよ」

彼の一言に、息を飲む夢斗とリサ。不敵な笑みを浮かべ、キリウも斧を持ち上げる。

「こんなナリになっても、こうしてせっかく数ヶ月ぶりに会えたんや。話したいことなんて、山

ほどある。せやけど、そんなダチを世界ごとあんたが巻き込もうって言うなら、んな厄介なこと、絶対にごめんや」

ワニの目に力強い炎が宿るのが分かる。

彼らに続き、ルーメルも剣の切っ先を持ち上げ、毅然と告げる。

「ここにいる皆が誰かに背中を押されて、ここまで来た。私だってそう——彼女が私を生かしてくれたことを、しっかりと覚えている。その託してくれたものを『恐怖』程度で捨てたくはない」

かつての「友」の声が、羽多野だけではなく、夢斗達の胸にも刺さった。

光一達の答えに、少しだけうつむく羽多野。だが彼の目に宿った無色の狂気は、けっして消えてはくれない。

「支えや友達。それが作る『繋がり』か——それが生むのは、見えないものに価値を見出す『美德』か。自己満足で動くというのも、知能を持つ人間独特か」

ぶつぶつと呟き、分析する殺人鬼。光一達が抱いた「決意」も、彼にとってはただの心理学の事象としか捉えられていない。

一同の不意をつくように赤い触手が口を開き、大量の火炎を吐き出した。熱波に悲鳴をあげ、顔を覆うルーメル達。

「だとすれば、それはどれくらい強固なものなんだろうか。見えないものを頼りに、どれだけ耐えられる。どれだけ進めれる？ 今度はそれを、教えてくれ」

さらに触手が火炎を吐き出し、一面を紅蓮に覆う。とっさに光一が腰の瓶を大量に砕き、水を球状に変化させ、大きな膜として展開した。水魔法の応用で、荒ぶる火炎からキリウ、ルーメルを守る。

だが火炎の勢いが増し、水球を押しつぶそうと襲いかかる。じりじりと迫る業火に、武器を構えたまま歯噛みする三人。

苦しむ仲間達を見て、駆け出そうとする夢斗。だが一步を躊躇してしまう。こちらに向かってガチガチを歯を鳴らしている触手。そして火炎に浮かび上がる羽多野の身の毛もよだつような姿に、心が縛り付けられている。

淡々と、冷酷に、怒りも何も浮かべずに「実験」を繰り返す男。いかに人が「心」だけで進めれるか。いかに人が「心」で乗り越えられるか。そんなことを、ひたすら理不尽に、彼はこの場ですら試している。

光一、キリウ、ルーメルが体を寄せ、業火に飲み込まれようとしていた。すでに水球の中にも熱は伝わり、光一は青く光る目のまま、必死に歯を食いしばって耐えている。

炎の触手は一度大きく息を吸い込み、駄目押しに火炎をばら撒こうとした。

しかし、吐き出そうとした炎は「ゴウン」と言う鈍い音で止まる。水の魔法で一気に消火する光一。水浸しになった床の上で、一同は羽多野を見つめ、思わず「あっ」と息を呑んだ。

夢斗もまた目を見開く。気が付いた時には、すぐ横にいたはずのリサが駆け出し、飛び上がって「ハンマー」の一撃を炸裂させていた。炎の触手がぐらりと歪み、苦しそうに口を開けている。かすかに火炎が漏れ、行き場を失っていた。

そんな彼女に、風、土の触手が襲い掛かった。食らいついてくるそれを「盾」で防ぐも砕け散ってしまい、牙が肩をかする。真っ赤な血を吹き上げながら、リサは地面に落ちてしまった。

「リサあ！！」

叫び声をあげながら、夢斗はやっと駆け出すことができた。うずくまる彼女に触手が牙をむいて降り注ぐも、間一髪、夢斗はリサを抱きかかえて離脱する。行き場を失った触手は地面の大理石を噛み砕き、えぐった。

光一達の元まで後退し、リサを下ろす。苦しそうにする彼女の肩からは、どくどくと黒ずんだ血液が溢れ出て、ローブを濡らしていた。

「リサ、しっかりしろ、おい！」

脂汗を浮かべ、苦しそうに歯を食いしばるリサ。だが、それでも彼女は笑みを浮かべた。

「これくらい...なんとも、ないです.....それより、お願いします。私を...立たせてください」

痛みをおして、それでも力強く言い放つ少女。その理由は分からないが、とにかく夢斗は肩を貸し、彼女を立たせる。ふらつく少女の姿を、すぐ後ろにいる光一達も不安げに見つめていた。

再び、リサは羽多野に対峙し、そして大きく息を吸い込んだ。

無表情でこちらを見つめる怪物めがけて、彼女の温めていた思いが弾ける。

「甘ったれないでください！」

あらん限りの力で叫ぶリサ。その小さな体から放たれる怒号に、夢斗らは目を見開く。歯を食いしばり、彼女は明らかに怒っていた。せえせえと肩で息はしていても、意識を失わず、はっきりとした意思の炎が瞳に宿る。

「心の中が見てみたい？ 心が知りたい？ それでいて、自分は罪を犯してると分かっていますって？ 馬鹿も大概にしてください！」

強く、ただ強く言い放つ彼女の姿を、心喰いだけでなく、全員が見つめた。肩を貸す夢斗の手に、熱さと力強さが伝わってくる。

「あなたが生まれつき心を持っていないことは、不憫だと思います。あなたが歩んできた過去も、そこにあった苦しみも。でも、あなたはそれを使って、今までのすべての『わがまま』を正当化しようとしてるだけです。自分がやった罪に開き直り、他人の痛みを考えようともせず、自分が理解できないから他人もどうでもいいって、全てを捨てただけです！」

絶えず肩から血が溢れ出て、ついには夢斗の腕も赤く濡らす。しかし、そんな暖かさなど、もはやどうでもいい。己の命を削ってでも少女が言い放つ言葉の一つ一つを、しっかりと刻み込む。

「悩んで、考えて、苦しんできたのはあなただけじゃないです。私達だっていつだって考えて、ここまで来ました。何が正しいのか、何を信じるべきなのか——今だって、全てが正しかったなんて言い切れない。だけど、せめて『正しい』と信じる場所を歩いていたい。だから痛くても、怖くても、ここにこうして立ってます」

どくん、と全員の鼓動が高鳴った。この世界に来るまでの「いままで」が、急激に夢斗の記憶に蘇り、駆け抜ける。

「あなたは、そんな人達が抱いた『正義』や『大義』——大切にしていた『信じるもの』を利用

して、私利私欲のために行動した、ただの悪党です！ そんな人に、人間の『心』なんて一生分からない。考えることをハナから捨て去ったような人が、思いあがらないでください！」

彼女の言葉に、ぶれていた「心」が再び固まる。まだ世間を知らない高校生の少女。だが彼女は彼女なりに、今日この時、この場所まで進んできた「道」がある。彼女なりに考え、苦しみ、それでも一步を踏み出そうとしたその「決意」の理由がある。

そんな少女に向かって、やはり「心」に寄り添うように、あくまで柔らかい口調で悪魔はささやいた。

「なるほどね。つまるところ、人というのは『正義』や『大義』という『自己満足』の上に成り立っている、ということか。なら納得するよ。君達が理不尽を受け入れる理由も。そうか、ある意味、まともではない。人としての『理』から外れすぎている。分かりやすいケースにはめても、理解はできないか」

リサの主張を受け止め、噛み砕き、感情なく叩き返す羽多野。

一同は歯噛みし、武器に力をこめて怪物を睨みつける。

「他人の痛みを理解しようとするのも、間違いを正そうとするのも、つまるところ全ては『自己満足』に他ならない。自分自身が正しい場所にいる、負い目のない人生を送っているという納得。それこそ、人間が欲するものというわけか」

ついにそこまでを噛みしめ、怪物は動く。触手が大きく持ち上がり、両の口を開いた。

「だけど、やはり不可解だな、その『心』。そんなものが痛みを超越できるのか。恐怖を乗り越える武器になるのか——やっぱり、中身を見てみないと分からないか」

がちん、がちん、と歯を鳴らす「口」。殺人鬼はついに次のプランを決めたいらしい。

「君達はすぐには殺さない。行動不能なくらいにとどめておいて、貴重な『サンプル』として持って帰りたいんだ。これからの僕の実験に、役に立ってもらいたい」

それはすなわち、夢斗らの心を開く——つまるところ「殺す」ということを指し示しているのだろう。恐怖と緊張が身を包み、全員が身構える。

歯を食いしばり、汗を浮かべ、宙に浮いている心喰いを睨みつける。

おそらく次の激突が最後だろう。もはやこの怪物もこれ以上、問答を続けるつもりなどない。だが、そんな中でも、夢斗は仲間達の顔を見渡した。

光一は戸惑いの色を見せつつ、それでも矢の切っ先は羽多野に向いている。キリウ、ルーメルも同じだ。自身の意思を刃に乗せ、最後の最後までこの怪物と対峙する覚悟を決めている。

すぐ隣に立つリサも肩を借りたまま、残った手をゆっくりと持ち上げていた。金色の腕輪が光を放つ。そこに宿った魔法——彼女の意思を体現する数々の武器で、この脅威に立ち向かうつもりだ。

誰一人、退く気などない——だから、ここまでこれたのだ。ズタボロになり、時に悩み、止まり、真実を受け止め——それでも、ここまでこれたのだ。

夢斗の中で、ある思いがはじける。

ふっと前を見て、こちらに対峙する心無き怪物を見つめた。

肉体の奥底で跳ねる、確かな鼓動が、それでも少しだけ静けさを取り戻していた。

夢斗は近くにいたルーメルに告げる。

「委員長、ごめん。リサをお願いできるか？」

唐突な願いに皆が驚く。リサも夢斗の顔を見上げ、口を開いていた。

「ああ、かまわないが...どうした、諸星」

それには答えず、夢斗はリサを預けた。彼の強い眼差しに、誰もが目を奪われる。

仲間達の視線を感じつつも、一步、夢斗は前に出た。

そして、大きく深呼吸し――心喰いを睨む。

「『自己満足』じゃあ、だめなのか？」

たった一つのはっきりと通る言葉。羽多野は首を傾げ、再び問いかける。

「どういうことだい、それは」

「『自己満足』で前に進んじゃあ、だめなのか、って聞いている」

しっかりと前を向く夢斗。鋭い眼差しに力がこもり、確かに怪物を見据えている。

「あんたの言う通りだ。『正義』だのなんだの言っても、結局それは、俺ら一人一人が勝手に決めたルールに過ぎない。いつだって、そう――俺らは俺らなりに、進むためになにかを抱き続けてきた。そうやって『心』を決めてきた」

恐怖に体が揺れる。それを、爪が食い込むほどに拳を握り、制する。

「正しい自分でいたいから、後悔したくないから――自分で納得できる『道』を進んでいたいから――それで進んできた。いつだって、今だって。俺らの『大義』なんてそんなもんだ。あんたが言ったとおり、きっと誰かが見れば、まともじゃあないんだろうな。でも――」

また、今まで歩んできた「道」から見えた光景が、蘇っていた。

現実世界と異界。二つの世界を巻き込んだ、過去と今の出会い。空白を埋め、再び動き出した奇妙な世界。

怪物の後ろに、夕焼けが見える。茜色が染め上げた景色に、少しだけ目がくらむ。そこに広がる「今」を受け止めながら、言い放つ。

「何が正しいかは、自分で決める。誰かが言っているから、じゃない。何かを見て、何かを聞いて――全部を使って、自分の『心』で」

彼の決意に答えるかのように、風が吹き込み、戦場の熱を少しだけ奪い去る。

凜として立つその姿に、息を飲んだのは羽多野だけではない。後ろで見つめるリサ、光一、キリウ、ルーメルは、言葉を失う。

夕焼けを背負って立つ彼の姿が、なぜかいつもより大きく感じる。

「あっちだろうが、こっちだろうが――世界が変わろうが、そこに人が生きていれば、きっとそうなんだろう。誰だって同じ、そうやって日々を生きているんだ。自分で決めたコースを、がむしゃらに、脇目もふらず必死に走ってる。自身が納得したいから。進んできた道に満足したいから」

ふっと脳裏に、母が言ったあの言葉が蘇っていた。

自分のコースくらい、自分で決めな——夢斗の中の震えが止まる。リラックスし、しかし強い眼差しはそのままに、身構える。

「あんたは、その『コース』を妨害したんだ。前に進んで、その先へ向かおうとした人々を踏みにじった。当たり前のように走れるはずの彼らを、自分の欲のためにくじいた。リサの言ったとおりだ。あんたは自分の『心』を言い訳にした、ただの——悪党だ」

腰を落とす夢斗。その体から発せられる言い知れない圧を、誰もが受け止める。

恐怖はない。リサ達の心が、彼の姿勢に奮い立つ。今日、この時まで全力で走り続けてきた、彼の導き出した答えに、固めた「心」に。

不器用で、頑固で、未熟な夢斗という「心」の形が、少年、少女の「心」を感応させ、震わした。

「俺らの走る先も邪魔するっていうなら、もうそれでいい。やりたいようにやればいい。だけど、止まってやるっていう選択肢はないんだ。俺は行くよ——前にあるものを強引に押し切っても、絶対に行く。そう決めた。だからここに来た！」

燃え尽きるつもりなどない。命を消して良いとは思わない。夢斗にとって、ここを超えた先に、やっと「始まり」があるのだ。

不確かではあっても、そこに確かにある「芯」の強さが、伝わってくる。時に戸惑い、時に落ち込み、時に嘆き——だがそれでもこの夢斗という少年は、止まるということだけはしなかった。迷いながら手探りで、たとえ遅くてもしっかりと、自身の足でここまで自分が決めた「コース」を走ってきた。確実な一步が刻まれる度、肉体に熱を宿し、ほとばしる痛みに歯噛みし、それでもなお前を見続ける。

彼の過去を知る光——そして桐生、金城という少年、少女にも、ある光景が蘇っていた。

何か問題が起こった時、たとえ自分に関係なくても、この夢斗という少年はいつも最後の最後まで悩んでいた。クラスの問題もまるで自分のことのように考え、解決できる手段をひたすらに模索していたのである。

他人の全てを理解できるわけではない。人間は生きていく上で、時には何かに目を伏せ「しかたがない」「そういうもの」と割り切るという手段で、過剰な負荷から逃れることもあるのかもしれない。学生の世界でも、社会に出てからも、その縮図自体はきっと変わらないのだろう。

そんな中で、それでも夢斗は他人のことを考え、他人のために「心」を動かし続けていた。そんな静かな頑固者だからこそ、彼は無意識に人を惹きつけていたのだろう。彼の中に潜む不器用な優しさを知っているから、誰もが彼を慕い、人の輪が出来上がっていたのだろう。

前に進み続ける者だけが持つ、光——旧友である三人だけではない。共に「オーバー」として出会いこの世界にやってきたリサもまた、すぐ隣に立つ彼から確かな輝きを感じていた。

怪物・心喰いは夢斗の決意を受け止め、考え込んでいた。しかし彼の表情が揺らぐことはない。ただ淡々と冷静な眼差しのまま、頭上から言い放つ。

「ここにいる全員の中でやはり、君はどことなく抜きん出ているらしいな。実に興味深い。あの時も確かに感じたんだ。あの夜——森で君と対峙した時に感じた、あの湧き出すような力。その正体をもっと見てみたい」

触手で天井からぶら下がり、浮き上がったまま己の両腕を広げる羽多野。怪物は陽光を背負い、告げる。

「乗り越えてみてくれ、夢斗君。君らにとっての大きな、大きな障害。それを乗り越える時に見せる『心』の煌めきが見たい。もっとも輝くその瞬間、君達の『心』を開いて見てみたい」

それは言葉こそ違えど、はっきりとした「殺害予告」だったのだろう。戦いの中で成長し、夢斗らの中に力が満ちに満ちたその時、羽多野は彼らの「心臓」を抜き取る。その中に宿っていると彼が決めた「心の光」を求めて。

もはや、それを馬鹿げた思想だなどと言う気もない。夢斗はさらに深く腰を落とし、簡潔に答える。

「あんたには、曲がりなりにもカンセリングしてもらった恩がある。でも、悪い。それだけのごめんだ。心臓はやれない、俺は――」

瞬間、夢斗の中の力が弾ける。足元の「オーバーテクノロジー」が光を放ち、ガシャリ、と音を立てて機構を展開した。金属の羽を宿した脚甲は、宿主の「覚悟」に呼応するかのよう肌を通じ、肉へ、骨へと力を流し込む。

踏み込んだ一歩と共に、夢斗は鋭い眼差しを前に向け、吠えた。

「最後まで走りきりたいんだ！」

今までで最速、最大の力で前に跳び出す夢斗。その場で彼の速度についていけたのは、他ならぬ怪物のみであった。真っ黒な残像を残し、一瞬で距離を詰め、蹴り込む。羽多野の「土」の触手が岩石を纏い、突き刺さる蹴りを受け止めた。

轟音と共に大気が揺れ、突風まで巻き起こる。砕けた岩石が地面に落ちる前に、後ろへと跳び、今度は角度を変えて突進する。

それはあまりにも浮世離れした攻防だった。

瓦礫を撒き散らしながら縦横無尽に駆け巡り、怪物へと襲い掛かる夢斗。黒い残像が幾重にも重なり、ただひたすらに飛びかかっては蹴りを叩き込み続ける。羽多野は宙にぶら下がったまま残った二本の触手を巧みに操り、あらゆる角度から襲い来る夢斗を防ぎ続けた。炸裂音や床、天井、壁の碎ける音が、まるで映像と噛み合わない。それほどまでに他者を置いてきぼりにした、速度と速度のぶつかり合いが展開していた。

負けてられない――その猛攻の嵐の中へ、リサが駆け出す。血をポタポタと撒き散らしながら、歯を食いしばり、怪物の姿をにらみながら。少女は飛び上がりながら巨大な「槍」を作り上げ、まっすぐ撃ち放つ。

「おっらあああああああ！！」

あの強烈な雄叫びと共に、腕を振り抜く。大砲のように発射された槍は空気を貫きながら羽多野に迫るも、寸前で土の触手に掴み取られ、へし折られてしまった。

羽多野は天井に食らいついていた「炎」の触手を離し、先端から火炎をリサ目掛けて吐き出す。触れれば一瞬で炭へと変えられてしまいそうな、勢いを持った火炎だ。

しかし、リサの背後から飛来した「水の矢」がそれを貫く。一手先を読んでいた光一が、すでに「飛び魚の矢」を放ち、火炎を打ち消していた。数発は蒸発してしまうが、さらに放たれた数

発が後を追い、羽多野に襲い掛かる。

赤い触手に突き刺さり、その動きを鈍らせた。その一瞬の間を逃さず、夢斗が飛びかかる。

それを察していた光一が青く光る目のまま、牙を剥き出しに吠える。

「夢斗君、今しかない！」

「分かってるよ、ありがとう！」

礼を述べながらも、跳び上がって羽多野に襲い掛かる夢斗。だが絶妙のタイミングでも、心喰いは対応してしまう。土の触手が再び岩石を纏い、夢斗を空中で受け止めた。

初めて、間近で羽多野と視線が交わる。

「こんな一瞬の間じゃあ、残念だけど、やられてはあげれないな」

無表情、そして無感情で言い放つ羽多野。

だが誰も夢斗の一撃を「失敗」などと、思っていない。

凶暴さを剥き出しにし、夢斗は至近距離で言い放つ。

「誰もお前なんざ、最初から狙ってねえよ」

一瞬、羽多野の目が見開かれた。すでに夢斗は触手を蹴り、再び加速する。

彼の狙いは羽多野本体ではない。

光一が動きを怯ませた、あの赤い触手だ。

まっすぐ、触手の「口」に叩き込まれる蹴り。渾身の一撃は触手の「口」を砕き、牙を散らす。口から漏れた火炎がズボンに焦がし焼いたが、それでも夢斗は止まらない。

「もう一発——！」

研ぎ澄まし、鋭く、差し込むかのように言葉を放つ。瞬間、もう一方の足から放たれた蹴りが更に触手へと突き刺さり、ついには先端に付いていた「口」を粉々に粉碎した。

羽多野にとって予想外の一撃だったのだろう。四本のうち「炎」を司る赤色の触手はだらりとぶら下がり、動きを止めてしまった。

効いている——誰もが戦いの中で、初めて効果を実感する。

着地した夢斗に照準を合わす羽多野。

しかし、今度はワニ男の無骨な咆哮が響いた。

「オラァ、ぼさっとすんなや、心臓マニアあ！！」

振り返ると、すでに至近距離に到達し、大地を蹴ってキリウが飛んでいた。両手に握んだ大斧を振りかぶり、あらん限りの力で叩きつけてくる。目が真っ赤に光り、分厚い刃を中心として、火炎が渦巻いていた。

この一撃を「水」を操る青い触手が受け止める。ドゴンッという鈍い音の直後、渦巻く「水」の力でキリウの炎が蒸発し、白い煙を上げてしまう。

効果なしか——着地するキリウに、羽多野はすぐさま照準を合わせる。青い触手だけでなく「風」を操る緑の触手も口を開き、力を蓄積している。至近距離で「水」と「風」の圧縮弾がキリウ目掛けて発射されようとしていた。

しかし、遠巻きで見ていた夢斗、リサ、光一がいち早く気付く。火炎が巻き起こした白い蒸気に紛れ、緑色の美しい長髪がふわりとなびいていた。

不敵なキリウの笑みに、ついに羽多野も気付いた。着地し、腰を落としたワニ男。その大きな背中を「駆け上がり」、女剣士が跳び上がる。

ルーメルが――学級委員長・金城　しおりが剣を振りかぶり、至近距離で殺気を解き放つ。「あいつと同じだ。私だって決めた――お前は、斬る！」

瞬間、長剣が甲高い音を立て、左、右と「無限」の軌道を描くように薙ぎ払われた。凄まじい速さの二連撃が水、そして風の触手をまとめて叩き斬る。傷口から鮮血がほとばしり、宙を真っ赤に染めた。

鮮やかな姿に夢斗らから歓声が上がる。そんな中、心喰い・羽多野はついに揺らぎ、天井に食らいついていた残る一本――「土」を操る黄色い触手が外れてしまった。地面に落ち、がくりとうなだれる殺人鬼。

すぐさま「岩」をまとった触手でキリウ、ルーメルを薙ぎ払った。二人は悲鳴と共に弾き飛ばれてしまう。

しかし、吹き飛ばした二人の代わりに、前に出てくる少女と目が合う。

リサが「ハンマー」を作り上げ、至近距離でぶつけてくる。羽多野も反射的に飛びのき、それを「岩」の触手で迎撃した。打撃と打撃が宙でぶつかり、轟音と火花を撒き散らす。

腕を振るたびにリサの肩の傷から血が溢れ出ていた。体を動かすたびに、食いちぎられた傷口は焼けるような激痛を放つ。

それでも彼女は止まらない。一撃、二撃と、ひたすらに打ち込む。腕を振り抜き、前に踏み込み、怪物との距離を詰め、戦う。

どんなに痛くても、どんなに怖くても、まるで止まる気になどなれない。

彼は進むと言った。走りきると言った。

なら、自分も一緒だ――もう、こんな奴のために、止まってやるつもりなんてない。

ついにはリサ、そして真横から飛びかかった「彼」の口から、雄叫びが上がっていた。真っ向からハンマーをぶつけるリサ。縦横無尽に駆け抜け、蹴り込む夢斗。

対峙する二人の少年、少女。そしてそれを土の触手で受け止め、裁き続ける殺人鬼。

期せずして出会った三人の「オーバー」は、痛みと熱を肉体に宿しつつも、それでも全力で己の「決意」をぶつけ合う。

遠巻きに見ていた光一達にも、ようやく分かった。

徐々に、少しずつではあるが羽多野が後退しつつある。一撃も当たらない夢斗の蹴り、リサのハンマーが、それでも怪物を押し、後ろへと追いやっていく。

何度も重なる轟音。繰り返される猛攻に、ついに「土」の力が間に合わなくなってしまう。砕け散った「岩」を再び纏い直そうにも、その前に衝撃が岩を砕き、散らしてしまう。

ついに触手は丸裸になった。その瞬間、夢斗は右、リサは左から互いの「武器」を叩き込む。

一瞬、反応が遅れた触手に、左右から挟み込む形で打撃と打撃が炸裂した。

重なった衝撃が触手の「口」を粉々に砕き、無残に破壊してしまう。その一撃で、残されていた黄色い触手もまた、活動を停止してしまった。

弓を構えていた光一、そしてキリウが思わず声を上げる。

「おっしゃあ、ナイス合体技あ！」

「最後の一本や、もうアイツに手段はない！」

ゼエゼエと息をしながら、ようやく夢斗とリサは止まる。彼らのすぐ目の前で、フラフラしながらなんとか顔を持ち上げている羽多野がいた。

汗一つかいていない。しかし、どこか無表情な中にも彼は驚きの色を見せていた。

動かなくなった赤い触手を手で触り、信じられない、といった様子で呟く。

「凄まじいものだな。痛みを与え、恐怖を与えたのに、元の何倍も強くなって更に向かってくるなんて」

怪物の腕を四本失い、啞然としている羽多野。ルーメルは彼に剣を向け、言い放つ。

「ここまでだな。観念しろ、もう逃げれんぞ」

顔を上げ、こちらを見る羽多野。美しい顔の男に、汗と血にまみれた少年、少女が言い放つ。

「逃げるなら逃げりゃいいさ。だけど、覚悟しろよ。どこまで行っても、絶対に追いついてみせる！」

「悪あがきするのも、もちろん結構。だけど、私たちのやる事は変わりませんから！ もう、人を傷つけさせたりなんかしない。なにしようが、ぶっ倒します！ ドゥ、ユー、アングスタン！！」

油断などまるでせず、次の一撃に備える夢斗、リサ。どれだけ疲弊していても、もはや関係ない。羽多野がどう足掻こうとも、次の一撃で決めきるつもりだった。

こちらに向けて、敵意をむき出しにする少年、少女の顔を、羽多野は一望した。各々の武器を構え、まるで退くつもりなどない彼らを見て、ため息を漏らす。

「やっぱり、君達は実に興味深い素材だ。大人になるにつれ手放していく、成長する『輝き』——理論、理屈をはねのけ、理不尽なまでに進化する『未熟な心』。僕が見込んだとおりだ」

ここまで追い詰められているにも関わらず、それでも羽多野はどこか嬉しそうにすら見える。夢斗らはジリジリと距離を詰め、彼の出方をうかがっていた。

また一つ、風が展望台に吹き込む。

徐々に夜の冷たさをまといつつあるそれが、ざわり、と一同の肌を撫でた。

夕日を背にして立つ羽多野は、影を被せられたその顔で、ついに笑う。

「良かった、本当に——君達に賭けてみて、良かった。ありがとう、ここまで辿り着いてくれて。こんな興味深い『心』の中身を、五つも見る事ができるんだからね」

一言に、息を飲む一同。

瞬間、羽多野の胸に張り付いていた四色の心臓が、激しく鳴動し始めた。そして目の前の光景に、夢斗らは絶句してしまう。

心臓から光が溢れ、羽多野の背中から生える「触手」へと流れ込んだ。夢斗らが驚いた時には、赤、青、緑、黄の四本が再生し、ガチガチと歯を鳴らしてこちらを見下ろしていた。

啞然としてしまう一同。後方の光一が、声を上げる。

「まじ...こ、こんなのあり！？ ぜ、全回復だなんて」

キリウも唾を吐き捨て、少しばつが悪そうに構え直す。

「野郎お、まだまだ余裕っちゅうことか。さすがラスボス、しぶといのお」

確かな圧を感じつつ、それでもルーメルも構え直す。

「徹底的に化け物に染まったわけか。おぞましいな、本当に」

夢斗、リサも腰を落とし、こちらに向かって立つ羽多野を睨みつける。彼は薄ら笑いを浮かべたまま、驚くほど優しい顔で告げる。

「こういう時、きっと感謝を抱くべきなんだろうね。ありがとう、夢斗君、リサさん。君達と出会えて、本当に良かった」

心が壊れた魔物は己の悲願成就を悟り、屈託のない笑みで礼を言う。人を殺し、心臓を開けるという禁忌。それを実現してくれる「生贄」たる夢斗らに、ただ無邪気に、純粋に。

しかし夢斗らに反論する暇はなかった。

緑色の触手から放たれた「風」が部屋中に突風を巻き起こし、瓦礫ごと一同を吹き飛ばす。浮き上がり、きりもみになって後方へ飛んでいく夢斗、リサ。光一達は腰を落とし、予想外の攻撃に耐えた。

夢斗とリサが着地した時には、続いて「炎」と「土」が放たれていた。

あらん限りに部屋を埋め尽くす業火。そして同時に、そこに降り注ぐ無数の「岩」。熱さで身動きが封じられ、空中から炸裂する岩の雨に戦慄する。

「うあああああ！」

ついにリサは悲鳴を上げてしまう。彼女は盾を作り上げ、夢斗と自分を守り、光一達も武器と魔法によって向かってくる力に対抗する。しかし完全には防ぎきれない。熱波が肌を焼き、岩石が皮膚と肉を切り裂く。

だめ押し、とばかりに残った「水」の触手が、口から大量の水を吐き出した。それは激流となり、部屋そのものを包み込んでかき回す。火炎が消え、代わりに瓦礫と一緒に夢斗らを渦で遊ぶ。

天地上下を失い、息すらできず、右へ左へと振り回される夢斗達。瓦礫が何度も体に打ち付けられ、無理矢理に肉体が引っ張られる。大渦が消え去った頃には、部屋の中は水浸しになり、美しかった展望台の姿は見るも無残な姿に変貌していた。

必死に呼吸を取り戻し、クラクラしながらも立ち上がる夢斗。見れば、リサや光一達も同様に、思うように身動きが取れずにいた。

そんな中、リサが顔を上げる。

「そんな……まさか、さらに強くなって…」

誰もが、その猛攻に感じていた。

先程まで対峙していた時よりも、確実に羽多野は強くなっている。四本の触手の操る魔法の力が、まるで比べ物にならないほど強大到成長していた。

絶望的な状況に歯噛みしてしまう。夢斗はなんとか上体を起こしたが、夕日を背に、触手と共に立つ心喰いと目があった。

怪物——もう何度、その言葉を思い描いただろうか。「心」を求め、結果として人を捨てた一人の男が荒ぶる力を従え、立っている。その表情は実に穏やかだ。憎しみや悲しみなどまるで感

じられない。あるのはこの先に広がる、彼自身の願望の成就。その確かな予感からくる、無常の喜びだ。

「『運命』なんてものは、本来信じないようにしている。だけど今なら思うんだ。僕が『オーバー』になったのは、ここに来るためだったのか、って。君達と出会い、君達の成長を見届け、その『心』を解き明かす――それこそ、僕に与えられた『運命』だったのではないかって」

彼の気持ちを反映するかのように、触手の先の「口」がガチガチと音を立てた。数多の心臓をめぐり、食いちぎってきたそれが、次の獲物を品定めしている。

「この力の意味なんて、まるで分からなかった。だけどここへ辿り着くため、色々なものを『超える』ことを許してくれたんだ。世界を超え、城壁を超え、城を超え、僕をナグルファと出会わせてくれた。彼と会えたおかげで、こうしてこの展望台で君達と出会うことができた。なんだか奇妙な縁を感じざるをえないよ」

まるで、彼は何かの「真理」を得たかのようだ。両腕を広げ「世界」を体全体に感じるように、深呼吸している。

「もうこちら側も、あちら側も関係ない。この力さえあれば、もっともっとたくさんの『心』を手に入れられる。謎を解き明かし、魔法の力を向こう側に持ち込むことさえできれば、もっと沢山の人々の『心』を見ることが出来る。これはきっと、そのための力だったんだ」

彼のおぞましい思想に、息を飲む一同。

羽多野はここで止まる気などない。携えた魔物の力を、そして学んだ魔法の力を使い、異界・クレイドルだけでなく現実世界にすら進出するつもりでいる。

もし、こんな怪物が現実世界に放たれたら、どうなってしまふのだろう。警察や軍隊がなんとかしてくれるのだろうか。兵器を用いれば、この男を止めてくれるのだろうか。

夢斗らにはとても明るい未来は想像できない。いずれにせよ、そこには多くの血が流れる。そして多くの悲しみが生まれる。

止めなくてははいけない――だが、身体中を覆う激痛に、転びそうになってしまう。度重なる負荷に肉体が悲鳴をあげていた。切り傷から溢れ出る血はじっとりと肉体を「赤」に染め、腫れた肉はビリビリと電流のような痛みを伴う。

誰しもの心が折れかけていた。肉体に、精神に刻まれた確かな「恐怖」が体の制御を妨害し、思うように動かしてくれない。

そんな中、あくまで羽多野は優雅に呼吸しながら、己の抱いた「運命」に酔いしれている。

「この後、どこへ行こう。ここから、どこを目指そう。ああ、今ならなんとなくだけど、君達の気持ちが分かる気がするよ。これが『冒険』するということか。自分の求めるものを探すために前に進み、成長し、勝ち取る。確かに気分がいい。『オーバー』の力は、それを僕に教えてくれたのか」

勝手に納得する殺人鬼に、夢斗はおぞましさを感じる。

まともじゃない――それは彼が「心」を持たないから、ということではない。己が犯そうとしている大罪を理解し、そして他者から奪うということを許容し、それでもなお、それら全てを自身の「糧」だと肯定的に捉えられてしまう、その捻じ曲がった性根。

今更ながら理解する。彼は「心」がなかったから、歪んだのではない。過去の辛い出来事だけが、彼を作り上げたのではない。

心の底からの破綻者――それが、羽多野 充という男の本質だ。

「どちらがいいだろう。この王国か、それとも向こうの世界からか。僕の診療所の近くから初めてもいいな。まずは使えそうな魔法をピックアップして、向こうの世界で試さないとな――」

ブツブツと、天を仰ぎながら画策する羽多野。

そこに立つ確かな「怪物」に、身動きが取れない。倒すべき相手の異常さに、ただ、ただ不安と恐怖が襲いかかる。

しばらく、これからの算段をベラベラと語っていた羽多野。

そんな彼の妄言は、がきん、という鈍い音で途切れてしまう。

息を飲む夢斗、光一、キリウ、ルーメル。

羽多野は天を仰いだまま、動きを止める。

飛来した一本の「槍」を、触手が食い止めていた。すぐにそれをへし折り、光の粒へと変える羽多野。殺人鬼は再び、目の前に倒れたままの少女を見つめた。

リサは水浸しの地面に伏せたまま、なおも腕だけを振り上げ、羽多野を睨みつけている。どくどくと流れ出る血は、彼女の周囲を真っ赤に染めていた。

満身創痍であってもなおも前を向き、歯をくいしばる彼女の姿に、思わず声が漏れた。

「リサ……」

「そんなの、『冒険』でもなんでもない」

放たれた一言に、再び息を飲む一同。羽多野はそれを静かに見据えていた。

「知らない世界を旅して、そこで色んなものを見て、大勢の人と出会って――その中で楽しいことも苦しいことも、全部体験して…悩んで悩んで、前に進む。そんな『冒険』が、私は大好きです。だから、この世界に来た時も心が弾んだし、何度でも来たいと思えました」

なんとか体を起こすリサ。腕に伝わる激痛にひるみつつ、それでも顔を上げる。

「あなたは、そんな世界で何をしたんですか？ その世界で必死に生きる人達を巻き込んで、自分の欲のために利用して、勝手に納得して成長した気になって――それを『楽しい冒険』だって言うつもりですか？」

前を向き、構えるリサ。肩で息をし、ボロボロの姿のまま、逃げる姿勢などまるで見せない。

「あなたが言うように『オーバー』の力があったから、私も夢斗さんも、こちらに来ました。でも『ここ』にいるのは、それだけじゃあない。一緒に考えて、皆で進んだから見えた景色があったんです」

力の差は絶望的なほどに大きい。少女と心喰いの間には、逆立ちしてもけっして埋まらないほどの大きな溝がある。

そんな明らかかな力量を見せつけられても、リサという小さな魔法使いがひるむことなど、もはやありえない。

「私、あなたのことが大っ嫌いです。自分の欲のために平気で誰かを巻き込んで。知識のためと嘘ついて、堂々と傷つけて――これ以上のわがまま、もう見てて我慢できないんです」

シンプルな、どこまで無茶苦茶な理由。

だがそれゆえに、その一言こそが彼女がここまで歩いて来た、最大の理由だと理解できる。

許せなかったのだ――当たり前にある幸せや、当たり前過ぎるはずの日々を、理不尽な欲求で奪い、蹂躪し、吐き捨てられることが。世の中の裏で動く邪悪な影を、我慢することができなかったのだ。

夢斗はどこか、彼女の姿に自分を重ねる。

いつもそうだった。考えるだけ無駄だ、と皆に言われてきた。他人の苦しみなど、抱え込まないほうが楽だ、と。

だが気になったら最後、自分は割り切るなんて器用なことができなかった。どんな人間でも、理不尽に晒されているなら、なんとかしたかった。誰しものが当たり前前に笑う権利を持っているのに、なんで彼は、彼女は、それを謳歌することができないんだ、と。

性別も身長も、髪や目の色も、性格も話し方も、生まれも育ちも――全て違うこのリサという少女と、夢斗はどこかで似ているのだ。

少女の言葉は皆の胸を打つ。だが、それでも言葉で力の差は埋まってはくれない。目の前の現実が、非情にも事実を告げる。

「強いなあ、実に強い。だけど少年、少女の純粹さは、言い換えれば『無知』とも取れる。それこそがもろさだ。世の中には正道のみではどうにもならないことがある。大人になれば、人は嫌でも分かるものさ」

羽多野は静かに言い放ち、そして腕を持ち上げた。彼の背中から生えた触手が動き、羽多野の体を覆い隠す。

鉄壁の防御だ。真っ向から突っ込めばすべて受け止められ、代わりにいずれかの力で蹂躪されるだろう。火か、水か、風か、土か――むしろ、四つの触手が持つ心喰いを象徴する「牙」か。

いずれにせよ次の攻防で、彼は確実に息の根を止めるつもりだ。

必死に体を起こそうとする、光一、キリウ、ルーメル。立ち向かおうとするリサに加勢しようにも、体が間に合ってくれない。

だが、もはや増援など彼女は期待していない。しっかりと腕を持ち上げ「ふー」と威嚇するように呼吸を荒げ、前を睨む。

「あの時と同じだね、リサさん。打ってくれば良い。意思があるというなら、実行すれば良いんだ。そうすれば僕も動く。終わりを決めるのは、君だ」

かつて夜闇の中で対峙した、あの時と同じ構図である。

リサが攻撃を放てば、羽多野は動く。すなわち、踏み込めば自身に確実に「牙」が叩き込まれる。

それを選ばせるという残酷。慈愛を装う、極上の非情。

それでもリサは退かない。ぐっと拳を握り、腕輪の魔力を発動させる。

終わってしまう――夢斗は歯噛みし、前を向く。

必死に考え、体を動かした。ここまで見て来たもの、出会った人、聞いたこと――全てを利用して、今、この場を乗り切る「何か」を探す。

たった一つの思いが、ズタボロの肉体を動かす。痛みや恐怖を振り払い、一步を踏み出させる

。

もう嫌なのだ。失うのは――リサという確かな「記憶」。一緒にいた少女という存在を、もう「過去」などにして終わらせたくない。

羽多野は言った。ここに来たことこそ「オーバー」である理由だ、と。

つくづく、考えても理由は分からない。なぜ自分が平凡を捨て去り、そんな才能に目覚めたのか。夢見がちですらない自分が、そんな荒唐無稽な力を持っているのか。

あの殺人鬼はそれを使い、ここまで来た。多くの障壁を「超えて」ここまでわがままを貫き通した。彼にとってきっと、そんな禍々しい欲望を叶える道具が「オーバー」の才能なのだろう。

リサの言葉が思い浮かぶ。

何にだって、意味はある――彼女は自身に宿った力の理由を、きっと「神様が、正しいことに使うために授けてくれた」と言っていた。その目で見なければいけないもののために、その足で辿り着かなければいけない場所のために、この力を使え、と。

自分はどうしたい？

自分は一体、この力を使って何を望んでいるんだ。

難しいことは分からない。羽多野を説き伏せれるだけの正義名分も、もはや浮かばない。言葉も知らなければ、世の中の理など分かるわけもない。

そんなバカな自分でもたった一つ、確かに思っていることがある。

失いたくない、もう誰一人――刹那、無数の情報をその瞳が捉える。夕日を背負い、立つ怪物。その怪物に立ち向かう、一人の少女。

触手の隙間に、静かにこちらを見る羽多野の顔が見える。冷徹に、冷静に少女に殺意を向ける、極上の殺人鬼がそこにはいる。

許せなどしない――無邪気という確かな「邪気」で人を蹂躪する、奴を。これからも、その殺意を持って世界を渡り歩こうとする、彼を。

世界を超えて、人を殺めるなど。

そこまで考えて、夢斗はあることに気付く。浮かんだ考えに目を見開き、思わず顔を上げた。無数の想いが渦巻き、一気に弾ける。もはやそれは思考ですらない。彼の中にある数多の経験が、加速した脳内で同時に湧き上がり、肉体そのものに訴えかける。

世界超える力「オーバー」――自身の肉体に確かに宿る、その力を噛みしめた。

立ち上がり、一步を踏み出す夢斗。

その足音に気付き、振り向くりサ、仲間達。そして、羽多野。

「夢斗...さん...」

夢斗は構えず、だらりと腕をおろしたまま、前を向いている。少し動かすだけで筋肉が、皮膚がズキズキと痛む。数えきれない打撲、擦り傷が本能に訴えかけた。これ以上、行くな、と。

それを聞く気などない。大きく呼吸し、前を向く。息を吸い込むたび、肺が焼けるように熱い。

。

「君も、まだ諦める気はないんだね。分かった、良いだろう。どちらでも構わない。終わりの時

を決めるのは、あくまで君達だ」

残酷な言葉を、羽多野はなおも夢斗に放つ。触手で完全な防御を固めたまま、確実な迎撃の時を待っていた。

大きく息を吸い込む夢斗。

震えは止まらない。もし、これができなければ、全てが終わる。

そこまで分かっているながら、夢斗は足に力を込めた。

その意外な一步に、誰もが驚く。「オーバーテクノロジー」の力を使った急加速ではない。何気ない、脱力した、普通の一步である。

もう一步、瓦礫を押し分け、前に進む。ゆっくり、着実に夢斗と羽多野の距離が詰まる。

もはや、体力すらも一一誰しものが夢斗の限界を感じ、焦る。

心喰い・羽多野もまた、彼の終わりを予感し、ため息を漏らした。

しかし、夢斗は歩きながら告げる。

「リサ、ここまで一緒に来てくれて、ありがとう」

その一言に目を見開くりサ。かすかに笑い、夢斗はそれでも歩みは止めない。

「光一も。それに桐生と委員長も。皆のおかげで、ここまで来れた。きっと俺だけじゃあ、途中で諦めてただろう。皆がいたから、最後まで歩くことができた」

思わず、体を起こした光一が吠える。

「何言ってるだよ、夢斗君……と、止まってよ！」

だが、彼の言葉を聞く気はない。夢斗はなおも前を向いたまま、言い放つ。

「大丈夫だよ。勘違いすんな、このままやられるつもりなんかないさ」

向かってくる夢斗に、羽多野が守りを固めたまま言う。

「よほど速く、僕を蹴る自信があるらしいね。だけど、忘れたらいけないよ。君が動けば、僕も君を確実に喰らう」

堂々とした殺害予告にも、夢斗は怯まない。また一步、彼に近づく。

「分かってるさ。ここまで来て、もう、しのごの言わない。あんたに改心なんて望まないさ。何を言おうがあんたは殺人鬼一一身勝手に人を殺した、怪物だ」

力強い一步に、リサ達は息を飲む。もうあと一步で、互いの一撃が届く距離だ。

夢斗の言葉にかすかに羽多野は眉をひそめた。

少年の行動を、最初は自暴自棄だと予測していた。荒ぶる力を見せつけられ心が折れてしまった者の、最後のあがきだ、と。

しかし、なぜなのだろう。なぜ彼は一一こんなにも澄んだ眼差しをしているのだ。

「『オーバー』になった理由一一何度考えてもダメだ。まるで分からない。こう言う時、心底、自分の頭の悪さが嫌になるよ。抱え込みたがるくせにいつも力不足で、いつも誰かに助けてもらって」

ついに、もう一步を踏み込む夢斗。すぐ目の前に触手の「口」がある。魔法など使わなくても、一瞬で夢斗に食らいつくことができる。

固唾を飲んで見守る仲間達。だが、羽多野のおぞましい姿以上に、彼らの視線は夢斗に釘付け

になってしまう。

それほどまでに、彼は穏やかな顔をしていた。澄んだ眼差しをまっすぐ前に向け、脱力したまま、しっかりと羽多野を見据えている。そのぶれない姿に、心の中の不安が、少しでも和らぐのを感じた。

「だけどちょっとだけ、分かったんだ。どうすれば良いのか」

「分かった、だって？」

「ああ。答えなんか、分からない。正しいことなんて、説明できない。だから決めたんだ——俺の正しいと思うようにすれば良い、って。それが、この力の『理由』になるんだ、って」

息を飲む一同。

夢斗の眼差しに、燃え上がるような強さが宿る。

「最後まで走りきる。お前のためじゃあない。誰かのためでもない。俺自身が望んだ『正しいこと』のために前に進む。誰にも邪魔されない。この力はきっと——そのためにあったんだ」

決意が言葉を紡ぎ出し、そしてもう一步を歩み出させる。

その距離に対し、ついに怪物も動いた。

赤と緑の口が左右から挟み込むように、夢斗の体に襲い掛かる。黄と青の触手は相変わらず羽多野を守っていた。とてもここを強行突破はできない。

刹那、思わず誰もが彼の名を叫んだ。

夢斗は向かってくる触手に対し、事もあるうに回避すらしめない。駆け出すことすらせず、ただ襲いかかる高速の牙を見ている。

誰よりも大きく、甲高く、リサが叫ぶ。

しかし、その悲痛な声が「ガチン」と言う無情な音にかき消され、突風の嘯きによって洗い流された。

思わず、リサは目を瞑ってしまっていた。目をそらさないと決めたはずなのに、夢斗の体に起こる惨劇に顔を伏せてしまう。

ゆっくり、恐る恐る前を見る。加速した意識が、そこに広がる光景をスローで捉えた。

しっかりと噛み合った触手の「牙」。二つの触手はガッチリと口を閉じたまま、静止している。その奥には殺人鬼の顔が覗いていた。触手と触手に守られた瞳は、キラキラと光っている。

口を開いたまま、啞然としてしまう光一、キリウ、ルーメル。

一同の心に去来したのは絶望などではない。

もっと巨大な、ある一つの「疑問」だった。

ようやく、間近にいたりサもその異変に気付く。

夢斗の姿がない。

触手の延長線上にいたはずの、夢斗がいない。

瞬時に、心喰い・羽多野は怪物の洞察力で周囲を探る。触手が持つ「魔力」を使ったレーダーのように、死角すら一瞬で補い、気配を探る。

おかしい——この部屋の中に感じる気配は五つ。自分と、すぐ間近にいるリサ。離れた位置でこちらを見ている光一、キリウ、ルーメル。

一つ足りないのだ。

夢斗の存在が、この部屋のどこにもない。高速移動しているなら、間違いなく捉え切れる。怪物の動体視力、そして魔力による包囲網がその居場所を教えてくれる。

だが、どこにもいない。

無論、触手が彼を食い尽くしたわけでもない。

不可解な状況に、ついに羽多野まで驚きの表情を浮かべた。

しかし次の瞬間。その「答え」が目の前に現れる。

何も無かった空間に一瞬で光が集まり、ある人物が浮き上がる。見覚えのある姿は再び一同の目の前に出現し、前を向いていた。

あっ、と声を上げるリサ達。

そして間近に迫る彼の顔に、息を飲む羽多野。

心喰いの触手の内側、まさに肉薄の間に「彼」がいた。

誰よりも早く、誰よりも鋭く、そして誰よりも力強く「彼」は動く。

まっすぐ振り上げられた蹴りが、ついに羽多野の顎に突き刺さり、跳ね上げた。ごがっという鈍い音と共に、怪物の顔が真上を向く。衝撃でその体が宙に浮き上がった。

「え—————」

揺れる視界の中、羽多野が発したのはそんな何気ない一言だった。リサ達は那一撃に、思わず声を上げてしまう。

再び、心喰いの懐に現れた「彼」の姿に、啞然としてしまった。

夢斗は歯を食いしばり、足を振り上げたまま、それでも羽多野を睨みつけていた。吹き飛ぶ彼の姿にすぐさま照準を合わせる。

その不可思議な一撃にも、羽多野はすぐさま対応してみせた。二本の触手で天井に捕まり、残る二本で再び夢斗を狙う。「火炎」と「岩石」が至近距離にいる夢斗目掛けて、迷うことなく放たれた。

巻き起こる爆発によって熱波が部屋を駆け抜ける。リサ達は向かってくる熱い空気に顔を守りつつ、それでも前を見た。

爆炎に包まれたはずの夢斗の姿は、やはり消えてしまっている。しかし残骸はどこにもない。炎に焼き尽くされたわけではなく、忽然とその姿が消えてしまっていた。

再び、息を飲む心喰い。しかし遠巻きに見ていた全員が、その不可解な現象の正体に気付く。

だからこそ、彼と同じ——「オーバー」の少女が呟いた。

「夢斗さん……もしかして…」

彼女の予感通り、消えていたはずの夢斗が再び出現する。羽多野の背後に光が集まり、パッと弾けた瞬間、そこには見慣れた少年が立っていた。既に腰を落とし、飛び出す態勢で前を見ている。

迷うことなく「発射」する夢斗。汗が飛び散り、塵芥を置き去りにして前に出る。まっすぐに叩き込まれた蹴りが羽多野の背中に突き刺さり、怪物の体を大きく仰け反らす。ついに、羽多野の口から悲痛な声が漏れた。

目を見開き、身をひねる羽多野。「風」をまとった腕がかまいたちのような切れ味を帯びて、真横に迫る。

リサだけでなく、光一、キリウ、ルーメル——そして羽多野も、夢斗が起こすある現象をしっかりと捉えた。

触手が当たる瞬間、再び夢斗の体が光に包まれる。彼の体は一瞬で消えさり、宙には蛍のように舞う光の粒が残るのみだった。羽多野が操る怪物の腕は、行き場を失い空振りしてしまう。

だが再び空間に光が集まり、すぐに夢斗の姿が出現する。彼は完璧に羽多野の攻撃を「すかし」てしまい、迷うことなく左足で蹴り込んだ。

羽多野の腹に突き刺さる一撃が、彼の体を「く」の字に曲げる。全身を駆動させ、あらん限りの力でねじ込んだ。螺旋状の衝撃はそのまま、怪物の体を彼方へと吹き飛ばしてしまう。

ついに倒れる羽多野。瓦礫を巻き上げ大地を揺らし、無残に地に落ちてしまった。

着地し、構える夢斗。その全身がかすかに光っているようにすら見える。鋭い眼差しはそのままに、汗をぬぐい、倒れた怪物を睨みつけていた。

歓声は上がらない。むしろ見ていた光一と、キリウが戸惑いの声を上げてしまう。

「な、なんだあれ...瞬間移動？ 夢斗君、いつの間にそんなこと、できるようになったの!？」

「そんなんあんなら、はよう出せや！ まじ焦ったわ...」

だが、答えたのは夢斗ではない。傷口を押さえながら、リサが言う。

「あれは、魔法なんかじゃないです。あれは——『オーバー』の力。夢斗さん...世界を超えてる」

その一言に息を飲む一同。たまらずルーメルが声を荒げた。

「なんだと...『オーバー』の力は、こっちと向こうを行き来するだけじゃあ——！」

言いかけて、彼女だけでなく全員が気付く。彼らの心中を察し、リサはただ力強く頷いた。

そんな中、大きな音と共に立ち上がる羽多野。触手が荒々しくうねり、周囲の瓦礫を砕き散らしている。「ごほり」と咳をすると、口の端から真っ赤な血が流れ落ちていた。

効いている——羽多野の腹部にはしっかりと、夢斗が刻んだ蹴りの跡が残っていた。彼は荒く息をしながら、一步を踏み出す。

「そんなことが、できるのか.....そんな...そんな使い方が.....」

卓越した洞察力、そして素早い思考能力がゆえだろう。羽多野もまたその一瞬で、夢斗が引き起こした現象に気付いていた。

現実世界と異界・クレイドル——二つの世界を行き来する才能を持つ、特殊な人間「オーバー」。夢斗、リサ、そして羽多野にのみ、なぜか備わったこの才能は、彼らが強く「望む」ことで互いの世界へと移動させてくれる。

異なる次元に存在し、独特の位置関係を持つ二つの世界。

原理も何も分からない。ただ不思議な力で、世界の境界を「超える」ことができるということしか、今は分からない。

かつてリサは言っていた。どんなに奇妙な力でも、そこにはきっと「意味」とあると。どこかに進み、何かを成すために、この力を与えられたのだ、と。

夢斗は今日、この時までずっと考えていた。

自分にとって、この力の「意味」はなんだ——世界を超えたい、と望んだわけではない。夢見がちなわけでも、現実逃避が好きなわけでもない。

それでも自分がここに来た意味。それを今の今まで、ずっと考えていた。

答えは出ない。だが、だからこそ夢斗は、ある一つの「答え」に辿り着く。

「向こうも、ちょうど夕方だった。きっと帰宅ラッシュの時間なんだろうな。ガヤガヤと、通りの声が聞こえて来た」

リラックスし、言い放つ夢斗。それは彼が、先程の数瞬で「向こう側」で見た景色であった。

一瞬だけ、世界を「超える」——「オーバー」の力を使い、ほんの一瞬だけ向こうの世界へと戻り、再びこちらの世界へと舞い戻る。その数秒間、夢斗の肉体はこちらには存在せず、誰も彼に干渉することはできない。

どんな怪物の力も、どんな魔法でも「あちら側」にいる夢斗に危害は加えられない。

あまりにも破天荒で、あまりにも規格外の使い方に、羽多野がわなわなと震えている。

「どうして……どうやってこんな方法…」

また一歩、歩み寄ってくる羽多野。

それに対し大きく深呼吸し、夢斗は彼を見つめた。

止まりたくなどない——どれだけ考えても手に入れられない「力の理由」を、夢斗は心の中で勝手に決める。どれだけ痛みを重ねようとも、どれだけ難解な事件に戸惑おうとも、今日、この時まで、その気持ちを一度たりとも失ったことはない。

こんなところで終わりたくないのだ。探しにいかねばいけない「皆」がいる。取り戻さなければいけない「過去」がある。止めなければいけない「戦い」がある。

奇妙なことに、どこか懐かしい感覚に包まれていた。

かつて陸上の選手としてレースに臨む時、いつも抱いていた感情である。

止まりたくない——足が張り裂けそうで、肺が燃え尽きそうで——だがそれでも足だけは止めたくない。終わりを決めることは、いつだって自由だ。だからこそ自分自身で妥協し、匙を投げたくなどない。

そんなものでいい。

この不可解な力がある「理由」なんて、そんなもので十分だ。

誰にも邪魔されないために、ゴールへの道を阻む何かに遮られないために。

だからきっと、自分は手に入れたのだろう。

「超える」力を。

羽多野の四本の触手が、それぞれの力を纏う。炎を、水を、風を、土を。それぞれの魔力を荒ぶらせながら、ガチガチと歯を鳴らし、威嚇した。

総攻撃を予感し、戦慄するリサ達。しかし、たった一人だけ、怪物に対峙する少年だけはたじろがない。

震えが止まった——目の前にあいつがいる。数多の命を奪い、己の「心」を求め、他者の道を遮る、彼がいる。

なら、決まった。

行かなければいけない場所も、やらなければいけないことも、全部決まった。

ゆっくり、腰を落とす夢斗。両手を前につき、腰を少し持ち上げ、頭を落とす。

その奇妙な構えに、息を飲む一同。

独特な「型」の正体を、誰しもが一瞬で理解した。

構えたまま、かすかに顔を上げ、夢斗は言う。

「逃げるつもりなんてない。背を向けるつもりも、毛頭ない。絶対に――」

顔を上げ、前を見据える夢斗。

体に漲る力を感じ、歯を食いしばる。

彼に宿った力を察し、誰もが拳を握り、固唾を飲んで見守った。

目を見開き、目標を定める。

夢斗の中の行くべき「コース」が決まった。

「最後まで走りきる！！」

咆哮を追いかけるかの如く、大地を蹴って前に出た。まさにそれは「陸上」のスタートと同じ形である。最高、最速で羽多野目掛けて迫る夢斗。向かってくる少年に、羽多野は蓄えていた力を一斉に放った。

炎が焼き、水が流し、風が刻み、土が砕く――もはや災害とも言えるその力の奔流目掛けて、迷うことなく夢斗は高速で突っ込んだ。

光を纏い、世界を「超える」――城の景色が消え、目の前には茜色の街の姿が映っていた。

現実世界の街で、夢斗はビルの屋上にいた。そこからは街の姿が一望できる。紅に染まってく野山や、遠くに見えるビル。帰宅する人々の姿や、明かりが灯った家。

変わらない日常に一瞬、心を奪われそうになった。

だが、歯を食いしばり、再び力を解き放つ。

このままここにいれば、もしかしたら平和なのかもしれない。危険から逃げ、目を伏せ続ければ、楽な人生を送れるのだろう。

甘い考えを何度も何度も塗りつけても、それでも夢斗の心がそれを振りほどいてしまう。

止まるつもりなんて無い――――光に包まれ、姿が消える。視界が白に染まった直後、城の展望台の光景が戻ってきた。

荒ぶる四つの力を「超え」、辿り着く。すぐ目の前に、こちらを見て言葉を失う、殺人鬼の姿があった。

息を飲むリサ達。

たった一人、夢斗はあらん限りの力で吼え、そして――――蹴る。

頬に突き刺さった一撃が、羽多野の歯を砕き割った。強烈な一撃に、真横に回転しながら吹き飛ぶ怪物。気を失いそうになりつつも、彼はなんとか天地上下を悟り、触手で床を掴むことで、再び立ち上がった。

しかし、顔を上げた時にはすでにこちら目掛けて、夢斗が走ってくる。慌てて風の触手を叩きつけるも、やはり空を切った。

また後ろか——振り返ろうとした羽多野の脇腹に、重い一撃が捻じりこまれる。

「が——はあ——」

悲痛な声をあげる羽多野。バキバキという鈍い音が、彼の肋骨がへし折れたことを悟らせた。踏みとどまり、岩石をまとった触手で殴りつける。しかし再び空を切った直後、今度は背後から出現した夢斗が、腰に蹴り込んだ。大きく体を仰け反らし、空中に浮き上がる怪物。

振り向く羽多野、駆け出す夢斗。

二人の視線が、一秒の何分の一にも満たない刹那で、交わる。

歯を食いしばり、こちらを睨みつける鋭い眼差し。今まで何度も受け止めてきたそれに、なぜかその時ばかりは、羽多野は言い知れぬ感情を抱いてしまう。

全てを決意した少年、諸星 夢斗。

理解できずそれを迎え撃つ、羽多野 充。

そして、これから起こる全てを予感し、拳を握りしめるリサ、光一、キリウ、ルーメル。

駆け抜けるその姿にもはや不安などない。前に進む夢斗の姿に、恐怖など感じない。

目標に向かって、まっすぐ駆ける者が持つ輝き———愚直なまでに研ぎ澄ました、少年に眠る「純」。

彼の雄叫びに合わせ、全員の「心」が爆発した。

「おおおおおおおおお！！」

己が望むままの道を、己が信じた通りの力で、精一杯駆け抜ける。

夢斗の固めた「決意」が、彼が育ててきた「覚悟」と混じり、燃え上がった。

空中にいる羽多野に向かって雄叫びをあげながら、ただひたすらに襲いかかり、蹴り込む。

四本の触手が荒ぶる力を有し、向かってくる敵を迎撃しようとするも、その度に一撃は意味をなさず虚しく空を切ってしまう。「オーバー」の力によって一瞬だけ、こちらと向こうを行き来し、羽多野の妨害を「超える」ことで夢斗は蹴りを叩き込んでいく。

前から後ろから、右から左から、上から下から。

消えては現れ、現れては消える。蹴っては引き、引いては蹴る。

加速を続けた肉体が悲鳴をあげ、足がもつれそうになる。腕も足も動かすたび、空気に引っ張られ、ちぎれそうだ。

だが、それよりも早く、次の一步を踏み込む。砕けそうになる体を、痛みを殺して耐え、前へ前へと押し込む。

光の粒をばら撒きながら世界の境界を駆け抜け、戦い続ける夢斗。羽多野の体があらゆる方向に弾け、その体に足跡が刻まれていく。放たれる無数の蹴りが、重く、ひたすら重く肉体を貫く。

壮絶な光景に誰もが息を飲むしかない。空中できりもみになり、もがく怪物。残像と光を残し、ひたすら飛び交う夢斗。繰り広げられる破壊劇と耳が捉える音が、もはや噛み合っていない。

そんな中、羽多野は全身を貫く痛みと衝撃に、ただ、ただ混乱していた。

なんなのだ、これは——自身の不利に対する疑問などではない。先程からこの肉体に湧き上がる、この言い知れない感覚を理解することができない。痛みに対して、何かを感じることはな

いはずなのに、なぜだか自身が置かれている状況に胸の奥が締め付けられる。

また一撃、頬に蹴りが炸裂し、鮮血が散る。口の中はズタズタに切れ、砕けた歯がからからと鳴った。

羽多野が胸に埋め込んでいた四つの心臓も、夢斗の放つ一撃で粉々になっていく。心臓が砕け散るたびに触手もボロボロに崩れ、ついに羽多野は怪物の「口」を何一つ持たない、丸腰になってしまった。

なんだ、これは。

この胸の奥底に湧き上がってくる、これはなんだ。

全身から舞い散る血が視界を染め上げる。加速する鋼が顎を真上に跳ね上げ、羽多野は無理矢理、天を仰ぐ形となった。

揺らぐ視界の中で、彼は確かに見た。

天井に逆さまに張り付き、顔を伏せている彼を。

あまりにも早く動きすぎたせいだろう。かすかなゴミや瓦礫が触れただけで肉体を切り刻み、全身がズタズタだ。服も破れ、むき出しになった上半身には、おびただしい血の跡が見える。攻撃に転じていても、彼は身を削り、捨て身でこちらに向かってきていたのだ。

天井の硬さを噛み締めながら、夢斗は全身を包む感覚に意識が飛びそうであった。激痛と熱さが内側から精神をかきむしり、悲鳴をあげている。もはや手足の感覚も消え去り、うまく呼吸すらできない。

それほどまでに人間離れした動きをしてもなお、彼は止まる気などない。

ゆっくり、顔を上げる。

頭上に見える大地の上に、ボロボロになってこちらを見上げる羽多野が見えた。

二人の視線が交わった瞬間――羽多野はようやく、理解する。

そうだったのか。

今までずっと理解できなかった「これ」は、そういうことだったのか。

生まれてこのかた、一度も手に入れたことのないが故に、まるで理解できなかった。

だが、今ではしっかりと分かる。

頭上からこちらを睨みつける夢斗に、ただただ、この感覚だけが強烈に、鮮やかに湧き上がってくる。

そうか、これが――――――恐怖だったのか。

初めて動いた、殺人者の「心」。

羽多野は本能から、叫び声をあげていた。

だが、それが分かったところで、もはや何も止まることはない。

天井を蹴り、渾身の力で落ちてくる夢斗。

雄叫びをあげながらまっすぐ、真下の羽多野目掛けて、走る。

天を駆け、まるで稲妻のように顔面に叩き込まれた蹴り。一撃が空気を吹き飛ばし、突風すら生んだ。

爆撃のような蹴りはそのまま羽多野の体を地面に突き刺し、大理石の床を陥没させる。血を撒

き散らし、力なく叩きつけられる羽多野。衝撃で右目が潰れ、歯が全て吹き飛ぶ。

地響きに転んでしまう仲間達。あまりにも巨大な力の奔流は階下にいる国王や、兵士にまで伝わっていた。

粉塵が視界を覆い隠す。体を起こしながら、リサはその中心にいるであろう、彼の名を叫んだ。

「夢斗さん、夢斗さあん！！」

返事はない。

光一とキリウ、ルーメルも目をこすり、必死に前を向く。

無残に破壊された展望台の景色の中に、友の姿をただ、探した。

やがて粉塵の中でゆらりと影が動く。一同が息を飲んだ瞬間、彼は体を起こし、立ち上がった。

緊張に張り詰めていた一同の顔が、ようやくほころぶ。

夢斗はゼエゼエと肩で息をしながら、顔を持ち上げる。ポロポロの肉体で、とにかくひたすら酸素を取り入れた。頭がクラクラと揺れ、目がチカチカする。まるで脳みそが弾けてしまったかのように、体の制御が聞かない。

ふらふらと前に出る夢斗。足元がおぼつかず、がくりと膝が崩れた。

「ああ...クッソ.....うまく.....動かねえや」

倒れる夢斗。だが、力なく崩れた彼の体を、駆けつけた小さな体が必死に抱える。

リサが歯を食いしばり、夢斗の上体を支えていた。傷口から血が溢れ、激痛に顔を歪め、だがそれでも彼女は夢斗を倒しはしない。

そんなリサに、夢斗は掠れた声で言う。

「リサ.....よせよ.....こんなに、ポロポロなんだ...汚いだろう」

だが目に涙を浮かべ、リサは吠える。彼女の張り裂けるような声が、なんだか妙に心地良い。

「絶対に嫌です！ 夢斗さん.....夢斗さんは、走り抜いてくれたんです...これくらい、なんともないです！」

きっと彼女は、せめて何かしたかったのだろう。決意を固め、ポロポロになり、それでも前に進んだ彼に、とにかく何かしてあげたかったのだろう。

小さな体が後ろに揺らぐ。必死に耐えようにも、リサの力では夢斗の上体を支えきれない。

そんな中、無数の手がようやく追いつき、リサに続いた。

ふっと体が軽くなる。夢斗だけでなくリサも驚き、振り向く。

そこには、光一、キリウ、ルーメル——かつてのクラスメイト達がいた。

「無茶苦茶だなあ、本当。あと先考えないにもほどがあるよ」

「せやで。しっかしまあ、それであの堅物、ぶっ飛ばしたんやから、ほんま、恐ろしいやっちゃ」

「案外、本当に怒らせたら怖いのはお前なのかもな、諸星」

ポロポロの肉体を支えながらも、彼らはこちらに笑いかけてくれる。その温かい言葉に、夢斗、リサの心が動いた。

「ごめん、俺...もう、とにかく.....がむしゃらで...後先考えずに.....」

呼吸を繰り返し、ようやく意識がはっきりしてくる。仲間の手を借りてなんとか座った。まだ全身がズキズキ痛む。

「できるかどうか、分かんなかった.....だけど...もう、ここしかないって.....一度走り出したら.....もう、止めれなくなってさ...」

なりふり構わぬ猛撃が、結果として怪物の力を撃ち払い、退けてしまった。謙遜する夢斗に、リサは首を横に振る。

「凄かったですよ、夢斗さん！ 早すぎて、全然追いつけなかったです！ 『オーバー』の力をあんな風に使うなんて、とても思いつかなかったですよ！」

興奮気味に伝えるリサ。爛々と光る彼女の大きな瞳の中に、疲れ果てた自分の顔が写っている。

剣を鞘に収め、ルーメルも頷く。

「ただまっすぐ、走り抜ける、か。陸上で走り続けていた、お前らしいな」

どこか嬉しそうな彼女に、光一とキリウも同意する。

「本当本当！ それにまっすぐってところが、いかにも頑固な夢斗君っぽいよね」

「ああ。あの男も相当わがままやったけど、まさか、わがまままで押しつぶすとはな。ええ頑固親父になれるわ、お前さん」

ケラケラと嬉しそうに笑う彼らに、思わず夢斗はため息を漏らす。

「なんだよそれ。だから、そんな頑固なつもりはないんだけど...」

困ったように、後ろ頭をかく夢斗。指先がずきりと痛み、歯を食いしばってしまう。

仲間達の称賛を受けながらも、離れた位置で倒れている羽多野を見つめた。仰向けになったまま沈黙している。その表情はここからでは見えない。数多の命を喰らい、戦争の引き金になりかけた殺人鬼は、立ち上がってはこない。

羽多野の姿を見つめ、思わずその一言が出た。

「手強い相手だった.....知り合いだから、じゃない。なんかこううまく言えないけど、とにかくやりづらかった。『心』を持たないっていうのが、こんなに厄介なことだなんて」

仲間達も夢斗同様、倒れている羽多野を見つめる。

彼が「心」を失ったのは、先天的なことだったと聞いた。それ自体はもしかしたら、不幸な境遇なのかもしれない。当たり前のようにあるはずの感情を失い、周りと同調することはけっしてなく、ただひたすら「無」しか抱かずに今日まで生きてきた。その壮絶な人生を、夢斗達では理解することは不可能なのかもしれない。

だがそれでも、今の彼を肯定などできはしない。光一はため息をつき、呟く。

「まるで機械みたいだった...同じ人間で、同じ世界に生きているはずなのに.....人を傷付けることも、全部『分析』で片付けちゃうなんてさ」

彼の一言に、キリウも「やれやれ」と首を振る。

「あいつからすりゃ、人の生き死にも全部、壮大な『実験』やったってことやろな。今回のことも、あくまで『心』を理解するための演習、くらいにしか捉えてなかったんやろ」

人が傷付き、悩み、困惑し、その中で生まれる「感情」を見極める。そのために彼は多くの人間の生き方を狂わし、そして未来を絶った。

許されるべきではない凶行に、ルーメルが悲しげな眼差しを浮かべる。

「己の肉体を改造したこと以上に、あいつは人としての領域を踏み越えすぎた。肉体だけでなく、その精神までが『怪物』になっていたんだな」

仲間達の言葉を聞いて、納得する夢斗。頷きながら、己の手を見つめた。

「あのとんでもない力以上に、あいつの言葉に心が折れそうになったよ。だけど、どれだけ説得されようが、言葉を投げかけられようが――俺の中で、あいつの行いを正しいことだとは思えなかった。これだけは言える……迷いはなかったよ。俺達が止めなけりゃ、また『明日』を奪われる人達がでる。そんなのはごめんだ」

羽多野の言った通り、結局これもまた夢斗という人間の「わがまま」でしかないのだろう。世界が決めた正しさの基準は知らない。あくまで一人の少年が、自分自身で考え、歩み、進んだ結果がそこにある。

彼の言葉に声をあげたのは、こちらの世界へ来るきっかけを作った、少女だ。

「きっと、それでいいんだと思います。それこそ、神様に言われたって『納得』しなきゃ、動けないのが人間ですから。誰かに言われた道を無理矢理歩き続けるのは、きっと辛いだけです」

傷を負い、汚れ、しかしそれでも明るい笑顔だけは変わらない。太陽のように輝くりサを見て、夢斗は言葉を失う。

「本当に――君は強いな。そんなボロボロになっても、最後まで逃げることは、しなかった」

「それは夢斗さんもでしょ？ さっすが、クール頑固さんですね！」

意地悪な笑みに、またも困ってしまう。しかし、リサの次の一言に息を飲んだ。

「ありがとう、夢斗さん。元はと言えば、最初は私が言い出したことだったのに…わがままに付き合ってくれて、感謝してます」

偶然にこの世界にたどり着き、多くの出来事に巻き込まれた。だがそれでも、ここまで進むと最初に決意したのは彼女である。レジスタンスのアジトで「心喰い」について調べると決断し、結果、ここまで辿り着いた。

優しく微笑む彼女を見ていると、なんだか妙な動機が起こる。戸惑う夢斗に、屈託のない笑みを浮かべた太陽が告げる。

「立ち向かう夢斗さんを見ていて、心が躍りました。胸の奥が燃え上がって、熱くて熱くて――どれだけ迷って、不器用に歩んだ道でも、その姿が誰かに『勇気』を与えているなら、それは素敵なことだと思いますよ」

ボロボロになった肉体の奥の奥――夢斗の「心」が、その言葉に震える。肉体の内側にまとわりついていた後悔や不安が、湧き上がる熱で溶けていく。

どんな経緯があれ、戸惑い、不器用だったとしても、最後まで走りきった彼に、クラスメイト達も称賛の声をかける。

「ほんと、最後まで走りきるってところまで、変わってなくてホッとしたよ」

「その身一つで、本当に戦争を止めたんやから、大したもんやで」

「そうだな。諸星に救われたのは我々だけじゃあない。この国の人間も、獣人達も——それなら、お前が歩んだ道は、けっして無駄ではなかったんだろう」

何度も揺さぶられる心が、目頭に熱い雫を沸き立たせる。

懐かしい感覚だ——かつて当たり前のようにあった光景。周りには気の合う仲間がいて、馬鹿を言いながらも時には悩み、ぶつかり合いながらも進んできた。その中で手探りで、それでも何かを掴み、一喜一憂する日々があった。

姿形は変わってしまった。机もない、黒板もないこの城の展望台で、それでも差し込む夕日の中に並ぶ顔に、心が安らぐ。

がむしゃらに歩み、真実に驚き、それでも取り戻したわずかな「日常」が、そこにはあった。

夢斗は少しうつむき、涙を悟られぬよう「ありがとう」と返していた。

リサだけでなく、光一、キリウ、ルーメルも笑う。

そんな中、吹き抜ける風の中に、か細い声が混じった。

「これが……恐怖…これが……心、か…実に……興味深い」

戦慄し、顔を上げる一同。瓦礫を押しつけて立ち上がったその姿に、息を飲む。

ボロボロになった羽多野が、それでもなお大地を踏みしめ、こちらを見ていた。至る箇所の骨が折れているのか、肉体は原形をとどめていない。ガクガクと震えながらも、血走った目で夢斗達を睨んでいる。

「そうか……だからか…だから人は…必死になるんだ……この感情を消すために……」

肉体の内側に湧き上がる「感情」を、理解する羽多野。彼は生まれて初めて感じ取ったその気持ちに、どこか笑みを浮かべているようだ。

「やっと…手に入れた……心……もっとだ…もっと……手に入れないと…」

狂気の笑みを浮かべ、こちらを見つめる羽多野。もはや整った顔立ちも、冷静な眼差しもそこにはない。

狂い、壊れた殺人者が夢斗達に近付く。

身構える一同。しかし、毅然とした声が展望台に響き渡る。

「残念じゃが、それは叶わんのお。貴様は、あまりにも多くのものを奪いすぎた。ここで終わりじゃよ」

夢斗らが息を飲んだ次の瞬間、羽多野の肉体が閃光に包まれる。ちょうど心臓の位置が光を放ち、肉体にヒビが広がっていった。

浮かび上がり、もがき苦しむ羽多野。やがて口や目からも光が溢れ出し、白く染まっていく。

断末魔と共に彼の体は「石」へと姿を変え、粉々に砕け散ってしまった。バラバラと音を立てて散った羽多野を見て、啞然としてしまう一同。

その背後から、聞き覚えのある老人の声が響く。

「ましてやこれ以上、人の尊厳を、誇りを、汚させなどせぬよ」

振り返り、声を上げてしまう夢斗達。そこにはボロを身にまとった、白髭の老人が立っていた。こちらに突き出したか細い腕の先で、光が渦巻いている。駆けつけた国王・エイムダルは、魔

法の力で羽多野にとどめを刺していた。

魔力を収め、ゆっくりこちらに近付いて来る国王。その後ろから護衛の兵達がずらずらと入ってくる。皆、展望台の壮絶な光景に、驚いていた。

「王様...」

「重ね重ね、ご迷惑をかけました、旅のお方。皆様のおかげで、ルガリアに潜む脅威を浮かび上がらせることができました。誠に、感謝しています」

深々とこうべを垂れる老人。なんだか夢斗達はその思いがけない態度に、慌ててしまう。

「そ、そんな顔あげてください。俺らは何も――」

「もし、あなた方が現れなければ、更に多くの血が流れていたことでしょう。我々は国のためという歪んだ大義のために、取り返しのつかない過ちを犯すところであった。『真実』を追い求めたあなた方によって、国は救われたのです」

王の姿勢にあわせ、なんと兵士達までも夢斗達に跪く。思いがけない展開に夢斗とリサだけでなく、光一達も戸惑っていた。

顔を上げ、優しく微笑む国王。そこには、人形が持っていたような邪悪な冷たさなど、微塵もない。

「きっとこれも神が我々に授けてくれた、幸運なのでしょう。あなた方は『正しい心』を持つお方だった。誰かが傷付くことに悲しみ、間違っていると思える。そんな当たり前の優しさを忘れない、真っ当な人間です」

彼の言葉に、再び一同の心が揺れる。

「本当にありがとう。鎧を身にまとっていなくても、異国の存在でも――あなた方は、我々にとっての『英雄』です」

再び頭を下げ、感謝の意を告げる国王。

投げかけられた言葉の重さと、暖かさに戸惑うが、それでも夢斗達は互いの顔を見つめてしまう。

吹き込む風に、おもむろに外を見つめた。夕日は地平線に近付き、代わりに夜が王国へと迫っている。広大な自然の中に広がる堅牢な城壁。浮世離れしたその光景に、思わずため息が漏れた。

もう、闇に怯える必要もない。王国の中でうごめいていた怪物・心喰いは消えた。

王国の抱える問題が、全て消え去ったわけではない。それでも少しだけ、今夜の王国は安らかで、穏やかに時を刻んでいくのだろう。

再び、仲間達の顔を見つめる夢斗。

そんな彼に皆は再度、微笑みかけてくれる。

すぐ隣で笑い、頷く彼女の顔が、茜を受けてキラキラと輝く。金色と藍色がその色を纏い、鮮やかに踊っていた。

リサに、光一に、キリウに、ルーメルに――ようやく夢斗は笑い、力強く頷いていた。

今を超えて、未来を探しに

連日降り続いていた雨は止み、週末の空はからっと晴れ渡っていた。突き抜けるような青の中に浮かぶ雲は、陽の光を受け、より一層白く映える。

ベランダで洗濯物を干し終え、母は「ふんっ」と満足げなため息をついた。

「おっし、おっわりい！ 夢斗お、そっちは？」

振り向くと息子は布団を干し終え、余った布団バサミをしまっていた。

「こっちも終わりだよ。暑くなりそうだな、今日は」

「これくらいカンカンに照ってくれたほうが、気持ちが良いよ。洗濯物も良く乾きそう」

ご機嫌で部屋の中に戻る母、それに続く夢斗。

朝から始まった週一の大掃除は、ようやくこれでひと段落した。原稿にまみれていた机も、きちんと整理整頓されている。

「あ～、朝から動いたから、お腹減ったねえ。よっし、昼、何食べよっか？」

伸びをしながら問いかける母に、夢斗は苦笑しながら返す。

「ああ、悪い。俺、ちょっとまた用事があるからさ。行かなきゃいけないんだよ」

「ええ、またあ？ あんた最近、妙にアクティブになっちゃったじゃないのよ」

驚く母。夢斗は準備していた荷物を台所に持ってくる。

「はは～ん、ま～た、あの子に会うのね。良かったじゃない、夢斗。お熱いことで、なによりなにより」

「なんだよその言い方。だから何にもないって。ただの友達だよ」

意地悪な笑みで、リサのことをほのめかす母。彼女の中では、あの少女は「友達以上、恋人未満」とでも言いたいのだろう。

妙な憶測をする母に構わず、リュックを背負う夢斗。玄関に向かう前に、しっかりと彼女を見て告げた。

「大丈夫。今日はこの前みたいに、遅くはならないから。暗くなるまでには戻るよ」

微かに笑う息子に、母はどこか今までとは違う力強さを感じた。その正体は分からないが、とにかく足早に夢斗は出発してしまう。彼の放った「行ってきます」に、遅れて「行ってらっしゃい」と返した母。今まででは考えられない快活なやり取りに、逆に調子が狂ってしまう。

まあ、若いってことかな――息子が活力を取り戻してくれたことを、とにもかくにも彼女は嬉しく思う。鼻歌交じりで冷蔵庫を開く母。その頭は既に邪推などせず、余った玉ねぎやニンジンを見ながら、今日の献立を考えていた。

休みの街を駆け抜け、待ち合わせ場所に急ぐ。

徐々に背の高い建物は姿を消し、やがて山の中へと続く石階段が姿を現した。それを登れば、参拝する者もなかなか少ない、小さな神社へと辿り着く。

鳥居をくぐり、社の前に立つ少女の背中に声をかけた。彼女が振り向くと金色がふわりと揺れ、透き通るような二つの青がこちらを見つめる。

「お待たせ、リサ」

「夢斗さん、こんにちは！」

こちらに向かって笑うリサ。夢斗は歩み寄り、挨拶を返す。

「なんだか懐かしいな、ここに来るのも。初めて、クレイドルからこちらに戻ってきた時、以来だな」

神社の境内には、やはり二人以外の人影はない。閑散とはしているが、独特の静けさが今はなんだか心地良くもある。野山が近いことから木々がざわめく度に、青葉の心地良い香りが境内に伝わってきた。

異界・クレイドルで「失った過去」を知ったあの日――初めて夢斗自身の「オーバー」の力で世界を超え、戻ってきたのがこの場所だった。

当時の夢斗にとって、その事実はあまりにも重く、そして果てしないものだったのを今でも覚えていて。あの当時は、この境内から見える風景に心を動かす余裕もなかった。

振り返ると街の姿が一望できる。立ち並ぶ民家の奥の奥に、二人が通う高校が見えた。遙か彼方には、都心部に並び立つ巨大な摩天楼の影が、うっすら見える。

当たり前のはずの景色に、なぜだか今は目を奪われてしまう。そんな夢斗と同じ方向を見つめ、リサは笑った。

「なんだか、信じられないって感じですよ。あれからまだ数日しか経ってないのに、色んな人に出会って、色んなものと戦って――こんなに慌ただしくなるなんて、予感してなかったです」

「ああ、俺もだよ。戦争に巻き込まれて、獣人や魔法と出会って――こんなこと、誰に言っただけで信じてもらえないだろうな」

代わり映えしないこの街に、重なるように存在しているもう一つの世界。たった数日の出来事ではあるが、二人が体験した出来事はあまりにも規格外すぎる。

いつもと変わらず動いているであろう街の姿に、なんだかため息が漏れてしまった。重なり合ったもう一つの存在を、ここに生きる誰もが知らずに生きている。

一步、境界を超えれば、その先には剣と魔法と、怪物が潜むもう一つの世界がある、というのに。

「俺達以外にも、きっといるんだろうな。あっちとこっちを――世界を『超える』人間が」

「そうかもしれませんねえ。あのカウンセラーさんは、現にそうでしたから。こうしている間にも、向こうの世界で冒険している誰かが、いるのかもしれませんが」

「そうか……一体、なんなんだろうな、この力は。まあ、考えても答えが出るわけでも、ないんだろうけど」

己の手のひらを見つめ、その奥に眠る「オーバー」という名の力を確かめる。

なんの変哲も無い自分に刻まれた、予期せぬ才能。

少しだけ憂う夢斗に、リサはあくまで快活に告げる。

「大丈夫ですよ。答えが分からないなら、探しに行けばいいんです。だからこうして、集まったんですから！」

振り向き、リサを見る。澄んだ青い瞳はまるで宝石のように美しく、明るい。異国の血が交じるその肉体からは、いつもと変わらないしっかりとした力強さを感じる。

改めて思う。不思議な少女だ、と。

以前、彼女から聞いた、重々しい過去を思い出した。母を失い、心の支えが消え去った痛みを、彼女はまだ確かに覚えているのだろう。

それでも少女は笑い続けた。そうしていれば必ず、幸せがやってくると信じて。

いなくなった母との数少ない繋がりである言葉を、頑なに信じて。

幸福を信じる彼女に、夢斗もまた笑顔で答える。大きく頷き、前を向いた。

「そうだな。ようやくここから、始めれるんだもんね」

「はい！ お付き合いしますよ、夢斗さん。なにせ私の方が、あの世界については大先輩ですからね。タイタニックに乗ったつもりでいてください。快適ですよ、きっと」

おそらく大船に乗ったつもりで、と言いたいのだが、その船名ではとても安心できない。苦笑いしつつ、それでも胸を張るリサを見て、勇気をもらう。

二人は境内を見つめ、並んで立つ。古びた社の中に眠るであろう、神に祈るためではない。

目を閉じ、想いを駆け巡らせる。

苛烈な戦いの果てに、数多の苦難の先に、今日という日がある。初めて出会った人々、初めて見た光景、初めて覚えた痛み――全て今でも、克明に思い出せる。

夢斗、そしてリサの体が、淡い光を放つ。二人の鳴動する「心」に合わせ、その特殊な力が発動した。

視界を染める白、謎の幾何学模様の羅列、飛び交う光。

初めて見た時、その理解不能な現象に、驚くということすらできなかったのを覚えている。

相変わらず、視界を染める光景の意味は理解できない。だがそれでも今の二人にとって、この先に待っている景色だけは良く知っている。

浮遊感が消え、しっかりとした大地の感触が戻ってくる。野山の匂いではなく、もっと強い森の香りが二人を受け入れてくれた。

陽の光が差し込む中、目の前には黙して動かない巨大な鉄の塊がある。過去にこちらの世界へと転移し、壊れてしまったバスの残骸だ。

夢斗の「過去」を証明するその巨体の前に、予定通り、彼らがいた。

「おっ、来た来た。久しぶり、夢斗君、リサさん！」

笑い、駆け寄ってくる光一。彼に続くように、ワニ男が笑う。

「時間通り、ぴったしやな。相変わらず、律儀なやっちゃで」

キリウこと桐生はケラケラと笑い、夢斗を褒めた。駆け寄ってくる旧友らの姿に、ホッとしてしまう。

「よお、久しぶり。どうだこっちは。変わりないか？」

「うん。まあ、あれから色々身回りはごたついたけどね。それでもまだ、随分と落ち着いたほうだよ」

頷く光一の姿に「そうか」と安心する。リサも嬉しそうに再会した面々に問いかけた。

「じゃあ、もう戦争の心配もないんですね？ 良かったですねえ」

「せやなあ。事実上、レジスタンス一派は解散。獣人達と国王は和解。王様も、もう一度王国と

獣人の関係を作り上げていけるよう、体制を立て直す腹づもりらしいわ」

キリウの一言に「へえ」と声を上げるリサ。ここで、更に懐かしい面々が会話に加わる。

「国王・エイムダルは、自ら『贖罪』のため、今回の事件の全貌を国民に隠さず公表しました。これを機に、国の内部に潜んでいた『うみ』を出したいということでしょうね」

振り向く夢斗達。そこには見慣れた二つの顔があった。包帯を巻いてはいるが、彼は友人の手を借り、ゆっくりと杖をつきながらこちらに歩いてくる。

賢人・ニンバムと、その戦友・マウマウだ。

「ニンバム、それにマウマウも！ 怪我は大丈夫なのか？」

「ええ、おかげさまで。重ね重ね、ご迷惑をおかけしました。なんとか、歩けるようにはなりましたよ」

恐縮するニンバムに、夢斗も少しだけ気まずくなってしまう。思わず後ろ頭を搔いてしまった。

「すまないな。その...手加減せずに思いっきり蹴っちまったから...傷跡とか、残ったんじゃないか？」

この一言に、優しく笑うニンバム。

「いえいえ、お気になさらないでください。未熟者ではありますが、回復魔法も心得えていますので、包帯さえ取れば元どおりですよ。それに、ユメトさんとリサさんのきつい『お仕置き』が、私を止めてくださったわけですから。こういう馬鹿には、いい薬なんですよ」

自分のことを卑下するニンバムに、なんだか調子を狂わされてしまう。すかさず隣にいたマウマウが笑った。

「そうそう～！ 悪いことしたら、お尻蹴っ飛ばしてやればいいんだよお。あれから、た～っぴりと、にっがいにっがいお薬、飲ませまくってやったからあ」

「あなたは調合を間違えただけじゃないですか。もっとも、あれもあれで効きましたねえ」

どうやらボロボロになったニンバムを、この数日間、マウマウが介抱していたらしい。すっかり元に戻った二人のやり取りに、思わず笑い声が上がってしまう。

怪物の息子である、ということ乗り越えた賢人。そして彼を止めるために純粋な炎を燃やせる女戦士。

二人には、二人にしか語れない「物語」があるのだろう。

リサはニッコリと笑いながらも、頷く。

「王様、ちゃんと逃げずに自分や国と向き合ってくれたんですね。良かったです。やっぱりあの人は、良いおじいちゃんでしたね」

「ええ、本当に。共存する、というのは言葉で言うほど簡単ではありませんが、この戦乱の世でその選択肢を守り続けていたのは、偉大なことです。ナグルファという男が思っていた以上に、彼は大きな器を持っていたということでしょう」

これには光一が少し不機嫌な顔で、しかしどこか不敵な笑みも浮かべた。

「あのナグルファって人も、いくら『心喰い』にたぶらかされたとは言え、もっと王様を信じていれば良かったのにねえ」

思わず頷いてしまう一同。国王を信じる心を忘れなければ、ナグルファという男は今頃、大国の軍を率いる「英雄」になれていたのかも知れない。

理想、そして底知れない「欲」が、道を違えさせたのだろう。

ここで、更に聞き覚えのある声が響く。透き通った波長に全員が振り向き、笑った。「それだけ、あの羽多野という男の『心』の操り方が巧みだった、ということだろう。とはいえ、許して良いわけではないがな」

深緑の長髪がふわりと揺れる。剣を携えたルーメルが、こちらに向けて歩み寄ってきた。

彼女は――金城　しおりは微笑む。毅然とした眼差しは、まるで変わらない。

夢斗はその凜とした姿に、少し見惚れてしまいそうになった。

「委員長も来てくれてたのか。ありがとな、王国側はまだ色々忙しいんだろう？」

「いや、問題ない。なにせ、もう私は王国の歩兵团を脱退した。国王の配慮でな」

これには思わず「ええっ」と声を上げてしまう。誰しもが驚き、エルフの女剣士を見つめた。「この肉体に、未だ確かに『ルーメル』という女性の記憶は残っている。しかし、あくまでそれは受け継いだだけの記憶――そんな私が、このまま中途半端にルガリアという国の一兵士で居続けるのも間違っているのでは、と思ったんだ。だから昨日付けで除名。今の私は、ただのしがない女剣士さ」

ふっと笑うルーメル。一つの肉体に二つの記憶を有する彼女は、それでも核の部分は女子高生・金城　しおりなのである。

「はじめとして先程、墓参りを済ませて来た。この近くだったんだ。彼女が没したのは」
思わず息を飲んでしまう一同。

彼女に「剣」を託し、そして己の「存在」を受け渡した、エルフの女剣士・ルーメル。心半ばで潰えた彼女の亡骸を、まさについさっき埋葬してきたところであった。

思わずうつむいてしまう夢斗。だが、金城　しおりはそんな彼に、笑みを消さずに言う。

「そう...だったんだな」

「そんなに悲しい顔をするな。どんな形にせよ、私は託されたものを捨てる気はない。彼女が命を賭してくれたのなら、私だってこれから精一杯生きる。それが、残された者の使命だと思っている」

その凜とした姿に、思わずリサが声を上げた。キリウも懐かしい「力強さ」に苦笑いしている。

「すごいですねえ、金城さん。なんだか大人の女って感じで、かっこいいですねえ！」

「ちょっと大人びすぎて堅物やけどな、委員長は」

その一言に「どういう意味だ？」と睨みつけるルーメル。思わずキリウは「なんでも！」と反射的に身をすくませる。懐かしいやり取りに、笑い声が上がった。

そんな中、光一も己の手を見つめていた。

「残された、かぁ。確かにね。今回の件で色々なものを失ったけど、それでもその人達が託してくれたから、こうして立ってられるんだよね」

その脳裏には、戦いの中で散っていった獣人達の姿が浮かんでいるのだろう。少年にとって、

裏切りと血に濡れた戦争の光景は、未だ消えない心の傷を刻んでいた。

しかし、その痛みへこたれているわけにはいかない。心半ばに散っていった者の顔——最後に浮かんだ、獣人・スヴェンの笑顔が蘇り、背中を押す。

決意を固める少年を見つめ、夢斗も頷いた。

「戦争が終わって、平和が戻って——でも、ようやく俺は、本来の『スタート』に立てた気がするんだ。後ろを振り返れば辛いことはあるけど、戻るってことはできないから。それでも前に行かないと」

夢斗の顔を誰もが見つめる。思わずキリウがため息をつき、告げた。

「クラスメイト探しの旅、か。今度の『ゴール』は、随分と遠そうやな。短距離っちゅうか、まるでフルマラソンやで」

長い、長い旅路になるのだろう。手がかりはない。正真正銘、ゼロから全てを始めなければいけないのだ。

この世界のどこかにいるであろう「クラスメイト」を探す——委員長、金城 しおりが腕組みをしたまま、問いかける。

「行く当てはあるのか？ まあ、聞くだけ野暮かもしれんがな」

「いいや、全く。まずはどこか別の土地にたどり着いて、情報収集でも、って思ってる」

その一言に、快活な少女が声を上げた。

「なら、善は急げですよ。早速行きましょう、新たな街へ！」

ウキウキしながら歩き出すリサ。少し戸惑い、夢斗らは出発が遅れてしまう。

軽やかな足取りの彼女を、思わず引き止めた。

「お、おい、リサ。本当に良いのか？ これは俺達——『神隠し組』の問題だ。君まで巻き込むことになっちゃう」

しつこいとは思っていたが、それでも改めて問いかけてしまった。光一、キリウ、ルーメルにとっても、かつての仲間を探すということは、願ったり叶ったりな提案だった。しかし、リサはその事件に関与はしていない。あくまで彼女は、夢斗がこちらに来るきっかけをくれた、偶然に出会った人物だ。

彼女はくるりと振り返り、金髪を揺らしながら笑う。

「問題ありませんよ、オールクリア！ 困った時はお互い様です。夢斗さんが王国と獣人達を助けてくれたなら、今度は夢斗さん自身が助けてもらう番です」

きっと彼女にとって、それが全てなのだろう。損得感情ではない。そこに得るものがあるかなんて、どうでも良い。

彼女はいつもそうだ。

自分が「正しい」と思っている——この小さな「英雄」が前に進むには、それだけで十分なのだろう。

「それに冒険は一人じゃあできないですよ。一人きりで走り切ると、しんどいです。だからせめて、皆で行きましょう。そうすれば、きっと大丈夫ですから！」

木漏れ日を受け、輝きを纏い、笑う少女。

世界を超える才能を持っていようが、魔法の腕輪を携えていようが、今の夢斗には、それらがひどくどうでも良いことに思える。

ただ、ただ眩しい。降り注ぐ太陽の光を浴び、それを何一つ失わず、そのまんまの輝きとして表す透明な彼女の姿が。

リサの心が夢斗の心と感応し、大きく震わせる。

夢斗は頷き、ただ力強く答えた。

「そうだな。ありがとう、リサ」

「ユー、アー、ウェルカ〜ム！ さっ、行きましょ。新しい土地へ！」

再び前を向き、歩き出すリサ。

夢斗は振り返り、ニンバムとマウマウに頭を下げる。全てを察した賢人と女戦士は、ただ頷き「また、どこかで」と別れを告げた。

送り出され、歩き出す夢斗、光一、キリウ、ルーメル。

森の中を進む友の姿を見て、その奇妙な光景に思わず笑ってしまった。

何一つ同じじゃないのに、まるで同じだ――変わってしまった友人達が、変わらない瞳と心を宿しているという矛盾が、ただ、ただおかしくて仕方がない。

やがて歩き続け、森を抜ける。

目の前に広がる青々とした高原。遠くには岩山の姿があり、オレンジに輝く水晶のようなものが無数に見えた。

あそこには、何があるのだろうか。

そこに、どんな人がいるのだろうか。

辿り着くまでに、一体どんなものが待ち構えているのだろうか。

互いの顔を見つめ、頷く。

大きく深呼吸すると、森とはまた違った草原の青々とした空気が肺を満たし、体を内側から冷やす。

再び立った新たな「スタート」は、浮世離れした、どこまでも澄み渡った空の下に広がっていた。

どこからか聞こえる、大きな鳥の声。草原の穴からこちらを見つめる、極彩色のモグラのような生き物。草原を群れで駆けていく、一角を持つ馬の群れ。

機械の代わりに「魔法」が渦巻くこの世界で、ようやく夢斗の「冒険」が始まる。

リラックスし、何気なく駆け出す夢斗。弾けるように進む彼に、リサや、仲間達も嬉々として続いた。

力強く踏み込む足に、迷いなどない。

未知の世界を見つめるその眼差しは鋭く、ぶっきらぼうで―――しかしどこか、かつての輝きを取り戻し、ぶれることなく彼方の「ゴール」を見据えていた。

世界の境界を超え、彼方へと駆けていく少年、少女。

彼らの背中を追い風が押し、遥かなる旅路への門出を祝福していた。